
居然雄姿
高出雲界
鎮地撐天

淚香會編

黒岩淚香

東京　扶桑社發行



南二

①

南歐遊艸(三)　　淡香生

~~里昂雜詠~~

講和準備會す開かれたる『ケイ。ドルセー』へ『セイン河』の畔に在り(ケイとは河岸の義)我が使臣の宿りたるホテル。ブリストルは巴里の一偉觀たる拿翁銅像の直下なり像は直立天を摩する如く見ゆる高き銅柱の上に屹として立てり。余の宿泊せるはかつて泊りしホテル。ミラボーにて同じ町に在り。町名をルー。ドラ。ペイと云ふ。平和の町と云ふ義にて拿翁戦捷の紀念として命名せし者なるべし。拿翁の如き好戦漢を平和の本尊とするは屑喰物と思ふるゝも平和はいつも屑喰物なすべく思はさるか。此度の講和の評議よりても果して其目的とする如く永久の平和を建立するを得べきか。永久は扨置き向後數年間確實なる明ける如き國際關係を作り出し得べきか。聊か心細からざるを得ず

と思ふ

浮世の有り様（二）　　浪雪

（三）アヽ不思議や。

其世下田君は。在り。[illegible]

だそし物理の原則に背反し物を[illegible]

せしめるは出来ぬ事也

其君の其論は。奇妙で[illegible]

なりましが物理の原則は因りて[illegible]

するのは当然の事です。奇蹟でも無ければ

不思議でも無い。奇蹟をば物理の原則

の原則のもとに先例がなければ[illegible]

命令する人の意思が通らぬ感動が起こる

さ。

下田は[illegible]

[illegible]

の原則を見して[illegible]

すの[illegible]がない

[illegible]

自然[illegible]

一度[illegible]

則が[illegible]

序

涙香黑岩先生は其一一の言行常に非凡なるものがあつた、一切の凡俗は悉く先生の排斥する所であつた、先生其將に永眠せられんとするに方り、特に家族に遺囑して、其遺稿は悉く之を燒棄てしめられた、先生は恐らく自己の性格を後日眞に書き表はし得る者なきを信ぜられたからであらう、卽ち本書の出版は或は先生の意志でないかも知れぬ、唯先生に關係深い涙香會會員等が知らず識らず先生に對する記憶の薄らぎ行かんことを恐れて、先生を知れる人人に就いて其談話を請ひ、或は會員の思ひ出を記して先生を追慕せんとするまでである、先生の論文を此書に拔萃したのは、先生自からの筆に依つて先生の面影を偲ばんとするのである。

先生は其生涯の殆んど總ての善き部分を萬朝報に捧げられた、萬朝報は卽

ち先生の化身である、萬朝報の存する間先生に就いて多く語る必要を持たぬ、吾等涙香會員は此書に依りて唯吾等の衷情を滿足せしむる事を以て足れりとする。

大正十一年十月六日

涙香會同人誌

凡　例

黒岩涙香先生を追懷の念止み難く、我等涙香會會員が、本書の編纂を思ひ立つたのは昨大正十年一月のことであつた。大體の編纂方針が定まり、會員各自が手分けして材料の蒐集に取り掛かつたのは同年春から夏に及び、年末には既に大部分の材料を集めることができたのである。然るところ故先生の三周忌に上梓することが一層に追慕の志にかなふべしと信じ、本日の三周忌に出版することゝなつたのである。

一應紹介しておきたいことは表紙富嶽詩畫及扉に寘きし四文字は先生の墨蹟を用ひ、表紙裏『我病愛國』（中川柳外氏作篆）の印は先生平素愛用されたるものなれば揭げて記念としたのである、表紙背文字は柳外氏、包裝意匠は町田氏なり。

次に『諸名士の談話』はその大部分が談話の筆記である、また署名の名士が親しく執筆寄稿されたるものも一樣に談話の内に收めておいた。次に『先生と餘技』の記事が繁簡宜しきを得ぬの嫌ひがある。先生と餘技との題目は、大冊となる程の因緣關係があるのだが、これを文章に記述するにあたり、記錄資料の乏しいため、終に所期の目的を達し得なかつたことを遺憾とする。

目次

巻頭

先生自ら語る

諸名士の談話

先生と餘技

會員の見たる先生

先生自ら語る

フース、ヒーの序

國家と云ひ社會と云ひ時勢と云ふも實は人である、人を除いては國家は無い、唯山河禽獸草木の在るのみだ、人を除いては社會も無く時勢も無い。即ち人が國家社會時勢の分子であり原動力であり本體であり一切である。故に國家を知り社會を知り時勢を知らんと欲する者は、先づ人物を研究する必要がある。

但し人を評するのは至難の事である、余は此書に序する機會を利用して人を評する心得を一言し度い、若し人を評する人の參考の一端にもならば幸甚である。

人には表面も有らう裏面も有らう、掛け引も有らう、見せ掛けも有らう、けれど是等の一切のものの奥底に其人の天性が有る、實に天性は奪ふ可からざる固質であつて、此の固質から、一切の行ひが湧て出る。此の固質は當人自らも之を曲げ之を欺くことが出來ぬ。人を評する人は此の固質を看破し、一切の表顯をば此の固質から自然に湧き出る種々相であるとして觀察せねばならぬ、爾かせざれば過ちに落る恐れが多い。

假例へば某氏を評するとする。此某氏は衒氣も有る、稱氣も有る、嬌飾も有る、僞りも有る、豹變

することも有る、策略を弄するとも有る、陰密な不品行もある、英雄らしく氣取りもする、君子の如く粧ひもする、前後の行ひに矛盾も有る、間の拔けた所も有る、と云ふ如く評者其人の目に映ずる、是等が即ち其人の行ひの種々相である、若し評者に於て、此の種々相を悉く捕へて、之を其人の眞であるとして寫さんとする日には、其人を英雄として可いか、君子として可いか、詐僞漢として可いか、將た稚劣の人として可いか、殆ど決する所を知らずして徒らに筆先のみ煩勞に堪へぬ事とも成らう、けれど人は、自個の行ひの種々相へ、悉く別様の動機を附し、此點は英雄らしく、此點は君子らしく此點は幼稚らしく、此點は學者らしくと、一々思案して發する者では無い、只だ自個の以て生れた固質が、種々の境遇に觸れて種々の表顯となるものである。當人に於ては策略も掛引も何にも無い、單に其の天眞である。

此の天眞の影に隱るゝ其の固質が當人の人格である、其誠である。

余は如何なる人を觀ても、單に一誠を以て貫いて居る者と見る。此考へを以て古來の君子、英雄、才子、佳人を見るに、着々として合點の行く所がある、けれど人を評する人には此の用意が缺けて居るのも有り、其れが爲めに論斷が區々に成て、甲者の作れる評文では聖人の如く見え、乙者の作れる評文では惡漢の如く見ゆるが如き相違が生ずる。

願くは人を評する人に於て、先づ自家の題材とする人をば、誠を以て貫ける人なりと見て、其表顯せる種々相を吟味して貰い度い、爾かすれば、根本が旣に定まれるが爲めに、枝葉の種々相は所謂る乃を迎へて解くるが如く合點の行くこともあらう。

歴史の歸納的研究と云ふのは、澤山の種々相を集め、之を一貫すべき一の假定說を作り、さて其の假定說を本として件の種々相を說明して見るのである、說明が悉く其の種々相に當てはまるならば、其の假定說が眞理と合して居るのである、若し又其假定說が一々種々相を說明する事が出來ぬならば、卽ち假定說が誤りである故、更に他の適當なる假定說を作らねば成らぬ。

人を評する人は、先づ自家の心中に假定說を作る、其の假定說たるや『此人は誠を以て貫いた人である』と云ふに在らねば成らぬ、誠は人の固質である、固質から流れ出でぬ種々相は無い筈である、若し其の假定說で說明することが出來ねば、評者の見方が誤つて居るか、將た假定說が誤つて居るか孰れにしても何の邊にか誤謬があるものとして更に研究を重ねゝば成らぬ。

余の知れる人の中には殆ど豹變した人も有る、假例へば或る人は前には聖人の如き言動を示して居た、後には詐僞漢の如き言動を發するに至つた、此人は前の聖人の如くで有つた時代が其の眞で有らうか、後の詐僞漢の如く見ゆる時代が其の眞であらうか。

之を聖人と云ふも當らぬ、之を詐僞漢と云ふも亦當らぬ、評者は此人を何と評するで有らう。

支那人は流石に面白いことを云ふてある『人を評するには其の後半截を見よ』と、成る程前半截が聖人で有つても後半截が詐僞漢であらば、竟に詐僞漢として評價が定まるで有らう、又前半截が淫を賣る如き貞操の何たるを知らぬ女であつても、人に嫁して後に貞女と爲り烈女と爲らば、後半截の貞烈の爲めに、貞女烈女と云はれることが出來るで有らう、是れは甚だ道理のある見方である。けれど。今の世の科學的とか哲學的とか云ふべき見方は是れとも違ふ、余は必ずしも人を評する人に科學的なれ哲學的なれと注文するのでは無いけれど、後半截も前半截も併せて見て貰ひたい。

右に云ふ、前聖後詐の人に對し余の見る所は斯うである、前聖も後詐も其の人の固質(即ち誠)より發したるに相違ない故、其人は眞の聖人でも無い、又單純なる詐僞者でも無い、矢張り普通平凡の人である。

此人は聖人に似通ふ固質を以て居るけれど聖人としては餘りに弱い。如何なる事情にも如何なる誘惑にも、毅然として己れを守る程の勁節の有る人で無い、さればとて詐僞漢と云はれ得るほど不人情でも無い、前に聖人に似通ふた所が在つたでは無いか。

さすれば此人の固質(此人の誠)をば美くしいけれど弱いと認めねば成らぬ、此の弱いと云ふことを

假定說として斯人を見れば、合點が行く、前に聖人の如く見えたのも、弱いが爲めに感情に刺激され感情の餘りに、自個の固質の中の聖人的なる分子が表顯し活動したのである、又弱いが爲めに誘惑に克つことが出來ずして、自個の詐僞師的一部分が表顯して活動したのである、此の人は爾來、弱い人として、弱いだけの尊敬を拂はれねば成らぬ、或は憐む可き人とも云ふことが出來やう、けれども強い人に拂ふだけの信用を此人に拂ふことは出來ぬと、斯う歸着する。

弱い人とは人格の定らぬ人である、寧ろ人格の無い人である、強い人とは人格の有る人である、善人にも强弱が有り、惡人にも强弱が有る、今の社會は善にもせよ惡にもせよ、弱いのを排けて強いのを崇拜する、惡にして强きが、果して善にして弱きよりも價値高きや否やは倫理上の別問であつて、玆に云ふ可きで無いけれど、兎にも角にも、善も惡も强も弱も總て其人の誠であり固質である、之を看て取ることが出來ねば、人を評して能く眞を穿つことは出來難いで有らう。

此頃流行する人物評は、本位を黨閥に置き、反對黨の人を餘り善くは云はぬのも有る、又本位を主義に置きて、同主義者を揚げ、異主義者を抑ふるも有る、亦譏評や怨評の樣なのも無いては無いが、大體に於ては評論を後とし、事實を先とする、けれど評論を先にするのが人物評の人物評たる所以で有つて、事實を先にするのは寧ろ人物傳である、人物評では無い。

事實にも誤りがある評論にも誤りがある、とは云へ、事實を傳へる方が比較的無難である、又容易である、故に今の評者は事實に重きを置く、之は甚だ宜しい、けれど事實を取捨するは意見であつて意見は則ち評である、此點から云へば評と傳と、太した差異は無い樣であるが、孰れにしても根本に其人の誠、卽ち其人の同質を看取し得ねば、取捨も評論も正確を失する恐れが有る、人を評するも人を傳するも實に難いと云はねば成らぬ。

余自らも度々世間の評傳者に評傳せられた經驗を持て居る、中には余を褒める人も有るが、余自ら之を見れば多くは眞相を穿て居ない、又余を毀るのも有る、毀るのは大概事實に近いけれど、其れも猶ほ敬服し兼ぬる所がある、斯かる經驗から、常に人を評するの甚だ難いことを信ずるが爲めに、思ふが儘を述べて、ヽヽヽ君に贈るのである。（大正二年十一月初旬萬朝報編輯局にて）

余が新聞に志した動機

一、新聞生活の最初

私が初めて新聞生活をしましたのは、明治十九年からで、其時の日本文のタイムスと云ふのに居つたのでありますのち『繪入自由』に筆を執ることになり。其後また『都新聞』に入つたのであります併し都新聞に入社してのち、私は神經衰弱に罹りまして、醫者から新聞記者の業務に従ふことは宜しくないと言はれましたから、其の當分は遊んで居りました。其後私は活版インキの製造に身を委ねて一生涯をやつて見やうといふ決心をしました。其業に著手致しましたけれども、素々私の希望が新聞事業にあつたのでありますから、身體が快くなると又この方面に手を出しかけました。

すべて新聞社の競爭は低い所から來るのが恐ろしい。恰度相撲で足をすくはれるやうなものです。だから新聞は小さくてもよい。何しろ一番安くて、下から競爭の出來ないものとして、誰でも讀まねばならぬやうな新聞を出さうとのことで、友人三四人と謀り合つて、資本金千六百圓を持ち出しました。是は以前のインキ事業の殘りの金なのでありますそして政府へ納める保證金は、當時明教社から納めて居た保證金を、其まゝ流用して借りる事に致しました。ここで始めて一新聞を出すことに爲

つたのであります。現在創業以來の人々で最も古いのは片山君、會計の山本君、今戰地に往つてゐる曾我部君、及び生島君などであります。

二、新聞事業に志した動機

元來私は土佐の生れで、御承知の通り政治界では喧しい國であります。それで私も自由黨の人々には色々緣故もあり、又大に引立てを受けました。併し其頃私は自由黨の人々の仲間では、弱年でありましたから、とても競爭の烈しい當時の政治界では、頭のあがる見込みがないと覺りました、志を當世に得ざれば、退いて辭を修め、道を明かにすと云ふやうな心底で、自身も初めから學問の方へ入るのが性質に適つてゐるやうに思つてをりましたから、自由黨、改進黨、或は其頃嚶鳴社などの連中から種々誘引を受けましたが、何れにも加はらず、一番他の方面に於て學者にならうと云ふ目的で居つたのであります。左樣して居る中にも、私は新聞事業に尠からぬ趣味を持つて來ましたから、遂に新聞に入ることになつたのであります。

三、新聞の會計と前金

却說いよ〳〵新聞事業に手を著けるやうになつてから、私は先づ第一の出發點に於て斯樣いふ事に注意を致しました。それは他の新聞社を觀まするに、大抵地方に貸金の夥しく出來ない新聞はないと

云ふ有様で、彼の『繪入自由』の如きは、前金の切れるに拘はらず新聞を發送した結果、地方に新聞代の貸倒れが五萬圓も出來たといふ程でありました。斯ういふ次第では新聞の發達する理由が有りません。ですから私は、賣捌所と相談を致しまして、萬朝報は一切前金で無ければ送らぬ、代金を取らぬ中は一枚もやらぬと定めました。又何所の新聞社でも賣捌所との關係から、幾分かの割引をよくして澤山賣らせる手段を取るのですが、萬朝報の方では賣捌所を優待することはしないで、割引なんかも極めて少くし、成るたけ本社直接の讀者をとることに致しました。そして明治二十五年十一月にいよいよ新聞を發行して、漸と七千枚を印刷し、其の新聞は前にも申した通り、如何な讀者でも代金が來ない中には、決して發送せぬといふ堅い規約でありますから、會計もその亂暴なのに驚いて、大分反對もありましたのです。其れに就いて面白いことは、土佐に淺井と云ふ私の知つて居る富豪があります。此の人がツイ忘れでもしたのか新聞代を切らした爲めに、社から發送を止めましたのが、向ふの主人に此の仕打が癪に障つたものと見えて、すぐに後から朝報の十箇年分程の代金を、一まとめにして送つて寄越した。是は今でも一つ話になつて居ります。創業の時分には編輯局は六人、會計係は七八人てやつて居りました。

四、朝報の發達

段々日を重ねて行く中には、或は發行停止を喰つたやうなこともあり、其外色々苦しい目にも遇ひましたが、其中に讀者も次第に增殖し、いつとなく勃興して參りまして、二十八年日清戰役の際には、讀者は殖えて五萬になりました、其時私は考へて、臺灣が日本の領になり――別して遼東還附以前なりし故――滿洲朝鮮の經營も須要の機に達した折でありましたから、どうも東京は日本の中心で無い、寧ろ大阪の土地が樞要の地となるだらうと考へまして、倘一つ萬朝報をば大阪市に設けやうと思立ちました。併し大阪には朝日新聞が固く根を据えて居りますから競爭が困難かしい。次手なればモット西へ距つて門司か馬關の地に拵らへた方が好い。或は岡山で出さうかとも計畫を立てましたが、岡山では大阪に居て競爭をするのと同じであゐますから、其れよりも矢張り門司か馬關であると、西からくる電報通信、其他新らしい報道も大阪邊よりは總て早く手に入れることが出來る、從つて以西の讀者は遂には總てを取ることが出來るだらうと、算用まで立てゝ見ましたが、若し之を斷行した曉、却つて東京の本社が困るやうな事があつては不可ないと云ふ社員の不平が高かつた爲めに手を著けるに至らずして思ひ止まつて了ひました。丁度其時遼東半島も還附になりましたものですから、思ひ切つて行つて居なかつたのが、却つて幸てありました。

五、朝報編輯の三綱領

綱領と云ふ譯でもありませんが、朝報社では左の三箇條を以て、堅く編輯規約として居ります、硬派の方には、

一に簡單

二に明瞭

三に痛快

是れを軟派の方にもやはらかく反譯して、

一に短かく

二に分かり易く

三に面白く

として、これを編輯員心得と規定して居ります。丁度新聞は日本橋の魚河岸と同じで、最も新しいのを尙ぶのであります。午後になれば腐るのが新聞種であります。だから材料は十分新鮮なのを撰ばなければならぬと申して居るのであります。且つ私の方針とする所は、一旦此人と信じて編輯局に入れた以上は、其人の書いた文には決して筆を加へないと云ふので、若し其人の文章を削つたり、替へたり抔する必要が有るならば、始から信用を置けない人であるから、最初から社に入れないが宜い、私

が他の新聞社に居た時にも經驗がありますが、自分の書いた原稿の主意を替へられたり、又昨日書いた自分の文章が今朝の紙上に變つて出て居ると非常に不快に感じましたから、私は決して他の編輯員の原稿には手を入れません。且又その編輯につきましても少しも、指圖もしませぬ。唯だ其人の書いたものが餘り長過ぎると云ふやうな場合には、前の規約第一條に背くのですから、其旨を注意する位のことであります。

六、誤解されたる朝報

朝報社ほど世間に誤解された新聞は恐らく無からうと思ひます。是は私が大膽に斷言することが出來ます。卽ち朝報は新聞賣上代と廣告料との外は、他から保護を受けた事も、賄賂を入れたことも無ければ、又社員が脅迫して金錢を取つたなどゝ云ふことは無論ございません。唯一人數年前軟派主任の人が豫戒令を食つたことがありましたが、然しそれも全くの誤解で、本人は實に潔白なものでありました。社員の中には從來放蕩家は無かつたとは申されませぬが、金錢上の良からぬことを働いた者は決して無いと云ふことを信じて居ります。

一時蓄妾實例とか其他種々人の行爲を攻擊非難した爲めに大分惡まれもし、誤解もされた事と思ひます。然し私は素から一夫一婦を正しき人間の道と信じて居るもので、自ら信じ自ら行ひ、其信じた

る事に依つて社會を矯正しやうとする許りでありまして、無暗に人を傷け人を罵りさへすれば好いと云ふやうな主意では決して無いのであります。世間には紳士の顔形、體裁をして居て待合通ひをしたり、隨分身分を顧みない所の醜行をして、憚らない連中が多いやうに見受けられます。是を許して置くのが社會の爲に幸福でしやうか。曾て内村鑑三君の入社せられた時に、朝報は人身攻撃をするから不可ないと云ふに就いて、議論がありました。其時私は答へて、誠に御説の通りですが、是れだけは許して貰ひたい、自分よりも正しくない事を爲る人があつたならば、之を默許して置くのは社會全體の不幸であるから、之を攻撃し責めるのは當然である。自分に一點の疚しい所なくして他人の過を責めるは、自分の權利であると思つて居りますと云つたのでありました。斯して私は正しいと思つた事を實行したばかりで、何も故意に人を傷けやうと爲る樣な考へは勿論無かつたのである。併し其後私も自分の友人に忠告をするの外は、他人を責めるの權利は無いと考へて、近來は人身攻撃に渉ることは止めるやうと、明瞭に社員へ言渡したのであります。

七、軟派記者の今昔

私の社の軟派記者といふものも、甚だ他の新聞社とは差つて居ると思はれます。私が初めて新聞事業に著手した頃は、所謂る軟派記者の不品行は非常なもので、彼の繪入自由に入つた頃、最も驚きま

したのは、其墮落軟派記者連には、吉原邊の女郎屋から仕着の羽織などを毎年貰つて、それをば見せびらかして得意然たる人物ばかりで、是では不可ぬと云つて、私は其の社長に警告した爲め、一時軟派社會から惡まれた事もある。

八、探偵小説の處女作

私は元來自分で續物を書くなどゝ云ふ考は無かつた。唯だ私の叔父が裁判官であつて、私は子供の時から、色々裁判に關することを見もし、聞きもして、能く『誤判例』などを讀んで、惡人で有つた者が死後には善人で有つたり、或は善人だと思つて居た者が、大惡人で有つたりする事實を知り、其方に大に趣味を懷くことに爲りました、左樣いふことを世人の誤ら無いやうに爲るのは、實際に必要だと思つて居りました。殊に其頃の新聞に發行停止が頻々と下つて隨分裁判の不公平が有りましたから、其れを一つ當て擦つて、裁判と云ふものは社會の重大なるものぞと云ふことを知らせてやらうと思ひました。それで自分が『繪入自由』に居た頃、筋書を話して其頃の戲作者即ち小說家に書かせました。所が、當時の戲作者は爾うい ふ物語を書く時には、何時も編年體であつて其人物の生立から筆を立てゝ、事實を順序正しく書くものですから、最初から惡人、善人、盜賊と知れて了つて、讀者を次へ〳〵と引く力が無い。即ち面白い縺れ合つた事を眞先に書き出して置いて、亂れた環の糸口を探

るやうに、其の原因に遡つて書くと云ふことが出來なかつたのでした。遂に其の小說は讀者の非難が多くて中止をしなければ爲らぬ事になつて、それで私に書けと云はれたものでありますから、然らばとて始めて是に著手して見ました。私は全然編年體を改め、先づ讀者を五里霧中に置く流でやりましたが、意外にも大當りを致しました。是が飜譯小說の處女作で、題目は『法廷の美人』、前の中止した方は『二葉草』と申しました。それから今日(明治三十八年二月頃)までに飜譯した小說は七十餘種に上つて居ります。

九、朝報の赤色を改めしことに就て

朝報は昨年(明治三十七年)まで赤色でありましたが、此の赤色紙を用ひたのは時事新報が初めで、赤紙新聞は朝報の特色ではありません。其の便利なところは、第一如何に多く賣れて居るかと云ふことが人に氣附かるゝと云ふにありましたが、紙の都合や、印刷の不明瞭な爲めに今日のやうに更めて了ひました。朝報はまだ他の新聞が一頁五段六段の時に七段にして、成るたけ空地を少く致しましたが、是は朝報だけであつた爲に、他新聞に使つた廣告の版木などが大きくて、廣告係は頗る困りました。今日では殆ど何の新聞も七段になりましたが、朝報は此頃更めて九段に致しました。

十、悉く朝報の讀者とした

新聞事業は身を之に委ねた以上は、外の事に頭や手を出しては不可ません。私の健康の續く限り、萬朝報を傅り立てゝ行く積りであります。近頃私は世間から、黒岩は政治上に野心があるとか、交際社會へ出るんだ抔と云はれますが、畢竟買被りであります。一寸私が國民後援會へ關係したばかりでも仲々新聞の方の妨げと爲つて居ます。私は矢張り新聞事業專任で行る考へである。元來私の目的は、日本の社會に如何なる地方、如何なる階級にも悉く朝報が行き亘る樣に爲らなければ滿足せぬと云ふのに在りて、全國全人口何人にも最も信頼せらる可き新聞が出來たならばと願つて居る。幸に今日では發行紙數日に增し社の家屋、機械等にも數年以來或は移轉し、或は改良して來たが、是等は實に些細の事で、私の理想から云へば、過去四五年間の朝報は全く鳴かず蜚ばずの狀態であるのである。

（明治三八・二・一）

新聞紙論

余は四月八日東京地方裁判所に特別の辯護人として出廷し、誹毀の被告人たる朝報社員某々を辯護した。其辯護が新聞と云ふ營業の性質にも說き及んだ、此事を聞及んだ雜誌中央公論の記者が、其論旨を紙上に揭げたいと、所望せられる、けれど彼の論は被告人を辯護することを目的としたので、必ずしも其まゝ雜誌などに載せるのに適當で無い。依て多少の加除を施して自ら記述したのが此一篇である。

新聞紙は何であるか、殊に個人の名譽に對して何の樣な關係を持て居るか、是は新聞紙を經營する人も新聞紙を愛讀する人も知て置く可き事柄で有ると思はれる。

一見しても分つて居る通り、新聞紙は一面に於て世界の知識を司どつて居る、新聞紙の記事の爲め又は論調の爲めに國と國とが親善にもなり、互ひに反感を懷くこともなる、其の實例は枚擧に遑あらずである、却て今日の外交界に於て新聞紙に動かされざる和戰の例を求むることが難い、日本人に適切なる日露戰爭の例を見ても新聞紙は確かに原動力中の大なる一であつた、日本が米國の或社會から無實の疑ひや、無理なる反感や非難などを受けながら、猶ほ充分の親交を保存し得て居るのは、日本の新聞紙が穩健なる態度を取り、一般の世人を戒めるが爲である、若しも日本の新聞紙が、力限り煽動的な態度を取つたならば日本の公使さへも米國に居られぬことゝ爲り兼ねぬ、今の世に於て新聞紙ほど大なる勢力が他に在るで有らうか、而して其勢力は文明が進むと共に益々進むのである、進む一方である。

又一面から見れば新聞紙は國家の內部を取締るのである、總理大臣の勢力も信用も人望も新聞紙より附與せられて新聞紙に剝奪せらるゝとも云ふべき場合が多い、國家の政治も新聞紙に妨げらるれば行はれ難く、新聞紙に助けらるれば行はれ易い、現に今日ゝ日本の政策に於て、實際に行はれて居る

のは、新聞紙の多數が賛成して居るか、少くとも反對せぬ如き種類であると云ふも過言で無い、新聞紙の多數から冷嘲や熱罵を浴せらるゝに至つては如何なる政治も政策も行はれはせぬ、政治以外の一切の事業とても總て略ぼ同じ程度に新聞紙の力の下に置かれてある。

更に又他の一面から見れば、新聞紙は人の行ひを支配するのみならず、目に見えぬ人心をも動すのである、人心を動すからは風俗を制すること無論である、又人の名譽をも掌握して居ること無論である。

是等を湊合して判斷すれば、新聞紙の勢力は世界の一切を包括して居る、大も小も新聞紙の勢力より逃れることは出來ぬ、昔しの言葉に正心、誠意、修身、齊家、治國、平天下と云ふが、此の六を總括して居るのが新聞紙である、新聞紙は人をして心をも正しくせしめ、意をも誠にせしめ、身を修めて家を齊へしめ、國をして治らしめ、天下をして平かにならしむることを總て手の裏に納めて居る、實に驚く可き勢力ではないか。

斯かる廣大無邊とも云はる可き大勢力は何から來るのであらう、他無し事實を報道して僞らず誤らざると、事理を論議するに於て多く私心を挿入せず、少くとも社會先覺の意見を代表せりと視る可き點が多い爲めである、余は此點に於ては例證を要せぬと思ふ、即ち自明の理であるのだ、今まで多く

現はれた新聞紙で、報道の確實と論評の公明とを兼て居る如き者は皆存して、然らざる者は動もすれば廢業の否運に陷つた樣である、此點から云へば新聞紙は世間を支配すと雖も自個の生存を世間から支配されて居る、新聞紙の勢力が偉大であるけれども『世間』なる者の勢力は更に偉大である。

新聞紙の雜報は如何に書くか

爾すれば新聞紙は其の雜報を面白ろ可笑しく書いたとて必ずしも賣れる者で無い、けれど世間の人は多く其樣に思ふて居る『新聞紙は面白可笑しく書き立てゝ多く讀者を得やうとするが爲めに、有る事無い事を取り雜せて書くが爲めに、自然と人の名譽をも輕んじ、自然と人の內事をも訐き、誹毀の罪を犯すに至るのである』とは世人の或る者が動もすれば唱ふる所で、神聖なるべき法廷に於て、神聖なる可き司法官の口からすらも聞く所である、眞に新聞紙の內幕を知る者から見れば、殆ど憫笑すべき誤解である、若しも新聞紙が面白可笑しく眞事虛事を取まぜて書いて賣れる者ならば、其事業たるや誠に容易で有らう、何も事實の眞を得んが爲めに、社員を社會の各方面に派出したり世界の果にまで通信員を置いたり、或は高價なる電報を以て報道を取寄せたりする筈はない、尤も今日の如く進步せざりし時代、假例へば今の東京市長尾崎行雄君などが新聞記者たりし時代には隨分記者たる者が、面白可笑しく事實を作ることを能事としたかも知れぬ、尾崎君が新聞紙に對する批評の內には何うや

ら其樣な語氣がホノ見えて居る、けれど進步した今日の新聞紙には其樣な事は斷じて無い、唯だ事實の眞相を害せざる範圍に於て成るべく文を美にすることは勉めるけれど、事實の眞を少したりとも損じては、全く高價多勢を以て採取した實を自ら傷くる樣な者で、今の記者は之をせぬ、之をしては免職せられる、記者の部類に居ることは出來ぬ、又新聞紙として讀者から捨てられる、飽くまでも今の新聞紙が事實の眞と其早きことを生命とすることは疑ふ餘地が無い、之を知らずして、面白可笑しきことを事實の眞よりも貴ぶ樣に思ふのは、少くとも二十年、時勢に後れた頭腦である、斯かる頭腦の人に評せられ、甚しきは罰せらるゝ事さへありとせば新聞紙は俗に云ふ『遣り切れぬ』譯である。

新聞紙は營利の事業なるか

右の如く事實の眞を得んが爲め、而かも早く得んが爲め、世界の果などからも電報や通信を取寄せる程の次第で、猶ほ其爲めに社員も多く使ひ事務も增加する等の爲めに、實際の計算に於て收支が甚だ償ひ難い、余は親しく各新聞社の內幕を窺いた事は無いけれど、賣捌き上の競爭を常に見て居ると何の社に今月は何れほど力が有る、來月は何れほど疲勞するなどゝ云ふ事が、略ぼ察せられるが、今日に於て、其資本に對し相當の利子を附して行くことの出來る如き新聞社は東京に殆ど稀れである、恐らくは他の地方とても略ぼ同樣で有らう、是から云ふと新聞紙は直接なる營利事業では無い樣であ

る、又今までに、富豪が數十萬の金を掛けて新聞紙を始めた例も有る、政府筋の人が金力を吝まずに經營した例も有るが、大抵は失敗する、餘り遠からぬ以前に間接に三菱が手を出した新聞紙も有つたと聞くが、是れすらも利益を得るには至らなんだと推量さるべき理由がある、尤も歐米には營利事業として成功して居るのも有るかも知れぬが、何うも營利を目的とす可き事業では無いらしい、營利を目的とすれば他の事業と比較にならぬほど薄利らしい。

然らば何故に營業する

利益にならずして何故に營業するか、甚だ解し難いやうであるが、前に記した新聞紙の勢力を思ふときは少しも怪むには足らぬ、世には金錢をば何よりも重んずる人も有らうが、金錢以上に勢力を重んずる人も有る、新聞紙を經營する人は多く勢力を得んと欲するが爲めである、尤も勢力と云つては語弊が有る、適當に云へば志を天下に行はんと欲するが爲めである、勿論新聞紙には種々の人が居て、其の社員の一切をば天下に志の有る人とは云はれぬけれど、少くとも新聞社の幹部とか主腦とかを形づくつて居る人々は、治國平天下の志が有るのである、救世濟民を己れの任とするとも云ふ可きである。

斯かる志の爲に、損をしつゝも新聞紙を營業する人も有る、損をする迄に至らずとも金錢の計算を

顧みられぬ場合が多い爲め、自然と新聞紙は薄利になる、薄利では有るけれど、之を營業と言ひ做すならば、確かに社會に於ける最高等の營業である、古の人は『丈夫、志を天下に得ざれば退いて辭を修め道を明かにす』などと云ひ之を男子の本領として有るが、實に新聞社は辭を修め道を明かにする人の據る所である、聞く所に由ると故福澤先生は、東坡が韓退之の碑文に記した『匹夫にして百世の師と爲り、一言にして天下の法と爲る』との句をヒドク愛誦せられたとやらにて、何かの題辭に『百世之師、天下之法』と自ら書せられたのを余なども見受けたが、定めし先生は百世の師たり天下の法たらんことを期して居たので有らう、今の世に於ても匹夫にして百世の師と爲り一言にして天下の法と爲る如き人が若し有るとすれば、其人は新聞社に居るより外に居る所は無い、新聞社の人が悉く斯かる志を懷いて居るとは云はぬけれど、治國平天下の勢力ある營業には他の營利的營業に見ることの出來ぬ志の高き人のあるのは極めてプロバブルな事では有るまいか、余自ら新聞記者で有りながら憚らずに斯くの如き事を云ふは聊か我田引水にも聞えるけれど、余は自ら新聞記者であるだけに之を云ふ事が出來る、余が新聞記者として三十年の經歷は余をして斯かることを云ひ得るだけにまで、新聞社界の知識を得せしめた、新聞記者は多く志の人である意氣の人である、生前一杯の酒よりも死後千歲の名を重ずる底の人が隨分ある、少くとも他の營業にあるよりは新聞社にあるが多い、此點から云

へば、人が新聞紙を社會の木鐸と云ひ新聞記者を布衣の宰相と云ふは決して新聞社を賞め過ぎた言葉で無い、新聞社より外に社會の木鐸なる語に當篏る營業はなく、新聞記者より外に布衣の宰相と云はるべき職業は無い。

新聞紙は人の名譽を誹毀するか

何人も他人の名譽を傷くる權利を持たぬ以上は新聞紙なる者が人の名譽を傷けて成らぬのは勿論である、其れが爲めに、若し誤つて人の名譽を毀損したる場合には、甘んじて重き刑に服するのである。けれど若し、新聞社に、人を誹毀する意志があると云ふ者があれば余は斷々乎として反對する、新聞社は決して人の名譽を傷けんとする意志を持たぬ、新聞記者は世間の水平よりもヨリ高き知識を以て居る、人の名譽の重んず可きを知ることも通例の人に劣らぬ、新聞紙は微力ながらも救世濟民の志を抱懷して居る、人の悲みを悲み、人の傷みを傷むのである、人の名譽を毀くることを喜ぶ筈が無い。

唯だ事實の眞を重んずるが爲めに、事實に忠ならんとして知らず識らず誹毀罪に問はるゝ場合を生ずるのである、若も誹毀の法文より『事實の有無を問はず』との文句を删り、事實其通りならば誹毀に非ずと云ふ事、乃ち盜賊を盜賊と云ふ事は誹毀に非ずとしたならば、新聞社の誹毀事件は十中の八分を減ずるであらう、今は盜みをした人をも盜みをした人と云はれぬ世の中である、少くも新聞社だ

けは、盗みをした人を盗みをした人と書くが爲に誹毀罪に落さるゝ條件の下に立て居る、此條件を知らずして新聞社をば誹毀の意志ある者の如く云ふは、酷に失するのである。

殘る一分は何より來る

誹毀の八分までは事實を重ずる爲めに、事實を事實として、知らずに法文に觸るゝとせば殘る二分は何の爲めに法に觸るゝや、是れは新聞紙の事業が、其性質上、非常に急がしきが爲めである、世人は、今朝の新聞紙に、若し曉け方、即ち午前二時頃の火事の事を書て有れば非常に驚くで有らう、實に午前二時の出來事をば、現場へ行きて探知し、歸り來りて文章に綴り、活字を拾ひ、活版に組み、ステレオタイプに取り、機械に掛けて印刷して之を朝の間に配達する、其忙がしさは察するに餘りが有る、斯かる事柄に多少の誤りあるは、或は恕す可きでは無からうか、併し、新聞社の内幕に入て見れば晝間の二時頃とても其忙がしさは曉け方の二時頃と少しも違ひは無い、之を余の經營せる日刊新聞萬朝報に就て云へば、晝間の二時ならば第一版の締切時であるから、午後二時の火事を報道するのは午前二時の火事を朝の版に組入れるのと其の至急さが同じである、午後の四時には第二版を締切る間に合はさねばならぬ、六時でも七時でも十二時でも常に、其の時の特別なる版に追はれて居る、少しも新聞社には悠々と或る報道を吟味し詮議して居る暇が無い、ヨシャ前々から定まつて居る續き物

の如きとても、毎日他の急用に追はれるが爲めに執筆者が、ヤット締切に間に合ふ樣、大急ぎで書き綴る故、唯だ事實に忠實と云ふより以上には何事をも顧みる餘地がない、而かも其の事實に忠實と云ふが、綿密な吟味の出來ぬ際である爲め、寸毫の誤謬も無いと云ふ譯には行かず、何うかすると事實に相違することが有る。

苟くも事實に齟齬する以上は、書かれた人は容赦なしに新聞紙を責め立てる、假令へば夫婦喧嘩の記事に女房の年齡が一歳だけ違つて居る、其の夫婦喧嘩は事實で有つても、書かれた方では單に『此記事は間違つて居る』と言做さうとする、新聞社へ正誤を求むるなどは大抵、其れである、針ほどの點が相違すれば棒ほどの事實が抹殺される、斯樣の所から云へば事實の間違つた誹毀も、時に無いとは限らぬが決して記者が故意に事實を違へる譯では無い、其れだから若し誹毀罪へ、犯罪の意志無き行爲は罪を爲さずと云ふ汎例を適用すれば、殘る二分さへも消滅する、卽ち新聞紙は決して人を誹毀する事は爲さぬと爲る、余は今の進步したる新聞社が人を誹毀する筈は決して無いと斷言する、新聞社は犯罪の意志なくして罰せられつゝある、けれど是れも致方が無い、犯罪の意志は無くとも、人に迷惑を掛くるのであるから、或る程度までは謝罪もせねば成らぬ、服罪もせねば成らぬ、けれど、犯罪の意志が有るかの樣に『讀者を多くせんが爲めに面白可笑しく書き立てゝ』などと言做すに至つて

は容易に承服する譯には行かぬ。

夫婦喧嘩と云ふ如き事は人の內事である、ヨシヤ事實相違せずとも書くことが宜しく無い、書かれた人に於て其れだけの迷惑を感ずる、從て誹毀の告訴を起す權利が生ずる、法文の事實の有無を論ぜずとするは玆である。

內事は記す可からざるか

けれども人が社會の一員として社會に住居する以上は反社會的の結果を來すが如き行爲を爲しては成らぬ、是れを爲せば其れだけ人に笑はれるとか、疑はれるとか、擯斥せられるとか、憎まれるとか、或は侮られるとか、詰り自個の不利益に傾向する反感を受けることを免れぬ、夫婦喧嘩の如きことを爲して人に賞られやうと期待するのは、社會の道德律を知らぬのである、社會道德から云へば人類の社會に住む以上は社會から監視せらるゝことを辭することは出來ぬ、俗に云ふ『人目の關』と云ふのが社會の監視で有つて、是れが社會の風紀を支へ、惡行を困難にし、惡人を窮屈にすることと何れほどで有るかも知れぬ、全く『人目の關』は法律の屆かぬ所を取締るので、若し之れが無ければ社會が腐敗し墮落するのみで無い、安寧も無く秩序も無く、全く社會を爲さぬまでに破裂して了ふかも知れぬ、若しも社會をば人々の孰れにも安心の出來る者と爲さんが爲には、成る可く此の『人目の關』を明か

にせねばならぬ、新聞紙が即ち丁度其の任に當つて居るのである、眞逆に今の新聞紙は單に夫婦喧嘩たるに止まる如き事柄は書き記しはせぬけれど『人目の關』たると同樣の功力を現はし能く世を監視し、人々をして安心して社會に棲むことを得せしむることは、所謂る救世濟民の小なる一方面である、少しく社會道德を下落せしむる如き傾向ある事柄は、書かねばならぬと感ずる場合も有る、けれど其の心は誹毀の心で無い、社會に盡す心である、此の心あるが爲めに、人々の心も正きを失はず、社會の良風なども保護せられて行くのである、新聞紙が人の內事を書くことを非難する者は、先づ之が爲めに社會の良風の保護せられつゝあることを知らねばならぬ。

公けの人は公けの所持品なり

併し實際に新聞紙が人の內事を書くと云ふは、多くは一私人の事では無い、公けの人の事である、若し一私人の事ならば必ず憐む可きビクチム(被害者)を助けると云ふが如き博愛的の動機から出でゝ知らず〳〵其加害者に辛く當る樣な事情である。

公けの地位に立つて居る人に至つては、啻に自分の內事として人より隱すことが穩當で無いのみならず、自分の一身を公衆の所有品の如く誰れにも見ることを得せしめ、殆ど八面玲瓏にして置かねばならぬ、新聞紙たるものは之に向つて容赦すべからざるのみて無く、常に特別に明かなる眼を以て其

人を睨んで居ねばならぬ。

或は西洋の新聞紙は人の內事を記さぬなど云ふ人も有れど、其れは西洋の新聞を能く知らぬのである、西洋の新聞は、無論に內事を書く、殊に公けの人に對しては寸毫の容赦が無い、新聞紙にも雜誌にもカリケーチユーブ（即ちポンチ畫）の出て居ることは餘ほど多いが、カリケーチユーアとは人を嘲弄するとか冷罵する如き意味である、其の辛辣なることは日本の新聞紙の及ぶ所で無い。

一方に於て西洋の新聞紙は誹毀に於て重い刑罰を受けるけれど刑罰以外に嘲笑畫の領分に於て、大に人を窘め附けて居る、之れに對して決して日本の新聞紙をば人の名譽を輕ずる者だなど云ふ事は出來ぬ、今は西洋の新聞も日本の新聞も大した相違は無い。

曾て倫敦タイムスが、時の大政治家、愛蘭黨のパーネルの姦通事件を評いた如きは何うである、日本の新聞は是れほどの勇氣が無い、是れほどの決心を起し得ぬ、到頭タイムスはパーネルをして天地に身を容るゝ所なきまでに窮追し、彼れを政治上から葬つて了つた、有名なヂルクなどもクローフオト夫人の件で新聞紙に訐かれ政治家の資格を失つて再び之を回復するに十數年を費した、のみならず元の如き信望は到底得ることが出來なんだ、斯かる次第であるから場合に由れば公けの人に對して嚴格なるは西洋の新聞紙が優つて居るかも知れぬ、日本の新聞紙の方が其筆鋒に於て多く曖昧であり情

實的妥協的である場合が多い。却て妥協的であるのを大人の態度である樣に言做す人も有る。時にも由るで有らうけれど、情實的妥協的の態度は變則である。正則では無い。大は天下國家の治安より、小は一個人の心情行爲をまで規正して、國家の機關とも爲り社會の教育者とも爲り、個人の指導者、慰藉者、保護者とも爲るべき本來の責任より云へば記事も意見も、成る可く明晰で、是を是とし非を非とする點に於て疑似を容れぬが本統であらうと思はれる。

新聞紙を恐るゝは誰ぞ

斯樣な事を考へて見れば、世に、ヒドク新聞紙を恐るゝ如き人の有るのも無理とは云へぬ。實に新聞紙の勢力は恐ろしいほど强いのである。けれど、幸ひにして新聞記者の多く、殊に其の幹部とか主腦者とかの多くは、勢力の强くなると共に責任の重くなることを自覺して居る。決して强き勢力を濫用妄用する樣な者は無い。若し其樣なのが有れば、社會は其樣な新聞紙を信用せぬ、其樣な新聞紙をして勢力を得せしむることを許さぬ。

故に其の行爲に於て自ら耻る所無き人々は新聞紙を恐るゝに及ばぬ。然るに近時、官僚界の大頭連より、衆議院議員の多く、政府部内の有力者など、新聞紙を恐るゝが多い。其れが爲めに新聞紙に對する法律の壓迫は年々に重くなり、今は署名人の外に、筆者を罰し、猶ほ記者を罰する如き迫害的の

る手心を現はして來る、若しも新聞紙の品位が年々に墮落するならば取締る手心の年々に嚴重を加ふるは當然で有るけれど、實際新聞紙の品位は年々に向上するのに、取締りが益々嚴重を加ふるとは、即ち公けの地位にある人々の自信が段々に弱くなる證據では有るまいか、公けの地位に居て能く其職に叶ひ、少しも地位を辱むる如き汚行が無いならば、自個の實行を以て自個の名譽を保護して行く、若しも新聞紙が惡し様に書けば其の新聞紙が信用を損する結果と爲る、余は公位公職の人が新聞紙を壓迫せんと努むるのを社會の健全なる現象とは思はぬ、今日の新聞紙は何の點から見ても社會の實際より一歩進んで居る様に見える、其知識でも趣味でも情操でも、社會より一歩先に立つて社會を導いて行きつゝある、即ち社會教育者の任を盡しつゝあるのである、殊に社會的道德に至りては今の社會の有力なる人々と新聞紙との間には雲泥の相違が有るとも云ひ度い、我が社會の公德と云ひ紳士達の品行と云ひ又其道德的觀念と云ひ、今の新聞紙の紙面よりは餘ほど劣つて居る、是れが即ち新聞を恐るる所以で有らうが、さりとては情け無い次第である、若しも今の世に新聞紙が無ければ、世の中は全く知識的の暗と爲るばかりで無く、道德的にも暗と爲り、愛國心も慈善心も奮鬪心も義務の念も何れほど薄くなるかも知れぬ、斯かる點に於て新聞紙は國家の政治と社會の道德とを雙肩に擔ふて居る様な者である、而かも其の記者たる者は敢て社會から表彰せられやうとも國家から功勳を認められやう

とも希望せぬ、眞に國士たるを辱めぬでは無いか、是れ即ち余が新聞紙の爲め新聞記者の爲め、公廷に出でゝまで聊か辯ぜざるを得なんだ所以である、但し新聞紙と云ひ新聞記者と云つた所で、偶には羊頭を揭げて狗肉を賣るのが無いとも限らぬ、其れは官吏の中に盜賊があり、商人の中に詐欺師がある樣な者である、止を得ぬ禍であることを、世人に於て深く諒するが當然であらう。(明治四五・四)

平和なる檄文

吾等と心を同くする人は來れ與に倶に社會救濟の爲に「理想的團結」を作らん。

一、社會救濟の第一步

我が住める家屋の腐れ傾くに於て、之を修繕し、又改築するは、異常非凡の事に非ず、住人たる者の當然になすべき所なり、更に、我が棲める社會の腐れ傾かんとするに遇ひて、之れが改繕を計るは異常非凡の事なる乎、其の住人たる者の當然爲す可き所には非ざる乎、住人之をなさゞれば誰か又他より來りて住人のためになさんや、此の理は何人も之を知る、然れども唯だ社會の事は一人の力に及び難し、故に人各々其の住人たりながら、又其の腐れ傾くを看ながらに躬から之を救はんと欲せざるのみ、救はんと欲するも其の方を得ざるのみ。

想ふに今の我が社會に住する多くの人は、必ず斯くの如き感あらん、我が社會の日々に腐れ傾くを見も看、住人として何等かの手段を以て之を救はんと欲するの念もあり、唯だ其の救ふべき手段の無きが爲めに徒らに餘所事の如く打捨て置けるならん、眞に然る乎、眞に然らば先づ斯くの如き人々相合して其の力を一にするは、社會を救ふべき第一歩に非ざる乎、吾等が茲に理想的の團衆を作らんと謂ふ者は之がためなり、先づ之を以て我が社會を善に還らしむる第一歩とはなさんとするなり。

二、社會改鑄の力

人々の胸の底に、如何程微弱にもせよ社會を救ひ度しとの念あらば、其の社會は未だ必ずしも亡びざる可し、救ふに救はれぬ事は無き社會なる可し。火は一點の微と雖も之を育つるに方法を以てせば、頓ては天をも焦さんとする炎々の勢を現し來らん、人々の胸中に存する一點微弱の念慮とても之を集め、之を合せ、又之を發揚するに於て、大なる社會を改鑄する力たるに至ること無からんや、理想的團結は先づ此の微弱の念を集め、之を合し之を發揚し大なる力たるに至らしめんと欲するなり。

三、何故に理想團と謂ふ

何故に理想團と謂ふや、之れ宗教的の團體に非ず、政治の黨派にも非ず、又或る觸感す可き利益を目的とせる會社にも非ず、單に社會改良の理想を以て合する團衆なればなり、固有の名稱は別に定む

るも可なり、別に定めずして直ちに之を固有の名稱となすも可なり。

四、團結の順序

如何にして團結するや、心を以て團結するなり、今の社會に住して今の社會を宜しからずと思ひ、幾何か之を救はんと欲する人は皆團員たるを得るなり、然れども斯く漠然たる言分のみにては團結をなさず、吾人は先づ最も近くして最も容易に行ふべき所より始め、此の萬朝報の社員中の有志を以て團結せん、此團結は今更作らざるも實は既に成れるなり、初めより朝報の社中は社會に盡す可き志を以て、集まれる者なればなり、故に今より更に作る所は、同志を朝報の讀者中に求むるにあり、讀者と社中が團員となり、次には團員各自、最も手近き人を說きて團員となし、團員より團員を生じ、及ぶ可き丈多く且つ廣きに渡らしめん、斯くの如くにして全國の重なる地方に悉く多少の同志者あるに至り、氣脈を通じて志を唱ふるに至らば、既に是だけにても幾何か社會に好影響を及ぼす所あらん。

五、團結の方法

既に團結と云へば團員互に『團員は誰々なるや』を知らざるべからず、之を知るは區域領分を知るなり、團を成長せしむる道をも知るなり、故に第一には團の名簿を作り加入者を記錄す、加入者の數或る程度に達し、成文の規則を要する如き場合に至らば、隨時に規則をも作らん、議決の方法をも定

めん、其の他要用の設備をも執行せん、初めの内は唯だ同志者の常議を以て一切を判斷し決行し行く事を得んなり、朝報の讀者中に在りて、志を同くする人は今月今日より姓名を通知せよ。

六、理想團の費用

團の費用は運動に從ひて必要を生じ來る、今に於ては別に費用を要すること無しと雖も、其の要する場合には團員隨意の寄附を以て之に充つるが當然なるべし、其外に差當り利用す可き財源を見ず。

七、團員の爲す所

團員のなす所は即ち團の運動なり、其の種類は多少なりと雖も、歸する所は集會して社會に對する團の力を發揚するなり、常會と臨時會と二なかるべからず。

常會とは必ずしも定期の意に非ず、無事の場合の集會なり、團員の希望する時、希望する地方に集會して、談話し、評議し、演說し、團員の志を磨き、互に相責めもし、相勵ましもし、又傍ら團以外の人を感化せしめんと勉む、是れ常會なり、臨時會とは社會に問題の起りたる場合に、其の起りたる地方に之を開く、而して其の手段は常會の如く、講話、演說、調査、運動等、穩當の方法を選びて之を實行するなり。

八、團員の平時

然れども人の社會に盡す所以は、必ずしも、斯くの如き集會、斯くの如き運動のみに非ず、人は其平時に於て各自其取る所の本業に於て、日常の言語動作に於て、交際に於て、悉く幾何か社會の救濟者たるを得べし、團員は平常の擧動、事務、操行に於て、時々刻々、人の手本となりつゝあることを忘るべからず、人の善惡は樣々の點より判斷し得可しと雖も、社會一般の人をして己れの所行に學ばしめて、而して社會に害無きこと、先づ普通の善行となすことを得ん、己れ怠惰ならんか、一人にても己れを學ぶ人の出來るは社會の害となるなり、己れ虛僞ならんか、己れ偏頗ならんか、己れ不儉約ならんか、樂しみに耽る人たらんか、痴情で溺るゝ人たらんか、不親切ならんか、總て一人たりとも己れに似たる人を作りては、其だけ社會を害するなり、常に己れを以て社會總體を作り出す模型なりと信ぜよ、大なる善行は傑出の人ならでは爲す事能はずと雖も、斯の如き平凡普通の善は何人もなすを得べし、之をなさゞるは團員に非ず、團の敵なり、理想團は斯る敵を根絶せしめざる可からず。

殊に吾人は本來に於て、不肖と雖も社會の救濟を期す可き新聞紙の從事者なり、團の成ると成らざると、有ると無きとに拘らず、此新聞紙を以て此の志を盡さゞる可からず、眞に念々油斷す可からざる者なり、吾人が團に盡すは一に新聞紙を以てし、次に新聞紙以外の一身を以てせざる可からず、新聞紙を以て呼號し新聞紙を以て努力し一意社會のために勞するを期せば、團と新聞紙とは別なりと雖

も一に似、其の致す所は自ら同じきに歸するを得ん。

九、最も力を致すべき部分

理想團の主として力を盡す可きは、社會の何の部分たる乎、曰く其の人心なり。從來社會の改良と稱したる者あり、今も亦之有り、或は衣服、或は頭髮、或は交際法、家屋建築法、料理、文字、言文、一として斯る改良者の主力たらざるはなし、然れども理想團は悉く之を顧るに遑あらざる可し、一意唯だ人心を以て、進前の目標とはなすなるべし。

十、人の二面、公と私

人に公私の二面あるは今更ら云ふまでもなし、一身一家及び子孫のために計をなす、之を私と云ふ、私は利なり、人に取りて大切なる事何人も之を知る、然れども一身一家に對する外に社會に對する關係あり、之を公と云ふ、既に社會に住む以上は一身一家の外に社會の事を計らざる可らず、公は義なり、一身一家の私に對して利の必要なる如く、社會の事に對しては義を要用とす。

十一、私利と公義の消長

唯だ利は人が他の一切の動物と共に通有する天性なれば、之を敎へざるも人自ら知り、之を導かざるも其の性自ら發達す、故に古より人心を救はんとする者にして私と利とを説きたる者は有らず、偶

まあるも、其れは斷じて吾人が社會救濟者を以て目す可きに非ず、全く社會を墮落に導き行く誘惑者たるなり、理想團は少くとも誘惑者たらずして、救濟者たるを以て心とせざる可らず。

蓋し社會には樣々の誘惑ありて、人の私心を挑發す、人既に私利の天性あるが上に此の誘惑に接す、故に人を無制限に社會の潮流の中に立たしむれば、私利の心愈よ增長して公議の心は全く消滅するに終る、我國の今日は悲しくも其の實例の一に非ざる乎。

十一、公共の機關と之を率ゆる心

見よ、私と利とを離れて立つ可き社會一切の公共の機關を、之を率ゆるは總て私利の心に非ずや、公の機關は公の心、義の心を以てのみ支配す可きに、却て全く私心を以て之を運轉す、社會一切の公の事業が、悉く私利私心の機關たるに終るは豈に止むを得んや。

政治にも敎育にも、遺憾ながら宗敎にも、社會公衆の信任に依りて立つ一切の公の事業にも、私利私心のため腐敗墮落せざるもの孰れにあるや、若し社會が破れ傾くときありとせば、今日は正しく其の時なり。

十二、社會の制裁

然れども公の機關に公義の心絶えたるは實に社會の住人總體に公義の心弛み、私利の心の橫溢せる

がためなるのみ、社會の住人皆公義の心に富むと、其心の富めるに準ずる狀態ならんには、其闕よ私心滿々たる公人の出でん筈なし、縱しや出づるとするも住人總體の公義心能く之を制裁し得て、永く其地位を保たしめず、又長く其の私心を逞しくせしめざるなり。

吾人が社會の制裁薄弱なるを患ひて、百方に之を呼號するは幾年ぞや、朝報は社會の制裁を叫びて生れ、叫びて今日に至りたるなり、今に及びて社會に公義心の消滅せること斯くの如く甚だしきを見る、豈に默々無爲に安ずる事を得んや。

十四、誰か社會の落度を救ふ

今日公の機關に公けの心なく義の心なきは社會住人總體の落度なり、此の落度は誰か之を救ふ可きや、云ふ事勿れ、自ら犯せる禍は自ら矯むる事能はずと、一個人の過は幸に師父隣人の來りて之を責むる事もあらん、社會の過は社會の住人の外に責むる人無し、住人皆自ら奮ひ自ら勵みて公義の心を失はずんば百年千年、社會の他力に依りて改まる時は來る能はず、若し來るとせば、社會の亡びて後、換言せば外國の人來りて此の社會の住人となれる時なる可けんのみ。

十五、偉人の來りたるに同じ

又云ふ事勿れ、社會の救濟は之を偉人にまつと、知らず偉人は何の時にか現はれ來らん、今日の急

は悠々として偉人をまつ可きに非ず、社會の住人、個々に自ら改むること、我家の敗頽を住者自ら修繕するが如くすべし、斯くせば偉人遂に來らずとするも偉人の來りたるに同じ、理想團は個人相合して此の自ら改むるの道を歩まんとするに外ならず、社會に公義無からんか、理想團先づ其の制裁を團以内より行ひて之を團以外に及ぼさん、政治にも宗敎にも敎育にも商業にも公心義心の絶えて、私心利心の專らなる所は、總て此の團結の進みて力を加ふ可きに非ずや。

今の社會に住みて社會人心の腐敗を認め、幾何か之を憂ひて之を救はんとする人は、來りて共に理想の團結を組織せよ、之を組織して相責め相勵まし、相助け相導き、先づ己れより始めて次第に廣く人に及ぼすは、今の場合に於て何人も云ひ得る唯一の手段なり、之を行はざるは、社會の腐れ傾くを徒らに看過するなり、豈に社會住人の心とす可き所ならんや。(明治三四・七・二)

靑年と政治思想

一、靑年と奮激性

支那の靑年が革命を企てたことは、其結果や利害は孰れとするも靑年問題の上に大なる光りと熱とを注射した者と云ふ可きである。知らず日本の靑年は之を見て何の樣な感慨を催すであらう。今より

十數年前、倫敦に居た支那の外交家が『清國は死せるに非ず、眠れるなり』と題する論文を作り、英國の雜誌に掲げて世界を刮目せしめた事がある、爾來『死せるに非ず、眠れるなり』との一語は支那の事を評論する人の口に度々上つたけれど、此の眠れる支那を覺醒せしむる如き力が何の所に在るか分らなんだ。老大國の長夜の夢は覺むる時が無いとも云はれた、若し有らば其力は支那自身の國内には在らで、必ず外國の刺激であらうとも云はれた、成るほど外國の刺激には違ひない。日清戰爭、北清事件、日露戰爭など、孰れも一方ならず清帝國を刺激し引續いて列國の舉動が一々清國の神經を震撼した、けれど、此刺激に感じて興奮するほどの力が清國の先進者には無かつた。眠れるにあらで麻痺したるなり、其麻痺の終るは彼れが死する時で有らうとさへも思はれた、所が、豈圖らんや、刺激に對して感激し興奮する力が支那の青年に潛んで居た、今や支那四百餘州の惰眠は己れ等の子弟の手で搖り起されつゝ有る、全く支那を救ふものは支那の人民でない、其子弟である。青年である。

實に青年は國家の元氣てある。昔しの大哲學者プラトが國民にイリタビリテイが無くんば其國は亡ぶと云つた。其のイリタビリテイは何の國に於ても青年に在る。卽ちイリタビリテイとは奮激性である、興奮性である、困難に遭ひて奮激し、凌辱せられては赫怒し以て民國の實體を支へるのが此の力、此心性である、此の心性は何の生物にもある、何の生物も奮激する。抑も生命其者が奮激性である、

若し奮激性が無くて、困難に遭へば困難に負け、凌辱せらるれば萎縮して屈從する如き生物は、ヨシヤ此世に在つたとしても、其樣なのは自個の實體を支へる事が出來ぬ爲めに、疾の昔しに其種族が絶滅した筈である。生物學者の說を聞くと、生命の根本を爲して居る原形質の特色は酸化することである、彈力である、卽ち興奮である。興奮であればこそ、生命と爲り活氣と爲るのである。卽ち生命其者が本來に於て甚だしき奮激性の者たることは察せられる。

けれども、長く社會を爲して居る今の人類に至ると、根本の奮激性を以て活きながらも、心に有する奮激性は、色々の事情の爲めに衰ふる場合が多い樣である。其れも、生れて未だ多くの事故に老いぬうちは、卽ち靑年の時代は、多量に有して居るけれど、家も出來、妻も出來、子も出來、親類の關係や、友人の繫累などが次第に多くなり、所謂る情實の覊絆が身に纒ふ事と成りては、段々と圭角が消磨して、興奮せねば成らぬ場合にも興奮し得ぬ事と爲るが多い。漢學者が『風塵に老いる』と云ふことを云ふが、余は其眞意義を知らぬけれど、字面だけでも實に面白いでは無いか、風に吹かれ塵に揉まれなどする中に段々と身も心も汚れて白いものがドス黑くなり淸いものも薄ぎたなく成つて其性質が違つて來る、人間が卽ち是れで有る。殊に今時流行の語たる生活難に揉るゝに至つては、大抵の人が、頭の上に恩人と云ふ者が出來る、恩人無しには世は渡れぬけれど、恩人が出來ては最う駄目で

ある、右にも恩人、左にも義理合、斯うなつては怒るにも怒られず、興奮するにも興奮されず、殆ど泣くにも泣かれぬ仕儀となる。青年時代を過去つた人は大抵是れである。人間が四十になれば、自ら男盛りとか分別盛りとか云ふけれど、男盛りは青年の時代である、義理や恩人に搦まれ、所謂風塵に汚れた身を以て如何に分別盛りでも、如何なる妙分別を出しても、其分別を行ふ可き興奮性が少くては何の役にも立たぬ。誰かに聞いたが西郷隆盛の言葉に『金もいらぬ、命もいらぬと云ふ人ほど始末に終へぬ者は無い、けれど斯かる始末に終へぬ人で無ければ世の中に大事は爲し遂げられぬ』と云ふのがあるとやら、是も面白い名言である。今の青年に果して『金もいらぬ、命もいらぬ』と云ふ氣風が有るとは思はれぬけれど、青年を過ぎた人には猶更ら此氣風が無い、青年の方が、孰れの時代に於ても此氣風に近い筈である、比較的に此氣風に富んで居るのである、即ち青年が、民國のイリタビリテイを代表し國家の元氣と爲り、原動力と爲るのは是れが爲めである。青年の興奮の氣に推進められぬ國は禍なる哉と云はねばならぬ。

我國の維新の革命も青年の奮激性を以て成し遂げた、日本に立憲政治を作り出した當年の民間論者も皆青年である。何も今更ら支那の青年の氣慨あるのを見て異樣に感ず可き譯は無い。下つて日露戰爭は誰がした、徵兵適齡が滿二十一歳である、二十一歳を過ること遠からざる青年が兵と爲り、彈丸

而注の中に立つて敵を控いたでは無いか。若しも、所謂る男盛り分別盛りの先生達を戰線に立たせたなら何うで有らう、彼等は故鄕に殘した妻子や事業や親戚などの事ばかり思ふて、動もすれば背後に振向き、支那兵よりも朝鮮兵よりも更に弱い兵隊としか成ることが出來ず、沙河の穴籠りなどには悉く疝氣や神經痛を起したに違ひない、其れこそ世界の好笑と爲るのみで無い、國家の破滅と爲つたで有らう。之を思へば青年の氣力の賴もしさが今更らの如く思ひ浸みる。

二、囚はれたる青年

所で、我國の今日の青年は何うであるか。未だ風塵にこそ老いぬけれど、余は一言にして憐む可き境遇に囚はれて居ると斷言したい。我が青年の一部分は徵兵に罹つて兵營に囚はれて居る、是れは宜しい。何所かの國と戰爭でも有れば又其の元氣や氣力や奮激性を發揮して民國を救ふて吳れる。殘る一部は學生として校舍に囚はれて居る、是も宜しい。學問を修め智德を研いて他日立派なる民國の實働者と爲る。更に殘る一部は職工として工場に囚はれて居る、是れも亦宜しいと云はねばならぬ。彼等は漸次工業國として世界に覇を稱す(?)べき我が工業を其の熟練したる手先から產出しつゝある。又殘る一部は地方青年とし其父兄を助けつゝ、多くは青年會なるものに囚はれ、二宮宗の信者と爲つて居る、是れも甚だ宜しい。地方の實業は、重に農業である、農業のみで無く、商業でも工業でも、

總て地方事業が國家生産の源を成し、民國を養ひ、都會を養ひ、國家全體の財力を產出するのである。然れども青年の青年たる所謂る興奮性は何うで有らう、所謂る奮激の氣は健在して居るであらうか。

話しが少し横道に入るけれど、余は此ごろ煙草を製造する工場を實見した、流石に官營の工場だけに掃除も行屆き、衞生的の萬事にも注意が滿ち渡つて居る。原料も豐富、人も豐富、設備も豐富、而して規律は森嚴、何の所にも申分が無い、殆ど之を模範的なる最良の工場と云ふても可い、けれど此の立派な組織の中に就業する一團の女工を見ては『噫因はれたる者よ、汝の名は青年である』との感が涙と共に湧いた。青年問題の中へ、女の事を持込むのは少し筋が違ふかも知れぬけれど、横道に入ると斷つたのは之が爲めである。併し女とても青年では無いか、彼等は二十歲前後の妙齡である、芳紀正にと形容せらる可きである。けれど彼等の顏に、櫻の花の樣な血氣は無い、彼等の肌膚の色艶のみから判斷すれば、彼等は鬼も十七と云ふ愛す可く慕ふ可き艶々しさを失ふて、病人の色の如く褪せて居る。今の世の解放された貴夫人達は五十歲を過ぎても猶彼等より艶々しい顏色を有して居るのに、イヤ此艶々しさは過半美顏術の賜であるとしても、爾る穴搜しは決して工女の憐む可き境遇を辯護する力は無い。彼等工女は濛々たる塵埃を呼吸して居る、其塵埃は煙草の粉である、其粉にはニコチンを含んで居る、其のニコチンは毒である、其毒は多くの禽獸毒蛇をすら殺すに足るのである。余の如

く朝から晩まで烟突の如く將た活火山の如く煙を吹いて居る者でさへ工場に接近すると同時に煙草の臭氣に咽ぶ樣な氣がする。其中に毎日幾時間、傍目も振らずに働くとは人間の天性とは思はれぬ、彼等の褪せた顏色が既に彼等の不健康を語つて居る。啻に顏色のみで無い、彼等の身體の總ての部分と、彼等の動作の一切とが同じ悲劇を見せて居る。彼等は確かに賃錢の爲に毎日少しづゝ健康を賣りつゝある者である。今までは苦海に沈んで操を賣る少女を憫むべき極點の如く言傳へたが、工場に囚はれて健康を切賣する少女も同じほど憫む可きでは有るまいか。余は其後事情に詳しい人に聞いた、煙草製造の女工を二年勤むれば、大抵は肺病の兆を起す、其れでも彼等は止むる譯には行かぬ、又工場の方から云へば二年も通勤してソロ〳〵肺病に成り掛けた位の時が最も技術の熟練した頃であるから罷めさせる譯に行かぬ、恐らくは二年以上勤めた工女で氣管支や肺を傷めて居らぬ者は殆ど稀で有らう。彼等は幸にして好き縁談が有つて人の妻となる時までは通勤する、中には妻と爲つて後も通勤する者がある、勿論彼等は長生をする見込は無いとの答を得た。余は更に後々の事を考ふることを禁じ得なんだ、斯くも健康を損した女に何の樣な子が產れるで有らう。今日が既に悲劇であるのに、悲劇の眞のカタスツロフ(斷末魔)は猶ほ彼等の爲に次の幕まで蓄へられて有るのだと殆ど酸鼻の想ひがした。斯かる女に作らるゝ次代の國民は禍ひなる哉である。早く工場法の完全なのを作り、せめては彼等の

健康をだけなりとも救濟せねば國家次代の進運は期し難いで有らう。

けれど必ずしも烟草製造の女工のみが斯かる境遇では無い。孰れの女工も皆濛々たる塵埃を呼吸しつゝ勞働して居る、孰れの塵埃も決して健康の爲めには成らぬ。又女工のみでない、男工即ち職工と名の附く勞働者は大抵、似たり寄つたりの悲慘な境遇に在るで有らう。

是は或は避け難い事情であるかも知れぬ、又世界各國ともに此樣な有樣であるかも知れぬ。けれど是を國家の健全なる有樣と云ふ事は決して出來ぬ。若しも何とかして彼等に慰藉でも與ふる道が有れば、ヨシヤ少しの慰藉たりとも與ふべく試みねばならぬ。又少しでも彼等の境遇を良くする工夫が有れば、之も試みねば成らぬ。

之に比すれば學生の境遇は餘ほど優つて居る、けれども囚はれて居る事は一である。彼等は幾段にも設けられた試驗制度の爲めに、殆ど精力を消盡しつゝある、試驗又試驗、彼等が愈々文官試驗に及第して、碌々たる小役人と爲り、鰻登りに登つて愈々人間の生活らしい生活味を味ひ得るのは何時の事で有らう。とは云へ余は根本から試驗制度に反對する者では無い、勿論試驗制度には試驗制度だけの長所もあらう、余は唯だ次代國民の爲めに、青年の圓滿なる發達を望むのである。圓滿とは身體も精神も、成る可く健康を損すること少く、成る可く精力を消耗すること少く、勇健に次代の國家を背

負つて立つ樣に發達するを望むのである。此希望に於て余と同感で無い人は一人も無い筈である。

余は是に於て一種の青年解放論を唱へざるを得ぬ、とは云へ、青年を物質的に解放することは當分の所殆ど不可能である。

三、青年の思想解放

物質的には成る可く、其境遇を改良すべきである、出來得べき範圍にて、實行し得らるゝ方法を研究することは廣く世の識者に請はねば成らぬが、差當り余の唱へるのは精神的解放である。彼等に自由思想、自由精神を與へ、彼等をして快濶なる精神世界に逍遙することを得せしめて以て彼等の精神の偏狹や萎縮を救ひ、先づ精神的に彼等を圓滿に健全に發達せしむる事である。昔しから健全なる精神は健全なる身體に宿ると云ふけれど、其れのみが眞理では無い、健全なる精神が身體を健全にすることも亦眞理である。今の青年には物質的救濟が必要であると同樣に精神的救濟も必要である。

青年の天國は思想である、彼等の精神は思想に於て活て居る、彼等は到底實行の道なきが如き思想をも、心の中に描いては自ら樂み自ら味ふのである。是から青年の希望が生ずるのである。希望に鼓舞せられぬ青年は萎縮である。勿論彼等の思想、彼等の希望は空想に渉ることが多い、然れども空想は此頃の青年が能く唱へるイリユージヨンである、イリユージヨンが又青年の生命では無いか。イリ

ユージョンが高い立志（アスピレーション）をも趣味をも生ずるのである。是等を總稱して思想生活と云ふのである。是等の者は、別にして實は一である。同じく思想の泉源から發し、思想の分野に到達するのである。

趣味生活、憧憬生活、立志生活、希望生活、即ち總稱する思想生活、是れが青年の精神的生命である。單に青年のみで無く、殆ど人生一般の生命であるけれど、特に青年に於て甚だしい。余は兼てより先輩同志と共に、社會の思想生活を引立てゝ人生を救ふ可き必要が有ると信じ、其方面に力を盡さんことを期するのである。文明が進めば進むだけ、生存競爭が激しくなり、生活難の加はれば加はれるだけ、人は思想生活に慰藉せらるゝ必要を增すのである。泰西文明の世界に於て藝術が益々嗜好せられるのは即ち其の眞理を告げて居るでは無いか。文明國の學者の努力が、一半は科學的研究であつて、一半は思想問題であるでは無いか、人生の必需品の製作費が、其粧飾的部分に一半を費さるゝでは無いか。粧飾は空漠である、けれど思想の產物である。人の思想的生活の生命に何者をか寄與するのである。試みに汝の身邊に在る如何なる實用品をなりとも手に取りて見よ、粧飾の施されざるもの一品も無きを知らん。汝の家、汝の衣服は、何故に高價なるや。汝の妻は何故に多費なるか。彼等は汝の實用的目的を充たさんが爲めの外に、汝の思想的生命に滿足を與へんが爲めに多くの虛飾を有するが爲めである。虛飾を無益と云ふは、思想生活を無視するのである、實用には無益でも汝は到底其の

虚飾其粧飾を取り去ることは出來ぬ、取去れば間も無く其れが欲しくなる、戀しくなる、即ち思想生活が之を要求するに至るのである。此要求を充さねば、汝は如何に淋しくあるで有らう、如何に寂寞を感ずるで有らう、忽ちにして人生は味氣なく、蠟を嚙むが如く厭はしき者となり、沙漠を旅するが如き無味と爲り、暗夜を獨り行くが如き退屈と爲る。汝は寢ても起きても、何の所よりも思想的慰藉の來らざるが爲めに此世が厭はしくなり、自分の身が厭になり、幸にして發狂するを免かるれば必ず不幸にして疲勞の爲めに野たれ死ぬであらう。昔しの基督教徒は、神が天地萬物をば總て人間の實用の爲めに作つて吳れた事と信じ、只管に感謝したが、天地萬物は其意味に於ての實用の爲めのみでない、千點のものならば九百九十九點までは粧飾として人間の思想生活の材料たる事を務めて居る。如何なる一物にも色彩の無きは無く、實用には不必要で而かも思想的生活には必要なる或の美なる形を故々に現はして居る樣にも見える。彼等が若しも、一樣に何等人間の思想生活の糧たるべき形と色とを備へず、單に食はる可き滋養性、用ひらる可き堅牢性、柔軟性、彈力性等のみを存し、單調無趣の有樣なりせば、人は思想的に如何に萎縮したる肉塊たるに止つたかも知れぬ。中世の基督教徒が嚴重なる禁欲生活を持しつゝ猶ほ人間の精神を維持し得たのは、彼等を圍繞する天地萬物が樣々の色と形とを彼等に示して居るが爲めであるとは誰かの書にも出て居る。

ナニ遠く斯かる事を詮索する迄も無い。一方に生活難の壓迫が益々度を加ふると稱せらるゝ今の世に、奢侈贅澤と云ふ事が驚く可く進歩するは何の爲めか、思想生活の之を要求するが爲めである。如何に熱心なる政治家が二宮宗を鼓吹しても奢侈贅澤を絶滅することは出來ぬ。一時多少は其の增長を制止した所で、思想生活が其無味無慰藉を耐へ得ぬ時に至れば又反動が起つて一段の激進を來すのである。

要するに思想生活を解釋し得ぬ經世家は眞の經世家で無い、經世家として永く其位置を支へることは出來ぬ。之と同じく、思想生活に於て、發展せぬ國民は文明に耐へ得る國民でない、文明の進歩を單に物質的進歩である如く合點したのは十九世紀の舊思想である。文明の進歩は全面が思想生活の進歩で物質的進歩は之れに手を引かれて進んで來るのである。

余は特に今の青年の爲めに之を云ふのである。物質的とか肉體的とか云ふ如き方面に於ては彼等は如何にも囚はれた生活である、之を救ふ道も有らうけれど仲々容易でない。願くば彼等の爲めに、せめては思想だけの解放をも得させ度い。若しも思想の解放を忘れば、彼等は活きたる機械と爲ること は出來る、活きたる『人』と爲ることは出來ぬ、人は人として生れて居る、機械として生れて來ぬ、之を機械とするのは其の性を挫くのである。機械と爲つて何れほどの壽命を保ち得るか、機械として

は到底、死せる機械、卽ち工學家の作り出す鐵製の機械とは競爭し得ぬ。

此點から云へば文明が人をして、物質生活の上に機械たらしむると同じ比例を以て人は思想生活に於て、人らしく有らねばならぬ、自由にあらねば成らぬ、機械で有つてはならぬ、主人で無くては成らぬ。單に物質生活より見れば文明は人を機械とし奴隷とする。其代り思想生活より云へば文明は人を主人とする自由とする。若し此調節が實行されずば文明は呪ふべき者である、祝福す可きで無い。

四、危險思想とは何

我國の青年は、思想の上に大なる壓迫を受け束縛を受け干渉を受け、其結果として、物質方面に萎縮する如く、精神方面にも萎縮しつゝある。是は實に捨置難い事件である。先づ青年自ら、自個の思想上の窮屈を知り、其自由を恢復する心を起さねば成らぬ。

其第一は『危險思想』の名を以て多くの新說が青年に禁絕せられる事である。凡そ思想に對して危險呼はりをする當局者の頭ほど時勢に後れて而かも有害なる考へは無い。

尤も余とても全く世の中に『危險』に屬する思想が無いとは云はぬ。假例へば青年に向つて猥褻なる思想を吹込むが如きは危險である。何故ならば青年と云ふ者は所謂る青春の血の燃る年頃であつて、爾なきだに猥褻の方へ心が傾き易く、其れが爲めに身を誤る如き恐れが大いにある、其恐れの有る所

へ猥褻の思想を吹込みては、燃えんとする火に油を注ぎ猶は煽り立てる樣な者であるから、之は危險と云ふ事が出來る。次には其他の反道德なる思想である。道德と云ふ者は靑年のみで無く、大人さへも疑問が多く又之を窮屈に思ひて、動ともすれば、之を破り之に背くと云ふ樣な誘惑に掛るのである。之に對して反道德の思想を鼓吹するは、是も矢張り、爾なきだに傾き行かんとする惡傾向を助長するのである。故に之は敎育者とか爲政者とか云ふ者の注意す可き所であらう。約めて云へば猥褻と云ふ者も矢張り不道德の一で有つて兩者ともに實は同種類である。此種類の思想は人の人格を下落せしむるのである。人格と云ふ者は中々向上し難い者で、人間生涯の努力は自個の人格を向上せしむることを目的として居るとも云ふ可き程の次第であるのに、悲しい哉、坂に車を押す如く、少しの油斷又は口實が有れば直に後へ戾らうとする傾向がある故、總て人格の墮落に口實を與へる如き思想は、場合により危險と目すべきである。けれど實を云ふと此樣な思想は世界の思想界に、思想として獨立しては居ないのである。

我國の當局者が『危險思想』と目するのは斯く人格に關するのでは無い。人格に屬する點、即ち道德の思想に於ては當局者自らが殆ど危險思想の本家とも云ふ可き有樣を爲して居る。死んだ伊藤公の如きは極端な例であるかも知れぬが、猥褻的の不道德に掛けては全く獅々と綽名された程の次第で、

社會の風教に何れほどの害を及ぼしたかも知れぬ。斯かる行ひの有る人が、天下萬人の手本とも成る可き高き地位に居て、誰憚からず汚行を遂げる樣では、社會の風紀が健全に保たるゝ筈は無い。若し春秋の筆法で云へば、大久保町に出齒龜の出たことさへ伊藤公の罪であると云はれ得るかも知れぬ。幸ひにして伊藤公ほどの品行的墮落者は其後は無い樣であるけれども、其れでも當局者の中には殆ど青年の風上に置かれぬ樣なのが幾多もある。若し廣い道德的の見地から云へば、今の政治家の中には、目的の爲に手段を選ばずと云ふ如き反道德の思想を以て公然と其實行を示して居るのが多い。啻に多いのみで無い殆ど滔々皆然りとも云ふ可きである。是等は實に本末顚倒の甚だしき者で、若しも世に危險思想を取締る可き必要が有れば、政治家の斯かる思想と斯かる實行とを取締る可きである。余は決して我が國をば、他に比して甚だしき不道德なる國であるとは思はぬけれど、若し我が國に不道德の泉源が有るとすれば、其れは政治家である。政治家の私行と云ひ私心と云ふものが、時々刻々に不道德と云ふ無形のバチルスを作つて思々念々に之を傳播しつゝあると云ふてもよい、政治家の此かる行ひより外には、青年の前途を危險にする如き思想とては見當らぬ。

然るに今の爲政者は自家の斯る心事や言動の外に危險思想が有ると云ふのである。是も其の危險の本性を見顯はせば總て彼等自身に在る。如何なる思想でも彼等自身に都合が惡ければ直に危險思想と

呼ぶのである。又危險ならぬ思想をも危險として壓迫するが爲めに危險なる手段を取るに至らしむるのである。余は此點を充分明白にして置かねばならぬ。讀む人にも心を潜めて熟考して戴き度い。

本來、國家と云ふ者は、永い歷史に由つて作らるゝ者で有つて、而して其歷史は其國特有の人情や習慣や風土の關係や種々樣々の動力が因と爲り果と爲つて、揉み〳〵て出來上つて居るので、宛も竹籔の竹の根のコンガラかつた樣な者である。一方を引けば一方が邪魔をする、仲々容易な力で之を變動させる事の出來る者で無い。勿論人心は十人十色であるから、色々と突飛な新說も現はれて來る事は有らう、けれど其新說が國家の組織に影響して國家を危ふからしむると云ふが如きは、有る可き譯の者で無い。何の樣な突飛な說でも、干涉せずに閑流して置けば、自ら消えて了ふ。實は突飛な說ほど、實社會に根據が無いのである。根據が無いのに唱ふるからこそ突飛に聞えるのである。其れ故、突飛な說ほど世を動かす力が無い。若しも眞實に社會に根據を持た說ならば、當局者が干涉したとて社會の根據には勝たれぬ。其樣な根據の强い說は當局を跳飛ばしても、自ら實行せられる。之を約めて云へば、根據の無い說は捨て置いても消滅する。根據の有る說は干涉しても消滅せぬ。一旦消滅した樣でも何かの機會を得れば又現はれて來る。故に無根の思想には干涉する價値が無い、有根の思想は干涉しても功能が無い。

突飛な思想か國家にブツ附かるのは宛も、驟雨が岩石の面を叩く樣なものである。一時は劇しくも見えるけれど夕立雲か去つて了へば跡方も無く消えて、岩には何の損害をも止めぬ。其れを恐れて、驟雨に反抗し、幾度岩を拭ふて見た所で、夕立雲の去らぬ中は無益である。

英國は誰も知る如く思想の自由の昔しから發達して居る國であるが、樣々の新説家が名論卓説を吐いて見るけれど、實際には仲々行はれぬ。其れで或る人が英國を罵り、此樣な頑固の國は無い、斯くも新説を採用せぬ樣では必ず時勢に後れると云つた。是れに答へた人の説が面白い、若し一々新説に動かされる樣では英國は昨日と今日と變り、今日と明日と變り、旋轉して止む時が無い、即ち新説に動かされねばこそ英國が有るのだ、國家は常に新説よりも強いと云つた。實に其通りで有る、若しも新説よりも弱い國家ならば人民の安固を保障する力が無いから亡びたとて惜むに足らぬ筈であるが、扨て國家と云ふ奴は常に新説より強い。新説が跋扈しても打捨てゝ置けば其中に他の新説が出て前の新説を消滅させて了ひ、他の新説は又他の新説が出て消滅させて了ふ。此樣にして國家には常に新説が存して居るけれど宛も岩の上を水が流れて行く樣な者で、岩其者には害は無く、却つて岩は其れが爲めに潤されて活々して見える。人民は其新陳代謝して行く新思想に潤されて慰藉をも得れば、更に深遠なる思想の材料をも得て自ら進歩もし調和もするのである。

然るに此の明白な理を悟らず、新説が出れば直に恐れを催し、ソレ危險だ、ヤレ過激だと騒ぎ立て、之に壓迫を加へやうとする。即ち其の壓迫が危險を作り出すのである。新説は決して危險で無い、壓迫が危險なのだ、世に危險思想と云ふ者は無い、唯だ危險壓迫があるのみである。我國に行はれた社會主義の運動などが、其實例である。今の世に於て社會主義的思想の我國へ入込まぬ事は到底望むとは出來ぬ。泰西から輸入さるゝ經濟的又は社會政策的の書には大抵社會主義的の思想が含まれて居るではないか、而して其思想は帝國大學にも入り法律家にも入り、實際の都市政策などにも混入する。細かに云はば東京市の此頃の政策の中には社會主義から出た事柄が何れほど澤山に有るかも知れぬ、けれど別に危險は無い。社會の常識とか社會の良心とか云ふ者が、其説を淘汰し、改鑄し、實行す可き部分は實行し、有害なる部分は捨て、我が社會の實際に合する樣に變形させて行くのである。今の形勢では我が東京市などは、ベラミーの『ルッキング・バックワード』に書た事よりも以上を實行する積りかとも疑はれる程である、是に由って見るも危險は其主義其思想に在りはせぬ、當局者の壓迫に在る。壓迫すれば其主義を唱ふる人達が絶望して怨嗟の聲をも發し、世間の同情をも引き、果はデスペレートにも成り、飛んでも無い事を目論むに立到るのである。此前の帝國議會が社會主義に對する當局者の責任を問はんとしたなどは大に道理の有ることである。又近頃は英國の同盟罷工などを社會

主義の害であると言ひ做す人も有るけれど、雇主が被雇人を壓迫すれば、被雇人は必ず同盟罷工を實行するに至るのである。是れは社會主義の有る無しには關係せぬ、詰る所は壓迫が同盟罷工を産出すので、即ち同盟罷工は、小さな商店にも在り、仕事場にも學校にも在り、支那にも日本にも在り、昔も今もある。總計して斷案を下せば、危險とは即ち人の相當なる自由を壓迫する事である、思想や主義に關係は無い、相當與ふ可き自由を與へずに壓迫を加へれば、常識ある人が皆危險人物になり、常識其者さへも危險思想となるものである。即ち危險思想の本源は思想に壓迫を加へる當局者の政策である。何の場合にでも、社會に危險思想が若し現はれたとすれば、直に其原因を當局者の政策に求む可きである。

五、國家思想と社會思想

余は青年が政治思想を奪はれて居ることを、特に重大な壓迫であると斷言する。試に思へ、日本は忠君愛國を國民道德とする國柄では無いか。忠君とは君主に忠なれと命ずるのである。其忠君の眞髓たる「君主」と云へる語は多量に政治的の意義を含んである。若し政治の何たるやを知らねば君主の意味は分らぬ。君主の意味の分る可き政治其者の思想を杜絶して、而して忠君を說くは無智なる盲目的の愛を起さしめんとするにも當る。更に愛國とは國家を愛せよと云ふので、國家とは即ち社會を政治的

に見た意味である。政治を離れては國家は無い。然るに政治を知らしめずして國家を知れと云ふのは無理である。國家を知らしめずして之を愛せよとは矛盾では無いか。若しも國家から政治的の意味を抜けば、單に社會である、國家では無い。近來我青年に政治の思想が薄らぐと共に、國家と云ふ念が失せ、國家をば唯だ社會的意味にのみ視る傾向が大に增して來た。社會となれば即ち世界共通のもの即ち單に人間の生活團隊であつて、ヨシヤ國家は亡ぶるとも亡國の恨みなどは少しも感せぬ。其實例は今の朝鮮人などでも分る。彼等は社會思想は有るけれど、政治思想は無い、隨つて國家の何たるやを能くは解せぬ、故に其國は亡びても其社會が存して自分等が社會的に生活を續くることさへ出來れば平氣である。又猶太人などが國家思想の無い一例である。國家思想が無ければ世の中を單に社會としか見ぬに至るが必然である。斯うなつては社會主義は起るけれど、國家主義は起らぬ。我國の當局者は盛んに國家思想を鼓吹しつゝ、政治思想を禁絕して、國家主義の觀念の起る可き本源を塞ぐとは何と云ふ心得違ひであらう。又一方に社會主義を忌み嫌ひながら、社會主義より外の主義の起り得ぬ様に、青年の腦髓を政治的盲目にする如き手段を取るとは何と云ふ間違ひであらう。當局者の間違ひは自業自得として只だ笑止と云ふ外は無いが、斯かる笑止なる當局者の爲めに、政治的盲目と爲さるる青年の境遇は實に憫れである。

六、日本の政府と國民

何故に當局者が斯かる手段を取るかと云へば、無論彼等は政治思想を一種の危險思想と見るのである。是に於て讀者は余の前言を思ひ出さねばならぬ。思想には決して危險は無い、思想の危險らしく見ゆる場合は必ず其原因が當局者即ち壓迫者に在る譯ゆゑ、此場合も先づ當局者を見ねばならぬ。

我國に於て政治思想が果して危險な者であるならば、其危險は思想に在らずして當局者に在るのでは無いか。斯う思つて能く〳〵見ると果して危險が當局者に在る。思想が危險で無くして當局者が危險なのだ。我國の當局者は誰れも知る如く、藩閥の餘毒を其儘受け繼いで、所謂る官僚團なる者を形作つて居る。之を事實の上から云へば、長州薩州等の人が維新の大革命を行ふて其結果として、宛も戰利品を鹵獲するが如くに政權を鹵獲し、殆んど政府全體を占領し、則ち政府の一切の官職を自分達の手に占めて了つた。此有樣を比喩すれば宛も何千萬と云ふ大多數の國民の團隊の上へ、少數なる藩閥の人達が馬乘りに乘つた樣な者である。國民と云ふ大きな團隊が馬に成りて小い藩閥が乘り人と爲つた。何の場合に於ても大いなる馬の背へ小な人が乘るのは、多大の愉快を伴ふて居るので有らうが、愉快と同じ分量に又危險をも伴ふて居る。馬が暴れたならば跳落されもする、勿論當時藩閥者の心は決して政權を戰利品同樣に心得ると云ふが如き私心に滿ちて居たのでは無い、行き掛り上、自分達が

國政を執ら無ければ、政務が旨く行はれぬと云ふ心配が有つて、即ち國家を愛する至情から迷惑ながら政務を引受けた者かも知れぬ。併し此迷惑には愉快も權勢も利祿も伴ふて居るから、馬にされる人民一般の地位よりは辛抱が爲し易い筈である。當時は仲々に立派な政策を行ふて、國家の進運を補助したとも認めねば成らぬ、けれど其中に段々と人民も目が覺めて、乘人と自分とを見較べる樣になつた、而して爲と見較べて見ると、馬にされた自分達も生れながらの馬ではない、堂々たる日本の國民陛下の赤子である。而して乘て居る彼れ等も生れながらの乘り手で無い、矢張り同樣なる日本國民であり　陛下の赤子である。斯う氣が附けば、何故に彼等即ち乘り手と、吾等即ち馬と位置を替へることが出來ぬで有らうか、との疑ひが起きる、是れが即ち政治思想の初發である。

此意味から云ふと政治思想なる者は、國民の政治的覺醒である。國民たる自覺の現はるゝ始めである。此の自覺、覺醒の少し萠芽した機會に乘じて板垣伯の如き先覺者が馬の側に立つて少しばかり跳ねて見た、上に乘つて居る藩閥者は、之は危險だと驚いて、グッと手綱を引締めた、馬は益々苦しい、益々反抗の勢を現はす、又も其の機に乘じて大隈伯の如き先覺が、馬の側に立ち又も一跳はねて見た、乘り手の方は更に又手綱を引緊めた、引緊むれば引緊るだけ、馬は更に又跳ねる力を强めやうとする、藩閥は益々危險で、殆ど手に合はぬ場合と爲つたため、終に帝國議會を開き、馬に多少の自由を與へ

る事とは成つた。

けれど、馬の方は多少の自由だけでは滿足せぬ。自分が今まで乘られて居たのだから其報酬としても乘る方の側へ加入したい、是れが即ち小く云へば當時流行つた獵官運動である。大勢の方面から云へば責任内閣、政黨内閣、議院内閣と云ふ主義の運動である。運動は間斷なく引續いて居るけれど、今以て其の目的を達せぬ、乘人は依然として乘人、馬は依然として馬である。

のみならず乘人の方も段々に了見が違つて來た、最初は愛國の至誠で以て乃公出でざれば、蒼生を如何せん、と云ふ樣な公明の心で有つたけれど、永く乘て居れば段々と乘り心地が好くなるに付けて、今は其地位が戀しくなつた。即ち最初は政權をば必ずしも維新戰爭の鹵獲品とか戰利品とか云ふ程には思はなんだけれど、後には、艱難辛苦を經て鹵獲した此政權をムザ〳〵人手に渡して成るものかと云ふ樣に私が出た、此の私心こそは眞成の危險思想と云ふ者である、即ち危險の正體である。

能く云ふ言葉であるが、政治は天下の公器である。公器を私すると云ふほど危險なる思想は無い。而かも啻に思想のみに止まらず、彼等は之れを實行して居るでは無いかと云ふのが、無理も無い馬の言分である。斯く公器を私すると云ふ思想を事實の上に實行して居る以上は、民間の政治思想が彼等に取つて非常に危險な如く思はれるのは怪むに足らぬ。即ち政治思想なる者は、我國の此の特別の事

情の下に於ては、馬が吾々は馬で無いと云ふ自覺であり、國民的の覺醒であつて此覺醒が進めば進むほど乘人を跳落しに掛るのであるから危險ならざるを得ぬ。けれど其危險とは單に乘人に取ての危險で有つて、國家に取ての危險では無い、若しも此乘人が跳落されて、國民多數の贊成を得た者がアベコベに乘人になると云ふ如き制度と爲れば、即ち國家に大なる進運を來すのであるから、實際國家に取つて危險なのは今の乘人の思想なんだ。余が危險思想の本源は當局に在ると云ふは之が爲めである。

七　憐れむ可き駄馬

序なれば、玆に此の乘人が國民に對して其危險なる思想並に實行を永く維持せんが爲めに、如何なる手段を取り來つたかを一瞥しやう。彼等は自分が永久に乘人たる地位を失はざらんが爲には國民を永久に馬たる境遇に沈ませて置かねば成らぬ。之を爲すには憲法の精神をも其通りに解釋し、凡そ日本の國民は馬たる位置を脫却すべき者で無いと言做さねば成らぬ。彼等は果して之を爲した、即ち我憲法を獨逸流に解釋し、我國には人民が乘人と爲る責任內閣や議院制の內閣は認められぬと云ふのである。甚しきは此解釋を主張するが爲めに政黨をまで作つて『吾黨は帝室內閣を主張するのである』とさへ云ふに至つた。斯くまでも國民を馬の位地から脫せしめ度く無いとは、能く〳〵の事である、國民の爲めには甚だ危險な慾望と云はねばならぬ。危險思想と云ふも危險慾望と云ふも危險に於て異り

は無い、同じ國家を害するのである。猶も彼等は此の危險なる解釋を支へんが爲めに、學者をまでも自分の畑へ取入れて了つた。即ち帝國大學の學風を獨逸風にし、獨逸の壓制政治を謳歌する樣に學者の頭を捻ぢ曲げて了つたのも之が爲めである。勿論大學は政府の費用を以て支辨し其の講師とか教授とかには給金を與へて有るのだから、何の樣にも制御することが出來る。今では大學のみでは無い、總ての官立學校が同じ樣な思想に頭が固まり、入學する青年へ總て其思想を吹込み、日本國民は永久に馬たる地位から脫することの出來ぬ樣、チャンと國憲で定まつて居るから、政治思想をなど懷いたとて無益だと云ふ樣に思はせる。唯だ私立學校の中には多少此思想を奉ぜずして、ナニ日本國民は馬では無いと云ふ樣に教へるのも有り、獨逸風に對して英國風の憲法的解釋を用ふるのも有るけれど、其樣な學校は一方ならぬ壓迫を受ける、實に政府の力即ち乘人の力は豪い者で、馬の如何なる部分をも悉く絆攻に、手綱せめに、鞭ぜめに攻め附けて有るから、若し私立學校が之に反抗して徵兵猶豫の特典を取消されても廢校の悲運に陷らねば成らぬ。其上に文官任用令など云ふ樣な者も有つて私立學校は窘められる。官立學校を出た者で無ければ乘人の部內へ取入れられる事が困難である。斯かる事情の爲めに私立學校とても泣く〳〵其壓迫に屈從し、國民は馬也の思想に化せらるるのである。

斯くても猶悉く國民を馬にして了ふ譯には行かぬ。多い國民の中には多少の氣慨を存して思想の獨

立を維持する者も有る。之に對しては選擧干涉など云ふ手段を以て其樣な人を政治上に出さぬ工夫をする、又黃金を播き散らして買收する。凡そ帝國議會が開けて以來、藩閥の人達が、選擧干涉や議員買收などに費用を使ひ捨てたのは何れほどで有らう。今日我が政界が腐敗して、議院政治らしく思はれぬ樣に成つたのは皆其源を藩閥團隊の危險思想に發して居る。之れでも思ふ通りに行かねば所謂る探偵政治なる者を行ふて、民間の政治論者などに一々探偵を附け、其行動を不自由にし、折さへ有らば黃金や威力で誘惑と壓迫とを兩面から加へるのである、今日民間に在る人士で、警視廳の注意人物の符號を附けられて居る人が何れほど有るか知れぬ、多分は、國民を馬で無いと思ふ人は大抵注意人物であらう。而かも藩閥の團隊は是れだけで未だ安心せぬ、國民の自覺が少し强く成つて來ると外國方面に事を起し、國民の注意を其方に轉せしめ、甚しきは戰爭をまで始めるのを辭せぬのである。彼の明治廿七八年の日淸戰爭などは全く國民が馬の境遇から脫するのを防ぐ爲めに始めたのである、幸ひにして其結果は好かつたが、國民は馬たる境遇を脫することが益々難くなつた。卅七八年の日露戰爭は其樣な目的に出たので無いけれど、其結果に於て國民が馬たるの地位は又益々甚しくなつた。其以來軍人の地位はズット高まる、社會全體が殆んど軍隊的の階級制度となつて人民の負擔も甚だしく增加した、即ち今までは、馬は馬ながらも猶は乘馬で有つた國民が、下落して駄馬になつた、

荷馬になつた、併して重い重い重荷を背負せられても如何ともすることが出來なくなつた。其上に政治思想は愈々益々青年に禁せられ、道德の說き方までが唯だ從順を主とする者となつて、慷慨悲憤など云ふとは殆んど罪惡であるかの如く見做さるゝに至つた。成るほど荷馬となれば成る可く從順なのが用ひ易い、道行く荷車の馬を見ても去勢されて居るのが多い、余は此ごろ日本の道德を去勢道德と名けて居るが、全く去勢である、男らしい意氣は少しも無い、少しも賞揚せられぬ。何と面白い世の中では無いか、人民が馬になるさへ餘ほどの奇觀であるのに、其馬が荷馬に下落して到頭去勢されて了つた、是では乘人も安全で有りさうに思はれる。

八、屬吏の王國

馭し易いのは去勢した荷馬である。之を攻むるには轡が有る、手綱がある、鞍がある。鞭がある。五千餘萬の此荷馬の上に乘り、政權を一手に占めて居れば是れほどの安全は無い樣に思はれるが、サテ顧みて國家は？と見ると、肝腎な所に悲しい缺陷がある。其れは藩閥の先生達が年々に年を取ると云ふ一大事である。赤兒も三年たてば三歲になると云ふが、赤兒で無い男盛りの先生は三十年たてば老人になる、是は悲しい、甚だ悲しい。藩閥の輕業師とか綽名せられる桂公爵は明治も既に四十四年と云つた相である。明治も既に四十四年と云ふ聲は、元勳も既に七十歲を過ぎたと云ふ聲と同じ樣に

余には聞ゆる、維新の革命に三十前後の男盛りで有つた元勳達は明治四十四年四十五年には大抵七十を越えて了つた。山縣も然り井上も然り松方も然りと云ふ樣で、中には此坂を越切れずに他界せられたのも有らう、斯うなりては此後は誰が相續する。

此相續者が即ち官僚團である、官僚政治とは英語のビユロークラシイを譯したとも云ふが爾ではあるまい、オフ井ジヨクラシイと云ふべきである屬吏政治である。即ち藩閥に隨屬する官吏の一團がスペンサーの謂ふオフ井シヤルドムを爲して居るのである。オフ井シヤルドムとは『官僚王國』とか『屬吏王國』とか云ふに當る。即ち今は全く『屬吏王國』を爲して居る。儼然として無形の城廓を構へ、屬吏以外の者は門內に入るを許さずである。而して其屬吏たるや文官任用令で練り固めたので、奏任官何等が幾年經れば幾等に進み、又幾年經れば勅任になると云ふ樣に、官界の階段を一段づゝ氣永く昇つて來た人達で、本を糺せば去勢されたる官立又は準官立の學校から出、所謂る吏務に老いて局長次官などに登り、死人の靴を狙ふ樣に、元勳の凋落を待て居る團隊である、此の團隊が順々に相續するであらう、其れが順序である、けれど、此樣な人達に、國家の重きが背負切れるか何うか。我國の國是は維新以來、開國進取と云ふことに根本が極つて居る。又今の世界の大勢から云ふても、開國進取の大なる國是で無ければ、世界の進運と伴ふて行くことは甚だ覺束ない。之を爲すには世界に於ける

第一流の政治家に匹敵すべき政治家を出さねば成らぬ、斯かる政治家が官僚王國から出る筈は無い。官僚王國は去勢された人の中で最も從順な手合が集つて居るので、即ち其屬吏たるに最も適する所以で、大政治家たるに最も適せざる所以である。斯く觀來れば藩閥の元老達が、藩閥其者の壽命を永くせんが爲めに、成る可く國民より政治の思想を奪ひ、男子的の氣魄を奪はんとした種々樣々の手段は、金權的誘惑や、權力的威壓で以て其目的を達し得ただけ其れだけ國家の前途を誤まつたのである。若し早くから國內に自由の空氣を漲らせて後進者の政治思想を養ひ、男子的氣魄を養ふて置いたならば、藩閥やオフヰシヤルドムは疾つくの昔しに仆れたで有らうけれど、其代り國家は決して偉大なる政治家無きを悲むが如き不幸には陷らなんだで有らう。

今の勢では藩閥の元老は追々に凋落し、其相續者たる屬吏の王國からは眞の政治家は出ぬ、其の結果は何うなるかと云へば、矢張り議院の多數を占むる政黨の領袖が內閣に入ると云ふことに成る外は無い。即ち馬の內から終には乘人が出る事になる、是れが否應の云はれぬ大勢では有るらしい。けれど此の方面とても實は甚だ心細いのである、何故と云へば、政黨の方面とても領袖達は既に時代から捨てられんとする老朽の手合で有つて、其後に現る可き青年政治家が甚だ乏しい。余は固く信ずる、如何なる場合に於ても國家には青年政治家か無くては成らぬ、青年政治家が順々に功勞を積んで立派

な大政治家になるものである。所が我國の今日は青年たる者は政談演説を爲すことすら自由で無い程の有樣である爲め。眞の青年政治家と云ふものは現はれ出づ可き源泉が杜絶せられて居る。是れで青年政治家が何處から出るか、嘘も飾りも無く斷言する、我國の今日は青年政治家の生れ出る畑が無い。例之へば今日の政友會でも國民黨でも、今の領袖の後へ續々と澤山の領袖が顯れる見込は無い。成るほど三年經てば三歳になる後進の手合が段々成長し老成するは無論である、併し其れは單に、老いたる陣笠が出來るに過ぎぬ。老いたる陣笠が百人あつても一人の大政治家を代理することは決して出來ぬ。是に由りて之を觀れば、今の政府者も政黨者も青年に政治思想を禁絶するとに由て國家の後日の進運を害しつゝある者である。彼等に國家を思ふ誠意が有れば我國をば一日も早く思想の自由なる國と爲し、政治思想だの學術思想だのと云ふ不合理な區別を廢し、苟くも思想と名の附く者は、無差別に自由にせねばならぬ。念の爲めに說明して置くが、思想とは、實行と區別した名稱である。如何なる思想も言論に現はるゝので有つて、言論を絶對に自由にするとが即ち思想の自由である。我國では言論に區別を立て之は政治演説である。之は學術演説であるなどと種々に取締りの手心を定めて有るなどは、以ての外である。如何なる思想如何なる言論でも、其事が猶ほ言論に止まる間は自由にす可きもので、若し其れが實行に現はるゝに及んでは、始めて法律に觸れると觸れぬとの別を生ずるので

ある。實行は法律に取締つて有るので、言論だけは自由にし、其中にも政治思想などは寧ろ奬勵するほどの手心を取らねば成らぬ、さも無くば日本の立憲政治は發達の見込が無い、即ち日本が開國進取の意味を貫徹し、世界の進運に應じ得ると云ふ見込が無いのである。

九、青年の覺醒

以上述べ來りたる如き事情を見て、青年諸君は何と感ずるで有らう、苟くも諸君自ら、我れは次代の國民であるとの自覺が有らば、又我が双肩に國家の政治を擔はねば成らぬ時が來ると知らば、自ら政治思想を重んずるの心を起す可きでは有るまいか。世界の進運は驚く可き速力を現はして居る。最早や我國の政治は老人の思案にのみ一任して置く事は出來ぬ。青年は世の腐敗を防ぐ鹽である。國家を進運に誘き行く原動力である。即ち進歩の動機であるのだ。今の老年政治家が如何に世を憂ひた所で、彼等の頭には進歩よりも先づ情實が先に立つ、情實を打破して眞に革新を行ふなどと云ふ實力は決して彼等には無い。而かも世界の進歩に後れざるだけの革新を常に行ふて行かねば日本は世界の競走場裡に於ける落伍者と爲ることを免れぬ。今既に日本の位置が如何に落伍に瀕して居るかと云ふことは姑く說かぬが、藩閥の老政治家や官僚閥の失勢政治家が認知するよりは更に甚だしき程度に於て日本は落伍に近きつゝあるのである。之を刷新一番して大なる力を出すのは、天を衝く如き青年の意氣に

待つ外は無い。然るに悲しい哉、青年自ら去勢せられ、政治の圏外に放逐せられて、其然るを曉らぬほどの從順な冥晦な域に退きつゝあるとは、實に由々しき大事ではあるまいか。

諸君は歴史を讀むであらう、歴史の首なる部分は過去の政治では無いか、單に學問の目的としても現在の政治を研究することは過去の政治を歴史に由りて研究するより有益である。政治は人に大なる志を起させる、昔しの學生や青年が志を立たのは總て政治である、青雲の志である、今では之を野心などとも云ふけれど、名を竹帛に垂れると云ひ汗青を照すと云ひ、救世濟民の任に當ると云ふが如きは實に立派なる心では無いか。此心は總ての雄大なる意志の泉源であり、人生意氣に感ずと歌はれた意氣の泉源である。諸君は此泉源に接せずして、如何にして青年の天性を滿足せしむることが出來るか。實に諸君は此の雄大なる戰場から閉出されて居るが爲めに、心が次第に萎縮して、樣々の煩悶をも起し、所謂る思想の糧に飢ゑて、若い身そらを、或は戀愛の奴隷と爲りて失戀に泣き、或は藝術に隱れて世に無用の人と爲るのである。藝術も或る程度までは必ずしも無用とは云はぬけれど、眞成の天才は格別とし、通例の青年に對して決して藝術が滿足を持來るものではない。其證據には藝術の懷に逃げ込んだ幾多青年の叫びは、現實に觸れ度い、現實に觸れ度いと云ふに在るでは無いか、現實とは何であるか、現實の最も大なる者、現實の最も現實なるものは政治である。政治の一波一瀾は日々

時々刻々に起伏して止む時が無い、之を思想の對象として、身を之に投ずれば、大社會の脈搏は直ちに我が心臟の一鼓一動と調子の合する事と爲る、人生に是れほど愉快なる現實は無い、人として世に生れたからは我が心臟の鼓動を以て直ちに社會の脈搏と爲し、社會と共に喜憂し、我生命を社會の生命と爲すに在る。眞に能く茲に至れば、身は坐ながらに英雄であつて、他日世界の英雄と歷史に肩を並べるのである。此境遇は今の去勢された人達とは語り易からずであるけれど、茲に至つて人生に何の遺憾がある、茲に至らずして人生の眞味を解しやうなどとは無益である。

今や我が青年は、肉體に於て年一年に劣下し萎縮し行くことは徵兵檢査の上に著しく現はれる所で、其原因は種々有るけれど精神的思想的の萎縮が確かに其の一である。意氣天と共に高かる可き青春の時代に於て、其の意氣の源泉たる實社會に接觸することを禁絕せられ、道德的に去勢せられて、肉體のみ、獨り發達せんことを求むるは無理である。諸君若し此邊に思ひ至らば自ら奮起して思想を自由にせねば成らぬ。既に失はれたる天國を回復せねば成らぬ。分り易く云へば一切の思想の自由殊に政治思想の自由を得ねばならぬ。若しも青年諸君にして永遠に政治思想を回復せざれば、日本の政治は後繼者を得ぬが爲めに如何の程度に沈淪するやも知れず、藩閥の馬たる日本國民の境遇は更に官僚の馬として永久に鞍の下、鞭の下に立たねば成らぬ。余が諸君に囑望するは實に深いのである。深けれど

も是れは當然に青年に囑望すべき所の者で有つて卽ち余の聲では無く國民一般の聲である。知らず何の國の青年が廣く國民一般より此の囑望を受けぬで有らう。若し諸君にして獨り此の囑望を受けぬとならば諸君は實に世界の青年に恥づ可きである。更に此の囑望を受けながら自ら政治思想を回復する能はず此囑望を空くする程ならば愧死すべきである。終に臨み余は切に諸君の精神――氣魄の健在ならんことを祈る。（明治四四・一〇）

人尊主義とは何ぞ

人は尊貴なり、尊貴は人なり、全宇宙に人よりほか尊貴と云はる可き者あらず、敢て人身自ら借して尊貴と云ふに非ず、尊貴其れ自身が人其れ自身なり。

此の如き思想を人尊主義と云ふ、若し宗教的の所論に從ひ人の上に神ありとしても人の尊貴は一毫も減ずること無し、其場合には、人卽ち最も神に近き者とせらる可く、最も神に近き者卽ち最も貴き者とせらる可きが當然なればなり。

此思想を根本に立てざれば人生の多くの問題は解決に達する能はず、達すれば必ず誤りたる解決ならん、假へば『人は何故に生を愛せざる可からざるか』との問題の如きも人其者が尊貴其者なる以上

は、如何なる理由又は都合ありとも尊貴を害す可からず卽ち生命を大事にせざる可からざるなり、若し人尊主義を立たせざれば、人が自ら我が都合にて我が生命を捨つるのに、是も非も有るべきに非ず、持主が不用なる品物を人に與へ又は拋棄すると同一の理由にて論ず可き事と爲り、詰り持主自身の氣に入りたる方が宜しと云ふに歸着せん、人の自殺を止むるが如き口實は何れの所よりも出で來る能はざらん。

道德の一切の問題が之と同じく單に當人の快樂をのみ大切とする外は無きに至らん、虛無主義や此頃の自然主義者流の如き『自個以外に何の權威をも認めず從て何者にも服從せず』と云ふが如き言分も、殆んど非難すべき手掛り無く、倫理道德は根本より蹂躪せられ了らん。

人尊主義を認めざれば人は單に進化したる禽獸のみ、少しも禽獸を脫したるに非ず、人の尊きは只だ其の進化したりと云ふ理由のみに存することと爲らん、さすれば人は禽獸に對して少しもソヷレーンテー(君主權)を有するが如き態度を取るの理由有らず、科學的に云へば人が最も進化したる生類たるは明かなり、然れども最も進化したりとの事實は、少しも進化せずして太古初めて世に出でたる時の姿を其儘に保存せりと云ふ事實に對して、ヨリ以上尊しとの理由を生ぜず、卽ち人は太古より今日まで連綿として存續せる最下等の動物よりも尊しと云ふ可からざるに至らん。

人の尊きは進化不進化と云ふが如き科學的問題とは全く別殊の事件なり、人はヨシ進化せざるも尊貴なり、此尊貴は事情の爲に増減せず、此上に如何に進化の度を増すとも今日より尊貴の度を増すこと能はず、人の尊貴は尊貴の程度に非ずして尊貴其者なればなり、程度を増減せらるゝ如き尊貴は比較的の尊貴にして絶對の尊貴には非ず、他の尺度にて計らるゝ尊貴なり、人の尊貴は是れに非ず、他の何者を以てするも計ることを絶したる尊貴なり、世に尊貴を計る可き尺度絶無なりとも人の尊貴は依然たり、要するに人は尊貴其者なり、世の尊貴と云ひ貴重と云ふ者は人を根本として人より測定するなり、人に取りて調法なる品だけが貴重なり、貴重とは人の尊貴に近づける程度にして、人のみは何物に近かずとも貴重なり尊貴其者なり絶對の價値なり。

此理は何の説明を附せずとも人の自意識に牢乎として存在せる筈なり、而かも本來、科學の範圍に入る可き事柄に非ずして純然たる倫理問題、否全く倫理の根本理たるが爲に、科學萬能主義に溢瀾したる今の人心は動もすれば此理此主義を度外に措き、須らく此主義より論ず可き事柄をも却て科學思想又は科學的定木を以て斷ぜんと欲す、近ごろ單純なる科學者が動もすれば倫理的社會的の問題に容喙し、利害幸福より外に是非を判斷する標準無きが如くに論じ去るは往々に見受くる所なるに非ずや、若し利益や幸福が價値の根本ならば人と禽獸とに尊卑の區別は有る能はず、人即ち禽獸たる可く、人

即ち人尊主義を信ず可からざることと爲らん、實際今の世には人尊主義を信ずる人多からず、尊貴とは利益と幸福との分量に應すべき者なりと思へり、人の尊貴が利益にも幸福にも關係せず其れ獨り本尊として特立せるを知らざるなり、余が人尊主義を說くは之が爲なり。

若しも利益幸福が尊貴の本ならば苟しくも利益と爲り幸福を來す可き行ひは總て貴しとせられざる可からず、然れども人は利益無くとも爲さゞる可からざる事あり、又幸福を犧牲にす可き場合も有り、其は最大多數の最大幸福の爲なりと云ふとも、人の行ひは最大多數の最大幸福を計算し又は問合せて發する者に非ず

特に物質的競爭の激甚なる今の世に在りては、人若し人尊主義を奉せざれば誤りたる心事に陷り誤りたる行動を發する場合も甚だ多かる可し、物質的の成功は人悉く獲取し得る者に非ず、此場合に自個の尊貴を恃まずば何を以て自ら慰藉するを得るや『我は不幸にして人ほどの幸福を得ず人ほどの成功を得ずと雖も而も人たるの尊貴を汚すが如き行ひを爲さゞりき』との自信ありて始めて自個が人の本領を守り得たるを知り苦勞艱難の中にも安ずべきに非ずや『余は斯くの如くにして成功したり』との今人の誇りは人間の總てを盡したるに非ず『余は斯くの如くにして尊貴を支へたり』との一念が更に大切たるなり、今の人は人の尊貴を解すること淺し、故に自個の尊貴を害するが如き（則ち自ら恥

づ可きが如き』手段を取りても成功せんとす、斯くては、若し成功の得べからざるに當りては單に絶望の底に沈まざるを得ず、物質主義は一人の成功者を出すが爲に萬人を不成功に終らしむる主義なり、『一將功成りて萬骨枯る』とは物質的競爭の社會全體を通じての眞理なり、人は斯の如き社會に立ち、成功不成功よりも更に偉大なる尊貴と云ふ者あるを信念せざれば居常煩悶し『何時になれば人間らしく成れるか知らん』との不安と疑問とに襲はれて休む時無かる可し、近時の懷疑や煩悶は多く是より來る、心に人尊主義を懷かざれば人にして人たるの心持あるを得ず、余は今の世を物尊人卑の時代として特に之を人尊物卑の本道に復らしめんと欲するのみ。（明治四三・四・一〇）

廿世紀の美學

『美』と云ふことに關し世界一般の思想が、美と道德とは別なりと云ふに在るは何人も知る所なるべし、美學者の多くは、道德の念を以て美感を妨ぐるもの丶一に數へ來れり、爾すれば道德は却て美の敵なるにも似たり。

我國に於ける美術家、文藝家、批評家の多くは略ぼ同樣の意見なるが如し、然れども吾人は私に疑ひありき。

此ごろ生理的心理學の方面より美學の上に投與へたる一個の假說は啻に吾人の疑ひを解くに足らんとするのみならず、恐らくは今後の美論をして、之に據らざるを得ざらしむる者なる可し、何となれば、是れ假說なりと云ふとも生理的心理學者が、今日までの研究に於て是認せざるを得ざる所の者たると同時に今までの美學者が、暗中に摸索し、捉へんと欲して捉ふる能はざりける『美とは何ぞや』との問題を根本より解說するに足ればなり、其說の大意に曰く

美感は快感なれども通常快感苦感と稱せらるゝ某快感とは異なり、之を感覺に就て云へば感覺の數元素が速に且安易に、且其感官に物の觸れたる感じ無しに、能く結合して而かも幾分の個性を存する場合に感せらるゝが卽ち美的の快感なり、之を感覺より以上の心理、卽ち知覺又は概念に就て驗するも亦同じ。

知覺に於ては知覺が、旣に存する概念の範疇に適合し、何等の葛藤無しに速に且容易に且努力無しに同化せば必ず美感を生ず、同化とは舊式心理學が聯想の法則に從て說きたる所の者なり。

之を概念に就て云へば論理上の矛盾無しに、旣に存する思想、情操、理想、倫理觀念等に同化する場合に高度の美感を生ず。

論理的矛盾あらば注意醇ならずして不快の感を爲す、故に『美なる人』の一の要約は數意志の發

動が前後揆一に調和し、義務の理想に合するに在ること勿論なり。

右は一人の説なりと雖も近ごろ生理的心理學者の多くが美感を説明せんことを勉むるは、美が一の快感たるに於て無論に其學の領分に屬するが爲めなる可く、其の所説の趨向が概ね此意に符合する者の如し、而かも此説は假説と云はんより寧ろ實驗説と云ふ可し。

之よりも更によく美感を説明する一説あり右の説と相悖らず、却て相須て能く美の理を明にすと雖も、只だ美の本體に接すること一歩近きだけ實驗の分子よりも假説の分子聊か多しとす、其説に曰く

内向神經の傳流が腦物質に傳ふる微震に――、總べての震動に調律ある如く――一種の調律とも稱す可き節ある可きは最早や定説の如く見做さる、此調律の或比例及び協和が快感を起し、此調律の比例の宜しからず協和の全からざるが不快感を生ずるは既に調律を認めたる上に於ては無論の事なり、而して實驗美學者の云ふ線の蛇曲や黄金截の比例、音波、色波の運び來る比例及び調和が内在の調律と合するが爲に美感と爲すとは、通例の快感不快感と同一理なる可し、道徳の美、智力の美、操行の美等が、美の缺く可からざる力たることは、此理にて説明するを得るなり。

此説が第一流の美學者に敷衍せられ、美學の多くの要點に應用せられたる評論は今現に吾人の机上に在り、其人の誰たるやは美學に深き世間の批評家先生達の夙く知れる所なる可し。

『道德は美を妨ぐ』とは、生理的心理學の今の如く發展せざりける前世紀の末頃までの美學思想なり、當時我國の美學家に尤も新しく思はれたる英派の快苦美學とても單に精力の消費と補給との割合と云ふが如き怪げなる論據を有するに過ぎざりき、唯だ獨逸派の美學は略ぼハルトマンに大成せられ、リーブマン、フォルケルト等に至りて殆ど美の一切の疑義を說く可きほど完全の形を備へたるも餘りに哲學的なる其本來の約束が美を生理的心理學に尋ぬると相稱はず却て英國派の學說の淺薄と笑はれながらも人に親しきの觀あるに一籌を輸するの恨み無きにしも非ざりき。

勿論或る點に於て心理學と直接に相隣れる美學が、今の世に於て資を生理的心理學に採らずして完成せらる可しと期待さるゝ謂れは有らず。

併し吾人とても右に揭げたる二個の說に既に心服せる者には非ず、唯だ今の批評家の多くが、ソクラテス時代より唱へられたる夫の、美を善又は功能又は適合等と混和せしめんとしたる說の既に亡びて唯だ其中の適合と云へることのみが今の世の粧飾的美術の論に纔かに面影を遺せるを見て『倫理的美學は既に破れたり』など一口に言去るの聊か早計に非ざる可きかを思ふが爲に、唯だ西洋雜誌の一節を抄錄し、倫理的美學は既に破れたるに非ず未だ現れざるなりとの注意を與へんと欲するのみ。

兎に角も吾人は美術の所謂る美が道德の善を無視することを徹頭徹尾の眞理なりと信ずること能は

ず、更にプラグマチズムの傾向などより考ふるも廿世紀の美論には善の加味せらるゝ傾きあるを認むべきに似たり、序でながら此ごろ米國にはプラグマチズムの派中に其主義と美學との關係を說きたる論者も有りと聞けば接手し披閱したる上にて評す可くば評す可し

我れの名は花ぬす人と立たば立て
たゞ一枝は折りてかへらん　（明治四一・六・二〇）

美に對する善の福音

（兩者相關する心的方面）

人の心を感と知とに峻別し『美』を以て感覺にのみ專屬する者の如くに論ぜる在來の美學が、道德を美の妨害物なるが如く見做し、甚だしきは人をして今の自然主義小說家の或者等の如く道德を蔑視するの態度又は言說を肯てするに至らしむるは論理的必然の結果なり。

然れども、思へ、篤と思へ、美と善とを全く別にし、殊に動もすれば相敵し相害する者とさへも爲すことが、如何に美の範圍を狹くし美の價値を卑くし美の尊貴を汚損すること甚だしきやを、斯の如き思想は、到底實際と大なる衝突を生ぜずには終る能はじ、現に此の如き說を唱ふる者等は、其說の

爲に現實と衝突し、社會を悲觀し、無解結とし、自ら深痛なる『悲哀』などを唱へて泣きつゝあるに非ざるか。

美の歷史に於て、何の時代に美が善と衝突したるや、美は常に一代の善の思想と相助けて來りたるには非ざるか、藝術に現はれたる大なる美は常に大なる善の思想に氣呵せられたるに非ざるか、藝術の美の泉源とも云はるゝ宗教は大なる善の思想にあらざるか、其時代の道德心の發現に非ざるか。

美と善とを峻別する思想にては、美を價値とし善を僞とするなり、美が若し善と衝突せば、美を捨てずして善を捨てんと欲するなり、美を取り善を捨つるに於て一刹那の顧慮も躊躇も容赦も無からんとするなり、其說に曰く感の範圍が價値の世界なり、知の範圍は客觀なり、美は即ち價値其の者にして道德は第二義なりと、此思想も歷史的に系脈を引きて玆に到れる者なることは容易に察知し得べしとは雖も實は價値の何たるをも善の何たるをも知らざる者なり『我に快きことが即ち價値あることなり、美は我に快きなり、即ち我れの價値とする所なり』と云ひ『善は我れに苦痛なり、即ち我れは之れを無價値とせざるべからず、美の爲めに之れを捨てざる可からず』と云ふ、此の思想を推し行かば、藝術至上論とやら云ふ者とも爲るべく『藝術は藝術の爲』と云ふ意義を主張する根據とも爲るべし、然れども社會は之が爲めに破滅するなり『社會の破滅に歸趣する思想は眞理に非ず偃蹇の主義に非ず、

吾人は社會に向て主義を呼號し事理を説明するほどの學者が、如何にして斯かる思想を保支し得るやを怪むなり。

吾人は斯の如き思想と略ぼ併行せる旨意の美學が、其の組織の何の所にも一點の誤謬無かるべしとは到底信ずること能はず。試みに之を吾人の信ずる所と對比して社會先覺の判決を待たん。

吾人の信ずる所に由れば感のみ有りて『我』と云ふ自意識の有らざる生物に於ても感が即ち價値なりとは云ふ可からず、生存し繁殖し向上することが價値なり。只だ長く經來りたる進化の間に、感と價値と相合するに至りたるなり、詳しく云はゞ感と價値とが相合する如き偶然の幸ひを得たる生物が生存したるなり。併かし此の點は敢て爭はず、今は自意識無き生物に就ての論にあらで、立派に『我』と云ふ自意識の在る吾人卽ち社會人に就ての論なればなり、既に『我』ある以上は、所謂る價値とは我れの感のみが價値とする價値にあらで感をも意をも知をも合せたる綜合全一の我が價値とする價値なる可し、卽ち價値を感ずるのみならで、感じもし觀念もし判斷もし決意もし、種々樣々に我が總體の心にて研究し終に『此の者は我に對して價値あるなり』と判斷したる其の價値が眞の價値たるなり、此の價値は勿論美には非ず、善なり、吾人は善を以て價値と爲すなり、價値ありと云ふことが即ち善なりと云ふことなりと爲すなり、然らば美とは何ものぞ、美とは價値に非らず、善の標準に照ら

して價値の程度を定めらる可き者なり、即ち美は比較的の價値なり、善は絶對の價値なり、善即ち價値其者なり。

故に美が若し善に合せば、其の善に合する點だけを尙揚すべし、美の中に若し善に合せざる點あらば其點を捨つ可し、美の全體が善に合せざれば美全體を捨つ可く、全體が善に合すれば全體を尙揚す可し、是れ吾人の所見なり、在來の美學の說が必ずしも之に合せざるは勿論なり。

合せずとも吾人は之を主張せざるを得ず、之は人間の本義にして、之を捨つるは人間の墮落なればなり、然れども實は合せざるに非ず、如何に美學者と雖も全然に善を無視す可き口實は見出すに由なし、即ち如何にもして美と善とを矛盾無く說明せんとするが彼等の努力なり、而かも其努力は有望なる者に非らず、美を感のみに依ると爲し、感を本尊とし知を他人として、知をも感をも綜合したる『我』と云ふ者を認めざるに於ては其の所に根本の衝突あればなり、根本の衝突せる者を、衝突せざる如く說き明さんとす、是れ在來の獨逸派の美學が種々の形式を設け、種々樣々の理路を辿り、困難に困難を重ねて漸く出來揚りたる曉が、遂に美學をして、空漠なる規範の學たらしめたるに止まる所以なり、規範の學とは、特に說明する迄も無く『美は是である』と直ちに美其者を指す『ある』の學に非ずして『美は是であらねばならぬ』と後より規則を推被せる『ねばならぬ』の學を云ふなり、試み

に獨逸派美學の差圖に從ひ、美なる實物の美を賞鑑せんと身を擬せよ、先づ眞の美的觀照と云へる我が心持を定むる迄に日は暮れて、肝腎なる光線の消滅と共に美其者が消え去る可し。

吾人の合點する美は太陽の光線に照し出されたる自然の色と形とを本體とするの美なり音樂の美も建築の美も此の色と形とを支配する一個の理にて說明するを得る者なり、此の美は三歳の小兒も味ひ得るの美なり、彼れは乳婆の懷に抱かれ花の色を見て喜ぶに非ずや否、痴鈍なる獸類さへも蟲さへも解する美なり、某音樂師（モザートかと記憶す）の彈琴には壁に潜む蜘蛛さへも穴を出で來りたりと云ふに非ずや、而して此美は最も靈智靈能の發達したる大學者大哲人と雖も味ひて盡し得ざる美なり。

然らば此美は感に來る美に非ざるかと詰問さる可し、然り感に來る美なり、然れども其の感たるや道德を敵とする感に非ず、吾人が『廿世紀の美學』と題して前回に略說したる感なり、其說に由れば人の感じが心中に既に存在せる他の多くの模型良心の如き――に、容易に入りて快速に同化（アシミレート）せらるゝが美の感なりと云ふなり、此の同化（アシミレート）は舊式の心理學が聯想の一種として說きたる者なり、此の同化の行はるゝは其の人の心中に努力を起してに非らず、其の人が美に對して恍惚たる間に――其の人の自から識らざる間に――盛んに心中に行はれつゝあるなり、其の同化の行はるゝが美の快なり、若し既に存せる模型に同化すること容易ならず快速ならざるが如き感は美感とはならず。

故に下等生物の如き、感覺の外に何の模型をも存せざる者に對しては感其儘が美感なる可く、人類の如き、多年の適應、多年の遺傳、多年の進化にて強き自意識を有し強き社會性（良心は其一部）を有し、強き其他の種々の模型を有する者に對しては、美の條件甚だ狹きに似たり、而も其狹きは唯だ感の方面が品節（クオリファイ）せらるゝなり、美の少きに非ず美の多きなり、美を受くる模型が感以外をまで領域として、廣く且多ければなり、其多きに從ひて感よりも以上なる美を味ひ得べし、太陽も光も自然の色も物體の形も入込み得ざる心の領分に渉り、靈智的の美も、倫理的の美も、想像の美も、信仰の美も總て味ふことを得るなり。

是に至りて美と善との衝突なし、善の模型と快く同化するものが美たるなり、是れが吾人の目して二十世紀の美學と云ふ所のものなり、此の美學は生理的心理學が今日迄の研究の結果に得たる、免れ難き斷案なり、此の說に從へば道德は美を助くる一の大なる要素なりとも云ふを得べし、豈に廿世紀は多くの學問の上に持ち來ると同じく美學の上にも大なる福音を持來りたるに非ずや、彼の悲哀に泣ける者等よ、速かに淚を干して其の汚れたる顏に喜びの笑を湛えよ。（明治四一・六・二一）

美の要素としての道德

（兩者相關する實際の方面）

事實に於て美は何と無く善の如くに感ぜらるゝに非ざる乎、今より二千三百年前始めて希臘に於て美が學者の研究の題材となりたるとき既に美と善とが相待ち相助くる事の樣に論ぜられたるは蓋し偶然に非ざる可し、縱しや其說は充分に成立せざりしとするも爾來引續きて今に至るまで美を善と緣ある如くに視るの思想が幾度も繰返され、殆んど何の時代にも之無きは莫きほどの有樣なるは、人心の何の邊にか美を善に非ずとすることの僞りらしく感ぜらるゝ者あるが爲なりしに非ざるか。

彼等が斯く感じたるは宜なり、全く美と善とは人の心の作用に於て分つ可からざる關係の存したるなり、唯だ心理の研究幼稚にして其の關係を實驗的に見出すこと能はざりしが爲めに、之を一個動かし難き學說とすることを得ざりしのみ、廿世紀の今に及び始めて生理的心理學が其の離る可からざる關係を見出したるは、思想界二千餘年來の約束を果し得て、實に美をして無盡の光輝に浴せしめたるものなり。

美は最早や善の他人に非ず、善は美を妨ぐと云ふが如き說は立直る可き脚地無し、善は美の敵に非

ざるのみならず、美を能く美ならしむる制約なり、美の要素なり。

若し美が善と全く他人なりせば、人類は昔し〳〵の下等動物たりし時代より常に美を愛しつゝありて而して今日の如き向上の域に達し得たる筈は非ず、此點より視るも、美の美たる所以が、善と同化するに在ること明かなり、善と同化せざるは美に非ず。

更に自然界の美に對して一考せよ、自然の美は色と形とに在ること勿論なるも、少くとも此の自然に、不道德と云ふ意義無しとの安心が吾人をして美感を逞まゝにせしむる一の力には非ずや、俯仰天地に耻ぢずと云ふ玲瓏の心持を以て誰憚からず花を見る心持と、人影に顧慮し街燈の光に心配し狐疑しつゝ躊躇しつゝ新道に美人を訪ふ時の心持と孰れか美なるや、舊式の美學者は云ふ、『其れが卽ち道德の心が美を妨ぐる實例なり、美人の美は花の美に優ると萬々なるも唯だ憎む可き道德心が邪魔する爲め、充分美人の美を味ひ得ざるなり』と、吾人は云ふ玲瓏の心と同化せざる美は美に非ず、若し美人を訪ふの事情に、何等耻づ可く顧慮す可き脛の疵無くして玲瓏の心持を存すること宛も花を觀る時の如くならば、美人始めて美なるなりと、是れ豈に眞に美なる美には——非ずや。

是れのみに非ず、花に淸香あり月に陰あるが如く美には心理學者の或者が稱する輝暈（ハーロー）あり、美の輝暈とは實は人の心の輝暈なり、道德心の發動なり、汝が自然の絶美に對して感ずる美は、

色の美と形の美とのみには非ず、汝は斯くの如き絶美絶景が如何にして生じたるやと、我知らず其美に打たれ『アヽ』と嘆ずる如き心持に襲はるべし、此心持を嘆美とは云ふ、英語のアドミレーションと是なり、嘆美は單に美を感ずるよりも度の强き心持にして、自然其者を一種の活物の如く思ふより來る、支那人が神劍鬼斧など云ふ形容を用ふるも之が爲なり、此の心の作用を考ふれば、自然と云ふ者に旣に道德的の意味を擬したるものなり、道德的の意味を擬して我が道德心と相感應せしめ、美の度を高めたるなり、美其者に輝暈を發せしめたるなり、汝は此場合に、否々、我は自然を活き物と見たるに非ずと言張らんとするか、成るほど汝は努力して自然を活物と見たるには非ざる可し、而かも人は修辭の上に擬人法を用ふると同樣の心の作用にて知らず〳〵物を活物視す、汝が自ら活物視したる如く感ずると否とは關係なし、活物視する如き心的作用にて其の美を道德の範圍に入れ、以て我が心に存する道念の模型に同化せしめ、美の味を深くすることが、人間の持て生れたる性癖なり、否と叫びたりとて如何ともする能はざるなり。

此心の又一步發達したる人に有りては自然を活視するより以上に出で、或は此の絶美絶景なる自然の中に神宿れりとの汎神的崇仰の念を起し、或は此の自然は神の攝理なりと云ふが如き宗敎心の模型に同化せしめ大なる喜悅に入るも有る可し、此の宗敎心は卽ち道德心なり、能く思へ、古來何の時代

一代の美術は常に一代の美術が高き宗教心道德心より氣呵せられ鼓舞せられ興奮せられざりしや、一代の大思想大良心大宗教心に提醒せらる、然るに何の國の何の時代の美術史家が藝術は宗教に引立てられたること無しと言ひたるか。

我國には美と並びて『妙』と云ふ語あり、不幸にして西洋の美學には此の『妙』に相當する語あるを見ず、妙とは少くとも美に劣らざる味會なり、絕美と絕妙と其の孰れが高きやは吾人の爭ふ所に非ざるも吾人自らは絕妙を以て絕美よりも上なりと云ふ人に賛成せんとす。此の妙と云ふ心持は、美なる實物を見て、必ずや此の實物を作りたる有心有意の作者又は造物主の有るべしと認め、其の作者又は造物主の意匠と技巧とに只管嘆服する如き意味合なるべし、自然の妙とは自然の中に、秩序あり、意匠あり、秀靈の氣あり、絕大の作者が作りたりと思はるゝ如き意味の存する有るを云ふには非ずや、先に感美よりも一層深しと爲したる嘆美の心は此妙を感じたる心なる可し、妙を感ずるは美を善と同化せしめたるなり。

此意味に於て繪畫と寫眞との關係も解せらる可し、繪畫には作者の意匠籠れり、故に其美は向上して妙に入る、之を賞鑑する人をして感美より嘆美の域に進ましむ、寫眞には作者の意匠籠ること少し、美と云ふとは有れど妙と云ふとなし、故に吾人は寫眞に對して感美することは有れど嘆美することは

無し、此意味を解して世の畫家たる者は、自家作品の美が一代の善と靈犀相通ずる有るの所に自家の本領を認め、寫眞如何に跋扈するとも繪畫の獨得とする絶妙の殊域を侵さるゝ無きを誇りとして可なり、此の善此の本領を認めざれば繪畫が寫眞の上に立つ口實殆んど無けん。

斯くても猶ほ善が美の大なる要素たることを認め得ざる人あらば、吾人は其の人に問はん『惡は美なるか』『不潔、汚穢は美なるか』と、猥褻を以て美と心得る自然主義一派は『然り汚穢も美、惡も美』と答ふるやも知る可からざれど、吾人は斷々乎として云ふ、『惡や汚穢や、直ちに吾人をして大なる反感を起さしむ、斯の如きもの何ぞ美たるを得んや』と。

之を文藝に考ふるも文藝の美の神髓は道德の念を離れて存する能はず、玆に我が父を殺す者ありと思へ、而して其妻たる我が母を己れの妻と爲すと思へ、斯くの如き亂倫悖逆が美たるを得る謂れは無し、而も之に善が加味せらるれば必ずしも美たり得ざるにも非ず、二千年來世界稀有の傑作として知らるゝソフォクリースの劇詩オーヂバス、チラナスは是に非ずや、父を殺し母を妻とし、而して其事の始めて氣の附くに當りて母なる妻は狂死しオーヂバスは憤恨慚愧自ら兩眼を抉りて盲となる、今の世の道德心は到底之を美とする能はず、而も此劇詩がアリストートルに標本的劇詩なりとせられ一種の權威を有し來りたる者は單に當人の動機に惡しき所なく、全く知らずして亂倫を行ひたる點に同情

す可き者存したるが爲めに非ずや、道徳なるものが、空前絶後の大亂倫をまでも美化せんとする力あるは此の一事に認めらる、勿論今の世の鋭敏秀良なる道徳感より云へば、オーヂバスの事の如きは如何なる事情も美化する能はざる極度のものなれども、美が善に助けらるゝと殆んど色彩に助けらるゝ如くなるを證す、色彩を離れては美の大なる一部分が消滅す、善を離れても美の大なる一部が消滅す、善が一の美素たる所以なり。（明治四一・六・二二）

美を觀ずる體度

吾人は美が善に拔きて存すること能はざるの理を明かにせざれば、到底今の世の誤りたる思想や誤りたる藝術を正に反すこと能はざるを確信す、然れども美を善に緣ありと云ふことは大なるパラドクスなり、容易には人に是認せられざる命題なり、少くとも在來の多くの美學家の云ふ處に根本より反對し、世人が一口に『倫理的美學は既に破れたり』と言ひ去るほどなる其の倫理的美學思想の倒瀾をば別の巖礎に立ちて廻し來るに非ざれば能はざるなり。

在來の美學が、人の美を觀るの體度を論規するは吾人の一言せざるを得ざる所なり、獨派の美學は之を『アンショウウング』と云ふ、英派の美學は之に充るに『ピュア、コンテンプレーション』の語

を以てす、前者は我國にて『觀照する』又は『靜觀する』と譯し、後者は『純粹に眺むる』と云ふ如き意なるべし、孰れにしても心に雜念を交へず虛心平氣にして之を觀ると云ふの注文に外ならず、猶も此の注文を有力にし明細にせんが爲めに無念無想と云ふが如き意義を特別に添へて論ずることを常とす。

吾人の思ふ所に由れば美の本は殆んど直感的の者にして其感が安易に且快速に他の思想や情操と同化するが爲めに向上す、向上したる美感は只色只形と云ふ素朴なる者に止らずして人間の自我と云ふ人格の總全にまで響き渡る所に其本領あり、故に美を觀るの體度には注文なし、如何に邪慾と雜念との交りたる多忙なる紛糾したる心的狀態を以て之に對するとも美は卽ち美なり、美は卽ち美として卽座に感ぜられ卽座に我が心中に潜在せる他の情操と同化し、更らに深く之れを味ふに及びては種々の指義（シグニヒカンス）が我が心に往來し、津々として盡きざるの趣味を覺えしむ、斯かる性質の者なればこそ、美は或る程度まで下等動物にも多忙なる人にも貪慾者にも邪念家にも感ぜらるゝなれ、之れを感じて實感に移つる人も有らん、肉慾を動す人も有る可し、深く味はふと淺く味はふと正しく味はふと邪しまに味はふとの別は有るとするも、美の力は卽座に人の心を引附けて卽座に心の或範疇と同化する所に在るべし、若し之を然らずとせば美は極めて弱きもの極めて淺きもの、殆んど美其者には美が無くして

之を觀る人の體度に美の條件あり、我よりして努力して美を引起し美を迎へ又は美を推被せる如き者ともなる可し。

是を心理學より觀るに生理的心理學の大家ヴントはアンショウウングを知覺の意味に用ひあり英語のコンテンプレーションはロックの悟性論には有る由なれども近時の心理學には之を特別なる心的作用とせず、我國の觀照と云へる語も心理學の教本には用ひられざる者の如し、此一事は何を證するや、他無し彼等美學者が自家の議論の都合の爲めに通例の心理狀態として通例に說明することを得ざるが如き一種特別の心的狀態を揑造したることを示せるなり、勿論學者は自家の議論の爲に言語を作り又は在來の言語に特種の意義を含ましむる自由を有す、然れども美を觀ると云ふが如き尋常普通の事柄に作へる心的狀態が今日の心理學の用語例に從ひて說明せられざる筈は有らず、吾人の思ふ所に由れば吾人が美を觀るの體度は心理學者の云ふ「注意（アッテンション）」より別なるに非ず、單に注意だにせば外界の美は其注意と同時に我心に移り來るなり、人間は物を見るに毫末も注意と異りたる或見方を有する者に非ず、美的作品を見るも醜的事實を見るも、妻を見るも敵を見るも皆一樣の注意なり、注意が其者に向ひだにせば心理學者の云ふ內禁（インヒビション）の作用にて、其注意事項と緣の遠き雜念は追追に心の內にて禁止せられ、自然に無念無想とはなるなり、旣にして其の注意愈よ凝集し內禁は從て

愈よ多く行はれ、注意と其の物と全くの差向ひと爲りたるをアブソープションとは云ふ卽ち無我とか忘我とか稱せらるゝ狀態なり、何故に彼等美學者は此の明白なる注意の理を以て觀美體度を說明せざるや。

他無し、是れ彼等の弱點の存する所なり、彼れ等は美と善とを全然無關係の者と爲し、美に對して餘りに多くの自由を與へんと欲す。其れが爲に實際に美術的作品に善の理想と合せざる點あるも彼等は之を咎むることを欲せず、さればとて咎めざれば美が善の範圍を蠶食し又は蹂躪して、倫理的に不可なる者あり、故に止むを得ずして、先づ美を觀るの體度に警戒を施し、成る可く無念無想なれ、決して藝術に對して實感を起す勿れ、猥褻なる詩歌を讀みても其の猥褻を感ずる勿れ、唯だ其の美をのみ觀照せよ、婬猥なる繪畫を見て春情を催すは無念無想に非ず、美を味ふ資格なき者なり、美觀は假感なり、實感と區別することを心掛けよ、若し心が釣り込まれては、美を知らぬ奴よと笑はるゝぞ、實感を抹殺せよ、實感を揉み潰せ、少しも實感の起るを許すこと勿れとは云ふなり、吾人の斯くの如き嚴重なる警戒が觀美に固有なる者と信ずる能はず、斯く警戒的の意味を要する丈け、其れだけ其論に缺點の有ることと、其美に不善の分子の籠れることを信じ、美を善の理想に叛かざる範圍に持來りて單に通例のアッテンションを以て之を觀て、安心して美感を縱まゝにするを得る者こそ、始めて眞の美な

るなれと信ずるなり。
パウルゼン教授が藝術を見る衆人の事を述べたる言こそ面白けれ、曰く『我國（獨逸）の今の衆人は美術館に入りて毫も美の感を樂む能はず其所にも此所にも裸體の姿が陳列せられて有る爲め、驚きて直ちに赤面し唯だ耻かしき思ひに萎縮して逡巡みするのみ、美術館は彼等の爲には、入るが否や直ちに迯げ出し度くなる所なり』と、是は美術が專ら上流社會のみの快樂に資せられ中以下の公衆が美術の爲に何等の利益を得る能はざるを氣の毒とするが爲に發したる言なりと雖も、獨逸の公衆の中に裸體像の前に赤面し萎縮する者の猶ほ存する所に獨逸國の生命は存すと云ふ可く、善を以て美の要件と爲す吾人の論の眞理も亦其の所に存するを思ふ可し。

而かも彼等美學者は猶ほ足らずして、美は假象なり實物に非ずと說く、成るほど假象より發する感じは實感に非ずして一種特別なる美的享樂たるを得べし、然れども吾人は美を假象なりとするの必要を認めず、假象の何たるを知らざる公衆の美とし得る所に美あるを信ず、美は假象に非ず、實物中の最も有力なる實物にして、時としては鬼神を感動せしむることも有る可きを信ず、之れを假象とすることは善を美の範圍より驅逐するが爲めに、止むを得ず用ふるに至りたる辯解用の道具立とも見るべきのみ。

吾人は信ず、人が美を見るは單に近時の心理學が云ふ注意の體度に外ならず、唯其、注意の體度たるが爲に、注意の續くにも自ら一定の時間も有り、觀つゝある間に他の聯想を起すことも有り、實感を起すことも有り、大なる氣呵を得ることも有り、藝術が人生と交渉する所全く茲に在るなり、藝術は虚僞なるにせよ、虚僞ならざるにせよ、其現はしたる『美』は實物なり實物以上の力なり、假象に非ず假感に非ず、故に能く人を感動せしめ、社會をも動かしむ、藝術猥褻ならば社會は其風紀を破られ、藝術向上せば人心も向上す、世に藝術の墮落して社會の墮落せざる理由は有ると能はず、或は社會先づ墮落して然る後に藝術墮落すと云ふも一理ある可きも、孰れにしても藝術に善を無視する特權あるは認む可からず、美其者が善を要素の一として善に依據する所のものなればなり、篤と此理を知りて藝術の理想を高くし、其の理想が能く善の理想に同化するに至りて、始めて藝術の眞價は發揮せらるべきなり。（明治四一・六・二三）

婦人覺醒の第一歩

一、貞操の新意義

予は女子の覺醒を唱ふるが爲めに、職業結婚貞操の三問題をば三位一體として説いて居るのである、

此度は議論の順序として、貞操問題を解釋せねばならぬ。

世が文明に進むに從つて、男子の個人的自覺が強くなると同じく、女子も覺醒の念が強くなる——即ち覺醒する、宛も男子の自覺が避け難い如く、婦人の覺醒も避け難いのである、是れが社會の大勢であり、又人の天性の自ら趨く所である。教育家などは先づ此天然の大勢を領會せねばならぬ、天然の大勢は到底妨げる事が出來ぬのだらう、之に應ずるとか、之を利導するとかの方針を以て教育を施さねば成らぬ。若しも守舊の思想を以て、大勢の進歩に逆行するが如き事物を吹込んだならば、結局教へらるゝ人の損害となるを免れぬ。

日本で貞操と云へば『貞女兩夫に見えず』との一言に、殆ど貞操の意味が盡きて居る樣である、けれど是れは貞操觀の舊い半面である、今の世では寡婦再婚論なども有る如く、必ずしも『兩夫に見えず』で推通す譯には行かぬ、時に由りては兩夫にも三夫にも見えねば成らぬ場合が有る、要は唯だ婦人自ら其身の品位を汚損せねば好い、品位を汚損せざらんが爲め、或は品位を維持し保存せんが爲めに、再び結婚せねばならぬ場合も有らう、三たび結婚せねば成らぬ場合も有らう、唯だ、斯う云へば婦人が自ら結婚を重せぬ樣になり、夫の家を我が家と思はずして容易に離婚に走る樣な事と爲る恐れが有る爲め、今までは斯かる事を唱へるのが非教訓的である事の如く見做され、單に『貞女兩夫に見えず』

を以て推通して來たのである。けれど眞成の貞操論を能く合點すれば、決して結婚を輕んずる樣な事にはならぬ、即ち眞成の貞操は『婦人自ら其身の品位を汚損せず』と云ふのであるから、或場合には『貞女兩夫に見えず』よりも嚴しくなる。『貞女一夫にすらも見えず』と云ふ如き事とも成らぬと限らぬ。

眞に此意義を領會せざれば、婦人は覺醒した者で無い、婦人覺醒の第一步は、全く貞操の眞の意義を知るに在る。余は此の新なる――否、實は天地と共に古い――眞成の貞操論を說くに當ては、獨逸の哲學者であつて貞操論の最も聲高き主唱者たりしオツト・ワイニンゲルの論を思ひ出さゞるを得ぬ。オツト・ワイニンゲルは獨逸が多く產する哲學者中の極めて稀なる眞天才と云はれた、彼れは二十一歲で大學を卒業し、直ちに『男女と天才』と題する其の貞操論を發表し、此の二十世紀の入口とも云ふ可き十九世紀の末に、二十三歲を以て自殺した。けれども其の說く所の主意の奇拔なことは、到底老成せる人の、思ひ及ぶ所でない、然り、實に奇拔である、奇拔であつた、全く其の時には世に容れ難きほど奇拔の論とも認められたけれど、今から見れば奇拔で無い、全くの眞理である、眞成に覺醒した婦人はワイニンゲルの唱へた貞操論――ほどに極端までは行かぬにしても――之れと同じ傾向の貞操觀を懷いて居る。之を懷かねば墮落することは出來ても覺醒することは出來ぬ、覺醒とは或る意味に於て眞の貞操を知る事である。

嗚呼、眞の貞操、眞の貞操、予は此語に由りて何事を意味するか、實に説き難い事ではあるけれど、予は日本の婦人の靜淑なる思想に向つて爆裂彈を投ずる樣な、思ひ切つた大膽な覺悟を以て之を語らねばならぬ『敬愛すべき婦人諸君よ、女なる者が、此上も無き大の大の醜體を男子に認められるものは其貞操を破る瞬間に於てゞある』と、オツト•ワイニンゲルは云ふて居る、實に然りである、故に或る女が或る男に對して貞操を許せば、其の始めて之を許すと同時に既に男子から輕侮せらるゝ端を啓くのであると云ふのが彼れの旨意である、實に惡魔の説く如き言葉では無いか。けれど若しも婦人諸君にして、此鬼々しい言葉の中に、何等の眞理をも含んで居ぬと思へば間違ひである、眞理は存外に不都合な者である、存外に不信切な、存外に邪慳な者である、諸君は冷靜に考へねばならぬ。一たび男子に許した女が何故に容易に男子から振捨てられるか、是は何等か男子の輕侮を招く可き或る事情がある爲めては有るまいか、女子が男子に慕はれるに當つては、殆んど天女である、男子の目に其の女子ほど崇高に、尊く、美しく、床しく見ゆる者は無い、此時に當つてや一女子も一女子にあらで殆んど神樣である、美の女神である、男子は之が爲めに生命を捧げるをも辭せぬ、何ぞ況んや名譽をや財産をやである。凡そ人間が、何の樣な功業を建てたとて、男子に慕はるゝ女子ほど高き地位に立つことは出來ぬ、羅馬の宗敎王とても、或は專制國の君主とても、其れよりは遙かに低いと云ふ可きである、

此點に於て女子は男子を制服し得るのである、殆んど絶對に制抑し得るのである、右と云へば右、左と云へば左、男子は唯だ女子の命の儘に動くのである、此樣な命令權が他に又と有らうか、此の命令權の一種優絶して居る點は、此の命令を受くる者が命令を受くることを光榮に感じ、此の命令に服從することを心底から嬉しく感ずるのである。此の命令には何等の報酬の約束も無い、けれども命令せられる者――即ち男子――は其命令の下らぬ事を殘念がるのである、中には其命令に接し得ぬことを絶望して自殺する者も有るのである、此樣な優越なる命令が他に在らう筈は無い。或る學者は云ふて居る『過去の生涯を顧みて、戀しき女の命令に使役せられた時ほど嬉しかつた瞬間を見出すとは出來ぬ』と、眞に然りである。此樣な最優最越の命令權を以て、女たる者、何を欲してか成らざらんやでは有るまいか、此の命令權は、婦人自らの、何よりも大切にすべきである、此命令權は何から來る、婦人の貞操から來る、婦人一たび其の貞操を、其の男子に向つて許すに當つてや、今までの被命令者、今まで婦人の命令を光榮に感じた其の奴隷以上の奴隷は、忽ちに變じて主人と爲るのである、アベコべに其女に對して命令する態度を取るのである。

此樣な不自然(に見ゆる事柄)は他に類が無い、けれど是れは事實である、世間に其の例の多きに堪へぬ、是れ何故で有らう、女子が貞操を人に許す其瞬間に、何等か優劣地を替ゆべき事情が有るに違

ひ無い、是れが即ち貞操の貴い所以では無いか、貞操の有る間は女は神様である、貞操を、或る人に向つて失ふと同時に其人の奴隷と爲るのである、實に貞操は奇蹟を持來ると云はねば成らぬ、此樣な大切な貞操を、生れながらに有して居て、之れを輕々しく捨る事の出來る筈は無い、之を捨るは婦人自ら己れを捨るので、之を輕んずるのは身を輕んずるのである。

予は猶もオツト・ワイニンゲルの論旨を辿りつゝ進まねばならぬ。

二、深い深い眞理

全く爾うである、女子が男子に貞操を許さぬ間は、女子は男子の目に神樣の如く見ゆる、此時に在りては男子は全く女子の奴隷である。其の奴隷たる事を光榮とし本望とするのである、徹頭徹尾女子に服從して、女子の意の儘にコキ使はれるのである。

斯かる時際斯かる境遇――即ち女子が未だ貞操を男子に許さゞる境遇に於ては、婦人問題と云ふ者は無い筈である、無い筈であるのみならず、實際を見るも其樣な問題は決して起らぬ、何故と爲らば婦人問題と云ふ者は根本に於て、婦人の地位が男子の地位に劣るのを救濟しやうと云ふ目的から出て居るのである、即ち婦人の地位が、何等かの意味に於て男子の地位に劣る場合に起るので、前件の場合、即ち女が其操を男子に許さぬ爲め、却つて男子から崇拜され男子を膝下にヒレ伏させ、男子を

奴隷の如く過して居る間は、確かに女子の地位が男子よりも優つて居ると云ふ可きて有るので、若し斯かる時際に問題が起るとすれば、其れは男子問題でがな有らう、女子問題は起る可き原因が無い、餘地が無い。

此點から考へれば、女子が男子より劣る地位に陥ちた抑々の始めは、自ら貞操を輕んじたに在ると云つてもよい、自ら貞操を輕んじたと云ふと、何やら女性を非難する樣にも聞えるから、言葉を改めて『貞操の重んず可きを知らなんだ』と云ふ方が穩かである、ナニ實は何方でも同じ事であるけれど、全くの所、婦人は貞操が其れほど大切であると云ふ事を知らなんだ。

其の知らぬ證據は諸君よ驚く勿れ、今日の日本に於ける婦人運動者の運動振にすらも現はれて居る、諸君よ、諸君は、余が誠心誠意に此の事を語りつゝある事を諒せられねばならぬ、諸君も知るで有らう、日本の婦人運動者の中には、女子が貞操を守るに對し、男子の貞操の弛きを甚しく不倫の樣に思ひ、法律をして夫ある女の姦淫を罰する如くに妻ある男の姦淫をも罰せしめやうとするのである、是れが爲めに帝國議會へ法律改正の議を献じた事も有る、余は必らずしも之れを非難するものでない、又斯かる運動をする人達の熱誠に對して、滿腔の敬意を表するものである、けれど其思想の根本に貞操の眞の意義が領會せられて居るや否と云ふ事は聊か疑はざるを得ぬ。

貞操と云ふ事は女が、女自らの地位を支ふる天與の力である、女が之を守るのは自らの爲めに守るのである、決して男子の爲めに守るのでは無い、男子の爲めに守る所の貞女兩夫に見えず的の貞操觀は、今日の貞操觀から云へば猶ほ足らぬ所が有る、然るに、貞操とは女子自ら守る所の者で有る事を思はず、何か男子に對する義理合の爲めに守るものかの如くに思ひ、女の方で窮屈な思ひをして貞操を守るのに、男が之を守らぬのは片手落である不公平である、と云ふやうに怨ずる者あるに至つては、實に沙汰の限りでは無いか、余は之を全く貞操の眞意義を知らぬから來た者と斷定するに躊躇せぬ、尤も運動者共人々は眞逆に明ら樣に右樣の事を思ふのでは無いけれど、婦人として男子の貞操を要求する事柄の意味の中には、自ら右の如き心が籠つて居ることを辭し得ぬ筈である。

更に一歩を進めて考へて見ると、男子が貞操を知らぬのは女子が貞操を守らぬ結果であるとも云へば云はるゝ、若しも女子が洵に貞操の眞意義を解し、貞操を弛くするのは墮落する所以であるとの念を堅持して居たならば、男子は何うして貞操を破ることが出來る、實の所、男子に對して輕々易々に操を許す婦人——否實に全く操の無き婦人——が到る所に多ければこそ、男子が容易に貞操を破る目的を達するのである。

予をして、猶も思ふ儘を云はしむれば、貞操と云ふ者は女に在りて男子には無い、男の貞操と云ふ

者は全く意味が違ひ、自ら自分の意見に對するとか、君主に對するとか、將た世間に對して、節義を守る事で、妻に對して純一なることを男の操とは云はぬでは無いか、妻に對して純一なる人を指して、アノ人は大層操が正しいと評して、其語が通用するで有らうか。

兎に角も、操は女自らの爲である、之を捨つれば女自ら墮落し、之を守れば女自ら向上する、其向上が即ち貞操の結果である故、此向上より以外に、猶も貞操の報酬を求む可きものでない、故に婦人運動者にしても、男子の有妻姦を憤慨すると同時に、更にヨリ多く其有妻姦の對手たる女の多き事を憤慨し、予と同じく世間一般の婦人に對して、眞の貞操を說かねばならぬ、貞操なしに――即ち男子の有妻姦を罰する位の爲めに――女子の地位が救はれやうと思ふのは、考へが猶ほ淺いのである、斯く云へば、予を目して有妻姦の主張者、賛成者で有る如く思ふ方も有るかも知れぬが、予の議論が其様な卑い動機から出て居ぬことは、知る人ぞ知るであるから、敢て辯解はせぬのである。

斯様な次第で、貞操が有れば女子の地位は男子よりも高くなる、貞操が無ければ直ちに墮落する、到底男子と同じ地位に出ることは出來ぬ、其れであるから、彼れオツト・ワイニンゲルは叫んで居る、『女が容易に結婚する間は、女の地位を高くする事は出來ぬ』と。

彼れの意見に由ると、苟くも女が、婦人問題を正當に解釋しやうと思へば先づ結婚すると云ふ心――

即ち夫を持つと云ふ心を――廢せねばならぬ、生涯を獨身で通ると云ふ、大決心を持たねばならぬ、女が此決心を持たぬ以上は、婦人の地位を到底高くすることが出來ぬと、事茲に至つては即ち『貞女は一夫にだも見えず』の論となるのである、併し若しも此の『貞女は一夫にだも見えず』と云ふ嚴格極まる貞操論が、充分に行はれたならば何うか、女は女、男は男と、全く別々になり沒交涉で暮さねばならぬ、女も結婚せず男も結婚する能はず、兩者の間に、唯だ生活の爲めの助け合は有らうとも、其以外に何等の助け合も無い時は、全く人種が盡きてしまふでは無いか、其貞操論が行はれると一代限りで世界が無くなるのでは無いかと云ふのが、舊思想から出る反對論である。

猶ほ此反對論は云ふ『凡そ生物の道德と云ふ者は、種の繁殖を目的とする所に其根本を置く者にして、人間の道德とても之に異ならず、歸する所は子孫を繁昌せしめて事業を之に傳へ、人間の種を天夭として盡さざらしむるに在るに、獨り女子の道德論即ち貞操の論のみは、人種の直ちに盡滅すべき傾向に加はることを善良なりとするか』と、實に尤もなる議論である、眞の貞操は人種の絶滅する方へ傾いて行く性質の者で在る、是れでも之が眞理で有らうか、オツトー・ワイニンゲルは斷乎として之に答へて曰く『然り』と、ア、彼れは人種が盡きても構はぬとするので有らうか、其れは餘り暴論では無いか、イヤ必ずしも暴論では無い。

兎も角も、斯かる大なる反對論すらも破ることの出來ぬほどなる、深い深い眞理が、彼れの貞操論にはあるのである。

三、貞操の力

『貞女兩夫に見えず』と云ふのは習俗的、因襲的に出來たる貞操觀である、眞の貞操は『貞女一夫にだも見えず』と云ふ嚴重なる根本から出でねばならぬ、此根本が確立せぬ間は、婦女子の地位を眞成に高くする事は出來ぬ、眞成に女子を救濟する事は出來ぬ、女子開放と云ふ事なども先づ此の『一夫にだも見えず』と云ふ貞操の根本から出發せねば失敗するに極つて居る。

若しも『一夫にだも見えず』と云ふ此嚴重なる貞操論が婦人社會一般に極端まで實行せられ、世の中に一人も結婚する婦人が無くなれば何うであらう、オット•ワイニンゲルは斯くなることをさへ究論して居る、愈々斯くなれば必然の結果は、人種が絕滅するのである、人種の絕滅は云ふ迄も無く此世の滅亡である、地球上に人ッ子の一人り居ぬ事になる、是れが眞成なる貞操觀の、必然なる論理的結果である。

然らば人種が絕滅して世界が消失しても差支無きかと誰も問ふであらう、勿論である、人は天上天下唯我獨尊では無いか、人に取りて――女に取りて何よりも大切なのは自分の身が天然の清淨無垢な

る貴絶高絶なる眞價値を全くして、自個の珍重する自我をば無垢無疵、無難完全の儘に保存するに在るでは無いか、若しも此清淨無垢なる至貴至高の性格が支へられぬならば、此の玉の如きの性格を汚さざらんが爲めに、自殺しても可なりと云ふのが彼れの意見である、彼は男子でありながらも、果して此意見の爲めに自殺した、即ち我が意見の神聖を支へんが爲めに自殺したとも云はれる。

兎に角オットー・ワイニンゲルの説に從へば、人種を繼續すると云ふことは、女が一點の曇り無き自分の清淨を犧牲にしてまで實行せねばならぬ事柄では無い、若しも身を汚すか人種を失ふか、二つに一つを選ばねば成らぬと云ふ手詰の場合に陷れば、自分の身を全くする方を選ばねば成らぬ、其れが爲め人種が盡くるとも顧みるには足らぬ。

如何に人種が續いたとて其の續けば續くだけ、女が墮落し行かねばならぬとならば、人種の繼續と云ふとが女に取りて何の有難いことが有るか、女は此世が女の本分を全くし、女の尊貴を支へ女の清淨を保護し、女をして居ながら神の如くなるを得せしむるならば、此世を有難いとすべきであるが、若しも此世が必然に女を奴隸にし女を汚穢なる者にし女を醜辱の谷底へ落さねば成らぬ樣に出來て居るなら、女は何も此世を有難く思ふ可き理由が無い、此樣な世ならば盡滅するが好い、女は何も自分の身を醜辱の谷底へ陷し入れてまで人種を繼續せしめねばならぬ義務は無い、斯かる根本の大決心が

有つてこそ、始めて女の眞の地位が支へられるのである。

以上の說は實に極端らしく聞えるけれど、此の極端を根本として、此の極端なる根本より出發せねば、眞の貞操と云ふものは矛盾無しに說明することは出來ぬ、貞操の眞の根本は何處までも『貞女一夫にだも見えず』と云ふに在る、一夫に見ゆれば既に其れだけ女の墮落と云ふものである『操を失ふた』と云ふ可きである。

然れど之れが爲めに、果して人種が絕滅するで有らうかと云ふに、そは大なる疑問である、若し世界を通じて婦人の貞操同盟が行はれ『貞女一夫にだも見えず』と云ふ事の根本主義が、其まゝ完全に行はれたりと假想すれば、世界は何うなるのであらう、勿論男は一人たりとも妻を得ることは出來ぬ。

予は暇が有らば此の假定を本として、悲喜劇を作つてみたいと思ふ、其の時には、實に『男』なるものが『女』なる者に比して、如何に弱く、如何に意氣地が無く、如何に憫然な者であるかと云ふ事が分るで有らう、勿論、女とても一方ならぬ悲境には陷るで有らうけれど、男の悲境は一倍も二倍も十倍も百倍も甚だしいに違ひ無い、男と云ふものは、到底女無しには生息し得ぬのである。

或は女とても同じ事で、到底男無しには生息し得ぬでも有らうけれど、社會の數千萬年來の習俗で、男が女よりも放縱に育つて來たゞけ、今日に於ては男の方が女の方より幾百倍も辛抱が弱いのである、

假りに女が男無しに卅年辛抱し得るとすれば、男は恐らくは一ケ年も孤獨の地位を支へ得ぬで有らう、男とても一概には云へぬけれど、遺傳や進化の理に於て、今は男が女無しに辛抱し得ぬ性癖は、殆んど天性の如くに成つて居る故、若しも、女の貞操同盟が出來たならば、直に其の翌日に、早くも男軍の中に裏切者が出來、如何なる條件に服して成りとも早く女軍に降り、女軍の怒りを解き度いと希望する者が現はれ、翌日には斯かる裏切者が更に多く、翌々日は又更に多く、一ケ月も經てば、過半數の輿論か女軍の軍門に降服すると云ふ事に歸するに違ひ無い、其れでも猶ほ女軍が動かぬならば、男軍は唯だ女軍の命の儘に、永久なる降服條約を作り、男子總體が女子總體の永遠の奴隷と爲るさへ辭せぬことと爲り、中に若し木石の如き硬骨男子が有つて、異論をでも唱へれば、寄つてタカツて此者を軍門の血祭とするで有らう。

猶も女軍が動搖せぬならば、世界中の男は全く健康を失ひ、身體は固より精神までも常調を失し、覺めながら夢を見る如き境遇に陷り、夢やら現やら自ら辨別し得ぬ樣な狀態とも爲りて、唯だ煩悶、唯だ懊惱、殆ど燃る火の底に投込まれた如き狀態に至りて猶ほ底止する所を知らず、全く男軍總體の盡滅にも歸するかも知らぬ、事玆に至て男軍に何の勇氣が殘る者ぞ、女軍は思ふと意の如く成らざるは無き無上の條件を以て、全く男子なる者を未來永劫、女の膝下に平伏すべき者と確實に定めて了ふ

ことさへも出來るのである。

斯く考へて見れば、女の貞操ほど強い者は無い、之れさへ有れば男を征服することさへ出來る、何も今日の如く、婦人が男に壓迫される事を嘆きて女子開放だの、婦人參政權だの、自覺だのと、樣々の問題を案じ出す必要は無い、只だ一擊を以て婦人の一切の要求を解決し、一切の壓迫を除き、婦人は主人として上に立ち、男子は奴隷として、何等の發言權をさへ有し得ぬにも至るのである。

然るに今の世は何うで有らう、婦人自ら貞操の根本が『一夫にだも見えず』に在るを知らざるのみで無く、滔々と相率ひて男子の玩弄たるを甘んじ、自ら其の高貴なる地位を失ふのである、オツト・ワイニンゲルが『女』の特性を論ずるは、第一に夫を持つことを誇る心である、第二は夫無き女に夫を取持つて遣らうとする世話好の心である、此二つの心が有る爲めに、婦人は自分から男子に征服せらることを求むるに至るのである。

成る程是は今の世の女に通有の特性である、若しも姉妹の有る家で、妹の方を先に結婚せしむれば、姉は自分の婚期の後るゝ事を何よりもの恥辱の如くに考へ、煩悶して病を釀す例すらも少くは無い、啻に其れのみで無く、總て結婚した女は未だ結婚せざる女に對して自ら肩身の廣ひ如くに感じ、是れ見よがしに誇る氣が有るのである、縱しや其の夫が人格に於て下劣であつても、又自分を虐待する樣

な人であつても、又其れが爲に心の中に夫に對する多大の不平不滿を懷いて居ても、兎にも角にも未婚の女よりは自分の方が、人生に於て何か手柄を現はして居る樣に感じ、一種の誇りを持するのである、實に淺はかなる了見では無いか、斯かる心が、孰れの婦人の胸中にも潛んで居ればこそ、婦人は殆んど夫を選擇する時間をすら待つこと能はずして『人生、婦人の身と爲ること勿れ、百年の苦樂他人に賴る』とまで歌はるゝことにもなる。

其れのみで無く、夫あることを誇る其の心の爲めに未婚の女を氣の毒に思ひ、成る可く媒介し取持ちして、早く夫を得せしめんことに盡力し、又盡力せらるゝ方も、其の盡力を難有く思ひ、一日たりとも早く既婚の女に成りたいと焦慮するが爲めに『貞女一夫にだも見えず』と云ふが如き眞理は單に暴論なるかの如くに見做され、今日に至るまで之を唱ふる人甚だ少く、其の結果として、婦人自ら滔滔相率ゐて身を結婚の淵に投じ、奴隷の境遇に入るのである、其れが爲めに夫人一般の地位を卑くし、生涯を悲境に沈めて、救ふに由なき不滿足の月日を送り、今に及んで俄かに自覺し、樣々の婦人問題などを擔ぎ出すは、抑も遲いのである、イヤ必ずしも遲くは無いが、根本を忘れた者であると云はれても致し方の無い譯である、今にして眞に目を覺し、婦人自ら婦人の境遇を救ふは眞成なる貞操觀の上に立つ外は無いと知るならば、ヨモヤ貞操同盟を作らずとも猶ほ前途は『春如海』と云ふことが出

來やう、何さま婦人の覺醒は先づ其の貞操觀から出發せねば成らぬ。（明治四五・四）

エレン・ケイの婦人觀

予は曾てエレン・ケイ女史の戀愛道德を評して置きましたが、女史の意見も、あれだけには盡きず、予の意見もあれだけには盡きません、依りて、更に意見を述べ度いと存じます。

一、新らしき婦人と今の婦人

世の中が儘ならぬ――卽ち自分の思ふ通りに行かぬ――と云ふことは、恐らく千古萬古の大事實でありませう、是れが爲めに人は必ず現在に不平があります、不滿が有ります、故に、必ず常に、現在を改良したいと云ふ慾望が有ります、男にもあれば女にも有る、此の慾望は現在を厭ひて、未來に對する憧憬であります。

今、『新らしき女』と云ふのは、此の憧憬――卽ち現在に對する不滿と未來に對する慾望――とを主として名けたに外ならぬのであります、此點から申せば、誰とて『新らしき女』で無い者は無い、總て新らしきを希望して居るのであります、又男とても新しきを希望せぬ者は無い故、總て『新らしい男』であります。

此の現在の不滿と未來の希望とから、總て社會の進步が出るのでありますから、是れは善い事である、決して『新らしき女』の運動を惡い事であると云ふことは出來ぬ。

故に、總て『新らしき男』『新らしき女』のみにて出來て居る此社會に於て、特別に自分からも人からも『新らしき女』と稱し又稱される人の有るのは、唯だ希望の强さが違ふ者と視る外は有りますまい、孰れも未來に對し慾望を以て居るけれど、其の慾望を、言葉や行ひにまで現はさずに、諦めて居るのが、今の女である、諦め切れずして言葉や行ひに現らはして努力するのが『新らしい女』である。して見ると『新らしい女』と『舊い女』即ち『今の女』との區別は、唯だ諦めると諦めぬとの區別に在ります、諦むれば、新らしき婦人も今の婦人と爲り、諦めねば今の婦人も新らしき婦人になると先づ斯う云つた樣な理合であらうと思ひます、エレン・ケイ女史は、新らしき女を『未來の婦人』と云ひ、今の女を『因襲的の婦人』——即ち因襲に囚はれて居る婦人と云ひ、兩者に對し各々一編の論文を作つてあります。

二、新らしき女は何を希望するか

女史の說に由ると、婦人運動の最初は男女同權の要求であつた。是れは女子の社會的の地位を改良するのである故、其の目的を達せんが爲めには、女が多勢結合して運動せねばならぬ、即ち團隊的運

動に由りて目的が達せらるるのである。

けれど今の婦人の要求は、之よりも進歩して居る、即ち自分の人格の獨立を尊び、我儘を張通すいである、尤も、我儘と云ふ言葉には餘ほど語弊が有る、女子は此樣な言葉を使はず、自個の個性（インヂビヂユアリチー）を完全にするのであると申して有ります、是れは、此頃の文藝家が『自我の權威を認む』と云ふのと同じ事で有つて、女自ら、自分の人格の尊いことを認め、他人が何と笑はふとも又制しやうとも其樣な事には頓着なく、自分を研き自分を張り通し、自分の心を以て社會の習俗――即ち因襲――を打破ぶつて進むのであります、一口に其意味を盡すことは甚だ六かしいのでありますけれど、自分は自分で、他人と異つた點のあるのは當然ゆゑ、其の異つた自分の性質を、敢て推曲げて人に合せやうとせず、其特異點を立派に保存して行くのであります、自分の身に取て何が善いか何が惡いかは、自分より外に知る人は無く、自分の善とするのが即ち自分の善である故、世間の仕來りなどには構はぬので有ります、私は此意味を約めて『自分の人格を研いて自分の我儘を張通す』のであると申します、勿論意味が盡きては居ず、ハッきり合しても居ぬ樣でありますけれど、斯く云ふ方が一番に分り易い、是れが即ち今の『新らしき婦人』の要求する所である、男女同權などと云ふたヂヨン・スチユアルト・ミルなどの頃の新らしき婦人の希望よりはズッと進んで居るのである、此の進

んだ運動の目的は、前の同權論の樣に團體的の運動で達せられる者で無い、婦人自らが銘々に自分の人格を研き、自分で自分の我儘を張り通すことに勉めねばならぬ。

成るほど倆うで有ります、今の『新らしき婦人』の希望は玆まで進んで居る、是れは必ずしも、エレン・ケイ女史の言葉を待て始めて知る所では無い、イブセンの劇に在るノラなどに旣に此思想が現はれて居るのであります。

三、今の婦人卽ち因襲の婦人

右の思想から見ると、今の婦人は、成るほど因襲に囚はれて居る、自個の人格を研いて自分の我儘を張り通すなどと云ふ氣性は少しも無い樣である。

尤も今の婦人とても人格を研かぬのでは無い、敎育も受ければ修養もする、確かに人格を研きつゝある、けれど其の人格を研くのが、全く社會の因襲に囚はれた研き方であつて、益々因襲に囚はる可く研くのである、譬へば茶の湯を稽古するにも、自分が茶の湯を好むとか或は茶の湯の必要を感ずるが爲めに稽古するでは無く、唯だ世間が茶の湯など心得て居る女を褒める樣な因襲と爲つて居るが爲めに、唯だ其因襲に從つて稽古するに過ぎぬ、ホンの世間體である世間並である、御多分に洩れぬと云ふ行き方たるに過ぎぬ、此點から云へば敎育其者さへも因襲に囚はれて居て、單に人をして益々因

襲に囚はれしむべく教育する丈の事である、眞に因襲を脱却して自個の最も深い眞の自我から發して、眞の自我を研き立つる樣な教育主義も修養主義も甚だしく缺けて居る、故に教育は受けても一人前の『人』とは爲らず、依然として因襲に囚はれた憐む可き『女』である、因襲を離れては何事をも爲すことが出來ぬ、畢竟するに女とは（是れは女史の意見では無い、私しが曾て讀んだ他の婦人論者の言葉であるか）畢竟するに女とは、生殖器の異つた『人』である、男と云ふ者も矢張り生殖器の異なつた人である、自分より云へば同じく我れである、人として世に對し、我れとして自分に對せねばならぬ。

新らしき女の自覺と云ひ、自覺した女などと云ふ言葉も總て斯かる意味であります故、自我の權威を自覺し、從て自覺の責任を自覺し、其の自覺に照して何事をも判斷するのが即ち今の新らしい婦人の要求でありませう、今まで因襲は、斯かる自我の自覺より發せず、單に女を男の附屬物と視る事と爲つて居る故、新らしき婦人の眼中には因襲とか風習、習俗など云ふ者は無意味であると云ふ事に歸するのは當然の順序であります。

四、問題解決の出發點

けれど此事柄は、今少し、深い所から考へて見ねばならぬ、社會の現在は何が爲めに、斯く矛盾のみ多く人に滿足を與へぬ者であるか、何が故に自分を壓迫する樣な窮屈至極、不自由千萬なる因襲な

ど云ふ者が出來て居るか、何故に舊い婦人は之を諦めるのに、新らしい婦人は之を諦めぬか、又諦める舊い婦人が尤もであるか、將た諦めずに反抗する新らしい婦人が尤もであるか、エレン・ケイ女史の議論は玆までは達して居らぬ、今の『新らしい婦人』一般の考へが、玆まで達して居るや否やは知りませんけれど、斯樣な點から考へねば問題は解決せられぬであらうと私しは思ひます。

五、人生根本の二大矛盾

儘ならぬと云ふ事は、能く〳〵考へると自分と外界との矛盾であります。自分が斯う致し度いと思ふけれど外界の事情が之れを許さぬ、是れが不如意卽ち矛盾の元であります、此の矛盾は何所から來るか。

是れは何うしても取除くことの出來ぬ人間銘々の天性から來るのであります。『人』と云ふ者の天性には、根本に二個の大矛盾が含まれて居るのであります。

其一は、心には限りは無いけれど身體には限りが有る、是れが大なる矛盾であります。卽ち限り無き心を限りある肉體へ宿して此世へ出て來て居る、心は限り無き慾望を持出すけれど、身體が一々之に應ずるに堪へぬ、譬へば美味い者は限り無く食べ度いと心は云ふ、けれど限り無く食べては胃の腑が耐えられぬ。

其二は、自分一人で生殖の慾を達することが出來ぬ、異性を求めねばならぬ。然るに自分の生殖の慾は、誰にも相談せずに――即ち異性を待たずに――獨りで發するのである。是れが大なる矛盾では有りませんか。又此の矛盾は第一の矛盾と共に到底取拂ふことの出來ぬ性質では有りませんか。

斯く取拂ふことの出來ぬ矛盾が根本に橫はつて居る以上は、不自由は無論である、不如意は無論である「儘ならぬ」のは無論である。故に何の點にか何うしても諦めねばならぬ所がある。

諦めるとは自分の慾望を制して『仕方が無い』として愚痴も未練も云はずに自分の心を抑へ附けるのである、之を『忍從』と私しは申します。忍び耐えて從ふのであります。『アキラメル』『ガマンスル』『シンボウスル』などと云ふのと總て似通ふた意味であります。社會改良とか人間改良とか、風俗改良とか云ふ事に就て、何の樣な名工夫を廻らせても、終には何處かに諦めねばならぬ點が來る、即ち忍從するより外は無い大矛盾が出て來るのであります。

六、人は到底忍從を免れぬ

故に今までの何の宗敎を見ても忍從を說かぬは無い、基督敎で『リナンシエション』とか『レシグネーション』などと云ふのが總て此の忍從である、佛敎の柔和忍辱は勿論此の忍從である。忍從に歸着せねば如何なる敎へも決して成り立つものではありません、道德の忍耐と云ふのも勇氣と云ふのも忠

信と云ふのも大に忍從の主義を帶びて居ります。又孔子の教の仁が一種の忍從である、忠恕が又忍從の一である、仁義忠孝、何一つ忍從ならぬは無いのであります。然らば忍從とは何であるか。自分の心の慾望を屈して外界の事情に服從するのである。然るに『新らしい婦人』の思想の中には、此の忍從に反抗する樣な氣合が見ゆる、單に新らしい婦人の思想のみでは無い、今まで度々唱へらるゝ道德的虛無主義に類する主義は總て忍從に反抗するのであります。自己の我儘を張り通して止むを得ざる矛盾に反抗しやうと云ふのであります。

玆が甚だ道德の六かしい所でありませう、爾うかと云つて唯だ何事にも忍從のみして居ては、人間の本領を發揮する事は出來ぬ、人間の本領は自然に打勝つとさへも云はれる、人間の知識を以て色々と工夫を廻らし、忍從の區域を成る可く小くする、之れを耐ゆるに、比較的苦痛の多い樣な忍從を變じて、比較的苦痛の少い忍從に振り換へる。是れが人間の知識的努力の意味である以上は、忍從に反抗するからと云つて、直ちに其れを批難することは出來ぬ、是れも事實である。

『新らしい女』『新らしい男』『新らしい人』即ち人間は總て新らしい境遇を目掛けて進み行かうと求めつゝあるのであるが、孰れの道が苦痛の少い忍從に達せらるゝであらう。勿論忍從の中には到底除く事の出來ぬ種類も有る、彼の婦人を壓迫する因襲などと云ふ者は、何の點まで忍從すべき者であらう、何

うすれば忍從の苦痛が輕くなるのであらう。

七、因襲とは何であるか

私しの考へでは、全く因襲を刎ね除けて我儘を張り通すと云ふ事も間違ひであり、又一から十まで因襲に服從すると云ふ事も間違ひであらうと思ひますけれど、因襲と云ふ者も、中々強い根據がある、其の大半は、前に申した人間の根本の矛盾――即ち先天的の矛盾から來て居るのでありますす故、何が何でも因襲に反抗すると云ふ事は、徒らに失望を持來りて不平不滿を增すのみであります。世に不平不滿の爲めに、或は世の人と合せずして幽欝に沈み、或は甚しきは自殺などする人達には、斯樣の方が多い樣に見受けられます。

扨て右の根本の矛盾から考へて見ますのに、人間が唯だ一人で棲めば、何事も我が意の儘であつて、全く我儘が張り通せる故、少しも忍從などは要らぬ樣でありまするが、玆に矛盾がある、人は自分一人で子孫を得る慾望を達することが出來ぬ。此の慾望を忍び、子孫なしに終ることは、忍從し難いが爲めに、止むを得ず、配偶を求むるのでありませう。既に配偶者が出來たとすれば、配偶者の我儘と自分の我儘との間に幾分か讓り合ふ所が無くては成らぬ、此の讓り合が又忍從である、即ち子孫を作り得ぬと云ふ辛い忍從を免れ得た代りに、親たる忍從の必要が生じた、配偶者の爲めに幾分か自分の我儘

を抑へねばならぬ、我儘を抑へるのが又忍從である。此の忍從をば成るたけ輕くする工夫は、慾望の起つた時のみ同棲し、慾望が終れば直ちに別々に離れ棲むに在るは勿論であります、けれど一たび同棲した事の惰力が心に殘つて居る故、其後の別居は何と無く淋しい。此淋しさが卽ち新に生じた忍從であるが、之れが甚だ耐へ難い故、生殖の慾の爲めで無くとも同居する、同居して淋しさを免かれる。更に此の同居が惰力と爲り、惰性と爲り、限り無き天賦の慾心が手傳ふて、猶も其上に同居者の數を增したくなる、二人でも淋しい、三人でも淋しい、段々と同居者が多くなる、遂には社會と云ふ大なる團隊になる。

と先づ此樣に說明した方が解り易いと思ひます。是れで見れば、社會と云ふ者は、人と人との相親む惰力から生じてゐる、此の惰力と云ひ惰性と云ふ者が卽ち因襲であります、卽ち或る必要の爲め——或る忍從の苦痛を免かるゝが爲め——に起つた事柄が、其必要の消滅して後までも引續く、是れが人情の惰性であり社會の因襲であります。

八、因襲は除くことを得る乎

故に因襲を除く事は出來ぬ譯は無い樣にも思はれますが、能く〱考へて見ると、人間の先天の矛盾から出て居ますので、一旦は除いても又々生じて來る。此實例は幾等も有ります、一ころ米國の社

會主義の人達が、自分達の理想に從ひ、全く共產主義の社會を作つて見た。其當座は、成るほど人間の不平等から生ずる不平や不幸を忍從する必要が無かつたけれど、間も無く平等から生ずる不平不幸を忍從せねば成らぬ事と爲り、其忍從の方が前の忍從より苦痛が甚だしいので、何時の間にか元々通りの不平等なる非社會主義の社會に復歸して了つたと申します。人間の天性から出る因襲は、人爲とは云へ、實は自然でありまして、之を取除けば、之よりも以上の苦痛が湧起ることが多いのでありま す、今の婦人の境遇も、種々の因襲に因はれて居るとしても、矢張り其の因襲の中には到底取除く事の出來ぬ種類も隨分多いことを認めねば成りますまい。

九、改む可き因襲

其れならば如何なる因襲は取除く方が好いか、如何なる風俗は到底取除くことが出來ぬのであるか、私しは愈々此區別を明言すべき場合に達したと思ひます。

勿論『人』と云ふ點に於ては男と女との區別は無い故、男に人格を認む可きと同じく女にも人格を認めねばならぬ。男が自個の判斷を以て自分の事を決するが如く、女も自分の判斷を以て自分の身に係かる事柄を決せねばならぬ、爾して自分の判斷に出た事柄に對しては自分で責任を負はねばならぬ。是れだけは則ち無論であります。

故に、是れだけの事をさへ女に許さぬ樣な風俗は取除く可きである、改良す可きである、之を結婚の事より申しますれば（此論の眼目が結婚問題である故）良人を選ぶに於て少しも娘自身の判斷が用ひられず、一も二も無く單に父母の判斷にて定まると云ふことは、即ち女の人格を認めぬに當ります。唯だ其女が、全く判斷力を持たず、ヨシ判斷力を持つとしても、判斷を作るほどの智力も經驗も無く、不斷何事も單に父母の判斷にのみ縋り、自分の判斷に對しては自分で責任を負ふほどの了見も無い樣な場合は格別であります、今までの婦人には斯樣な方も無いでは無かつた。故に斯樣な婦人ならば、單に父母の選びに忍從する外は無いのでありますけれど、今の婦人は、孰れも多少の教育が有つて、多少は世間をも知り、同じ年齡の男子に比し智力に於て甚だしく劣る所も有りませぬ故、自ら良人を選ぶとか、又は自分の判斷を以て父母の選びに一任するとか、或は父母の選びを參考として、自分が最後の決定を下すとか、孰れにしても自分の判斷と自分の責任とを以て決するが當然でありませう。

十、改め難き因襲

此の當然の程度に負く樣な風俗や因襲は取除く可きであります。猶ほ此點に就ては私しが前章に述べた所を參考すれば能く分ります。けれど、是よりも以上に出で、結婚其者を一種の風俗因襲たるに止まるとして、單に自分の戀愛を以て配偶を定めるなどと云ふことは、取除く可からざる點をまで取

除かんとする者であります。

エレン・ケイ女史の論は其れで有ります。但し女史のみでは無く、我が國の『新らしき婦人』の思想中にも幾分か是れに似通ふ點が有ると見え、曾て青年會館で催された青鞜社の講演會に關する記事を讀んでも講演の中に斯樣な意味が見えた樣であります、尤も其意味は、婦人の口から出たのでは無く、講演者の中に加はつた男子の意見であつたかも知れませんが、孰れにしても是れは婦人問題に關係する人か、心得えねばならぬ區別であると私しは信じます。

今の社會に於て、結婚と云ふ事は一種の契約であります。道樂や氣紛れでは有りません、既に契約で有つて見れば、結婚は男の方へも女の方へも義務を生じます、此義務は、双方又は一方の我儘を以で振捨てる事は出來ません、此點には其他の契約と同じく法律上の制裁の加はつて居るのが各國の風俗であります。

是れが取除く可き風俗でありませうか。私しは今迄も度々結婚の事を申しましたが、常に義務と云ふ點から論を立つるのであります。職業上の契約が義務を生ずる如く、結婚も義務を生じます、又職業が人生の免る可からざる忍從である如く、結婚も免る可からざる忍從であつて、相手を選ぶことは宛も職業の種類を選ぶが如く當人の自由でありますけれども、此選びは矢張り義務の觀念から出でね

ばならぬ。職業を選ぶのと同じ觀念を以て、前途の利害をも、從來の義理合をも、遠く廣く見渡したる『熟慮の上の判斷』から出ねばならぬ『熟慮の上の判斷』は自分の戀愛の心と合する場合も有り合せざる場合も有りませう。

十一、熟慮の結果か戀愛の結果か

エレン・ケイ女史の趣意に由ると『人は戀愛さへ生ずれば結合す可きである、其結合は法律の上の手續きを得ると否とに拘らず道德的である、戀愛が消滅すれば分離すべきである、其分離は法律の如何に拘らず道德的である。又戀愛が無い以上は、法律上の手續きが如何に完全でも、其結合が不道德である、總て戀愛の無い男女の結合は不道德である』と、斯う云ふのであります。此意見は、卽ち結婚が『熟慮の上の判斷』に出ることをさへ、取除く可き因襲であると云ふのであります、此點に於て私しと女史との意見が違ふのであります。

今までの日本の結婚は、必ずしも、當人の『熟慮の上の判斷』に出た者で無い故、私しは此點へまでは、因襲を取除いて進み行かしむるが相當であると信じます、エレン・ケイ女史は『熟慮の上の判斷』に由りて結婚することを不道德であるとし、何でも彼でも男女の結合は戀愛の續く期間に限る、少しでも此期間を越えれば、其れだけ不道德である、惡事であると云ふのであります。結婚は戀愛の

みから出づ可きで、戀愛以外の何者からも出づ可きで無いと云ふのであります。

女史の意見の如く戀愛は卽ち結婚である。法律でも無く契約でも無く、義務でも無く、結婚は單に戀愛から出づ可き者であるとすれば、婦人の忍從が少くなるでありませうか。

十二、忍從の輕減か重加か

女史は婦人が因襲に忍從するに反抗して斯る論を爲すのでありますが、女史の意見は果して婦人の忍從を輕くするでありませうか、女史は申されます『戀愛の心は動もすれば冷却し、又他の男へ移る者ゆゑ、其の場合には今までの良人を捨てゝ新らしき相手と結合するのである』と。斯くすれば家庭と云ふ者には少しも安定が有りません、妻と夫と子と、此の三者の結つた家庭は何時、妻又は夫の戀愛心の動搖の爲めに破壞するかも知れません。其れでは家庭なる者は常に大なる不安に忍從せねばならぬ、何時破裂するかも知れぬ、火山の巓に住む如き不安が常に家庭を襲ふのでありませう。

十三、家庭と云ふ者の意義

人が家庭を作ると云ふ事も、成るほど一種の因襲でありませう。けれど此因襲は人間の先天の性質から出て來るので、如何に社會を作り直すとも、人は何うしても家庭を作るに至ることを免れぬでは有りますまいか。家庭と云ふ者は、危害に對する隱れ場であり、職業上の艱難辛苦より逃れる休養所

であり、兒童の保育所であり、ヨシヤ因襲の塊りであるとしても亦『熟慮の上の判斷』と合した者で、私し共は之を安定にし之を泰平にすることは、人類の大なる幸福であり必要であり、此幸福と必要とを得るが爲めには、他の點に於て多少の忍從を受くることは止むを得ぬと信ずるのであります。

十四、更に生ずる大なる忍從

忍從に反抗するエレン・ケイ女史が此點に於て別樣の忍從を說くは奇觀であります、女史は申されます『戀愛の移るが爲めに自由に配偶を取替ゆるとは、如何にも家庭の不安であらう。けれど、自分の自由より生ずる不安であるから、是れには甘んじて忍從せねばならぬ』と。

けれど、家庭の不安は、夫一人又は妻一人のみの不安では無いのであります。妻の愛が動搖すれば、夫と子と兩人が不安に忍從せねばならぬ。妻の愛が他に移れば、夫と子と兩者が不安に陷らねばならぬ、一人の自由の爲めに兩人に忍從を强ゆると云ふことは、小なる忍從に反抗するが爲めに更に大なる忍從を持來る譯ては無いでせうか、實を云へば夫と妻と子と、三人ともに常に不安を免れぬでは無いでせうか。

因襲を取除かんとする結果、更に大なる因襲を作り出し、苦痛の忍從を輕くせんが爲めに、更に大なる忍從を持來らねばならぬのは、是れは人生の本來に、何うしても矛盾を免れぬ點が有つて、其の

點から止むを得ず因襲が生ずる爲めであります、如何に因襲を改良しても、人生の先天的不完全に出て居る點だけは取除く事が出來ません。（明治四四・一二）

余が信ずるエネルギズム

諸君、私の問題は『余が信ずるエネルギズム』と申すのです、今日の會は露西亞に對する實地問題て空理の問題てはない、所が私の演題は一種の道徳論で、空理中の空理でございます、けれどもエネルギズムは今の世界に於て到底爭ふとの出來ない眞理と見做されて居る大なる道徳の主義であります、實地の問題に熱中する人も參考の一端に、聞いて置くも宜しからうと思ひます。

先刻來の辯士諸君は、或は財政の上からも、或は萬國公法の上からも、又は海軍の力の上からも論じて、最早や餘す所が無い、只だ一つ道徳の點のみが殘つて居るかと思ふ、其れだから、私は道徳の點から論を立てゝ見たい。

諸君、今日の狀態は全く前辯士の說の通り、露西亞が恰も足を揚げて日本の顋を蹶飛して居る樣な者である、苟くも正當防禦の何たるを解する者は戰はざるを得ぬ、然るに此際に猶戰ひを非とする人は、正當防禦をまで無視する者て、語を換へて云へば絕對的の平和論者だ、何樣の事情の下にも戰爭

は人間の爲す可き者て無いと云ふ極端の非戰論者だ、即ち利害や國是にも頓着せぬ凝固まりの道德論者だ、自分が今玆に斬られ、踏まれ、叩かれても戰爭は出來ないと云ふのだ、首を斬られても身體を蹂躪られても戰はぬと云ふのだ、此の樣な絕對的非戰論者が今の實際に澤山有らうとは思ひ得られぬけれど、翻つて又思ふに今日の內閣諸公が、或は此の極端な道德先生の亞流では無からうかと疑はざるを得ぬ、爾も無くばアゝ迄も我慢强く辛抱することは出來ぬ筈だ、諸公が何樣な道德主義を抱いて居るかは知らぬが、今迄の我が國で云ふ五常卽ち仁義禮智信の道德から云ふても、今は確かに戰ふ可きであります。

先づ事實をお考へ成さい、現今朝鮮の北部に居る同胞は露人の跋扈の爲に疑懼の念に堪へず、營業も財產も生命も安全を得ず、我が本國に向つて只管救ひを求めて居ります、其の叫び聲は我々の耳に聞える樣な氣がするでは有りませんか、之を見殺しにすることが出來ませうか、人道の第一義は人の生命に在るので、苟くも我が國の臣民がヨシヤ一人たりとも海外に於て敵國の壓迫の爲に生命が危險だと有れば、事情に係らず、軍艦を出して之を救はねば成りません、彼等は實に戰々兢々として旦夕も計られぬと云ふ境遇で有ります、これを救ふのは五常道德の第一たる仁であると思ふ。

而して露西亞と我々が戰ふのは、全く東洋全體の平和の爲であるから義戰である、即ち仁義禮智信

の第二たる義に當ります、東洋第一の强國で有りながら、東洋の平和が永遠に害せられるのを傍觀するは不義であります、旣に孔子が二千年前に叱つて居ります、『義を見て爲さゞるは勇なきなり』と。

諸君よ、軍艦は一國の大禮で有ります、今や露西亞は充分に禮儀を盡し正々堂々と軍艦を差向け砲臺を築きなどして戰爭の禮に於て殘す所なく、武士ならば麻裃に大小を佩き威儀を正して我に向つて居るでは有りませんか、吾は嘗て謠ひました『北客能く來らば何を以て酬いん』と、諸君よ此の禮儀正しき北方の客人に吾々は宜しく何を以て酬いませう『彈丸硝藥是れ膳羞』では有りませんか、彼の軍艦に對して我も軍艦を以てし、彼の砲臺に答へるに我も砲臺を以てするのが、仁義禮智信の禮では有りませんか。

次に我が國の人口たるや年々歲々增加して來る、其の人口を滿洲方面に移すのが一番宜いと云ふことであるから、これを實地に行ふのが卽ち智に當るのであります。

彼は撤兵條約なるものを締結し、今や旣に其の最終の期限も經過して居る、彼をして之を實行せしむるのは卽ち信ではありませんか。

私は內閣諸公の能く知つて居る五常の道德に考へても、ドウしても戰はなければならぬ場合だと斷言します、併し私は仁義禮智信よりも、猶ほ深く道德の根本に立入て考へ度い、少し込み入つて分り

にくいお話に成りますが、先づ世界萬物の奥底から考へませう、本當の道德は學者の作つた說では無い、物質の根本から自から生れて出るのだ、是れが本當の道德で私の云ふ『エネルギズム』です『エネルギズム』を能く味へば『平和』とは何か『戰爭』とは何か、平和が何れほど貴重すべきか、戰爭が何の樣に道德眼に映ずるか等の道理が能く分る、諸君よ、今の科學者の斷言に依りて天地萬物の元は七十有餘の元素で有ります、元素の更に元素は元々素と稱して微妙なる一種の力であります、此の力をエネルギーと云ふのです、エネルギーが樣々に結合して萬物と爲るので、吾々人類としてもエネルギーの塊りたるに外ならぬ、其れだから物の本體を考へるにはエネルギーから割出して見ねば分らぬ、エネルギーは何である、單に力である、活動して暫くも止まることの無い強い精力である、自分の向つた方へは何處までも猛進する、少しも恐れを知らぬ、疲れを知らぬ、彼は常に活躍の氣に驅られて居る、今此のエネルギーに平和と云ふ者が有るか、戰爭と云ふ者があるか、無論ある、彼は何處迄も猛進するのだから他のエネルギーと衝突する、衝突が戰ひで、衝突せずに唯だ活動して居る間が平和である、平和とは其の者の一定したる性質に外ならぬ、併し他と衝突するが爲に平和が破れる、破れて戰爭をするのである、戰爭の結果は何うなるかと問へば、衝突した雙方が力の平均した所で止まるのだ、或るエネルギーは衝突の結果で他の者と結び附きて水素となり、或る者は酸素とも炭素とも其

の他の樣々の元素ともなる、元素と爲れば又元素だけの一定の性質を得るから、玆に元素としての平和が出る、元素は卽ちエネルギーとエネルギーとの力の平均した狀態であつて、平和である、サア玆て考ふ可しだ、元々素は自個の平和、自個の性質を遂げるが爲めに戰ふのだ、戰ふと其れよりも、一段上の元素と云ふ所に力が平均して一定の平和を得る、だから戰へば其の結果として更に向上した平和を得ると云ふのが萬物の根本の原則だ、此の原則が何處までも貫いて居る。

元素は元素として元素の平和を得るけれど、旣に其の本來が猛烈なるエネルギーの塊りだから、矢張りエネルギーの性質に驅られて又他の元素と衝突する、卽ちまた戰爭する、假令へば水素と酸素と衝突したとお思ひなさい、兩者は激烈に戰爭するが、力の平均した所で水と爲りて水相當の平和を得る、諸君よ、水は元素より一段向上した物質では無いか、卽ち元素は戰爭の爲に一段位が上ぼり、上級の物質と爲つて上級の平和を得るのだ、總ての物質が皆此の通りだ、平和が有れだ必ず物質が有る、力が有る、力が有れば必ず衝突する、戰爭する、戰爭すれば必ず力の平均する所まで戰爭が續く、其の平均した所に上級の平和が出て來る、斯樣にしてエネルギーが段々と上に進步し、水とも爲り土とも地球とも爲り、太陽とも爲り生類とも動物とも人類ともなる、是れが卽ち萬物の進步だ、向上だ。

是に由て觀ますると、萬物は根本から戰爭を免れぬ、戰爭せねば進步せぬ、向上せぬ、段々に向上

し進步して、人類と云ふ萬物の靈に到つても、矢張り根本の猛烈なるエネルギーが籠つて居るから、唯だ猛進する、唯だ自個の性質を擴張しやうと勉める、其の結果は人類と人類との戰爭だが、戰爭の爲めに向上して村が出來る、部落が出來る、國が出來る、制度、法律が出來る、斯く村や國が出來れば、村として又は國として人類は向上し、村相應、國相應の平和を得るが、國と國とが又々戰爭をする、戰爭をせねば何うしても治まらぬ、戰爭をして何處に平和が來るかと云へば、雙方の力の平均した所に平和が出來る。

其れだから平和と云ふ者は戰爭の結果に外ならぬ、戰爭は進步と云ひ向上と云ふ者の前提たるに外ならぬ、苟くも平和を得やうとすれば常にエネルギー卽ち力を强くして、他の力の强き者と力の平均を得ねば成らぬ。

今の世界萬國は總て力と力との平均で平和を支へて居る、之を國際上では權力の平均と云ふのだ、權力の平均する所が卽ち平和である、今の國家は總て權力の平均で平和を保つて居るのだ、之は萬物の根本の道理が、國際の上に現はれて居ると云ふ者である、之を國家的の平和と云ふのだ、其れだから苟くも國家として平和を得んが爲めには、他國が持つて居るだけの力を持つて居ねば成らぬ、而して他國が出す丈の力を出さねば成らぬ、他國がする丈の事をせねばならぬ、之をせぬ日には他國が獨

り存して我が國は潰れて仕舞ふのだ、若し他國が我に對して戰ひの態度を取る時には、我も戰ひの態度を以て之に應ぜねば成らぬ、之に應ずるには眞逆の時には戰ふと云ふ覺悟も必要である、其の結果として實際に戰ふことをも避けては成らぬ、併し此の戰ひは平和の回復する爲である、國家を更に進歩せしめ向上せしむる爲めである。

實際の有樣を見れが能く分ります、總て平和と云ふことは力の平均から出るのです、若し一方が强くなるか或は一方が弱くなれば、平均が破れるから、其れと同時に平和が破れます、今日の事例を御覽なさい、我が東洋の天地で、殆ど平和が破れ掛けて居るのは是れ何の爲めであります、東洋に於ける露國の力が勃然と强くなつて、他の國々の平均が紊れた結果では有りませんか、更に其前に溯ぼれば、淸國と云ふ國家が弱くて自ら國内の匪徒や內亂を取締る事が出來ず、列國と對峙する事が出來なんだが爲めに平和が破れた、又其前を尋ねると、朝鮮と云ふ國が弱かつたから平和が破れて、日本と淸國との戰爭が起つたので有ります、諸君よ、是で見ると決して强い國のみが戰爭を起すのでは有りません、弱い國が戰爭を招くのです、弱くしてさへ居れば、他國に頭を下げてさへ居れば、交涉に交涉を重ねてさへ居れば、戰を逃がれることが出來るなどと思ふのは大間違ひです、相手より强くても平均が紊れる、弱くても平均が破れる、平均の破れる所が即ち戰爭の起因です、私は敢て國家は他國

より强く無くては成らぬとは主張しませんが、他國より弱くては成らぬと主張します、他國が戰ひを挑む場合には、應戰せねば成らぬと主張します、戰を恐れて國家を失ふことは斷じて出來ぬと主張します。

試みに逆捲く浪の大洋を御覽なさい、水や風に籠つて居るエネルギーが實に盛に戰つて居るでは無いか、是は何の爲めだ、局部と局部各々のエネルギーが平均して居ない爲めである、若し眞に各局部のエネルギーが平均したなら、海の面は鏡の樣に平かに成るでは無いか、併し總體から云へば大洋のエネルギーは先づ大體に平均して居る、其れだから荒れると云つた所で、波の立つ位のものだ、津浪の起る位のものだ、海の底から覆へるに至らぬ、今假りに浪の荒れて居るのを戰爭と見做し、何うすれば平和が得られると云へば、若し此の浪と力の平均するだけの、大きな船を作つて乘出せばよい、船の力が波の力に平均すれば至極穩かである、若し船の一部に弱點が出來て御覽なさい、直に穴があいて、浪が浸入します、水が洩ります、決して平和は保たれません、若し船に穴の出來た場合に何うすればよい、全力を出して穴を塞ぎ、浪に抵抗する所以の道を盡す一方である、若し此理を忘れて、今の平和論者の樣に平和の祕訣は抵抗せぬに有るのだと思ひ、唯々諾々として波の浸入に是れ從へば何うである。平和は益々紊れるのみだ、紊れた極點は船其の者の沈沒に終るのだ、船が沈沒して了へ

ば、波は抵抗者の無くなつたのを喜び、其れこそ眞の鯨波を擧げるでせう、勝鬨を擧げるでせう、且れで平和になつたと云ふでせう、けれど諸君、肝腎の船が無くなつて、乘組んで居る我々が溺死して其の後で海のみが平和だとて、その平和が何になりませう。

我々は平和を望みますけれど、本尊を沈沒させて其の後の平和は望みませぬ、諸君よ、本尊たる我が乘込船に浸水のする場合には、ヨシヤ浪に抵抗して穴を塞いだとて或は無益かもしれません、抵抗しながら浪に負けて終に沈むかも知れません、けれど沈むまでも抵抗せねばならぬのです、若し戰つても國は亡ぶと云ふ場合に、戰はねば猶更ら亡ぶので有ります、何うせ亡ぶるなら抵抗せずに滅びやうなどと云ふことは、我々自體の神髓を爲して居るエネルギーが許さぬでは有りませんか、今の東洋の時局に於て、我が國に平和を勸むる道德論者の論は、宇宙の大眞理に負いて居て、少しも根據が無い、其中に或人は云ひます『戰爭は基督教の主義に負く』と、成るほど基督教では右の頰ぺタを打たれたなら、更に左の頰を向けて打つて貰へと云ふものだ、けれど能く思ひ給へ、斯る道德は基督教徒の說くは尤もである、教徒の信ずる所に由りて、人と人との上には神樣が有つて、總ての惡人や惡事や惡行を罰して下さるのだから、打つた奴は打つた丈けの罰を受け、打たれた者は褒美に與かると云ふから、幾等打たれても搆はぬと云ふ論理が立つ、けれども國と國との上には何樣な神樣が有るか、

一個人の行ひを支配する宗教の信念を以て、直ちに國と國との信念とすることは六かしい、今若し日本が露西亞に潰されたとすれば、何處の天國から裁判官が下つて來るか、ドウ云ふ神様が來て露西亞を永久の火の地獄に落して罰し、日本を天國へ連れて行つて褒めて呉れるか、決してサウ云ふ時に當になる神様は國の上には無い、ソンナ考へで此の國際を料理したならば實に大變な話である、我は對島と云ふ右の頰を打たれたから、今度は九州と云ふ左の頰を打つて下さいと云ひ、樺太と云ふ上衣を奪ひ取られたから、北海道と云ふ下着をも取つて下さいとて差出しますか、成るほど斯うすれば平和には成りませう。けれどそれは日本と云ふ我々の本尊が滅亡した後の平和です、露西亞人の喜ぶ平和で、我々日本人の喜ぶ平和ではありません。

又或る一派の非戰論者は云ひます『露西亞と日本の戰爭は國と國との戰爭じやない、軍人と軍人との喧嘩である、政府と政府との私爭である、故に我々國民たる者は之に賛成することが出來ぬ』と、諸君よ、軍人とは何者でありますか、我々人民は日々に夫れ〴〵爲す可き責任の業務がある、業務を以て國家の爲めに盡すのだ、業務を抛つて戰爭に出ることは出來ぬ、それだから同胞の中から戰爭に適する人々を召し出し之に戰爭を委託してある。又政府とは何で有ります、政治の方面で我々を代表するものが政府であつて、軍事上に我々を代表するものは軍人である、軍人も政府も我々の他人で無い、

我々の敵で無い、我々の代表者だ、然るに彼の非戰論者は我々と軍人とを敵對の者と誤想し、軍人の戰ひだから我々は賛成せぬと云ふ、國と云ふ思想が何處に在るか、我々は國家と個人との別を知つて居る、軍人が我々の國家の干城たる職責を忘れて、若し國家を害する場合には、軍人と云はさぬ、一個人である、亂暴な一個人である、暴客である、暴客を軍籍から取除いて、更に國家の干城に適する如き軍人と取替へることが出來る、國民の利益を蹂躪するやうな軍人に、何の氣兼がいるものか、更に戰爭に勝てば、政府が威張るだらうから困るなどと云ふのもある、政府が若し國家を害するなら、國論を以て政府を斃せば好い、新に内閣を作ればよい、政府を恐れ軍人を恐れることが過ぎるから、軍人の跋扈とか、政府の威張るとか云ふことが心配に成つて來るのだ、エネルギズムを信ずる我々國民は、其の様な神經病者の鬼胎に導かれることは出來ぬ、私は寧ろ大に跋扈する様な力强い軍人と、大に威張る様な强固な政府とが欲しい、今は其の様な軍人や、其の様な政府を手先に使つて、我々自ら大に外國に向つて跋扈し、我々自ら外國に向つて威張らねば成らぬ時で有りませんか。

今の時は是れ、既に東洋と西洋とが境を接して隣同士となつたのだから、東洋の中でも殊に其の先鋒たる我々日本國民は、商業にも工業にも學問にも經濟にも軍事にも、有る丈けのエネルギーを出して戰はねば成らぬ、一歩でも他國に負けては成らぬ、戰ふ所に平和は來るのだ、戰へばこそ向上する

のだ、國の有るうちは戰ふ者と覺悟して、唯我が精力を一直線に進めて行けば、其うちに自然と國境が無くなるのだ、國境の有るうちに我が國を忘れては成らぬ、絕對的非戰論者は動もすれば國境の撤去を唱ふるが、撤去の手段は戰爭する外は無い、戰爭の極度、向上の極度、全世界の力が全く平均した時は、始めて國境が撤去せられ、始めて世界的の平和が來る、世界的の大平和は私の云ふエネルギズムで作り出すより外に道は無いのであります、これに依て私は聲を涸らしてエネルギズムの贊成を求める、何の場合にも戰爭の覺悟が無くては成らぬ、覺悟とは虛喝で無い、掛引で無い、場合に依つては猛然として進み、眞劍に戰ふ事であるのだ、私は眞に此の意見に於て、全國民の贊成を得て居ると信じます。

大哲學者逝く

英國の學者ハーバート・スペンサー先生死す、吾等は世界の爲めに、學藝の爲めに痛く之を惜む、吾等、先生と地を隔てゝ住し、謦咳に接する能はざるを遺憾とせり、然れども先生の書を讀むこと二十年、私に師の如く先生を敬し、弟子たるを得んことを以て平生の望みと爲しぬ、先生の書一冊の世に出る毎に未だ曾て師の聲を聞くの想を以て之に對せざるはあらざりき、自今復此の事あるを得ず

悲しい哉。

蓋し先生が學者としての地位は多く疑はれたり、或者は先生を以てオーガスト・コムトの學派と爲し、或者は先生が、深奥なる哲理を談じながら獨逸の書を解する能はざるを笑へり、然れども晩年に及びては先生の勢力、宛も雲表に聳ゆる白山の、高く衆峰を壓するが如くなるに至りぬ。

社會學者レスリー・ソード曰く『今日の文明に寄與したる眞の哲學者は世界古今を通じて唯二人あるのみ、古に在りてはアリストートル、今に於てはスペンサー是なり』と、人或は溢美と爲す、然れども溢美に非ず、世の哲學者と稱する者、冥想に馳せて事實に遠ざかり、甚だしきは先づ『絶對』なる者を立し、之より演繹して宇宙と人生とを獨斷す、而して學ぶ者の解し得ざるや乃ち云ふ、『乃公の哲學深奥なり俗人の解する所に非ず』と、カント、ヘーゲル以來の獨逸哲學の如き概ね是なり、然れども世に事實を根據とせざる純理は有ること無し、哲學の眞理も、獨斷より演繹すべからずして、事實より歸納す可きこと科學と異ならざるなり、眞理は事實より歸納するの手段に由りて始めて人間の手に入る可し。

歸納的哲學者は古より之れ無きに非ず、ベーコンの如き其の著しき者なり、然れども彼れすらも、アリストートルの如く博からず、先生の如く明かならず、況んや其の他をや、先生は實にアリストー

トルの博ありて明は則ち之に過ぐ、世界古今の二大哲學者の一たる所以なり。

近時は歸納的哲學者の最も著しき者をダーウヰンと爲す、彼は多くの學者が專稱する如く眞に『眞の哲學者』なり、然れども先生の進化論はダーウヰンより一年前に活字に組まれたり、ダーウヰン自身も先生に得たる所多きを云ひ、先生を大哲學者と稱せり、而かもダーウヰンは先生以上の明ありて、先生の如く博からず、哲學者たるよりも寧ろ眞の科學者なり。

殊に先生の社會學は、其の初出に當り多く人の嘲りを招きたるも、今の世界の大學に殆ど社會學講座の設け無きは莫きに至れる者豈に先生の功に非ずや、若し夫れ先生の進化的倫理論に至りては、全く數百年數千年來の倫理學說を一變し、人間の心胸より迷霧を一掃し去りたるが如き慨あり、哲學上に於ける其の功績は物學上の如何なる大發明にも劣ること無し、先生は科學界、哲學界、思想界に於ける十九世紀の大偉人なり、先生は獨身主義の人、身を終るまで自ら奉ずること甚だ薄かりしと云ふ、蓋し實行道德より云ふも稀有の偉人中に數ふ可し、今や則ち此の人亡し、嘆ずるに堪ふ可けんや。

美文以外の文章美

美文とは詩、歌又は戲曲、小說等の如く文章の味の爲めに人に賞美せらるゝ文章を云ひ、美文以外とは總て實用の文章を云ふ、余は美文を論ずるに非ず、美文ならざる實用の文章にも美文の如き美なる所が欲しやとて所思を述ぶるなり。

但し自ら名文を作り得ざる人が他の文章を是非するは僭越にも似たれど、余は自個を作者の地に置きて論ずるに非ず、批評家としてにも非ず、單に素人的の識者として注文を述ぶるなり、何事にも當局者と見巧者即ち批評家と一般の見物との三者あり、譬へば相撲に於て、見物が大砲は緩し梅ヶ谷は前に落つる恐れありなど自個の所思を述ぶるは當然の事なるべし、然らばとて大砲が其の見物に向ひ『其れでは私と取組んで御覽なさい』と云ひ、又は梅ヶ谷が『其れでは私に叩かせて御覽なさい貴方は前に落ちませんか』と云はゞ、客は無論閉口せざるを得じ、併し角力は客に看せん爲めに取組む者なれば客の批評が見巧者の批評よりも大切なる場合あり、文章も實用の爲めとは云へ、人に讀ましむるが目的なれば、作者たり批評家たる者の批評よりも、讀者としての批評が或は作者の傾聽す可き價値あるやも知れず、料理は庖丁を取る人にして始めて是非を評し得るに非ず、此の料理は鹹からしとか

甘過ぎるとか、誰でも其の料理を食ふ人が評するなり、斯く余の地位を明かにして、然る後に余は云ふ、今の實用文は餘まり『旨味』が乏し過ぎるなり、近時出版の盛なるは、其れ丈け文章の實用が多くなりたるにて誠に結構なれど、余は未だ文章の好く出來たる著書を見ず、頗る有益の書と知りて之を讀まんとするも、如何にも文章が無雜無味にして終まで無事に讀む能はず、居眠りや欠伸にて卷を掩ふが多し、斯くては折角に、讀者を益せんとて作りし書籍も、文章の惡しきに妨げられて其の目的を達し得ざるにも至る可ければ、誠に雙方の損失なり、余は讀者として世間一般の著作に對し、もそッと文章を美にして下さいと注文するは、著者の喜びて聞く所なるを信ず。

何故に斯く文章の劣れるやと考ふるに、多くの著作者が『文章は意を達すれば足る』と云ふ考を持てるが爲めなる可し、斯る思想よりして近時は言文一致體の文なども盛に行はるゝ事なるが、成るほど『意を達す』とのみの目的なれば言葉通りに文章を書くも可なり、然れども文章は『意を達す』る上に猶ほ『旨味』の有ることを要す、言文一致の文にしても唯言葉と同じき丈にては未可なり、試みに言葉と文章との違ひたる點を云はんか、言葉は人の耳に訴へ、文章は目に訴ふるなり、耳には蓋なきも目には蓋あり、故に文章は人の目の蓋を引開ける丈の力を要す、言葉は人の顏色を見ながら緩急する事が出來て、若し相手が同意せずば胸倉を取りて同意を强ふる如き手段も有れど、文章は何人が

讀むやも知れず何年の後に傳はるやも知れず、殊には人に示す前に幾度にても書き直す事を得る譯なれば、此の邊の差異に、文章が言葉よりも特別に旨からねば成らぬ理由は有る可し。

試みに西洋の著書と日本の著書とを讀較べば、西洋は言文一致なれば、著書は言葉を其儘文章とするには非ず、大に文章に苦心したる樣がページの面に顯はるゝなり、西洋の書は字引無しには讀み難し、日本人に取つては日本の著書を讀むよりは困難なれど、困難ながらも文章の味に引かされて終まで讀み行かれるなり。日本の著書は文句は易(やさ)しきも、著者が讀者の眼を開く丈の、又は讀者を引附けて離れしめざる丈の苦心を文章に籠めんと勉めざる爲め無味に落るなり、勿論西洋にも日本にも作者に力量の多きと少きとの別ある可し、特に拙劣なる作者の文は標準と爲し難し、先づ帝國大學の學士博士先生の著書ならば標準として可ならん。曾て大學の有志達が、日本に科學の趣味を普及せしめ度しと相談せしこと有りと聞く。既に普及と云へば成る可く文章を旨くして普通の人の腹に能く浸込む樣に書く可きは勿論なり、其の相談の結果として學藝雜誌を發行したり、是れは米國の通俗學藝(ポピユラルサイエンス)月報(マンスリー)の如くならしめんとの聲言なりしが、今も引續き發行せる故、親しく讀みて其の文章の優劣を見るを得べし、成るほど文章に六かしき所は無し、多くは言文一致の如き體にて、少しも解し難きには非ず、然れども人をして欠伸や居眠り無しに讀み終らしむる如き引力ある文章は皆無なり、文章のみ

の點を云ふも米國の一雜誌に如かざること雲泥なり、特に科學趣味の普及の爲めにする雜誌にして文章に無頓着なること斯の如し『余は此頃コロンビヤ大學講師ウヰルソン氏の細胞發達及遺傳論を讀み。或る蟲の合體に就き日本帝國大學の博士石川千代松氏の研究せし材料の引用せらるゝを見たり、實に石川氏は日本の名を世界に高からしむる學者なり、何れの國の動物書を讀みても、石川氏の名に逢著せざることは難し、併し余は其の蟲の日本語の名前を知る能はざりし故、書肆に賴みて石川氏の著書を取寄せ、其の蟲が『夜光蟲』と云ふ名なるを知り得たり、其の賜たるや深く石川氏の勞に謝せざるを得ず、然れども余は有體に謂ふ、余はウヰルソン氏の書を讀み得るも石川氏の書を頭痛無しに讀むこと能はず、邦は文章の劣れる爲めなり、余は日本の博士の文章として石川氏の文に遺憾あり、石川氏は文章の人に非ると勿論なり、然れども苟くも書を著す以上は、著者たるの責任として讀者の頭痛を豫防する位の深切は有りて可なる可し、余は特に斯く一個人の名を指すは、憚り無きに非ず、併し唯だ實例として止むを得ず多くの中の一人を指稱するなり、石川氏のみが惡文なりとは云はず、總ての文章が唯だ意をだに達すれば足れりとして、其の以上の旨味を文に加ふることを勉めざるを患ふるなり、或は余が見たるは特に文章の旨からざる極端の例なるやも知れず、或人曰く『子は未だ坪井正五郎先生の文を知らざるなり』と、余は石川氏を尊敬する如く坪井氏を尊敬す、氏が學者には珍しきほ

ど文才に富み趣味に富めるとも余は敬服す、然れども坪井氏の文章を博士社會の誇とするは、博士社會の文章か如何に程度の低きやを表するより外に何事をも表せざるなり、或人曰く『汝は未だ中島力造氏の簡潔にして趣味に富める文章を知らず、元良勇次郎君の精密細微、説き盡さざるは無き心理學を讀まざるなり』と、余は答へて云ふ、余は余の腦の健康を重んぜざるを得ざる事情あり、甚だ頭痛を恐る、余が此の臆病は二氏の書を讀むことを御免を蒙りたき口實と爲すに足らざるか。

聞く所に由れば石川博士は生物學の爲めに獨逸に行き、親しくワイスマンの許に出入し、彼を助けて種々の研究を爲せしこと、宛も北里博士がコッホを助けたるにも比す可かりしと、若し學殖の上より比較せばワイスマンにも劣らぬ程の地位に在る者なる可し、然れども文章の力は、ワイスマンに感化せられざりしと見えたり、余は多くワイスマンの書を讀みたりと云ふこと能はざるも、通例生物學に心を寄する人が、讀まずには過ごし難しと見做せる彼の重なる講演は一讀したり、彼が遺傳の論に就きて英のスペンサーと爭ひたる數回の議論の如きは、殆んど全世界の學者が目を刮して見たる所の者にして、最も痛快なる文章なり、石川氏にして、其の學殖に於てワイスマンに似たるが如く、文章に於ても彼に似たらば、吾人の敬服は一層深かる可し。

又聞く博士坪井氏は英國に行き親しくハクスレーの學室に出入し、彼の知識の底を叩きたる人なり

と、氏も人類學において日本の名譽を世界の學界に高からしむる人なり、而して其の人と爲りも其の文章もウヰツトに富めること全く世間の評判の如し、然れども氏の文章を以てハクスレーの文章に比すれば如何、余は殆ど足許にも寄らざる者と云ふに憚からず、ハクスレーの文章は、文壇の珍として美文家にも愛讀せらる、彼の通俗講演は一篇として學者も素人も共に敬服せざるは莫しと云ふも可なり、其の著書に於ても『天然に於ける人の地位』の如き、小冊子なりと雖も始めて人と猿との同祖なるを唱へたる者にして、定めし多くの攻撃を期して起草せし者なる可く、光彩陸離の文章なり、其の書が進化論の歴史の上に百千年の後までも人に忘れられざるのみに非ず、文章としても不朽なる可し、彼の『進化と道徳と』の論の如きも、余は文章として文人の文に見るを得べからざる傑作なるを疑はず、彼がオクスフオードの僧正に答へて『猿が人の先祖たることは證據の連鎖に多少の缺陷あるも、オクスフオードの僧正の先祖たるとは直接に證明せらる』と云ふが如き、或は知識が道徳の元たるを說き『豺狼の兄弟を感化して群羊の忠實なる番人たるに改宗せしめたる靈智なる者は、何ぞ又文明人に存する野蠻の本性を拘制するに多少の力あらざらんや』と云ふが如き、筆力鼎を扛ぐとも稱す可き者なり、彼は世の迷信と爭ふに於て『常に一句にして一世を啞然たらしむる如き絕妙の語を吐きたり。

ダーウヰンの如きも、毫も讀者に不明の意味を與へじと苦心して筆を取りたること其の文章の上に

明かなり、彼の種原論に用ひたる生存努力、自然淘汰等の語とても、自個の意味をば、必要より多くも無く少くも無く最適當に言現はしたる者にして、文章の高手ならでは能はざるなり、スペンサーも特に文字の經濟を論じたる程にて、高遠なる議論に俗調を用ひ、人をして其の措辭の面白さに知らず知らず讀ましむる手腕は、誠に文を作る人の心掛を得たりと云ふ可し。

日本に於ても故福澤先生の文章の如き、學者の文章と云ふに足る、必ずや大なる苦心の結果なる可く、美文以外に文章の美を示したる者なり、文章は達意に在りと云ふも達意以上に美なる點あらざれば人をして讀ましむるに足らず、達意の目的をすら達し得ざるとと爲るなり、西洋の哲學の如き、定めし讀む人に頭痛を感ぜしむるなる可しと思はるれど、議論が高遠なれば高遠なるだけ、益々文章に骨を折る者と覺しく、道理の筋道を尋ねて面白く讀み行かるゝが多し、古より深遠なる議論に特に問答體(ダイアローグ)を用ひたるもの多きも、全く其意見をば成る可く容易に讀者の腹に入らしめんとする作者の苦心なり、近くラスキンに至るまで此の體を用ひたる者あるを見る、推並べて云へば、哲學の文章は小說の文章よりも苦心したるが多かるべし、余は日本の今日の學者ほど文章を輕視する者は、世界に無しと思ふなり。

何故に日本の學者は斯くも文章を輕視するや、思ふに漢學の盛んにして文章を尙ぶに過ぎたる反動にも因るなる可く、猶又種々の原因も有るならんが、其の一は作文の技術を習練することを怠りたる

結果なる可し、今更ら文章に苦心するとも美くしき文章を作り得ざるなり、通例達意の文章は先づ自個の云はんとする箇條を書並べ、次に箇條と箇條との順を正し、其の次に箇條と箇條との間をば『然れども』にて連結するとか『かるが故に』にて連結するとか、其の關係を定め、其の上にて筆を取ることと教へられ、是れだけを知れば最早や文を造るの術を得たりと思ふ様子なれど、眞の文章は是よりも以上の術を要するならん。

余は曾て某所にて『文章の妙とは何ぞや』との題を以て講演したること有り、文章の妙とは、單に心頭に浮ぶ最初の感念を捕へて寫すに在り、感念の一轉する毎に又様々の念を浮べ來るも、其の中にて最初に來る者は、思想の順序として必然に來らざるを得ざる所の者なるを以て、悉く其の最初の者を捕へ次より次に寫し行きたる者が卽ち眞の文章なり、之を捕へるが爲めには、捕へ得るまで稿を改め、字句を正しなどせざる可からず、能く最初の思想を捕へたる文章は、讀者の心の動く自然の道に投ずるが故に、作者の意と讀者の意と相合し、讀者をして大なる苦勞を感ぜしめず、却て多少の面白さを感ぜしむるなり、然れども是は修練して始めて得る技術なり、西洋の學校にて多く古典を講習するも一は此の技術を得せしめんが爲めなるべし、名文の諳誦なども同じく此れが爲めなる可し、唯だ我國の學者は多く斯かることを無用視する者の如し。

次の原因は是よりも思ふべし、余は學者が眞理を愛することの足らざるに在りと云ふを憚らず、夫れ自ら研究して自ら得たる眞理は、實に心血を注ぎたる者なれば、學者自ら之に對し愛兒に對するが如き感なかるべからず、之を世に出だすに愛兒を世に出す如き心あらば、誰とて愛兒が人に笑はるゝを好まざる筈なれば、其の誠心誠意よりして自然に文章をも美にせんと欲するに至るべく、又其の熱誠より自然に人を動かす如き文章も發すべし、余は內村鑑三氏の文章の如きを以て、熱誠に能く人を動かす如き文章を生ずるの實例に供せんことを欲す、若し技術として云へば內村氏は通例の文章家より以上なりと云ふに非ざる可し、然れども字句の間に常人の發し得ざる力あり、直ちに人の頭腦を衝き、深き感動を殘さゞれば止まざるなり、是れ豈に熱誠より自然に發し來るの力に非ずや。

余が最後に擧げんとする原因は、今の思想家に信仰の缺乏せることとなり、信仰は誠意の文にしてまた熱心も之れより來る。西洋の學者には宗教を信ぜざる人も有れど、爾る人々は眞理を信仰するに於て宗教を信ずると同一の熱心を有す、試みに西洋の學者が意見の爲めに如何に相爭へるやを見れば、余が言の事實なるを知る可し、熱心に信ずるものは、其の信ずる所のためには何事をも犧牲にせんとの念をまで生ず、少しにても自個の意見が明瞭に領會せられ、多數の人に理解せられんと欲するは當然なり、從つて文章に注意し、其の語句を選び、これに力を附せんとすることも當然なり、我國の學者

に強き信仰あるか、余は其の缺乏せるを疑ふ、故に多くは前後に顧慮して上を恐れ下を恐れ自から委縮して、文章までも遠慮勝と爲り、力無き者とはなる可し、學者が動もすれば曲學阿世など云ふ面白からざる評判を招くも此の邊の事情には依らざるか。

今の我國は一般常人の思想を高くして世界の風潮に後れざらしむること甚だ必要の際なれば、學者の著す書籍が廣く爭ひ讀まるゝは國家必要の事なるに、唯だ其の文章の注意の足らざるが爲に、讀む人を躊躇せしむるは、單に文章家の遺憾とする問題に非ず、經世家の患ふ可き所なるべし、余は先進學者の著書をば成る可く多く讀み度しと希望する見物の一人として、世の學者に斯くの如き注文するなり。(明治三六・五・二三)

靈魂不滅の說

予は今日深遠なる大問題を揭げて此處に立つた、併し演說に不慣なる上に此の頃咽喉をいため居るゆゑ、十分に述べらるゝや否やを知らず、因て豫じめ諸君に謝するのである。

さて靈魂の不滅と云ふ事は、肉體が死しても靈魂は共に死する者でなく、獨り存在して居ると云ふことであるから、要するに肉體の死した後の事を議論するのである、若し證據を見たいと云ふ日には一旦

死んで見ねばならぬ、死んだ後でなければ靈魂の存在は明かに知ることが出來ない、ソコデ我々は死した後の事を未だ經驗することが出來ないから、之れを論ずるのは或は意味に於て空漠たることで、單に想像に止まると云つてもよい、故に昔から甲論乙駁到底議論が盡きぬ、即ち深遠なる大問題たる所以である、併し予自らは諸書を渉獵して自分の滿足する丈の意見を持つて居て、今日は之を論證せんと欲するのだが、唯だ形而下の事と違ひ、幽妙なる空漠なる事柄だから、用ふる言葉も議論の方法も諸君の耳には或は牽强附會のやうにも、或は人を馬鹿にしたやうな說にも聞ゆるかも知れぬ、けれど、予の今陳ぶるところが、現世紀に於て最も進歩した、最も確實なる學說に根據して居る事は斷言してよろしい。

從來靈魂不滅の說は幾らもある、其中で重なる者は三である、併し此の三には皆それ〲長所と短所がある、或は道理に合ふと云ふ長所が有れば有難味の少ないと云ふ短所がある、又有難味の多いと云ふ長所が有れば悲しい哉道理に合つて居らぬと云ふ短所が有る、予の說く所は道理と有難味と云ふ双方の長所を備へて居ると信ずる、是て無くては信仰する價値は有るまい、先づ今云ふた古來の三說を觀察するに、其一は佛敎の輪廻說の如く靈魂が種々の生物に生れかはると云ふのである、獨逸のショッペン●ハゥーなども略ぼ同說だ、此說に依ると人間が此世界で死んで再び生れ出づる迄には、何千年を要するか何萬年を要するか分らぬけれど、其の死んで居る時間は睡眠時と同樣で自分の感覺に

存せぬから、少しも待遠い様な感じの有る筈は無く、再び生れ返つた時は、晝寢の夢の覺めた様な者であらう、知らぬ時間の長かつたのは少しも苦に成らぬと云ふのである、併し此說では今日の我と云ふ自覺が次の代の我には存せぬ、我は生れ返つても前の世に何者であつたか自ら知らぬと云ふのだから、之を眞理とした所で大なる有難味が無い、これが則ち短所である、自分で自分の何者と云ふ事を覺えて居ぬなら、何も再生した甲斐が無い様な者だ、次に其二の說は何かと云ふと、是は更に新しく、且つ最も學術にかなつて居る說で、米國のドクトル●ポール●ケーラスの說である、氏の說はショ氏よりも一層科學的で即ち靈魂なるものは滅びるものでない、子々孫々限りなく肉體に傳はり行くと云ふ說である、其證據には人の意志が人に傳はり人を感動せしむる、此意味に於て決して靈魂は不滅でないと云ふ、これは簡單の說ではあるが、前說に比しては道理がわかつて居る、しかし之とても亦た有難味は少ない、肉體の死すると共に矢張り我と云ふ自覺が滅びるのだから、殊更に不滅說として玆に主張するには及ばぬ。

予が玆に陳べたいと思ふのは、靈魂が存在するには自分と云ふ我と云ふ自覺が存せねばならぬとの說である、靈魂が生き殘つて居つても、自覺がなければつまらない、前世は楠正成であらうが、觀音堂の椽の下の狐であらうが、又何年前の何屋何兵衛であらうが、靈魂に前身の自覺がなければつまら

ない、自覺がなければ靈魂が不滅であつても、無味にして白湯を飲むやうなものである、若し眞に自覺が存すると云ふ説が有らば其説は前二説よりも有難味が多い、前二説の短所を逃れて特別の長所が有る、其の様な説が有るか、曰く有る、其れは其三として數ふ可き基督教派靈魂不滅説である、其の大體は靈魂が肉體を去つて再び天に上ることを得、基督は基督として自覺し、兄弟姉妹には天に於て再び相會することの出來ると云ふのであるから。此説は有難いには相違ない、併し悲い哉之には學術上の根據がない、獨り基督は昇天したかも知らぬが今日の學問を信仰する吾等は決して其儘に昇天はせぬ、肉體を以て今の我と云ふ儘に再生することは學理上に於て出來べき道理がない、幾干有難味が多くても事實無根ならば有難いとは云はれぬ、要するに其一なるショ氏の説は哲學者流で、其二なるケー氏のは科學的で、其三なる耶蘇教の説は全くウソである、斯様にして從來の諸説は總べて不具説である、然らば此外に、能く學理にも合して、自覺を存すると云ふ有難味を以て居る完全な靈魂不滅の説が有るか、曰く有る、予が今説かんとする説である、今日の哲學も科學も之を否定することは出來ぬ、予は之を論證せんと欲するのだ。

今の我國人が一般に靈魂に對する思想は、彼の故中江篤介氏の無神無靈魂説に一番明かに一番大膽に發表せられて居る、氏が『一年有半』を著はした時、予は之を批評して新聞に書いた、ヌルト氏は

それを見て我が心を得たと云ふださうだが、其後ぢきに無神無靈魂説を出されたから、之に對しても批評を請はれたが、予は異議を唱ふるに忍びざる所が有つて、遂に氏の生前中に書き得なんだは殘念である、今氏の議論の大體を言へば身體は元素の抱合に過ぎない、さうして身體の作用が精神であるから、身死すれば靈魂もなくなる、丁度炭が灰になり薪が燼れば火は同時に消ゆるのと同樣で、靈魂なるものが別に存在するのでないと云ふのである、此説は誠に明白であるが、只表面上のみの議論であつて、深く考ふるときは決して之に服することは出來ない、氏の論は高橋五郎氏の評の如く、全く舊式の唯物論から來たもので、生命は肉體の作用だと云ふとは新式の物質論に於ては認めぬのである、今靈魂の何物なるやを知らうと思はゞ、先づ生命の靈妙なることを知らなければならない、生命は決して肉體の作用では無い、肉體の原因だ、生命が有ればこそ肉體が組織せられ生長せしめらるゝので、肉體は生命の外皮である、決して生命よりも肉體が先ではない、それ故生命は肉體の作用だと云ふ議論は、本末を誤つたものと云はねばならぬ、然らば生命は靈魂と同じかと云ふに、肉體の根源が生命なるが如く、生命の根源か靈魂である、靈魂から生命が生じ、生命即ち『ライフ』から肉體が作られる、故に生命は滅して靈魂は不滅であると云ふ道理が立つのだ、云換へれば靈魂は萬物の生命の根元であつて、靈魂あつて後始めて生命が生ずる、生命あつて後始めて肉體が繼續する、肉體あつて後始

めて進退運動等の作用が生ずるが如きものである。

舊式の唯物論は物質を死物の如く見るから、兎角生物の解釋が六ケしい、吾々は米を食つて生活する、然らば米と云ふ物質には生命の要素が有る、云換へれば物質は全然の死物では無い、その中に生命の根が潜んで居るのだ、若し然らずば物質が斯様に生命として活動するに至る譯は無い、昔の學者は物質をば單に死物と解釋した、今の學說即ち新式の物質論では決して死物ではないと云つて居る、此說をば哲學上てモニズムと云ふのだ、モニズムとは生命と物質と別の物で無く一物であるとの意である、此迄は物質には生命がないと云ふ說であつたから、生命の因つて生ずる原因が分らず、或は特別に生命を作る神様の有る様に唱へたり、又は學說の範圍に落ちぬ或る者が有る様に唱へた、スペンサーのアンノエブルと云ひハックスレーのアグノスチシズムと云ひ、又一般學者がスケプチックと稱するのは是れだ、これ等の議論は歸する所モニズム卽ち一元論の反對で、デユアリズムである、二元論である、ダーウヰンの議論とても動もすれば二元論の臭味がある。

今茲に少し一元論の大體思想を述べて見やう、理は一なりと云ふことがある、二二が四と云ふ道理は何處でも同じことで、元來人間の思想はモニズムによつて成立つて居る、ミルは論理の根本を說いて、『同じ物は相同じ異なれる物は相異なりと云ふ一個の簡單な思想が、論理の一切だ』と云つて居る、

目に見えないものでも、一の道理により推究して行けば分る、此の唯一個と云ふ道理の力は誠に豪いものだ。宇宙の萬般に通じて道理は唯だ一である、譬へば物には必ず厚さ廣さ長さの三側面がある、けれど之を道理から云ふて無側面の物も想像が出來る、即ち幾何學で云ふ『點』である。一側では線、二側面は平面と總て區別は附くけれど、同一の道理が一貫して居る、若し更に四側面、五側面と云ふものはユウクリッドには無いけれど、若し有ると假定すればグラスマンの説に由て矢張り同一の道理から推して行く事が出來る、此の道理に合せぬ者は此宇宙に絶無である、絶對的に存立し得ぬのだ、又或る學者は他の世界には二二が五といふ數理も有るかも知れぬなど云ひ、宛も道理に幾色も區別が有る樣に云ふけれど、畢竟これは二元的の舊想なんだ、數學の理は複雜極りなしだけれど、二二が四と云ふ簡單なる道理より以上に奧妙な眞理は無い、唯だ此の一個の數理が複雜な形に現れるのだ、形は複雜でも原理が一だから解釋が出來るのだ、故に宇宙の一切の現象は總て人間の心的現象と同じ事で、人間の思想の法が宇宙の物質の理法である、人の心に行はるゝ推理の法が天然萬物の上に行はれて居る、宛も人の思想が論理的(ロジカル)である如く宇宙一切の現象が皆論理的(ロジカル)である、それだから此頃は『パンロギズム』と云ふ一派の哲學的見解がある、萬物皆理法と云ふ意味で世界萬有が悉く人間の語法、思想法に同じきを觀ずるのだ、此意味から云ふて實に天然は大文章だ、昔から山川海嶽の秩序整然た

る美觀を稱して『天然の大文章』と云ふけれど、天然が文章であるとは決して其の秩序の整然たるのみで無い、秩序の中に含まれて居る意味が文章の中に含まれて居る思想と同じなんだ、天然と云ひ物質と云ふ者は總て思想的の產物で、一方から云へば思想も同じく天然の產物なんだ、斯く天然の上に思想と同じ理法が貫いて居るので『モニズム』即ち一元論の眞理たることは了解せられる、眞理は宇宙の何の樣な果へ行くとも眞理であつて、此世界で二二が四なら星の世界でも二二は四だ、二二は四と云ふより違つた數理は此宇宙に存す可き『ポシビリテー』が無い、餘地が無い、空漠たる道理も堅實なる物質も宇宙の隅から隅まで皆一轍である、揆一である、同物同質同一である、昔し佛のコントは實驗哲學を著はすに當り、世には到底人間の知識の及ばぬ事が有るとて、其一例として『千萬里の遠方に在る星の科學的成分の如きが即ち其一だ』と記したが、何ぞ圖らんコントが此文句を起草する時には既に獨逸でブンセン、及びキルカツフの二學者が三角鏡で星光の分析を企てゝ居た、今では最も遠隔した星でも其の成分が地球の成分の如く分つて居、星も一個の地球であると分つて居る、宇宙の到る所、物も一、理も一、物にも力にも二致は無い、生も一理、死も一理、死物生物の區別が抑々の過ちで、生命は物の眞髓、物として活力の無きは無く、物質は即ち活物で、世に全然の死物と云ふ者は無い、有機體も無機體も同一に活物で、唯だ組織の程度を異にするのみである、是れが即ちモニズム

で、此モニズム、此一元論に依てゞ無ければ、今の學術界に於て萬有を說明することが出來ない。

物質は活きて居る、然らば机上の此コップも物質だ、之も活きて居るか、然り物質として活きて居るのだ、斯く云へば甚だ不思議に聞えるが不思議でない、活きて居るのは其物の動くので分る、故に生物を動物と云ふでは無いか、草木とても實は動物だ、上に枝が伸び、地中に根が張る、これが即ち動くので、コップとても矢張動く、決して他物の力で動くで無く自個の力で動くのだ、若し玆に此机があつて支へないならば、コップは何處迄も下へ下へと落ちて行く、學者は之を引力の作用と云ふであらうが、引力とは何であるか、詮じ詰むれば物質の自ら動く力に外ならぬ、唯だ物體に大小の別があるから、小物體は大なる物に引かるゝので、双方に他物を引くと云ふ自力が有るは明白だ、他物を引くと云ふ力は他物に接すると云ふ力なんだ、若しコップが地球より大なればコップが地球を引きよせるに相違ない、物質が物質に接近する力を引力と云ひ、物質が物質と遠隔する力を斥力と云ふ、此力が物質の自力で萬物の動く元動力だ、故に物質は他動でない自動である、程度の低い動物である、決して全然の死物でない、それだから今日の進歩した學者は、動力の根本を說明し『モーション、イズ、マインド』(動は心なり)と云ふに至つた、引力は心と心との相引く『愛』の様なもので、斥力は『憎』である、男女の相慕ひ相引くも地球とコップとの相引くも道理は一である、總て物質根本の心である、若し物質の

力を根本まで研究して行けば、何うしても動力は即ち心であると云ふ處まで達せざるを得ない、此心が無機物に現はれた時は引力斥力となり、神經組織に現はれた時は高尙なる心とも情とも成るのである。

物質の單純なる元素、極微分子に溯れば愈々『心』と云ふ外にその動力を說明する道がない、分子は人々の知る如く始終動いて暫らくも休むといふことはない、今の世に分子の活動をとめる機械はまだ發明せられぬ、ガラスの如き物でも又正宗の刀の如き堅密な物でも其分子は常に動いて居る、學者は分子の動く力を筒口を離れた砲丸の力に百萬倍すると云ふ、鐘が鳴り響き凡て物が敲かれて音を發するのは、分子が聲を發するので、唯だ敲かれた時ばかりでなく、常に音響を發して居るのだ、之は人間の耳には聽くことが出來ない、色に顯はれて目に觀らるゝのである、音響が眼に見ゆるといふと頗る奇であるが、色と云ふものは實は分子の聲より生ずる波動が人間の目に、赤とも青とも映ずるので、分子音響の作用に外ならぬ。斯くも微妙に靈動する者を單に死物とは理を盡した說で無い、之を死物としても活々したる活氣が充滿して居るでは無いか、學者はマッターと云ひエネルギーと云ひ物と力とを分るけれど、物と力とが別々に存して居るでは無く、物と力と實は一なんだ、極微分子と云ふ者は最早物とも力とも稱し難き微の極點で、今日の最も進步した定義は之を力の起點と稱するのだ、此の起點が何から出るかこれが疑問だ。

今日の理化學は確かに此の極微分子よりも奥へ入込まんと勉めて居るけれど、此奥は最も靈妙な力の領分と云ふ外は無い、力は即ち心である、宇宙の眞の根元は唯だ力である、唯だ心である、此の力此の心が即ち全宇宙の大なる靈魂である、靈魂と云ふより外に言葉が無い、此の靈魂の發現が、物質とも動力とも成るのだ、人間の身體は物質だけれども其の物質の底には靈魂が横はつて居るは、宇宙物質の根元に靈魂の伏して居ると同一の理である、是は一元論から出る必然の斷定で、自明の理と云ふ外は無い、此の靈魂をば宇宙の因果律の根本とまで認めて、宗教家は神とも云ひスピリットとも云ふのだ、名は何と附けるも、驚く可き大活力であつて、靈とも妙とも言語には盡きぬのだ、吾人が昔から造化又は造物主、又は化育の理と云ふも此の靈妙なる力に外ならぬ。

扨て靈妙なる活力は、心と稱するより外は無いとして、果して人間の心の如き自覺のあるものであるか否や、是は至難の問題であるが、既に心と云ふ以上は、或る意味に於て自覺性の物と見る外は無い、何故ならば心は總て自覺性である、外面から見れば動力と爲つて見え、内面に入りて自分と云ふ位置に立つて見れば自覺であるのが心の本質である、動は即ち心なりと云ふのが玆の道理だ、他から見れば無意識の動力、自個から見れば意識ある自覺性だ、之を自覺性で無いとすれば今までの議論は無意味に成る、動は即ち心なりと云ふ事が自覺性なりと云ふ事を斷言して居るでは無いか、一歩を進めて試に此宇

宙の大活力が、何の樣に發動して居るかを實際の事實に徴すれば、其の自覺性たる事は疑ふ餘地が無い。自覺も自覺、吾人が自覺と稱するものよりも秀絕超絕したる大自覺である、吾人の目擊する一切の生命一切の心思は、總て此の大自覺の活動なんだ、吾人は生れて能く母の乳房を探り乳汁を啜るに非ずや、これは胎兒が自ら經驗した上で乳房の有り乳汁の出るとを知つたのではない、宇宙根本の大自覺が活を求め、吾人を驅りて斯の如きことを爲さしむるのだ、吾人より見れば無意識無自覺であるけれど、其の天然の働きが自覺よりも精密なるに非ずや、蜘蛛が網を張り飛蟲を捕ふるが如きも、蜘蛛其者の經驗に非ず知識に非ず、天然に存する根本の大自覺が、驅りて之を爲さしむるのみだ、舊式の學者は之れはインスチンクト、天性だと云ふが、天性とのみでは說明に成らぬ、遺傳と云ふても說明に成らぬ、何故に斯かる天性が有るか、斯かる遺傳を爲すか、人自ら蜘蛛自ら遺傳する所以を自覺して遺傳するに非ざる以上は、人自らの外蜘蛛自らの外に、人自らを驅り蜘蛛自らを繰つり、其の自らの知らざる所を爲さしめて行く者が無くては成らぬ、之を爲さしむる者をば何故に自覺に非ずと云ふを得るか、是に依りて見れば、生物一切をして知らず〳〵其の生を營ましむる所の者は、吾人の思想に超絕したる大自覺である、故に宇宙根本の大なる靈魂は大なる自覺と認むる外に了解の道が無い、若し吾人の自ら持つて居る自覺をば此の大自覺に比すれば、殆んど比較に成らぬ程の相違である、吾人の一舉

一動一吾人自らの自覺を以てする所は極めて些細である、吾人は自覺を以て食物を食ふも之を消化し分配するは自覺で無い、心臟が血液を司どるも肺臟が呼吸するも、吾人の自覺には關係が無い、けれ共吾人の自覺を以て爲す仕事よりも綿密、精確、信切、靈妙である、吾人自らは一擧手一投足、一思一考に我が腦神經の何の部分を何の分量だけ動かして可なるやを知らぬ、けれど吾人は誤らぬ、吾人の外に吾人をして斯の如くならしむる大なる自覺の存することを認めざらんとするも豈に得んやだ、是れが即ち物質根本の活力が發現して斯の如き機關と斯の如き作用とを逼出する眼前の實證では無いか、獨逸の哲學者が無意識の說を立て、人間が如何に無意識に助けらるゝかを示したのは最も久しい以前である、彼の無意識と稱するは即ち人から見ての無意識で、實は宇宙の大意識大自覺である、大意識大自覺の前に立てば人間の力と云ふものは殆ど認めることが出來ない、例へば鳥が巣を作る或は人間が家屋を建てる、皆是れ天然の產物である、只だ天然が鳥なり人なりの力を通じて產出するのだ、セーキスピヤの文章でもカントの哲學でも李白の詩でも人間の腦髓と云ふ畑に生へた天產物だ、麥は畑に產し米は柔かな水田に生ずる、總て天然だ、詩文と云ひ哲學と云ふ一層高尙な產物は腦味噌と云ふ肥えた柔かな土の中へ生へるのだ、物質の根本に在る靈妙の力が其靈妙の大自覺を以て、其れ〳〵の順序を踏んで進歩し來り、人間とも思想とも成り、知識とも哲學ともポエトリーとも美術ともなり其

顯すそのだ、斯る高尙美妙の働きを爲す宇宙根本の靈魂が、自覺が無い、心が無い、感じが無い、盲、啞、無意味、無感覺の死物だとは、何を根據にして論が立つか、予は唯だ呆るゝのみだ。

以上の事柄を考へて見ると、靈魂は何であるかと云ふこと、又其の滅不滅も自然分つて來る、丁度靈魂は宇宙の大靈魂が水上に泡の結ばる樣に結ばつたのだ、人間と云ふ一種特別の形に表現したのだ、泡が消えて大海の水に歸する樣に靈魂は宇宙の大なる靈魂、大なる自覺に歸するのだ、吾人の小靈魂が宇宙の大靈魂に歸し、吾人の小自覺が宇宙の大自覺に入るは、同化するので消えるのでは無い、茲に至りて靈魂不滅の理は明々白々に分つて來る、靈魂の不滅自覺の存續と云ふ事は如何なる愚人でも眞逆に物質の不滅を試驗する樣に、化學的の反應が有る者とは思はぬだらう、自覺と云ふ者は唯だ記憶にのみ存續するのである、昨日の我と云ふ『たましひ』が今日の我に存續して居るのは、唯だ記憶せられて居るのである、十年前の『たましひ』も三十年前の『たましひ』も依然として我に存し居るのは、唯だ我の自覺に刻み附けて、我の自覺が記憶して居ると云ふ事に過ぎぬ、之を物質から云へば十年前の我は今日の我と全く別物である、人の身體が七年にして全く物質を一變するは醫者の皆認むる所では無いか、然るに我と云ふ自覺は物質に拘らず一貫して記憶に存して居るのだ、此理を推して死後も我と云ふ記憶が何物にか引續いて記憶に存して行けば好い、今は小自覺が之を記憶して居るの

だから、小自覺が宇宙の大自覺に歸すれば即ち大自覺が記憶するのでは無いか、我の生涯を罪を以て悔恨を以て大自覺に刻み、千年萬年消滅せざる記憶として存するは、實に永久滅せざる火の中に投せられる樣な苦痛では無いか、我が小自覺と宇宙の大自覺と其樣な關係は無いと思ふは、水の泡が大體の水と關係が無いと思ふ樣なものだ、誤謬も亦甚だしい、小自覺と云ふ者は自分の自覺を一考したのみで明白に合點の行く通り、一切の記憶を己と同化して永久に自個の感を爲す大なる存續體である、肉體の物質は物質の海に歸して散ずるけれど、自覺は即ち宇宙の大自覺が之を記憶するのだから消散も不消散もない、帝國議會は解散しても其精神は國民の自覺に刻み附けられ、記憶として將た勢力として活きて存するではないか、宇宙の自覺が一個人の小自覺よりも秀絶し超絶するを認むる以上は、靈魂の不滅を疑ふ餘地は無い、唯靈魂を物質の如く考へて其本體を認め得ぬから消滅する樣にも思ふ誤解を生ずるけれど、宇宙の大自覺は心的現象と認むべきで有つて、心的現象として研究する外は無い、既に心的現象であらば、小自覺が大自覺に歸する以上は、其の歸する一事で以て自覺の永存が合點せらるゝのだ、我々の不充分なる小自覺でさへ時々刻々に其の過去が現在と同化して、物質の消散に拘らず存續するでは無いか、此靈妙なる、而かも物質の集散に拘らざる同化作用が心的現象である、自覺の自覺たる所以である、宇宙の最奧物質の根本は眞に玄の玄なる者で、人智の屆く所で無いとは

云ふものゝ、十九世紀末以來物質論の進步、主觀的一元論『アイデアリスチック、モニズム』の勝利は、終に靈魂不滅の理をば通常の論證の方法に依て推理し得る迄に至らしめた、人の自覺は、何れの點から見ても宇宙の大自覺に歸せねば成らぬ、宇宙の大自覺は何れの點から察しても悠久靈妙なもので無くては成らぬ。吾人の靈魂は悠久の記憶に刻み附けらるゝのだ。

全く十九世紀下半以來の科學界は駸々として研究の步を進め、物靈兩界の秘密にも大なる光明を射入した、科學が益々進んで人々愈々靈魂の妙理に感ずるは二十世紀の思想界である、一女史マリー．コレルリが『二世界の物語』を著せば學者爭ふて之を讀み『マイチー、アトチ』を著せば六尺の男兒六人迄自殺した、これは其の書物が敢へて傑作なるが爲めでない、單に其の敍述が讀者の心靈の秘奧に觸るゝ處かあつた爲めである、學者の今日以後の研究は主として生命の理と心思の理とに集注するだらう、旣に其の傾向が見えて居る、此の理が明かになれば靈魂の不滅は益々明白を加へるのみだ、否此の上に明白を加へざるも最早疑ふ餘地が無い、不肖予が如きも聽者諸君と共に益々心靈界の眞理を究めねば成らぬ。

諸君よ、靈魂は不滅で天地と共に悠久に存するが故に、我々は功績を永く世に傳へんが爲めに、或は紀念碑や銅像などを建てるには及ばない、銅像や紀念碑の刻字が磨滅せぬ前に、旣に早く其人は世

の中から忘らるゝ、彼の埃及のピラミッドの如く、それを建造した王は如何なる人であつたか、全く忘られてしまふ、人間の靈魂は不滅にして宇宙の自覺の大靈と同化冥合し、永く宇宙の自覺に存し、人間平生の行爲は總て大靈と共に不朽に傳へらるゝのであるから、銅像や紀念碑を建つるの必要はない、吾人は今日の學術を信ずる以上は斯る大抱負をもつて奮勵せねば成らぬ。自個の姓名を宇宙の大自覺に刻み附けねば成らぬ。（明治三六・一・一一）

靈魂不滅說に就て

予が義の日、惟一館に於てせし『靈魂不滅』の講演に對し批評又は讃辭を寄せ或は問合はさるゝ方多し、予は公衆に對し口を以て意見を述ること不慣なるが爲めに自ら我意を盡し得ざりしを感ずと雖も、反響の稍く多きは感謝する所なり。

予は固く靈魂の不滅を信ず『我』と云ふ自覺が肉體死滅の後までも自覺として存すること、肉體の生存せる時期の間に存すると相似たる心持なるべきを信ず、此信念は科學上に於ては唯物論の最も進歩したるヘッケル、ネーゲリ、ケーラス、ローマネス等の唯物一元說『マテリアリスチック、モニズム』と牴觸すること無く、哲學上に於てはフエヒネル、ハートマン、ランゲ、デユリングよりヴント、

ボールゼン等に至るまで自然に思想の系統を爲せる唯心一元說『アイデアリスチック、モニズム』と相合するなり、モニズムは十九世紀の末に至り、物質論の達したる窮竟の眞理なりとも云ふを得べく、之を唯物唯心の二に分つは單に科學方面と哲學方面との區別に過ぎず、即ち物心一如說なり、廿世紀の思想界は一にモニズムの横行濶步する所なり、モニズムの前には有神無神の區別無く、物質と心靈との區別無く、宗教と道德との區別無し、モニズムに至りて人生觀、宇宙觀、始めて合一して始めて絕對不動の根據を得、信仰と知識と、現世と未來と、復た爭ふべき餘地無きに至らんなり、無神無靈魂を唱ふる人も其の無神無靈魂論のまゝに靈魂不滅を信ずることを得べし。

人生は夢に非ず假相に非ず、眞如なり實在なり、我れ天地と共に悠久なるを領得して、始めて造化に通る品性をも得、乾坤を吞吐する大勇氣をも生じ、丈夫兒の本領を發揮することを得べし、我は神なり我れ神と共に在り、我は宇宙なり我れ宇宙と倶に在りて直ちに萬有と冥合す、人此境に入らずして何に據りて人たるの性を遂げんや、基督の道、釋迦の道、孔子の道、總て人の蒙を啓きて此境に入らしめんと欲するなり、予は孔子釋迦基督の熱心なる信者なり、宇宙の靈界物界の眞理を、打つて一團と爲して發揮せるモニズムは予に斯の如くなるべきを命ず。

予は此意を明かにせんが爲めに宇宙倫理觀（コスモ・エシツクス）を筆述し一冊子と爲して世に示さんことを欲す、（表題は

未定）予の說を批評する人、問合はさるゝ人等は暫く予に筆述の猶豫を與へられよ、筆述の事竣るの後は此の朝報の紙上にも論說す可し、進みて諸方の演壇にも立つ可し。（明治三六・一・一六）

藤村操の死に就て

（明治三十六年六月十三日夜數寄屋橋會堂に於て）

過日華嚴の瀧に投じたる藤村操少年の死は、萬有の眞理を疑ふより出でたる者なりと云へば、今迄に類の無き自殺なり、痴情の自殺や、發狂の自殺などは世に多けれど、單に『思想の爲めの自殺』は、空前の椿事と云ひて不可なし、世人が今に至るも之を是非して止まざるは尤もなり。

世人の言は一概に此死を非難するに在るものゝ如し、勿論『死』と云ふ事は何れの場合に於ても惡事なれば予とても之を非難せざると能はず、縱しや此死が自殺に非ずして止むを得ぬ病死なりしとするも予は贊成せず、或は此の少年が、少年ならずして百歲まで活延びたる人なりとも予は贊成 せず、『する』と『死せざる』とを比ぶれば、場合の如何に拘らず『死する』は惡なり、病死と自殺とを比ぶれば總て自殺の方が『より惡し』く、老死と早死とを比ぶれば早死が『より惡し』きは誰とても認むるなり、併し予は世の多くの人と、同じ理由を理由として藤村少年の此の死を非難するには非ず。

世人が彼れを非難する中には、之を褒めては斯る事の流行を來す恐れありなど云へる言葉も聞ゆ、予は思ふ、若し揉上の毛を短く耳の邊まで剃り附けるとか、高い襟を着けるとか、派出な色合の服を着くるとか云ふ如き事柄ならば、之を褒めるが爲めに流行もす可けれど、人間第一の大切品たる命を捨つると云ふ事柄が、世間の噂や人の口の爲めに流行を始む可しとは受取れず、若し自殺が左樣に輕輕しく流行するものならば、予は隨分、社會の人々に對しては自殺を勸めて見度き程に思ふなり。

又或る人は此の天才をば未だ大成せざる少年の中に死なしめたるは惜む可しとの理由を以て評論せり、甚だ尤もに聞ゆれど、藤村自身が、自個の天才をば此世に於て用ふるよりも之を打捨る方に滿足を認めたる以上は、此論は藤村の思想に關係なし、單に藤村以外の人が、他日藤村の天才より受くべかりし利益を豫想し、其利益の消失したるを殘念がるに過ぎざれば、銀行の破産を殘念がると同樣なり、善惡の問題と云ふよりも利害の問題なり、予は斯る論を聞きては彼のニイチエの善惡論を思ひ出さゞる能はず、其言に曰く『善惡とは奴隷根性より出でざる言葉なるべし、主人が奴隷に物を與ふれば、奴隷は此主人を善人と云ひて喜び、此の行ひを善行と云ひて有難がるなり』と、天才の少年が、天才の結果を我々に與ふることを善と爲し、我々に與へずして死することを惡と爲すは、餘りに善惡の標準が低きに過ぐるには非ずや、藤村少年の死は社會經濟の眼を以て視る可き事柄には非ず。

少くとも此少年自身の心事を察するの必要は有る可し。彼の思想の正しきか正しからざりしか、彼の學力の多かりしか少かりしか、彼が天才なりしか天才ならざりしか等は問ふに及ばず、彼の死を求めたる心事は私曲なりしか、彼は此世の艱難と闘ふ丈の强健なる意無きが爲めに死したるか、之をこそ問ふべけれ。

聊か極端の例には有れど楠公が湊川の自殺の如きも、ニーチエ主義より評すれば惡なり、もそッと彼を活し置きて働かせ度きものなりき。然れども吾人が其死を非難し得ざるは、彼の心事が一點の私曲無く、唯だ誠意を以て滿ち／＼たると、彼の强き意思とに在り。

今の世の自殺者は多く。人に語る可からざるが如き私曲の心の爲めに死す、又此世の艱難に耐ふるが如き强固の意志なきが爲めに死す、是れ擯斥す可きなり。藤村操は眞理を求めんと欲する外に存念無かりき。即ち心に私曲を存せざりしものなり、又彼は世渡りの艱難を恐るゝ年頃にあらず、然らば意思の弱きが爲めに止むを得ず死境に推し附けられたるものと同一視す可からず。活きんと欲すれば活くるヿを得る自由の境涯に於て。自由の意志を以て死したるものなり、自由の境涯に於て自分の身を殺すと云ふ意志は實に强き意志なり、故に彼の死の惜む可きは無論の事なりと雖も、其死や惡とす可き死に非ず、尊敬す可き死なり、予は彼の死を以て。大に美なる所、大に高き所あるものと思はざ

る能はず、若し彼の死を非難せんには、世人の之を非難するよりも、より高き標準を要するなる可し。

彼の死が充分意思を以てせしことは、彼の家出より、彼の死したる時までの所行に、一々明確なる意思の能れるにて知る可し、中にも尤も明かなるは、彼の『巖頭感』の文章なり、予は近來、斯の如き熱誠に富みたる名文章を見たると無し、彼の心に大に誠眞なる所のものあり、凝りて此の眞實なる此の美くしき妙文字と爲りたるものなる可し、人自ら充分の意志を以て死を決する場合には、到底常人の企及す可からざる强き思想を浮べ來るものと見えたり、前の楠公の例にて云へば七たび人間に生れて國賊を殲さんと云ひたるが如き、天地に二ある可からざる壯烈の言にして、巧妙なる文章家の作爲し得る語句には非ず、予は諸君が引例の不倫を咎めざらんとを望む、縱しや文字の修養乏しきものと雖も、意志を以て自死する場合には、深く人の膓を刺すが如き文句を吐くと多し、昔し横濱の遊女が、自殺の場合に吐きたる『露をだに厭ふ大和の女郎花、降るアメリカに袖は濡らさじ』と云ひたりと傳へらるゝが如き、實に歌人の歌に非ずして、歌人の言ひ得ざる所なる可く、直ちに聞く人の肺腑を衝く如き力あるに非ずや、諸君は藤村操の『巖頭感』の文字を見よ、一讀して深き感慨に襲はるゝを禁じ得ざるには非ずや、

然るに世の評者の中には此の文中の語句を笑ひ『ホレーショの哲學竟に何等のオーソリチーを價す

るものぞ』とあるを咎め、ホレーショと云ふ如き哲學者あるを聞かず、せめてはカントの哲學とでも云はゞ可なる可きに、多分藤村自分がホレーショと云へる名も無き哲學者の書一冊を讀み、是にて哲學の一切を知れりと自信して斯くは書せしものならんと評したる人も兩三人ありしと聞く、誠に沙汰の限りなり、ホレーショは諸君の知れる如く沙翁劇中の人物にして、今では似而非哲學者の代名詞の如く使はるゝ名前と爲れるなり、藤村が此語を用ゐたればこそ、一切の哲學をば似而非哲學と一言に蹶落して、哲學者能く何の眞理をか捕へ得んやとの感慨が活躍して聞ゆるなれ。

又藤村の死をば、之を古今に求めて唯だ希臘のエンペドクリスの死の相似たるあるのみと樣に云ふ人も有りとかや、成るほど史の傳ふる所に由れば、エンペドクリスは哲學者にして、エトナ山の噴火口に飛入りて死せしと稱せらる、然れども彼の死は藤村少年の如く『思想の爲めの死』には非ず、エンペドクリスは死して必ず天に昇る可き聖人なるが如く信ぜられたるが爲めに、勢ひ通常平凡の死樣を爲す能はず、自個の死骸を隱して全く昇天したる如く見せ掛けん爲め、夜に乘じて人知れず山に登り噴火口に投身したるも、生憎に彼の平生穿きたる天下無類の金の草鞋が、其次の噴火の時に穴から飛出したる爲め其の化の皮が顯はれたること、吾等が幼時バーレーの萬國史にて讀みて知れる所なり、藤村操の死に比するの不倫なるは、ホレーショの哲學てふ語句を笑ふの不都合なるに匹敵す、世の藤

村を評する者の評し方には斯る類が多し。

予は藤村の死を惜むには相違なしと雖も、其の惜むは彼が今一歩思想を進めたらんには、死せずして大に知る所ある可かりしにと云ふの點に在り、又予は彼の死を非難すと雖も、其の非難は何故に信仰に入らざりしかと、信仰を無視したる點にあり。

此意を說明せんことは、一夕の講話として餘りに深き問題なれば、諸君の聞きて直ちに領會する迄に說明し得んこと予の力には覺束なけれど、成る可く簡明に說きて見ん。

本來『萬有は不可解なり』と云ふ事が不健全なる思想なり、成るほど或意味より云へば不可解なるに相違なし、何故かと云へば、人が物を解釋するとは、其物よりも以上の事を知らんとするの謂にして、以上の事を知れば又も其の以上の事を知れば又も其の以上を疑はねば成らぬ順序と爲る故、何處まで疑ひても果が無く、終に最早や其の以上と云ふ事の出來ざる宇宙と云ふ點に達するなり。

故に『不可解』と云ふ事は『何處まで解しても猶ほ其先に解釋の屆かぬ所あり』と云ふ事なり、併し能く思へ、先の先に又先あり、以上の以上に又以上が有りて、到底解し盡されぬと云ふ事は、其事何處までゞも解せらるると謂ふ事に歸するなり、解釋とは『以上』を求むるの事なるを以て、何處まで行きても『以上』が有らば、何處まで往きても解釋の道が有るなり。

道は有れども人間の知識が屆かず、故に不可解とは云ふなり、故に不可解とは、宇宙其物を指すに非ず、人間の知識を指すなり、宇宙は何處までも解釋の出來る如く作られて有れども、知識が及び得ざる故、此の知識の程度を以ては解す可からずと云ふに歸す。

然らば更に想ふべし、眞成に不可解と云ふ事は何ぞやと、眞成の不可解は人間と道理と背反せる如き事柄なり、例令ば二二が四と云ふことは解せらるれ、二二が五と云ふ事は不可解なり。

二二が四と云へる道理をば更に複雜せば樣々の數の理を生じ、人間の知識には解し得ざるにも至るべし、然れども如何に複雜せる數理とても、其の數の一を取りて檢むれば矢張り簡單なる一にして、其中の二と二とを取りて檢むれば矢張り四となる性質の二なるが爲めに、數の理は決して『不可解』に非ず、『解する事の出來る性質』の者なり、若し無量數の孰れかの一部分に二二が五と云ふ如き數の籠れるを發見せば、其時にこそ始めて眞成に『不可解』なりと稱す可けれ。

今其れ宇宙は廣大にして知識に入らずと雖も其の性質を云へば不可解に非ず、例令へば哲學者の不可解とする『時（タイム）』と『處（スペース）』との如きも、無窮無限なりとは雖も、吾人の『今』と云へる時と、吾人の『玆』と云へる處とが、其の單位なり、現に吾人が『今』と云ふ瞬間にも時は經ちて、今と言始めたる時と言終りたる時とは同一に非ざるも、今が卽ち今の單位たる事は一なり、何千年後、何萬年前の時と雖

も其の時に立ちて其の時を見れば、總て今なり、今より外に何物も有るに非ず、宛も何億萬の巨數に就き、其の孰れの一を取りて檢むるも、一は一なるに相違無きと同じ。

『處』とても亦た然り、吾人が『玆』と云ふ言葉を發し終らぬ間に地球は何百里を飛び、玆は既に同じ所に非ずと雖も『處』たることは依然たり。故に『處(スペース)』は如何に廣くとも、其の處へ行きて檢め見れば、總て『處』なり、『處』と云ふより以上に解し難き『處』は宇宙の何の處にても有ること無し。

然るに今までの哲學者殊に懷疑派と云ふ者は、宇宙に全く解す可からざる一區域の特別に存する如く考へたり、即ち『二二が四』的の此の數理の外に『二二が五』と爲る如き理外の境もある如くに思ひ、宇宙を兩分して『可解的』と『不可解的』との二と爲したるなり、然れども是れは誤想なり、宇宙の何の處も解す可き『玆』にして、何の時も解す可き『今』なり、何の數も解す可き單位の一なり。

故に宇宙其物を『解す可からず』とすると『解す可き者なれども解する能はず』とするとは大なる相違なり、前者は二元論にして後者は一元論なり、前者は思想の混亂にして後者は條理の貫徹なり、從來世界の思想家が『超自然』と云ふが如き事を信じたるも後者より生ずる必然の病なり、解す可き自然の領分の外に、解す可からざる超自然の領分ある可しとしたればなり、今の學者は『人智の屆かざる』を認め『解す可からざる不自然』の存するを認めず。

此の區別に迷信と信仰との別は有るなり不自然の境を認めて之に信ず可き神ありとするは迷信なり道理と背反するなり、不自然の境を認めず宇宙を何處までも自然とし、解す可きとし、萬有唯理(パンロヂズム)とし、道理の無窮無限に徹底せることを信じて、其の道理の上に信念を置くことを眞の信仰と爲す、惜い哉、藤村操は、從來のホレーショ的似而非哲學に愛想を盡すの程度まで進みながら、宇宙可解主義即ち『萬有唯だ道理』主義の光明に浴せざりしなり。

昔は一神を信ずる基督教の中にすら、神の外に惡魔あることを信じたり、是れ二元論なり、神と惡魔と二樣の力を認むるなり、此時に當りて若し世に惡魔と云ふ者無しと云ひたらんには、其の信徒は必ずや『惡魔なければ何故に神を信ずるや』と迄に反問せしならん、少くとも惡魔無しに神を認むること能はざりしならん、今日より之を觀れば實に幼穉なる思想なり。

然れども今日に及びても、若し宇宙に不可解と云ふ領分も、不自然と云ふ領分も無くして、萬有は唯だ一理の徹底せる者なりと聞かば、如何にして信仰の存し得るやを怪む人も有らん、然れども是れ幼穉なり、神と惡魔との二元思想を脱し、單に神てふ一元思想に入りて却て信仰の基礎が堅固になると同じく、更に進みて可解境、不可解境と云ふ如き二元の思想を脱し、眞に道理の一點張と云ふ眞成の一元論に入りて始めて迷信以外の純信仰が生ずるを得るなり、所謂る學者の信仰なる者なり。

道理の外に何者も無しとすれば、必然の結果として物質の實體を心靈と見ざること能はず、宇宙を大なる靈界と視て萬有の物質を靈の表顯と爲し、而して人間自個の心靈を端緒とし、類推し、概括して、推究する外は非ず、斯の如くに推究して、知識の達せざる所は、知識の達せざる所と同一の單位なりとし、信仰して之を諦らむるのみ、實に止むを得ざる信仰なり、而かも其の信仰の上には爭ふ可からざる主義あり、力あり、條理あり、慰藉あり、之を離るれば直ちに自家撞着の二元論に入り道理の行詰りに歸す、茲に眞誠の信仰ありて茲より以外は迷信なるや知る可し、茲に光明ありて茲より以外は暗黒なり。

要するに解す可き自然の外に、解す可からざる不自然ありとして、其の不自然を信ずるは暗き信仰なり、解す可き『自然』の普遍徹底を認め、自然の範圍に驗し得る道理を信ずるは明かなる信仰なり、二元時代の信仰は前者にして一元時代の信仰は後者なり、眞の信仰なり。

深く疑ふこと藤村生の如き者にして、今一歩を進むれば此の信仰の光明を得べかりしや疑ひなからん、彼は云ふ『既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あることなし、初めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致することを』と、彼は全く悲觀の窮まる所に大なる安慰を得しなる可し、其の樹上に題したる文字の筆蹟を見るも悠然として靜かなる者なり、蓋し彼は其の死したるに於ては通常俗人の得

る能はざる本懐を得たるなり。

然れども是れは彼の『悟り』なる者に止まる、或はこれを大悟徹底とも稱するを得んか、彼の爲めに悲しむ者は、之を見て心を安くして可なり。

但し彼れの悟りなる者を、吾人の信仰と云ふ者に比べて之を觀れば、聊か議す可き所無きに非ず、信仰と悟りとは大體に於て大差あらずと雖も、悟りは一心の外に出でず、故に人自身の心性の相違に應じて銘々に相違するなり、必ずしも心外に確然不動の眞理を認めたるに非ず『信仰』は心の內外に眞理を認めて內界と外界と一致する所に眞諦を置くなり、確然不動の標準あるなり。

故に古より、大なる『悟り』を得たる人にして、其の行ひは一樣ならず、甚だしきに至りてはバラモン宗徒の如く人間の天性に有る可からざる行ひを爲して自ら得たりとする者も有り、藤村操が死して自ら悔ひずとするが如きも、豈に人間の天性にも心情にも遠ざかれる者に非らざらんや。

彼れは旣に『悟り』を得たるが爲めに心の安きを得たり、必ずや大往生を遂げしならん、然れども未だ『悟り』以上に達せざりしが爲めに其の死を思ひ止まることを爲さゞりき、人情に歸ること能はざりき、天性に率ふことと能はざりき、彼にして若し知識に於て一歩を進め、宇宙を『不可解に非ず』と認めて、之れと同時に其の『悟り』に於ても亦一歩を進め、所謂信仰の域に入りたらんには、彼の巖

頭に立つに及び『胸中に何等の不安あること無き』と同時に、人生に何等の不安無きを觀じ得たるならん。

彼　胸中に何等の不安無きに至りて、猶ほ其の死を思ひ止まるに至らざりしは通常人の怪しむ所なれども、『悟り』なるものゝ性質を知れば毫も怪しむに足らざるなり、彼は死の安泰なるを悟りたり、生の更に死よりも安泰なるとを信ぜざりき、故に其の悟ると共に欣然として死したるなり、彼若し『悟り』の以上に唯だ一歩をすゝめ信仰に歸したらんには、其の巖下に身を投ずる欣々の心と欣々の顏色とを以て人界に歸り來りしならん、惜い哉彼や唯だ一歩に失したり。

藤村操の死に對して余の觀る所は斯の如し、然れども總體の上より猶ほ一言す可きものあり、彼の死は恨事なりと雖も、實は時代思想の反應なり、今の世は二元的の暗き信仰破れ、思辨的の舊き哲學滅び、而して未だ一元的の光ある信仰の大いに興らざる中間なり、これを信仰上の過渡時代と稱す可し、これが爲めに、今の人智の程度に伴なへる信仰なるもの無く、有力なる宗教すらも唯だ『悟る』を以て能事と爲し『悟る』より以上に信仰無しと思惟せらる、心の聊か深きもの、何の處を顧望しても心靈の糧を得る能はず、從つて宗教をも哲學をも論理をも無意味と爲し、或は人生を嘲弄し、或は快樂を以て無上の光明と爲す、人心惟れ殆くして道心是れ微かなるの時なり、此の際に於て人の心靈の

上に、命を捨つるに足るの大問題ありと云ふも誰か之を顧みんや、時なる哉、時なる哉、藤村操なる者、天下に最も著名なる絶景の地に立ち高く懷疑の標を揭げて、人間空前の異擧を敢てせり、是れ豈に世人に對して、眞理を求むる上に性命よりも重んず可き由々しき大事あることを告げて、人心を警破するに足る者に非ずや、若し世に藤村操の如きもの相尋で現はるゝこと有りとするも、其れは時代の罪なり、時人が萬有の眞相に想到する根本問題の如何に重大なるやを捨てゝ顧みざるの罪なり、操の死は心界の暗に對する曉鐘なり、世人若し之れに依りて人間に快樂以上、肉慾以上、算盤以上、物質以上に大に眞面目（シーリアス）なる問題のあることを想起せば、彼の死は空からずと云ふ可し、藤村操は時代に殉したる者なり、彼に罪なし、時代に罪あり、此の意味に於て彼をば得難き節死者の一に數ふるも不可なかる可きなり。（明治三六・六・一三）

南北朝問題の歸決

（一）

諸君、南朝を正位とし北朝を閏位とするとの問題は略ぼ解決に近づいて來た樣に見えます、卽ち吾吾の熱望し主張した如く――又道理上、爾う無くは成らぬ如く――南朝が正位と云ふことに、內閣反

び宮内省、其他ともに斷定を下さんとする樣に見えます。

最早や此問題に就ては多言を費す必要は無く國民たるもの全く安心して居れば好い樣にも思はれるけれど、私しは後來又、何の樣な事で、南北兩立說や北朝正位論などの死灰が再燃するかも知れぬと思ふ、何故なれば今の世は滔々たる物質主義の渦中であつて、大義名分など云ふ思想が段々と微弱になる、其れが爲め歷史專門の博士達の中にも北朝辯護論が隨分に多いのである、殊に物質的科學的と云ふ如き口實を以て事實の考證をのみ重しとする學者達には三種の神器さへアレは物品である、物品に何の神聖な所があるかと云ふ樣な思想が多い、旣に私しは其樣な說が立派に筆記せられて發刊されて居る實例をも知て居る、是等の人々に云はせれば、天子と名乘る人が二人ある場合は兩立である、兩立が事實である、事實を認めるのが科學的である、而して兩立した二人の天子の中、若し一方が弱くなつて一方が强くなれば、强くなつた方が勝つ、卽ち勝つた方が眞の天子である正位である、負けた方は僞天子であると、斯う云ふ斷定に歸するのである、成るほど是れは物質的事實的、又は科學的なる說明であらう、けれども、此の說に從ふては日本の國體を如何せんやである、日本の國民道徳が此の說明で立つか、忠君愛國と云ふ事が此の說明と併行することが出來るか、若しも千歲の後、日本人の忠君思想を消滅せしむる者が有れば、其れは確かに此の思想であると想はれる。

忠臣は二君に仕へずと云ふ事を吾々は聞て居るが、一國に二個の君主ありとして、國民をして同時に二君を敬はざるを得ざる如き地位に立たしめて其れで忠臣の出來る筈が無い、殊に日本の國體の根本たる忠君思想は殆んど宗教的で無ければ其の價値が無く、國體の根本たる力が無いと思はれる、卽ち宗教的とは君主を神樣の如く有難く思ひ、君主には決して不正の無いもの、君主卽ち至正である、君主卽ち神聖であると、斯う思へばこそ、倫理の根柢が玆に立つのである、純一不二の心を以て君を敬はねば成らぬとの念が起るのである、若しも論者の樣に君主卽ち力であると解釋し、名義が正しく有らうが有るまいが、力の强い方が君主である、力が相等しければ兩立であると、斯う觀念する日には、其れは或ひは競爭を敎へ弱肉强食の事實を敎ふる口實とは成るかも知れぬが、是非善惡を正し正不正を判すべき國民道德の根礎とは成らぬ、少くとも忠君思想を涵養し又は說明する役には立たぬ、若しも忠君思想が我が國體の根本で無く、我が國の民心の純一に歸向す可き標的で無いならば吾々は何にも云はぬ、卽ち强弱を認めて正否を度外視する彼の兩立論に默從する。

兎も角も今日、斯る兩立論が段々微弱に成り行く如く見ゆるは、忠君思想の爲めに甚だ慶す可きではは有るが、併しながら私しの恐れるのは、是も矢張り强弱的思想の致す所たるに止まり、未だ眞正に南朝正位の理由が認められた爲めでは無いかも知れぬと云ふ點に在る、何故かと云へば目下の所、輿

論の上に於て南朝正位論の方が盛んである、卽ち强いのである、是れが强いに依て、多くの北朝說の人が默して居るのでは無いか、他日物議が鎭まつて來れば又もソロ〳〵北朝說を說き始めるのでは無いか、何でも彼の人達は正不正と云ふことを餘り念頭に置かずに、强弱と云ふことをヒドく氣遣ひ、强い者を崇め樣とする傾向を以て居る故、國論が弱くなれば、又も『北朝が强かつた、何うも兩立である』と云ふ樣な說を蒸し返し相に見える、私しは久米邦武博士とか吉田東伍博士とか喜田貞吉博士とか云ふ如き人が、今は默して居ても、眞實に北朝說を捨てたとは思はぬ、まだ〳〵北朝說は他日再燃して來る虞れが充分ある。

此の虞れの有る間は、未だ以て南朝正位說が確定したとは思はれぬから、諄い樣であるが、南朝正統說に就て今まで私しの言殘した所を少しばかり補ふて置きたい、尤も此の說は若し深く究めんとすればズッと其の時代より以前に溯り、少くとも賴山陽の樣に源平時代から說かねば成らぬ、殊に北條氏の專權や後嵯峨の遺詔なるものゝ眞相、兩統迭立の實際、長講堂領の分附所屬、兩統（卽ち所謂持明院派と大覺寺派）と北條氏との交涉などは究め得らるゝだけ究めねば成らぬ事にもなる、けれど其等は特別に研究した人より以外には容易に分り難く又語り難い問題であるから、今は云はぬ、若し必要が起れば何時でも自分の研究した丈けを云ふことを厭はぬが、玆には曩にも歷史の大綱に於て明

白であると云つた如く、歴史の大綱に於て爭ふ可からざる所のものと、其の大綱から必然に推理せらるゝ二三の點を述ぶれば足ると思ふのである。

（二）

諸君、如何なる議論でも枝葉に入れば入るだけ益す分り難くなる、譬へば太陽は明るいものと唯だ大體に於て分つて居るのに之も餘りに枝葉の事まで細密に論ずると、ナニ太陽は明るく無い、人の眼が明るいのだと云ふ樣な事にもなる、其れでは詭辯と云ふものであるから、私しは成る可く詭辯を持出す道を杜絶する樣に、最も明白なる大道に踏止まつて爭ひ度い、其れで無くては却つて邪路に迷ひ入るのである。

南北朝分立の起點は後醍醐天皇が京都から芳野に落ちさせ給ふた時に在るのである、此の以前には持明院統と大覺寺統との競爭は有つたけれど、其れは一時に二位の天子が有るのでは無く、一方が位を退けば他方が位に即くと云ふので、即ち交互に一天子づゝ出て居たのである、南北兩朝と云ふ可きでは無い、扨て此の後醍醐天皇が眞の天子で有つたか否かと云へば、是れは云ふ迄も無く眞の天子であつた、但し其の以前に笠置山へ潛幸あそばし『さして行く笠置の山を出でしよりあめが下には隱れ家も無し』と詠じ玉ふ如き御悲運に陷り給ひ、竟に北條幕府に捕はれて隱岐が島へ流され給ふた事が

有るとは云へ、隱岐よりして再び都に還御まし〳〵、北條幕府を倒して立派に王政を復古し給ふた時、卽ち建武中興の政事を布かせられた時に當ては爭ふに道も無い一天萬乘の君、四海の一君である、實に此の天皇は天資の豪邁にあらせらるゝに於て比類稀れなる御方であつて、其の御事業たるや、至難中の至難なる王政復古の鴻業を遂げさせられたるに於て、畏れ多くも　今上皇帝陛下にも儔ひ玉へる如く察し奉らるゝ次第である、若しも此の天子に對して敵意を現はす者が有れば、其れは今の大逆徒と行き方は違ふても確に逆賊である、忠君思想の上から、何の樣に非難しても足らぬ程の次第では無いか、所が實際に此の天子に敵對の行爲を取つた者が有る、其れは足利尊氏である、私しの尊敬する國民新聞社の山路愛山君の如きは、ヒドく此の尊氏を追慕せられ特に其傳を著して尊氏の人格は我が日本に於て千秋に輝き渡る唯だ一人で、此人ほど美くしい心は他に見ることが出來ぬと云ふ樣に主張せられ、史眼炬の如しなどと云ふ評判をも得られて居るけれど、私しは此點に於ては同意することが出來ぬ、他年後醍醐天皇が芳野に於て崩御し給ふ際に、片手に劍を持ち片手には佛教のお經を持ち、尊氏の居る北闕の天を睨み玉ひたるまゝ御絕命あり、後に尊氏は之を聞いて流石に身の罪の恐ろしくなつたものか急に天龍寺抔を建て、形容を盡して天皇の御魂に謝罪し奉つたのは、或いは大なる後悔であつたかも知れぬ、けれども、其の罪業は斯かる手段で消滅するには餘りに巨大で有つたのやら、

遂に當時の醫術や御祈禱などでは治す由もなき癰の樣な腫物を背に發し、七日七夜苦痛に泣き叫びつつ死んだ樣に、太平記には記されてある、イヤ是れは枝葉の話しである、最初に枝葉を禁物として置いて、思はず枝葉に迷ひ入つたのは相濟まぬ、が、兎に角も此の尊氏の取つた針路は後醍醐天皇に對する敵對行爲であつた事は明かである、彼れは天皇の名に於て差向けられた兵、即ち官軍とも官兵とも云はる可き軍勢に對して敵對した、其の口實は天皇を攻め奉ると云ふのでは無かつた、己れの從兄筋に當る新田義貞が怪しからぬから、其の新田義貞と戰ふのであると云ふに在つたが、其時に於て新田義貞が勅命を受けた官軍の指揮者であると云ふ事は彼れの眼に入らなんだ、イヤ入つたかも知れぬけれど彼れは認めなんだ、爾うして皇居のある所に攻上り、十重廿重に兵を重ねて都を攻めた、此の行爲を何處迄も繼續して猶も其の目的を貫かん手段として、自ら別の天子を擁立した、此の天子が即ち日本に、同時に二君の有る初例である、玆に至りて一の問題は、斯樣にして推立てた天子が、在來の天子、即ち一天萬乘の君、四海の一君たる後醍醐天皇より正しいと云ふ事が出來やうか。

尊氏の目的は、如何樣に辯護しても、後醍醐天皇の成し遂げ給ひたる王政復古の政治を轉覆し、己れが幕府と爲つて己れの家門に政權を收めんとするに在つた、是れが或ひは當時の武士共の輿論であつたかも知れぬ、けれど其の行ひが一天萬乘の君を敵とし君を攻め君の政權を奪ひ君の御位を貶さん

とするに該當したことは爭ふ餘地が無い。

斯る行ひを是なり正なりとした日には忠君と云ふ事は根本から崩れねば成らぬ。

不幸にして尊氏の勢は段々と強くなつた、遂に後醍醐天皇の兵を負かして再び都を攻め、天皇をして皇居に安居し給ふことを得せしめず、延暦寺に逃れ給ふに至らしめ、遂に天皇をして尊氏に降り尊氏の擁立したる新天子と和を講ずるの止を得ざるに至らしめ奉つた。

此の時に尊氏が如何樣に人をして天皇を説かしめたかは能くは分らぬけれど、兎に角天皇をして兵を解き都に還らんとの御心を起し給ふ外なきに至らしめた事は明白である、此の結果として、天皇は尊氏の居る京都に還御まし〳〵て見ると、案に相違して、宛も捕虜の如く花山邸へ推籠められ給ふた。其まゝに居ては益す尊氏に餘儀なくせられ、如何なる憂目を見給ふやも測られぬ有樣であつた爲め、又も窃かに逃れ出で給ふ事と爲つた。

其邊の事情は何人にも略ぼ分つて居る、天皇は全く尊氏に餘儀なくせられ三種の神器をも引渡し、御位を光明天皇に讓り給ふた、此の光明天皇が即ち北朝の起點である。

問題は此の時の讓位である、大日本史や神皇正統記に據ると、天皇は假の神器を讓り玉ふたので眞の神器は御身に佩びさせられたのである、今日の史論者中にはイヤ眞の神器を讓り給ふた、假の神器

である如く傳へらるゝは根據が無いとも云ふ、或ひは爾うかも知れぬ、又爾うで無いかも知れぬ、けれど是れが卽ち枝葉である、極々讓歩して評した所で、今日からは水掛論に外ならぬと云ふ可きである。

是に於て大義名分如何と見ねば成らぬ、第一に一天萬乘の君に敵對する者でも、別に天皇を擁立することを得るや、第二に其の敵對行爲が段々强くなりて、一天萬乘の君を捕虜にし奉れば、敵對行爲變じて正當の行爲となるや、第三、一天萬乘の君を捕虜とし奉りて其の自由行爲を奪ひ其の自由意思を奪ひ、而して强いて御位を讓らしむれば、此の讓位が正當の讓位と云はるゝや。

北朝を正しとする論者、及び兩立論者は、斯る讓位を、天子の自由意思に出づる讓位と同一に視ると云ふのである、宜しい是れにも試みに讓歩して見やう、一天萬乘の君を捕虜同樣の窮地に壓迫し奉り、其の孤弱なるに乘じて强いて御位を奪ひ神器を奪ふ事をば正當なる讓位法なりとして――卽ち徹頭徹尾、北朝辯護者の主張に服從するとして――更に問ひ度きは、斯かる思想にて我が日本の國體は支へらるゝや、斯かる思想にて忠君と云ふ事を說明することを得るやとの一事である、如何なる詭辯佞舌を以てするも、此問にのみは然りと答へる事が出來ぬ。

故に、若し、我が國體を無視し、我が忠君道德を廢止したる上に於ては、北朝辯護者の論は辻褄が合つて居ると云ふを得るのであらう、けれど、國體と云ふ事と忠君道德と云ふものとを其の儘に存し

置ては北朝辯護者の論は立たぬ、我が國體は天皇を捕虜とし其の御位を奪ふことを正しとするので無い、忠君と云ふことは天皇の御自由を奪ひて、讓位を强ひ奉ると云ふ事とは兩立せぬ、何の樣な北朝辯護者が何れほどの材料を以て、何の樣に理由を揑造して以て、南北兩立を主張し得た所で、君主を捕虜とする事と我が國體とを兩立せしめ、君位を奪ふことと忠君とを兩立せしむることは、其れは出來ぬ、斷じて出來ぬ、是れは明々白々に、根本的に相反して居るのである。

（三）

天皇を欺き、幽閉し壓迫し强て其の御位を奪ふことを、正當なる讓位法と爲しては我が國體は保たれぬ、勿論天皇の尊嚴は皆無と爲るのである。此の樣な讓位が若し有つたとした所で、之を讓位と視ることは斷じて出來ぬ、神器が有つたにせよ無かつたにせよ、是れは決して讓位で無い、全くの悖逆である、從つて此樣な手段に由り天皇と稱するに至つた方を正位の太子であると論じては、悖逆を正しい事とするに當るので、大義名分とか倫理の根本とか、國民道德の基礎とか云ふものが轉覆するのは自明の理である、況んや此時に三種の神器を讓つたと云ふ事も殆んど根據が無い。殊に天皇は間もなく其の幽閉所から逃出し給ひ、儼然として天子の尊を保ち給ひたるに於てをやである。虛心坦懷に視て、斯く幽閉所を逃出し給ひ芳野に朝廷を立て給ひたる後醍醐天皇と、建武中興の鴻業を遂げられ

た後醍醐天皇との間には、唯だ强弱の別が有るのみで他に何等の相違は無い、依然たる後醍醐天皇、依然たる一天萬乘の君である。

此君が、斯く芳野に朝廷を立て給ひたる時が卽ち南朝の起點である、起點が疑ひも無き一天萬乘の君であれば、此君より引續いた幾代の南朝が正位たることは最早や云ふ迄も無い。

是れで議論は盡きた、最早や何事を云はずとも理非分明である、此上は更に此後の事實を瞥見して、彼の天皇を捕虜とし奉るが如き悖逆なる思想が、忠君と云ふ事の上に如何なる結果を來したかを一言する。

卽ち、腕力武力の强を以て天子を作ることが出來ると云ふ尊氏流の思想は、正邪を無視して唯だ强弱をのみ氣遣ひ、强ければ何事も推通せる、勝てば卽ち官軍であると云ふに當るので、眞の忠君、卽ち天子が如何に衰へ給ふとも、依然として尊である、正であると云ふ思想と全く根本を異にして居るから、忠君の念を起さしむる力の有る筈がない。

此後の事實に於て尊氏の子孫ほど皇室を蔑如した者は無い、此の一門は全く皇室を以て自個の機關としたのである、言葉を替へて云へば、最初尊氏が光明天皇を擁立した時の心持が僞に天子の名を自家の道具に使ふと云ふに在つたので其の心持が何處までも貫いて居る、私しは歷史を讀んで足利時代

に至ると常に卷を掩ひて、讀み續けるのが厭になる、其れは人倫が餘りに紊れて殊に皇室の式微などが、日本人としては聞くに忍びず思ふに忍びぬ程であるが爲めである、或る書に由ると皇居の外なる塀や垣が全く朽果てゝ、皆無と爲り、御所の御庭が往來と爲つた、勿論皇居其のものは荒ら家同樣である、而して其の荒ら家の如き寢殿の御簾の外に直ちに茶店が出て、往來の馬子も下人も無遠慮に茲に休み、單に簾一重隔てゝ北朝の天子の在しますことを顧みぬ、而かも北朝の皇室は之を咎め玉ふ實力も無ければ、破れたる垣を繕はしむる費用も無い、費用は足利の一門が給し奉らぬのである、而して足利一門の居る所は公然御所と稱して居る、全く天子と將軍とが尊卑を異にして居るのである、此時、北朝の天子は日本全國の約半分を治御して居られたので有らう、けれど其れは唯だ名義だけである、地所は悉く武家即ち足利の子分の領地と爲り、年貢は悉く足利一門の所得である、公卿や其の外、天子に供奉する人々も食ふとが出來ぬ爲め離散したのが多い、甚だしき例を云ふと、茶店に休む人の中で、簾を隔てゝ天子の在しますことを知れる人の中には少しばかりの錢を添へて白扇や短冊を、茶店の爺に托する、爺は其後で其白扇や短冊を、御簾の破れた所からソッと差入れる、爾うすると中から天子が受取り給ひて、翌日になると其の白扇や短冊に歌や詩などが書かれて御簾の外に掛けられてある、爺は之を受取りて、昨日の旅人の又來た時に渡すのである、斯の樣な事實が有つたとすれば皇

室の御費用が、筆耕の如き御内職に依りて支へられたとも云ふ事が出來る、私しは斯くまでの事實を信ずるのは餘りに畏れ多い事と思ふ、苟くも我が皇室の一部に斯る時代が有つたとすれば、皇室をして斯る有樣に至らしめたものを。何と評して好いであらう、此樣な有樣で有れば、勿論天子の卽位し給ふ場合にも卽位の式を行はせらるゝ御費用も無い。心ある公卿が見るに見兼ねて、ホンの形ばかりでよいから卽位の式だけは行はせ奉る事にしたい、何うか其の費用を出して吳れと、足利へ申込むと、式をしたとて何の爲めになるかと叱り附け、式をせずとも足利が天子にすれば天子なんだ、式をしたとて足利が天子と爲さずば天子では無いではないかと一言に斥けたとの事である、恐らく是れも事實では無いであらう、事實では無いで有らうけれど其の時代の事を記した書に斯る事まで書いてあつて見れば、皇室が足利一門の爲めに如何に虐待せられたかゞ想像せられる。

是れのみでは無い、足利一門の中には、太政大臣に成り度いと天子に要望した者がある、人臣で太政大臣に爲つたのは是れまでに例が無い、前に弓削の道鏡が有り次に平の淸盛がある、けれど是れは破格で例にならぬ、朝廷でも眞逆に許し兼ねて聊か御返事が遲かつた、所が足利義滿は——卽ち太政大臣に成りたいと申込んだ當人は此の義滿である、尊氏の孫の代である——此の義滿は赫と怒り『ヨシヨシ其れでは己が自分で己の一門を五攝家と爲し、朝廷の式を作つて文武の政治を統べる、其時に

は己れが即ち「聖帝」と云ふ者では無いか、己れが聖帝と爲るのを朝廷では何うすることも出來ぬで有らう、是から此の己れが日本の聖帝となるのだ』と云ひ、名ばかりの公卿の領地をさへ悉く沒收する劍幕を見せた、朝廷も之に驚いて直ちに破格の詮議を以て彼れを太政大臣に取立てた、是も事實を過大に記したものかも知れぬが、明かに記されてある、是を事實とすれば、昔から日本には平の將門より外に天位を窺窬したものが無い様に云ふけれど足利一門には有つたとも云ふ可きである、ヨシヤ彼れが天位を窺窬したで無いとしても彼れは天位を窺窬するに劣らぬほどの振舞を續け、徹頭徹尾皇室を蔑如して居た、實際義滿は、外國に對して『日本國王』と稱するを憚らなんだ、彼れが支那の明の王に送つた書には自分の事を『日本國王』と書いてある、猶ほ是れのみで無い、彼れは開闢以來、曾て國權を落した事の無い我が帝國を支那の屬國の地位に落ちしむるを厭はなんだ、彼れが明國へ送る書には明國の年號を奉じ『日本國王臣源』と記し、全く臣の禮を以てした、是れは隱すに隱されぬ事實である、我が日本は皇位と國體とに於て金甌無缺であるのに、即ち足利一門は皇室を凌辱し國體を辱しめた、後にも先にも類の無い大不都合と云はねば成らぬ、然らば何が爲めに斯樣な大不都合を働いたかと云へば、足利一門は奢に長じて榮耀榮華の結果、日本だけの收入では一家の費用を支へる事が出來なくなり、明國から金錢的の補助又は利益を得んが爲めであつた、自家の成功の爲めに天子を

擁立し、皇室を機關とすることを恐れぬ足利尊氏の子孫は竟に國を賣ることを憚からぬに至つた。

嗚呼、私しは何が爲めに斯る厭はしき事柄を列擧せねば成らぬであらうか、他無し、正否よりも强弱を大事にする尊氏の思想が實際に於て忠君愛國の行ひを生み出すや否を證明する爲めである、最初に於て天子を捕虜とするの思想、讓位と餘儀無くする思想、之を正しい事とする思想、即ち北朝を正位とし又は南北兩立とする思想は、利己主義の骨頂である、其の進み〳〵て止まる所は天位を自家に奪ふことをも、國家を外國に賣ることをも厭はぬに達するのである、是れは必然の順序である。

（四）

『王侯將相、豈に種あらんや』とは支那の豪傑の心意氣である、是れが即ち力さへ强くば國王にも成れると云ふ足利一門の思想で、北朝辯護者も揆を一にせざるを得ざる所である、けれども、日本に於ては皇室のみは種がある、平民の子でも總理大臣や陸海軍大將に迄は成れやう、夫れ以上には成れぬこと云ふ迄も無い、夫れであるが爲めに日本の國體は確乎不拔である、所が支那は爾うで無い、少し野心のある平民の子は直に『王侯將相、豈に種あらんや』と出掛ける、其れが爲めに朝廷は幾たび覆へるかも知れぬ、其の度に何處の馬の骨とも知れぬ者が新に天子になるのである、所が日本でも實に驚く可き例がある、前に記した足利義滿の死んだ時に、北朝の朝廷から『太上天皇』と云ふ尊號を贈

つた、是れは朝廷から贈つたのでは無い、足利一門の增長が甚しくて餘りに朝廷を壓迫するから、斯うでもして機嫌を取らねば朝廷の存續も氣遣はれる程の次第であるから、即ち足利を北朝天子の阿父さんの樣に扱ひ、皇室が足利の子分と云ふ保護色の下に生存を計るが爲めに止むを得ず此の御沙汰に出でたものであらう、即ち足利が朝廷をして此の尊號を自家の私門に贈らざるを得ざらしめたと云ふても好い、昔し弓削の道鏡の場合には幸ひに和氣の淸麿が有つて其の非望を挫いたが、此時には誰れが有つた、幸ひにも萬綠叢中の紅一點、唯だ一人、實に珍らしくも事理を解する人が有つた、其れは今現に私しと机を並べて居る萬朝報の編輯局長斯波貞吉君の先祖で其の時の管領斯波義將である、此人が義滿の子義持を諫め人臣として其樣な尊號を受けては成らぬ、今迄の振舞さへ實に僭上の極みであるのに此の上に太上天皇と云ふ尊號を受けては朝憲の紊亂を如何せんと云ふ旨意を以てヒドく戒飾した、之れが爲めに息子は父の其の尊號を辭し、義將の去る迄は萬事を大に謹愼して、纔に朝憲國憲の紊滅することを免れ得た。

若し此の義將が無かつたならば何うで有らう、今思つてもゾッとするでは無いか、即ち日本に人臣でも太上天皇の尊號を受けることが出來るぞと云ふ例が起る、其樣な例が起れば次は何うであるか、即ては『王侯將相、豈に種あらんや』の流義が增長して、天位に逼る者も出來、今頃は我が日本國が或

ひは支那國の樣に成つて居たかも知れぬ。

更に足利時代に於て人倫が何うで有つたかと云ふ事も一應見ねばならぬ。

元來、幕府の政治と云ふ制度が、一天萬乘の君を戴く我國に於ては不都合な次第で、人臣にして天子を凌ぐ本であるから、既に北條幕府の頃から下克上と云ふ風が盛んに行はれた『下克上』とは下が上を克すると云ふ意味で、畢竟後醍醐天皇が北條を滅ぼし給ふたのも、又明治の維新に德川幕府を仆したのも此の『下克上』を惜むが爲めである、所が此の『下克上』の最も甚だしかつたのが足利時代であることは、今まで云つた例だけでも分つて居るけれど、更に當時の一般の有樣を見ると只管顰蹙の外は無い、全く『下克上』が滔々たる時代の潮勢であつた、足利の家來にして足利將軍を殺した者が前に赤松、後には松永、僅か十餘代の間に二人も有つた程であるから、從つて家來が自分の君と戰つた例は到る處にあつた、子にして父を殺すもの、弟にして兄と戰ふもの、頻々として數ふるに遑が無く、全く足利時代の騷動で、親類同志の爭ひとか、兄弟の爭ひとか、君臣の爭ひとか、下克上の實現で無いものは一つも無いと云つて好からう、卽ち忠義とか孝悌とか云ふ事は地を拂ふて我が日本に前後類の無い暗黑時代を作り出した、諸君試みに足利時代に一人の士節を知る者が有つたかと指摘して御覽なさい、足利の武將は誰れも彼れも反覆常無く、直ちに自分より上の人の爲す事に不平を起し、

直ちに裏切して南朝に下る、南朝に降つて都合が惡ければ直に又北朝に復歸する、其の行跡は全く女郎の樣なもので何等の定節も無い、其の本尊の足利尊氏でさへ、自分の弟と爭ふが爲めに南朝に降つた、降つた南朝の天子を笠に被て、弟を滅して了へば直ちに北朝の人と爲つて全く南朝の有つたのを忘れる、彼れの弟直義と云ふのは、鎌倉で護良親王を弑し奉つたのみで無い、北朝と南朝の間で幾たび反覆去就したかも分らぬ、一言にして云へば北朝には悖逆無道の實例のみで有つて、倫理的に贊成せらる可き實例が絶無である。

是れは當然の事である、強弱のみを認めて正否を認めぬ根本の尊氏流から出て居るので、強くさへあれば何事をしても構はぬと云ふのであるから、人は唯だ己れの力を揮ひ智を振ひ、他人の利を奪はうとする外に何の念も無くなるのである、今の世に於ても北朝を正位とするが如き思想を鼓吹すれば其の通りの亂世、其の通りの暗黒時代と爲る外は無い。

然らば南朝の方は何うであつたかと、南朝を一瞥することが勢ひ止むを得ぬ次第とは成つた、南朝は實に打て代つて忠義孝悌の秩序が支へられて居た、南朝の天子は其貧乏であらさせらるゝ點は北朝の天子に劣らなんだかも知れぬか、儼然として天子の尊を持し、朝廷の體を立てゝ武將を指揮して居た、決して『下克上』の風を許さなんだ、尤も南朝の記録は兵火にも罹り、又其の後悉く北朝に揉潰

されて少しも存して居ぬけれど、是れだけは確かである、當時朝廷の費用を支へたのは、主として楠正成の子孫が河内攝津和泉紀伊等から上つて來る租税と北畠一家が伊勢から取集むる租税とを以てしたので、後には南朝の勢力圏の縮まると共に些細極まる事とは爲つたけれど、尙ほ楠一家が朝廷の費用を支へ奉らんとするが爲めに努力した有様などは今より察しても唯だ涙の溢るゝ外は無い、南朝の臣下で北朝に下つた者は甚だ少い、新田でも土居、得能でも菊池、名和、兒島でも、末路の末路のドン詰りまで南朝の爲めに盡し、終に南朝の爲めに滅びて了つた、賴山陽が『肝腦地に塗る』と評したのは尤もの事で、孰れも死んで南朝の領地の土の肥料と爲つたに外ならぬ、實に日本の武士道は足利時代の亂世暗黑界に於て單に南朝の臣下に由て支へられた、此の中で只一人楠正成の二男正儀が北朝に降つたらしい形跡が見ゆる、私しは曾て申した通り特に此の正儀の生涯に種々の疑問を起し、今以て取調べて居るが、何しろ南朝一般の史料が乏しい中にも殊に正儀に關する參考材料に至つては今まで世に知られて居る分の外は殆んど皆無で有つて確たる證明は爲し得ぬけれど、其の乏しい材料の一切が示す所に由ると、彼れは父正成、兄正行に優りて餘裕の有る人である、其の上に犧牲の精神に富み、思慮は綿密で、大なる膽略が有つて眼前の毀譽に拘々せず、眞に國家の重き責任を双肩に擔はんとする抱負と赤誠との人であつた、其の南朝の忠臣たることは父兄に劣らぬ、其れが爲めに彼れも南朝の

忠臣として身を終り、肝腦を以て南朝の領地の土を肥して終つたらしい。

茲に私しは更に最も驚く可き事實を述べやう、當時南朝の領土、殊に大和河内の如きは全く見る影も無い寒落に沈み、田畑なども荒れ果て、狐狸の棲家かと疑はれる有樣にまで成り果てた事は樣々の書類で分つて居るが、此間に於て、出來得るだけの秩序と、人と人との間の信用とが厚く存して居た事は分る、諸君が今の世に於て最も重んずるものは金錢と信用とで有らう、信用は手形に依て代表せられるので手形は今の社會組織の生命の一部分を爲して居るが、日本で此の商業手形の始めて起つたのは南朝の勢力圏内、寧ろ南朝の朝廷の御膝許に於てゞある、商業手形と云へば直ちに西洋から渡つた制度の樣に思ふ人が多からうけれど、決して爾うで無い、南朝の君臣が貧乏で、又窮屈な山の中で、錢も少く、運搬も不便で有つたが爲めに、商取引の便法として手形を作つて用を達した、是れが日本に於ける商業手形の始めである、云ふ迄も無く手形など云ふものは、社會に秩序が有つて人と人との間の信用が牢乎として居ねば行はれる筈が無い、私しは此の一事を以ても南朝の配下の風俗が北朝の配下の風俗と大に異り、決して暗黑時代で無かつた事が參考せられると思ふ、何にしても、日本の倫理は南朝に支へられたと云ふべきである、南朝は決して北朝に對しての南朝では無く日本の正しい帝室で有つたと論定せねば成らぬ。

此の點から見ると南朝の正位たることを始めて主張した水戸の大日本史は實に偉大なる功績を以て居る、大日本史は日本の倫理を明かにしたと云つても好い、北朝辯護者は頭から大日本史をケナして掛り、アレは水戸家の私史である、アレには過ちが有ると云ふ、成るほど過ちは有るかも知れぬけれど、大日本史編纂の頃に傳はつて居た材料や口碑で今一既に消滅したものも有るから、大日本史は今の人の知るを得ざる根據を以て記述し論斷した所も有ると云ふ可きである、後醍醐天皇の事には特に力を入れて居るから其の讓位や神器に關する記事は猶更ら正確と思はれる、タトヒ勅選の歴史で無くとも、其の大體を國史のオーソリチーとすべきで有る、之れに對し區々たる枝葉の考證などを以て我儘に詰らぬ紛更を試みることは害あつて益が無い。

私しはまだ、言ひ度い事は山ほど有るけれど爾うは場合が許さぬ、他日必要が有れば又述べるとするが、最早や南朝の正位たることを否定したり疑ふたり、北朝を正しい天子であるなどと云ふて成らぬ事は明かで有ると思ふ、唯だ今日の此の問題は文部省卽ち敎育方面から出て來た事である故、最後に一言文部省及び敎育者を戒めて論議を下るのである、斯く日本の國民道德の基礎が忠君で有つて、忠君の道德が南朝に依て支へられたとは云へ、南朝時代の忠臣の事蹟のみが忠孝の手本では無い、今は時勢が違ふとしても今の世に活々した切實な手近な忠孝の例は幾等も有る、又今の世は忠孝のみでは

足れりとせぬ、世界の大勢に適應する廣大なる思想觀念も無くては爲らぬ、次代の國民の人格を作るのに、只だ昔しの忠臣より外に手本は無い樣に思ひ、同類的思想のみを養ふ樣に偏しても亦困るのである、篤と此の邊を腦裏に置き國民をば維れ忠君、維れ愛國、維れ孝悌なるものとする以上に猶より大いなるものとする事を心掛けて頂き度い、羹に懲りて膾を吹く樣に、北朝正位論の失敗に懲りて、唯だ南朝の忠臣の事蹟をさへ手本にすれば何時までも足れりとするが如き極端に走らぬを望むのである、只だ南朝の正位たることを認むるに非らざれば國民道德の基礎が傷き、決して矛盾無しに忠孝を說く事が出來ぬ破滅に立至るを以て、先づ南朝は正位、帝位は不二と云ふ思想に由り、歷史を教課とするには利害強弱の外に是非善惡と云ふ重んずべきもの有るを明かにし、其の上にて時代に適切なる教訓を施す事にして戴きたい、是れが私しの此の講話の主意である、是非善惡よりも利害強弱を重んじては倫理的の教育は徹頭徹尾の矛盾であると云ふことを篤と呑込んで貰いたいのである(明治四四・三・七)

乃木將軍の自殺を聞きて

我が國家は乃木將軍の自殺によりて偉大なる者を失ひたるか將た偉大なる者を得たるか、吾人は我が國家――少くとも我教育家――が國民と共に明白に此疑問を決し、忠君と自個責任との輕重關係を決せざるを得ざる場合に逢着したるを思ふ、約めて言へば乃木將軍が斯く自殺したることは、自殺せずに生存することよりも忠君の度高きか、將た生存するよりも忠君の度低きか、と云ふ疑問なり。

乃木將軍の自殺が先帝に對し奉りての殉死なることは明白なり、殉死が今の國家の禁ずる所なることも明白なり、乃木將軍は先帝より大なる委托を受け居たるとも明白にして、此自殺の爲めに自分より其委托を放棄したることとも明白なり、例之へば貴族の子弟の教育を監督することの如き、將た軍人として國家を守ることの如き、或意味に於て先帝の重き御委托なりしは明かなり。

而して將軍の自殺が何人の脅迫よりも出ずして單に自個の意思、自個の自由なる選擇より出でたることも亦明白なり。

今日の教育主義は斯かることを是と視るか非と視るか、昔し楠公が討死したるを今の教育家は解釋して曰く「楠公は始めより死を決したるに非ず、實戰の結果、刀折れ矢盡き、到底活路なきに至りたる

が爲めに自殺したるなり、若し然らずして、楠公が猶ほ生存して君國に忠を盡すの道の存したるに、豫てより我が計畫の到底採用せられざるを知りて、前以て死を決して居たるが爲めに戰死したる者ならば、其忠義完全に非ざるべし』と。

此の解釋は吾人の意見と異なり、今は楠公の事を論ぜんの目的に非ざるも、大に似通ひたる所あるが爲めに先づ吾人をして公に對する意見より述べ行かしめよ、公の死に關する歷史上の事實は今日より明かにし難き點多しと雖も冷靜に考査すれば出陣の前に既に死を決し居たりと云ふ方が大に事實らしい、假りに之を事實とせば吾人は、公が全く力盡きて止むを得ず自殺したりと云ふよりも、更に其行ひの崇高にして功績の偉大なるを思ふなり、蓋し公は自ら信ずるとの重き人にして、是より先き千劍破の孤城をば、全天下を敵として頑守したるも全く其自信の儼として搖がざりしが爲めなり、されば湊川に尊氏を引受くるに至りても、公の自信に於ては猶施す可きの策ありたり、而も其策は豫め之を朝廷に陳じたる時に種々の妨げありて到底實行に達し得ざることが明白となりたるのみならず、今後とても、行はるべき道なきと明白と認めたるが爲めに、公は自個の自由、自個の責任を以て死を決したり、故に湊川へは故と寡き兵を以て出向ひたり、自個が、敗軍の外無しと見極めたる戰場へ、多くの兵を連行きて死せしむるは公の敢てせざる所なりき、されば乙そ其出陣に臨みて、息子正行に訓

誨を遺し、成長して後に須らく守るべき道をば示し置きたるなれ、此時に於て公の心の中は其清きこと千古に卓絶したりとも云ふ可し、公は思へらく『今にして我れ死しなば、天下の人心、必ずや義に感じ、國家の爲めに、生命を惜まざること、我れに似たる者を生ずべし、少くとも我が一族は、感奮して永く我が志を忘れざるべし、卽ち我れは今死する方が、生存を計るよりも、偉大なる功績を遺し得べし』と、斯く思ふが爲に、公は必ず死す可き戰場に向ひて、必ず死す可き難所を引受け、奮戰し苦闘し凡そ力の限りを盡して、士たる者は宜しく斯く死す可しとの手本を示したり、乃ち肉體的に失敗して精神的に成功したるなり、公は肉體的に到底、勝利の道なきを知りたるが爲めに、精神的の勝利の、更に肉體的物質的の勝利よりも偉大なるを選びたるなり。

是れが爲めに、南朝の人は末の末まで義を忘れず、忠を忘れず、肉體的卽ち物質的に何等の力も無き南朝の朝廷を支へて、能く五十餘年の業を續け、更に五百餘年の後、明治の維新に至る迄も、將た日露戰爭に至るまでも、公の英風を慕ふもの雲の如くに起り、所謂る大和魂なる國民的忠勇の心をして世界を驚かす迄に旺盛なることを得せしめたるなり、公が死を決したる心は、今日以後と雖も猶長く人心に影響して其功殆んど盡きざるべし、此理由を以て、吾人は公が始めより死を決し、死を準備し、故意に生還の道を杜絶して進みたるを偉大とするなり、其必然の結果として吾人は今の敎育家の說く

所に不平なり。

人には自個の責任と云ふものもあり、自個の責任を以て自個の生死（のみならず一切の事）を定む可し、此責任の爲めには時として――否往々に――國家の所望と衝突することも有るべし、國家に謀反することも有るべし、然れども今の國家は之を認めず、單に人民を一定の鑄型に容れ、其の自由の發展、自由の行動を奪ひ、思想の自由を奪ひ、單に治し易く御し易き柔順性を作らんが爲めに、教育の方針をまで其の通りに曲げ、楠公の事を教ふるにも、公をば、豫め死を決したるに非ずと爲し、豫め死を決したるならんには、其の忠義に缺けたる所ありと爲すなり。

即ち世界に通用せざる一種の理論をまで揑造し、事實に合揆せざる我儘の史實を作成してまで、國家至上、個人沒却の主義を推し通さんとするなり、自個責任の上に立つ個人の正當なる自由行動をば悉く邪視せんとするなり、今日までは其れにて通り來れり、然れども乃木將軍の自殺の如きをば、彼等は如何に視んとするか、乃木將軍をば忠君の人に非ずと云はざれば彼等の刃は自ら折るべし。

吾人は乃木將軍を視ること楠公を視るに異ならず、乃木將軍は自個の責任を以て、自個の生命をば自個の最良と思ふ方法に處分したり、然れども將軍の最良と認むる方法は、國家が最良と認むる方法と衝突したり、國家は之を賞せんとするか之を責めんとするか、若し責むるとすれば今までの、故意

に誤りたる教育の方針が此場合にも貫かるゝなり、若し賞するとせば、吾人の平素唱ふる所の意見に投合し來るなり。

乃木將軍は、吾人の意に由れば、實に楠公以後の第一人なり、彼れは人たるよりも神なり、彼れが旅順を攻撃するや、自個の息子をして最も危險なる最も困難なる方面に向はしめたり、彼れは之が爲めに其子を失ひたり、更に彼れは今一人の子を同じ方面に向はしめ同じく死せしめたり、彼れは子を愛せざるに非ず、他人の子弟を無數に戰死せしむるが爲めに、我れ獨り我子を惜みては我が道德的責任に反すとの高潔なる念慮に驅られたるなり、時の父兄は感奮して俗謠を唱ふて曰へり、

一人息子と泣いては濟まぬ
二人り無くした親も有る

と、即ち彼れが息子二人を失ひたる爲めに、國民は唯一人の息子を戰死せしむることを悲まざりしなり、既にして日露の役終り、彼は他の多くの軍人と共に赫々たる威名の中に凱旋せるも、彼れは獨り憂心忡々、多くの父兄に面目無しと爲し、殆んど顏を擧て人に視らるゝとだに厭ひたり、彼れの人格の崇美なる誰か能く比肩せんや、昔し楚の項羽が、多く江東の子弟を失ひたるを恥ぢ、江を渡らずして自刎したるは、支那の事柄ながら天下の美事として、我が國人も之を武士の鑑なりと稱揚する所なり、

乃木將軍は之に過ぐ、項羽が失敗して歸りたるに反し將軍は勳功を輝かして歸りたればなり、爾來彼れの爲す所、一として心事の公明正大なるを想見するに足らざるは無く、吾人をして景仰措く能はざらしめたり、彼れ今は先帝に殉して死せり、彼れ豈に一身終末の此一事に於て平生の心事に負く者ならんや、彼れは實に至誠純忠の人なり、其自殺が軍人として國家を守るべき現在の職務を捨て、教育家として貴族子弟を監督す可き重き附托を捨るに當ることを知らざらんや、知りて猶且つ自殺を肯てしたる、即ち乃木希典の乃木希典たる所以、他人の企及せざる所以なり、彼れの死を決したるは楠公の死を決したるに同じ、彼れは我が國人の忠君の心が、徒らに形跡の美を飾るに流れて、實は精神的に泯滅せんとするを慨したりき、彼れは自ら死を以て我が精神を明かにするに非れば以て此頽波を支ふ可からざるを知りたり、彼れが眞成に忠君なる愛國なる思念は、彼れをして形式に拘泥するを許さず自殺を以て、精神的に痛烈に感化を遺すの一途に出でしめたり、吾人は今の世に彼れの自殺ほど必要なる、將た偉大なる美擧は有り得ざることを信ず、彼れは實に斯く自殺することが、生存して國家を守るよりも以上に軍人の精神に合揆し、生存して子弟を教育するよりも以上に人を教育する所以なるを確信したり、彼れの此自殺は全く我が國家を千歳の後までも救ふに足り、我が人心を千歳の後までも感奮興起せしむることを得るなり。

彼れの自殺するや彼れの妻も、後れじとて又自殺したり、人の眞成の性格は先づ其の家庭に現はる、先づ最も己れに近きものを感化する能はざる人は眞に他人を感化し得る人に非ず、家庭に幸福なる人に非ざれば眞に幸福なる人に非ざると同じく家庭に嚴肅なる人に非ざれば眞に嚴肅なる人に非ず、家庭に尊信せらるゝ人に非ざれば眞に尊信せらる可き價値を有せず、焉んぞ家庭に感化の溢るゝ人に非ずして眞に人を感化するとを得んや、彼れは能く其二人の子を感化し又能く妻を感化したり、凡そ彼れに接近するもの、彼れの意の爲めに欣々然として生命を擲たんと欲するに至らざるは無きなり、嗚呼偉大なる哉彼れや、若し彼にして千年萬年、我が國人を感化し得ずんば、我が國人は最早何人にも感化せらるゝこと能はざる迄に無神經と爲れるなり、彼れの自殺は實に時を得たり、到底感化するに由なき程の無神經なる者と雖も、彼れの自殺には感激すべし、況んや我が國人は未だ其域にまでは墮落沈淪せざるをや、彼れの自殺は千年に萬年に必ずや大なる精神的影響を國民に及ぼすならん、吾人は誠心誠意を以て、彼れに感謝す、然り感謝すとは雖も、自ら省みて到底彼れに感謝するに堪ふるほど痛烈なる誠心、純潔なる誠意を有すること能はざるを深く遺憾とするなり、唯だ彼に感化せられんことを欲するの一念の甚だ切なるに於て、感謝の辭を述べざらんと欲するも能はざるのみ。

知らず我が國家は如何にして彼れに酬いゝ、如何にして彼れの赤誠を永く子孫後世に傳へんとするか、

或は國家は其の僻みたる主義の爲めに何事をも爲さずとするも、國民は自個の判斷を以て何事をも爲さずには止まざるべし、然らば國民は彼れを神として祭る可きか、然り、彼れを神として祭らずんば復誰をか神として祭らんや、縱しや祭らざるも彼れは神なり人に非ざるなり、然れども神なるを知りて祭らざるは、尊きを知らざる人なり、吾人は偉大なる崇高なる純美なる者を求めんと欲して歷史に溯るを要せず、彼れに於て誠の偉大を見、誠の崇高を見、誠の純美を見たり、吾人は彼れと時代を同じくするに於て神と共に棲むの幸福を有したり、人にして彼れより以上に神なる者は在ること能はず、祭らずして如何に此の幸福を永久にするを得んや、實に乃木將軍は神にて在はしき、

今日まではすぐれし人と思ひしに
　人と生れし神にぞありける　（明治四五・九）

身を立て道を行ふの說

寧ろ憐むべき處世上の苦心

人の世に處する秘訣は昔しから說き盡されて居るので、今更ら何事をも新たに加ふ可き點は無い樣

に見える。けれど世の中が生存競爭の激甚を加ふると共に、段々世智辛く感ぜられる樣になり、所謂る「生活難」の壓迫が增して來るに連れ、人は益す良き敎訓を得て、どうかして他人より早く且つ容易に成功を博取したいと切望する。多分は之れが爲めであらう。近年處世法の世に公けにせられるは何れほど多いか殆んど送迎に遑なしとも云ふべき程である樣に見受けられる、或る雜誌などは處世訓を繰返し〳〵て說明する外に、目的は無いのかと疑はれる程であるが、其れでも世人は聽き飽きることを知らず、繰返し〳〵て讀む中には、何か斬新なる方法をでも得て、一足飛に成功の彼岸に達する捷徑を見出すことが出來るで有らう、と云ふ如く期待して居ると見え、目を皿の如くして處世訓を讀む樣子である。余は、世人が斯くまで處世の工夫に苦心して居るかと思へば寧ろ憐むべしとの感を催すことも有る。

渾ての敎訓は正直、親切、勉强の三者に外ならず

凡そ今の世に敎訓を求むれば、殆んど一として備らざるは莫しと云ふ有樣であつて、却て其の多きに苦むで有らう。靑年訓も有れば老年訓も有り、富豪の敎へも有れば、貧に處する敎へも有り、兒童の敎、婦人の敎、少女の敎、少年の敎、英雄と爲る敎訓、聖人と爲る敎訓、實に敎訓で鼻を突くほどの有樣で、轉た煩雜に堪へぬとも云ふべきであるが、扨て其の功能はと見ると、眞實何れほどまで、有

功な者であらうか、余は聊か疑はざるを得ぬ。余の信ずる所に由れば、教と云ふ者は大抵は、常識で分つて居る者で、教を受くる當人の心一つで、具足圓滿する樣である。言葉の言廻しは如何にも立派で美しくて、感心せずには居られぬほど綿密に、長々しく說き立てゝあるとしても、之を讀み之を聽く當人の心掛けに一點弛んで居る所が有れば殆んど何の益にも立たぬ樣に思はれる、之に反して當人の心に弛みが無ければ、太した教訓は受けずとも立派に世を渡つて行く事の出來る例も有る。斯く申す余の如きも隨分教訓に渇した場合が有つて、有名な人の著者なども讀んで見たが、益々讀めば益々惑ふと云ふ有樣で、果は疑ひの雲に鎖され殆んど適從する所を知らぬ樣な場合にも陷ちた事がある。其時は自分ながら全く五里霧中に漂ふ樣な氣がして煩悶に煩悶を重ねた、殆んど如何とも仕方が無いので、或る時、最う一切の疑ひを捨て――イヤ疑ひを疑ひの儘で念頭から取退け、少しも懸念せぬ事にして、其れを自分の實行で以て解釋しやうと云ふ心を起した。斯かる心を起して、愈よ實行に取掛つて見ると、不思議や、今までの疑義が一時に解けた樣に感ぜられる。成るほど、學者や先輩の說き方は種々入組んで居るけれど、之を實行して見ると何でも無い。極めて簡單なる、且つ平々凡々なる三語に歸して了つた。三語とは正直、親切、勉强、たつた此の三ツである。此の三ツを成る可く斬新にとか、成る可く深奧にとか、學者が銘々、自分の意や自分の境遇に適する樣に解かうとする爲め、言語も引

說も紆餘曲折を極め、益々說いて益々惑はせる結果と爲るのであるが、實の處は、誰れの何の樣な教へとても、正直、親切、勉强の三者に反對するは無く、此の三者をさへ心掛けて居れば、何の書を讀まず、何の教へを奉せずとも、一切の學者の教へを實行して居るに同じである。

爾來、余は、先輩の教訓などに餘り耳を傾けぬ。又、人に對しても餘り教訓めいた事は說かぬ。如何に說いたとて、此の正直、親切、勉强の三者を實行するより外に道は無く、教訓とは唯だ此三者へ、樣々の衣を着せた者たるに過ぎぬと信じて居る。なまじ、衣を着せて美しく飾るが爲めに分り難くなるので、一切の衣を撤して正直、親切、勉强の三者を丸裸にすれば、何人にも見たまゝに分るのである。又之を何の樣な場合に行ふても過たぬのである。其れは余が保證する。

立身と行道との區別

斯く種明しを爲し了れば最早や此上に說く可き所は少しも無い譯では有るが、余が特に言ひ度いのは、立身行道と云ふ事柄である。勉强にもせよ親切にもせよ、今の世の教訓者が聊か立身と行道との間に、區別を立て無さ過ぎる傾向が有りはせぬかと疑ふのである。同じ勉强にしても、立身的の勉强と行道的の勉强とは餘ほど價値が違ふ。價値とは、道德的に比較し判斷して、一方は高い一方は低いと判別するのである。道德的に見るとは、卽ち社會と云ふ立場から見るのである。人の行ひは、其人

一身から見て、價値があるに極つた者である樣だけれど、實は社會から見て價値が無ければ、眞に價値がある——卽ち善である——と云ひ難い場合が多い。

支那の言葉に『身を立て道を行ふ』と云ふのがある。支那は仲々に倫理道德の問題を研究した國で——イヤ支那の學問は殆んど其一切が倫理道德の問題であつたとも云はる可き程の次第で、斯る事柄を說明するには最も適當なる言葉に富んで居る。立身とは讀んで字の如く、自分の身を立てるのである。今の世に喧すしく言囃さるゝ『成功』と云ふとが卽ち立身である。自分の身を立つることである。財產を作つて他人の厄介に成る必要の無い身分になるとか、多大の俸給に有り附いて生活に困らぬ樣に成るとか、是れが總で立身であつて、人間第一の務めであることは云ふ迄も無い。此の立身に充分の目的を達した人が卽ち成功の人である。

けれど、實を云ふと、此の立身と云ふ事は、社會の方から見れば、必ずしも大なる價値のある譯で無い。社會とは何ぞや。卽ち衆人である。尤も社會を單に衆人と解釋することは多くの場合に當を得たとは云はれぬけれど、此の場合には衆人と心得た方が分り易い。譬へば三井とか三菱とか云ふ如き富豪は立身と云ふ點に就ては、誰にも優る成功に達して居る。或は一代で玆に至つたか、又は累代の勉强を積んで玆に至つたか、其の區別は必ずしも問ふを要せぬ。兎に角も大なる富を我が物として居る

點に於て、立派に身が立て居る者と云はねば成らぬ。或は桂太郎と云ふ公爵でも西園寺公望と云ふ侯爵でも同じく身が立つて居る。故に成功と云ふ點から云へば、此上に望む所は無い譯である。

立身の社會的價値

けれど、之を社會の衆人から見れば、別に大なる價値が有る譯では無い。三井自身三菱自身、將た桂自身、西園寺自身は、自ら大いに滿足もし、喜びもし、自家の財力を有難く思ふであらうけれど、社會の衆人から見れば、あの人達が富んで居やうと、貧乏であらうと、少しも心には關せぬ。一言に云へば、社會は少しも彼等の富めることを感謝する理由を持たぬ。卽ち立身と云ふことは社會から見て、何にも價値が無いのである。道德の目から見て、一個人の『慾張る』と云ふことが少しも價値の無いのと同じである。畢竟するに立身とは一身の『慾張り』が目的を達したと云ふに外ならぬ。其の利害は一身の利害である。社會の利害では無い。

愛他的行爲と利己的行爲

若し社會から見て、價値が有ると云ふのは、社會に對して犧牲を拂ふと云ふ意味である。若しも富豪と云ふ樣な人が、自分の富なり慾なりを犧牲にして、社會の爲め、衆人の爲を計る——卽ち社會を利益する、衆人を利益する——ならば、其れは社會的に價値がある。社會衆人は、其れを有難く思ひ、

合に於て、社會は其の場合に於て、決して彼等富者の富めることを有難く感ずるのでは無い。彼等が其の富を犧牲として社會に拂ふことを有難く思ふに止まる。若しも富める人が其の富を愛藏するに止め、社會に犧牲を拂はぬなれば、社會衆人は少しも彼等の富めることを感謝すべしとは思はぬ。思はぬのみか、或は羨みもする、或は嫉みもするかもしれぬ。

此の區別は即ち立身と行道との分れる所であるから、能く領會せねばならぬ。一個人の富めるのは一身には價値が有つても社會的には價値が無い。社會的に價値の有るのは、其の富を社會の爲めに割愛し、社會に寄與する點に在る。是れを道德者は愛他的行爲と云ひ、利己的行爲と分つのである。

利我と愛他の精神を混ずる勿れ

此區別は極めて明白である樣であるけれど、其實、左ほど明白ならぬ場合が多い。譬へば或る富豪は、盛に海運の業に勉强し、國家に——社會に——交通の便を開いた。社會は其のお蔭を以て大に旅行の便や貨物運搬の利益を博した。是れは即ち社會が其の富豪に感謝せねば成らぬ點であると。此樣に論ずる人が多い。又或る富豪は大に海外貿易に勉强し、其れが爲めに社會が進步し、社會の商工業が盛になり、社會一般の富も夥しく增した。此點に於て、社會は其の富豪を有難い人として尊敬せね

ばならぬと。此様に論ずるのである。是れが即ち立身と行道との區別——慾張りと犠牲との區別を混するのである。成るほど富豪の海運業や富豪の貿易業が社會を富ましたので有らう。けれど富豪が其の海運や其の貿易を勉強した精神は、立身に在つたのか、行道に在つたのか、言替れば、自分の慾張りに在つたのか。或は自分の慾や自分の富を割き、之を犠牲にして社會を富ませやう、社會を益しやうとの篤志に在つたのか。勿論人間の事業は、一々、自分自身へ利害を與ふると同様に社會へも利害を與ふるのであるから、自分を益したと同時に社會を益した證蹟は確かに在るに相違無いけれど、利我の精神に出た事業と愛他の精神に出た事業とは、何れの點にか相違がある。決して混ず可きでは無い。

如何にも富豪は社會を益した。けれど其れは自分の立身的の精神から出たのである。故に其人が社會を益した事は事實であるけれど社會が其人を益した事が、更に其れ以上の大なる事實では有るまいか。

果して社會が其人を益したとすれば——或は其人を富ましたとすれば、即ち其の人が其れだけ社會の富を自分へ吸取つたでは有るまいか。其れを反對に、社會が其人の富を吸ひ取つた事の様に云ひ、社會が感謝せねばならぬ事の様に云ひ、即ち其人の成功に社會的の價値、道德的の美點がある様に云ふは、少し思想の混雜であるを免れぬ。

故に立身的に成功して居る人は、自個の滿足に於ては圓滿なる成功に達して居ると云ふべきではあるが、疑問は、人たるの道が、此の自個圓滿と云ふ事だけで盡されたか否やと云ふ點に在る。

人たるの道

人は社會に住み、社會の富を吸取つて自分の富と爲すのである。今日の所謂る成功主義は、能く能く詮じ詰めて見ると『余は如何にして社會の富をば、人並よりも以上に自分へ吸取るべきか』と云ふに歸する樣に思はれる。何うも是れだけでは人たる道が盡されたとは思はれぬ。

人たる道と云つた所で極めて空漠なる者では有るが、人は社會の富を吸取つて我が富と爲して行く故、幾らか社會を有難く思はねば成らぬでは有るまいか。幾分か社會に貢献する所が無くては、眞に立派とは言ひ難いでは有るまいか。

社會に貢献するとは即ち社會へ犧牲を拂ふことである。自分の或る物を故意に社會へ吸取らせる事である。是れが則ち『人の道』であるので、之れを實行するのが則ち道を行ふのである。身を立るのと道を行ふとの區別は、利己と愛他との區別に在る。

社會の爲め自己を犧牲とせよ

人が立身の爲めに勉強し、完全に事業を遂行するのは確かに社會を利するのである。けれど社會を

利するのが目的では無く、社會の富を自分へ吸取るのが目的で有つて見れば、社會を益したと云ふことは豫期以外の結果であると云へば云はれる。眞に愛他的の事業と云ふ者は、最初から自分の或る物を社會へ吸取らせるのが目的で、其の結果が、豫期以外に、合せて自分をも益したと云ふ性質であらねばならぬ。幾分たりとも、社會の爲めに自個を犧牲にするとの精神が、事業の根本に含まれて居ねば成らぬ。

玆が卽ち人間の行爲の價値の定まる所であらう。成功と云ふことは、自分から見れば價値がある。社會から見れば價値は無い、學者の言葉を以て云へば道德的無價値である。

人は道德的無價値でも、自個的に價値あらば其れで好いと云ふ人も有る。又苟くも此世に生れた以上は、社會の恩人と爲らねばならぬなどと心掛ける人も有る。余は必ずしも此兩者の間へ、獨斷的に優劣の別を附けるでは無いけれど、自分の身を立ると云ふだけでは完全で無い樣に思ふ。身を立てた上に猶も道を行ふと云ふ努力が有つて始めて完全かと思ふ。少くとも社會的には此方が完全である。何うも、爾らしい。人の一擧一動は總て社會から補助せらるゝ者である爲め、自分も何事をか社會に寄與し貢献して其の恩に報い度いと云ふのが卽ち完人の理想では有るまいか。

若し此の區別を認むれば、人の職業も、自ら高下の別が出て來るかと思ふ。譬へば敎育家の如きも

のは、自個立身の立場――即ち慾張りの立場から云ふと金錢的報酬の少い仕事であつて極めて價値が低い。けれど價値とは即ち自個標準では無く、社會標準であるとすれば、其の職業が、身を立つる目的よりも道を行ふ目的に重きを置ける點に於て、甚だ價値が高いとせねば成らぬ。或は巡査の如きでも、俸給の名を以て社會の富を自分へ吸取ることは極めて少いけれど、自分の身心の力を社會へ寄與することは甚だ多い。其の職業の性質が根本に於て、犧牲的の分子を含んで居る。即ち身の爲めと云ふよりも社會の爲めと云ふ分子を含んで居る點に於て、社會から感謝せらるべき性質であると思ふ。蓋し、人は、自分から見て自分の身に利益の多いのが誇りでは有るまい。社會の恩人と爲り社會から感謝せられるのも、男子快心の事では有るまいか。

行道的の成功を賞美せよ

余は何故に、斯くの如き事を云ふかと云へば、今の世に、餘りに、立身的の成功が唱道せられ、行道的の成功が賞美せられぬ樣に見受けるが爲めである。立身と行道の別は、身の爲めと、社會の爲めとの區別である。或る點は併行もするが或る點は逆行する。此の兩方を相當に重んじて、身をも立て、道をも行ふと云ふ樣に勉めねば、社會の發達の或る部分が必ず害せられると心配する。

人たるものはユースフルであれエフ井セントであれ

或は慾張り的成功の重んぜらるゝのは單に我國のみで無いと云ふ人も有らう。けれど立身的成功主義が、赤裸々に唱へらるゝと我國の如く甚だしきは殆んど珍らしいと思ふ。成功主義と云へば人は必ず米國を聯想するであらう。米國のマーデンは誰も知る如く近時の成功主義鼓吹の先祖とも目さる可き人である。けれど彼れの意味には立身的の外に行道的――即ち慾張り的の外に愛他的――の分子が調和せられて居る、のみならず、此ころ米國の社會道德觀は、サクセス(成功)では無くてユースフル(有用)である。エフキセンシー(多功)である。米國で出版せらるゝ此頃の敎訓の書は大抵此二語を含んで居る。人としては社會に有用なれ(ビー、ユースフル)、行爲とし機械とし、將た設備としては多功なれ(ビー、エフ非セント)である。此意義は單純なる成功で無い。單純なる慾張り本位で無い。人としては自個圓滿であるよりも社會の用に立つことを勉めよ。社會より感謝せられよと云ふに似通ふて居る。米國の富豪が、頻りに公共の事業に寄附するを競ふが如きも、此の有用主義の實現せらるゝ者である。我が國の富豪とても仲々寄附には勉めて居る。けれど社會一般の思想に於て立身的成功の外に、行道的成功を認むることが甚だ少ない、從つて行道的に尊敬せらる可き職業にして、却て立身的不成功の爲めに侮蔑せらるゝ如き例も殆んど枚擧に遑なきほどである。余の信ずる所に由れば、人は身を支へて他人の厄介と爲らぬだけの收入は無論必要である故、此點に勉めねば成らぬのは言ふ迄も

無いけれど、人間の眞の價値は必ずしも收入の金額の多少に比例するとは限らぬ。人間の行ひも多量に報酬を得られる者が價値が多いのでは無い。價値とは社會を益する精神に在るので、若し犧牲的精神を含まぬ行動が如何に成功したればとて、眞に立派と云ふべきでは無からう。余は切望する。社會の多くの人が此點に心を留め、身を立る外に道を行ふことをも勉めて貰ひ度い。立身的に成功する人を羨むと同時に、行道的に成功する人に尊敬を拂ふことを忘れては成らぬ。殊に、既に立身的に成功した人は、ヨシヤ富豪と云はるゝ程の巨大に達せずとも、立身的成功を以て我が事足れりとせず、最早や立身は出來た故、是からは專ら道を行ふのだ、人の人たる道を盡すのだ、と云ふ精神を發揮し自個の道德的價値を高くすることに勉めて貰ひ度い。道德的價値と云ふ事に就ては猶ほ説明すべき點が多いけれど、大意は何人にも分つて居ることと信ずる。明治の世は立身的成功主義の世で有つたかも知らぬけれど、大正の世は行道的成功の世と爲したいのである。

婁(ルー)騒(ソー)誕生二百年

ヂャン・ヂャック・ルーソーは千七百十二年に生れ千七百七十八年に死んだ、即ち今年が誕生二百年に當るが爲め、我が東京に於ても今月今日記念會を催す人がある、余も出席して感想を述る積りで有

つたけれど用事の爲めに差支へた、此一文は卽ち余の感想である。

彼れは伊國のゼネバに生れた、時計師の息子である、少い時より逆境に在つて充分の學問もせず、諸所を放浪して佛國に行き、卅三歲の頃から文學家又音樂家として世に現はれたが、感情一方の我儘極まる氣質で有つた爲め、多くの人と衝突し政府からも憎まれ殆んど寧日無しと云ふ有樣で、獨逸に潜み英國に遁れなどして波瀾多き生涯を送つた、其死する前に自叙傳を作り、死後に出版せしむる事としたが、其書は我國にも譯せられ、過般二六新報に連載せられた、其譯者堺利彥氏が今日の記念會の發起者であつて、博士三宅雪嶺、前代議士福本日南等の諸氏が賛成者の中にある。

余はルーソー其人を好きぬ、殆んど嫌ひである、彼れは人格の上に、景慕すべき何物をも持たぬ、家庭に於ても、交際に於ても、經歷に於ても、心事に於ても、人間の弱點を悉く多量に備へて居るが、唯だ文藝上の大なる天才であるとは認めざるを得ぬ、今日彼れが二百年後の東洋人にまで記念せらるるのは一に彼れの天才の爲めであらう。

彼れは佛蘭西文藝に於ける自然主義の祖であるとも云はれる、余は彼れの著作を僅に一二素讀したに過ぎぬ故、彼れに就ての余の知識は甚だ貧弱であるが、成るほど彼れは自然主義の元祖であらう、少くとも自然の兒である、自然を讃美して文明の弊害などを呪ひ、文明が人を僞りにすると云ふた、

又自然を叙述するには餘ほど美くしい文章を書き得たらしい。隨つて人情の秘密なども痛切に穿つたことは多くの學者の評が一致して居る、けれど彼れは學者では無かつた、學者と云はれるには彼れの學問が餘りに乏しかつた、詩的な所が有つても詩人たるには餘りに薄ツぺらであつた、哲學めいた所も有り、當時の哲學者にも交はつたけれど、當時の其の哲學者と云へる人々が餘ほど淺薄であつたのに、彼れは其れよりも更らに淺薄であつた、彼れは宗教に於ても無茶で有つた、唯だ音樂に於ては、其他の事に比して遙かに高尚な趣味を持つた天才であつたけれど、氣の毒なほど音樂の素養が缺けて居た、小說家としても純小說家たるには足らず、戯曲家としても大した者では無かつた。

此樣な取り柄の無いのが、何で不朽の名を爲したかと云へば、彼れは彼れを英國で匿ふたヒユーム(かくま)が後ちに評した如く『皮の無い人』で有つた、今は皮の厚い人が多い世で有るが、彼れは自分の感情を少しも包むとが出來なんだ、而かも其感情が天然に非常に强く全く感情の奴隸であつた、人を憎んだり愛したり嫉んだり疑ふたり、泣いたり、羞ぢたり怒つたり、行ひには少しも統一が無く、殆んど半狂人で、其自傳を書いた頃には全く狂人と爲つたとも云はれ、僞らぬ樣に見せて有りながら仲々に僞りも掛け直も有る、が、只だ其の天然の强い感情を、少しも曲げずに其儘に書き現すのが彼れの文章であつた、技量であつた、即ち文と感情との間に僞りが無い『誠』の文章と云はれる、文章としては澤

山の瑕も不法も有るけれど其の『誠心の儘の赤裸々の寫された文章』が、文章としての彼れの貴重であると、近世第一流の文藝批評家が評して有る、英のラスキンなども文藝的に彼れの産兒であると云はれる。

是よりも、彼等の名を不朽にしたのは其の社會契約論である、社會契約論は『民約篇』と題して、日本では、故中江兆民居士が飜譯した、是れは殆んど民主主義、共和政治主義の經典の如くに云はれ、彼れの死後に盛になつた佛國の革命論者などは彼れを神樣の樣に崇むるに至つた、其の餘響が今日まで傳はつて居るのである。

社會契約と云ふことは歷史的に少しも根據が無い、高等批判の貴ばれる今の學者は之を一笑に附するのである、勿論高等批判に掛けては論理も支離滅裂の所が多い、單に歷史を無視した缺點のみでは無い、けれど、社會契約論には多大なる誤謬の中に點々眞理の光を含んで居る、宛も砂の中に金の含まれて居る樣な者である、如何にも人は曾て社會契約を結んだ事は無い、社會は其起りを契約に負ふては居らぬ、とは云へ、人々が社會を悔いず、社會を便利とし、社會を愛し、社會に服從して行く所を見れば自ら契約した樣な理合が其所に含まれて居るでは無いか、社會が人を束縛するは契約の結果で無いけれど、人自らの感ずる所は互ひに自由意志を以て作りたる契約を感ずるのと似て居るでは無

いか、而して其裡に自から或る條件に從へば解約することの出來る自由的相互團體の如くに感ぜられる場合が多い、殊に今日の社會は、殆んど我慢の爲し難いほど個人を壓迫することが有る爲め、個人主義の段々浸潤する今日の人は、社會を自由的相互團體と見て宛も保險會社に對するが如く、社會に對し様々の改訂案、様々の改革案――所謂る社會政策――を目論むのである、此心の底にはルーソーの民約篇と靈犀一點の通ずる所が無ければならぬ、之を他の方より云へば即ち彼れの民約篇に、此社會てふ一物の根源の理と相響く所がある、是が即ち砂の中の金、誤謬の中に光つて居る眞理である、此の眞理、此光りは何時までも人心に感電する力を失はず、世が進めば進むだけ感電の度を強くする、竟には社會を全く契約的根本の上に置くに至らぬとも限らぬ、此の所が卽ち彼れの名を不朽ならしめ得る或物である。

生活難の亢まり來る今の世に彼れの記念の爲めに會を開く人、之を賛成する人の有るのも、幾分か右の如き消息を語るではあるまいか、余が感ずる所は則ち是れである。(明治四五・六・二八)

『ニイチエ』を讀みて

道德の思想が全く一變したとも云ふ可きは、今の世の個人主義である。ルーソー以來の自然主義は其れである。ニイチエも其れである。神秘主義や藝術の論にも其れが加味されて居る。當今の新聞に雜誌に、多く唱道せられる意見が大抵は其れである。說き方は一樣ならずと雖も、歸する所は自我の權威に重きを置き、在來の道德てふ者の權威を疑ふに外ならぬ。

けれど、自我と云ふ者は、獨り生れて獨り活くる不羈獨立の者であらうか、是は疑はしい。道德と名くるにもせよ、名けぬにもせよ、凡そ人の行ひ『斯くせねば成らぬ』とか『斯くあるべきである』とか云ふ訓言めいた意見は、總て幾分か所謂る自我よりも以外に何等かの標準を認めねば立たぬ筈では有るまいか。成るほど自我の要求は、明白な事實である。けれど事實以外の訓旨も何等かの事實を含んで居るのでは有るまいか。別言すれば在來の道德と云ふ者も何等かの事實の根柢を含んで居るのでは有るまいか。又別言すれば、古き道德に囚はれると云ふことが、實は矢張り自我の要求から出て居るでは有るまいか。

人の『自我』と云ふ者は、其の根本に於て或は盲目なる衝動であるかも知れぬ、單に活きんと欲す

る意志であるかも知れぬ、他に超越し他より優絶せんとする發作であるかも知れぬ。全く獸類の天性と少しの相違も無い或者であるかも知れぬ。けれど眞實に我れ自らの『自我』を考へて見れば、其所に一種の『社會性（ソーシヤリチス）』とも云ふ可き『人なつかしき性向』が有るではあるまいか。余は孤獨の者として生れ來るを知るも、此世に於て孤獨を以て滿足し得ざる或る心性の有ることを感ぜざるを得ぬ。是が多くの生物の自我の天性では有るまいか、アダムスミスが同情と云ひ、キットが同數の感（フエロー、フヰーリング）と云ふ者が、確に自我の中に含まれて居る樣に考へる。此の感は萬物の自我に通有であつて、進化の階級に隨ひ段段と現はれて、社會と個人との離れ難きまでに結合せる今の人類に至りては、此感が益々强くなつて居るでは有るまいか。此感をば單に性慾とか或は獸慾の發現として說明せんと企てた學者も有る、成るほど爾うかも知れぬ、けれど源は孰れに在りとするも、今の自我は、單に性慾獸慾と云ふ者よりも以上に、又親子の感じよりも以外に、同類と同類と視て戀慕ひ、親切を盡しつ盡されつする一種の社會性を帶びて居る。食を欲し色を欲する如くに、同類に對して同情を寄することを欲し、又同類より同情を寄せらるゝことを欲し、親みの交感を欲する。若し親みの交感が無ければ、物足らぬ感に堪へぬ。其の物足らぬ感は宛も食を得ざれば物足らぬ感（即ち空腹の感）と同じく、益々長きに涉れば益々痛切を加へ來り、我が重要なる活力の萎縮をも訴ふる樣に思はれる。是れ即ち自我と共に存する不滅

の社會性である。

既に此の社會性を認むる以上は、自我に取りて社會の必要をも認めねば成らぬ、社會は自我の欲求が自然々々に現はれた制度であらう。自我は、食物に養はるゝ如く之れに養はれ、色慾に繼續する如く之に繼續する、之れ(即ち社會)は自我と別物で無く、自我の一方面である。時としては、否多くの場合に、自我と衝突する樣に見ゆるけれど、其の衝突すらも今と爲りては自我に滿足を與へるの本と爲ることが多い、即ち社會を尊重することが自我を尊重するにも當るのである。

既に社會が自我の一方面の現象である以上は、自我が自我の發展を希ふ如く社會は社會の發展をも希はねばならぬ。其の社會の發展を希ふ所以の主張が、即ち個人に對する道德の要求であると云はれぬで有らうか。自我の强きを欲する如く、社會も强きを欲するでは無からうか。社會の强からんが爲めに、幾分か自我を爲めて社會に從はねば爲らぬ『汝欺く勿れ』『汝虐ぐる勿れ』と云ふ如き訓言は、社會を强からしむる最必要の條件である、人が自由に人を欺き、又は虐ぐることが許されて、如何にして社會の結合が保たれやう。社會の結合を健全にせんが爲めに、『汝欺く勿れ』『汝虐ぐる勿れ』と云ふが如く、個人を制する者が即ち道德と名けらるゝ或者である。是れが無ければ、社會は發達はせぬ、自我の內部に存する社會性が滿足を得ることが出來ぬ。

故に余は道徳は何故に存するかと云ふことに對して寸分も疑ひを抱かぬ、宛も自我が何を欲するかと云ふ事に對して疑ひを抱かぬと同程度に於てゞある。

此ごろ舊友久津見蕨村君の著した『ニイチエ』を一讀して、其書の頗る能く『ニイチエ』を表現し得たるを感ずると共に、顧みて近來の我國の思想界の傾向を思ひ合せ、斯かる平凡なることを一言し置くの必要を感ずるのである。社會を見ずして單に自我を視、自我の社會性を計算の外に置きて、在來の道德の權威を無視する如き種類の意見は、如何に世に盛なりとするも完具の論として敬服することは出來ぬ。社會即ち自我の必須なる要求であると云ふ見界の上に立たねば、啻に在來の道德の權威が許せられぬのみで無く、今後の道德も基礎を得ることが出來ぬで有らう、書して以て識者の教を須つのである。（大正三・五・一）

危險思想と穩健思想

一、危險思想とは何を謂ふか

一ころ危險思想とは專ら社會主義――又は之に類似する共產主義、無政府主義者等の如きを指して謂つた。併し此等の思想には根本に於て大なる矛盾を含んで居る。

個人の勞働の結果をば社會に收納するは個人を犧牲にすると同樣である、個人沒却主義である。然るに無政府主義の如きは極端なる個人主義である。

個人の爲めに社會を犧牲とする思想と社會の爲めに個人を犧牲にする思想とは相反する兩極であるのに、今までの社會主義は多く極端なる個人主義より出て居る。個人主義より出でて而かも個人の利益を社會の監督に委すると云ふは茲に矛盾がある。彼等は個人が政治的に壓迫を被むるに堪へず、之に反抗して社會主義を案出したのであるから、根本が個人主義たることは云ふ迄も無いが、唯だ政治(即ち國家の力)に代ふるに社會の力を以てせんとするに至りて乃ち政治の壓迫を社會の壓迫に變ぜしめんとするに外ならぬ。故に社會主義の主張の多くの部分には、政治が個人を壓迫した如く――否、それよりも更に甚だしく社會が個人を壓迫するの意を含んで居る。蓋し個人を壓迫せねば社會主義は行はれぬのである。

此の社會主義の中の、何處の部分が危險思想なるかと云へば、社會が個人を壓迫する點は個人に取りて危險にして、個人が社會に反對する點は社會に取りて危險である。此點よりすれば危險思想とは兩樣に觀察することが出來る。個人主義は社會に取りて危險思想であり、社會主義は個人に取りて危險思想である。約めて云へば立つ所の見地に由りて變ずるので、社會の爲めを云へば個人主義が危險

となり、個人の自由の爲めに云へば社會主義が危險となる。

吾人が今日眞に危險思想と云ふ可きは右の孰れに屬するものであらうか。單なる社會主義は已に既に學界から退けられたけれども、個人を發展せしむる方法又は機關として社會の重んず可き事や、社會政策の研究せらる可き事は勿論である。今日の實際を云へば、個人は社會の中に生れたる者にして先天的に社會的である。世に社會ならざる個人は無い、若し有らば、そは吾人の今日一般に個人と指稱する意義とは異にして、極めて孤獨性に富みたる獸類の如きものである。人としての意義を成さぬ。

二、眞の危險思想

此點より云へば、危險思想と云ふ者は、或る程度を超過したる個人主義の謂ひである。危險思想を避けねば成らぬと云ふことは、個人主義をして社會の協調を害する迄に跋扈せしめては成らぬと云ふ事である。

三、福澤主義の缺陷

斯く意義を確定して考ふると、今の世の人が神樣の樣に尊崇する福澤主義にさへも危險思想の根が存して居る。本來福澤主義とは何ぞやと云へば、故福澤翁の産地たる豐前中津に建てられたる獨立自

尊の碑に明かなる如く、獨立自尊の主義である。獨立自尊の主義は個人主義と似通ふ點が殊に顯著ではは無からうか。

人の社會性は獨立たると共に互助で無ければ成らぬ。互助卽ち『ミューチュアル』な所に社會が成立つので、今まで道德の孰れの訓旨とても互助に重きを置かざるは無い。故に福澤主義をば、穩良なる敎訓たらしめんが爲めには獨立と云ふ個人主義の外に互助と云ふ社會性の意味を今よりも多量に含ましめねば成らぬ。然るに福澤主義は獨立の下に、矢張り社會的よりは個人的に多く共鳴する自尊を附加した。自尊と云ふことは多少社會的の意も籠れる者と辯護する餘地は有らうとも、汝の隣人を愛せよとか、己れの欲せざる所之を人に施す勿れとか云ふ如き愛他主義、博愛主義の語ほど互助の精神を含んでは居ぬ。此理由に於て福澤主義は今の世の危險思想を攻擊する根據とするに足らぬ。

四、個人の危險性

勿論人は社會的に生れて居るけれど、餘ほど個人的の性癖を固有して居る故、聊か辛い苦しい如き場合になれば益々個人の我儘を發揮する。衣食足りて禮節を知ると云ふが、禮節は卽ち社會的互助的の根據から發して居る。けれど衣食の足らぬと云ふ苦しい場合に成れば、我儘主義の本然に復歸して禮節も何も擲ち、盜行をさへも敢へてするに至るでは無いか。盜行は卽ち自個主義我儘主義の極端であ

つて——即ち危險の本體である。愈々以て危險思想とは個人主義の或る程度以上に增長したものであることが首肯せられる。

五、個人と社會

此の個人主義が生存競爭の愈々激甚を加ふる今の世と爲りて、愈々危險的色彩を帶ぶる程度にまで沸騰して行くは理の自然であるかも知れぬ。

近時の米騷動の如き、食ふに困るより出でたる者とすれば、衣食足らずして禮節を忘れたるの甚だしき者である。けれど、辛い苦しい場合の有る每に危險的色彩を現はし來るのが個人主義の本來であるから、致し方が無い、之を除かんが爲めには何うしても個人主義を制裁し、又は抑制し、又は緩和する如き手段を講ぜねば成らぬ。之を講ずるのは矢張り社會の力である。社會政策である。

六、富豪と勞働者

併し、個人主義が如何に跋扈して居るかと云ふ實際の實狀に至りては、吾等の視る所と世人の見る所とに多少の相違があるかも知らぬ。

今日の個人主義は衣食足らざる窮苦の人に於て大に增長して居るのみで無く大金持、大事業家に於ても同樣に增長跋扈して居る。

今の世の大金持と云ふ者は、大抵は大資本家大事業家である。其故は富と富との競爭が世の大金持をして、大金持たるに止まることを許さず、其の大金を利殖せねば成らぬ必要の爲め、之を大資本家と爲し、大事業家と爲すのである、既に其金が資本と爲り其人が事業家と爲る以上は、生存競爭の辛さ苦しさは、他の下層民と幾分の相違は有らうも、大なる差異は無い、彼等として役々營々齷々齪々として油斷無く稼がねば成らぬ。唯だ彼等の稼ぎは資本の力に助けらるゝ故、赤手空拳の勞働者に比べて其の收入の大なること、全然比較に絶するのであるけれど、收入が多いに就ては費用も多いので、若し彼等が其の資本の力をのみ頼み、世の生存競爭の世智辛さを忘れて居たならば、忽ち窮地に陷ることは無資産の勞働者と大なる差異は無い。

此の實狀は近世の同盟罷業が能く例示して居る。罷業する勞働者は、明日の食糧さへも當ての無きが如き無資産の地位に在るも、割合に長き罷業に耐へて、却つて工場主や資本主と云ふ者が長きに耐へず、閉口頓首の狀態に陷るのである。此の割合は文明が進めば進むほど資本家の不利益を增して來る樣である。通例工業の幼稚な時代に於ては、勞働者の聯合も不充分である爲めとは云へ、大抵のストライキが罷業者の敗に近い形に於て終るけれど、工業が進めば進むだけ、資本主の讓歩が增して來るやに思はれる。斯る道理であるが爲めに、若し或る暴力を以て社會一般の商工業を悉く停止したなら

ば、無資産の徒は存外永く平氣で有るけれど、三井三菱の如き大資本家が一番先に泣出すかも知れぬ。

七、富豪の個人主義

斯樣な事情の下にある爲めとは云へ、今日の富豪や大事業家は、決して個人主義以上に超脱して居る者とは云へぬ。矢張り殆んど極端なる個人主義者である、此度の米騷動の如きは、多くの富豪が如何に多額の寄附金を出すの覺悟を持つて居るやを例示した樣な者であるけれど、斯かる寄附金とても彼等の個人主義を裏切る如き程度の者では無い。

兎にも角にも今日の社會——日本の社會——は上下滔々として個人主義、獨立自尊主義、自尊他卑主義、贅澤主義、利己主義、我利々々主義に充ち滿ちて居る。之が即ち危險思想の本體である。先頃の燒打なぞを見ても、燒打の兇行者たる群衆が危險思想を表顯したのは云ふ迄も無いけれど、燒打の最も著明なる一例と爲りたる某商店の如きも、平生の行ひが我利一點にして、ヨシャ愛他に類したる行動を爲す際とても、其の動機は矢張り我利の打算よりも出づることを看破せらるゝと云ふ如き事情が其の因を爲したと云はれて居る。全く自個主義と自個主義、私心と私心——我利と我利との衝突が火を發したる如き者である。是故に今日の日本に於て危險思想と云ふ者は、或る一階級の特殊の産物で無い。日本全國が危險思想の國となつて居る。

此の必然の斷案は『危險思想を如何にす可きやの問題は、日本の社會全般の改良問題である』と云ふことに歸着する。今までの社會主義の思想等の如く、單に警察に其の取締りを一任して置く可き者とは全然種類を異にする。

八、個人の精力の社會統一――社會的主義

危險なる個人主義の瀰漫が、特に今の世に甚だしく、更に今後生存競爭の激甚を加ふると共に、其の瀰漫を濃厚にするのみで無く、又特に今後の日本に於て之を忌まねば成らぬ事情がある。若し此まま之を捨置くに於ては、日本は遠からず世界の生存競爭場裏に於て落伍者と爲らねばならぬ。

五指の交彈は一拳の打擊に如かぬ理であつて、個人銘々の力は、社會共同の仕事に及ぶ可くも無い。今後の日本は社會全體の全力をば日本の社會の向上に統一して、社會の力を以て個人以上の大事業を爲さねばならぬ。

今の戰爭中なる列國は、孰れも社會主義の力をば社會向上の目的に統一し社會的に大努力を發して居る。他日戰爭の終る時は、更に此の統一せられたる社會力をば戰後の恢復の爲め、工業の爲め、商業の爲め、貿易の爲め、國家增進の爲めに用ふ可きは無論であらう。之が即ち戰後に來るべき平和の戰爭であるが、此の平和の戰爭に於て勝者と爲るは誰かと云へば、無論社會の力を以て個人の力を社會

に統一し、社會的に大事業を爲すに堪へる國で有らう。其の必然の論理として、日本の如く個人主義の瀰漫のみでなくして、社會的の主義に統一せらるゝことの薄き社會は落伍者たらざるを得ざるの斷案に達するではないか。玆に社會的主義と云ふは、社會學者の云ふ『ソサイエチズム』である。社會主義即ち『ソシアリズム』では無い。社會の爲め個人の力を統一し、個人の向上をば社會の向上に調和せしめて、社會個人共に限り無く向上する主義である。危險思想に反對の現象は此外に無いと思はれる。

九、今後の列國との競爭

若し個人の力を社會的に統一し、個人をして社會的主義に從はしめ、社會の共力を以て社會の急務を完全に遂行するを得ば、今後の日本は庶幾くは世界の一國として列國と共に進むを得るであらう。是が出來ざれば列國と生存競爭し得る手段が無い。

如何にして之を行ふ可きか。若し漸を以てするならば、第一敎育の力に賴る可きであらうけれど、今は其樣な悠暢な際で無い。社會自ら社會の力を以て個人を制御すべきである。但し玆に社會の力と云ふは政治の力を指すのである。

政治を以て個人の行爲に干涉することを非とする任他政策（レッセフェイヤ）の時代は過去と爲つた。個人の自由は貴

重であるけれど、社會は――政治は――其の社會の力を用ひて個人の自由を制御することに由りて個人の自由を保護せねば爲らぬ。是と同じく社會萬般の事、苟くも個人の力に之を委するよりも社會の力を以て之を遂行する方がヨリヨキ結果を擧げ得るに於ては、社會の力を以て之を遂行せねば成らぬ。之を遂行し得ぬ社會は無能なる社會である。無能なる社會は之を遂行し得る如き有能なる社會と競爭することは出來ぬ。されば失敗に定つて居る。

十、社會と資本と勞力の割合

更に實際の實行問題としては大に其の方法を研究せねば成らぬ。余とても今確定の案を有せぬ。けれど、今玆に念頭に存する概略を一言せば、凡そ此世に於て事業より生ずる純益は、其の一半を社會に提供せねば成らぬ（租稅又は寄附金として）、若し事業家資本家が之を喜ばざるに於ては、彼等は今後の社會に有害なる態度を取れる者、卽ち危險思想の實行者と目されねば成らぬ。

吾人は貧しき者の利己主義（卽ち危險思想）を矯正すると同時に、富める者の危險思想（卽ち利己主義）を矯正せねば成らぬと確信する

既に利益の一半を社會に差出さば、社會は之を用ひて、從前の費用に耐へざるが爲め擧行し能はざりしが如き種類の急務を遂行し得て、一は以て社會の利益を增し、一は以て個人の幸福を增加するこ

とが出來る。

殘れる一年の利益は資本主と勞働者とに之を均分するのである。今日及び今後の事業は、資本の重んず可きと同じ程度に勞働も重んず可きである。所產の利益を資本と勞力とに均分す可きは、自然の事と思はれる。

斯くすれば利益を四分して、其の二分を社會が取り、一分を資本主が取り、一分を勞力者が取ると云ふが如き割合となる。此の割合にて增減の餘地が有るけれど、主義としては斯く無くては成らぬ。

十一、今後生存競爭の決勝點

斯くすることは今までの經濟論より云へば、製產費を高くして事業の前途を遲緩ならしむる恐れが有るかも知れぬ。然れども斯くするが爲めに總ての事業は社會の直接間接の助力を受け、前よりも圓滑に、前よりも小費に、前よりも能率的に遂行せられ得る點も多い。必ずしも製產費を增すとは限らぬ。況んや製作費の安廉と云ふことのみが、工業を進步せしむる一切では無いに於てをや。

要するに今後は個人の力を主とする者は、個人及び社會の力を調和せしめて進む者と競爭することは出來ぬ。然るに尙ほ個人の力を主とするは愈々以て危險思想である。社會の力を以て個人を奉ゐ、個人の所得を以て社會を强め、協調の力を以て進む所に、今後の眞の政治が有り、眞の進步が有り、

人の道が存る。危険ならざる思想は是である。危険思想を轉じて穩健なる思想たらしむる方法は、余の狹見を以てしては此の以外に見當らぬ。（大正七・七・一〇）

社會より看たる角力

日露戰爭の結果として、日本は確に世界一等國の列に入つたが、扨て一等國の面目と資格と實力とは決して兵力のみで支へられる者では無い。政治の進歩が之に伴はねば成らぬ。けれど政治のみでも支へられる者では無い。實業の進歩も之に伴はねば成らぬ。

是だけは誰も思ひ、誰も云ふ所であるが、政治の進歩と實業の進歩のみでは猶ほ不足である。更に社會の各方面の活動と設備とが之に伴はねば成らぬ。國と國との交際（殊に一等國と一等國との交際）は、兵力や政治や實業のみの交際でない。社會と社會との交際である。社會的の和合である。社會的に一等國と和合することが出來ぬ以上は、兵力の交際も、實業や政治の交際も、單に形式である。空なる形である。決して之が爲めに實益の生ずる者でない。又永續する者で無い。言葉を換へて之を云へば、決して一等國の地位勢力が支へられる者で無い。

此點から云ふと、此頃諸新聞に發表された角力の常設興行場を設ける事柄の如きも、小事に似て小

事で無い、實は吾々の中に時勢の推移に驅られた者で、我國の地位に相當する社會的設備の一部分として、斯く無くては成らぬ次第であらう。

是は角力のみで無い。一方を見ると、演劇の如きも、正しく同じ風潮に驅られて、大に其の設備に一進歩を來たす可き場合と爲り、既に有力なる實業家、社交家等が先に立ち、數百萬の資本を集めて大なる劇場を作ると云ふ相談を始めたのも有り、又文學方面の大家が文藝の協會を作り、演劇の改良を第一の仕事にせねば成らぬと盡力して居るのも有る。是れには當世第一流の人物が多く加はつて居る。斯樣な仕事が進歩せずして、此の日本の國が何うして西洋の諸國と社會的に和合した交際が出來るであらうや。何も斯樣な事は、世界一等國たるが爲めにのみ必要だと云ふでは無い。苟くも世界の一箇國たらんが爲めには直に必要である。假令ば海外から賓客が來る、其賓客等は日本の景色をも社會をも見たい、逗留中は成る可く面白く、又居心能く暮し度い。然るに日本の社會は此希望に叶ふ者が無い。富士山を御覽なさい、日光を御覽なさい、天然の景色はお見せ申すが、我々社會の有樣は恥かしくて、お見せ申すことが出來ません。昔しの人の作つた日光廟は御覽下さい、今の我々が作つた代物は御覽なさる價値がありません。活動の無い死物的の景色や死物的の舊蹟は日本の誇りです。今の我々の活動は、一つも貴覽に供するには足りませんと。此樣な有樣で、日本が世界の眼に多少直打

の有る國と思はれることが出來やうか。成るほど日本は進歩した國である、文明世界の一箇國であると認められることが出來やうか。吾々は是を思ふ毎に、背に冷汗の流れる想がする。

今、角力の事などは取分けて斯樣な冷汗の種である。抑も角力は日本特有の遊戲であつて、日本の歴史と共に來り、或る時代には朝廷の儀式節會にも關係し、或時は武人の修養とも關聯し、而して何の時代にも國民一般の嗜好、風俗心情の關係せぬ場合が無い。其の我國の特有と云ふ一點は、演劇などに優つて居る。凡そ日本を觀んと欲する世界の人々は、先づ日本の特有な事柄に目を着けるのである。日本が勃興すれば勃興するだけ、ます／＼日本の人情風俗の特別な表現に心を配る、取分けて日本が武力を以て世界を驚かした必然の餘勢として、少しでも日本の氣風を武强的にする如き特徴は熱心に觀察せられる。此樣な場合に、日本の特性（カラクタリスチク）を爲して居るとも云ふ可く、又國民的遊技（ゲーム）とも云ふ可き角力の如き者が、世界の人に見せることの出來ぬほど、不行屆きなる不衞生なる、不愉快なる方法を以て興行せられつゝあるは、決して興行者の遺憾では無い、社會の遺憾である、一般の遺憾である。尤も昔しから日本の角力は此通りな不完全な方法で行はれて來たので、若し公平なる學者の研究の材料としては、在來の儘を、虛飾なく見る方が參考を資けると云ふ意味も無きにはあらねど、今は學者の問題では無い、社會的の問題である。世界と社會的に交際し、國家の品位をも、評判をも落さ

じと勉めねば成らぬ今の世に、世界人の特に目を注ぐ可き觀覽場を斯くの如き者たらしめて、如何にして嘲笑を免るゝことが出來やう、其の嘲笑は直に社會一般の上に降り下るのである。日本の文明の程度の上に來るのである。今の世の文明の世界に於て、其の社會の程度は、最も多く其の社會が天然力を利用するとか、天然に勝つとか云ふ働きから觀察せらるゝ、天然には何れ程の不便が有るも、人力を以て、社會の設備を以て、其の不便を無力にするのが文明の一の働きでは無いか。日本の一の特技が雨天順延と云ふが如き幼稚なる設備の下に行はるゝとは、日本の位置と、社會の程度とを最も劣等に視做さゞるを得ざらしむる所以である。

若し角力が我が國情に古來何れ程の關係が有つて、今も何れ程に關係し、社會人心の上に何れほど影響するかと云ふことを、細かに述れば、容易に論じ盡すことは出來ぬが、其れは此の論の目的で無いから省略する。兎に角も何れの時代にも、何れの村落にも行はれ、何人にも實行せられた角力の如き事柄が、日本の國情を今日あるに到らしめたるに於て、與かる力が無かつたとは決して云ふことが出來ぬ。日本人の體格の發達の極度の標準を實現する者は角力であると云ふことも出來る。尙武の心を通俗化して、直ちに一般の人心を、其の蒙昧の時代より、其の幼少の年齢より、知らず〳〵陶冶したのに與かつて力があると云ふことも出來る。體格に缺點多き、又は發達の阻害せらるゝこと多き今

の日本に必要の遊技であると云ふことも出來る。勿論體格の問題は角力に依つて解決せらるゝ譯では無いけれど、角力は遊技として健全な部類である、社會には何うしても遊技の無い譯には行かぬ。人々に遊技をも娯樂をも供せぬ社會は不具の社會である。其樣な社會に於て社會の分子たる個人が健全に發達することは決して出來ぬ。娯樂と云ひ遊技と云ふ者は、精力の培養者である。精力の枯渇した社會は亡ぶるのだ。精力の能く養はるゝ社會は勃興するのだ。其樣な事は小學の兒童でも今は知つて居る筈である。國家を料理し社會を經營する人も此點に心を注がねば成らぬ、成る可く健全な社會的娯樂を存養して不健全なる者に代へねば成らぬ。而して生存競爭に枯渇する社會の精力と、個人の勢力とを涵養し蘇生させて行かねば成らぬ。余は此點に於て我國の角力を社會經營上の必要物中に數へることを躊躇せぬ。

然るに角力の如き者が、今日まで野蠻なる『雨天順延式』の設備の下に行はれて居たのは、無論社會の進歩が玆に到らなんだ爲めではあるが、一は國としての日本の地位が低くかつた爲めである。併し今は我國の地位が進んだ、何事も『雨天順延式』では居られない境遇に進んだ、社會を經營する人は玆に目を注がねば成らぬ。若し角力自らが此の舊式を脱するの思想の無いなら、之を覺醒させて其の思想を與へて遣る可きである。思想に有つても未だ其れだけの力が無いなら、其の力をも與へて遣る

可きであらう。聞く所に由れば、今度計畫さるゝ角力常設場には、玉座の設けなども許可されたとか、許可される筈とか云ふことである。余は畏れながら之を當然な事と信ずる。最早一般の社會經營者に於ても斯かる點に眼を注がねば成るまい。我國の特技とも視る可き一つの社會的國民的遊技が、雨天順延式の下に世界人に見せらるゝは、我國の今の位置に相當とす可きで無い　餘事ながら是れに就いて想ひ起すは、我が東京の市すらも外賓を接待する場合に、殆んど雨天順延式に瀕するほどの不便を忍ばねば成らぬ一事である。過日外賓を日比谷に請じた場合なども、市の當事者が、絶えず心配氣に空をのみ仰ぎ眺むるは、氣の毒にも遺憾にも思はれた。天象の最も普通なる雨に勝つぐらゐの設備は、最早や東京などにも有る可きでは無からうか。此邊を思へば東京に一の雨天順延式を脱する大なる會衆の場所あるに至るは、市としても多少の歡迎を價す可きでは有るまいか、兎にも角にも余は、角力常設場建設の事を、社會的に視て、確かに國家の進運に關係のある者と斷ずるのである。爲政者に於ても、多少此邊の問題に注意を向けて貰ひ度い。其れが爲めに斯くは意見を吐露した次第である。（明治三九。二。八）

善を爲す勇氣

吾人は善事を爲すに人を恐れざる可からざるか、惡人は人を恐れて其の惡事を躊躇すること有り、善人も亦人を恐れて善行を躊躇す可きか。

是れ殆んど笑ふ可き疑問の如くにして、實は大に考量を要する所なり。古人曰く『義を見て爲さゞるは勇無きなり』と、知る可し、義と云へる善行を爲すにも猶ほ勇氣を要することを、勇氣無ければ、義を見ると雖も爲す能はざることを。然れども勇氣は必ずしも、人毎に有するに非ず。古の聖人なる者が『自ら省りみて疚しからずんば、千萬人と雖も我れ往かん』と云ひたるが如き勇氣は、聖人にして始めて有るなり。吾等が如き聖賢以下の徒は、此の勇氣無し。實際に是れ善、是れ義なりと知るも、千萬人の敵に逢はゞ躊躇せざること能はず。

否、必ずしも千萬人の敵に限らず、單に數人の敵に會するも、時に恐れて躊躇すること有るは人の情なる可し、悲しくも此世には善行を躊躇せしむるが如き事情甚だ多し。善を爲すに恐るゝを要せざるは、理想の社會なり。今の社會に非ず、又今の社會に於て、善を爲すに少しも恐れざるは理想の人なり、通常の人には非ず。

星亭の死すると共に島田三郎が姿を隠したりと云ふは何の爲めぞ。蓋し島田氏は星の惡を惡なりと云ふに憚らざりし人なり。惡を惡と云ふは一の善行ならずや、然も島田氏は此善行の爲めに姿を隠す迄の危險を感じたりと見ゆ。又聞く田口卯吉氏は巡査を護衛として引連れて星亭の葬式に會したりと、此人も星亭の生前の行ひに對し、當然の批評を加へたるが爲めに、自ら危險を感じたるなる可し、兩氏を臆病と云ふは非なり。今の社會が全く善を爲す人に危險を感ぜしむる組織とは爲れるなり。

之を疑はゞ、試みに一日眞面目に日を送りて見る可し。隣人は必ず氣の詰る人として疎んず可し。商品を掛値無しに客に供して見る可し、必らず正價の以内まで直切り落さるゝのみならず、同業者より攻撃せらる可し　斯の如きは猶ほ可なり。試みに友人の吾を遊蕩に誘ふを拒絶して見よ、吾は必らず不具、人情を解せざる者の如く見做されて、以後は一切の相談に除け者とせらる可し。人の嘘言を吐くを見て嘘言なりと指摘して見よ、必　餘計な事に口を出す惡人と見做されて、擯斥せらる可し。人の過失を見て、改む可き旨を忠告して見よ、必ず夏蠅き人として避けらる可し。更に斯く他人の事に渉らず、單に自分の一身を能く守り、正直に謹愼に孜々として、稼業を勵み、一家の繁昌を招きて見よ、天晴れ人の手本とは褒めらる可き筈なるに、必ずや反對に、彼れは怪痴、彼れは變屈、彼れは狡猾、彼れは他人の繁昌を奪ふ如き不人情など、樣々の惡名を附せられて憎まる可し。

斯の如き社會に於て、眞に躊躇せず善事を爲し得んには、一方ならぬ勇氣を要す、若し特別に勇氣を持て生れざる通常の人ならんには、善と知り義と心附ながら、其上に又其善其義を行はんと欲しながら、行ひ得ずに終る外なからん。那翁曰く『深夜の勇氣（ミッドナイトカレーヂ）は最も稀れなる者なり』と、斯の如き四面皆暗黑の社會に、獨り正を踏みて進まんとするは、豈に其の最も稀れなる勇氣を要するには非ざる乎。

吾等は數年前、屢ば雨のソボ降る夜に、人通り絶えたる後、芝公園の林の中なる切通を獨歩して歸宅せし事ありき。百萬の人家ある帝都の中央に於て、然かも公園に於て、狼にも追剝にも出逢ふ可き恐れ有るに非ず、而かも唯だ氣味惡くしてステッキの根本を握り詰ることを禁じ得ざりき。既にして一角を曲り遙か彼方に交番所の燈光の見ゆるを認むるや、眞に蘇生の想あり。今まで恐れ戰きたる我が臆病を笑ふことを禁じ得ざりき。更に若し一人の道連をでも得ると有らんか、其人必ずしも我が保護者にも知人にも非ざるに、唯だ道連ありと云へる自覺の爲めに、少しも恐ろしきを覺えざりき。

暗夜と云ひ孤獨と云へるとが、人を臆病ならしむるは斯の如き者あり。人の社會に立ちて善行を爲さんとする、亦是に異ならず。思ふに今の世、善と云ひ義と云ふ事に志ざせる人、決して少きに非ず、唯だ互に道連と爲らずして個々に獨行せるが爲めに、其善を爲し其義を行ふに躊躇するに非ざるか、前路に光明を認めざるが爲めに、唯だ恐れを感じ、空しく此の社會を善も行はれず、義も通らざる情無

き境遇には捨置くには非ざる乎。

吾等が朝報社同人と共に起したる理想團は、單に此の黑闇々たる社會に一點の光明たらんとの意に出づるのみ。悉く善人を保護すると能はざるも、善を爲し義を爲さんとする人をして、必ずしも單獨ならず、玆に道連ありとの事を自覺せしめんと欲するのみ。微力薄資、大なる事業を爲し得ずとするも、社會到る處に存する單獨の善行者をして、善を爲すに躊躇せざらしむるを得ば、社會の人心を一轉せしむる起點と爲ること無しとせんや。

幸ひにして吾等の此擧を賛成せらるゝ人、日に多し、若し能く此の團結を各地に及ぼし、地方到る處に支部の如き者を設けて、互に相呼應するが如きに至るを得ば、宛も今の芝公園に、所々に瓦斯燈の輝いて數年前の如何に、獨行の恐ろしかりしやを怪しむが如き狀に立到らんか、心に善を知り義を知りて、唯だ行ふに難しとする人、猶ほ此上にも來り加はりて、共々に此の暗黑なる社會に一點の光明たるを期せよ。（明治三四・七・九）

愛と戀との別を知れ

今の青年男女を魔醉せしめつゝある者は一種の戀愛論なり。月々に日々に出版せらるゝ幾多の雜誌は、何等かの形に於て戀愛を說かざる莫く、小說と名の附く小說は、殆んど一として戀愛を鼓吹せざるは莫し。而して是等の雜誌小說は社會の上下に横行濶步し、總ての家庭に入り、殊に最も多く青年學生、妙齢女學生の机上に置かる。

蓋し戀愛は殆んど人間第一の性情なり。男を慕はざる女の有る筈なく、又女に戀せざる男の有る筈無し。然れども既に人間第一の性情たるが爲めに、敎へずして知り學ばずして悟る。殊更に勞して之を鼓吹するの必要なきなり。殊に我國の風俗は、古より口に戀愛の事を云ふを恥辱とし、人に說く可からず、勸む可からざる者と爲したり。是れ誠に美風なり、和歌には戀歌ありたりと雖も、斯かる和歌を弄びたるは、單に文弱に沈淪したる公卿の如き仲間にして、社會の一隅に止まりしのみ。而も其の戀歌なる者は意を隱微に寓し、局外者をして一讀に戀歌なりや否やを知り難からしむる者多かりき。又多少の文字あるもの、戯曲或は艸草紙の類に戀歌を唱はざりしに非ざるも、斯る輩は戯作者として賤められ、之を劇塲に演ずる者は河原乞食として人間に伍する能はざる者と視做されたり。劇曲又は

芝居が如何に盛んなりしにもせよ、社會の公けの風儀が、之を美とせずして却つて醜とし、苟くも良家の子女をして接近せしむ可からざる者と爲したるは嚴重なる良風俗と云ふ可し。

近年、世上一切の事の進歩と共に人の感情も文弱の方に進み、又取分けて西洋異俗の風傳來し、總て右の如き者を『藝術美』の名に於て保護し又は奬勵し、少くとも公然之に接し之を樂みて差支へ無き者とせらるゝに至れり。更に甚だしきは西洋に行はるゝと稱する自由結婚を良風として、唱道する者あり。之と連續して戀愛自由の說、戀愛神聖の說まで現はるゝに至れり。斯くの如き論を以て、思慮の未だ確乎ならずして血性の情熱のみ熾んなる青春妙齡の男女に見聞せしむ。其の甚しく彼等を魔醉せしめ、彼等の心情を毒害し、彼等の品行を墮落せしめ、彼等の善良なる意志を萎靡せしむるは怪むに足らざるなり。

戀愛は果して美又は良なるか。曰く否。戀愛は美に非ず醜なり、良に非ず惡なり。唯だ西洋の輕文學者、之を知らざるのみ。

想ふに醜且惡なる可き戀愛をば、美且良なるが如く思惟するに到りしは『愛』の一語に誤られたる者なる可し『愛』は基督教が主として唱道する所、又世界一切の道德が、之を私慾又は利己心に對比して道德の根本と爲す所なり。而も此愛は戀に非ず、男女の劣情に非ず、無私の愛なり。

若し嚴重に云へば、人間の心情には善も無く惡も無し、唯だ理性に從つて之を發すれば善と爲り、理性に反して之を發すれば惡と爲る。愛も然り戀も然り、理性か愛す可からずと判斷する事物に對し愛を發するは、愛と雖も惡事なり。之を理性に考へて、此者に對して戀す可からず、此の場合には戀す可からずと判斷せらるゝ場合に戀するは惡なり。大體の善惡論は此外に在ること能はず。而も戀と愛とは本來の性質に於て全く相反する者なり。吾人は世の迷へる戀愛論者の誤解を根本より杜絕せんが爲めに明白なる斷案を下す。曰く、

若し愛を美なりとせば、其の同一の道理を以て、戀を醜なりとせざる可からず、愛を善なりと云ふことは、直ちに戀を惡なりと云ふと同意義に歸す。

愛を以て戀を辯護せんとするは非なり。其の關係は稼ぐことを善とするが爲めに、盜むことを善とするにも似たり。

抑も愛と云へる心の發動に善惡無く、唯た理性に從ふと否とに、分岐するは前述の如しと雖も、愛は母が赤子を愛する心（アッフェクション）の如く、又は人と人相愛する心（シンパシー）の如く、單に自個の或者を割きて他の爲めに捧げんとするの働きにして、自ら犧牲の精神に叶へり。道德は之を美とす。然るに戀と云ふ心は、大なる報酬を得んと欲する心なり。一種の慾心なり、貪慾なり、我れ彼

れを愛するに(即ち戀するに)、彼れ我れに對し同じ分量の愛(即ち戀)を返さざれば、我が心は不滿足を感ず。其極や憤怒ともなり、嫉妬とも成る。嫉妬が動もすれば殺意を含む迄に立至ることは何人も知る所なり。斯くの如き貪慾を含めるエキスクルーシヴ的の我儘心に何の美か有るや。

慈母が赤子を愛するは、單に赤子の幸ひを願ふなり、我が幸ひを願ふに非らず、赤子成長して人と爲り、他の人と結婚して幸福を得る、慈母は之を喜ぶ。戀人若し我が戀人が他の人と結婚して幸福なるを見ば、怒り心頭に燃え立つ可し。故に曰く戀人は報酬を欲す、戀は慾心なりと。凡そ戀の心の如く大なる報酬を欲する者は非ず、相手の身體全部を手に入れんと欲するなり、操を受取らんとするなり。生涯を我物とせざれば滿足せざるなり。毫も競爭者を寛容せざるなり。愛の美なるを、報酬に拘らざる點にありとする以上は、斯くの如く最大なる報酬を欲し、他の生命全部を得ざれば飽かざるの貪慾心を醜の甚だしき者とす可きは必然の結果なり。愛と戀とを混同するほど、文字及び思想の甚だしき濫用は殆んど他に類あるを見ず。

然らば人は戀す可からざるか。曰く戀も愛も、理性に從ふと否とにて善惡ありとは玆の謂なり。今の人は野獸に非ず、規則立ちたる社會に生れ、規則立ちたる社會に生棲す、即ち理性を以て社會の命令を判斷し、社會に立てる我が地位(即ち社會と我との關係)を判斷し、理性之を可とせば然る後に戀す可

し。社會は夙に戀と云ふ心の我儘なるを見、之を自由に放任するの巨害あるに懲りたり、故に其害を防がんが爲めに、人の戀の心を制限する必要を認め、特に婚姻の法、又は習慣の法を設け置けり。此法に遵ひて先づ夫婦と爲り、然る上に夫は婦を戀ひ、婦は夫を戀ふこと、是れ理性の許す所、即ち戀の美なり、良なる戀なり。此の以外の戀は總て罪、總て醜、總て罪惡なり。

今の我國の論者、之を知らず、醜を美と爲し惡を善と爲し、戀愛神聖、戀愛自由などと根本より誤りたる事を主唱す。吾人は人倫の爲めに、社會の爲めに、道理の爲めに、斷々乎として之を排斥す、戀愛を說く者少しく省みる所あれ。(明治三八・六・一五)

兒島高德活きたり

一犬虛を吠えて萬犬實を傳ふと云ふこと有り、兒島高德を『無』とする說の如き全く是れなり。此說は久米博士が唱へ出したるを、重野博士が世に傳へたるにて、一般の世人は單に二氏の說を信じたるに止まる。二氏の說に根據ありや否やを詮議しての上に非ざるなり。

二氏の說は根據の極めて我儘なる者なり。久米氏重野氏の如く史的考證に身を委ぬる人の態度より云へば、無根據と云ふを相當とす。

是れのみに非ず、重野氏は古寫本太平記（所謂神田本）を發見したるとき、既に其說を變じたり。其事は史學雜誌第十卷の一號に明かなり。氏が自ら記したる論の中に、高德の『有』を意味する言語は多々あるも『無』を意味する言語は絕無なり。

更に久米氏の高德抹殺論は『太平記は史學に益なし』と云ふ文章の中に書き込まれたり。之を觀るに、先づ一個の謎を揭げて高德の事に應用し、種々の言葉を費したるも、其の根據は單に太平記卷の八に『和田と河野とは一族にて』とある十一個の文字なり。此の一句にて和田（即ち兒島）をば越智姓なりと斷じ、巧みに前の謎を利用して高德を『無』と斷じたり。然るに世人は根據の斯く我儘なるを見ずして、單に斷案のみを言ひ傳ふるなり。

而かも久米氏の『太平記は史學に益なし』と云へる斷言が、如何ほどまで信ず可きやも大なる疑問なり。重野博士は天覽に供したる著書『日本武士道』のうち南北朝の一章廿四ページの間に太平記を八回（合せて百餘行）引用し。帝國大學の大日本史料は、元弘三年より延元元年まで、三年の記事に太平記を九十三回引用せり。此の二書世に出でても久米氏の『太平記は史學に益なし』の論は依然たり。

之に對して高德を『有』とする人には、田中博士あり、星野博士あり、中村學士あり、而して久米氏も田中博士の說の爲めに自家の論據が動きたるを明言す。

高德抹殺論は全く消滅したる者なり。高德の如く、殘存せる記錄の絕無とも云ふ可き南朝に屬したる人が、其の詳細を知られざるは當然の事なり。南朝に於ては、天子すらも四人在せしか三人在せしか判然せずして、今猶ほ學者の論が決着せざるなり。高德が太平記、細々要記、赤松再興記等に名を記されたるは、容易の事に非ず。殆んど特筆大書して傳へられたる程の價値あり。

是にて問題は決したるなり、更に生ずる問題は高德に價値ありやの一疑問なり、櫻樹を削りて『天莫……時非……』の詩を題したる如く、高德は極めてローマンチック（假りに華想と譯せん）の人たること明かなり、此の所に高德の大なる價値を認む可し。史を按ずるに、北朝に屬したる人は多く利益本位にして、南朝に屬したるは多く華想の人なり。忠義の心の如きも、利益の慾に養はれずして華想に養はる。此の華想が將來に影響して大なる功業の原動と爲りたるは如何ほどなるを知る可からず。明治維新の鴻業も其一なり。維新の志士が如何に華想的なりしかを見よ、彼等の慷慨悲歌の態度は全く華想的態度なり。彼等が崇拜したる中の一人は高德なり。而して高德の櫻樹題句の一事は、殊に彼等に美を感せしめ、彼等を慰藉し、彼等を奮起せしむること大なりき。維新事業の大なる一段落と稱す可き藩籍奉還の如きも、利益の慾に出でたるよりも華想に出でたることを多しとす。彼の頃の領地なる者は先祖が血を流して之を得、而して之を有するを誇りとし、子々孫々に傳へて殆んど生命と同じほど

重んじたる者なるに、各藩が先を爭ふて奉還したるは、大なる華想の發現に非ずや。時勢が之を然らしめたりと云ふとも、其の時勢が華想より作られたるなり。降りて今日に及びては利益專一の世にして、利益的に勝利を得る人を優者と爲すとは雖も、利益競爭の激甚なるが爲めに。如何に多くの慘事が作り出ださるゝかを思へば、人心に一分の華想ありて、慰安の力と爲り、其の焦熱を緩和すること も亦必要なる可し。殊に我が國民の忠義心を始め其他一切の道德心は、利益慾より出づること少くして、最も多く華想に屬する者なれば、高德の價値は減ずること無し。美術も文藝も華想無ければ興る能はず、進む能はず。

更に星野博士の說に從ひ高德を太平記の著者と爲さは、其功又別樣に偉大なり。吾人の考へ得る如何なる點より觀察するも、高德が太平記の著者たることは動かし難きに似たり。太平記が當時より今に至るまで、如何に多く愛讀せられたるかは、常人の意料以上なり。太平記は既往五百年の間、武士の經典とも云ふ可き勢力を有したり。戰場にも家庭にも往來の大道に於てゝ讀まれたり。我國に於て書籍として太平記ほど功果の廣く且つ大なる書は有ること無し。多分太平記は高德が、南朝の事蹟と志しとの湮滅せんことを恐れ、一は當世の人心に訴へ、一は後人に訴へんが爲め著作したる者なる可し。果して然らば高德の功は文武を兼ね、世の變遷に拘はらず尊敬すべし。（明治四三・七・一七）

『一年有半』を讀む

『一年有半』が、兆民中江篤介氏の著なると、著者が自ら餘命幾ばくも無きことを知りて『生前の遺稿』として作りたると、又其書の數日にして數萬部を賣盡したるとは、余の言を待たずして人の多く知る所なり。然れども此書の與ふる教訓は知らざる人多し、余は此書(第四版)の初めに附錄せらるゝ諸新聞記者の批評を見て爾か思ふなり。

然れども余は批評を批評する能はず、直ちに余自らの感じたる所を述べん。

此の書に對して何人も直ちに心を動かすは、著者が餘命一年半なるを知りて筆を執りたるに在るものゝ如し。多くは此の境遇を以て憐む可しと爲せり。獨り余は少しも憐む可きを見る能はず、思へ、人と名の附く人、誰か著者と同一の境遇に立たざらんや。唯だ其の境遇を知ると知らざると、覺ると覺らざるの別あるのみ。何人と雖も不定にして、而も確定せる『死』の前宵に在らざるは無し。著者が此理を說くや一言にて盡せり。彼れ曰く『兒生る、其の生るゝ瞬間より卽ち徐ろに死しつゝ有る也……何の不可か之れ有らん』と、著者は餘命の一年半なるを知ると雖も、之を悲しと爲さず、却つて『壽命の豐年』と爲せり、殆んど生れたる兒と同數の壽命を保つ者と悟れり。著者自ら悲まざるに、讀む

者は何が爲めに憐れがるや。

著者が生死の觀は、或る意味に於て眞理なり。此書を讀む者は、生死の理を著者が觀ずる如くに觀ずることそ好けれ。余曾て書齋の壁に書して曰く『人は時々刻々に死しつゝ有り、昨我は昨既に死し、今我は今將に死せんとす、汝、死する前に何事をか爲せ』と、又此語を朝報社晩餐會の席上に語る、同人皆然りと爲せり。吾等同人は實に一年半をだも期せず、時々に刻々に寸前に死を期して死前に我が力の限(アットモスト)を盡さんともがける者なり。

此心、豈に著者中江先生と同じからざらんや。唯だ境遇のみは、現に無病なると必然に之が爲めに死す可き如き大病に罹れるとの差ありと雖も、思ふに著者の心は、讀者の思ふ大病人の死を期するが如き悲しき覺悟に非ずして、吾等無病者が死を期せる如き安心なる覺悟なる可し。

此書を讀みて著者の大安心を看取し得ざる人は、論語を讀みて論語を知らざる人なり。著者が此書を著はしたる執意の幾分は、眞理の外に何事をも信ぜざる埀死の人に、猶ほ能く快活なる大安心の有ることを示さんとするに在らざらんや。

快活なれ、快活なれ、又安心なれ、安心なれ。埀死の自覺と快活なる安心との調和して併行するは、人の世に處し、天分を盡す秘訣の一なる可し。聞く、著者は更に絶筆として『無神無靈魂』の論を作

れりと、其意愈よ知る可きに非ずや。

* * * * *

兆民中江篤介氏は余が同郷(但し異郡)の先輩なるも、余は不幸にして親しく先生を知ること甚だ淺し。唯だ先生が一頭奇人として、將た奇行を以て喧しく傳へられしを知るのみ。先生果して奇人にして奇行なる耶、余は此書を讀みて之を合點し得たり。先生は其の思想より云へば、純然たる理想の人、理想を夢み理想に走るより外に多く顧みる所無し、其の性質より云へば、一代の才子、殆んど才ありて己れすら無き者の如し、奇ならざるを欲するも得んや。

『一年有半』を讀みて先生の才を稱する者は、切りに其の文才の精と眼識の非凡なるを擧ぐ、此の二者は余が云ふまでも無し。然れども余が先生を才子と云ふ者は、此書に現はれたる文章眼識には非ず、此書に隱約せる先生の生涯なり。先づ余をして余の才子論、愚人論より説かしめよ。

余曾て曰く、『愚人が生れながらにして知れる所の者を、才子は經驗して始めて知るを得』と。何故に然るや、他無し。才子とは通曉に早き人なり、何事を見るも直ちに其の一部又は全部の消息に通じ、直ちに興味を感ず。故に才子は、自然に多趣味なり。多趣味、故に彼を經驗し是を經驗し、經驗より經驗に移りて飽くことを知らず。而して經驗とは其の費用なり、何者をか費さずして經驗し得るは有ら

ず。或者は之が爲めに時間即ち壽命を費し、或者は金錢器具を費し、或者は名譽を費し、或者は健康を、或者は義理人情を、又或者は禮儀作法をも費す。其の費し盡したる曉は、經驗の費用たり、費用の損失たるを思ひ知るなり。是に於て多趣味變じて一趣味と爲り、才子却つて愚人の跡を追ふに至る。唯だ愚人たる者、初めより事を見て其の東西を解せず、其の趣味を知らず、一を守りて移る所なし。才子が移り盡して一に歸する比には、却つて才子よりも進みたる所多し。故に曰く、愚人は初めより之を知ると。然らば即ち才子は愚人よりも劣れるか、曰く然り、經驗を經ざる才子は愚人に劣れり。唯だ經驗より經驗に移り、所謂る移り盡して一に歸するに至りて、才子の才子たる所始めて現はる、愚人の及ぶ可きに非ず。

愚人は百人にして一人ある可し、珍重するには足るなり。才子の終に一趣味に歸したるは千人にして一人なる可し、更に珍重せざる可からず。才子と愚人とを除きたる九百九十人は、露骨なる俗物のみ。通曉せず趣味を解せざることは愚人に等しくして、而かも愚人の操守は無く、移り移ることは才子に似て、而かも才子の究竟の一悟無し。蓋棺事定の後より之を見れば、一も採る可き所なきこと、他の白痴と一般のみ。

此論の悉く『一年有半』の著者兆民中江先生に加ふ可からずとするも、先生は豈に才人にして多く

解し多く移りたる者に非ずや。『一年有半』を讀む者、誰か著者の趣味の極めて廣きとを看取せざらん、忽にして演藝、忽にして音曲、忽ち政治、忽ち文學、曰く哲學、曰く工業、牧畜、農産、美術、風俗、歌舞、謠曲、禮法、衣服、殆んど社會の廣きが如くに廣し、而して其の經歴も、漢學者、洋學者、官吏、新聞記者、著者、議員、紙商、鐵道屋、殆んど指を屈するに餘れり。而して終りは眞面目なる『一年有半』の著書となる、是れ移り盡して一に歸したる者に非ざるか。

徹頭徹尾『一年有半』は眞面目の書なり、又盛に眞面目を說けり、國民の眞面目、政治家の眞面目、議員の、外交家の、學者の、政黨の、總て有らゆる事物の眞面目を唱道せるなり。而して特に先生の本領、此の眞面目に在りと爲して曰く『余の本領は別に在る有り、他なし、此の一年有半即ち是れ也、是れ即ち余の眞我也』と。

嚮く眞面目の本領眞我に歸せし人、何故に奇人たりしや、奇行者たりしや。才子の才、之を然らしめたるなり。先生の才識は其文に依りて多くの批評者の認識せる如く八面玲瓏なり。直覺の如くに事物の眞相に透達す、故に恐るゝ所なく、憂慮し危懼する所なく、顧みる所なく、能く自ら恣にしたりしなり。人を見ること『藁人形』の如かりき、更に憚かるの氣無かりしなり、世人が小心翼々として孤疑し拘泥する中に在りて、能く結局を見拔き得て、安心して血氣、客氣、覇氣の適く所に任したるな

り。其の拘泥の中に獨り安心を得たる才識は、今日垂死の中に大安心を得『一年有半』を著作する所の者に非ずや。『一年有半の宣告を受けて』而して『循中又自ら樂地あり』と云ひ、『快を目前に取るの術』を說き、而かも無神無靈魂を叫びて大往生（寧ろ平氣の往生）を遂げんとする一種の通曉力に非ずや。之を大悟徹底と云ひ得るや否やは知らざるも、才子の移り移りて一悟に歸したる者とは云ふことを得ん。所謂る千人の中に一人も得難き者なり。

才子の本領は終局の一悟に歸したる時より光を放つ可し。故に先生の死（まだ死せざるも）を、大に惜むは可、唯だ其の自ら悲まざる人を、大に憐む可しとするは不可。故に余は之を全く論語を讀みて論語を知らざる者の類とは爲すなり。

先生は實に才子、直ちに事物の結局を看、其の恐る可き無きを知りて安心して狂態を盡せしなり。安心は先生の生涯を貫ける動脈なり、死に臨みても無神無靈魂を信じて能く安心せり。一部の『一年有半』は先生が『死』と相接して談笑自若の態を目に見るが如き想あらしむ、斯の如くにして死に臨むは、憐む可きに非ず、羨む可きなり。

且つ先生の才子たるは、翩々輕薄の才子に非ず、深く理想と相抱合せる才子たるなり、其の抱合の深きや殆んど心醉に類し、理想却つて空想たるを疑はしむるに至れり、先生が崇敬せるルーソーの教育

篇、民約篇は、理想の空想たるに瀕するまで極端なるには非ざる耶。嘗て先生の三醉人經綸問答を讀む、其旨に曰く、『兵戈を廢して至大至高の道德主義を以て萬國に對す可し、隣國我れの兵戈無きに乘じ、暴を以て我を亡ぼすに至るとも、我は君子の道を守りて亡ぶなり、亡ぶ何ぞ悔ゆるに足らん』と、眞に先生が『一年有半』に引用せる『朝に道を聞く、夕に死するも可なり』の概あり、是れも理想に過ぎて空想に入れるものに非ざる耶。『一年有半』の徹頭徹尾、先生自らは詬罵と云ふと雖も、實は理想なり。些の假借無く情實無し。斯の如く理想に醉へる人、其の年少氣鋭の時に當り、世と共に拘々焉たる能はず、規矩繩墨を脱して、人に狂態と視らるゝに至りしも怪むに足らず、又其の狂態は臨終の眞面目なる一悟を妨ぐるに足らざるなり。啻に妨げざるのみに非ず、壯年の狂態と臨終の眞面目と實に一なり、理想の爲めに彼の狂の態あり。理想の爲めに此の眞の面目あるなり。變じたるに非ず、歸したるなり。當に必然に至る可き所に到りたるなり。

『一年有半』は明かに然るを證す、其の言語の縱橫無盡なる、談論機鋒の當る可からざる、當年の中江篤介の言語談論と毫も異なる所無くして、唯だ語句の間、自ら恭謙と重厚の氣味あるは、所謂る狂態の眞面目に歸したる所以、壯中江と老中江との必至必然の經過のみ。

狂態と云ふと雖も、眞面目と云ふと雖も、其の終始に一貫して、儼乎侵す可からざる者一あるは余

の認めざるを得ざる所なり。何ぞや、先生の談論能く操觚者の地歩を占め得て、操觚者の態度を失はざる卽ち是れなり。凡そ操觚者は是非と利害を明かにし、毀譽と褒貶を判するの任なり。自ら世間一切の職業よりも高しとして、殆んど神聖を以て居らざる可からず、身は賤、家は貧、位は低しと雖も、任は至大至重なり。一毫阿る所、曲る所あれば則ち汚る、今の操觚者の談論する所を見よ、憎みても憎しと斷言するを爲さず、右を憚り左を恐れ四方に融通の附く如くに文を綴りて、勉めて其意を調和にし其言を微溫にす。古人の言ひたる文章の世教に關することを望むも得べからず、誠に操觚者の地歩を失し、其の大任を輕んずる者と云ふ可し。獨り『一年有半』の著者、言はんと欲する所は之を極言し、復た我が操觚の權より以上に高き者あるを認めず一切の萬象を我が筆の前に跪拜せしめんとする者の如し。此點に於ては吾人操觚者の氣概の理想と相會へる者なり。中江先生が理想の人たるは最も此所に適度に現はれたる者なるか。

見よ著者が、身に對しては大安心を得たるに拘はらず、世に對しては不平の鎭らざる者ありて、『死に抵るまで攻擊の筆を聘せん』と云ひつゝも、纔に以て慰藉する所の者は、我が萬朝報の理想團に在るに非ずや、其言に曰く、

萬朝報の理想團の唱へは正に此の時機を突破する有りて爾る耶。

理想團の本趣とする所は、余未だ其詳を得ずと雖も、然かも人々自ら修明し相共に名節を砥礪し、會合約束の微と雖も寸時も違ふこと無く、一言すれば君子となることを求めて怠らざらんとするに在る可し。是れ善志也。夫れ政黨既に彼れの如くなる時は、所謂宣言と云ひ政綱と云ひ、皆唯空言を臚列するに過ずして、人民たる者己れ自ら恃むに非ざれば、復た政治家に恃む所なし、理想團の必要たる所以なる耶。既に理想團と云ふ、縱令ひ其勢今日に行ふ可からざる者、即ち純然たる理義の正の如きも、之を口にし之を筆にし、他年他日必ず之れを實行に見ることを期するなる可し、即ち自由、平等、博愛、其他萬國と隔離する所の境界を撤去し、干戈を弭め、貨幣を一にし、萬國共通の術門を設け、土地所有權及び財産世襲權を廢する等の如きも、其の請求中に在る可し、是れ大志也、其れ或は縲紲の苦と雖も辭せざるを期すなる可し。或は理義を解せざる狂漢の匕首をも避けざる可し。彼の某黨員某が區々たる一椅子を喪ふて、氣沮み心眩し、遽々然志を飜へし、十數年の交友を棄去りて政黨に欵歸したるが如く、世俗の虚榮を慕ふ、無義無慙の徒の集合に非ざる可し、果して然らば團員諸君、謂ふ加餐せよ、余も亦石碑の後より他日手を昂げて之を祝する有らん。

團員諸君、諸君の志を伸べんと要せば、政治を措いて之を哲學に求めよ。蓋し哲學を以て政治を打破する是れなり、道德を以て法律を壓倒する是れなり、良心の褒貶を以て、世俗の爵位勳章を排拭す

る是れなり、紫を曳き朱を紆ふて層樓の上に翺翔する、縉紳と號する、貴顯と號する、生きたる薬人形等は、宜しく之を千里の外に距く可し、唯獨り無爵無位の眞人之に任ずるに足るのみ、國民、請ふ加餐せよ。

著者未だ理想國の詳を知らざるを以てして、而かも其の忖度する所、斯の如く夫れ肺腑を照すが如し、理想の人に非ざるよりは何ぞ爾るを得ん、理想の人に非ざるよりは、又何ぞ唯一の慰藉を理想國に求め、垂死にして猶且つ『石碑の後より手を昂げて之を祝せん』と云ふに至らん。我等は知己の言として、先生の言を服膺せざる可からず。

我等の知己、今は一年有半の人として定まれり、其の大安心は羨む可きも、其の才子多く移りて終に一悟に歸し、是より大に光を放つ可きに際して消ゆるは誠に惜む可しと爲す。其の羨む可きや、我等は時々刻々に死しつゝあるの箴言を守れり、此心以て著者の一年有半に髣髴するを得んか。而して其の惜む可きや、我等乃ち先生の意を體し、理想國に據りて光を放たざる可からず。要するに我等が『一年有半』を讀みて得たる教訓は凡そ斯の如し、是を以て我等は之を近時多く見ざるの書とは謂ふなり。（明治三四・一〇・一一）

現實に觸れよ

現實に觸れよと云ふ言葉は、今より數年前日本に自然主義の文藝が起つた頃から頻りに文士諸君の唱ふる言葉である。或は人の書いたものを評して之は能く書いてあるけれども、現實に觸れて居ない、もう少し現實に觸れた方が宜いといふ。其現實と云ふのは何であるか能くは知らない、また現實に觸れると云ふことも何であるか能く知らない、夫れは人に依て種々樣々の意味があるのであるが、私は私だけの意味を持つて居る。兎も角も私から云ふと社會の現實なる所へ自分と脈絡をするやうな意味ではないかと思ふ。此點から申すと今の世界の文藝と云ふものは、或點に於ては大分現實に觸れないやうな傾がある。近頃能く近代主義といふ言葉が用ひられるが、此近代主義と云ふことを考へて見ると、最も大なる特色はサイエンスが非常に盛んになつて來て、其科學が今迄の信仰とか、道德とか哲學と云ふやうなものにまで入込んで來たことである。科學の爲めに信仰が傷けられるとはないが、今迄の信仰の土臺が動搖する、人心歸する所を知らない有樣になる。而して近代人の心は寂寞である。何となれば信仰がないからである。兎にも角にも科學萬能主義に征服せられて、人間が科學の奴隷になつた、と云ふ樣なことがあらうと思ふ。科學は非常なる壓制者である、容易に人間の自由を許さない。

例へば此木は重さが幾許、形は何うと云へば人間は夫れに閉口しなければならぬ。何の樣な理屈を持つて行つても科學と爭ふことは出來ないと云ふやうになつて居る。科學が宗教の中に入つて來れば、宗教も夫れが爲めに變らなければならぬ。道德の中に入つたならば、道德も變らなければならぬ。斯う云ふ譯であるから人心の本が動搖することは當然である、動搖する上に矢張寂しい心細い世の中に於て立派に其日を暮して行つても、何だか繼子扱であるやうな氣がする、之が近代主義の特色である。併し此特色は餘り褒めた特色ではない。

所が此外に近代主義に油を注ぐものがある。夫れは生存競爭より來る所の生活難である。生活が困難な爲めに人間が何うなるかと云ふと、是を日本の現在に張つて申すと、生活が苦しい爲めに多くの人が生活に成功して居る人に媚びる。現在の立場より人を崇拜する傾向を生じて居る。雜誌などを見ても分るが、予は此の如くして成功せり、予は此の如くして百萬圓の金を拵へたとか云ふやうな記事が、非常な力を持つて多くの青年に愛讀されて居る。教會の講壇から立派な牧師が說教するよりも豪いのである。

例へば大倉喜八郎が天秤棒一本で二百萬三百萬の身代を拵へたと云ふ記事が出ると、多くの學生が引張凧して讀んで、乃公も斯う云ふやうになりたい、實に豪いといふ、卽ち成功者に媚びて、夫れを

崇拜するやうになる、即ち生活難と云ふものは、青年の心を畏縮せしむるのである。さうしないと生存が出來ない、職業を求むるとしても、何うしても職業を求むる爲めには成功して居る人に叩頭しなければならぬ。叩頭しなければ生活が出來ないと云ふ樣な有樣であるから、世の中の人の心が段々畏縮して、科學の爲めに餘程寂しく心細くなつて居た所の人心が、生活難の爲めに更に畏縮して仕舞ふとになる。之が確に近代の有樣であると思ふ。之を救はなければ人間を精神的に救ふとは出來ない。今申した文學に携はる者が、現實に觸れよと云ふのも、實は彼等の心の中に斯樣な寂しい心があり、斯樣な心細い或は畏縮した心があつて斯る叫聲が出て來たのではないか。之を救濟する途は、矢張文學者の言ふ通り、現實に觸れると云ふ考へが大に必要である。唯だ私の現實と云ふ所のものは他の人の現實と云ふ所のものと同じであるや否やは知らぬが、私は先づ第一に科學の壓迫に對して、人間の領分は科學ではない、精神的の生活であることを高調したい。

精神的の範圍に於ては、人間が主である。科學的の範圍又は物質的の範圍若くは自然主義の範圍とかいふものとは違ふ。例へば科學的の範圍に於て富士山と新高山と何れが高いかと云ふ問題になると、富士山は何萬何千尺、新高山は何萬何千尺と一目瞭然、直ちに其高低が決せられる。是は誰も抵抗することは出來ない。併ながら精神生活の範圍に於ては、小野小町とクレオパトラと何れが美人である

かといふに、或人は小野小町が美人である、或人はクレオパトラが美人であるといふであらう。是は科學的に言つた所が何にもならない。

或は尾崎紅葉山人の天才と福地櫻痴居士の天才と何れが大であるかといふが如き是は科學的の範圍でない人間の範圍であつて、此處に持つて來ては科學は何の權力もない。人間の精神狀態に付ては科學と云ふものは何の權威も無い、何の樣なものを比較してもさうである、大隈伯と伊藤公とは或人は大隈伯が豪いと云ひ、或人は伊藤公が豪いと云ふ、是は何うしても爭ふことは出來ない水掛論の樣だけれども水掛論ではない、伊藤公が豪いと云つて下らない、大隈伯が豪いと云つて下らない、水掛論のやうなものであるが、夫れは何であるかと云ふと其人銘々の人格が其處に現はれる。甲の人格は大隈伯に感服すべく出來て居る。乙の人格は伊藤公に感服すべく出來て居るので人間の精神生活と云ふものが、つまり自分の人格を世間へ融通して往くことになる。此點に於て人間が萬物の主である、科學的範圍に於けるが如く事實の奴隷ではない。精神世界に於ては人間は主人である、之を能く考へなければならぬ。所が今の世の中に於ては精神生活は忘れられて居るから人間は科學の奴隷である。精神問題は爲めにならない、生活難の助けにならない。斯う云ふやうに段々精神問題が畏縮して仕舞ふ、けれども精神問題が畏縮すればつまり人間の人間たる所以のものはない。まるで人間が獸と同じやう

なものになる。獸は奴隷である。人間は精神界の主人である。此區別を忘れる爲めに、世の中が寂しかつたり、繼子扱ひにされるやうな心細いといふ感じも出て來るのである。

抑も科學なるものも、今一層精神問題の極く高い所に立つて考へて見ると、動もすれば人間を奴隷にして居る所の科學其のものですら、其實人間の奴隷であることを知るのである。何となれば吾々の科學を研究するは、決して人間を科學の奴隷にする爲めではない。科學を吾々の精神的生活の目的にしやうと云ふ爲めに研究をするのである。科學は何う云ふ具合に使用されるかと云ふと、吾々は科學に服從するけれども、其眞理に服從する事に依て自然を征服することが出來るのである。吾々は本來科學の奴隷になるべきものではない。科學は人の知識をまるで奴隷にするやうなものであるけれども、此科學たるや吾々が自然を征服する爲めにするのであるから、極く正しい立場から云へば、科學其ものは人間の奴隷である。總て科學なるものゝ存在が人間の精神生活の爲めであるとすると、此科學的の精神と云ふものは、畢竟人の爲めと云ふ土臺の上に立つて居る。科學と云ふ情も何も無い冷い事實に人間を愛すると云ふ心が籠つて居るのを見るのである。世の中に一として人を愛すると云ふ心から出ないものはない。

今の世は利己一片の我利我利亡者の世の中であるが、能く考へて見ると必ずしもさうではない。實

に人を愛するやさしい世の中である。何の樣なことをしても、其事柄が世の中を愛すると云ふ口實が無ければ今の世の中に容れられない。電車を拵へるにしても之に依て公衆の便を圖ると云ふ、或は瓦斯を造る、學校を拵へると云ても人の爲めといふ立場に立つ。單に自分のみの爲めにすると云ふ事は、直に道德に觸れて叱責を受け、或は法律に觸れて牢の中に入れられる。何でもさうである、人の爲めといふ趣意を持つて居ないものは社會に立つて居ることが出來ない。世の中が何のやうに狡猾になろうが、世の中に立つて行く以上は、愛の精神を以て居なければならぬ。この愛他の精神と云ふ所に大分現實に觸れる意味がある。つまり吾々の社會が一つの精神生活である以上は、現實に觸れると云ふことは、精神生活の意味を解することに依て出來ることに違ひない。今の生活難の問題等は之を能く考へて見ると、單に自分一人を樂にすると云ふだけならば、誠に問題は簡單である。簡單であるが併しながら夫れでは現實に觸れたものとは云へない。何となれば現實なるものは精神的に連なつて居るのである。其精神に觸れないで、自分一人で生活をやさしくして往くのでは現實に觸れない。さう云ふ考へで自分だけ安全にしたと考へて見ると、其人は矢張寂しい。自分獨りの爲めに金を溜め、自分獨りの爲めに家を建てると云ふ人は、夫れは實際精神上から云へば現實に觸れて居ない。さう云ふ人は病氣になつた所が別に誰も氣の毒とは思はない。死んで仕舞つた所が夫れが爲めに泣く人がない。是位寂し

いとはない。一國の中に住んで居て、心配して呉れる人もなく、死んだ所で惜しいと思つて泣いて呉れる人がないのは人間の寂寞の極である。之れを考へると現實に觸れる、所謂近代的な寂しさから遁れることには精神生活を整へて行く、他を愛すると云ふ意味がなければならぬのである。

そこで今の生活問題とした所が、自分一人の爲めに解釋すると云ふよりも、先づ生活難の起つて來る其の原因に就て探究するのが先決問題である。生活難が起つて來るのは畢竟人口が增加する、即ち食ふことが出來ない、夫れが一つ。更に我が日本などに於ては租稅の過多、これも一つ。或は又物價が高くなつて其割合に給金が高くならない、これも生活難の一つである。斯う云ふ問題を解釋しなければ生活難と云ふものは解ける筈がない。併し斯る問題を解釋するとは、直接に自分の生活を安くするかと云ふにさうも限らない。租稅を納めなければいかないとか、物價を廉くするには何うしなければならぬとか云ふやうなとを云つて奔走して居れば自分の生活が益々困難になる。社會の精神生活の上から云ふと、生活難を退けるには何うしてもさう云ふ原因を考へて見なければならぬ。之を單に經濟學として考へて見ると、經濟學も或點迄は、矢張科學的で人を奴隷にするやうな學問である。カーライルは經濟學を悲むべき心細い學であると云つて居るが、今では英吉利の經濟學の如きは需要供給に依つて何うとか、或は物價か何うであるとか、空論であつて現實でない。現實に觸れ方が足りない。夫

れが獨逸になると經濟なるものは空論でない。實際の事實と實際の歴史とに結び付いて實際的に説明されて居る。政治とてもこれを實地に適用解釋しなければ空論となる。生活難の問題も、矢張世の中に出て現實から割出して云ふ場合には、租税は是々である、此租税を何う減ずれば宜いと云ふやうな問題を實地的に解釋しないと解けないのである。

夫れで私が現實に觸れよと云ふのは（私の言ふのは廣い意味であるが）第一に人間と云ふものは、精神生活の主人であつて、社會は精神生活であるから（精神生活と云ふことを愛するに依つて結付いて居るものであるから）己れの考でなく他を愛するとに依て、其近代的の寂しい感じを免れなければならぬといふのである。故に生活難の如きは、政治の方面、經濟の方面、實際の現實の中の現實である社會の現實に對して説かなければ悉く説けるものでないと思ふ。此點から云ふと今の青年諸君は、或は青年のみではない世の中に處して居る諸君は此點に於て大分ぬかりがあるやうに思ふ。何故といふに生活難と云ふとも知つて居る、租税の高いことも知つて居る、或は財政の悪いことも略ぼ知つて居る。けれども是等に向つて何等かの方法を取つて之を解決すると云ふ考がない。其解決たるや所謂社會同胞の爲め、其精神生活の狀態を高くする爲めに之を解釋するとになれば此處にも何か面白味がある、活きたる興味がある。哲學の問題であるとか、宗教の問題であるとか云ふやうなものでも、本當

の興味は人間の精神生活に直接に觸れた所にある。政治問題經濟問題總て同じである。之を若し諸君が解釋する氣になれば、決して世の中は寂しくない。斯う云ふ事柄と云ふものは、つまり自分が非常に利害に直接に關係して來る。夫れから自分の愛する人或は自分の尊敬する友人の如き社會に繫がつて居る人の利害に關係する上からも、大なる感興を惹起するのである。誰の言葉であつたか『人と云ふものは社會の脈搏と共に自分の心臟が鼓動するのでなければいかない』といふ言があるが、つまり是である。人間が世の中に立つて本當に寂しくない、心細くないと云ふ狀態は何う云ふ狀態かと云ふと、世の中の變と合して行く、世の中に危險があれば自分の身に心配が及ぶ、世の中の嬉しいことも悲しいことも、夫れに總て自分の同情が伴ふ。斯ふ云ふやうになつて始めて人間が寂しくないのである。

所が今迄文藝家が現實に觸れる現實に觸れると云ふが、何處の現實に觸れるのか分らない。本當の現實に觸れるには人間の精神的生活を研究して、夫れから物質的の方面から之を救ふと云ふことでなければならぬ。精神的の方面が精神問題に依つて救はれる、つまり宗教上の信仰であるとか云ふやうなとは、精神問題を解く最も重大なものであるけれども、精神問題は是のみに依ては解けない。精神問題の一面は物質問題であつて、其物質問題たるや即ち吾々は之を物質と見ずして精神問題と見る。即ち吾々の精神生活に貢献する所の或手段である。斯う云ふやうな工合に見て、之を解釋することに

なると、世の中の精神生活一般の艱難が常に調子が合つて往く。從つて其處に大なる勢も出る、大なる同情も湧き來るのである。私の考は是れだけのことである。此頃は大分人からお前は政治家になれば宜い、政治運動をやれと言はれる。私も實は政治運動をやる積りである。何故遣るかと言ふに何うしても人間の精神問題が半分は宗教、或は哲學と云ふ精神的解釋から來るけれども、半分は政治或は經濟とか云ふやうな世の中の物質的方面から來る。別に私は野心を持つて議員になりたい、或は何とかの割前に與りたいとか、其樣な心ではない、精神問題を主として解釋しやうと考へても、能く味つて見ると、何うしても精神問題だけではいかない。物質問題を半分は加味して此方面から行かなければならぬ。斯う云ふやうな考になるから夫れで自分自ら社會の政治的方面或は經濟的方面に力の及ぶだけは盡す積りである。昔の人が濟民救世と云ふことを申すのであるが、つまり人間の學問の如きものでも、何の目的でも、濟民救世である。世を救ひ民を濟ふことがなければ科學にせよ何にせよ殆んど無益である。所謂現實に觸れると云ふ眞の意味は濟民救世に外ならぬことと思ふ。自分が筆を執り演壇に立つも、畢竟此意に外ならぬのである。（明治四五・二）

人格の說

私は今人格の說に就て聊か所見を述べやうと思ふのであるが、是を說くに當つて第一に起つて來る質問は、人格とは何ぞやと云ふことである、併し私は之に解答を與へることの頗る困難なるを感ぜざるを得ない。

敢て此人格のみとは言はない、凡そ一物に定義を與へることの困難であつて、其或物に定義を與へんと欲して之を解剖し、又解剖するに於ては終に其本體を失つてしまふことは諸君の往々實驗さるゝ事であると思ふ。

昔から車の本體があつて車そのものが無いと云ふ話がある、私は今此處まで車に乘つて來たが、さて如何なるものが車であるかと、其部分を見たならば、或は楫であるとか、或は蹴込であるとか、車の心棒であるとか、又は輪や矢羽根であるとか、斯く數へ立つると、車と云ふものは、全く皆無となつてしまふ、是れと同じく彼の靈魂論なるものに就て見るも、其靈魂てふものを發見するには大なる困難がある、吾人は心理學の中に此靈魂を發見することは出來ない、又我と云ふものも之れを人の心の中に求めんと欲しても、決して得られないのである、併し人の心の中には種々の望がある、例へば

空腹の時に食慾が起る如きは其一であるが、一寸考へると是れが我である如くに見える、併し善く考へて見ると、又此慾望を壓服する一の意志がある、此意志の力が所謂我なので、此我は心理學の上に確然と定まつては居らないのである。

私が玆に說かんとする人格も亦然りで、西洋の著書を繙いて見ると「多く此語に接するのであるが、之に定義を下すとなると非常に困難を感ずる、併し私は可成完全に之が說明を試みんと欲する。

兎に角人には人格なるものがある、これは人の性質で人々相互の間に現出するものである、昔時ナポレオンが帝王として佛國に臨んだ時に民權家の一刺客は彼を暗殺せんと企てた、で或時宮殿の薄暗き廊下の影に潜んで時の來るのを待つて居つた時、ナポレオンはやがて獨りで此廊下を考へつゝ通過した、ナポレオンは此時身に寸鐵を帶びずして手を組み眼を下にして歩んで居たから、殺されるには好機會を與へつゝあつたのである、そこで刺客は機失ふべからずと、一刀の鞘を拂つて彼に躍りかゝつたのであるが、ナポレオンは此時從容自若として刺客を顧み微笑んだのである、實に權威赫々旭日も啻ならざるナポレオン大帝に微笑まれた刺客の此時は甚麼であつたらう、彼は實に恐怖戰慄し持つ所の刀を投げ捨て命からがら逃去つたと云ふことがある、歷史家は此時の事を傳へて曰つて居る『一刺客はナポンオンの人格に打たれたのである』と、私は人格の何たるかは此一言でよく盡して居ると思

ふ、これは敢て西洋を待つて始めて然るのではない、我國に於ても安部宗任の其主の義家の輿中に眠つて居るのを見て、之を刺すことを敢てしなかつた如く、或は明治の初年島田一郎が大久保利通を紀尾井坂に要して之を刺さんとした時、大久保が馬車より下りんとする際『汝何者ぞ』と一喝した時、彼は非常の恐怖の念に打たれたるが如き、此間に明かに人格の力が現はれたのだと思ふ、此島田の大久保に對する人格の力は一刺客のナポレオンに對するより小さくなかつたので、終に勝を制したのであるが、若し玆に二人の人格の力が五分々々であつたならば、其所に格鬪が起つて終には氷入れとなるまでは止まないであらう。

是れを以てか知る、凡て世の中は人格の發展であると、彼の人の有する才智とか意志とか又は支那の所謂仁義禮智信は方法に依つて之を説明することが出來る、併し人格に至ると、一寸其説明の困難を覺える、併し玆に一つ斷つて置かなければならないのは、支那の所謂德で、これは私の考に依れば人格であるかも知れぬと思ふ、何に致せ人格なるものは人の身體に具備する一種の力なりとは私の信ずる所なのである、人或は以上私の説いたものを以てそれは品性であるとか性格であるとか言ふかも知れない、併しそは命名の差異であつて、其實質に於ては以上の如きものである、されば吾人は兎に角に人格なるものを認めざるを得ない。

然るに社會を見渡すと此人格を所有するものが、甚だ僅少であるのは吾人の大に浩嘆する所である、是れを日露談判の時に於て見るも吾人或は其失敗の原因を人格の弱小に歸せざるを得ない、當時の萬朝報にルーズベルトとウヰッテと小村氏と並んで撮つた寫眞が川の字を爲して居ると書いた、成程ウヰッテは軀幹長大六尺に及び、ルーズヱルトとても之に劣らない大身であるから、此兩人の間に日本人としても、小身の方の小村氏が立てば川の字を爲す事は尤もな事である、併し私は體格が小さいから人格も小さいとは敢て言はない、若し體格が大きければ人格も大きいと云ふならば力士の常陸山は大なる人格を持つて居る筈であるが、事實は之に反して小粒でも辛い山椒が世の中にはあるものである、されば此三人の差異が體格のそれに非ずして人格の差異であるならば、講和に對して著しき影響を與へたことだと思はれる、聞く所に依れば小村氏はマルテンス氏の講和會議に列席するとを拒んだとのことである、是なども私が前に述べた人格から解釋を容易に下すことが出來る、人も知る如くマルテンス氏は有名な公法學者で、其著書は夙に我國語に飜譯せられ、また我外務省でも氏の說に聽いて外交の裁斷を下して居る、されば今小村氏とマルテンス氏と對立したならば宛も弟子と師匠と戰ふことになるので、全然相撲にはならない、殊に小村氏がマルテンス氏自身が述べた書中の說を以て彼に對しても、彼がそは汝の譯文の誤謬から出たことで、吾が眞意は左にあらずと云つたならば凹まなけれ

ばならない。

併し今一つ考へて見れば、小村氏の後方にある人格の小なることか、講和の不首尾に與つて大に力があつたかも知れない、これは元老閣臣の謂なので、この小村氏を支へて居る人格の小なるを以てしては、此判斷に於て好結果を得ること頗る難しと言はざるを得ない。

以上を聞た諸君が人格を尊重するの念を充分了解せられたと思ふが、茲に一の疑問がある、それは人格なるものは生れ付のものであるか、又は社會に於て自ら生長發展して立派なものに爲し得らるゝものであるかと云ふことである、これ頗る緊要なる疑問であるから、私は之に就て以下卑見を述べやうと思ふ。

私をして言はしむれば人格は生れながら有するものだと言ふ、何人もナポレオンやワシントンたることは出來ない、また體格の偉大なるとに於ても常陸山となることは出來ない。換言すれば人格體格共に第一流たるは天稟の性が然らしむるのである、併し人格の謂が人と人との相對して感動を與へるものとして、何故に人が之に依つて動かさるゝやてふことを考へて見ると、茲に別種の意味が生じて來る、此意味とは他ではない、人格なるものは統一を以て生じて來ると云ふことである、諸君は曾つて團十郎が技藝の秀でゝ居たことを知らるゝであらう、併し彼が技をして秀でさしめた所以を仔細に

觀察すれば、彼が音聲と藝術とが其舞臺に於ける背景や囃方の立派なると相統一して始めて然る事を知らるゝであらう、茲に於てか人格には統一の必要なることを知るのである。

顧れば吾人の思慮や頗る雜駁である、其朝夕に於ける思ひの馳する所を分析して見たならば、人に向つて言ふに云へざる恥づべきことが多い、私は常に思つて居る、斯かる醜惡なる思考は昔時人が動物であつた時からして發達し來つて未だに之から脱しないものであると、で吾人は醜き顏を持つ人を人三化七と云ふが、吾人の心も亦然りであると思ふ、卽ち人は一の體の中に人格と獸格とを有して居る、故に吾人は勉めて後者を去らなければならない、若し然らざるに於ては此兩格が＋(プラス)と－(マイナス)となり相殺して零(ゼロ)となるのである。

例へば私一己に於て考へて見てもさうである、夜床に就て何か考へる時は富貴を得る心が切で、或は盜心も萠すのである、併し翌朝になれば少しも前夜の考へは起らない、又夜分は國家に大事業を建てんとも考へるが、翌朝になれば此考へは存して居つても、或は芝居とか寄席とかに行かんと思ふ考へが出て來つて、互に相引き合つて居ることになる、さればかゝる獸格は宜しく速かに去るべきである、茲に於てか私は人格なるものは概ね天然でないことを知るので其生長發展は專ら自己の責任に歸することゝ思ふ、私は人格を鑛物に例へて說明しやうと思ふ、其の金なり銀なりを個々に取つて見るならば、

決して他を以て之に代ふることは出來ない、併し鐵の如きものも、それが純粹のものであるならば、之を金や銀の混つて居る荒金に比して優に高價を有して居る、實に金や銀の如き高價の金屬と雖も之が一塊の荒金の中に百分の一位含まれて居る場合には、小なる鐵に劣るのである、是れは何故であるか、他でもない、純粹な立派な鐵であるからである、されば如何なる人にもあれ、其中に獸格を有して居らなければ、立派な人ではないか、假令體格は小さくても大偉人として生れたもの丶前に立つて少しも恥る所はないのである、否鐵の立派なことは是には止らない、若し其鐵に鍛練を加へて練鐵とするならば、其最も精練されたるものに於ては時計の發條となつて純金の五十倍の價格を有し、決して彼の如く量目を以て賣買されないのである、されば人が其人格を精練し統一するに於ては、大人君子の前に立つても決して恥づる所はないと思ふ。

併し茲に又一疑問がある、曰く然らば人の行爲中高利貸の如きは經濟に向つて統一され、又或華族の如きは金錢の如きは知らざるも慈善事業に其行を統一して居る、此兩者の人格は何れを以て尊しとするかと云ふことである、私は之に對して其統一の大小に依つて其尊卑の決せらる丶と答へる、一體人は自愛と共に他愛の上に立つので社會も從つて成立するのである、されば個人にも愛他にも相共に同化した方が高等であるべきで、此點から云へば前二者に對する判斷は容易に下せること丶考へる。

昔は佛國の路易十四世和蘭と戰ふことと數年に及んで之を降すことが出來なかつた、で帝は大宰相のコルバートを近く召して下問された『朕が國は其の歳入と云ひ人口と云ひ將た陸軍の設備と云ひ歐洲第一に居るのに何が故に蕞爾たる和蘭を降すこと能はずして斯く年を經るのであるか』と、コルバートは此下問に對して奉答した『陛下よ國家の大且強なる所以は決して武力兵力又は金錢の饒多にはあらずして、全く人格の如何に存するので御座る、臣が和蘭に於て目擊する所に依れば彼國の國會議員は行厨を携へ、素服を着して其院に上るので、實に彼等が心は一意國家に集中致して居ります、されば和蘭の强きは全く其人格の然らしめたので御座る、然るに佛國に於ては人心は國家に集中する所なくして他に用ひられて居る故に、向後佛國は其人格を養成すべき必要が御座る』と。

是に於てか知る、日本をして光榮あらしむるは吾人が人格を硏き之を高くするのに外ならないと、斯くて吾人は憂を去つて始めて喜ぶべきものとなると思ふ、されば靑年諸氏にして將來社會に立つて事をなさんと欲せば、資本よりも先づ人格の須要なることを認め益々之を大にし且つ高くせんとを希望するのである。（明治三九・一〇）

精神修養の説

精神修養と云ふことは何人にも如何なる事柄にもあることであつて、凡そ人間が無意識な事を爲すならば兎に角、少し精神を籠めてする事柄には夫相應に精神修養がある、極く小さいことを云へば、商人の小僧が葉書を一枚拋り込むにも、どう拋り込んだならば旨く内に這入るかと云ふことを考へたならば、即ち之が一つの精神修養と云ふことが云へるのである。夫で精神修養と云ふことは人生の總てと云ふ程廣い問題であつて、之を細かに言へば中々簡單に盡きる譯のものではない、それで私は此精神修養に就ての根本の話だけを述べやうと思ふ。

此根本たるや誠に空漠なる議論であつて、何等の事實もなく、何等の印象もなく、唯だ哲學的の一種のスペキユレーションである、空なる空論である、ジョンソンの書いたものかと思ふが、夫に一つの名高い話がある、其の書には私が今迄見た内で最も幸福であるかの如く見えた人は、フランダと云ふ處の要塞に使はれて居る奴隷である、彼は何等の自由もなくして足に鎖りを着けられて居る、逃げるといけないから足に鎖を着けて重錘を着けて居る、見た處は實に氣の毒であるが、其人の[illegible]を見ると何とも云へない嬉しさを顏に湛えて、誰に會つても莞爾として何の用事を言付けてもハイ〳〵と

云つて居る、仕事をしても鼻唄を唄つて何とも彼とも云へぬ愉快さうに見える。凡そ此世の中に愉快なことはないと思ふ、之は無論名高い話であるから誰も御存知であらうと思ふが、斯う云ふ工合に機嫌能く世の中に滿足して何を見ても愉快に感ずるやうな其人には精神問題と云ふものはないのである、其人は夫れを以て滿足の有樣として居ると見えるのである、さう云ふ人には精神問題と云ふものはない、精神問題と云ふものは通例は其人の要求する處の要求に對して或る提供の衝突から出來るもので、精神問題を論ずる哲學と云ふものは之を歷史上から考へて見ると皆衝突で、吾々の要求が滿足せられないと云ふ處から來て居るのである。東洋の哲學、哲學の深いものは、印度に生れて後にバラモン教となり、佛教となつて居るものであるが、どう云ふ譯でさう云ふ哲學的の深い事變が現はれたかと云ふと、印度と云ふ國は非常に熱い處であつて、人間の健康に就ての要求とか何とか云ふものが誠に不自由である、何しろあれ丈に熱い處であるから、其土地の人が自然の有樣に滿足することが出來なくて、色々不平な考へが起つて來る、夫れが印度に起つた處の宗教問題或は哲學問題の起りであると云ふやうに說明せられて居ると云ふことは私も如何にもさうであらうと思ふ。まア近い例へが佛教の極樂と云ふものを見ると、釋迦樣は蓮の上に乘かつて……池の眞中の蓮の花の上に乘つて居る、未來の極樂淨土に蓮の華が咲いて居る、あれを宜く〳〵考へて見ると、印度人の腦には池の中の蓮の華

の上に乘かつて蛙の眞似でもしたら宜い心持だらうと云ふ考がある、夫れが人生の思想の衝突から起つたと云ふことはあれを見ても分ると思ふ。

もう一つ世界に於ける佛教と同じ系統を爲して居る基督教、之は猶太人所謂希伯來(ヘブライ)人が拵へた宗教である。此人種はどう云ふ人種かと云ふと之れはバベルの塔を拵へた人種で、夫が分れたものが埃及に漂浪つて來て埃及から追返されて亞拉比亞の處にある紅海を渡つて、小亞細亞に渡つて、小亞細亞に落着いた、さう云ふやうな酷い艱難をした人種であるから、矢張人生の要求と提供と衝突を來す。一方の如く自然の有様ではないが、社會の有様と生活の有様の衝突からして彼の人種も色々にクヨ〱考へるやうになつて基督教のやうな一種の哲學を編出した、基督教の哲學と云ふものは……基督教の哲學と云ふものはない、基督教の人格である――之に依ると餘程情的である、人間の智ではない、智情意の内の智でなく情を主として神樣を信仰する、基督は信仰的である。何故彼等が信仰的になつたかと云ふと、印度人の方は自然の有様の衝突で、之は決定したものであつてもう夜が明けさへすれば必ず暑い。其苦みであるけれども、基督教の猶太人の方はさうではなくして所謂る人種生活の衝突であるから文明的である、或る日は非常に味いものに有附いたが或日は何もない、悲痛の境遇に遭遇する。夫であるから、神に倚るより仕方がない。今日は味いものに有附いたが明日も味いものに有附かして

下さいと云つて祈る（だから基督教は飯を食ふ時に祈りを上げる）兎も角人生と衝突したが爲めに神樣を祈るやうになつたと云ふことは大體に於ては明かなことである。

夫から致してもう一つは希臘の哲學であるが、プラトーであるとか、ソクラテスであるとか、アリストートルであるとか云ふやうな人が出て來て之が一の哲學を編出して居る、之はどう云ふとから起つたかと云ふと希臘と云ふ國は御存知の通り雅典とかスパルタと云ふ小さな國が分れて居つて國と國との衝突がある、夫れが戰のやうなとになるから、スパルタ主義と申すと非常に武張つた、日本の武士道見たやうな偉い士或は武勇的な教育であつたのであるが、兎も角も希臘は國と國との衝突から哲學が出來た、夫で希臘から出た哲學と云ふものは基督教が情的であると違つて非常に智的である、智情意の内の主智派と云ふ知識を主とする哲學が希臘に起つて來た。此の希臘の哲學、之は其ヒロイズムと云ふが、希臘で出來た哲學、夫からして今云ふ耶蘇教の人格、之が結付いて此二つの衝突から起つた處のものが今の西洋哲學である、即ち獨逸邊りの哲學である。之は何から來たかと云ふと猶太から起つた基督教が歐羅巴に這入つたが爲めに歐羅巴の思想と衝突する、夫れは衝突する筈である。之は一方知識的であり、一方は情から發する處の神樣を賴む處の考へであるから、歐羅巴にあつた希臘主義から見ると基督の方は迷信らしく見える、一方は之を迷信であると論ずる、一方は迷信でないと論ずると云

ふことが西洋の哲學の基である、西洋では哲學が進んで居ると云ふのであるが、事實進んで居るかどうか知らぬが、之が何處から來たかと云ふと希臘主義と猶太主義、情的と智的と此二つが衝突に衝突を重ねて十九世紀の末迄も種々樣々の說を採つて來たのである。

斯う云ふやうな工合で衝突と云ふものから色々の疑ひが出來て來る、其衝突から自然と衝突するのもあり、生活と衝突するのもある、意見と意見と衝突するのもある、さう云ふやうなことから色々な問題が起つて來る、此の問題の重なるものは精神問題であつて、基督敎或は佛敎の方から云ふと之は宗敎であるから基督敎と佛敎とは大變違つたやうに思はれるが、宗敎として似た處がある、之は何であるか其似た處は何であるかと云ふと、エターニチィ即ち人間は永久に生きると云ふ點に於て彼等は同じことである。此世の中に於ては死ぬるのであるが靈魂が天國に生きて居ると云ふ點に於て餘程似て居るのである。佛敎家に聞くと佛敎ではさう云ふことは說かぬと云ふのであるが、佛敎には因緣說と云ふものがあつて、我々が死ぬると云ふと此世の中に於ての罪のあるなしに依つて蛙に生れるとか蛇に生れるとか種々樣々に生れ變るものであると云ふことを云つて居る。之も靈魂不滅說である、人間はなくなるが命丈は種々樣々に世の中を廻つて居ると云ふことを說いて居る、基督敎の說は天國、天に國があつて其處に生れると云つて居る。

基督教の人がよく汝の如き悪い奴等は永世の火に焼かれて此上もない苦しみを受けると云はれるのを聞くことがあるが、果してさう云ふ風になるかどうか分らぬのであるが、ならなければ宜いと實は内恐がつて居る次第である。

夫からして日本になると云ふと日本は誠に哲學的思想のない國である。何故ないかと云ふと之は其初めに申したフランダの要塞に居た處の奴隷が其境遇に居て實に莞爾として居るやうな工合で日本人は餘程滿足した人種である、之は今の言葉で云ふと何方が健全かと云ふと人間としては問題のない方が健全であらうと思ふ、何故かと云ふと人生的の問題と云ふものは吾の要求と其實際との衝突から來るのであるから衝突の少い不平の少い、滿足の多いものには餘り問題はない、吾々は日々の生活に様様な問題があるが、思ふことが思ふ通りになれば何も問題はない、日光に行かうと思ふ時に日光に行けば何も問題はないが、何處かに行かうかと思ふ時に紙入が空であつた時には之はどうしたら宜しいかと云ふ問題が起つて來るのである、實際から要求が起るのであるから、日本の如きは、氣候は温帶地方に位して居るから順當であり、人々は進まないにしても此天産物を人間の用に利用する位は進んで居つた、極めて滿足した國であつた、夫が爲めに精神的の問題は日本にはなかつた、吾々は日本人であるから精神の問題は殆んどない、しかし日本人の内にも深い疑ひを抱いて居るものがある、或る人に

なると華厳の淵に身を投げると云ふやうなのも聞いて居る、理由を宜く聞いて見ると、どうも人生が解らない、此疑が解けなければ生きて居つても甲斐がないと云ふやうな心を起すのである。此邊から考へると日本人の内にも、身體の内に、健全不健全があるやうに精神の内にも滿され難い種々樣々な要求を持つて居る人もある、此區別はどう云ふ處から來るか知らぬが、其區別は私には解らぬが兎に角同じ日本人の内にも色々な精神問題があるのである。

處が今日の處で日本人の精神に關する問題は學校に於ては敎育勅語に依つて說けて居ると云つて宜しいのである、敎育勅語に依つて所謂る君に忠、親に孝と云ふことに依つて精神問題が或程度迄は說けて居る、學校に於る程度迄は說けて居るが、云ふ迄もなく敎育勅語と云ふのは之は矢張敎育の標準を　陛下からお示しになつて居るもので人生一切の問題を……精神問題を悉く解釋する爲めに出したものでないから、精神問題の要項たる道德の方から考へて見ると敎育勅語丈では說き難き所がある、其敎育勅語の性質が當り前の普通の人を引入れると云ふ爲めに拵へたのであるから深い考へをする人に說くと云ふ譯には行かぬ、御存知の如く思想の自由、信仰の自由な國であつて思想と云ふものは一天萬乘の君も人民に任せて置いて、其内にも國家的問題を敎育勅語で極めたものである、で君に忠なりと云ふのは君に對する覺悟、親に對しては孝なりと云ふことは家に對する處の事柄であつて、國と家とに關

する事柄丈けが教育勅語に解釋されてあつて、一身に關する問題は解釋されて居らぬ。一身に關する道德的問題と云ふものは極く〳〵大い處で云ふと、例へば己の欲せざる處は人に施すなかれとか云ふやうな道德の根源は皆一身に關することである、吾々の道德上の懷疑、精神上の疑ひと云ふものは何から出て來るかと云ふと自分の一身の境遇と衝突から出て來るのであるから、之は教育勅語に關係のない範圍である、精神問題と云ふのは其精神の問題の內に、國家に關するとは教育勅語に依つて足りて居るとしても、私は一身に關する問題は教育勅語にも何にもないのであるから之はよく考へて見なければならぬと思ふ。

一身に關する基の問題は何かと云ふと、之は今の社會に於て最も疑はれて居る點は、人は何故に道德を遵らねばならぬかと云ふのが一番疑はれて居る點と思ふのである。今の日本に於て夫を說くやうな主義はない、從來日本の生活は樂であつたからさう云ふ問題が起らなかつたが、今日の世の中は世智辛くなつて自分の境遇と衝突する場合が多い、夫が多いのであるからどうも問題が多くなる、其內で近來最も其目立つものは一方に於ては自然主義と云ふものがあり、一方に於ては成功主義と云ふものがある、まア私共の見た處では日本の精神問題は自然主義と、夫から成功主義、此二つが半分々々唱へられて居るやうであるが、此二つ共どうも感心しない處がある、自然主義の申す處に依ると、人間の

本能を何よりも重いものとして夫からして今の道徳をば、因習的道徳、コンベンショナリチイと云ふ便宜的道徳、人間の便宜の爲めに拵へた道徳、昔から代々守つて居る習慣から出た處の道徳、之は吾々が守らなければならぬ權威はないと云ふ譯で、どうして斯う云ふことに從はなければならぬかと云ふ事に疑を挿むのが自然主義のやうに思ふ。一方成功主義と云ふのは、之は實業之日本抔と云ふ雜誌で鼓吹されて居るから誰も知つて居ることであるが、我は如何にして大なる身代を作り、我は如何にして奉公人を御すべきであるかと云ふやうな事柄である。それは實に其の社會の苦勞に苦勞を積んで仕上げ、澁澤、大倉などと云ふやうな富豪の經驗談であるから尊敬して聞かねばならぬのは無論であるが、之に依つて精神に滿足を得るかと云ふとさうはいかぬ、先づ私は自然主義のことを一寸申すのであるが、自然主義と云ふと色々の方面があつて、其の內には出齒龜的と云ふのではないが、道徳的方面を云ふと、私共の見る道徳と云ふものは必ずしも因習的のものではない、やゝもすれば吾々が道徳を守る爲めに迷惑をすることがある、正直にする爲めに損をすることがある、夫であるから世の中に生活するに就て暮しが困難になると動もすれば道徳抔には關はず、不正直なことをした方が自分の利益であるかも知れぬ、夜人の家に忍込んだ方が宜しいかも知れぬ、人はどうか知らぬが、私は時々さう云ふ心が起つて來るのである。けれども宜く考へて見ると云ふと道徳と云ふものは決して利益の爲めに守るとか、

不利益であるから守らぬと云ふやうなものではない、其處は宜く誤解のないやうにしなければならぬ、多く吾々が議論する點が其處から出て來る、此道德等から精神問題が出て來る、人間に極めて放縱を許してどんなことをしても宜い、人のものを盜んでも宜いと云ふことにしたならば精神問題が起つて來ることはない、皆人間は突つて居るに違ひない、其處を縛られるから問題が起つて來るのである、宜く考へて見ると道德と云ふものは利害問題とは別であるのみならず、利害問題と反對したものである。

吾々が正直にすると云ふことを今迄の敎育家が說くには正直にすれば得が行く利益があると云ふて居る、夫れは矢張靑年諸君の耳に入り易いやうに說くのであつて道德一般の策略である、さうすれば道德が、得でなく動もすれば必ず損の行くべき正直を何故守らねばならぬかと云ふことになつて來る、夫は損が行くがどうしても守らねばならぬと云ふことは基督敎も云つて居る、私は基督敎は信じないが之丈は認める、どう認めるかと云ふと、此處に一つの國家があれば、其國家と云ふものは人と人との結合が固くなければ決して强くはないのである。人と人との信任のない、相愛するとのない社會は忽ち壞れて仕舞ふ、人が正直にすること、人を愛すると、之は自分の爲めではない、社會を强くする爲めである、若し此世の中に於て人と人とが相愛しないで噓を云ふことを以て道德とする、他人のものを盜

むを以て道德とする。自然主義から云ふと今日の道德は便宜上拵へたものだと云ふのであるが、若し自然主義が云ふが如く人の妻君を盜む方が宜しいと云ふやうな道德を便宜上拵へたならば其社會はどうなるか、多分さう云ふ社會があつたかも知れぬ、之はあつたかも知れぬが生存競爭と云ふ規則の爲めにさう云ふ社會は生存に堪へずして絶滅して仕舞ふ、さう云ふ社會ではあつた處が亡びて仕舞ふ、さうして正直で勉强すると云ふ道德的のものが殘ると云ふことになつて來る、吾々が道德を守ると云ふことは自分の爲めではない、社會の爲めである。

之を例へて云へば丁度租税を納めるやうなものである、吾々が租税を納めるのと納めないのとどちらがとくかと云ふと租税を納めない方が自分から云ふと得であるが、租税を納めないと國が亡びる、國の爲めに自分は損をして租税を納める、親切にして正直にして勉强すると云ふとは自分の利益ではない、社會の利益の爲めである、吾々が相愛しなかつたならば天の規則に依つて亡ぼされて仕舞ふ、優勝劣敗であるから自ら亡びて仕舞ふ、兎も角も社會を强くしなければならぬ、國家を立てなければならぬと云ふ處から此の親切とか正直とか云ふものが出來て來て居るのである、之を考へて見ると云ふと之から後々何年經たうが矢張此道德が行はれない社會はなくなつて行つて道德の行はれる社會は存して行く、斯う云ふやうな有樣であるから此方の社會と彼方の社會との生存競爭は物質的にも競爭し勢

方的にも競爭をするのであるから、何方か競爭の結果道德的に高いものが殘つて行くのであるから、道德と云ふものは人間が便宜上拵へたにしても正直を主とする方の社會は此世の中に存在して行くがさうでない方は存在するものではない、斯う云ふやうな道德は天の規則として人間が亡びるより外仕方がないと私は諦めて居る、便宜の爲めの道德ならば泥棒しても宜しいと云ふやうな道德が出ても宜しい譯であるが、夫れでは人間が立たぬ、道德と云ふものは損をして守るべきものであると云ふことが根本として要るのである。

此根本の考へがあると云ふと其處が天の難有さ、何か知らん損をすると夫が偶然に得になつて來る、之は偶然である、吾々は之丈のことをするから之丈の褒美を呉れよと云つても仕方がないが、損をする積りで得をしたならば計らずして得が行つたと云ふとになる、不正直にしないで損をしつゝ、社會の爲めに盡して居ると社會は無情なやうに見えるが見掛け程無情ではない、彼の人は親切な人だ正直な人だと云つて信用が出て來る、或は尊敬が出て來る、世の中と云ふものは信用があり尊敬がなければ立つて行くとは出來ぬ、多勢の人から尊敬を受けると云ふとは何から來るかと云ふと、損を關はず遣つて居る處から來るのであるから、私は正直と云ふことは損をする積りで、精神的租稅を納める積りで遣つて行く、其正直を社會の人が認めて盛立つて呉れるのであつて、社會の人に向つて要求することは出來

ぬ、損をする考へで遣るのは世の中で云ふ犧牲の精神である。自分の身を犧牲にする處の精神の内に、夫に依つて利益を得やうと云ふ考へがあつたら夫れこそ間違ひである。

一方の成功主義になると損は嫌だから成功しなければならぬと云ふ意味であるから之は間違つた處がある、何故かと云ふと成功と云ふことは之は結果である、或る事柄の結果である、之が自分さへ成功すれば宜い、人は損をしても關はぬと云ふところの成功主義になると、どうなるかと云ふと、成功主義の人が云ふには成功を得たければ信用を得ろ、信用を得たければ正直にしろと云ふのであるが、吾々の矢張り勉强主義正直主義である、勉强の結果成功が來るので、成功は主義ではない、吾々とは大變區別がある、西洋で能く云ふ『目的は手段を正しくする』、此言葉に依ると目的さへ宜ければ手段はどうでも宜いと云ふのである、今の世の中には此事が非常に行はれて居るが、之は決して道德と云ふことは出來ぬ、道德と云ふものは其時の手段にある、手段が正しくないか正しいかと云ふことが道德であつて、目的が正しいか正しくないかと云ふことは道德ではない、親に孝行する爲めに泥棒をしたと云ふことは之は泥棒と云ふことが正しいと云ふ理由にするとは出來ぬ、目的は親に孝行であるから宜いことには違いないが、其手段が泥棒であつたならば夫は矢張り泥棒である、目的と云ふものは之は實行道德から云ふと問ふべきものではない、目的の内にも非常に惡いものもあるけれども實行道德

から云ふと、主義として人の行ひを規定する處から云へば成功したいと云ふことは主義ではない、今日の世の中には成功が主義であると云ふことを考へて居る人が多くあつて、世間に立つて居る人からして、民間の有力者からして成功すれば宜い、人を欺いても不正の金を取つても宜しいと云ふ考へを持つて居る人が大分あるやうであるが、少し之は考ふべきことゝ思ふ。

成功主義になつては居るが、亞米利加に一の主義がある、日本の成功主義を取る人は大分間違へて居る樣であるが、亞米利加と云ふ國は本來自由の國であつて、土地も非常に肥えて居る、所謂天產物が多い、夫れが爲めに餘り衝突しない國である、勿論昔から亞米利加の歷史を見ると色々のとはあつたが比較的天の惠みの厚い國である、あの國には深い人生問題と云ふものが出て來ない、哲學者と云ふものもあるけれども亞米利加の此人生問題の說き方と云ふものは誠に淺い、どう云ふとを說くかと云ふと、近來亞米利加から來る本を御覽になると分るが、人間としてユースフルネス、役に立つものを拵へると云ふとを亞米利加では目的として大變說いて居る、エッフイシエンシー、結果の宜いと、凡そ人間になつた以上はユースフルでなければならぬ、世の中に對して効用がなければならぬではないかと云ふことを說いて居る、之を日本の成功主義者は日本の成功主義と同じものであると云つて居るが、成功主義と云ふものは己を主とするものである、ユースフルでなければならぬと云ふことは他人に對して役

立たねばならぬ、社會に出たならば社會の役に立たなければならぬと云ふのであるから、自分の身は損をしても正直でなければならぬと云ふ事と同じである、夫れを日本の成功主義者が自分の畑に持つて來た譯である、成功主義と云ふものは自分が成功すると云ふとであるから人の爲めに役立つものと云ふのとは根本に於て大分の差がある、亞米利加の說方は簡單であるが根本に於ては我々が考へる處と大した違ひはない、矢張道德と云ふものは犧牲的のものである、自分の身を犧牲にすると云ふ精神から出て、自分の身を犧牲にして他人を愛する、詰り愛他主義であつて、ユースフルとかエッフイシエンシイと云ふものが愛他主義と流れを同じくするものと私は云ふのである、であるから亞米利加の此主義を成功主義と同じやうに云ふとはいかぬ、成功主義から云ふと或は桂公爵とか、大倉喜八郎君とか云ふやうな人は吾々が大に拜まねければならぬ人である、あれ位成功した人は少い、併し我々の道德的標準から云ふとあの人達を拜むと云ふ譯にはいかぬ、と云ふのは彼の人達は成功主義であつて吾々の主義と主義が違ふ、吾々の主義とする處の者は他人の爲めに身を犧牲にするので、他人の肉を食つて己れが成功しやうと云ふのではない、能く此處の區別は考へねばならぬ、正直にする爲めに利益はある、利益はあるが夫は正直にする目的ではない、正直にするに就ての意外の結果である、實に意外の結果である、租税を納めると云ふ事は自分が得をすると思つて租税を納めるのではない、租税を出せば國家の

政治が味く行く、夫は時には味く行かないこともあるが、損失でも國家の爲めに出すのであるならば自分も從つて宜くなることがあるのと同じである、租稅を出すにも私が將來繁昌するが爲めに出すと云ふのは夫れは間違ひだ、決して租稅を出すには自分の利益と思つて出すものはない、正直にすると云ふことは自分の利益の爲めにするのではない、損を我慢すると云ふ犧牲の精神から出なければならぬ。

偖て之から一步を進めて然らば何故に損をしつゝも社會の爲めに計らなければならぬか、自ら損をしつゝも人を愛せなければならぬかと云ふ問題になる、成程正直にすると云ふとは分つたが、己れは損をすることは嫌だ、國家は潰れやうが自分の思ふ通り損をするよりも得をしたい、他人のものを取つても宜いと云ふ者が自ら起つて來る、起つて來ればこそ自然主義とか成功主義の如き主義なるものが世の中に起つて來るのである、此處が六ヶ敷い處である、何故に自分を犧牲にしなければならぬか、自分の身を犧牲にすることを夫程尊ばねばならぬかと云ふとが問題になる、此處が詰り重要な根本の問題と思ふ、私は曾つて自分の書いた論文をば或る本屋が集めて來て題を書いて吳れと云ふので『人尊主義』と題に掲げたことがあるが、人尊主義之れは人間が尊いものであると云ふことである、私は人間は尊いものであると云ふことを信じて居る、何故人間が尊いかと云ふことは之れは一段の說明を要するのであるが、彼の有名なる哲學者のカントと云ふ人が云ふのに『人が道德的であると云ふには少くと

も道徳を知つて居らねばならぬ』と云ふことを云つて居るが私は夫れと同じである、人が自ら尊しと云ふには第一尊いと云ふ自信がなければならぬ、凡そ世の中に生きとし生けるものを見て、生きとし生けるものゝ内に尊いとか賤しいとか云ふ考へを持て居るものがあるとすると、夫れは人間より外に持つて居るものはない、其の考へを持つて居る以上は其動物自分が我は尊いと云ふことをしなければならぬと云ふ考へがあるに違ひない、凡ての動物が努力して居るが、彼等は自分の身を支へる努力であつて、之は賤しいからしていかぬ、尊いから損をしても必ずするが宜いと云つて努力するものは人間より外にはない、自ら努めない、……自ら尊からぬことを努めるのも人間であるから、此の點に於て人間のみが尊いものだと云ふのである。

人間は萬物の靈長であると云ふことを云ふが、此點には充分不審がある、何故に萬物の靈であるか、人間は他のものを人間の用に供して仕舞つて、所謂弱いものゝ肉を強いものが食ふと云ふのは人間であつて、人間は萬物の賊の如く見える、萬物の靈の如く見えない、外の動物から見ると隨分厄介であらうと思ふ、猪が居ると之れは味い抔と云つて食べる、山鯨之れは宜いと云ふ風で、兎を食べる狐を食べる、モモンヂヤ抔に行くと色々なものが懸つて居る、斯う云ふことは人間以外は大變迷惑であるけれども夫で人間は萬物の靈と云つて居るが、進化論者から云ふと人間は進化の程度が高いと云ふが、之れ

は人間自ら求めてしたものではない、猿に生れたいと云つた處で生れることは出來ない、自然に人間に生れたのであるから、夫を手柄顔に自分の鼻に懸けると云ふことは少し間違つて居る、今は人間に生れたから今度は馬か猿に生れやうと云つても生れるものではない、夫を人間は進化の程度が高いと云つて威張つて居るのは宜くない、夫れは一種の成功主義者の云ふことである、自分の手柄でないことを自からの功の如く云ふのは甚だ怪しからぬ、尊いと云ふ思想が頭脳にあつて、……努力と云ふ考へが頭腦にあつて賤しいことはしない、尊いことはすると云ふ努力があればこそ人間が尊い、之れは自分の努力である、之れがあれば尊いと云ふことを斷言することが出來る、私は其點に於てのみ人間は尊いと云ふことを斷言するのである。

其尊いと云ふのは何かと云ふと利害關係を離れて或る信念の爲めに、或る理想の爲め所謂或る道の爲めに道德の爲めに自分の利益を犧牲にするとが尊い、其身を犧牲にすれば夫れが爲めに人間社會が利益を得て行く、自分は不利であるが人間社會が利益を得て行く、正直にして行くと云ふことすらも之れは社會の恩人であると云ふことを云へる、自分の損を關はず、正直を守つて行くと云ふことは正直を守る點に於て社會の恩人である、社會は其人に向つて感謝しなければならぬ、社會に正直な人があればこそ社會が持つて行くのであるから、正直な人は我は社會の恩人であると云ふことが出來るの

である、其處が人間の尊い處である、斯う云ふ工合に尊いと云ふ自信を持ち尊いと云ふ努力を持つ以上は、其尊きを愛する心を以て吾々の犧牲たることに甘んぜなければならぬ、犧牲と云ふことを切に餘計に感じなければならぬ。

先年私は早稻田大學に行つて、魔窟退治と云ふことがあつたに就いて矯風演說を遣ると云ふので行つた、或る辯士が乃木將軍を引いて云ふのに、あの人は英吉利のコンノート殿下を接伴する責任を帶びて居つて、その責任を果たさないで自殺したことを褒めるのは間違つたことであると云はれた、そこで私は辯士の控室に歸つて質問した、私どもは社會の道德と云ふものは人を愛するにあつて身を愛することでない、人を愛する道德と云ふものが理想化されて居つて正直と云ふならば、他の利害を顧みて正直にするのが本統の正直である、義と云ふならば義の爲めに自分の身を顧みないと云ふのが義で、今の道德は愛他である、他人を愛することは半面から云ふと己れを犧牲にするとである、自分の爲めにあらずして自分を犧牲にするのは私共は善と心得て居る、若し乃木大將の如く自分の責任の爲め、軍人たる理想の爲め、忠臣たる理想の爲め命迄を擧げて投出すことが非難されるならば今日の道德と云ふものはどう說明するかと云つた處が、其人は始めて氣が付いた樣に成程義と云ふ精神から云ふと一言もないと云つて居られた、私共とは餘程考への違つた人であるが、今の道德を根本として云ふ時

は國の爲め、君の爲め、社會と云ふものゝ爲めに身を犧牲にすると云ふことは最も高い道德であると云ふより外はない。昔からある優勝劣敗自然淘汰とか云ふ自然の規則に支配されて居る道德である、自分の身を忘れて道の爲めに捧げると云ふやうな人の居る國は之れは自然淘汰の自然の規則が此國を向上させる、若し自分の爲めに人を殺すと云ふ國であつて見れば夫は繁昌するかどうかと云ふと、自然淘汰の天罰が其國を亡ぼして仕舞ふ、或は日露戰爭を見ても土耳古戰爭を見ても其點は同じであらうと思ふ、土耳古が何故に敗けるかと云ふと彼は人と人との親密が足りない、國の爲めに道の爲めにと云ふ心が足らぬからである。

斯う云ふ點から考へて見て兎も角も自分以外の人の爲めに自分の身を犧牲にすると云ふことは餘程意味あることである、夫で我々は此世の中に生れて來て、自分の身が苟くも尊いものであると云ふ考へがあるならば之れをどうすれば宜いかと云ふと、尊くない卑しいことをして自分の身を穢すと云ふことは避くべきことである、人間の生涯と云ふものは詰り今日あつて昨日なきもの、或は今日あつて明日なきものと云ふのであるが其實さうではない、誠に長い一つの書物のやうなものである、今日は今日の頁、明日は明日の頁、どの頁も自分の誠であるとすると、若し尊いことを表するならば生れてから死ぬ迄の頁を尊いものにしなければならぬ、實に吾々は不完全に生れて居つて、殊に諸君の如き青

年の時代と云ふものは色々の原因の爲めに身を過ることがある、又考への足りない爲めに罪の心なくして罪に陷ることも往々ある事である、夫は實に殘念であるけれども、若しも人間の生涯をば一つの全きもの、一つの長い材木と見たならば、其材木を割つて本の方から先の方迄悉く目が美しいものであつたならば此材木は非常に尊いものである、けれども或る處は蟲が食つて居る、或る處は木目が捻れて居る、或る處は節があると云ふことでは餘り立派なものではない、人間の生涯が之れである、若し本統の理想を云ふならば青年の時代であらうが中年の時代であらうが老年の時代であらうが一調子に美しいのは之れは綺麗なる生命である、人は銘々に自分の生活を作りつゝあるのであるから、自分自分書物を著すと同じである、本統の傳記と云ふものは他人が書くのではない、自分自分の努力を以て自分の傳記を作るのである、傳記の或る頁に美しからぬことがあり、尊からぬことがあると云ふことは、之れは實に拭ふべからざる殘念である、之れが本ならば増補訂正第二版が出るのであるが、我々の人生の傳記には夫が出來ぬ、若しも出來るならば訂正したいと思ふが如何せん夫れは出來ぬ、人生と云ふ自分の傳記、私は始終云ふのであるが、人生の傳記は宇宙に刻みつゝある、宇宙に刻みつゝあるに違いない、若し自分の一生の行ひと云ふものが時の流れると共に消えて仕舞ふとか云ふことならば宜いが消えるべきものではない、して見れば自分の生涯が穢くても宜しいと云ふことはどうも云へま

いと思ふのである。

支那人の思想になると生前一杯の酒、死後千載の名、死後の名は生前の一杯の酒に如かず、萬世迄譽れを揚げるにした處が生きて居る今日には分らぬのであるから、今一杯の酒を飮んだ方が宜いではないかと云ふ說があるが、私共はさうは思はぬ、若し生前一杯の酒を堪え得るに依つて千歲の名と迄は行かずとも百載の名でも十載の名でも得ることが出來るならば、今日の一杯の酒を避けなければならぬ、夫れは私は忍びない、一杯の酒處ではない百杯の酒でも謹む、自分の著す處の傳記を穢くすると云ふことは出來ない、他人の書いた傳記ならば苦情を持つて行くことが出來るが、自分の生きたる歷史を穢して誰に罪を持つて行くか、誰にも尻を持つて行くことは出來ぬのであるから他日誤解のない樣に一杯の酒でも謹しまなければならぬ、斯う云ふやうな考へで以て世の中に立つ日になると、精神問題の所謂精神を修養する最根本は何を努めたならば宜しいかと云ふと己れが非常に尊いものである、實に尊いものであるから吾なるものは決して穢してはならぬ、穢らはしいことの爲めに汚してはならぬ、自分で自分の傳記を汚してはならぬ、吾の傳記は萬人の手本である、と云ふ考へを以て遣つて行かなければならぬ、悉く手本になるやうな美しいことは出來るものではないが……又一方から云ふと人間の一擧一動一つとして他人の手本となるに堪へないものはない、世の中には天の惠みが薄くして何事

をさせても味く出來ないものもあるが、其人でも手本に出來ないことはない、自分の出來ないことを自覺して大いに努力して拙くないやうにと云ふ事を考へたならば、縱し成績が擧らないにしても其努力が人の手本である、完全に人が努力して非常に成績を擧げる、成功主義から見ると其方が宜しいが、成功と云ふことは結果であつて、結果が眼中にないと云ふと自分の努力が大なる結果を擧げなくても其の努力に價値がある、其處に大なる價値がなければならぬ、成功主義と云ふものは結果の良惡しに依つて人を判斷するのであるから、無實の罪に人を落すやうな事がある、人は正直な心を以て自分の身を淸かれと云ふ事に努力するならば、其結果は知らぬが其努力は善であるのである、斯う云ふ事を考へたならば之れが修養の根本である、此精神が間違つて居つたならば精神修養の說を聞いても夫は駄目である、自分は尊いものであつて此身は汚す事は出來ない、或は不正直を以て此尊さを害する事は出來ないと云ふ自覺があつたならば夫で以て精神修養の根本は立つて居るのである。（大正二・一）

現代思想の一面

私が此の頃讀んだ書物の中に次のやうなことがあつた。人は哲學的の主義を知る事が最も必要である。例へば初めて會つた人に對して、此の人はどう云ふ人であるかと云ふことを知るには、先づ第一

に其人は哲學上如何なる意見を抱いて居るかと云ふことを知るのが必要である。

それであるから宿屋の主人などが客を扱ふのにも單に金の有る無しと云ふことのみでは可かない、何んとなれば茶代でも餘計に出しさうな客は上等の室へ通し、餘り茶代も出さないやうな人は普通の室へ通すのであるが、金を澤山持つて居る人であつても、其人が若し茶代廢止を主義として居つたならば、案外茶代を出さないのである、故に入つて來る客を一見して其人の金の有る無しを知ることも無論必要であるが、それよりも先に其人が哲學上如何なる意見を抱いて居るか、如何なる思想を抱いて居るかと云ふ事を知るのが、宿屋の主人に取つてさへ必要であると云ふやうなとが書いてあつた。是は少し極端のやうではあるけれども、併し今の人間は昔――昔と云ふ中にも極く大昔の人間と違つて、物事をするにも總て主義思想を有つて居て、其主義思想に從つて行ふのであるから、其邊から考へたならば宿屋の主人が客の懷中に金の有無を知つて食逃を防ぐと云ふよりも、先づ哲學的の主義を知る事が必要かも知れないのである。哲學的の主義などと云ふと、事柄が餘りに重大のやうに聞えるが、更に言換へれば其人の人生觀である、其人は人生をどのやうに觀て居るかと云ふことを知るのが必要である。人生觀と申せば何も哲學的の方面ばかりではない、事々物々に就て人生觀の無いものはないから、宿屋の主人にも必要のものとなるのである。勿論茶代を出すとか出さないとか云ふことゝ、哲學

的の主義とは何等の交渉は無いかも知れぬが、是も人生觀の一方面であるとしたならば、宿屋の主人としても、入つて來た客人の主義を知ることは必要なることゝ言はなければならぬ。

所で此頃新聞を見て驚いたことは、或る犯罪人――それは强姦をして人を殺したと云ふのであるから、隨分重大の犯罪である、其犯人の言ふのに、自分は自分の人生觀に從つて斯かる事を爲したのであるから、人が何を言はうと少しも疚ましく無い、自分は立派な行ひと思つて居ると言つたと云ふことである。是はどうも何とも評しやうも無い圖々しい言葉であつて、又極端の例であるけれども、兎に角人間は自分の人生觀に從つて働いて居ることは事實である。それは知識に依つて働く人もあり、感情に依つて働く人もあり、或は物質的、肉體から直接に來る所の慾から働いて居る者もあるけれども、それは皆其人の人生觀から出て來るものである。同じく腹が空いて物を食べるとした所が、其食べると云ふことは腹が空いたと云ふ感情から來るであらうが、其食べるに就ては西洋料理を食べる人もあり、日本料理を食べる人もある、それは何に依つてさう云ふ違ひが起るかと云ふと、其人の思想に依つて違ふのである。髮を綺麗に撫付け、高き襟、赤い襟飾を着けて居るやうな人は先づ西洋料理を食べるであらう、所謂ハイカラ、さう云ふ人は西洋料理を食べるが、或人は料理屋に行き、或人は一膳飯屋、或人は鰻屋へ行くと云ふ風に、皆夫れ〴〵違ひがある、併し要するにそれは皆其人の主義

思想から出るものである。人間が未だ極く幼稚にして獸類の區域を脱すること遠からざる時代に於ては、自分の思想に依つて働くと云ふやうなことは無論無かつたのである。されば今日人間以外の動物を見ても直ぐに分る。犬は自分の腹が空いた時に、其處に食ふべき肉があれば、其肉は何人の所有であると云ふやうな事は少しも構はない、直ちに口に入れて了ふ、それだから時とすると頭を撲られることもあり、或は魚屋に出刄庖丁を以て追駈けられるやうなこともある。是は思想と云ふものが少しも無く、唯々單に自分の感情、單に自分の知識、單に自分の肉體の慾にのみ依つて働くからである。然るに人間はさうではない、知識もあり感情もあるが、それは餘程發達して居るから、種々樣々の高倘なることをして居る、其高倘なることは何に依つて居るのかと云ふと、思想に依つて率ゐられて居るのである、それであるから此思想と云ふものは極めて大切なものである。從つて此思想を知ると云ふことは、獨り宿屋の主人に限るのではなく、學校の敎師であらうが何であらうが、總ての人に取つて大切なることであるのである。そこで私が玆に云ふ現代思想と云ふのは今の世の中に一番多く行はれて居る所の思想である。此思想は誰も知つて居る通りに今日は大抵何々主義と云ふ語に依つて言現はされて居る。西洋の言葉で言ふとイズム●ナチユラリズムとかプロテスタンチズムとか云ふやうな語で言はれて居る。此主義と云ふものは昔からどれ程あつたか知れない、それは政治上に

もあれば、經濟上にもあり、宗教上にもあり、種々のものに樣々の主義があつて、それが悉くではないか、人生の多くの行ひを率ゐて來たのである。で此等の主義の中で今日まで傳はつて來て居るもの、即ち道德上に行はれて居る所の主義であるとか、或は宗敎上に行はれて居る主義とか云ふやうなものは、是は現代主義とは言へないのである。現代に行はれて居つても、昔からある所の主義は現代主義とは言へない。玆に現代主義と云ふのは兎に角此頃世の中に現はれて來て、さうして從來の思想に對して多少の影響を及ぼしたものを言ふのであつて、或は自然主義であるとか、或は墮落主義であるとか、虛無主義であるとか、社會主義とか、或は近來盛んに唱へられて居る成功主義とか、斯う云ふものは皆現代主義に違ひない。さうして是等の主義が現代に如何なる影響を與へつゝあるか、又是等の主義は如何なるものであるかと云ふことを考へるには、どうしても單に主義其ものを主義として捕へて考へたのでは分らない、其主義から現はれる人の行ひを見ることが分り易いのである。例へば懷中に金を澤山有つて居る人でも、茶代を置かなかつたとすれば其茶代を置かない事に依つて、其人の茶代廢止主義が分るやうに、現代主義はどの樣なものであるかと云ふことは、それ等の人の行ひに依つて分るのであるから、それを說明するにも其行ひに依つて說明することが一番早道であると思ふ

今の世の中の人は誰一人として現代主義ならざるはないと言つても宜い。兎に角現代主義がある以

上は、幾分なりとも其主義の感化を受ける、或は現代主義に對して自分の方から影響を及ぼすこともあるのであるから、如何なる人と雖も幾分かは現代思想の色彩を帶びて居るに違ひない。それであるから今の世の中で最も著しき現象は何であるかと云ふとを考へて見ると、此の現代主義の働き方が能く分るのである。今此主義に就て一々數へることは出來ぬが、新聞などに現はれた所に依つて考へると、どうも人心が非常に殘酷になつたやうに思ふのである。人殺が大變多い。先年も二本榎の五人殺と云ふやうな慘事があつて、非常に人心を驚かせ、それが爲めに地藏樣となつて、今以て香華が絶えないと云ふ有樣である。是は殘酷なる人殺の一例であるが、其前に於ても其後に於ても之に劣らない殘酷なることが幾らもあつたのである。或者は主人を殺し、或者は兄を殺し、或者は夫を殺し、甚だしきは妾が旦那を殺したと云ふやうなことが頻々として現はれるのである。私は至つて意氣地の無い方で、又生命を非常に惜しく思ふから、斯う云ふ世の中ならば早く遁れて、何處か安全の處へ行きたいと思ふのであるが、此世の中から遁れると云ふのは卽ち生命を棄てることになるものであるから、生命が惜しい爲めに世を遁れると云ふことは矛盾になる、それ故斯うして居るのである。兎に角世の中が殘酷になつたと云ふことは、私は現代の一の特徵であらうと思ふ。尤も人殺は昔からあつたのである。又どの樣な書物を讀んで見ても、何れの時代を見ても、今の世の中は實に澆季である、人情が浮

薄になつた、或は人間が利慾を貪るやうになつたと云ふやうなことが書いてある。是れは基督の時代も孔子の時代も、釋迦の時代も同樣であつたやうであるから、吾々が今日の世の中を見て、人心を輕薄であるとか、不人情になつたとか言つて悲しむのは、或は自分の極く狹い眼界に於て知り得ることだけであるかも知らないが、併し少くとも今の世の中は殘酷になつたと云ふことは言へるであらうと思ふ。昔は盜賊などが人を殺すにしても、抵抗力の無い女であるとか頑是無き子供を殺すやうなことは餘りしなかつた。全く無いではないが、今のやうに多くはなかつた、所が今日斯う云ふ殘酷なことが多くなつたと云ふものは、他日自分の犯罪の露顯することを恐るゝが爲めであらう、如何に子供であつても目を覺して顏を見知つて居つて、或は目の怖い人であつたとか、鼻の高い人であつたとか、言はれると、それが露顯の緒になるから、何でも構はぬ、女でも子供でも殺して仕舞へと云ふやうなことで殺すのであらうと思ふ。以前には抵抗力の無い女や子供を殺すと云ふやうなことは殆んど無かつたと言つても宜い。又講談などを讀むと義賊とか何とか云ふものが能くある、私は義賊と云ふものが果してあるかどうかそれは信じない、義がある位ならば初めから泥棒などをしないが宜い、泥棒をする上に於て義賊と云ふやうなことは間違つた話であるけれども、今のやうに殘酷なことをしなかつたことは義賊と云ふ名だけでも分る。所が今日は悲しい哉義賊と云ふ口實を有する泥棒すらない、是

は實に情けない話である。然らば何故に今日斯う云ふ風になつて來たのかと云ふと、是れも現代主義、現代思想から考へて見ると能く分る、其一は、是れも新しい思想ではないけれども、自分を愛すると云ふ所謂主我的思想が非常に發達した結果であつて、一は今の世の中に主として行はれて居る成功主義から來て居ると、斯う思ふのである。主我的思想と云ふのは、自分を主とする思想であつて、是れは昔からの教へとは餘程違つて居る、昔の教へと云ふものは主に愛他的、他人を愛すると云ふ方面から說いたものであつて、決して自分の利益、自分の愉快、自分の成功と云ふやうなことのみを本尊として說いて居る教へはあるまいと思ふ。併し是れは私は餘り能くは知らぬから或ひはあるかも知れぬが、それではどうも教へにならないやうに思ふのである。それから近來の成功主義に於いては自分の利益を圖る主義と云ふ思想が非常に多く、自分程尊いものは無いとしてある。それは成程自分程大事なものは無いのであらうけれども、自分の利益の爲めには他人をどの樣な目に遭はしても構はぬと云ふやうなことは無い。所が近來成功々々と叫ぶ其聲の中には幾分かさう云ふ考へが入つて居るらしいのである。勿論他人を害しても成功せよとは說いて居らないけれども、其成功と云ふ中には方法などは少しも含んで居らない。尤も雜誌などで成功々々と叫んで居る聲の中には、多少方法と云ふものも無いでは無いが、併し其奥底には成功さへするならば、どの樣な方法を用ひても宜いと云ふ風なとが多少潜ん

で居るのではあるまいかと思ふのである。私は曾て或人から廣告の引札見たやうなものを受取つた、さうして其引札に書いてあることは如何なる事かと云ふと、要するに自分は今回斯う云ふ機械を發明したからどうか御愛顧を願ふと云ふ意味である。ところが其引札を出した人はツイ此の間何百萬圓とか何千萬圓とか云ふ大會社を潰して了つて、さうして自分は五十萬圓程着服したと云ふやうなことを新聞に書かれた人であつたのである。私は果して其人が五十萬圓着服して私腹を肥したかどうかは知らぬが、兎に角其の人は大會社を潰して了つたのである、大會社を潰して會社には非　の迷惑を掛けて置きながら自分は又他の商賣をして芽を吹き出すだけの力を有つて居て麗々しく引札を配つて、再び何千萬圓かの會社を拵へやう、以前の運勢に經ち昇らうと考へて居るのである。それで尚其人が言ふのに、私の前の會社が潰れたことは誠に悲んで居る、當時自分は有らん限りの力を以て之れを救はうとしたけれども、力及ばず、且つ種々の事情に妨げられて自分は引込んだと、斯う言つて居る。私は其間に如何なる事情があつたかは知らぬが、會社が潰れた後になつても何も自分だけが芽を吹出すだけの用意をして置かなくても宜さゝうなものである。會社を潰して、株主に對しては未だ拂込まない株金までも追徴するやうなことをして置きながら、其會社を發起した所の人が後で芽を吹き出すだけの用意をして置くと云ふやうなとは、今の成功主義から言つたならば善い事かも知れぬが、今まで

の教への主旨には適はないやうに思ふのである。非常な迷惑を多くの人に掛けて置きながら、自分は他日芽を吹くだけの用意をして置いて、人の噂も七十五日だから、七十五日か百日も經てば、人は忘れて居るから何をしても構はぬと云ふやうなことは、今日の所謂成功主義には適つて居るかも知れぬが、從來の思想とは餘程違つて居るのである。例へば船が海洋に出て難破でもした場合には、船長たる者は自分の身を犧牲にして總ての事をしなければならぬ、それと同じく會社にしても一朝不運に際會して、其會社が潰れると云ふやうな場合になつたならば、發起人とか社長とか云ふやうな者は、自分の財産を抛つても、人に迷惑を掛けぬやうにするのが今までの思想であつたのである。所が今日はさうでなくして若し船が沈んだらば船長だからと言つて、何も他人の身の上をどうすると云ふやうな心配は要らぬ、場合に依つては乘客などは沈めても自分は其上に乘つて逃れる方が悧口だと云ふ風になつて居る。それで其の引札を出した人は、其の引札の中に斯う云ふことを書いて置いたのである。自分は大なる會社を潰したが爲めに戰死した、名譽ある討死を遂げたのである、今度は再び生れ變つて呱呱の聲を揚げたのであるから、どうか御愛顧を願ふと云ふやうなことが書いてあつた。成程當人は名譽ある戰死を遂げたやうに心得て居るかも知れぬけれども、五十萬にしても何十萬にしても取つて置いて、それを持て再び事業を企つると云ふやうなことは決して戰死と言ふことは出來ないと思ふ。そ

れで其成功主義と云ふものは、何でも成功しさへすれば宜い、成功するには如何なる手段を用ゐても構はぬと、斯う云ふことであるとしたならば、此主義には單に自分を利すると云ふ我利々々的の極めてセルフィッシュの心が籠つて居るものと言はなければならぬ。

是は成功主義に就て言ふのであるが、今日の世の中にある所の現代思想と云ふものゝ中には、昔から續いて居る所のいろ／＼の主義があるから、それを悉くとは云はれぬが、現代主義の一面に確かにセルフィッシュの極めて自利的のものがあると、斯う斷定するは十分根據あることゝ考へるのである。斯う云ふ我利々々一方の心が、やがて今の人殺しなどの場合に女であらうが、子供であらうが、抵抗力の有る無しに拘はらず殺すと云ふやうになるであらう。近來殘酷なることが屢々行はれるのは確に現代の中に大なる自利心が籠つて居るの然らしむる所であらうと思ふのである。併しながら此自分を利すると云ふ自利の心は、私も之れを何處までも惡いとは言はない、如何なる下等動物を見ても、或は人間の昔からの跡を見ても自分を利すると云ふ心の無いものはないから、それのあるのは無理とは思はぬが、人間が思想に依つて働く、或は道德の敎へに依つて働く、知識とか感情に依つて働くと云ふ時代になつては、其自分を利すると云ふ心が思想の爲めに幾分か制せられ、幾分か枉げられて、餘り殘酷でなく、餘り他人に迷惑をさせないと云ふやうになつて來たのである。是れは吾々が人間とな

つて以來のことであるが、今更之れを止めて自分を利すると云ふ一方に傾くと云ふことは、それは或る意味に於ける退化であると思ふのである。

彼の進化論或は生存競爭が段々激烈になる結果として、どうも他人の事などを圖つて居ては間に合はないと云ふ考へが出て來ると云ふとは事實である、それは確かに事實であつて、今日の如何なる思想を羅ねて見ても、其原因は確かに生存競爭の激烈、或はパンを得るの難いと云ふ處から來て居るに違ひない。それはどの主義でもそれから來て居るに違ひないのであるが、尙能く考へて見ると、パンを得るが爲めに斯くまで自分を利する心を增長せしめて、さうしてそれが生存競爭の本當の主義に適ふかと云ふと、私はそれは大に疑問であると言はなければならぬ。成程泥棒をするが爲めには其家に在る所の人を悉く殺して了ふのが宜いかも知らぬ、併しながら尙能く考へて見ると、さう云ふことをした泥棒が捕へられると、單に盜みをしたのとは違つて非常に長い懲役にも行かなければならぬし、酷い目にも遭はなければならぬ、斯う考へて見ると泥棒の成功主義としても、唯々自分の利益一本槍で悉く人を殺すと云ふことは實際に於て宜くないかも知らぬ、私が若し泥棒として考へるならば、縱しや捕つても餘り長い懲役に行かないやう、人殺などはしない方が宜いと思ふ、其方が賢い遣方かも知れない。斯う云ふ風に考へて見ると、我利々々的の現代主義、或は生存競爭に勝つ所の成功主義と云

ふものは、短い目で見ると如何にも成功のやうであるけれども、一層長い目で見たならばそれは眞の成功の秘訣ではないかも知れぬ。私は今日の成功主義と云ふものはどう云ふ風に說いて居るか能くは知らぬけれども、眞の成功といふことを考へて見ると自分が利益を圖ると云ふの裏面には、他人を愛すると云ふことがあつて、始めて成功するやうに考へるのである。昔から成功した人の跡を見ても、如何なる事業と雖も自分一人の力だけで成功したと云ふ者は無い、必ず其裏面には種々の人があつて、それ等の人を愛した結果が己れの成功を來すやうになつたのである。然るに今日は此愛他的の思想は段々滅じて來て、我利的思想が多くなつて來た、是れでは眞の成功は覺束ないと思ふのである。

自然主義にしてもさうである、現代思想のみに依つて行かうとするのは恰度犬が肉をのみ見て、後から魚屋が出刃庖丁を持つて追駈けて來るのを知らないやうなものである。何でも現實的の現在目の前にあるものゝみを見て其以外のものを見ないと云ふのがあるから、是れもやはり自分を主とする主義である。さうして此自然主義がもう一層自然の方へ傾いてデカタンなどと云ふやうなものが盛んに唱へられて居る。デカタンとはどんなものであるかと云ふと、是れは佛蘭西の或る墮落者の拵へた主義であつて、即ち一種の墮落主義である。此デカタンと云ふ主義が近來學生の間にも大分行はれて、唯其時の一時の快樂、其一刹那の快樂に滿足しやうとして居る。酒が飲みたいと思ふ、直ぐに酒を飲

む、さうしてそれで滿足して居るのであるが、それでは意志の自由と云ふものは無いと云つても宜いのである、若し意志の自由があるならば、自分の私慾を制することも出來なければならぬ、然るに其自分の私慾を制することが出來ないやうであつたならば、意志の自由が無いのであると言つても宜い。是れは極めて如何はしい話であるが、私窩子を買ふと云ふやうなのを主義として居る人がある、其人は酒、即ち佛蘭西のアブシンスを飮まなければどうも面白くないと云ふので、佛蘭西から態々アブシンスを取寄せて飮んだと云ふやうなことを聞いたが、是等の人の眼中には道徳も無く、社會の習慣も無く、義理人情も無く、唯々自分の心に感じたる時の快樂、其一刹那の快樂に滿足しやうとして居るのである。さうして斯う云ふ極端なる利己主義は近來學生諸子の間になか〳〵廣く擴がつて居つて、之れに反對する者は時代後れであるかの如く言はれるけれども、私は此點に就ては時代後れであることを寧ろ自慢として居る、新しい思想である、新しい主義であると言つても、私は斯かるものは非常に不愉快に思ふ、併しながら今の世の中には此主義が滔々として行はれて居る。

所で今日内務省なり文部省は此自然主義に對してなか〳〵警戒をして居る。あれも私共の考へから云ふと正當であるとは言へぬ、隨分酷に失する嫌があると思ふ。酷に失する嫌があるけれども、併し又他の一方を考へて見ると或は已むを得ないことであらう、多少出版物を取締る頭が古過ぎはするけ

れども、其古い頭をして古いのを恥とせずして權威を振はしめると云ふものは、現代思想の或る部分が餘りに自己主義に、餘りにセルフィッシュに傾き過ぎて居る爲めであると、斯う私は信じて疑はないのである。

さう云ふ譯であつて見ると世の中では成功主義と云つても、是れは本當の成功主義と云ふものでは無い、又自然主義と云つても、是れは如何なる理屈があるか知らぬけれども、所謂思想に依つて動く所の範圍に進んで來た人間でありながら、それらの前の時代に引戻して、一切思想に依らず、唯々感情に依つてのみ動くと云ふことは、是れは實に人間を退化せしめるものである。人間が利己一方になれば、是は人間の獸化である、人間が獸類の如くに化するのである。吾々は獸類の時代に於ては何等の思想も無く單に私慾といふとのみに支配されて居つたのであるけれども、人間となつて竪になつて歩くやうになつて以來は利己主義ばかりでは可かぬ、多少思想或は主義を以つて居て、人と人との間に衝突があつたならばそれを融和させる、或は人に迷惑を掛けないやうにすべきであるに、それが生存競爭の激甚であるが爲めに生存競爭に勝つ所以は、即ち自分の爲めを圖るにある如く解釋するが故に、今ではそれが却つて反對になつて、又も太古の野蠻に返さうとするのである、從つて今日の現代思想を見ると、どうも利己主義に過ぎるのである。

勿論人間は本來利己主義であつたに違ひない、併し夫では此世の中に立つて行くのに不都合であると云ふので、敎へを立つた所の人が利己主義ばかりではなく他人を愛せよと云ふ愛他主義を唱へたのである。基督であつても、孔子であつても、或は釋迦であつても、皆それを說いて、利己の心を抑へたのである。所が今日では又どうも無遠慮になつて來たのであるから、是れから後の思想はどうしても基督とか孔子とか釋迦とか云ふ數千年前の人のやつた古い仕方に依つて、やはり愛他主義を唱へて行かなければならぬと思ふ。勿論利己心と云ふものも絕對に惡いと言ふではないが、是れは敎へずとも增長するものであるから、是れは少しも主義を立て敎へるには及ばぬ。所が現代の思想と云ふものは利己と云ふことを主として居るのである、成功主義であらうが自然主義であらうが皆さうであつて、誰れに憚る所もなく總ての人が利己主義に向つて奔ると云ふ風であるからして、是れは甚だ古い〳〵仕方であるけれども、今日の世の中の思想の墮落を救ふのには、どうしても愛他主義でなければならない、是れだけは私が斷言し得るのである。（明治四四・一）

簡易生活論

昔は武士の七つ道具と云つたが、文明になればなるほど七つ道具では不足を感ずるやうになり、だんだん種々様々な物が數へ切れない程あつて、身のまはりから其家には門口から座敷の奥まで贅澤品で充たされて居る、實に文明は贅澤の極である。これ等流行を追へる文明人の贅澤は實に羨やましい程である。

出來るなら誰しもやりたいものである、けれども亦一方より是れを見れば、それだけの物がなければ出來ないと云ふやうな人はそれだけ身體が退歩して來て居る。贅澤に慣れた人はそれだけの物を持つて來なければ心が滿足しない、その數へきれない品物なしには心に不滿足を感ずると云ふのは、それだけ物質的には進んで來やうが、それだけ金が掛かつて金に促されて來る、餘り金錢が要るやうになつて來てそれが爲め、獨立自由を自主とするこの人間が、金錢のため一人の自主たるところの自由の力をまで失ふ事があらうと云ふのは、是等物質文明の缺點である、野蠻の時代にない弊である、文明の金錢に贅澤になればなるほど然り、故に文明は一方文明を進むると同時に一方缺點がある。

これ等の消息をよく描いた西洋の書に、世の中は物質的文明が進んで來て寒い時には動く事も要ら

ず、一つ栓を捻ぢれば丁度六十五度位の熱はそこに發し來て溫度を調節し、又其時の御望に任せて如何なる物でも空氣の中からそこに生じて來て實に便利の世界になると云ふ文明の極度を描いて、そして遂には人間はこれが爲めに力もなにも無い者となつてしまふ、さうすると虎や獅子の如き獸は來つて吾々の棲む世界であると云ふ具合に自由力を失つた人間を食ひ殺してしまふ事を書いてある。是は畢竟文明と云ふものが進めば進むほど、人間の身體が弱つて來ることを見明したもので、人と人との競爭はかくして出來ても獸類の競爭にはまけると云ふことになる。道具の力のみ借りると人の力がなくなる。かういふ文明を看破したる佛蘭西のチャールス・バグネと云ふ人があつて『簡易生活』シンプルライフと云ふ書を著はして人間の生活だけは混雜しないやうにと唱へ出した。これは非常に世界に歡迎せられた本で、バイブルであると賞讃された、日本にも譯せられてそれ以來、日本の社會にも此簡易生活と云ふのが唱へられたのである。これはどういふものかと云へば、物質的文明に心までも奪はれてしまふやうになると、その身體までも滿足すると云ふことは出來なくなる。と云ふのは、人は寒い時着物を着ずに居ると云ふことは出來ないが、元はこれでも何か木の葉を綴つてまとふた位であつたのが、次第に今日のやうに面倒なものを要するやうになつたのである。人間は自然に滿足しないで進歩發展しやうとするものであるが、これがために却つて其本領を失し其精神の賜たる物質文明の弱點に陷らな

いやうに、どこまでも自主の自由を失ふてはならぬ。人間が自然に滿足しないでどこまでも進み進まんとして居ることは、形而上の學問で甚だ説き難いが、兎にも角にも人間は獸類のやうにしては居れぬ、元、人間は自然界のものであつて後には靈界である。今日は過渡の時である。近頃獨逸のオイケンなど説く處などはそれである。即ち人間は獸より進化して神に向つて進んで居る。禽獸の生活に滿足することは出來ない、それよりも靈界の方に進んで行きつゝある。かういふ風に心が物質から離れて精神界の方に進んで行くのは甚だ愉快なものであるけれども、身體の方にまで生活に不必要な品がどれだけあるか知れぬ。生活に必要なる道具は用ふるけれども、必要缺くべからざるものゝ外、用ひないやうにすべきものだ。簡易生活は吾人の氣品を高め本領を發揮し向上發展してやまざる人間の人間たる處を全ふする所以である。

これに反し徒らに文明の物質的方面なる贅澤にのみ走る者は、其身體の自由を失ふのみならず人たるの大精神を失ふやうなものである。今日電車に乘らざるは馬鹿の如く思はるゝ時節に、一人闇夜提灯を點けて歩く人がある、世の贅澤者流は笑ふであらうけれど此人は啻に健康を増すのみならず、今日金の世の中に節約する、この金の爲めに墮落しつゝある世の中に、自から失はざる根本のものがその人にはある、ひどい競爭の世の中に旅しつゝある今の人は、非常なる贅澤をせなければ生存が出來ない

やうに思ふけれども決して然らず、人間の信用は金錢のために膝を屈げないところにある、簡易生活にある。世間一般を見渡すと滔々たる奢侈に陷りつゝあるこの風潮に抗して簡易生活をして行くところに本領がある、故に文明が如何に進み世の中が如何に贅澤になつても吾は必ず一生簡易生活をやると云ふ精神があれば必ずやることが出來るのである。（明治四五・六）

今の世の生活論

『今の世の生活論』といふのは是れは物質的の生活論では無く、精神的の生活論を云ふのであるから、或は之れを人生觀抔といふ樣に言ふ方が宜いかも知れぬが、併し人生觀といふ程堂々たる問題でもないから又それ程委しく述べる積りでないから、只生活論として置く。詰り精神上の生活論といふものは何の世に於ても選ぶことが無いのみならず、今の世の中に於ては、學者の力を以て或は宗教者の力を以て、或は教育家の力、或は政治家の力を以て、既に盛んに唱へられて居ることである。

今の世の中を見渡した所で出版の上から言ふと、昔の古い教訓のある出版が教育文庫と言つて取纏めて出版される、或は山鹿素行抔といふ武士道を説いた良書が出て來る、或は大石良雄であるとか、忠臣の事蹟も大變に八ヶ間敷述立られて、さうして浪花節に迄これが囃されて居る。

其他斯ういふ樣な事を擧れば數限りも無いのであるが、併し乍ら實際の今の社會に於て斯ういふ精神生活の上に或る教訓を與へ居る教訓が、どの樣に守られて居るかと考へて見ると、實に是れは悲しいことだと、誰も能く言ふことがある、此頃の世の中程人殺しの澤山ある時代はない、けれども其の精神生活を說き教へるには人を殺すといふ教へは無い、忠臣藏の敵を討つて人を殺したといふことがあるとした所が誰も人を殺せといふ教へは說いて居らぬ樣に思ふ、所が實際に於てはさういふ結果が出て來る、其の人殺しの中でどういふことがあるかと言へば、中には兄を殺すとか、親密なる友達を殺すとか、母親を殺すとかいふ者がある、實に無殘極まるものと言ふが、今人心が精神的に於て、私は餘程荒びて居りはせぬかと思ふ、或は又人間の私行の上から見ても、これは隨分古いことであるが、出齒龜といふ樣な者が出て、自分の情慾の爲めに人を殺したといふことなどもある。

成程人間は子孫を造るのが目的であらう、目的の一である事は之れを絕對に否とは思はぬが、何も出齒龜をするのが我々の目的では無い、或は又學生の情死であるとか何とかいふ、戀なら戀で宜しいが、"戀か誠に毒々しい樣な、間違つた樣な道に這入つて居る、何を見ても此の世の中が荒びて居るとしか思へない、道德的の教へ、或は倫理の教へと云ふか、人の精神を修める所のものが段々實際の上には惡くなつた、教への上では段々嚴しくなつた、全體人間といふ者は言葉を以て人を教へるのである、

此言葉といふものは、自分の心の誠を吐くもの、自白したものは、心の有の儘で、自白は誠の事と偽りの事と、言葉を分けて決して出來て居らぬものである。

自分の經驗から考へて見ても、聖人賢人の書を貪り讀む時代は、餘り自分の身が修つて居ない時代で、何か自分の身が修らぬと、修めたいと思つて讀む、本當に修つて居れば、聖人賢人の敎へを聞かぬでも宜い、今の世の中が或はそれでは無いか、二宮尊德とか楠正成とか種々樣々の偉人を慕ふのであるが其慕ふのは自分の心の中に何等かの淋しい所があり、自分が身の修らぬ事を自覺する爲めでは無いか、一方には精神の敎育を大變に鼓吹する者があり、さうして其社會の實際に於ては精神敎育が惡い結果を及ぼして居るといふ、斯ういふこと丈けは爭ふべからざる事實でそれは何故である、斯う考へて見ると私は私自身の一つの斷案を得て居る、それは卽ち、正しいとか或は正義とかいふことの意味が社會から忘れられた爲めではあるまいか、今迄西洋の中世紀以來といふものは、丸きり道德は基督敎の勢力を以て攝めたものである。宗敎卽ち道德といふ有樣であつたが、其道德の中に於て何を說いたかと言へば、正義卽ち愛、愛と言へば動もすれば之を男女の情から來る所の愛の樣に考へるが、是れは言ふ迄も無く道德上に謂ふ愛なるものは、ジャストから出る所の愛である、詰り人間の意思を以て分別して愛する所の愛であると說かれて居るが、併し基督敎の說く所の愛は必ずしもそれでば無い、

或人はそれである、或人はそれで無いと言ふが今そんなことは暫くおいて、兎に角正義といふこと、宗教といふことが、西洋では人間の頭に含れて居た、それから日本に於ては重もに儒教である、吾々の信じた所は儒教であるが、儒教でも仁なるものは正しといふ意味を帯びて居る、尙ほ仁のみでは足りないが爲めに仁義と義の字を加へてある、西洋のジヤストが正義といふことに似て居ると思ふ、ところが斯ういふものは、既に宗教の信仰の衰へると共に衰へて仕舞つた、今の人は利益といふことは痛切に感ずるけれども、正義といふものに對しては餘り冷淡すぎるのである、道路に百萬圓の金が落ちて居ると言つたら、必ず取りに行くであらうが、助けなければならない人があるから、生命を捨て助けに行つて呉れと言ふとなると、其の方は少し六ケ敷いやうに思はれる。どうも金よりは正義の方が輕くは無いが輕くされるであらうと思ふ。是れは無理は無い、元正義を說いて居る根本が覆つて居る樣な有樣である、其根本は何かと言へば基督教で言へば神である、詰り神が敎へるから斯うしろといふのは、是れは無上の命令である、其神といふ信念が無くなつて、從つて正義といふ觀念が無くなるのは是れは仕方が無い。

それから孔子の敎へでも拜天敎であると私は思ふ、卽ち一つの汎神主義であると信じて居るが、併し乍ら今の世の中には汎神主義すらも誠に輕んぜられて、滔々たる天下世の中は物質であるといふ斷

言を下す、併しこれはどうも今の學問の上から言ふと、物質といふ考へ程譯の分らぬ考へは無い、世の中の物質とは何ぞやと言へば、私は物質を見た事が無い、或は人間の身體が物質だと云ふと、之れを分析して見れば原素である、併し乍ら其原素でも説明することは出來ぬ、それで物質を說く方法は哲學とか科學とかいふものは、單に之れを物質といふに止めて其譯を説明せぬのである、之れを本當に説明しやうと思へば、どうしても物質で無い一つのエネルギー心であると言はなければ説明することが出來ぬ、どの樣な物質論でも、物質といふもので行つて、それから先は何かと言へば説けない、物質といふ所で行止るのである、それならば物質は、何故に心が説明が出來ぬか、今の物質論者も心が無いといふことを論ずることは出來ぬ、此心はどうして物質から出るか、斯う言ふけれども、併し乍ら心の中に、物質の爲めに支配されることがある。

斯ういふことは基督敎の説敎でも度々言ふたことであらうが、我々の身體は外からの感覺でそれの心が動く、泣きもする、笑ひもする、怒りもする、是れは事實である、それであるから我々が泣くとか怒るとかいふことは、是れは物質に支配されて居るといふことが分る、物質の狀態に支配されて泣きもする怒りもすることが出來る、併し我々は劇しい或る瞬間に於て、自分自ら其悲みを失つて見る事が出來る、自分自らを客觀して、我れが今泣きつゝある、我れが今悲みつゝある、我れは此樣に悲ん

では人に濟まないとか、悲みに遇ふて悲みを引起さぬ心がある、是れは物質に支配されて居らぬ、人間の心が直ちに物質の支配を受けぬ、物質萬能と言つた所が、人間自分の心を離れて物質で說くことは出來ぬ、之れを說く人があればお目に掛りたい、物質を以て心は說けない、これは議論が枝になるからこれ位なことにして置くが、所で今の正義とか正しいとかいふ樣な考へである、此考へが詰り孔子で言へば天といふことから出て居る、西洋の基督敎から言へば矢張り神といふ樣な思想から出て來る、所謂人間の正しきを踐んで怖るゝこと勿れといふことは神の命令で、其命令に從つて人間が正しくなければならぬといふ事は私は合點が行くのである、併し神を無くし孔子の天も無くして、而して純粹なる道德純粹なる精神修養として、我々は何に依て我々の心を說き得るか、斯う考へて見ると、是れは一寸難しい問題の樣であるが難しい問題でない、其實倫理の何たるを知れば直ちに說ける事である、此倫理と云ふ事も色々に說かれて居るが、最も倫理學上に勢力があつて、今もつて道德學上大なるオーソリチーの如くされて居るのは獨逸のカントである、カントの說は是れも色々のものに出て居るが、其說の中に、所謂道德といふものは善が目的であるが、本當の善といふものは何であるか、是れより上に善なるものは無いかといふ善のドン詰りは何であるかといふことに對してカントは說いていふに、『善を爲さんと欲する其心程善なるは無し』と言ふて居る、成程善をしやうといふ其心は善なる者であ

る、是れは云ふまでも無い、之を善の行ひに現はした時には、一人の行ひは萬人の手本になる、少し實際的にいふと、成程私が或る一つの仕事をした、善いか悪いか分らぬ、其の分らぬ時に當つて誰も彼も皆同じ事をしたらどうなるかといふと、同じ樣に自分のした事が殘らず人の手本になる、善人と思ふことをしたといふ事が分つて來る、唯結論の道徳論に於て最も說き難いのは人は何故に自己を愛するかといふことである、親から貰つた肉體だから、自分が自己を捨るのは構はぬといふ議論になつて來るが、今のカントの議論から言ふと、我は我を立てなければならぬ責任がある、或は妻子を養はなければならぬ、或は人に金を借りて居る、その始末をしなければならぬ義理合がある、そんなことをせずに死んで仕舞ふ、自分が死んで地獄の闇黑の中に逃込むのだから自分は宜いが、他のものはそれが爲めに困ると云ふことなどは、動かすことの出來ぬ眞理である、其上にカントの立てた中に私と意見を同じくする說で、最も重きを置いて居るのは、人間の絕對の價値である、絕對の價値とは何であるかと言へば、何物にも換へることの出來ない大事の大事の値打である、人間の自身の値打は何物にも換へることの出來ぬ大事の大事の値打である、コップは一圓二圓で買へるといふ値打であるが、人間自身の値打とする事は出來ぬ、人を品物視することは出來ぬ、我は快樂の爲めに用ひることは出來ぬといふことがあるから、是れはどうもカントの發明とは言へぬが兎も角人は絕對的の價、是れ程尊い者は無

いぞといふのが、カントの議論である。

此處で私の主義を説明したい、之れに依ると人間は非常に尊い者である、人間は鼈と同じだといふ説とは違ふ、何から比べても人間は尊い者であると立てる、是れは何故に尊いかと言へば、其の説明は一寸面倒だ、面倒だが、私は其説き明かし方を一つ申さうと思ふ、色々あらうが、其説き明かしの入口を一つ申すと、人間は進化の順序に於て一番先鋒に立つて居るといふことが言へる、詰り萬物が進化した中で一番進化したのが人間であるから一番尊い、一番進化したのと進化しないのと何故に尊さが違ふ、一番進化したのが人間だから人間は尊い、所が蟲から言ふと蟲の方が尊いと思ふから之れを以て斷定すると出來ぬといふこともある。人にして鳥に如かざる可けんやといふが、是れも間違つて居る、何ぜといふと下等動物なるものは、人間と別なもので無い、人間の下等なる單細胞生物の中の一番勉强する者が生存競爭に於ては早く人間の位地に達した、外の者は勉强が足りなかつた爲めに、生存競爭に對して勉强することが足りなかつた爲めに、人間と脊中合せの樣な不自由な所に落着して仕舞つた、不自由な所に捕はれて仕舞つたのである、斯樣な點から云へば、進化の順序から、人間が進化の先になるといふことは確かの道理と云ふけれども、是れはどうも道德の根柢として人間の尊い所以はこゝにあるといふとは出來ないと思ふ、兎に角斯う考へる人がある、モウ一つの考へは人間と

いふものは天然を支配する所の力が優つて居る、故に人間が一番尊いといふことが言へるといふのであるが、けれども是れは私は反對論があるから敢て主張しない、人がさうで無いと言へばさうで無くても宜い、ぶちまけて申せば、人間は何故に尊いかと言へば、カントが善なるものは、善を爲さんと欲するの心が一番である、尊い此者が宇宙間に於て一番尊いといふことを、其者自らが知つて居なければならぬ、第二には、其尊いといふ思想を以て尊い方に引張つて行くといふ努力がなければならぬ。

宇宙を見た所が「尊貴」の思想が生物にあるであらうか、或は事物の上に在つても、行爲の上に現れないのはだめである、何の事物でも「尊い」といふ思想を持て居る樣には思はれない、私は現に生物社會を見ても思はれない、それは痛いとか痒いとか、利害の考へを持ては居るであらうが「尊い」といふ思想も人間より外にないと思ふ「尊い」と云ふ念を持て居ないものが「尊い」筈が無い、更に一歩を進めて「尊い」といふ念に從つて努力して行く者が人間の外に何かあるかと言へば斷じて無い、して見れば人間が尊いのでなければならぬ「尊い」と言ふ考へを持て尊まんとすることは人間の外に無いのであるから、是に於て人間は尊いものであるといふことを斷言するに私は憚らぬ、誰が何と言つても確かである、此議論は壞れない、斯う言つて、扨此前に言ふた、自分の考へは、其「尊い」といふ考へとどういふ關係があるかと言ふと、正義の考へといふのは、人間が自分の身を賤しくしてはな

らぬ、單に低い物質的の刺戟に直ちに應ずること無く、尊い人間の人間たるところを辱めない様にすることである、これが私は正義であるといふのである、例へば金を儲けたいといふので色々な、いかがはしい手段をして、人に聞かれて自から赤面する様な卽ち自分の身を辱め、自分の身の尊いものを汚す様なことをするのは是れは正義でない、正義といふのは利害の外に立て、如何に利益あつても自分の身を辱かしめない様にする、自分の尊貴を失つてはならぬと斯う努めるのが正義である、それであるから隨分正義を說いた敎へといふものは日本にあるが、極近い所で見ると、渴しても盜泉の水を飮まずといふのが、正義を語つたものである、自分の生命が無くなつても泥棒をするといふ様なことはしない、それは人間の尊貴に背くといふ考へがあるから、渴しても盜泉の水を飮まずといふので、それが道德になる、昔も今の世の中の様に生活難で以て說明して仕舞つて世の中に人殺しがある、生活難である、何所其所に强盜が出た、是れも生活難の爲めである、といふ様に言つたなら、渴しても盜泉の水を飮まずといふ其言はどうして解釋が出來るか、生活難、死ぬるのが恐ろしい、盜泉の水でも何でも大に飮む、間男の水でも何でも飮む、けれども我々の人の「尊い」といふ意味から言へばさうは參らぬ、故に若しも人間が「尊い」といふ事を知つたならば、其時には正義といふ念が出て來る、若しも人間が「尊い」といふことを忘れたならば、正義といふ念は無くなつて仕舞ふ、然らば其人間

の「尊い」といふ其道德は黑岩周六の一家言で無いか、何も世間に通用しない論では無いかといふ、斯ういふ疑ひが出てくる、私はこれは世間には通用しないかも知れぬが天然の規則に於ては是れは行はれて居ることを斷言するに憚らぬ、天然の規則は何であるかと言へば、是れは生存競爭、自然淘汰の理である、生存競爭、自然淘汰といふことは、單に弱肉强食とか、生活問題とかいふ樣に云ふが社會的の動物に於てはさうでない、社會的で無い、單に人間を一つのものとして見ると、隨分自分の身體が强くなければ、其境遇に適することは出來ぬ、自分の身體が强くなければ生存競爭上亡ぼされて仕舞ふと思ふが、自分一人の事では無い、第一人間が己れの跡に子孫を殘して行くには女子と結ばなければいかぬ、昔の小說には男が孕んだといふことがある、木の股から生れたといふ事があるが、兎に角人間は木の股から生れないのであるから、人間は男として繁殖の半分を持て居る、女として繁殖の半分を持つて居る、男女結ばるのが一家を造る基礎である、是れより外に道がないといふ樣に問題を決しなければならぬ、男女結ばつて其子が鳥の子抔と違つて、一年も二年も母の乳を飮んで居なければならぬといふ種々樣々の仕事があるが、兎に角人間は社會を爲す可き動物である、而して社會を爲したといふ點に行くと、自分一己の生存競爭には、自分の身體が强くなければいかぬ、それから又社會も生存競爭をして居る、其の社會の生存競爭といふものは、社會が强くなければならぬ、社會が强くな

るには、個人自らが犠牲になる力がなければならぬ。

個人自身が強く出來たならば社會の組織に衝突が起る、壞れる、其方から見ると人が人を愛する、これは社會を强くする所以で人が自ら强くする所以で無い、自分の女房に櫛とか笄とか買てやるのは、自分はそれ丈け損失をする譯だが、自己を犠牲にして女房の機嫌をとらなければならぬ、男女自から欺く勿れといふことも社會を强くする所以である、若しも人が勝手次第に欺く社會であつたならば、天然の生存競爭の規則が其社會を亡ぼして仕舞ふ、個人はどうなるか知らぬが、社會は亡びる、中には亡びない事實もあるかもしれぬが、社會の爲め不利益である、要するに生存競爭の理法に制せられて適者生存となつて行くのである、どうしても人間は社會の爲めに自分の身を犠牲にする、それがなければならない、それがなければ社會は成立たない、さうして今の所で考へて見ると、社會の爲めに自分の身を犠牲にするといふことは、社會なり人なりに、天然に示されて居る規則に從ふのであるから、人の「尊い」所以は、其點から論結することが出來る、人以下の自意識の無い動物に於いては、天然の規則は何であるかを少しも知らぬことは無論であるから、彼等は生れ出た儘に從ひ、本能に從つて動いて居るならば、尊いといふ思想が無いのであるから、これは尊いといふことは出來ぬ、人間は尊いといふ思想があるに依つて、智慧に於ても、意識に於ても、優つて居るのであるから、天然の

理法を斟酌して、自分で努めて自分の身體の慾を貪ることが出來るけれども、天然の理法で若し慾計り貪つたならば、社會が亡びるから、人の爲めに盡さう、といふやうな氣が出て來るのである、そこに人間の尊い所がある、其社會が天然の規則に對して生存競爭に勝つことが出來るのであるから、私の申した人間の尊いといふ説は、一己の意見では無い、數萬年來以前から天然が我々に示して居る大いなる法則であるからこれは仕方が無い、誰が反對した所が理屈には勝てやうが事實には勝てない、事實はどうしても社會の爲めに身を犧牲にする、或は天然の理法を考へて、自分の自己を曲げて、其理法に從つて行くといふ尊い所のものが進化して行く、人間も定めて元は低い動物であつたのであらうが、兎も角其尊いことを知つて、尊い方に身を持て行く、渇しても盜泉の水を飮まずといふ其の正義に從ふ心があればこそ人が自分の慾を犧牲にして社會の爲めに盡し、其社會は個人と同じ樣な兩極端と言はれる位に強くなつて、さうして生存競爭に段々打勝つて向上して來たといふより外に無いのであるから、私は玆に人間の尊いといふことを認めるのである。

道德といふものは本當の天からの道德である、決して人間の拵へた道德で無い、此理を考へて見ば、人間は私は尊いものに極つて居る、又尊い正義を愛す可きものであるといふことがそこに出てくるものと考へるのである、此正義に就て尙は言へば多少言ふべき事があるが、是れはこれ丈けで略ぼ私

の意見が分つたものとして、分らなかつたら此次に出てお話しすることが出來るものとして置いて、而して今の社會を見ると、前に申した通り精神修養論の議論が到る處で囂々せられて居る、我が政府からして之れをやつて居るけれども事實に於て我が政府と言ひ、我が社會の有力者と言ひ、凡そ世の中の先に立て居る者がどの樣な主義を取て居るか、彼等は成功主義を取て居る、成功主義と言へば非常に宜い樣に聞える、成功主義の本當のものは宜いであらうが、併し乍ら彼等の行爲の上に現れて居るものは、悲しい哉成功の爲めには手段を選ばずといふ樣なことであつて、今の社會に於てはこういふことが最も有力なことは事實の樣である、某氏の如きはそれである、此人は實に成功した人である、併し手段を選ぶかと言へば手段を選ばない、成功すれば宜い、其手段が正義であらうが、正義で無からうが、其樣なことは考へない、其人の行ひの上に單なる成功心即ち正義の觀念の無い成功主義を以て此世の中に臨んで贅澤をして見せる、世の中の者が其跡を追ふて兎にも角にも成功しなければならぬ、或は成功の爲めには人を欺しても已むを得ない、人の物を盜んでも已むを得ない、盜泉の水を飮んでも已むを得ないといふのだが、そんなベラボウなことは無い、それであるから、私は今の世に精神修養の論が囂々たるに拘らず、實際の精神修養が少しも行屆いて居らぬのは此敎へを說く人も、此敎へを聞く人も、共に正義の思想が無くして、唯成功々々といふから、斯うなると思ふ、言ふ事と行

ふ事が矛盾して居る、正義の考へを離れたものはこれは惡事であるか、然らざれば善とも惡とも附かない中立のもので、善の匂ひを附けたものでは斷じて無い、善といふものは、どうしても正義の考へが含まなければならぬ、所が今の成功は目的を達すれば宜い、どの樣な手段を用ひても構はぬといふ意味の樣に說かれる、そこで今日の成功者、大いなる財産を持て居る者が、其行ひの上に正義を尊ぶ精神が無いから必然の結果として善を爲さぬことになる、是れは實に遺憾なとである、縱しや宗教は如何にあらうとも人間が物質界に於ける、或は宇宙に於ける是れも尊貴なるものであるといふとは當然の理由があるから、決して尊貴を汚してはならぬ、即ち尊貴か割出した正義を失つては、成功しても善と言はれない、此念を十分に持つて貰ひたい、これ丈けが私の議論の趣意である。（明治四四・八）

政界の人士多くは時勢の推移を知らず

維新當時の歷史を讀む每に私の常に深く感じる事は、彼の西鄕大久保木戶等を始めとして、當時の志士なる者が皇室の御信任を得るが爲めに有ゆる苦心をして居る事である、當時の人々は幕府の者も、民間の志士も、諸大名も、皆一生懸命に皇室の御信任を得やうと努め、之れを得た者は勝ち、之れを得ざる者は天下に何事をも爲す事が出來ないと思ふて居た、故に當時の人々は此一事の爲めには殆ん

ど手段を選ばず、或者は歌を奉つて宮中の御信任を得やうとし、或る者は婦人を進じて迄御信任を得やうとした、皇室と國民との間に幕府とか大名とか公卿とか云ふが如き種々なる階級の者があつた時代に於ては、天下に事を成さうとする者の之れも止むを得ない手段であつたのだが、其後世は次第に變つて立憲政治の世の中となり、所謂君民同治の政を爲すの時代となつては、皇室と國民との間には何者も中を隔てる者がなくなり、陛下の大御心の向はせ給ふ處は即ち國民の意思の向ふ處となり、國民の意思の存する處は、卽ち又陛下の大御心の存せらるゝ處となつて、陛下は常に國民大多數の者の意嚮の存する處を御察し下されて、政治の大本を定め給ふと云ふ事になつたのであるからして今日に及んでは、最早皇室の御信任を梯として他の中間階級の者を押へるの必要がなくなつた、即ち國民の輿望を負へる者は直ちに陛下の御信任を得る筈なのであるから、我は國民の爲めに眞面目に盡さんと思ふ者なりと云ふ確信があつて國民の輿望を負ふて居る者ならば亦從つて陛下の御信任は自ら其處にあるものと考へて差支ない、之れ立憲政治卽ち君民同治の政の根本義のある所と私は思ふのである。

然るに專ら皇室の御信任を得て天下に事を成さうとした維新の志士西郷大久保等の後輩である處の山本權兵衞は、今日に於ても尙ほ時勢の推移を知らず維新當時と同樣の考へをして當時西郷大久保等が執つたと同樣の態度を執り、皇室の御信任さへあれば國民の意嚮はどうでもよいと考へて居る樣で

ある、彼は曾て議會に於て盛んなる輿論の攻撃を受け、殊に議會に於て民黨の追撃急なる時に、幾度か『自分は陛下の御信任を得て居る者であるが故に國民が如何に何と云つても輕々しく進退すべきでない』と云ふて居る、彼は之れを以て皇室に忠なる所以と思ふて居るのであるか知れぬが、私の考へる處では、之れ實に皇室に對して不忠の甚だしきものである、何となれば、立憲政治の今日に於て、國民の輿論を顧みずして、尙ほ陛下の御信任を口にするは、卽ち皇室を政爭の禍中に引入れ奉るものであつて、皇室の御名を借りて自己の不德を掩はんとする者であるからである、而して之れ全く時勢の推移を知らざる無智の致す處である。

處が斯の如く時勢の推移を知らざる者は、獨り山本伯ばかりであるかと云ふに決してさうではなく、今日の政治家の大多數は皆山本伯の如き誤れる考へを持つて居るのである『私は宮中の御信用がないから到底駄目です』と云ふ樣な言葉は能く聞く事であるが、國民の輿望を負ふ者は卽ち宮中の御信用ある者なりと云ふ論から行くならば、眞に國民の爲めに盡さうと云ふ考へさへあれば、宮中の御信用がないなどと云ふ事は少しも心配する必要はないのである、自分は國民の爲めに眞面目に盡すのであるから、自ら宮中の御信用もある筈であると思ふてよいではないか。

私は今度の內閣にしても、加藤男に大命が降れば、加藤男は早速內閣を引受けて差支ないと思ふ、

若し又犬養毅氏に大命が降れば犬養毅氏が早速内閣を引受けてよいと思ふ、尾崎行雄氏に大命が降れば尾崎行雄氏は又早速引受けてよい、さうして飽迄國民の福利を計るの考へがあれば、平生宮中の御信用が薄いとか、年齢が足らぬとか云ふ樣な事は一切顧みるの必要はない、國民の輿望さへ其處にあれば、宮中の御信用も亦た從つて其處にあるのである、私は此意味に於て加藤男の内閣組織に贊成し、犬養毅氏の内閣組織に贊成し、尾崎行雄氏の内閣組織に贊成する者である、而して若しも加藤犬養尾崎の聯合を以てしても尙ほ内閣を組織する事が出來ないならば、私は大隈伯を以て三派の聯合を計り、大隈内閣を成立せしめたいと思ふ者であるが、然し打明けて云へば、私は七十餘の大隈伯を今日擔がなければならぬかと思ふと實に殘念に堪へぬのである、同志會、中正會、國民黨の三派が聯合すれば例へば六本の足がある樣なものである、其六本の足を以て立つて居る者が僅かに一本の足しか持たぬ大隈伯の助けをからねばならぬとは何たる情けない事であらうか、兎も角今後の政治は智慧と力により飽迄國民を根柢としてやつて行くべきである、何でもやつて見ると云ふ精神が大切である、私は將來我政界に事を成さうとする者が此心を以て天下に立ち、國民の福利を計り國民の輿望を負ふて事を成すと云ふ方針を執られん事を切望する者である。（大正三・五）

偉人の説

偉人と謂ふは大いなる人或は英雄とか豪傑とか云ふやうな者を指すのであるが、古來人間の社會に偉人なる者がどれ程の事を爲して居るかと考へますと實にえらいもので、極く野蠻の時代に於ては一人の偉人が大勢の人を率ひて居る社會より外は何も無い、今日の君主專制の政治も其遺風であらうと思ひますが、社會の事は何事でも一人の偉なる人に任して偉なる人の力で爲して居るのが昔からの有樣であつて、社會學の上から云ふと宗教でも偉人から起つて居る、死んだ人を追慕する――誠にあの人は惜しい人であつた、えらい人であつたと追慕したり崇拜したりするのが宗教になりますし、或は又音樂の如きも其追慕の意を表するために謳つたのが其濫觴であると云ふやうな議論も出て居ります、今日に至ても吾々の最も心に感ずる事の一つは偉人を崇拜するとである、或は芝居を觀るも何で見るかと云ふと、必しも演劇の所作が面白いと云ふではなく、芝居には實際に無い偉人を描くと云ふことがあるが、或は團十郎が加藤清正になつたり或は景清になつたり、吾々の幾分か崇拜に値する人物を假にも見ることが出來るからである、或は新聞を讀むも何で讀むかと云ふと、種々樣々の原因がありますけれども、其中の大なる一事は新聞の上に吾々よりも偉なる人の行ひが出て居るといふやうなこ

とがヤハリ一の樂みである、さう云ふ所から言ひましても、偉人を崇拜する或は偉人を慕ふと云ふことは、どうしても人間の頭に退かないことである、殊に此頃は隨分我國としても或は社會としてもなかなか心配の事がありますので、若し其樣な偉人があるものならば、早く現はれて來て、社會を救ふて貰ひたい、政治を濟ふて貰ひたいと云ふ思想は誰にも有るものである、或は敎育社會を見ても、敎育の振はないのは敎育社會に人物が無いのである、宗敎社會を見ても宗敎の振はないのは宗敎社會に人物が無いのである、實業社會も人物が無いから振はぬと云ふことは私共度々聞いて居りますが、私が考へますには、さう云ふ偉なる人——唯一人で以て社會を動かすとか宗敎を改革するとか云ふ偉なる人はどこから出て來るかと云ふことは一の疑問であります。

偉人を崇拜する近世の最も大いなる議論は彼のカーライル、それからエマルソンであると云ふことは皆さんも御存知であるが、これ等の說によると殆んど偉人の力のみで社會は經營して行くかと云ふやうに思はれるのである、恰度偉人と云ふものが通常の平々凡々なる人間の中にドエラク突出て現はれて、そして此が大變な働きを爲す、斯う云ふやうな具合に思はれますが、若し斯う云ふやうな事を眞理と致しますと云ふと、誠に世の中は悲しいものである、吾々は偉人でない普通の凡人である、どうか偉人が天降つて欲しいと考へました所が、其偉人がどこから出るか分りませぬので、恰度富籤の

やうなもので好い時にはどのやうな偉人が現はれるかも知れないが、さもなければ出て來ないかも知れない、出て來ない場合にはどうすれば宜いかと云ふと、現はれるまで待つて居るより仕方がない、このやうなものでありますれば偉人は頗み少いものである、恰度天から天降るやうなものであるからして、天氣の變天平な時が偉人の出て來る時とすれば、天氣ばかりは吾々の力で如何ともすることが出來ないから、斯う云ふ天氣では偉人が降らないと云ふ時には、吾々がどのやうに考へても偉人の出て來やうがない。

けれども、是れも社會學の上から申しますと、偉人の現はれるは決して其樣な天から天降るやうな譯のものでない、吾々は今までは偉人が社會を造るものだと云ふやうに敎へられて居りましたが、今の社會學の敎へる所は、偉人が社會を造るのでない、社會が偉人を造るのである、斯樣に說いてある、斯う言ふと大變に希望が出て來る、若し社會が偉人を製造することが出來るならば、それは天氣の良否にも關係がないから、吾々社會を成して居る人が自ら進んで偉人を造れば宜いぢやないか、手を拱いて天降るのを待つて居るに及ばない。斯う言ひますと、偉人が社會を造るのであると云ふことが一の議論、社會が偉人を造るのであると云ふことが一の議論、本當を言ふとどちらが良いか、果して社會が偉人に動かされるものか、或に偉人が社會の一般の形勢から生出されるものか、どちらが本當かと

考へますと、これは昔から言ふ通り、すべて眞理は二つの極端の中間にあるので、私は兩方とも眞理であると考へます。

先づ偉人が社會を造ると云ふ方の議論は、今までの歴史に於て私が初め申した通り、昔の社會は殆んど一人の偉人に率ひられて居たと云ふ事實に於て解るが、社會が偉人を造ると云ふことはどうして解るかと云ふと、これは人間の知識の進歩を考へると能く解る、人間の知識は決して突飛に進むものでない、今の學校制度に於ても一番最初にイロハから段々學問が　むやうに、小さい所から次第に智慧が進んで行くのである、或はニユートンが引力の大いなる說を出したと云ひますけれども、此說が果して天から天降つたやうに不意に出たものかと云ふとさうでない、知識の進んだ程度を見ると、あの時までに天文學も數學も進んで、引力說で大いなる宇宙を解明かす者の出て來るやうに社會が進んで居る、其社會がニユートンを生出したのである、或は進化論を見ても、ダルウヰンが進化論を發明してえらいと云ひますが、決してダルウヰンは天から天降つた譯でない、そして進化論はさう新しい說ではない、ダルウヰンより三十年も前に佛蘭西のラマークが、人間の身體は使へば使ふ處が發達する、懶ければ其部分が萎びてしまふ、其發達したるものが子に遺傳するので、それで總ての動物が進化して行くと云ふことを盛んに唱へて居つた、そのラマークの前を考へますと有名なる解剖學者のキウビエ、

此はラマークと反對の議論であるが、非常に動物のことをよく調べてあるので、それが材料となつて其上にラマークの說が立ち、其次にダルウヰンの父のエラスマス・ダルウヰンがヤハリ進化論を唱へて居る、さう云ふやうな下地が出來て居て、どうしてもダルウヰンの議論の出て來るやうに社會の一般の知識が釀されて來て居た、それであるからダルウヰンが進化論を著した時に丁度一緒に進化論を著した人がある、其は今でも生きて居るワルレース博士である、此人はマルサスの人口論を讀んで人口は殖へるから其の皆が生存するとは出來ない、弱者は死ぬと云ふ考へを出した、ダルウヰンも矢張マルサスの人口論を讀んで其通りの意見を出した、それでワルレースはダルウヰンが進化論を書いたことを聞いて自分の書いて居つた原稿をダルウヰンに送つてやつた。それはダルウヰンの進化論の初めにも出て居るから判つて居りますが、斯様な具合であつて若し其時にダルウヰンが出て進化論を唱へなかつたならば、他の人が其進化論を唱へる所である、或はダルウヰン自ら進化論を唱へたはスペンサーが師匠であると言つて居る、と云ふやうに社會の有様が自ら其議論を出すやうになつて居つた、斯う考へると偉人であつても或は大なる發明であつても社會が造らないものはない、矢張社會總體の形勢がそれを蒸出すのである、恰度湯が沸いて來れば自ら湯氣が立つやうに、社會の熱度が或程度まで行くと、偉人と云ふ湯氣も立ち、大いなる學說の湯氣もそこから立つて來る、之れを考へると偉人が社會を造るのか社會

が偉人を造るのか、といふ問題は能く解る、例へて申しますと天文學と數學と非常に進んだが爲めに引力說が出た、引力說の出たが爲めにまた天文學も理學もズット進んだ、互に相持である、社會が偉人を生み出す、其生出された偉人がまた社會を引立て、其社會がまた前よりもえらい偉人を生み出すといふやうに、段々偉人と社會が程度を以て上つて參りますから、古の時代と今の時代を較べると此必然の結果として吾々は古人よりは餘程の偉人である、智慧を以て較べても今の小學校の生徒の方が昔の學者よりも或點に於ては或は餘計の事を知つて居るかも知れない、それであるから眞理は兩方の中間に在る、社會が偉人を造ると云ふのも、偉人が社會を造ると云ふのも、兩方とも半分の理屈である、社會によつて偉人が造られ、偉人によつて社會が造られ、双方相俟つて互に助けて行くと云ふことが、これが眞理に違ひない、斯樣に私は信じて居ります。

尙之れを最も近い例で考へますと、私は此頃流行物の如くになつて居る廣瀨中佐の事などは、誠に能く此事を說明かすかのやうに考へます、私は廣瀨中佐の葬式に途中で逢つたのですが、道路の兩側の人は皆な涙を溢して啜泣をして居る有樣に大變な感動を與へた、是れが卽ち英雄が社會を動かすと云ふことを說明するに足ると考へます、廣瀨中佐が英雄としてどれ程の地位であるか、それは私は敢て申しませんけれども、又楠正成ほどの人が、それよりも上であるか、下であるか、左樣なことは勿論

私共には分りませんけれども、兎に角今の社會に於て隨分大いなる感動を與へたと云ふことだけは事實であります、此い感動を與へたと云ふ所から見ますと、中佐が『七たび人間に生れて』と云ふやうなことを言つたのも、是れも隨分無理のない事である、何故なれば一人の廣瀨中佐と云へる大いなる人の立派な行ひのために社會が大變に動かされたとすれば、其動いた方は何方に動いたかと云ふと中佐を欣慕する方に動いて居りますから、此精神が傳はり傳つて中佐に似た人が生れて來る原因にならんとも限らぬ、其樣な人が生れぬとした所が社會一般の人氣がイクラヵ中佐の精神に近づくと云ふ動機になるのでありますから、それを見ると一人の精神が隨分社會を動かして居る、斯う云ふ證據になるのであります。

けれども、之れをまた一方から見ると、廣瀨中佐なる者が社會を動かすばかりでない、社會が廣瀨中佐を造つて行くのだと云ふことも言へるのであります、それは廣瀨中佐の思想の『七たび人間に生れて』と云ふことが既に廣瀨中佐の造つた意見ではない、楠正成の時に言つた語であつて日本外史にも『七生人間以殺國賊』と云ふ語があり、又中佐自らが餘程楠正成に私淑　た居た――欣慕して居たと云ふ事實も見らるゝのであります、是れから申しますと中佐の中佐たる所以のものは、餘程前の時代の思想から造られて居る、尙ほ一層明かなのは兎に角中佐は武士道の子である、武士道といふ一の

大いなる思想が日本にあるが爲めに、其思想があの人を生み出したのであります、若し日本に武士道といふ思想も無く、又歷史の上に『七生人間云々』といふ大變に人を感動せしむる事實がなかつたならば、或は廣瀨中佐も今の廣瀨中佐とは異つて居たかも知れない、斯う考へるとヤハリ中佐が社會を造るのみならず社會も中佐を造るのであります。

それですから英雄が社會を造ると云ふのも事實である、社會が英雄を造ると云ふのも事實であつて、兩者が互に助合つて進んで行く、是れだけのことは爭ふべからざる事で、即ち眞理は兩者の中間に在る、或は釋迦の生れたのを見ても、或は基督の生れたのを見ても少しも此理に反かない、釋迦が印度に生れたは當然である、印度の社會には種々なる哲學があつて、釋迦のやうな人が出なければならない有樣になつて居つた、又基督の生れた時を見ても彼の猶太國は古から宗敎思想が多くあつて、早く救主が天降れば好いと云ふやうな考へが人の心に充ちて居つて、基督の如き者が出なければならない有樣になつて居つた、是れは事實である、若し基督の如き人が宗敎思想なき砂漠の如き日本に生れたならば天から天降つたかとも思ひますが、猶太國に生れた所を見ると天から降つたのでなく、猶太國の事情が彼を生み出すやうになつて居たので、決して前から思想の準備の出來て居ない處にさう云ふ人間の生れて來るものでない、大思想家は大思想の出來べき準備のある處に生れる、是れは十分に種

種の事實を以て證明することの出來る事であります。

之れを果して事實として見ると此事實から推して吾々は合點しなければならない事がある、それは何かと云ふと、其樣に社會の準備が大いなる人間を生み出すものであれば、其準備の調つた同じ社會に住んで居る人は、大抵其偉なる人と似寄つた人ではないかと云ふことが一の推理であらうと考へます、廣瀨中佐の如き偉なる武人を生み出す社會でありますれば、中佐ばかりが決して偉なる人ではない、中佐に似寄つた人は澤山になければならぬ、何故ならば同じ境遇、同じ思想、同じ社會から生み出される人でありますから、多少の優劣はあるが其れに似寄つた人が澤山なければならぬ、また實際に有つたのである、彼の旅順港口を閉塞した幾百の決死の士は皆な小さい廣瀨中佐ではあるまいか、多少の優劣はありませうが、其精神に於て大いなる相違はないのである、日本人と露西亞人と違ふやうなそんな相違はない、大抵似たものである、たゞ境遇が違ふから多少の相違はあります、之れを陸軍の方面に見ても廣瀨中佐に似寄つた人は澤山有る、何も軍人にのみ例を引くに及ばない、更に平和なる社會にても斯る偉人になれる人が揃つて居ると思ひます、今の社會は廣瀨中佐を生み出すだけに出來て居る社會でありますから、其處に生れる者はイクラか偉人となるべき傾向か、意志か、何か知れませんが、偉人となるべき黴菌を持つて居る、非常なる善い力を持つて居る、これは疑ひない。

又一方から考へますと、若し今の社會が昔の武士道の遺風とか何とか云ふものがなくして、全く種類の異つた社會であつたならば、果して英雄が現はれたであらうか、又生れ得たとした所が英雄たる働きを爲し得たであらうかと考へなければならぬ、例へて申しますと、日本の氣風の如きは卑怯未練といふやうな事は、非常に人が耻とする所であつて、ツマリ社會の人氣が多少武士道的になつて居りますが、若し此心がなかつたならば、中佐に限らない外征に出て居る小さい中佐達が、果して大いなる張合を以て戰ふことが出來るか、果して大いなる仕事を爲すことが出來るか、何も人間は一事毎に社會の評判を顧み社會の人心を顧みて爲す譯ではありませんが、社會の人心が自ら或は奮發させる或は墮落せしむると云ふことは實にえらいものである、例へば演壇に立つて演説して居ても、自分の心と諸君の心と通じ合つて居ると思ふと演説が出來る、併し若し自分の心と諸君の心とが通じ合つて居る所がなければ、演説をしやうとても出來たものでなく、聽かうとて聽けるものでない、打てば響くで互に救合ひ助合つて行くに極つたものであつて、若しも或人が此社會に於てどのやうな善事をしたとて、それを味つて呉れることが出來ない社會であると思つたならば善事をする張合もなくなるであらう、或は又此國は墮落して居て己れの生命を抛つた所が到底助かる國でない、斯う云ふことになつたならば、戰爭する心も起つて來ない、自分の家を治めるにしても、斯う借金があつては如何に自分が奮發

しても潰れるに極つて居るといふ家ならば奮發する力が少なくなる、さう云ふやうな譯でありますから社會の人氣なるものは常に偉人の行ひを助けて行つて、決して偉人が自分のみの力を以て事を爲すのでない、不知不識に後ろから社會の力に押されて社會から蒸されて出來て行くのであります、之れを考へると吾々自ら思はなければならぬ、吾々は偉人であるかないか、それは知らないけれども、兎に角偉人を造り出す一の原因であると云ふことは心得て居なければならぬ、人は各自異つて右に行く者、左に行く者、平和の實業に從事する者、文學に從事する者、種々樣々有りますが、兎に角是等の人々が心に偉大なるものを懷いて居れば、其偉大なる心から偉大なる人を生み出すのでありますから、詰り社會が偉なる人を造る其責任は誰に在るかと云ふとヤハリ吾々に在るのである。

其點からもう一つ考へますと、實に吾々は其任の重いことを感じなければならぬ、或點から申しますれば吾々自身がヤハリ偉人たるべき性質を持つて此世に立つて居るものである、それを思ふと自分の身はなか〳〵容易ならぬものであると云ふことを考へなければならぬ、何も社會に大いなる事を爲すのは偉人がするばかりでない、偉人でない吾々でもするのである、吾々と偉人とはさう異つたものではない、大抵偉人と吾々は兄弟である、親類である、似寄つた友達であると云ふ位の考へはなければならぬ。

それで偉人と偉人でない人との區別を考へて見ますと、成程事を成遂げた曉から申しますれば違ふやうに思ひますけれども、其根本に於てさう違つて居るものでない、名高い言葉でありますが、セクスピヤの言に『人は生れながらにして大なるものもある』――成程あるに違ひない、小供の時に見ても非常の健康の者があり、不健康の者があり、朝から晩まで泣いて居るのがあり、なか／＼泣かないものがあり、種々様々でありますから、生れながら大なる者もあるに違ひない『大いなる事を企る人もある』――是れもあるに違ひない、必ずしも偉人が大いなる事を企るのみでない、小さい人でも大いなる事を企つて偉人となるのもある、次に『大いなる事を押冠せらるゝ人もある』「Thrust upon Them.」とあるが、境遇が其人に大いなる事を冠せて忌々ながら偉なる人となる者があると云ふ意味のやうに考へる、これは多少の缺點がありませうが、よく穿つてる言である、此三つに大した相違はない、偉人でなくても大いなる事を企る人は偉なる所があるに違ひない、押冠さつて來さへすれば大きくなると云ふも其根本があるからで大した違ひでない、ヤハリ偉人の天才を持つて居る、自分で拵へるか、不意に途中で拾つて拵へるの違ひはあるが、兎に角大いなる天才を以て繰廻はして行く力が其人のどこかに籠つて居なければタヾ大きくなるものでない、若し小さい人であれば大いなる事を冠せられゝば呼吸が止つて死んでしまふ、さう云ふやうな譯でありますから私は其點に於て人間は皆な偉人であ

る、吾々は偉人である、諸君は『我即偉人』此考へがなければならぬ、斯様に考へて居ります。

で、私はチヨツト偉人になる秘傳を一つ申して置かうと思ふ、兎に角吾々は偉人の種であるから偉人になれるに違ひありませんが、偉人になるには少し心懸が要る、此心懸は大きなものかと云ふとさうでない、偉人になるには先づ極く小さい人になれと云ふのが私の論である、何故なれば大なる數は一から來るのであつて、人間がダシヌケに偉人にならうと思ふは間違である、先づ小人となつて然る後にやり上げなければならぬ、恰度高處に昇るに段々と石段を上るやうなもので、一足飛びに上れる者でない、上らうとすれば怪我をする、極く小人は何かと云ふと、小人の最も好い雛形は餘り野心などなくして自分の今の身に在る所の義務をキチヤウメンにやつて行く、これが小人の雛形であるやうに考へます、偉人の雛形は何でも大いなる事に目を着けて行くにあつて、誰にても『汝志を大にせよ』と云ひますが、私はそれだけで偉人が出來ると思はない、小事を極めて綿密にするの癖が付き自分の性格が出來ますれば、卽ち本當の性格の出來た曉には大いなことを押冠せられても夫れが爲めに窒息しない、又大いなる事を企てることも出來る、『小事を積んで大事をなす』と云ふ言が一の格言である以上は、偉人となるには先づ小人とならなければならぬ、小さい綿密なる人とならなければならぬ、『身をすてゝこそ浮む瀨もあれ』と云ふが、上へ昇るには一旦沈まなければならぬ、或ひは『鷙鳥の搏たん

とするや先づ其翼を收む」、たいに飛ばうと思へば先づ小さくなつて身の順序を立てなければならぬ、吾々は確かに偉人たる性質を備へて居るのであつて、之れを發達するには先づ小さい所から自分の癖、自分の性格を造つて行かなければならぬ、之れをすれば必ず滿堂の諸君は皆な偉人になる、是れだけ保證して置きます。

戀愛神聖の疑問

戀愛と申しますのは、男女間の愛であることは言ふまでもないことでありますが、此演壇に於ても今まで幾たびか戀愛論が出たやうに私は信じて居ります、其の中で私の記憶して居りますのは、堺枯川君「free love」—といふ説を此處でお説きになつたやうに思ひます、それに對して廣井君から批評があつたやうに聞いて居ります、此の御兩君の説は私は不幸にして聞くことが出來なかつたのでありますから、或は私の説が其中の一つと重複し、或は其の中の一つと衝突するやうなことがあるかも知れませぬが、併し私の説は此演壇から、述べられたる今迄の説に對する駁撃でもなし賛成論でもなし、たゞ私だけの見る所でありますから、重複或は衝突などの所は諸君に於て是れはどちらが道理だとか云ふことを御判斷下されば宜しい。

今の時勢に於て戀愛などを說くのは實に迂濶の事のやうに考へられます、戰爭の最中で人が命のヤリトリをして居るのに、其留守に於て戀愛などを說くは誠に問題のやうでありますが、私は社會の今の實際の有樣を見て戀愛を說くは決して閑問題でない、旅順を攻擊すると殆んど同じ位に緊要の事と考へて居ります、先づ世の中の有樣を見ますと小說などと云ふやうな物が澤山にありますが、其は何を說いて居るかと云ふと悉く戀愛を說いてある、男女の間に關する所の戀愛、それに從つて起る煩悶とか快樂とか、種々樣々の事を說いてあります、或は新體詩などを見てもさうである、又一方には戀愛の神聖とか自由結婚とかいふことに付て可否の言をなすのでありますが、それよりまた更に甚しきになりますと男女の若い學生達の間に戀愛論でなく戀愛の實行などが有り過ぎるやうに考へます、尤も今までの我日本の風習に致しますと、戀愛を口に說くことはしなかつた、人の前で說けば直に斥けられた、それですらも實際の方面にいろ〳〵の事があつたのであります、所が今はその人の前で語らない戀愛が神聖などと云ふ看板を出して、其楯の背後で公然と戀愛が說かれるは奇妙な風であらうと考へます。

最初に戀愛といふことがどう云ふ理由で神聖と云はれるかといふことを少し考へて見たい、戀愛と云ひますのは英語で云へば love でありますが、love といふことは宗教家から申しましても或は道德

家から申しましても大變に褒められることであつて、或は基督教の謂ふ『神の love』といふやうなことは殆んど基督教の新約聖書の精神になつて居るかのやうにも見受けられます、道徳の方から申しましても儒教で云へば『博愛之謂仁』などとあつて、ヤハリ愛といふことが大變なものになつて居る、佛教で申しましても其通りでございませうが、此の愛即ち love といふ字が戀愛の愛の字でありますが爲めに、一つは此樣な所から戀愛は神聖であるといふやうなことになつて來たかと考へるのであります、併しどうも神の愛……神がわれ〳〵を愛して下さる愛、われ〳〵が神に對して捧げる愛と、若い男女が相見て言葉を交せる其戀愛とは少し違ひがあらうかと考へます、これが多分戀愛の神聖といふことが出て來た一の原因と思ひますから述べて置きます。

次に戀愛を神聖とする口實は何であるかと申しますと、(私は多少いろ〳〵の人の書いた物を調べたのでありますが)戀愛の神聖なる所以のものは、戀愛は他の法律では出來ない程の Sacrifice をする犧牲をするといふことであります、戀愛の爲めには辛いことも堪へる、自分の欲しい物も堪へる、そして之れを自分の愛する人に捧げる、小說の上に見ましても詩などの上に見ましても、戀愛の美を說いてある一つは必ず Sacrifice である、自分の身をつめて愛する人のために――甚しきになると命まで捧げる、命を人間が捧げるやうになれば是れより大いなる捧げ物はありませぬから、若し戀愛のた

めに自分より他の人に命をやると云ふそれ程強い犧牲の心が起れば成程戀愛は神聖であるやうに思はれます、これが戀愛を神聖とする一の理由であります。

次の理由は戀愛は貞操の因て起るものである Constant の原である、或は貞女兩夫に見えずなど云ふは此の貞操の現はれであると云ふことでありますが、是れも強い議論でありましてミルなどの書にも出て居ります、其說き方は斯樣に說いてあつたやうに思ひます。男女の Love は積極と消極と兩方にはたらく、一方には嫉妬といふものがあつて自分が其人を愛するならば、其人が自分に反くことを非常に拒絕する、一方には自分が其人を愛するならば、自分自らが其人より離れることを非常に拒絕する、自分が其人に離れることを拒絕するのが貞操だと云ふのであつたやうに覺えますが、兎に角戀愛から貞操が出る、それ故に戀愛は神聖であるといふことも一の議論。

もう一つは戀愛神聖論の一番強い點である、それは何かと云ふと英語の Forgive……他の罪をゆるすと云ふことであります、成程戀愛は非常に Forgiveness のものである、日本では「痘痕も靨に見える」といふ言葉がありますが、是れは極く俗な所で Forgive を現はして居ると思ひます、自分が其人を愛するならば、どのやうな缺點を見ても見のがしてゆるしてやる、どのやうな惡事があつても其惡事を戀愛のために恕してやる、これは實に神樣の如き性質ではないか、神は人間に向つて人間を責める

より憐む、即ち人間の罪をゆるすといふことは人間以上の神の如き性質である、そして人間の心の中に此 Forgive が備つて居るのは單に戀愛ばかりである、此點から見ても戀愛は神聖ならずして何ぞやといふ議論が出來ますので、つまり戀愛神聖論には三つ根據があるやうに考へます。一は戀愛は Sacrifice をするのである、一は Constant の原である、一は他の罪をゆるす誠に慈悲のものである、殆んど神樣の如き性質を有つたものである、併しながら是れも見やうによつて此三つが其樣に有難いものではない。

第一に犧牲といふことを考へて見ますに、戀愛といふものは果してそれ程自分の利益を犧牲にし、自分の命を犧牲にするものかと申しますと、成程事實の上に於て其樣な事が澤山有りますが、併し誰が考へても一番解り易いのは戀愛は一の私情である自分の爲めの慾であるといふことは誰も爭ふことは出來まい、前に申しました嫉妬が戀愛に在るといふことは、戀愛は慾心であると云ふ大いなる證據である、私が或一人の女を愛すると致しますれば其の愛する心は何であるかと云ふと、其女を自分の物にして他人にはやらないといふ即ち慾心である、確かに慾心である、それから犧牲をすると云ひますけれども、其實戀愛ほど犧牲を嫌ふものはない、若し眞に犧牲の精神でありますれば、戀愛は一番先きに何を犧牲にしなければならぬかと云ふと、場合によつては戀愛其ものを犧牲にしなければならぬ、

けれども戀愛は他の總ての物を犧牲には致しますが、戀愛其ものを犧牲にすることはない、一人の男が一人の女を愛するに當つて、汝は其愛を犧牲にして愛を消してしまへと云へば、奮然として反抗して其爲めに血の雨を降らすこともある、戀愛は或點に於ては犧牲をしますが、併しながら戀愛其ものを犧牲にはしない、戀愛其ものを犧牲にしなければ、眞の犧牲の要を得て居るものとは云ふことが出來ない。

第二に戀愛は左樣に貞操に一旦定まつたならば變じないものであるかと申しますに、これは私が深く言ふまでもない、戀愛に關する歌であるとか詩であるとか云ふものに、其半分は戀愛の定らない恨みを敍べたものである、一人の男と一人の女が戀愛を有つて居るのに、何時の間にか男の心が變はる或は女の心が變はる、さう云ふ恨を敍べたものが多いのでありますから、戀愛が左程 Constant な一定不變のものとは申されぬ、諸君は自ら考へても分りませうが、何物に對する愛であつても、一の品物を愛する心でも何時までも其品物が愛らしいといふことはない、必ず倦きるといふことがあるのであります、戀愛は左樣に Constant のものでない。

第三に戀愛は罪をゆるすものであると云ふ、是れも事實の上に現はれて居りますが、また考へて見なければならぬ、世の中には恕すべきものと、恕すべからざるものとあることは無論のことでありま

す、戀愛は左樣な差別がないのである、自分の愛する人の落度なれば他には恕せない落度……其落度が恕すべからざるの性質のものであつても恕すのでありますから、これは盲目滅法界にゆるすものであつて、此は恕すべし此は恕すべからず、此は斯樣な理由があると、一に判斷を加へた據處のあるゆるし方ではない極く依怙贔負の甚しいものであつて、自分が愛するからゆるすと云ふだけのことでありますれば、其ゆるすと云ふことを大してえらいものとしませぬ、兎に角戀愛が一の情であつて見ます以上は、人間の情は戀愛のみでない、總ての情が此通り盲目のものである、是非判斷とかいふやうなとを一に見究める邊のあるものでない、何だか戀愛といふ情のみが中の一の特別のものゝやうに聞えますがさうでない、總ての情が皆我儘極つたものであつて、人間が自分の行ひを定めるに情によつて定めることは出來べきものでない、戀愛の人から申しますと戀愛は誠に特別のやうでありますが、私はどの心を考へても皆戀愛と同じやうに思ひます、或は極く異つた金錢の慾などの其烈しいことになりますと隨分戀愛の慾と違はない、金のために命のとりやりもする場合がある、或ひは又知識を得たいと云ふ慾でありましても實に其の慾が嵩じて來ると、殆んど寢食を忘れるやうなことが度々あるので、凡て人間の情は其情を遂することが出來なければ、益々積み重つて強くなつて來るといふとは總ての情が皆然りであります、例へば流れる水を堰止めるやうに知識の慾も自分が此事を究めたいと思

つて居るに、究めることが出來ないといふ不自由が出來れば、益々其情が昂進する場合がある、戀愛なるものも此者と此者と添はれないといふ不自由があると、益々昂進するには少しも怪しむに足りない、昔ニユートンが或數學の問題を解くがために徹夜して考へて、殆んど自分の精力が盡きてしまつて眠つた、そして目を覺して見た所が卓子の前に數學の解式が書けてあつた、誰が書いたかと考へると自分が疲れて眠つて居ながらも、其心があるがために寢惚けて起きて解式を書いた、つまり夢の裡に解式を得たので遽て、紙に書いて復た眠つたのである、此れなどは烈しさに於て戀の心と異ふかと云ふと異ひはないと思ひます、夢寐に入るの強い望みなれば、戀と異つたものとは言へない、或は又方面の異つた政治家の野心などを考へても、政治家の野心でもやはり其慾が達しない場合には隨分人を殺すやうなえらい事をする、其樣なことがなくても現に斯う云ふ事がある、或人が數年前に選擧を爭つた、そして其人は確かに自分が勝つて居ると思つて居たに、開票の結果僅に十幾票の些少の差で自分が負になつた、其時其人は氣絕したのでありますが、私は現に其人の氣絕したのを介抱した人を知つて居る、是から考へますと政治家の野心すらも、動もすれば戀情ほどに強いことがありますので、斯樣な事から戀愛を神聖だといふことが言はるれば、私は政治家の野心すら神聖であると言はれると思ひます、世の中に野心ぐらゐわれ〳〵に嗤はれる心はないのでありますが、其すらもさう云ふやうになる。

それならば人間の心の中に何か神聖なるものがあるかと斯う尋ねますと、私は人間の心の中に若し神聖なるものがありとすれば、例へば自分に善惡を考へる良心であるとか、或は物の道理を考へる道理心であるとか、斯ういふものこそ或は神聖かも知れませぬ、此心がなければ人間は殆んど善惡の境界を判することが出來ない、或は利害の輕重を知ることが出來ないのでありますから、此ならば或は神聖かも知れませぬが、理性でもなし良心でもなし知識でもない所の一の情なるものが、何故に神聖と云はれやうか、私はどうしても是は神聖であると云ふことは出來ない、斯樣な斷案でございます。

所が此頃私は何處かの新聞で見たやうに思ひますが、斯う云ふ戀愛神聖說がありました、それは人は男といふだけでは半人前であつて子を生むことが出來ない、男が成熟の期に達すれば女が戀しくなる、其心が即ち愛であるので、愛は人間が半人前の所から一人前の者になる階梯である、是れは神聖ではないかと、斯う云ふとが書いてありました、私も自分の著しました『天人論』に殆んどそれに似た議論が書いてありますが、其と此とは少し違ひますので、斯樣なことを以て戀愛を神聖と致しますならば、此よりもモット神聖なるものがわれ〳〵の身體には幾らもある、例へば私が此樣に喋舌つて居る間にも腹が空いて來るのであります、之れを堪へれば私は死んでしまふ、これは堪へられぬ、さうすると胃の腑の食慾(appetite)は實に神聖であるかも知れぬ、是れが神聖のものであると云ふことは

餘り無差別の話であります。

若し戀愛といふものをば左様に貴いものとして、若し男女の間に戀愛の情が起つたならば、其情は絕つことが出來ない、これはどうしても夫婦にしなければならぬ、究り自由結婚の主義でありますが、左様なことになつたならば、私は隨分世の中に不都合の事があるだらうと思ひます、なぜと云へば或男子或は或婦人といふものが、決して一人の相手から愛されるに限らない、一人の男であつて多くの婦人から愛される人もあるのであらう、又一人の婦人であつて多くの男子の戀愛を得る人もあるでありませう、斯様な場合に於てどの愛が神聖であるかこれは分りませぬが、若し其中に在るを此者神聖と認めて其と一緒になるとすれば、其餘の者は皆絕望に了つて、其絕望たるや實に神聖を害した絕望でありますから、殆んど犯罪の如くにも見做さなければならぬ、さうすると實に不都合である、兎角戀愛は盲目であるが爲めにどのやうな處へ逸れで行くかも知れない、隨分日本でも『戀に上下のへだてなし』といふやうな亂暴な言葉がありますが、是れは愛が全く盲目であるといふとを、評して居るのでであります、此盲目なるものが悉く人口に平均して此と此と結ばるといふやうに具合好く行くものならば宜いのでありますが決してさうは行かぬ、度々間違つた結り方がありますから間違つた結り方は結び直すといふ道がなければ世の中は危險でならない。

次に戀愛の神聖にして犯すべからざるものでないと云ふことは是れで分る、戀愛は豫め制することが出來る、豫め制することを忘れて、戀愛の心が燃えた其後に於ても之れを取消すことの出來ないものでないと云ふことを一言申したい、何故に豫め制することの出來るものであるかと云ふと、昔から兄と妹、弟と姉といふ同胞間には隨分强い情愛がありますけれども、此愛情たるや單に同胞の愛であつて決して戀愛となることはない、何故に戀愛とならないと云ひますと、今の社會に棲んで居る人間は同胞の間に戀愛が成立つてならない位のことは口に出さずとも、殆んど自然天然に心得て居るのである。それであるから戀愛が成り立たない、之れを考へますと他人の間に於てもであります、どうも戀愛は神聖でない、動もすれば間違つた盲目の惡い事をするものであると云ふことがあれば、前以て之れを防ぐことが出來る、戀愛は盲目でありますから前以て之れを防がない以上は、どのやうな事をするかも知れませぬ、兎に角之れを前以て用心して制することが出來れば、戀愛に神聖の位地を與へて殆んど犯すべからざるものとするには及ばない、それから英吉利であるとか亞米利加であるとか云ふ、所謂自由結婚の國に行きますと、失戀者が澤山に出來るのであります、男の失戀者の方を申しますと一人の立派なる淑女がありますと此に向つて雲霞の如く Sweeter が攻寄せる、其中の一人しか及第しませぬから餘の者は落第して失戀者になりますが、其失戀者が果して神聖なる love が害されたので

生涯己の身は不神聖になつたと云ふやうな絶望に陷るかと云ふとさうでない、直に斷念めて今度は隣家へ行つて神聖の途を開く、左樣なものでありますから絶望といふことは決して癒すことの出來ないものと云つたならば、是れも亦間違である、それですから私は love は前以て制することが出來る、それが後れて其後になつた所がヤハリ制することが出來ると云ふことだけは、諸君に私は保證して置くのであります。

斯樣なものでありますれば戀愛といふことを以て婚禮の……男と女との生涯を結付くる婚禮の標準にするといふことも、危險のものだと云ふことを諸君に考へて頂かなければならぬ、今の所で最も自由結婚の國は先づ英吉利であります、亞米利加も其通りでありますが、自由結婚は英吉利で、自由結婚の行はれないのは佛蘭西であると云ふことは、殆んど昔から諺の如くになつて居る位でありますが、此英吉利の家庭に於て……先づ自由結婚のために成立つた家庭に於て、果して其戀愛の神聖のみで家庭が良く保たれて居るかと云ふと、それは保證することが出來ない、實際西洋の家庭は日本の家庭に較ぶれば淸いのでありますが、此の家庭の淸いのは夫婦の戀愛の爲めであるか、其他の爲めであるかと云ひますと、それは戀愛の爲めのみだと云ふとは出來ぬ、西洋の婚禮は男と女が宗敎の頭立つた人の前に於て手を握つて、『主が汝等を引分けるまで結ばつて解けない、生涯變りませぬ』と云ふ約束を神の前に

立てるのであります、それで西洋の人は神といふ思想が吾々よりも餘程強いのでありますから、一旦神の前に誓を立てゝ結ばつた夫婦は、猥りに人間の私事のために離れては神の罰が恐しいと云ふ、さう云ふ宗教心のために何時までも結ばつて居るのが多いので、愛のためにどこ迄も結ばつて居ると云ふのは少い、若し愛といふものが一旦結び付いたならばそれがために離れないと云ふ位のものであれば、死ぬるまで別れませぬといふ誓を立てるには及ばない、誓を立てるには證文を入れるやうなもので、動もすれば愛の借金を踏倒すことがあるから、それが爲めに證文を入れるのであります、現に昨日私が明日戀愛の話をしやうと思ふと友人(亞米利加から歸つた人である)に話すと、友人がそれは良いことである、紐育に free love society といふがあつて、特に戀愛を標章して居るが、此はどう云ふ社會かと云ふと、始めの中はいろ〳〵理屈も言て居たが終には其會員同志自由自在に妻君を取替へる會になつてしまつた、さうすると始めにはそれも宜かつたが、後には喧嘩が出來る、或は綺麗な妻君を持て居る人は直に退會する、又立派なる良人を持て居る妻君は自分の良人を取られてはならないと思ふから直に作れて歸るとなつて、實に亂暴極まつたものであつたと云ふことを話しましたが、是れなども所謂戀愛なるものは何等かの制するものがなければ變轉定りなく、右に左に變はるものであるといふことを證明するものであると思ひます、free love が立派なものでないと云ふことはそれで解る、亞米利加

の例を引くに及ばない、日本でも維新の頃明治三四年まで、長州或は薩摩のえらい人が碁を打つ時すら、此碁に負けたなら汝の妻君を己に貸すかといふ賭をしてやつて居た、今日日本の上流社會の家庭の紊れて居るのもそんな所から來たではないかと云ふ者がありますが、これは餘り甚しい話でありますから、チヨツト挾んで置くだけのことに致します。

もう一歩進んで考へますと、必然に起つて來る疑問は、汝の言ふには愛は神聖でないと云ふが、然らば男女は愛によらずして何物によつて夫婦になるのが當前であるかといふ疑問が、異口同音に出て來ると思ひます、私は先づ男女は必ずしも戀愛がなくても夫婦になることが出來るといふことを答へたい、なぜと云ふと人は自分と全く異つた人でも、互に接觸すれば其間に何等かの愛の心が出る、隨分面識なくして憎んで居るやうな人も逢つて見ると話が合つて和合して行かれることがありますから、是れから考へれば情に富んで居る一人の男と女が結婚が出來ないと云ふことは決してあるべきことでないと思ふ、現に日本の社會は今まで愛情のために結婚する社會でなかつた、すべて親類中の義理であるとか何とか云ふことの、一言に云へば義務の爲めになす結婚の社會でありますから、自由結婚といふことがない、即ち戀愛の神聖は少しもない社會でありましたが、左樣な婚禮からして私共も皆さんも生れて來たのである、之れを考へれば隨分義務的の婚禮の上からも、良い人間が出來ると云ふことを斷言

することが出來ると思ふ、是れは諸君が事實の上に證明して居ると考へます、若し夫婦になつてすらも其間に何等の愛情も起つて來なければ、其人は餘程偏固の人であつて通常の人でない、吾々人間は其樣に窮屈に出來て居るものでない、苟くも一家の中に共に住んで一家を仲間の者にして、同じ利害の下に棲み、又同じ名譽同じ不名譽のために力を戮せて戰つて居るならば、其中にどのやうな夫婦の間にでも必ず他人と異ふ愛が出て來るに違ひない、若し其樣な愛が出て來たならば、其愛に至つて始めて神聖と云ふことが出來る、なぜなれば始めには愛がなかつたけれども、多年の間夫婦になつて種々樣々の辛いことにも悲しいことにも、酸いにも甘いにも互に試驗し合つて、其爲めにいよ〳〵渝らないとなつた其愛なれば、是れは神聖かも知れない、けれども恰も野に於て牝の狐と牡の狐が出て來て知らないのに馴合ひ匂ひを嗅合つて己れは彼を愛するといふ其樣な咄嗟の間に出來る（これが學生諸君の間に隨分あるといひますが）、斯樣な love に於て何が神聖であらうか、私は斯樣なものは殆んど獸的愛だと云ふ、十分なる試驗を經、艱難辛苦を共にして然る後に出來た愛なれば神聖と云へば言ふことが出來る、それだけの愛に神聖を許して置くが、其以上に於ては決して神聖といふことを許すことが出來ない、是れは殆んど理義明白の事のやうに思ひます、それであるに今の社會に大變に戀愛を大事にするやうな議論があり、或は書いた物が現はれて來るのは、つまり、詩人とか小說家とかいふ者から

でありますから、是れに付て一言して置きたい。

通例小說を書くとか或は詩を作るとか云ふやうな人は、一概には言へませぬけれども、兎に角感情の發達した人である、或は情であるとか Emotion の中の一部の feeling の發達した人である、少し可哀さうなものを見ると涙が出る、少し忌なものを見ると眉間に青筋を出すといふやうな感じの早い人が天才ある詩人なり、天才ある小說家になりますから、私の考へるに此人達が自分の經驗に於て、或場合に自分の心に戀愛を起した、けれども其戀愛が思ふやうに行かなかつた、實に己れはそれで絕望したといふやうな場合に當つて、さう云ふ人には國家よりも世界よりも自分の戀愛の感情が一番重い强い物のやうに感じますから、どうも此絕望は迚も堪へることが出來ない神聖を害せられたといふ考へが起る、又其人が得意の時代に於ては戀愛より外に世の中に貴むべきものは殆んど無いかの如く、戀愛を搔消されゝば神聖其ものまで搔消された如く、自分の感情のために戀愛を大いなるものと見て、太陽の光線と同一視するまでに言ふのである、西洋にも戀愛を太陽の光線に喩へた人が澤山有りますが、決して或男と女の間に成立つ所の小さな love が公平の眼から見て太陽に比すべきものでない、萬々一にも比すべきものでない、たゞ自分が十分なる判斷なく愛の中に自分の身が沒して居るがために愛の外に見ることが出來ず、それで自分の愛の順境に進むと逆境に行くとを、國家の利害問題であ

るかの如くに說立てるに至つたので、是れが小說家抔が戀愛を非常に大きな者のやうに考へます原因であつて私は之れを不健全なる思想と言ふ、健全なる思想は決して其樣なものでない、love の外に人間には種々樣々の事があるのでありますから、其の總ての事に向つて適當の重さを付けて、これは此位の目方といふ輕重の判斷が出來るのが健全なる思想である、日本の靑年たる者はさう云ふ點に於て判斷を誤つてはならぬ、日本で神聖といふことは『神聖ニシテ侵スベカラズ』といふ陛下の神聖といふ言葉の外、眞面目に使はれて居るものを見たことがありませぬが、斯樣な言葉を持て來て戀愛は神聖であると云ふは、不健全なる甚しいものと言はなければならぬ。

日本の婚姻を見れば義務の婚姻である、私は世間の戀愛神聖論者に一步を讓つて、戀愛は假し神聖とした所が日本の義務的の婚禮は不神聖とはならない、私の信じます所によると人間の爲めに自分を犧牲にすると云ふより大きいことはない、若し戀愛がそれ程大きいものでありますれば、日本の婦人……諸君が其大なる戀愛を犧牲にして、自分の家の義務の爲めに親の義務の爲めに、其犧牲を生涯耐堪へる大いなる貞節を守ると云ふことが是れこそ宏大なる Nobleness であると考へます、今まで日本の風習中には良い風か惡い風か分らないものがありまして、私共其善惡に迷つた場合も度々ありますが、私は日本の婚姻制度の如きは日本人の最も美なる性質を現はして、日本人は場合によつては義務の爲

めには love すらも犧牲に供するものであると云ふことを示して居ると考へます、love は…… 西洋人の謂ふ、今の學者の謂ふ love は犧牲に富んで居るも、love 其のものを犧牲にすることはない、所が love 其ものを犧牲にするといふ大いなる心は日本に於て始めて在るのでありますから、是れが爲めに多小の弊害はあると云ふものゝ、決して輕々しく壞はすべき習慣でない、人間に義務の性質を起させる最も良い實際の教育のやうに考へますので、若し love に神聖といふことがあるならば、love を神聖としない日本に本當の love 神聖があるかも知れない。

さう云ふ西洋から輸入した love が健全なる畠に生へずして、動もすれば下宿屋の二階へ生へたり、公園に生へたり、する love は決して神聖でない、私は之れを斷言致します。

武士道に就て

『武士道に就て』と申しますと、時節柄大層壯快な議論のやうであります、若し此が、或は武士道の効能を述べるとか、又は武士道の自慢をするとか、云ふやうなことでありますれば、定めし壯快でもありませうが、私は單に武士道なるものを批評して見る――極く公平に武士道は何であるか、どれ程の價値のあるものかといふ批評が私の目的でありますから、決して際物的の議論ではないと云ふこと

だけは承知置を願ひたいのであります。

武士道といふものは、我日本に於きましては、もう二千年以前からの所謂大和魂を養成した所以の一の精神でありますから、日本の歴史と離るべからざる關係を有つて居りまして、事實を擧げ或に例を擧げて申しますと、殆んど短い時間には言悉すことが出來ない、それ故に私は左様な方面を避けまして、唯理論上武士道はどう云ふものであるか、と云ふ所を主として申上げたいと考へて居ります。

第一に起りますのは、武士道は何であるかと云ふ疑問でありますが、これは兎に角我國の歴史及び風俗と同化した一の道德でありますから、別に六ケしい事を言ふには及ばない、何人も武士道といふ言葉を聞いて、一番先きに頭に浮ぶ考へは何であるか、その俗人の考へを尋ねれば分ります、吾々が武士道といふ言葉を聞いて、一番先きに頭に浮ぶ考へは忠義といふことである、君に對して忠義を盡すといふことであります、武士道に養はれたる我國人の武士道を見た間違のない所は、斯様であると考へて居ります、西洋人から武士道を見るとどうであるかと云ふと、西洋人は武士道所謂武士なるものを直にハラキリズムと解して居る、腹を切ることを武士道と解して居る、これは事實であります、是れも多少の——多少ではない大いなる眞理のあることである、日本人が武士道を忠義として居る、西洋人が武士道を切腹と見る、これは武士道の二方面であつて、此方面から考へますと武士道は何で

するといふ意味であるやうに考へられます、絶對的服從と云ふは少し言葉が強よ過ぎるかも知れませんが、君に從ふのみが忠義でない、三たび諫めて行はれざれば去るといふことが支那の歷史に有りますが、日本に行はれ來つた所では、君を諫めて行はれざれば去るといふやうな事は、稀であつたやうに思ひます、戰國の時代には隨分諸方の諸侯に自分の身を賣つて祿がやすければ去るといふ例はありますが、是れは日本では忠義の本當の手本として居らぬ、日本の忠義の手本は古は殉死までありましたことで君が死ねば臣たる者は病氣でもないにお供をして死ぬ、それが慘酷であるから埴輪の土偶を造つたやうなこともありますから、私は日本の忠義は君の爲めに死すといふ思想を養はれたものと考へます、さうするとヤハリ絶對的服從と云つても差支ないのであります、扨、絶對的服從といふことは、道德上果して價値があるものや否や、斯う考へますと、絶對服從といふことは今の西洋の道德には餘り許されて居りませぬ、西洋では絶對服從は實際の事實の上に於て奴隷あるのみ、奴隷が本當に絶對に服從する、更に西洋の道德は人間の生命を一番重きに置いて居る、日本の忠義といふものは兎も角も生命を輕んじて居る、これはどうしても認めざるを得ない、生命を輕んずるが爲めに日本の武士道

あるかと云ふことが誠に能く分る。

私は日本人の見る方の忠義といふことを考へますと、忠義といふことは君主に對して絶對的に服從

は慘酷であるといふやうな非難も出て參ります、兎に角生命を輕んずるといふことは、今の世界に打ち立てられたる所の道德には適つて居ない、これは斷言が出來るのであります。

けれども、茲にもう一歩進めて考へますと、その生命を輕んずるのは誰の爲め輕んずるか、それは君主の爲めに輕んずる、其君主なるものは何であるかと、斯う考へますと、今まで武士道に於ての君主といふものは殆んど國家であります、これは政治の發達の歷史から申しましても、何處の政治でも其初めの時代は君主即國家である、佛蘭西の路易十四世が『朕は國家なり』と言ひましたのを、歷史家が珍しい言葉のやうに思ひますが、決して珍しい言葉でない、何處の國でも君主と國家は初めは一つである、初め一つであるからこそ絕對服從といふことが出て來たやうに考へる、乃ち君主に絕對服從するのであるか、或は國家に絕對服從するのであるか、此區別が能く分つて居りませぬ、能く分つて居りませぬのみならず、或る意味に於ては國家に服從するといふ考へを以て忠義を盡して居る人も有る、今日の場合に於ては、君主と國家といふものが大分人の目に違つて見えるやうになつて來ましたに付いて、國家の爲めに命を捨てるといふやうなことも武士道を奉ずる人にありますから、此點から見れば君主に對して絕對服從ではない、或は愛國心が絕對服從を要求するものであると、斯樣に言ふことも出來るかと思ふのであります、さうすると武士道の價値は一の君主に絕對服從するといふ意味に於て

は、世界の道徳と兩立し得るや否や疑はしいのであります、國家の爲めに服從するといふ意味になつたならばどうである、斯う考へますと、今度は、武士道は愛國心としてどれ程の價値があるか、と云ふことになつて參ります。

愛國心といふものは、是れも誠に日本では疑問でありまして、現に私などの尊敬する友人中にも『私は愛國心のないことを耻と思はぬ』と云ふ方もあります、また『日本といふ國は少しも貴くないから、日本の國がなくなれば社會主義の行はれて居る新西蘭へ移住する、露西亞が勝つても日本が勝つても宜い』と云ふ人もありますから、さう云ふ見地から言ふと、愛國心にどれ程の價値があるか分りませぬ、けれども私は斷言するのである、愛國心といふものは道徳の一の形であつて、どうしても人間の貴むべきものである、是れはなければならぬものであると、愛國心が何故に貴重なるものであるかと云ふことに付ては、私が前に演説した或る演説の中に、略ぼ其の意味があつたやうに思ひますが、凡て人の身を支配する道徳は自分一個の考へではない、自分と或人との團體の考へである、夫婦といふ二人があれば、夫婦といふ一の團體に付いて一の道徳が出來、一家といふ團體があれば一家を向上させるといふ所から一家の道徳が出來る、斯う云ふことを言ひましたがヤハリそれであります、兎に角一の國家といふものがあれば、此國家に包まれて居る人民は、どのやうな事をすれば國家が盛んにな

るか、どのやうな事をすれば國家が向上するかといふ點を考へて、多少自分の利益を捨てゝも、國家の爲めに斯う云ふ事が利益になるといふ事があれば、それが國家的道德であります、さうすると、國家を愛するといふことは、今の世間一般に立　られて居る道德である、故に私は玆に小さい斷案を下して申します、忠義といふものは、君卽國家と思はれて居た時に出來た絶對服從主義であつて、今の時代になれば愛國の道德の發現である、是れだけのことを私は小さい斷案と申して置きます。

それから一歩を進めて、忠義卽武士道といふものを、西洋人の如く切腹といふ上から見ますと、また少し議論が進んで來る、切腹は御存知の通り自分の腹を自分で切つて死ぬといふことでありますが、若し武士道といふものが、單に君主に向つて自分の命をも捧げた所の所謂奴隷の如き服從であつたならば其から腹を切るといふことが出て來るや否や、西洋の奴隷に決して腹を切る者は無い、彼は自分の命を全く自分の主人に捧げてありますから、彼の主人の手によつて殺さるゝことはあるに違ひない。或は品物の如く賣買さるゝことはあるに違ひないが、腹を切るといふことは彼等の道德とする所でないであらう、何故かと云ふと、腹を切るといふことは是れは自分の責任である、他から殺されるのでなくして、自分自ら自分の身を殺すのでありますから、若し世の中に一個人が責任を負ふといふ事に於て極端まで盡したならば、私は腹を切ることは責任を明かにする所以と考へます、さうすると日本

の武士道は絶對服從ではあるが、決して奴隷道德ではない責任道德である、今の世に於て道德の一の最も大切なる條件は、人間自らが道德の單位(ユニット)であつて、自ら責任を有つといふことが、今日の進んだ道德の最も必要な條件としてありますから、私は此點に於て武士道は兎に角道德たるに資格あるものと考へます、今までの歷史上に現はれた武士道の發展を見ますと隨分慘酷の事があります、或は親が自分の子を君の子の身代りにする爲めに手打にするとか、其他澤山に例がありますが、身代りにするといふことは、これは殆んど奴隷道德である、自分で腹を切るのではないのでありますから、自分は君の身代りになるのは忠であるが、親が子を殺して身代りにする、妻を殺して身代りにするといふことは、殆んど奴隷道德でありますが、併しこれは今までの一家の組織が恰度一國の組織の如く、國は君を立てゝ長と爲す如く、家は主人を立てゝ長と爲したのでありますから、自然に家の小さい家族等は最も大いなる家族の爲めに奴隷視されて居たと云ふ事實がありますのです、それですから武士道は今までの日本の國家に行はれて居た所に於ては決して奴隷制度ではない、けれども日本の家庭には殆んど親が子を奴隷とする如き有樣があつた、是れだけは私は認めますのであります。

それでありますから、忠義の方面から見れば絕對服從の道德である、これは君主に對する絕對服從ではなく國に對しての絕對服從であるからして、多少今日の道德から見て價値がある、それから、切

腹といふ方面から見れば、これは自己の責任を行ふ道德であるから、之れを道德と云ふことが出來る、と云ふ斷案が下つて參ります。

茲に於て私は少し、其中へ一つ議論を挾みたいのであります、それは、其樣なものとして見れば武士道といふものは或迷信ではなかつたといふことは、皆さんが承知して下さることゝ思ひます、迷信と迷信でないことの區別は誠に立てにくいのでありますが、信仰といふことは自分の知識の達かない所を信ずるのでありますから、知識が進んだ後に顧みて考へると、大抵の信仰に間違がある、基督教にしても三位一體或は基督の復活といふ事は今の知識から見れば間違つて居る、今から見れば迷信と考へますが、併し迷信といふことゝ迷信でないといふことを、一番能く現はす區別は何かと云ふと、是れから後々の發達と伴つて行く元素のないのが迷信であつて、後々の知識の發展に伴つて行く性質を帶びて居るのは迷信でない、例へば印度にサツグスといふ宗教がある、其は何をするかと云ふと、人の首を斬ることを善い仕事であるとして居る、斯樣な事は世の中が進めば進むほど其進步と反對する、此の如きは迷信でありますが、若し日本の武士道といふものが是れから後々世界の進步に應じて行く何等かの要素が備つて居るならば、これは迷信と云ふことは出來ない、私から言へば武士道なるものは兎も角も道德であつた、道德であつたが幼稚であつた、或は多少極端であつた、と云ふことは言へ

るやうに考へます、君主に從ふといふことも絕對服從となりますと極端であるかも知れない、或は、自個の責任も自分が腹を切るまで往くと極端かも知れませんが、けれども、極端であるにしても其事柄は今の道德の精神に反いて居らない、さうすると今日之れを迷信といふことは出來ませぬ、日本の武士道を以て日本人の迷信であるとは言へない。

これだけのことを斷言して、また一歩進めて考へますに、兎に角武士道は日本の戰爭時代の道德でありますから、それが爲めに非常な極點のあるは免れない、戰爭其ものが極點であつて、其極點の仕事をするに最も適當するやうに出來た道德が武士道でありますから、武士道其ものが極端であるといふことは免れませんが、其極端とは何が極端であるか、斯う考へますと、之れを消極に云へば君主に服從するといふ服從が極端である、之れを積極の方から見れば、自分の命まで捧げ腹まで切るといふ大いなる責任を以て國の爲め君の爲めに戰ふのであるから、これは大いなる勇氣である、此事は認めざるを得ない、君主に從ふことから云へば絕對の極端の服從であるが、其極端の服從を以て戰ふといふ方面から見れば絕對の勇氣である、斯う考へますと積極的にも極端であり消極的にも極端であるといふことが分つて參ります。

此考へを以て私は支那と西洋との有様を極くアブストラクトに見て申したいのでありますが、勿論

戰爭の道德であるとして見れば、凡そ戰爭のあつた國には必ず武士道は在る、支那には支那の武士道があつたに違ひない、西洋には西洋の武士道があるに違ひないが、支那の武士道と日本の武士道とは少し相違があります、支那では『戰國に仁義なし』とか、『春秋に義戰なし』とか申しまして、支那の武士道は先づ孫子とか呉子とかいふやうな兵略が、其儘に個人の行ひになつたものゝやうに考へます、支那の戰國の有様を見ると、決して彼等は或人に服從するといふ點に於て大いなる道德を有つて居らぬ、彼等は嫌々服從して居るのであります、國家を愛するなどと云ふ念なく、無理に壓制されて嫌々服從して居るやうな形があります、これでありますから、支那の人間は文學の上から見ても、何から見ても、個人的には樂天主義であつて、國家的には悲觀主義である、何故かと云ふと、支那人は本當に服從の精神が足りなくして、人間は自分の自由自儘に伸びて行くものであると云ふ考へがあると見えて、支那の詩を見ても文章を見ても戰爭を非としてある議論は澤山有ります、戰爭を國家的に悲觀して居る、戰爭は善くないとか、或は戰爭の爲めに一個人が足を折つてどうとか、戰爭の慘害を說いたものは澤山有りますが、日本になりますと日本の歌の如きは個人的には悲觀である、個人的には悲觀でありますが、其悲觀なる個人が國家を謳ふ時にはヤハリ樂天主義になつて居る、これは文學の上に現はれた大いなる相違と思ひますが、これは何から來るかと云ふと、成程個人として絕對に服從するといふこ

とは辛いことである、日本の個人的に悲觀であることはそればかりでありませぬ、他に原因が澤山有りませうが、兎に角個人として絕對の服從といふことは辛いことでありますから、どうも多少の悲觀が起つて來るけれども、絕對の服從の爲めに、國家の爲めに戰ふとなればそれが樂觀になつて、日本の文學には戰爭を國家の上から見て悲むべき事としてあるは餘り無いやうに考へます。

西洋の武士道を見ますと、西洋の今日の道德は殆んど武士道から來て居るやうに考へますが、第一西洋の武士道によつて發達されたる道德によつて日本の武士道を見る人は、日本の武士道は慘酷であると言ひますが、是れも少し私は違ふだらうと思ふ、成程、子供を殺して身代りに立てるといふやうな事は慘酷に違ひないのであります、けれども、武士道の主意は決して慘酷をすべき主意ではない、武士道にはなか〳〵寬大の所がありまして、諸君も御存知の通り、或は敵に鹽を送るとかいふやうな美談も見受けるのでありますから、日本の武士道は慘酷であるといふことは、それは成程慘酷の事例は澤山有りますけれども、武士道の主意は決して慘酷を嘉するものではない、殊に日本國は島國であつて天然の風景も佳し、又氣候なども好いのでありますから、日本人は誰れが見ましても兎に角快濶な人間である、悲觀と餘り兩立しない人間である。それで印度或ひは支那邊りから悲觀の考へをよく輸入して參りますけれども、日本に於ては日本の快濶の氣風に薰陶されて、日本人の悲觀は自から異つ

て居る、それ等の點も委しくは申しませぬが、兎に角日本人は先天的に快濶の人間であつて、慘酷などとは兩立しない、慘酷は日本人に合はぬのでありますから、日本に發達した武士道は慘酷のものとは思はれぬ、西洋の武士道に於ても、今日の道德に於ても人の行ひに「ノーブル」といふことを申しますが、「ノーブル」とはツマリ自分の我儘を制する人の爲めに盡すといふことでありますから、私は其の點に於て日本の武士道は最も「ノーブル」のものである、武士道を信ずる一個人の行ひは「ノーブル」である、武士道其ものが或意味に於ては「ノーブル」のものであると信じて居ります。

又、西洋の一般の風習の上に於て、最も個人の行ひに現はれて著しく何事にも見えるのは「プラウド」(これも日本語にチョット飜譯が出來ない、日本で高慢と譯しますが、英國の高慢といふ意味ではないやうに考へる、或點から云ふと自尊自重などと似て居りませう)、兎に角西洋の武士であつても貴族であつても、今日の氣風(宗教其他のものでも)は何で維持されて來たかと云ふと、彼等に一種「プラウド」の所があるからで、此が日本の武士道に最も有るやうに考へます、例へば『武士は食はねど鷹楊枝』とかいふことは、自分が腹が空いて食べて居ないが、恰も食べた如くに楊枝をつかつて居る、而かも其楊枝は鷹の羽で造つた立派なものであるといふことは、或點から云ふと瘠我慢とも言へますが、是れが日本の武士の「プラウド」……自ら高くする所であつて、此心の爲めに名譽といふ考へも出

るし、又或場合には非常な我慢をするといふやうな考へも出ますので、決して日本の武士道といふものは人間其ものを高尚にする所以の道に缺けて居らぬ、唯日本の武士道と西洋の武士道と大變異つて居る所は、西洋の武士道では、彼の封建時代に於ては、何れの地方にも婦人が尊ばれて所謂女尊男卑の風がありますが、日本の武士道はそれと反對して男尊女卑といふ所があるのです、西洋の武士道が女を尊んだといふことは諸君の御存知のことで歴史にも澤山見えて居りますが、それは甚しい有樣であつて、それから引續いて今日の西洋の女尊男卑の風が出て來て居りませうが、或は又今日の人道問題であるとか云ふものも、此から出て來て居るに違ひないが、或ひは人は同等であると云ふやうなことは此から影響されて居るが、是れは日本の武士道が遺憾ながら西洋の武士道に讓る所であらうかと考へる、何故日本の武士道は女を卑む風があつたか、何故西洋の武士道は女を尊む風があつたかと考へますと、兎に角日本の武士道は絶對服從であつて極端に戰ふといふ主義でありますから、戰鬪に直接の關係のない女は誠にやすく見られた、究り日本の道徳觀が其點に於て烈しかつた、西洋の女を尊むはどこから來たといふことは調べたことがありませぬけれども、武士道として見ます時には彼の希臘殊に「スパルタ」などの歴史を見ると、人は弱い子を持つてはいかぬ、子の弱いのはいかぬと云つて、弱い子は捨てたことがありますから、或は其樣な事も多少は女を尊む所以になつて居らう、即ち良い

女は良い子が出來るといふ所からも多少來て居りませうと思ひますが、此原因は多分武士道以外に在ると思ひますから別に信じは致しませぬが、兎に角今の所に於て西洋の男子が日本の男子よりも餘程臆病であるといふことは、これは認めなければなりませぬ、西洋人は文明が進むに從つて感情が發達する夫れが爲めに勇氣が減るなどゝ申しますが、ヤハリ女を尊むといふ一の道德が西洋人の勇氣を減らして居りはせぬかと思ふ、女を卑むといふことは勿論善くない事でありまする、兎に角女に對する情の如きものが軍人の戰鬪力を其場合に於て多少減らす、或は後顧の憂あらしむるといふことは、どうも自然に有る事でありますから、まア戰爭としては或は日本の今までの武士道が强かつたかも知れない、女尊男卑男尊女卑と二つの遣り方に於て、日本の男尊女卑の方が戰爭に於ては强かつたかも知れない、これなども私の考へであります。

是れだけの事を考へて今の世界の思想から見ますと、兎も角も武士道を奉じて居る日本は野蠻國ではなかつた、何故なれば武士道は西洋の道德即ち世界の道德に餘程合ふ所の、世界の道德と共に發達するとの出來る道德を奉じて居つたのでありますから、世界の潮流に反く道德を奉じた野蠻國とは違ふ、たゞ幼稚であつたといふことは言へませう、幼稚であつたと云ふのと、先天的の野蠻國とは違ひがある、日本の武士道は日本國を進歩させる上に於て邪魔になる分子は無かつた、それが有つたとすれば

女を卑むことでありませうが、其他は服從も人間が一番始めに敎へらるゝ道德であり、勇氣も人間の奉ずる一の美德であつて、決して日本は武士道を奉じたが爲めに野蠻であつたといふとは言はれない、支那邊りで見ますと、支那の人間は先きに申しました如く、個人的には樂天主義であり、國家的には悲觀であつて、服從といふことが少いのでありますから、それが爲めに種々の道德上の統一を缺いて、個人的に發達する外、決して國家的に發達することが出來ないが、日本が國家的に發達する意味の現はれて居る所を見ても、或は東洋の諸國が決して進まないのに日本が獨り進むのを見ても、私は是れも武士道なる日本人の奉じた道德に大した有害の所は無かつたと云ふ證據ではあるまいかと、斯樣に考へて居ります、今日の世界の有樣を見ると。まだ戰爭の跡の絕えるといふ時代ではありませぬから、私は若し是れから日本が大いに勝ち、或ひは日本がもう一層進んで一等國にでもなりますと、戰爭時代の道德は實に日本の道德が結構であるといふやうな時が來はせんかと考へます、旣に前回にも申しましたが、日本人種の小さいことから、日本の强いが爲めに褒られて、日本人種は小さいから、少しの高處にも隱れて射擊が出來るとか、小廻りが利いて進むにも退くにも都合が好いとか、船に乘るにも西洋人より餘計乘れるとか、種々樣々理屈を付けるやうな世の中でありますから、私は今の世界の形勢に於て日本が一等國の中へでも飛び出す時には、又々世界の人は日本の武士道をば大いに價値の

あるものとして、平時は兎に角戰爭の爲めにはなか〳〵良い道德であるなどと言つて來る時があるに違ひないと考へて居ります、けれども武士道に籠つて居る服從といふことゝ、一方から謂ふ自個の責任を以て戰ひの爲めに勇氣を出すといふことは、何處の道德へ持つて行つても道德の始終を貫いてどうしても變らない道德でありますから、私は武士道が是れから後は世界の道德と調和することがあらうと思ひますが、日本人の心の底から全く脫けてしまつたら大變であると斯う考へます。

最後に至つてもう一つ申したいのは、今の時代は決して日本に於て武士道の盛んな時代でないことは勿論であります、もう武士道は殆んど忘れられ掛けて居りますが、併しながら海陸軍の戰爭に現はれた結果を見ると實にえらいものである、普通の考へを持つて居る者の出來ない事を軍人が動もすれば爲して居る、是れなどは武士道の結果であると言はなければならぬ、何故に今日の衰へ盡した武士道が斯く或方面に殘りて居るかと考へますと、これは武士なるものが不知不識の間に、二千年來の歷史の爲めに、日本人の人格と同化して居るから斯樣に力が有るのであります、日本人は決して斯うするのが武士道である、斯うしないのが武士道であると考へずして、咄嗟の間にも自分の爲す事が多く武士道に適ふ、究り武士道と日本人とは別でない、日本人の人格が武士道に造られて居るから、武士道は衰へても其精神がいろ〳〵の方面に發現するのである、之れを考へれば、武士道であるとか、基督教で

あるとか、すべて道德に關する議論は、其力は人格に同化して始めて出て來る、私は世の中に人格に同化した敎訓ほど貴い物は無いと考へて居ります、此點から見れば、まだ少しも日本人の人格と同化して居ない所の或は基督敎の道德とか、或は佛敎の道德とか（佛敎などは餘程武士道とも同化し、人格とも同化して居りますが）兎に角議論の高尙な物を良いとして、それで人の心を牽ひて行くといふことは誠に六ケ敷い事である、日本人には一の道德の主義が人格と同化して居る事は大いなる幸であらまして、人格と同化しない此よりも進んだ良い道德を以て日本人を支配するといふことはそれは空論に終る、人格と同化して居りませぬから總ての場合に、斯うしたが宜いか、あゝしたが宜いかと考へて自分の働きを爲すやうでは力が弱い。

　それで私は、武士道なるものは兎に角日本人の人格と同化して居るからこそ、斯樣な働きを爲すのである、即ち道德は人格と同化しなければならぬ、是れだけが私の凡ての斷案である。

宇宙倫理觀

第一節、總説 根本の疑問

一項、天と人

人は疑問の中に生れ疑問の中に死す、何故に生れたるやが一の疑問なり、生存中に何を爲す可きやが二の疑問なり、死すれば何の境に入るやが三の疑問なり、此の疑問を解釋するを人生觀と云ふ、人は自ら知らずして生まる、卽ち天然に生れたるなり、然れども其の天然の『天』と云ふ者は何ぞや、是れ人生觀の奥底に横はれる大問題なり、之を解釋するを宇宙觀と云ふ、宇宙觀と人生觀とを合せて余は『天人論』と名づく。

二項、科學者の斷案、怪の怪

今日の進歩せる科學は殆んど宇宙の萬象と人生の一切とを知り悉したる者の如し、人の生ずるを説くや曰く『人は物質と物力との相擊より生ず』、人の生存を説くや曰く『利益と幸福とを求む可し』、人の死を説くや曰く『消滅なり、無に歸するなり』と。

科學の範圍に於ては何人も此説を信ぜざるを得ず、此説は學者が研究の末に達したる現在の斷案な

ればなり、然れども科學の斷案は未だ以て問題の根本を說くに足らず、吾人は科學の稱する物質其者の眞性をまで知らんことを欲す、人と云ふが如き、此の疑問の多き一物を作り出す物質の本來は抑も何ぞや、物質は如何なれば斯かる靈妙不可思議の作用を發現し來るや。

科學者は曰く『物質は元素の集合なり』と、元素の集合が何故に生物と爲り、智情意を具し喜怒哀樂し或は詩歌を作りて天然の美を謳ひ、或は哲學を案出して物質其者の奧秘をまで訐かんとするに至る、之れを怪と云はずんば何をか怪と云はんや。

且夫れ、物質既に生類となり、利益幸福を愛するに至りて後も、其利益幸福と稱する者が又疑問なり、一人の利益は他人の利益と衝突す、此衝突を調和して雙方の利益を全ふする所以を道德と云ふ、然れども道德は何故に守らざるべからざるか、我れ自ら我が利益我が幸福を拋擲し去らば、道德も我に施す所以の手掛りを失ふに非ずや、我は根本に於て何故に幸福と云ふものを希望せざる可からざるか。

三項、道德の力、人類の價

物質の相擊の爲めに逼出せられ利益と幸福とを追ひて趨るは獨り人のみに非ず、禽獸も亦　るなり、然らば人は禽獸より以上の物に非ず、肉腐りて蠕蛆の發生に好都合なる程度に至れば蠕蛆自ら之に生

ず、地球冷却して殼を生じ人類の棲息するに好都合なる程度に至れば人類自ら之れに生ず、蠕蛆と人類と貴賤に於て何の別あるや、人は人の立地より觀て人を以て蠕蛆よりも貴しとせば、蠕蛆も亦彼れの立地より判斷して自ら人よりも貴しと思はん、少くとも利益を求め幸福を貴ぶの性に於て蠕蛆も人類と同性質の道德を奉ずるに非ずや、科學者曰く『然り人類も蠕蛆も天然の價値に於て同一なるのみ』と、吁科學は終に人をして蠕蛆と同一の足場に立たしむ、吾人は此の斷案に滿足せざる可からざる乎。吾人が心の奧底に存する靈性は、蠕蛆と定價を同くするを不快には感ぜざるか、科學者は人の心に爾く靈性の存するをだに認めず、一喝して曰ふ『是れ迷信のみ』と。

四項、智識の總計

然れども吾人は問はざるを得ず、科學者の知る所は果して眞理の一切なる乎、見よ彼れの知る所は、時間に積れば一億年の區域に過ぎず、空間に於ては望遠鏡の達する範圍に止まる、此範圍、此區域は宇宙無限の空間と無窮の時間とに對して、大海の一滴にも足らざるに非ずや、世に蜉蝣と名づけらるゝ小蟲あり、朝に生れて夕には卽ち死す、若し其の眼を以て一日の暮るゝを見ば、必ずや思はん、天地漸く冥晦に陷り世は玆に盡きんとすと、何ぞ又、十二時間の後、旭日再び東天に上り、萬物齊しく光明に浴すると今日と同じかる可きことを知らんや、蜉蝣の壽命と蜉蝣の眼界とを以て世界の歷史を語る

者あらば、今日の科學者が卽ち其れなり。

五項、常住不斷の警告

思へ、空間の無限と時間の無窮とは、人如何にして之れを領會するを得るや、此の二者の實在は、實に吾人をして、宇宙に理學の力に超絶する至大至永の者あるを想はしむる常住不斷の警告には非ずや、謂ふこと勿れ、一理は以て萬象を推すべきのみと、然り眞に一理は以て萬象を推知す可きも、今日の科學は未た悉く其の一理を知らざるなり、物質とは何ぞや、物力とは何ぞや、科學者は唯だ其の現象に就き『斯の如き者』として説明するのみ、『斯の如き者』が何故に『斯の如き者』たるに至れるやは其の説明し得る所に非ず、宜なる哉、科學の進みて絶頂に達したりと稱せらるゝ今の世に及びて人生の疑問益々解釋し難きに至れるや。

吾人は物質物力と云へる現象を取りて、更に科學よりも深き奥底に尋ね入らざる可からず、之れを尋ぬるは、科學の既に知れる所を根據とし、推して其の未だ知らざる所に及ぼすに在るのみ、卽ち一理を以て萬象を推究するなり、實は科學者の批准せる方法たるに外ならず。

第二節、現象と實體

一項、人の感覺と物の性質

針を以て皮膚を刺せば人は痛みを感ず、此の痛みは人の皮膚に在り、針に在るに非ず、人の感覺なり針の性質に非ず、是れだけは何人も無論の事として同意する所なる可し、更に此の理を推して一考せよ。

目を開きて針を見れば針は光れり、知らず光は針に在るや、人の眼に在るや、別言せば光は針の性質なるや、人の感覺なるや、痛みを針に在らずと言ひたる人も、光は即ち針に在らずと云ふに躊躇す可し、然れども理は一なり、痛みが人の皮膚に在ることの無論なるが如く、光も人の眼の感覺たるに止まると無論なり、眼無ければ針ありと雖も光らず。

更に指を以て針を摘めば針は甚だ堅し、此堅さは針に在るか指に在るか、其の針に在らずして指に在るとは、痛みが針に在らずして指に在るに同じ、指の神經若し粗末ならば針の堅さを感ぜざるのみならず、針の在ることをすら感ぜざる可し、更に指の組織若し金剛石の如く堅からば針は柔かなると綿の如くなる可し、而も人は自個の感覺を針に附着して此針甚だ堅しと云ひ、自個の痛みを針に附着して此針甚だ鋭しと云ふ。

此針を地上に落さば、鏘然の音ある可し、音は針にあるか耳にあるか、耳にあること無論なり、針は只だ地に觸れて鐵の分子の響動を發するのみ、分子の響動は空氣に傳はり、空氣の響動が波紋の如く廣

がり來りて人の鼓膜を打つ、鼓膜は更に腦に通じ腦中に響感を發す、此の感が音聲なり、音聲は物に在らず耳に在り、若し耳と云ふもの無からんには、針より起りたる空氣の響動は、何處までも廣がり行くに止まり、終に音聲とならずして止む可し。

啻に光や音聲のみ然るに非ず、總て人が物の『性質』と稱する所のものは、物に在らずして人に在り、物より受くる人自身の感覺なり、色も然り味も然り、冷たさも温かさも臭氣も方圓の狀も上下高低の狀態も、皆然り、世に若し感覺ある生物の無からんには、物の性質と云へる者は皆無に歸す。

二項、昔の唯心論、今の唯心論

此論を稱して唯心論と云ふ、唯心論の元は、宇宙には唯だ我れ自身の心あるのみにして、心の外に何物も有るに非ずと云ふに在りたり、此は極點の議論なり、我れ死すとも物は依然として存するは無論なり、今日の唯心論は斯の如く極端ならず、物が人の感覺に拘らずして存在することを認む、然れども物の性質は、感覺を離れて存する能はず、是れ今日の唯心論なり、此論は科學者も哲學者も等しく眞理とする所なり、何人も承服せざるを得ず。

三項、二個の疑問

茲に至り二個の疑問を生ず、（其一）生物皆無、感覺皆無として考察せば物の實體は何なるか、世界

物界の眞狀は如何なるか、(其二) 物の性質を攻究する科學なる者に幾何の價値あるや。

四項、實體は永久に不可思議

(其一)吾人は唯だ物の性質を知る、別言せば自個の感覺を知る、然れども物の實體は吾人の感覺と何等の關係無し、吾人亡ぶとも物は亡びず、吾人が多感と爲るも痴鈍と爲るも物は依然として物なり、此の物果して何なる可きや、味に非ず聲に非ず、色に非ず形に非ず、吾人の想像し得る一切のものに非ず、吾人は之れを名狀するに由無し、唯だ人智に絕したる奇異玄怪の者なりと信ずるの外は非ず。暗闇の牛も鳴かぬ鳥も其奇怪を比するに足らず、故に學者は云ふ『世界より一切の有感生物を滅し去らば、色も無く聲も無く形も無く體も無く、分子動と物體動と千樣萬態に入亂れて衝突し反動する有るのみ』と、眞に然り奇の奇、怪の怪なり、人の感覺は只だ此の奇怪なる實體の一方面が幻影と爲りて反射するのみ、而かも人は其の奇怪に慣れて怪むを知らざるなり。

五項、現象の智識は假定說

(其二)唯だ幸ひにして、同一の實體は、常に吾人をして同一の感覺を發せしむ、故に吾人は此感覺をば、假りに實體と同一視し、之れを分解し比較し彙類し總合して知識學術と名づくるのみ、是れに由りて見れば、人の知識は到底物の實體に達せず、實體は永久に不可思議の者として存す、宛も時間空

間の不可思議なるが如し、人の知ると言ふは唯だ物の幻影を知るのみ、學者は之れを現象と云ふなり。

六項、現象と實體とは全く異なり

現象と實體との同じからざるは影と物との異なるが如し、影ある所には必ず物ありと雖も影は太陽の光線と共に消滅す、現象の有る所には必ず實體ありと雖も現象は感覺と共に消滅す、然り現象は消滅するも實體は依然として存す、人は此の影を指して物なりと云ひ、影の上に組み立てたる假定說を眞理なりと思へり、プラトの比喩に曰く『人は宛も暗室の中に、窓を背にし壁に面して繫がれたるが如し、壁に物あり茫然として動く、彼れは之れを見て眞理なりと思へるも實は己れの影なり、眞理は背面の窓外に在り』と、眞に然り、影の影たるを知りて始めて窓外に眞理あるを知る可し、吾人は何故に窓を排して出で、無限の天に輝ける眞理の光明を拜することを欲せざるや。

第三節、自觀と他觀

一項、達人の達觀

昔、伊國の人ギョルダノ・ブルノ、幼にしてシカダ山に登り、谷凹し峰凸して巖石の起伏し樹木の繁茂するを見て、思へらく名山なりと、遙かにベシビアス山を望むに、低くして土塊の如し、峯も無く谷も無く樹木巖石總て見えず、思へらく平凡の山、以て我が立てるシカダの秀に比すべからずと、

其後、行きてベシビアス山に登る、何ぞ圖らん峯谷の雄大、巖石樹木の壯觀、曩日のシカダに劣らず、顧みてシカダ山を望めば谷も峯も無 、小なること土塊の如し、彼れ大に悟りて曰く『物は總て斯の如し、我よりして人を觀れば、我れは主にして人は客、人よりして之れを觀れば我れ客にして人は主、知る可し物の互に異なるは、自ら觀ると他より觀るとの別に存することを、若し觀る所の地を替ふれば萬物皆同じ』と。

彼は廣く此理を應用して益々得る所あり終に天人合一の理を悟り、歐洲に於ける汎神主義の祖と仰がるゝに至れり、彼は曰く『地球に立ちて星を望めば一點の光のみ、若し星よりして地球を望めば、地球も亦一個の星にして、星も亦一個の地球なる可し』と、彼れは之れを論據として天に無數の世界あることを主張せり、彼れは此說の爲めに法王の朝廷に捕はれ、終に異端として焚殺の刑に處せられたり、然れども今日に至りては誰か又地球も一個の星にして、星も亦一個の地球なることを疑はんや。

二項、一元論の斷案

更に此理を推して一考せよ、人よりして物質を見れば人は活物にして物質は死物なり、然れども物質よりして人を見れば、物質却て活物にして人は物質なるに非ざるか、

是れ奇問なり、然れども眞理なり、人と物質とを區別し、活と死とを區別するは單に自觀と他觀と

の別なり、自觀すれば萬物皆活けるなり、他觀すれば萬物皆死せるなり。今日の進步したる學術は總て斯の如く認む、之れを一元論と云ふ。一元論は物質の皆活けるを唱ふるなり、之れに非ざれば宇宙の深き秘密は合點するに由なし、十九世紀の半に『進化論』なる者が學界に現はれてより、學問は全く面目を一新し、其の研究に研究を重ねたる結果は、終に物質の皆活けるを認めざると能はざるに至れり、今日の生物學然り、心理學然り、一般の哲學亦然り。

三項、動植の無差別

一般の人は動物と植物との區別を認む、然れども其根本に溯れば全く無差別に歸す、動物も植物も其の元は一の微粒なり（學者は之れを細胞と云ふ）。此微粒は水中に游泳し、盛に手足を延して自個よりも小なる有機物を取りて食へり、斯の如き者が植物なるか、何故に動物に非ざるか、斯る階級に至りては、未だ動物と植物との區別ある迄に進化せざるなり、之れを『他日植物と爲るべき動物』と云ひて可なり。

四項、生物と非生物との無差別

更に此の微粒の最も下級なる者に至れば無生の物質と區別す可き境界なし、今日に知られたる最下の微粒を滴蟲（モネラ）と云ふ、然れども滴蟲（モネラ）は始めて之れを發見したるエルネスト。ヘケルが、最下級の生物

として紹介したるも、今の學者は更に其又下に眞成に最下の者ある可きを推定し、之れをプロバイオンと名づく、此者に至りては殆んど無生の物質と稱し難きと同時に、有生の生物とも稱し難きなり、是に於て知る、物質が地球の冷却せる或る程度に於て、光線の或狀態と電氣の或狀態の爲めに打擊せられ、反動して一種の生物的組織を生じたることを、此組織を元形質と云ふ、炭、酸、水、窒四素の化合物にして、鷄卵の白味の更に精密なる如き者なり、此者に在る所に必ず生命あり。生命の在る所に必ず此者あること學者の證明せる所なり。

電氣も物質なり光線も物質なり、詳しく云へば物質の分子動なり、此者が炭、酸、水、窒等の分子を擊ち、分子が之れに應じて動くを反動と云ふ、打擊と反動とは物質界を通じて總體の有樣なり、雨の地に落ちて地を打つと同時に、地より打返されて跳飛ぶが如し、怪むに足る者無し、此打擊と反動とを稱して相互の動作（レシプロカル、アクシヨン）と云ひ、更に短かく相擊（インタラクシヨン）とも云ふ、物力の相擊の爲めに物質が上進して原形質と爲り微粒と爲り、微粒集りて蟲と爲り、蟲が上進して其背に骨を生じ更に上進して猿と爲り人と爲れり、人より下りて物質に至るまで、其系統の上に一毫も斷えたる所なし、人は即ち物質の末にして物質は人の本なり、末が活物ならば其の本も活物ならざる可らず、一概に物質を死物と云ふは眞理に非ざるなり。

五項、物質の活ける所以の一

今日吾人の眼前に於ても物質は自ら其の活けることを證明するに非ずや、吾人の命は何ぞや、日々に食する米の粒が吾人の自ら知らざる間に、自ら吾人の血と爲り肉と爲り神經と爲り力と爲り心と爲り生命となり、言語し應答し、利益を追ひ快樂を追ひ、喜怒哀樂せるに非ずや、米粒は吾人が釜に入れ、熱湯を以て煮殺したる者なれば、一般人は之れを活物とは認めず、而かも吾人の身體は斯かる煮殺したる者より外に何者も有ること無し、其れが直ちに吾人の身體と爲り活きて動くは何ぞ、他無し煮殺したる物質の中に活力ありて吾人の身體に現はるゝのみ、川に流るゝ水、海に溜れる鹽、空を吹ける風も皆活物なり、死物に非ず、此物どもの活力が吾人の身體に入り、結合して吾人の生命と爲る、吾人若し是等の物を我が身體に入るゝことを廢止せば吾人の生命は直ちに盡く、斯る明白の證據を日々眼前に見物しながら物質を死物と思ふは、小兒の成長して大人となるを見ながらに、大人は活物なるも小兒は活物に非ずと云ふに同じ、殆んど論理の外なり。

六項、物質の活ける所以の二

思ふ勿れ、物質は死物なるも、人と云ふが如き生物の身體に入りて始めて活くと、物質は吾人の身體に入らざる以前より活けるなり、抑ゝ活と死との區別は何に在るか、自ら動くと云ふ點に在る可し。

自分の力を以て自ら動くことを得る者は決して死物に非ず、我が國にて禽獸蟲魚を動物と云ふが如きは此の思想を表せる者なり、動く物は皆活けり、宇宙の何れの所に自ら動かざる者あるや、草木は自ら地下に根を擴げ自ら空中に枝葉を廣ぐ、故に自ら動くなり、自ら活けるなり、石は自ら動かざるか、山は自ら動かざるか、金や水は自ら動かざるか、是等の物は絶間無く地球の中心に向て動きつゝあり、唯だ地殼の厚く且つ堅きに遮ぎられて目的を達する能はざるのみ、然り目的は達する能はざるも動く力は依然たり、故に理學者は之れを伏力（ポッテンシャル、エネルギー）と云ふ、伏力も起力（キネチック、エネルギー）も實は同じ、石の高所より低所に落るは起力なり陽動なり、目に見えて動くなり、地殼に遮られて動かざるは伏力なり、陰動なり、目に見えずして動くなり。

地球は山嶽土石を負ひたる儘にて太陽の周圍を動き、太陽は地球其他の遊星を引連れて一秒廿哩の速力を以てハーキユール星宿の方を指して動き、ハーキユール星宿は又那邊にか旅行しつゝ有り、天文學者皆之れを證言す、要するに宇宙には自ら動かざる者一も有ること無し、別言すれば活物ならざる者は一も有ることなし。

七項、引力は物の自動なり

理學者は云ふ『是れ引力なり、物自ら動くに非ず、他に引かるゝなり』と、然れども引力は即ち物の

自ら動く力に非ざるか、物を引く力は物に向て自ら動き行かんと欲する力と同一なり、若し物に自動の力あるを認めずして他物より動かさるゝに限れりとせば、他物は又他物より動かされ、其の他物は又他物より動かさるゝと云ふに歸し、如何に究むるも際限なくして遂に力の出所を認むること能はざる可し、昔話に曰く痴人痴人に問ふ、萬物皆下に向ひて落るに地は何故に落ちざるや、痴人答ふ、地下に大なる柱ありて之れを支ふるなり、問ふ、其柱は何故に落ちざるや、答ふ、其下に大なる石あり、問ふ、其石は何故に落ちざるや、答ふ、力強き人ありて之れを抱けり、問ふ、其人は何故に落ちざるや、痴人遂に語窮せり、引力が物の自動の力なるを認めずして、單に他動の力なりと解釋する者は必ずや痴人の窮に落つ、自明の理のみ。

八項、物質の活ける所以の三

斯かる物體動より進みて更に分子動を見れば、爭はんと欲して得ざる者あり、汽罐の中にて水の分子の躍るを見よ、彼の速力は彈丸の速力に千萬倍す、彼は容易に大なる機械を運轉す、彼の力は引力なるか、學者曰く『熱が彼を動かすなり』と、然らば熱も彼れと同様の速力を以て動けるなり、熱は何者が動かしむるや、思へ、熱が即ち分子動に非ずや、分子動の外に火と云ふ者ありて之れを發すと思ふこと勿れ、熱を加へざるも水の分子は常に動けり、水は柔かなるが爲めに動くと思ふ勿れ、鐵の分子

も常に動けり、鍛へたる正宗の刀は柔かなりと云ふ可からず、然れどもアトムは刀身の中に在りて活躍せり、刀を叩けば鏘然として響きあり、響くは何ぞ、極微分子と極微分子との相觸るゝに非ずや、彼れは千年萬年動きて止まず、自ら愛する者と抱合して飽けば卽ち又他の者と抱合す、友を變へ又友を變ふること手を翻せば雲と爲り手を覆へば雨と爲る人間の親疎の交情に異ならず、彼れを死物としては到底了解す可からず、故に學者は彼れの活躍を稱して極微分子の舞踏(ダンス)と云ふ、彼れは舞踏するのみに非ず又能く唱歌す、千年萬年彼れは唱歌して止まざるなり、彼れの唱歌は溢(あふ)りに細微なるが爲めに吾人の耳は之れを聞けども感を發すること能はず、只耳よりも更に微妙なる吾人の眼のみ之れを感取して之れを色と名づく、青黄赤紫、燦爛として吾人の眼に美くしき色と云ひ彩と云ふ者は、總て音響と同じく極微分子の響動たるに外ならず、此の細微なる響動は大なる物體動と同じく自動なり、他物より動かさるゝに非ず、自から活けるが故に自ら動くなり。

九項、物質の活ける所以の四

更に化學者の云ふ元素と元素との親和力に至りては、物質が活けるのみならず、人間の有する愛憎の如き激烈なる情をすら有するかと怪まるゝ者あり、酸素の一と水素の二とを接着せしむれば猛然として抱合す、其勢の急なるや爆發して電氣を起すなり、故にゲーテは『親和力』と題する小說を著し、元

素の力を以て男女の相愛する情を說かんとせり、今の世に於て最も恐る可き武器とするニトロ、グリセリンの如きも斯かる親和力に對し、離間をのみ事とする窒素の嫉妬心を利用したるに外ならず、進化論の大家、生物學の泰斗エルネスト・ヘッケル曰く『生物の最初に存する雄細胞と雌細胞との相慕ふ力は元素の親和力より來ると云ふの外、解釋する方法無し、最も進步したる人類の男女の相慕ふ戀愛の情とても唯だ此の力の向上したるものに外ならず』と、更に奇なるものあり、人間に男女の情を抛擲して獻身的の事業に從事し一世の先導を以て目せらるゝ獨身者あると同じく、元素にも全く親和力を有せざるものあり、人間に於てはナイチンゲールの如き、スペンサーの如き卽ち是れにして、元素に於ては、曩に東京の帝國大學が空氣液を製するの際に得たるヘリユム、ネオンの類及びアルゴン、クリプトン、ゼノン等是れなり、此の諸君は新しき天文學者の說く所に由れば、情緒纏綿の煩無きが爲めに、志士仁人が事業建設の爲めに鄕國を脫する如く、逸早く天界を脫出し、常に宇宙の一方に星雲を呼集めて新天體を建設するの先鋒と爲る、故に近時の天文學者は此の諸君を尊稱して『天體(コスミック)建設の先驅者(パイオニヤ)』と謂ふと云ふ、事偶然に似たりと雖も、亦奇とす可し。

十項、元素の元素

猶溯りて元素の奧を見んか、化學者の云ふ元素は未だ物の最元に非ざること、近時學者の認めんと欲

する所なるが如し、吾人が專門學者の『極微分子よりも微なる分子』に關する說を聞くは、最近十年來幾回なるを知らず、其大意に曰く『各元素に一定量あるを見れば、元素の奧に元々素あるべし、元々素は單純同一の質なるも、其結合の差異に應じて種々の元素と爲るのみ』と、而して其說の歸する所は益々物質の死物視し難きを證す、其說に由れば、『元々素は總體に同一なるも中に唯だ相愛して接近を欲するの傾向と相憎みて接近を嫌ふの傾向と有り、其の愛の部分は相接し相凝りて力の起點を生ず、是れが卽ち眞成の極微分子なり、既に起點を生ずれば、其の力は他よりも强きが爲めに益々相愛する者と合同して其の大を加へ、元素と爲り物質となる、而して相憎む部分は此合同の爲めに緊張せられて反抗の力を生ず、宛もゴムの紐の中程を所々に括り絞りたるが如し、絞りて收縮する部分大なれば大なるだけ他の部分は之れに緊張せられて反抗の力を大にし其の絞りを解き開かんとす、斯くして集る者は益々集り、重厚と爲り、反抗する者は益々稀薄と爲る、今日の物質は重厚の極にして宇宙全體の消極力を集めて陰動し、稀薄の極は卽ち今日の精氣(イサア)にして宇宙全體の積極力を集めて物質に對して陽動す、宇宙一切の現象は收縮と緊張と、別言すれば物質と精氣との陰陽兩動の爭ひ、(卽ち愛憎の爭ひ)より逼出せらる』と、是れ最新の說にして又學者の推理力の達し得る最奧の解釋ならん。

十一項、學者の斷言を聽け

聽けや、物質の力は究め究めたる曉に至り、終に愛憎の情に比す可き一種の心的現象に歸したることを、心的現象は卽ち活ける現象に非ずや、ヘケル之れを解して曰く、『物質に愛憎の念ありとは、二千年前エンペドクリス一派の唱へたる舊說なるも、今は理學の進み進みたる結果、更に明白なる根據に於て、物質に愛と云ひ憎と云ふ如き心的現象あることを認めざるを得ざるに至れり、物質の活けるとは余自らの活けると同樣に確實なり、然らざれば以て宇宙の理を了解するに由なし』と、蓋し物質を研究する今日の學者にして此の斷案に達せざる者は猶ほ研究の淺きなり、ネエゲリ曰く『物質の本來活けることを認めざれば今の世に奇蹟を信ずるなり』と、ポール・ケーラス曰く『萬物は總て活きて動けり』と、フエヒネル曰く『地球も活けるなり、能く生物の有するが如き隨意動を有して且つ能く一切の生物を產むに非ずや』と、バウルゼン曰く『宇宙は活物なり、疑ふ者は其神經組織を實見するまで信ずると能はざるか、然らば見よ天體に充滿する物質は汝の腦の中樞を組織する灰白物質と同一には非ずや』と。

十二項、人の動と物質の動

是れに至りて、翻りて人なる者を見よ、人は自ら活けるに相違無きも物質と何の異なる所あるや、彼れは能く動く、然れども動くより以上には何事をも爲す能はざるなり、動くは人の專有に非ず、物質も亦動くなり、彼れ曰く我には心ありと、然れども人に心あるとは人を他觀する者の知り得る所に非

ず、宛も人が物質を他觀して、物質に心あるを知り得ざるに同じ、人に心あることは唯だ自個と云へる地位に立ち、自觀して始めて之れを知る、自ら觀れば我が動くは成るほど外物の引力の爲めに動かさるゝに非ず、心ありて始めて動くなり、然れども心は他人の地に立てば、目以て視る可からず、手以て捉ふ可からず、唯だ自ら觀て其の心なることを感ずるの外なきなり、然り自ら觀て我が動くは即ち我が心なることを知ると雖も、他人の動くは何故に心なるを知るや、曰く唯だ類を以て推して知るのみ、實は察するのみ、我が動くは我が内より見れば我れの心なるを以て、人の動くも其の人の内より見れば定めし其の人の心なる可しと察するに過ぎず、類似を以て推知するに非ずして何ぞや。

茫々として我が前に動く者あり、我れ之れを人と云ふ、我に似たればなり、我れ其人に心あるを知る、我に心あればなり、我が心動かざれば我が體は動かず、我が體の動くは我が心の動くより來る、然らば彼れも彼れの心動かざれば彼れの體動かざる可く、彼れの體動くは彼れの心動くより來るなる可し、我れと彼れ外觀相同じ、何ぞ自觀も亦同じからざらんや、我れは類似を以て察知し能く彼れの活人たるを認む、彼も亦類似を以て察知し我の活人たるを認むるならん、我れの知る所は、單に類似を以て推察するのみ。

然らば何故に一歩を進め此の類似の推知法を物質に及ぼさゞるや、動くは人のみに非ず、物質も亦

動く、動く者の自觀は心なり、物質も自觀すれば必ず心ある可し、唯だ心は他より觀るに由なし、物質の心も自ら物質たる地位に立たざれば知るに由なきのみ。

十三項、近世哲學の『動』の定義

然り、心は知るに由無しと雖も心と動とは別に非ず、動を自觀すれば心にして、心を他觀すれば動なり、其實同一なり、此理を解し得ざる者は近世の大哲學者フエヒネルの言を聽け、曰く『物の眞體は環の如し、外より觀れば、總ての部分が中高にして、内より觀れば總ての部分が中低なり』と、觀る所の内外は全く反對の感を爲さしむ、故に今日の學者は動を定義して曰く『動は心なり』と、動く者は皆活けるなり、心あるなり、動の即ち心なることを認めずんば、宇宙萬象の間斷無き變化起伏は其の本源を合點するに由なし、萬物活動と云ふ一語は形容に非ず事實なり。

十四項、誤解を誡む

然れども誤解する勿れ、物質の心は人の心の如く高尙なるに非ず、心たる本來に於て同一なるも其の發顯の程度に於て相違あり、人は最も進化し向上せる物質なり、故に其心も進化向上せり、物質は進化の度低し、未だ神經的組織に達せず、此組織に達すれば動も亦向上して靈妙なる喜怒哀樂の度をまで現はすに至り、此の組織に達せざれば心も唯だ一の素質として存し、千篇一律に落ると云ふ動を現

はすのみ、長へに引力說の方式を以て說明せらるゝのみ、然り落るは千篇一律なりと雖も、漸加動あり圈狀動あり、伏動あり起動あり、一理變幻して幾樣の態を爲す、人間の心千樣萬態なりと雖も、實は一理の變幻に外ならず、此者必ずしも彼者よりも千篇一律ならざるに非ざるなり。

十五項、確定不動の斷案

是に至りて一の斷案を下して云ふを得ん、曰く『現象は他觀なり、實體は自觀なり、他觀は物質にして自觀は生命なり、心力なり、生命心力を併稱して心靈と云ふ、萬物は他觀せば物質と見え、自觀せば心靈と見ゆ、心靈の現象が物質にして、物質の實體が心靈なり』と。

故に心靈と物質とは別にして實は一なり、環の內外たるに過ぎず、之れを外より觀て、現象として研究するを科學とし、之れを內より觀て、實體として研究するを哲學の本領とす、科學哲學實は一なり、猶ほ物質心靈の實は一なるが如し『一元論』の稱ある所以なり、然り一なりと雖も內觀は外より研究するに由なし、故に吾人自らの自觀を本とし、類似より類似に推及ぼして之れを研究するのみ、科學と哲學と方向を異にするは止むを得ざるなり。

人は自個の身體が物質より來るを知る、而して身體の內觀たる心靈が物質の內觀より來るを知らず、漫然として自ら稱す曰く『物質は死物のみ』と、是故に人の生命心思あるの理由が終に解す可からざる

に至るなり、而して其の解す可からざるの極や煩悶して俄に發心して曰く神曰く宗教と、而かも亦途に神の何たる、宗教の何たるを知らざるなり愚も亦甚し。

物質は物質より來る、物質以外より來る能はず、心靈は心靈より來る、心靈以外より來る能はず、宇宙は物質の海にして實は心靈の海たるなり、物質は多樣なりと雖も唯だ一にして宇宙に磅礴す、心靈も表顯を異にすと雖も、唯だ一にして宇宙に磅礴す、實は宇宙即ち心靈なり、請ふ一歩を進めて宇宙を解察せん。——(天人論拔萃)——

深川區市會議員二級選擧に際し二級公民に送る書信

第一信

拜啓　小生等は先日より深川區選出市會議員二級候補者として太田信治郎氏を推薦致し候儀に附き旣に其意見を申述べ候へども猶ほ有權者諸君の御一考を煩し度き儀有之重ねて申述べ候

今や市政革正の聲は殆んど全市に漲り、市民一般が此機を以て市內の惡弊を一掃せんと希望する際なるに、若し深川區の二級公民諸君が獨り此輿論に負き、再び常磐會の巨頭を出す樣の事ありては全市

民の遺憾は一方ならざる可く、のみならず決して深川區の名譽にも利益にも之れ有るまじくと相考候。

勿論二級選擧諸君は區内の上流社會にして私情の爲めに公けの義務を輕んずる如き事は萬無かる可く、最早や充分御勘考の上、確たる御決心有之候事とは存候へども、市政の精神は自治の精神にして東京市は東京市民自ら治むると同じく、深川區は深川區民自ら代表者を出す可き義と存候、然るに舊當磐會の領袖は郡部より入込み候人に候、斯く郡部の人物をして東京市を支配せしめ、他區の人をして深川區を代表せしむるは、餘り區内に人無きの譏りを免る可からずと存候、幸ひに太田氏は純然たる深川の人にして家柄も人格も、最も深川區選出の市會議員たるに適當と存ぜられ候、斯かる人を置きて他の輸入人物を擧げ候は如何に平生の恩義又は情實の爲めとは申ながら公私の輕重を顚倒する者に當る可く候、恩義は私事にて候、選擧は公義にて候、投選權を以て平生の私恩を返すの用に供し候例は、世間往々有之候へども、確かに自治の精神に負く者に御座候、此邊の道理篤と御考への上、深川區の聲譽を傷くること無き樣願ひ度、猶ほ二級三級を通じて成る可く非難少き熱誠正直の人を當選せしめ候樣御盡力下され候へば、弊害に弊害を重ねたる全市政も自然と改善せらるゝ儀と存候まゝ此儀重ねて得貴意候　匆々頓首

大正三年五月廿九日

第二信（五月三十日）

拜啓　深川區二級候補者として太田信治郎氏が最も適任なることは昨日申述べ候通りに御座候。

猶は深川區の形勢を聞合せ候に二級有權者諸君の中に兼てより反對候補者森久保氏に淺からぬ恩を受け、取分け土地拂下げ等の事にて大に好都合を得たる人も之れ有り候由、斯る人が森久保氏の當選を希望するは人情の止を得ざる所とも申す可く、小生等も今は斯かる人を咎むる所存は之れ無く候へども、未だ曾て森久保一派より格別の恩義を受けたる事無き人々まで森久保一派に加擔致し候て、矢張り私恩を受けたる樣に疑はれ、或は今後に於て同樣私恩を受け度しと密かに希望せる樣の譏りを蒙り候ては、決して深川區の名譽に之れ有るまじくと存候。

古人も李下の冠、瓜田の靴と申候通り日頃ろ正直に營業し、潔白に生活せる諸君は、斯かる際こそ愈よ以て其正直潔白を事實の上に表明す可き場合と存候。

今や全市を通じて常磐會は市民の攻擊の的と相成り候事、諸君が御存じの通りに御座候、然るに森久保氏は誰も知る如く常磐會の巨魁には候はずや、勿論孰れの區にも森久保氏一派、即ち常磐會一派と種々私恩的又は情實的の關係を有する人は多々之れ有る可く候へども、斯かる人々とても多くは私情と公けの義務との混同す可からざるを知り、斷然として私情を捨て、輿論に從ひ候次第と見受けら

れ候、小生等は切に深川區民諸君が輿論を重んじ公務を盡すに於て、私恩私情に誤まらるゝ事無きを信じ候。

殆んど全市民の眼が今は深川區の選擧場に集注せられ候程の次第なれば、小生等は特に深川區諸君の爲めに斯くは絮々申述べ候、小生等の精神の在る所御賢察被成下度候　謹言

第三信　（五月三十一日）

深川區公民諸君、人の物は人の物にて候、自分の物には之れ無く候。人の物を着服する事は宜しからず候、諸君、市の物は市の物にて候、市の物を着服することは宜しからず候。

宜しからざる人を、市會議員として市に送るは更に宜しからず候、市の爲めにも區の爲めにも宜しからず候、諸君自らの爲めにも宜しからず候。

斯くては深川區の名折れに候、不面目に候、不名譽に候、耻に候、他の區の物笑ひと爲る可く候、全市の爪彈きと爲るべく候、諸君御自身の顏にも拘はる可く候、人は名が大事に候、信用が大事に候、名を汚し信用を失するは、男子の本望に之れ無く候。

曾て深川區が市に送りたる人は、市の物を着服して獄に下り候、その後釜に直りたる人を諸君は更

に推薦し、區の代表者と致され候。

是れは決して諸君の本意には有るまじく候、諸君の中にて、其人と醜關係ある少數の者等が諸君の眼を眩まし候、諸君を惑はし候、醜關係とは俗に云ふ臭い仲にて候、公けには人に云はれぬ耻かしき間柄にて候。

諸君は卅三間堂の拂下げ事件を御存じの筈に候、豊住町の鍵地の拂下げ事件を御存じの筈に候、此れに私腹を肥せし人々が切つても切れぬ腐れ縁と爲り、耻づ可き人を擔ぎ揚ぐるは其の隨意に候へども、之れが爲め何の關係も無き清淨潔白の諸君までが、其の運動に卷き込まれ、偕に共に臭い疑ひを受くることは聊か考へ物に候。

今や二級公民諸君は二人の候補者を有せられ候、一人は森久保氏にて候、一人は太田信治郎氏にて候、森久保氏は多摩泥（タマニー）と云はるゝ常磐派の主領にて候、太田信治郎氏は其履歴に何等の汚點も無き立派の人にて候。

篤と御較べの上御取捨之れ有り度く候　敬具

第四信（六月一日）

深川區公民諸君、森久保氏は諸君に向ひ、頻りに電車線路の延長を約束せられ候由、電車の線路は

豫定にて候、森久保氏の力にて之れ無く候、現に森久保氏の選擧區ならぬ他の區には大に延長せられたるに候はずや、森久保氏を擧げたる深川區が最も後へ廻されたるに候はずや、森久保氏出でずと雖も、今は深川區が延長の順番に相成り候。

己れの功にあらぬを、己れの功の如く述べ立つるとは、扨は森久保氏は少々嘘を申され候人と存せられ候。

今や全市に渡り多摩泥と稱せらるゝ森久保氏の一派は甚だ悲境に陷り申し候、常磐會攻擊の聲が到る處に沸き返る如くなるは諸君の御耳にも入り候事と存候、深川區の諸君が森久保氏に忠義を盡され候とも次の市會に森久保氏の子分が多數を占むることは期し難く候。多數を占め得ずして森久保氏は如何にして電車を延長成され候や。

確たる見込の無きことを、確實の如く約束するは、之れを僞りと申し候。

森久保氏は過る頃、營業稅全廢の約束を如何に守られ候や、諸君は既に森久保氏の約束の價値を御存じの筈に候。

諸君は森久保氏が曾て文書變造と云ふが如き詐欺の罪を犯して、獄に下りしことを御忘れ成され候や。

今までは今までにて候、今は今にて候、諸君が森久保氏の今までの振舞ひを忘れ候は、諸君の美德にも之れ有る可く候へども、一區の名譽は大事に候、全市の名譽は更に大事に候、諸君は虛僞の約束に戀々して全市の名譽を汚す如き權利は之れ無く候。

今までとは時勢が違ひ候、今は何事も革正の時期にて候。畏こけれども宮内省も大英斷を以て革正せられ候、海軍も革正せられ候、絕對多數の內閣さへも革正の聲に取捲はれ候、實に革正は全市全國の聲にして時代の大勢に候、然るに深川區の諸君のみが、革正の何たるを知らず、明白に市政腐敗の張本と云はるゝ人を推し立て候は、罪を時勢に得ること淺からずと存候。

深川區には太田信治郎氏の如き新進の人之れ有り候、太田氏は深川區が生み出したる土地兒にて候、諸君が深川區民の代表者として市會に送る可きは此人にて候、深川區は虛僞の約束に迷ひて多摩泥に代表せらるべき謂はれは之れ無く候、諸君願くは心の中より一切の感情や情實を去り冷靜に御考へ下され度く候、名譽は大事にて候　頓首

第五信　（六月二日）

拜啓　深川區が度々、東京市へ犯罪者を送り出し候は實に嘆ずべき次第に御座候、御存じの如く東

京市政の上に起りたる最初の刑事問題は鐵管事件にして、其爲めに處刑せられたる三人（即ち世に云ふ三醜）の一人は深川區選出にて市の常設委員高尾琢磨にて候ひき、次に出でたる利光鶴松と申すは所謂る十醜の巨魁とし首犯として重禁錮と罰金とに處せられ、莫大の追徵金をも課せられ候、續きて出でたる森久保作藏は破廉耻罪の實決を經て來りたるにて、今回も亦た選擧を爭ひ居り候、幸ひに近頃は久しく犯罪沙汰を聞かざりしに、又も小板熊吉の如き詐欺取財者が出で申し候。

斯くまで犯罪者を市へ送り候へば、如何に區民一般が清淨なるにもせよ、他區に對して面目を失し候儀なるに、猶ほ公民諸君の中に公々然として森久保氏の當選を希望する方あるは小生等の解せざる所に御座候。

御自分達が森久保氏に私恩を受け候爲め、猶も引續き私恩を受けんとの希望にて窃かに森久保氏に投票するは隨意とするも、他の清淨潔白の選擧者をまで勸誘し、同じく臭團の中に引き入れんとするは餘りの事にて候。

今は革正の時機にて候、今までとは事が違ひ候、革正の聲は全市に鳴り渡り候、犯罪者を選擧す可き時に無之候。

諸君、市會議員は諸君の代表者にて候、清淨の人は清淨の代表者を出さる可く候、最早や深川區は

四人まで犯罪者を出したるにて澤山に候、猶も同じ事を繰返し候ては、全市の怒聲笑聲は深川區に集る可く候、悔ゆとも返るまじく候。

幸ひにして太田信治郎氏は清淨の人にて候、深川區に於ける廢税運動の主動者にて候、區内に於ける電車速成の首唱者にて候、立派なる適任者にて候、何とぞ此人を御選び下され度く候、犯罪者に戀せざる樣願ひ度く候　謹言

第六信（六月三日）

拜啓　深川區の二級候補者として森久保氏と太田信治郎氏の優劣は篤と御考へ下され度く候、森久保氏は深川の人に之れ無く候、太田氏は深川の人にて候、森久保氏は虛業家に候、太田氏は實業家に候、森久保氏は老人に候、太田氏は是れよりが盛りに候。

森久保氏は既に働きたる出し殼にて候、太田氏は是れより働く可き出花にて候、深川區民は此上の發達無き老物を推し立てゝ、是れより發達すべき有爲の人物を妨ぐる心に候や。

小生等は敢て森久保氏が刑餘の人にして太田氏が清淨の人なるとを申すまじく候、過去よりは未來が大事にて候、我が土地に是れより發達すべき人あらば是れを發達せしむるが土地の人の義務なる可く候、人物經濟なる可く候、我が土地より榮え出づる出花とも云ふ可き人を壓服するは大なる不得策

にて候。

森久保氏をば今後市の事業を動かし得る手腕の人と思ふは、時勢を知らざる誤解にて候、諸君、時勢は强き者にて候、今は時勢が違ひ候。

森久保氏の力とする常磐會は全市の擯斥を蒙り居り候、今後には何事をも爲し得まじく候、常磐會の發案と云へば多く葬り去らる可く候、今後は内密の運動などが功を奏する時代に之れ無く候、人格が清淨にして公然議政壇上に立ち得る人ならでは、同情も尊敬も勢力も得られまじく候。

土龍の如く日の目を避けたる運動屋に信頼するは、時勢に逆行致し候。

今は革正の時代にて候、海軍も革正せられ候、宮内省さへも革正せられ候、絕對多數の内閣さへも革正の機運に敵し得ずして一掃せられ候、宗教界の大勢力たる本願寺さへも革正の波に翻弄せられ候、天下に鬱勃し時勢に磅礴たる此の革正の大機運は、舊式なる内密の運動を市政の上に根絕せずには止まざる可く候。

有權者諸君は斯かる時勢の進步を御洞見の上、時勢に相當する新らしき人物を御選び下され度く候、然らざれば深川區をして獨り時勢の進步に遲れしむ可く候、天下の物笑ひたるに至らしむ可く候、而して諸君自らは時代の罪人と目せらる可く候、此儀深く御考へ下され度く候　謹言

第七信 （六月四日）

諸君、愈よ最後の一日とは相成候、二級の選擧は明日行はる可く候。

總て戰爭は最後の五分間に在りと申し候、殊に森久保氏は最後の五分間が最も巧妙なりとの噂に候、定めし種々の手段を弄すべく候、懇請も、膝詰談判も、泣附きも、誘拐も、鑵詰政略も、金錢的買收も無遠慮に行はる可く候。

斯かる種々の醜手段を以て、種々の情實を以て、諸君の良心を買はんと勉む可く候、然れども諸君、良心は大事にて候、金錢よりも大事にて候、慾よりも情實よりも良心は大事にて候。

良心一たび迷へば墮落にて候、何處までも墮落し行く可く候、極惡大罪の人と雖も最初は良心の些細の曇りより迷ひ入り候、總て醜類とは良心の曇りたる人にて候、諸君は決して情實の爲めに良心を賣る可からず候、深川區民の良心は賣り物にては之れ有るまじく候。

諸君、法律が投票を無記名とするとは、選擧者の良心の自由を確保する精神にて候、被選人の名のみを記し、選擧者自身の名を記さゞらしむるは、卽ち諸君を情實の束縛より救はんが爲めにて候、諸君は斷然、醜類の情實や、懇請や、泣附を退け、清淨潔白の人を選擧成さる可く候、情實に搦まり前科者などを投票するは法律の精神に負き候、國の賊にて候。

若し投票の一隅へ陰微なる記號を附し暗に醜類へ内通の合圖を示し候樣の事あらば、其投票は無効にて候、醜類に買收せられたることを自白するにも同じかる可く候、法律に負き候。

即ち諸君は正直なる良心に從ひ、左の如く御記し成さる可く候。

太　田　信　治　郎

信治郎の治の字は明治の治にて候、通例の次郎の次には之れ無く候。

小生等は必ず諸君が、清淨無垢の良心に從ひ、清淨無垢なる人を選擧せんことを切望仕り候。二級の候補者に清淨無垢の人は太田信治郎氏の他には決して之れ無く候、呉々も良心は大事にて候。草々謹言

第八信（六月五日）

拜啓　投票は今日にて候、深川區二級有權者諸君は、投票所に行く前に必ず此文を御一讀下され度く候。

諸君は森久保氏を選び候や、太田信治郎氏を選び候や。

森久保氏は郡部の人にて候、太田氏は深川の人にて候。森久保氏は三多摩の壯士の老いたるにて候、太田氏は深川の實業家の若きにて候。森久保氏は彼れ是れ屋にて候、無業にて候、太田氏は材木問屋

にて候、良民にて候。森久保氏は既に働くだけ働きて此後の發達の止まりたる人にて候、過去の人にて候、太田氏は既に働きたる上に、此後の發展限り無き人にて候、豊富なる前途を有し候。森久保氏は明治三十四年に懲役より歸りたる人にて候、破廉恥罪の實歷を有し候、太田氏は清淨潔白にて候、立志傳中の人にて候。森久保氏は人を誘惑して世を送り候、太田氏は獨立自營にて家を興し候。森久保氏の行ひは隱密にして暗夜の如く、太田氏の行ひは公然にして白晝の如くに候。

太田氏は全市の輿論に賞讃せられ候に、森久保氏は全市の非難を身に集め候。太田氏は不偏不黨なるに、森久保氏は常磐會の元兇にて候。太田氏は演說言論を以て選擧を爭ひ候に、森久保氏は情實と誘惑とを以て運動致し候。太田氏は天下清議の士より推薦せられ候に、森久保氏は子分醜類のみに助けられ候。太田氏は公益の爲めに立てるに森久保氏は私腹の爲めに爭ひ候。太田氏の運動は清淨にて候に、森久保氏の運動は腐臭を發し候。太田氏を擧ぐれば市政は自から革正の方に向ふ可きに、森久保氏を擧ぐれば、市は益々腐敗の淵に陷る可く候。太田氏を選ぶは良心にて候に、森久保氏を擧ぐるは情實にて候。

要するに太田氏を擧るとは深川區の美にて候、名譽にて候、深川區の光輝にて候。森久保氏を擧ぐるとは醜にて候、不名譽にて候、深川區を全市の仇敵と致すにて候。

以上は單に事實の有りの儘を述べたるにて候、願くは太田信治郎氏に御投票成し下され度く候。

謹言

第九信 (六月八日)

拜啓　先日來市會議員選擧に於て、小生等は貴區に對し太田信治郎氏を推薦し、屢々衷情を有權者諸君に披瀝致し候所、諸君も亦小生等と所見を同じくせられ、奮て太田氏に投票し、氏をして大多數を以て當選するの榮を得せしめられ候段、小生等が深く感謝する所に御座候。

今や東京市會は大部分、新なる非常盤派議員を以て充たされ、舊來の醜分子は極めて少數と相成り候、是れ全く市民の多數が市政革正の急を感じ、一切の私情を抛擲して正義公道の重きに從ひたる爲めに御座候へども、特に深川區民諸君が、强頑なる醜魁を屠るに於て一歩も弛退せざりしは、全市第一の殊勳とも申す可く候。

然れども市政革正の事は一時の奮發のみにて成し遂げらるゝ儀には之れ無く、永久に堅忍不拔の精神を以て、市政を監視し議員を督勵することを要し候。

小生等の團隊、卽ち此度の記者聯合會は單に選擧に對して正を助け邪を排するの目的を以て起り候儀なれば、選擧の終ると共に解散すると最初よりの約束にて候、されど小生等の精神は選擧の時も平

日も、更に異なる所之れ無く候故、假令ひ解散するとも怠らず議員の行動と市政の實際とに注意致す可く候、願くは諸君に於ても選擧當時の精神を今後平日の精神とし、毫末の油斷無き樣御勉め下され度く候、畢竟市政の腐敗は市民の油斷より生じ候次第なれば、油斷ある所に惡政あり、注意ある所に良政ある者とお互ひに覺悟を引締むると肝要なる可く候。

右の意味は諸君に於て充分御承知の事とは存じ候へども、御禮の序に申述べ置き候。

更に此機會を利用して、諸君の御健康と萬福とを祈り候　早々頓首

市政革正記者聯合會

代表者　黑岩周六

須崎芳三郎

大谷誠夫

松井廣吉

深川區二級有權者諸君御中

諸名士の談話

黒岩涙香君を懐ふ

内村鑑三

余は余の一生の間にたゞの一回新聞記者となつた、それは黒岩涙香君の下に萬朝報に筆を執つた事である、初めは其英文欄を引受け、後には數年に亘り和文を以て余の感想を投書するの名譽に與つた、余は此の間に親しく涙香君と交はるの機會を與へられた、君の令兄四方之進君は明治の初年、札幌農學校に於ける同窓であつて今日に至るも猶ほ親交を繼續する信仰の友である、君の令姉秦夫人も亦余の青年時代に於て是れ又信仰上の交際を重ぬるを得し貴き友である、四方之進君は稀れに見る基督教的紳士、秦夫人は同じく敬ふべき基督教的淑女、而して涙香君は彼等の愛する弟であつた、涙香君に君の兄姉の宗教的信仰はなかつた、然し乍ら何處かに黒岩家の高き貴き氣品があつた、彼の外面にのみ注意せし世人は此氣品を見逃したやうであるけれども、君に親しく接せし者は時々之を見留めざるを得なかつた、姉君は時々余に告げて『ドウゾ周六も信者にして下さい』と云はれた、然し是れ余の到底爲す能はざる所であつた、君は君の兄姉の宗教にして又余の宗教なる基督に對して常に厚き尊敬を表せられた、君自身も亦信者たらん事を欲せられし時もあつたらうと思ふ、然し乍ら君に取り現世

は餘りに興味が多かつた、君は現世を棄てゝ來世を取らんとするには餘りに多情であつた、其結果として『天人論』に現はれたる君の神觀以上に神に接近する事が出來なかつた、是れ君に取り大なる損失ではなかつた乎と、君の令兄と令姉と余とは思ふた、然し勿論君はさう思はなかつた。

涙香君は所謂インテンス、キヤラクター(熱烈なる性格)であつた、即ち若し神たらずんば惡魔たるも辭せずと云ふやうな質の人であつた、故に君は何事にも第一番とならんと欲した、第一番に成り得ざる事には手を附けなかつた、五目列べの技に第一番と成らんと欲して君の生涯の貴重なる滿二年を費した、哲學に沒頭すれば寢食を忘れて其研究に從事し、一年ならずして一角の哲學者となられた、すべてが此類であつた、余は曾て君に勸むるに萬朝報を我國第一の新聞紙となさん事を以てした、然れども品質的に第一番となさんと欲せば數量的には降らざるを得ずと言ふた、君は此提案を納れなかつた、品質的にも數量的にも第一番となさんと君は言はれた、斯の如くにして君は餘りにアムビシャスなる(慾高き)が故に屢々不可能事を計畫した、余を以て見れば是れ君が生命を縮めし其の理由であると、絕對的完全は此世に於ては得られない、天を得んと欲すれば地を棄てざるを得ず、質に於て優らんと欲すれば量に於て劣らざるを得ずとは有限界を支配する避くべからざる法則である、然るに涙香君は此法則に超越せんとした、何事に於ても、亦何れの方面に於ても第一番にならんと欲した、余は此

點に於て君が哲學的（フイロソフイガル）自己拋棄（セルフレナンシエーシヨン）の秘義に達せられん事を望んで止まなかつた。

余は個人として涙香君に負ふ所が多い、君は余を知つて呉れた極めて少數者中の一人である、君の援助と奬勵となかりしならば余の一生は或ひは隱遁の中に終つた乎も知れない、君は敵には辛く當つたが味方に對しては甚だ甘かつた、君の趣味は稍や粗雜（コース）であつた、然し君の心情は濃厚であつた、君は余が此世に於て交はるを得し最も著るしき人の一人であつた。

凄味を帶びた眞劍の評論家

關　和　知

余の涙香先生と親しく相識つたのは、明治四十年一月の頃、余が米國より歸朝匆々、故圓城寺天山君の推薦によりて、朝報社に入社したのに始まる、筆硯の間に直接指導を受けた深き因みは、今日に至るも決して忘れることは出來ぬ。

涙香先生の特色に富める性格、波瀾に充てる歷史は何人も認むる處、一代の傑物たるは固より論を須たぬ。政論家として、文藝家として、思想家として、新聞業者として、社會改革者として、天下に貢献したる事功は眞に偉大なるものである。

長き生涯の間には隨分非難も受け、又缺點も有つたであらう。然し、苟くも彼れが如き强烈なる勇氣と、高度の情熱と、精到なる智力とを有て、人世の奮鬪に從事し、屈せず、撓まず、徹頭徹底的なる、所謂男子らしき男子は世多く類を見ない。彼の風丰に接したる者は何人も其精悍の氣に打たるゝ如く、彼の文章、彼の言論は犀利直截直ちに劍氣の人に迫るものあるを覺ゆるのである。

萬朝報が片々たる一小新聞を以て堂々大新聞を壓倒し、斯界の革命兒を以て目されし如く、黒岩周六の名は權勢富貴の前に常に陰たる一敵國の槪を示して居つた、無冠宰相の抱負は確に彼れに於て之れを認むるとが出來る。嘗て憲政擁護運動の先驅となり、尋で山本內閣包圍軍の砲手となり、大隈內閣擁立の首唱となり、實際政局の變機に際して表裏に活躍したる當年の事蹟は、今尙余の眼前に彷彿たるを覺ゆる。特にシーメンス事件の當時、言論界の權威を楯に內相原敬に肉薄して血を見るに至りたる如き、彼れならでは眞似も出來ざる所にして、彼と原とは眞に一對の好取組であつた。

涙香先生を亡ひたる我新聞界、評論界は何だかもの淋びしい樣な氣がする、同時に我政治界に活氣を減じた樣な氣がする、原敬主義萬能の現代には彼れの如き凄味を帶びた眞劍の評論家、政治家が特に必要である。是認するか、否認するかの判斷を筆舌のみならず直ちに起て自ら制裁を與へずんば止まざる底の意氣あり骨力ある人物が欲しい。此の意味に於て余の涙香先生追慕の念は一層切ならざる

を得ぬ。

涙香先生の思ひ出

山縣五十雄

謙遜でも何でもなく、私の今迄の生涯は所謂成功でない。身體も意志も弱く、體力も智力も膽力も乏しい私が成功しやう筈はない。然も私が今日迄平凡ながら比較的安樂に日を送り、別に善事もせぬ代りに惡事をした覺えはなく、大した墮落もせず、友人にも厄介をかけず、社會にも迷惑を及ぼさずして暮して行くことが出來たのは消極的の成功であると思ふ。此の消極的成功を占め得たのは幼時兩親の膝下で受けた訓戒に負ふ所が少くないのは勿論であるが、其の他に私の性格を形造くるに與つて最も力のあつた三偉人の感化に因る所が多い。私は此等の三偉人を最大の恩人として永く感謝と尊敬とを以て記憶して居る。其人は即ちゼームス・マードック、内村鑑三及び黑岩涙香の三先生である。

マードック先生は私の高等學校に學んで居た頃に教へを受けた恩師で、此人から私は英文を書くことの大部分を學び、社會主義に近い思想を吹き込まれた。内村先生には『萬朝報』で英文記者をして居る頃數年の間机を並べて親近し、基督教的の感化を受けることが頗る大であつた。私の有つて居る

思想は讀書より得たもの丶他は大部分此兩先生より與へられたものである。而して新聞記者として私を養成し、訓練して、遂に私をして操觚界の人たらしめたのは全く涙香先生である。若し涙香先生に引立てられることがなかつたならば、私は何になつたであらう。恐らく中學校の英語教師位で了つたこと丶思ふ。新聞記者となつた事を私は感謝して居る、從て私は涙香先生に對して多大の恩を感じて居るのである。

私は新聞記者にならうとは豫期して居なかつた。それが奇妙な機會から涙香先生に知られ、先生に勸められて斯界に入つたのである。明治二十八年頃のことであつた。其頃私は帝國大學の文科に學んで居たが、怠け者で品行も不良で、學校は缺席勝ちで、試驗には度々落第する、其の上に私は故田岡嶺雲と共に『青年文』なる文學雜誌を發行して文科の教授や先輩の文章著作に頗る無遠慮なる批評を加ふるなどの無禮を働いた。結局は除名處分を受くることになつたが、こは當然來るべき運命なので、學校當局の處置に對し怨む所は少しも無かつた。然しこれから學生生活を止めて獨立の生活を營まねばならぬこと丶なつたのであるから、一寸身の振方に困つて居た。ところが其頃交つて居た友人中に原抱一庵といふ文士があつた。此人とは後に文藝上の爭ひから不和になつて、私は今でも其事を遺憾として居るのであるが、其頃は屢々互に往來して居た。原氏は其頃『萬朝報』の客員の資格で、文藝

上の記事と評論とを擔當して居られたが、私が大學から除名處分を受けた時、其事を涙香先生に話された。ところが先生は『大學から除名されるやうな男なら新聞記者にはよからう、一度會つて見やう』と言はれたさうで、それを原氏が私に傳へてくれた。

私は先生の此一言に心から感激した。我を知る者は黒岩氏ばかりであると、私のヴァニチーが私をしてまだ會はぬ先生を敬慕せしめた、そして私は一も二もなく先生に面會することを希望した。かくて先生に原氏の紹介で初めて御目にかゝつたのは鎧橋附近の或玉突屋であつた。其頃先生は玉突に熱心で、私も此遊戯に耽つて居たから、會見の場所が原氏によりて玉突屋に定められたのであつた。私は一二ゲーム御相手をして後、暫く御話をして其日は別れたが、やがて先生から原氏を介して朝報社へ英文記者として入社しては如何かとの申込があつた。

これについて私は永らく『萬朝報』の一特色であつた英文欄について少し陳ぶる所があらねばならぬ。日本の新聞に英文欄の最初に設けられたのは『萬朝報』であつて、涙香先生の創意になつたものである。何でも最初は村松守義といふ老練なる英文家が擔當して居られたさうだ。私が先生と初めて會見した頃にはイーストレーキ氏が執筆し「隔日二段宛掲載されて居た。ところが校正に誤謬が多く、折角の好文章がその爲めに引立たぬから、私にその校正をすることと短い雜報を書くことゝを引受け

るやうにといふ申込みであつた。私は既に述べた通り先生の知己の一言に感激して居たのであつたから喜んで入社した。それで初めのうちは隔日二三時間づゝ其頃三十間堀にあつた社へ出ることゝなつた。最初の俸給は十五圓であつたが、先生は私を慰めて『餘りに少ないやうだが、それでも私が初めて新聞記者になつた時よりは優です、私の最初の月給は七圓であつた』と言はれたことを記憶して居る。然し其頃の十五圓は少なくも今の七八十圓に當るであらう。時々近所の天金へ、午飯を食べに行つたが、飯が一人前三錢、天ぷらが一人前十五錢であつた。其位物價が安く、且つ少年雜誌などに原稿を書いて他からも多少の收入を得たから、私は大した不自由もせずに暮すことが出來た。

斯のやうな次第で私は初めて新聞記者生活に入つたのである。卽ち新聞記者として私を看出して下さつたのは涙香先生で、こればかりでも私は先生に對し感恩せねばならぬのであるが、それから十餘年間私は先生の訓練を受けて、新聞記者として世に立つことが出來るやうになつたのであるから、私が先生に負ふ所の恩は眞に大なるものなのである。それについてもう少し書くことを許されたい。

私が入社して三箇月ばかり過ぎた後、內村鑑三氏が英文記者として入社せられ、今迄隔日に出た英文欄が每日出ることとなつた。其時涙香先生は私を呼び寄せて此事を語り「今迄は見習同樣であつたが、今後は正社員として働いては如何かと勸められた。勿論私に異存はない、其場で御請けをしてそれか

ら毎日出社することゝなり、私の月給は一躍四十圓に引上げられた。

それ以來明治四十一年の春『ソウル、プレス』に轉ずる迄十餘年間私は朝報社に勤續した。始めは唯英文欄に執筆するだけであつたが、後には邦文で外報や隨筆やうのものを書くことを許され、やがて言論の一部を引受け、又編輯の樞機に參加するの特權を與へられた。私の新聞記者としての生活中此間は最も愉快であつたと共に、又最も有益な時であつた。圓城寺天山、內藤湖南、田岡嶺雪、河上清、幸德秋水、堺枯川等の秀才が相次いで朝報社に集まつて朝報社は文壇の梁山泊の感があつたのみならず、『萬朝報』の聲價は旭日の如く上り、其の發賣紙數は飛躍的に增加した。社內には活氣充溢して、編輯局は每日のやうに縱談橫議の壇となつた。理想團が組織されたのも其頃である、淚香先生が『天人論』を著はして一世を驚倒せしめられたのも其頃であつた。日露戰爭に先立つ二三ヶ月は殊に興味が多く、每日主戰論者と非戰論者とが口角沫を飛ばして議論を鬪はした。結局非戰論者たる內村先生、幸德、堺の二氏は退社せらるゝに至つた。

淚香先生の偉大なる性格については私が一々書く迄もない。先生は獨創力を豐に有つて居らるゝと共に、他の言を容るゝ雅量を有つて居られた。『萬朝報』の編輯改良等について私は幾度も建策したが、いつもそれが採用さるゝの愉快を得た。先生は又飽く迄も男性的であると共に、其心の奧底には溫い

深い愛情が流れて居た。私は先生の深切に幾度感淚を垂れたか知れない。先生は又寛大で、將に將たるの度量があつた。私は十餘年の久しき一度も叱られた事がない、俸給の如きは知らぬ間に增して下さつて、此點について私は不平を感じた覺えはない。

私は先生の下に働くことを大なる愉快とし、大なる特權として居た。幾度か他社からより好き待遇を以て誘惑せられたが、私は朝報社を去る氣は更に起らなかつた。それ程に私は先生に敬服して居たのである。然るに明治四十一年の春先生の膝下を離れて遠く京城に去るに至つたにつきては、私にとりて一の大なる理由があるのである。

私は早くから英文記者として立つてことを志して居た。先生も然かすることを私に常に奬勵して下さつた。そこで『ソウル、プレス』の創立者たり經營者たる頭本元貞氏が明治四十一年の春伊藤公の命を受けて渡米せらるゝ前に、私に京城に於ける其事業を繼承するやうにとの交涉があつた時に當り、其招に應ずべきや否やについて先づ相談したのは先生であつた。私は其時分には朝報の編輯局長をして居たので、私の去ることは先生に多少の迷惑を及ぼす次第であつたのである。それにも拘はらず先生は『ソウル、プレス』の英文新聞である事に鑒み、私に頭本氏の交涉に應ずることを勸められた。其時先生の私に言はれた御言葉は今でも感謝を以て記憶して居る、それは『あなたの御去りになるは朝報社

にとりては損失ではあるが、あなたの將來の利益には代へられぬ。然し退社の後では不利益なる條件でも聞き入れねばなるまいから、退社せずに掛合ひなさい』といふ意味であつたのである。斯の如き深切な雇主が何處に二人とあらうぞ。殆んど子飼ひ同樣の者が出て行かうとする時に、其者の爲めにかく迄も心配して下さつたのである。私の胸は感謝の情で塞がつた。

右の次第で私は頭本氏と交渉するに自ら氣が强かつた、從て利益の多い條件を主張することも出來た。それから愈々相談が纏つて、私が京城に行くことゝなり、先生に告別した時に、先生は又も私の忘るゝことの出來ない深切を示された。『あなたの机は明けておく、京城が面白くなかつたならば、いつでも歸つておいでなさい』私は先生を敬慕し崇拜せざるを得なかつたのである。

先生には一昨年上京中洋行なさる少し前、理想團の送別會上で御目にかゝつたのが最後であつた、先生は『此年になつて洋行して來ます』と微笑されたが、私は其の時にこれが先生の溫顏の見納めにならうとは夢にも思はなかつた。先生の訃音に接した時、私は生みの親のそれを聞くやうに感じたのである。

可愛がつて貰つた黒岩さん

石川三四郎

私は明治三十五六年の頃一年足らず黒岩さんの秘書をして居りました。丁度『天人論』を書いてゐられる頃で、その原稿を徹夜して清書したこともありました時。又その『天人論』の哲學問題で夜明まで議論して、夜が明けてから車で家へ送られたと云ふやうなこともありました、その『天人論』を書いてゐるとき黒岩さんのエネルギーの強いことを泌々感じました。黒岩さんはあんなことを書き乍ら一方では撞球に熱注してゐられて、私にも切りにやれ〳〵と勸められました。けれど元來が内氣な私は遂々撞球には手を出しませんでした。一体黒岩さんは家來を持つことが好きな人でしたから、從順に從つてさへゐれば、いくらでも可愛がつてくれる人でした。併し私は一年足らずでその秘書を止めることにしました。黒岩さんはしきりに引止めて下さつたのですけれど、當時の非戰論に動かされてゐた私は無理にも我を通して遂々やめてしまひました。

それから十五六年經つてから思ひも寄らぬ海の彼方一萬浬のパリーで、あの講和談判の際にほんとに久々でお目にかゝりました。お躰は隨分衰へてゐられたやうでしたが、精力主義の氣力はちつとも衰

へすパリー到着早々から病軀を引きづッて巴里見物にエネルギーを發揮してゐられました。

黑岩さんは精力主義でものに凝り固るやうでしたが、でもそれは無邪氣に子供らしい態度で進んで行つたやうに思はれます。或る時理想團演說會が四谷見附の貸席で開らかれたことがあります。もう演說會は濟んで皆が次の間で夕食をしてゐると、演說が終つた會場では學生達がカルタ會を開いてゐました。それを歸りがけに一寸見た黑岩さんは非常に面白がつて、後に御自分からカルタ會を催したり、大仕掛の競技會を開いたりするやうになつたと云ふやうなこともあります。カルタ會が今日の盛況を來たしたのは黑岩さんの力によつたものです。その他花合せ、自轉車競走等にも興味を持つてゐられました。併しこんなことは他の人が書くでせうから私にこれ位でやめときませう。

黑岩さんは非常に負けぬ氣の人でしたけれど、又非常に內氣(チミツド)な人でもありました。その二つの性質は衝突しさうにも思はれますが、ほんとは黑岩さんにとつてその二つの性質は二つではなくて一つのものなんです。つまり負けぬ氣故に物事をねちりむッつり考へるので內氣のやうに見えるのです。こんな風故どんなに小さい事を始めるのでも、それに徹底しなければ止まない人でした。さき頃パリーに來られた時も大分旅行の準備をしてゐられたと見えて、名所舊跡や地理やは案內役の私より遙かに精通してゐられたのには驚きました。言葉がわからなかつたからこそ案內者の必要があつたのですが、

さもなければ御自分一人でどん／＼見物ができたのでした。

パリー滯在中にこんな奇談があります。或るときパリーの地圖を開いてゐられた黒岩さんの眼にホテルドビルと云ふ朱文字の名前が目立つて見えました。黒岩さんはかねてから御自分の宿のホテルミラボーが第二又は第三流に屬する旅館であるとに不滿を抱いてゐたので、そのホテルドビルをさして、此れは大層大きな旅館らしいから此處に行つて見やうかと云はれるのです。其のとき私はホテルドビルは旅館ではなくて市役所のとだ、日本の新聞記者がよく誤譯する名前だと云ふとをお話しましたら黒岩さんは非常に憤慨して、自分もこれから佛蘭西語を勉强しやうと云はれました。若し黒岩さんが今日なほ存生ならば、恐らく私共よりはずつと優れて上達した佛蘭西語學者になつてゐられたと思ひます。

パリーで黒岩さんと一所にゐる間、黒岩さんは何か私に記念に買つて上げやうと頻りに云はれましたが、さう云ふ場合いつも遠慮がちな私は子供らしくそれに應じて黒岩さんの寛大心を滿足させるとができませんでした。只ルーブルに買物に行かれたとき小さな腕時計を私の爲めに買はれました。それは今黒岩さんの唯一の記念として私の所持品の中に殘つてゐます。別れる時黒岩さんは私が日本へ歸つた曉は私の一身を引受けて下さると固くお約し下さつたのでしたが、不幸にして私の日本への航海

中その訃音に接し再びお目にかゝることができなくなつたのは殘念です。

黑岩さんのおかたみとしては右の時計の他にパリーで撮つた寫眞が一枚殘つて居ます。それは黑岩さん、石川半山氏、大谷誠夫氏、大住舜氏と私の五人が一所に寫したものです。其寫眞の黑岩さんの爛爛たるお眼の輝やきを偲び乍ら私は此の一文を書きました。

棟梁の器局節度

倉辻白蛇

予は明治三十六年十二月朝報社に入社し、四十一年八月迄在社した、涙香先生に親炙し、其謦咳に接することが出來たのも卽ち此の期間である。

朝報社に入社して、第一に受け得たる印象は編輯局內の空氣が如何にも平和で、且つ自由である如うに思はれたことであつた、當時の朝報編輯局は、故人圓城寺天山君が言論部を主宰し、硬派にあつては同じく故人の小林天龍君と松井柏軒君とが主として編輯の任に當り、軟派にありては松居松葉君が其絕倫の精力を揮ふて居た、予は始め論說記者として、一週一度の論文を提出することの外には、これと云ふ仕事がなく、同室の英文記者たる山縣五十雄君や『世界各國』擔當の斯波貞吉君等と談笑

を交ゆるのが毎日の日課の如きものであつた。

其後編輯の圓卓に轉じ、論說の外に助手を勤めたり、夜勤に廻はつたりして、予の仕事も可なり忙しくなつた、併し、如何なる場合にも、自分の自由意思が尊重せられて、少しも不愉快な壓迫を感じなかつたのは、予の終生忘る能はざる朝報編輯局の美風であつた、涙香先生が、其社員に對して寛大なる無干涉主義を取り、記者の個性を尊重して飽く迄自由の精神を發揮し、編輯局を擧げて、一種の自治體の如く行動せしめたる態度は、編輯の各員に不斷の緊張を與へて、却て能率を增進せしめたる聰明なる遣り口であつた、予の知れる範圍に於て、當時の編輯局內には、蔭口にしろ先生を惡口したり、社に不平を漏らしたりする人は一人も見なかつた。

涙香先生の個人的美德として、今も尙予をして嘆稱措かざらしむるものは、社員に對して公平無私に終始したる其超然的態度であつた、多くの場合、多數の人の集まる所には、必ず其所に嫉妬排擠あり、中傷讒悔あり、有德の君子人も、往々片言隻語に誤られて、不知不識の間に其審判を誤るのが普通である、然るに、涙香先生は、豫め此等の煩累を避けんが爲めに、堅く其門戶を閉ぢて追從佞言の進路を塞ぎ、斷じて讒者の近くを許さなかつた、これ一見容易なるが如くして其實至難の業、意思の堅牢なること先生の如き人に非ずんば、到底守り得ざる棟梁の器局節度である。

萬朝報が、創刊以來集年ならずして其の眞價を認められ、殆んど奇蹟的の大成功を贏ち得たる所以のものは、現社長山田藤吉郎氏の細心周到なる經營と相俟つて、涙香先生の犀利なる觀察、豐富なる想像、巧妙なる編輯振りに負ふ所多きは論を俟たざれども、更らに先生が人格の反映とも見るべき執着耐久の力が新聞紙の强き底力となり、萬朝報の特色を其所に築き上げたることも、亦見逃すべからざる成功の一因であらう、實際、一度紙面に發表したる計劃企圖は、何處迄も繼續遂行するのが、朝報獨有の氣魄であり、又涙香先生其人の人格的反映であらねばならぬ。

其寛大なる包容に依て、未熟短才なる予に、新聞記者としての修練經驗を與へたる恩人涙香先生の死は、予に取つて絶大の損失であり苦痛であつた。

黑岩氏と淺野セメント鑛灰問題

鹽谷恒太郎

東京市深川區の中央に今尙ほ巍然として聳えて居る數箇の眞白い煙筒がある、これは人の識る淺野セメント會社の煙筒で今から三年前には此の煙筒から熾んに白い粉を降らし、此の會社を中心として一哩四方の家屋の上は常に雪を戴いた樣に白い粉が積つて居たばかりでなく、此の附近の住民は有害

な粉沫を呼吸するので健康を害した者は尠くはなかつた、それぱかりでなく物干の黒い物は皆白くなるといつたやうな鹽梅で、附近住民の被害は甚だしかつた、併し住民は横暴な資本家の犠牲となり之れに對抗して有害な煙筒を撤廢させる勇氣もなかつた、此の恐るべき有毒な白粉の飛來を停止させ、區民の衞生狀態を復活せしめたのは、黒岩周六氏であつたと云ふても多言ではない。

夫れは大正元年の秋頃であつた、深川の有力者中村富三郎、山崎繁次郎の兩氏は早くも此の有害な淺野セメント會社を他に移轉させるべく憤然と起つた。そして區民を代表して會社に向つて撤廢方を迫つた、然るに代議士服部綾雄氏が仲裁に這入つて協定の結果、爾後五箇年間に他に移轉する事になり其契約書には社長淺野總一郎氏、株主側から澁澤榮一氏が保證人となり、立會人としては河野廣中、故中野武營、故柿沼谷藏の三氏であつた、然るに會社の移轉すべき大正六年十二月末日服部氏は不幸にも渡米して間も無く逝去した爲め區民側の有力者を失ふた、のみならず會社は移轉する模樣が少しもない、深川區民は誰か服部氏に代つて努力する者はないかと其候補者を物色して居たが圖らずも私に白羽の矢が立つた、私も熟考の末該問題は一會社の移轉ばかりでは無く、重大な社會問題で、而も大富豪を屈伏させるのであるから途中で挫折する樣な者でなく、少くとも現代の聲望ある人格者に依賴せねばならぬ事を區民有力者に訴へた、區の有志は然らば誰が其の適任者であるかと私に尋ねたから、

私は萬朝報社長の黑岩周六氏が最も適任である事を主張し、且つ同氏を推薦した、區の有志も之れに賛同し黑岩氏への紹介を私に依賴して來た、そこで私は此の旨を黑岩氏に相談し、初めての會合を淺草の八百善で開いた、出席者は前述の山崎、中村の兩氏と黑岩氏と私であつた、山崎、中村の兩君から該問題の經過を報告して後、是非區民の爲め盡力して吳れと懇願があつた、其の時黑岩氏は『該問題は仲々困難な問題であるから、私個人ばかりでなく鹽谷君と兩人で協力するならば御引受けする』との希望條件を附して承諾したので、山崎、中村の兩君も非常に喜んで之れを承諾し、會合の目的を遂行した。

其後黑岩氏と私は澁澤男を同氏の事務所に訪問した、黑岩氏は先づ澁澤男に向つて口を切つた『深川區民と淺野社長の五年前の契約には大正元年十月迄には移轉すると證書まで取り替して居る、其の證書には淺野社長と澁澤男の印も押してある、然るに其の契約は少しも實行されて居ないのは如何なる譯か、苟くも實業界に覇を成し、人望の高い人々が斯くの如き違約をして居るのは社會の信用を損ねるものではあるまいか』と膝詰的に詰問したので、流石の男も『貴下の御敎示は能う諒解したから早速淺野社長に面會して其の趣を語ると共に、當時立會人であつた中野氏にも交涉を開始する』との事であつたからそこを引揚げた。

其の後會社側では同じく立會人であつた河野廣中氏等と協議する處があつて後、立會人中野氏から我々區民側代表者に對し、『實は五年前契約すると間も無く米國に於てコツトレール鎭灰法が發明され現に米國でも我が深川區の如き問題が各所に起つて居たがコ式鎭灰法が發明されると同時に各セメント會社では之れを爭ふて採用した爲め、降灰問題も圓滿に解決されて居る事を聞いたので、淺野セメント會社でも機械を購入する事になり、既に技師を招聘して目下機械据附工事に着手して居るから、該機械が完備し試驗の結果成績が良好であつたなら移轉をせず圓滿な解決されん事を希望する』との事であつたので更に黑岩氏と私は區の有志に諮つた上、澁澤男と中野氏に向つて一日も早く機械の据付を實行されたき旨を交渉した、而してコツトレール鎭灰機は翌年八月に完成する筈であつたが、八月が九月になつても完成せず遂に十二月となつて全く竣工された、そこで會社では是非我々に觀に來て貰ひたいと云ふので立會つて實驗した、其時會社側では降粉を九十五パーセントを防止すると云ふたが、我々は之れに承知せず九十七パーセントの防止を主張した處、結局九十七パーセントで折合が付いて、多年の問題も無事に解決が付いた、そして會社側では多年深川區民に迷惑を掛けたと云ふので深川區へ金五萬圓、隣接住民へ三萬圓を寄附した、此の深川區民の保健上の大問題を解決させたのは當時深川區有志の愛區心と、我が黑岩氏の努力と奮鬪の賜と云ふべきである。

我が觀たる黑岩君

(上) 山本内閣倒壞の運動

大谷誠夫

畏友黑岩君の晩年に最も近接せるものは吾輩であつた、日夕相見たるを以て只身此山中に在るに緣り廬山の眞面目を識らずの感がある、殊に吾輩は生來日記を草せず、手帖を用ゐざる爲め時日などは全く失念して居る。只朧氣なる記憶をたどりて追懷の忱を表したいと思ふ。

吾輩の黑岩君を始めて識りたるは二十餘年も昔の事なれど、毎日相見て相倶に行動したるは海軍收賄問題に關する山本内閣打破、大隈内閣樹立の時であつた。

山本内閣成立後の勢ひは非常のものにて、反對黨は其勢力區々に岐れて齒も立たず、元老は憲政擁護の飛沫を受け國賊呼りまでされて屛息し、樞密院は倘し山本内閣の政策に反對すれば、山本首相は自己の政見を奏上して聖上の御裁斷を受けんとするの風あり、他の爭議を樞密院にて裁定するは忌む所に非るも、政府と樞密院との爭議は陛下御一人の裁斷に由らざる可らず、此の如きは責任を陛下に歸し奉る虞ありとして樞密院は腫物に觸るゝ如き態度にて山本内閣に接し、心中に不平あるも之を發する能

はず、山本内閣は無人の境を行くの概ありて縦より突くも横より引張るも倒れさうもなく、當時の横綱太刀山が何人にも其身體に觸るゝを許さずして、相手を一突に突飛したる如き觀があつた。

此時に方り端なくもシーメンス事件なるものが暴露し、院内にては島田三郎君や尾崎行雄君が主となりて之れを攻撃し、院外にては吾輩なども其主動者の一人に加はり院の内外を通じて大運動が起つた、人心は見る〱内に緊張し日に日に昂奮して遂に日比谷事件以來の大騒擾が起るに到つた。

群衆が政府唯一の機關と目せらるゝ中央新聞社の前に殺到したる時の事である、警官は拔劍して群衆を制御し群衆の中に在りて狀況を視察しつゝありし日々新聞記者某君が警官の爲めに斬られて負傷した、玆に於てか狀況視察の職分を有する新聞記者が、警官に斬らるゝやうの事ありては天下の耳目たる職責は盡されない、警官對日々新聞社の問題に非ずして、各操觚者對政府の問題である、各新聞社協同して何等かの方法を執らねばならぬとの議が起り、各新聞有志の相談會を日本倶樂部に開く事となつた、萬朝報社からは茅原華山君が通知を受て出席したが、新聞界の元老たる黒岩君が遣つて來て『自分は通知狀に接せざるも、新聞社として默す可らざるを以て出席した』と言つた、黒岩君自身が自動的に加はり來つた事は勿論出席者の人意を强ふした、種々協議の末原内相に面會して謝罪を要求し、將來の保障を求むべしといふに決し、各社より一名宛の委員を出す事となつた、別に委員長を選んだ譯では

ないが黒岩君が自然委員長格であり、先づ黒岩君より其趣旨を述べて他の委員は之れを補足すべしと云ふ事になつた。

此會議の終りて未だ原内相に面會せざる前、東京朝日新聞記者某君が芝山内の原内相邸に行くと、邸内を警戒せる壯士が某君の車を顛覆し某君を毆打して負傷せしめた、此事件を評議する迄はなかつたけれど問題の性質上日々新聞記者の事件に加へらるべきは當然にして而も日々と朝日は共に大阪に同一人の經營する大毎、大朝の兩有力新聞紙あれば大阪にも火の手の揚るは當然である、政府より言へば斬つたり毆打したる相手が非常に惡い、新聞社側から言へば歩調を揃ゆるに頗る妙を得て居た。

一日も猶豫がならないといふので翌日委員打揃ひて議院内に在る原内相に面會を求めると、原内相は直ちに貴族院の大臣室に延きて面會した、一寸斷つて置くが黒岩君は意思の强固なる事は無類の人である、爭ひ出すと何處まで行くか判らない突進的の人である、匕首を敵の咽喉に擬せざれば已まない人である、文章を以て鬪つても其通りである、去れど人と直接面談する時は意外に穩かで圓滑で率直なる吾輩などは齒痒いと思ふ事も屢々あつた人である、原内相に對し穩かに警官の不法を語り將來の保障と謝罪とを要求した、尋で朝日の松山忠二郎君が各社の相談を起したる事件なれどと前置して、自己の社員の内相邸にて毆打されたる顛末を語り此事件をも附加へた、原內相は警察官拔劍の事實を否

認し朝日新聞記者の毆打は自家郎內の壯士に非ずと辯じ謝罪を峻拒した、他の委員から交も拔劍の事實を說いたが、內相は頑強に否認し『腕の利ける人は鞘の儘でも斬れるさうです』と言つた、黑岩君は『內相は餘りに平氣である職務の爲めに斬られたる新聞記者に同情しても善いではないか』と言つた、吾輩が齒痒いと思ふ事があると言つたのは此樣なる場合である、內相は『大に同情は致します』と答へた、吾輩は『縱令鞘の儘で斬つたとしても責任は同一である、內相の謝罪を要求する』と言つた、內相は『謝罪すべき謂れなし』とて之れを拒んだ、斯くて談判不調で引取つた、日本倶樂部の最初の評議が新聞社の自衞に在つたので、海軍收賄問題や帝都騷擾の問題には觸れなかつた。

談判不調に了れるからは、自衞上よりしても面目上よりしても戰ふの一途あるのみである、委員總會を開いて飽くまで原內相の責を問ひて辭職せしむべしといふ事に決定した。

原內相も一旦は峻拒したもの丶事の重大なるべきを看取し警保局長岡喜七郎君に何事か命令したものと見える、嘗て吾輩の鄕里鳥取縣知事たりし緣故にて吾輩と舊知なる岡君は『吾輩の許を訪ねるから暫時新聞社に居て吳れ』との電話を掛けて來た、吾輩は他の政友と正午から會する約あり、時を剩す十五分間位なので、之を斷ると是非急を要するとの事であつたから、吾輩自ら出掛けに議院に往つて岡君に會つた、岡君は『何とか緩和の方法はあるまいか』と言つた、吾輩は『新聞社の要求を容る丶外に策な

し』と答へ置きて豫定の集會に赴いた、スルト岡君は萬朝報社に黒岩君を訪ふて『適當の解決法なきや』と問ひ其緩和を求めた、黒岩君は大切なる問題なれば他の人と列席せしむべしとて數名の委員を招いた、吾輩は不在であつたが須崎芳三郎君外數名――他の諸君の名を記憶せず――の委員が列席し、黒岩君から『原内相に誠意の認むべきなし、矢既に弦を離る今は戰ひあるのみ』と宣して岡君を還した。

愈戰ひあるのみである、論説は固より演説會も開くべしといふ事になつた、兵站は各社にて分擔すべしといふ事になり取敢ず各社から二十圓宛を徴した、去れど繼續戰には相當費用を要する、之れを要する次各社より集むる事も考へ物であつた、其時にやまと新聞の松井廣吉君から、社長松下軍治君の傳言なりとて余は筆墨も言論も不得手なり余の盡し得らるゝ點に於て盡力したしとて五百圓の寄附を申込み且つ松井君が之を持參して居た、松下君の寄附を受くるを快しとせざる人もあつた、吾輩は吾輩の責任を以て受納し黒岩君に之れを話した、黒岩君は默して答へず暫らくして輕く領いた、之れが黒岩君と松下君と力　協せ大活動をした端緒である、此時まで黒岩君と松下君とは相識らなかつた、吾輩も松下君とは面識はあるも懇意ではなかつた。

兵站の序に言ふが其後も最も多くの費用を提供せるものは松下君で黒岩君も寄附した、黒岩君と吾輩とで有志の寄附も仰いだが、此事は黒岩君は頗る心苦しく感じて居た。

新橋倶樂部の三階を借りて記者倶樂部とし、委員は毎日集會する事として在京記者大會や全國記者大會を精養軒に開いて原内相彈劾の決議を爲し諸所の劇場や國技館で熾んに演説會を開き毎日毎日新聞紙で政府攻撃を遣つた、院の内外でも山本内閣攻撃の火の手は愈々加はり津々浦々までも公憤を發するに至つた、非政友三派――國民黨の態度は頗る手緩るかつたけれど――と記者倶樂部との聯契も成り演説會は協同して行つたが何れの場合に於ても黒岩君は其大立物であり黒岩君の演壇に立つ時は聽衆より脱帽々々の聲が起つた、政府にして若し演説會を解散せば聽衆の公憤は忽ち勃發し如何なる珍事を現出すべきや測り知られざるを以て演説會に對する壓迫はなかつたけれど各新聞紙の發賣頒布は頻々として行はれ政府は豫め警官を萬朝報社の門前に派し置きて第一版の出來次第直ちに之を差押へ一枚も配付せしめない方針を採るに至つた、新聞記者の激昂は愈々加はり原内相を倒すには内閣全體を倒さゞる可らずとて更めて内閣全體を敵とするの決議もした、黒岩君の熱度は日一日と加はり其議論は歩一歩と強くなつた、歌舞伎座に於る演説會には其演説中此の如き俚謡ありとて『向鉢卷出刃庖丁でハラをゑぐるよ初鰹魚』といふ都々逸を加へ之れを告發せられた、江木衷君や、花井卓藏君や、卜部喜太郎君や、鹽谷恒太郎君や、今村力三郎君や、高木益太郎君や二十名内外の大家が進んで辯護を引受けられたが二十圓の罰金に處せられた、不名譽の事でもなく痛苦でもないから控訴せずして素

直に罰金を納めた、此頃の事である、貴族院に於て村田保君の有名なる山本內閣彈劾演說があつた、新聞紙は頻りに發賣頒布の禁止に遭ふけれど旣に其速記錄が官報に揭げられたるからば『官報轉載』と銘を打て之を各新聞紙に揭けやうとの議が起り最も熱心に主張した者は黑岩君であつた、各新聞紙は之を實行したが此記事のみは流石に發賣禁止を受けなかつた、村田君の演說を蓄音機に吹込みて全國に流布せしむべしとの談を出したのも黑岩君であつたかと思ふ、夫よりも空前にして絕後とも謂ふべきは日を期して都下の新聞一齊に原內相彈劾號を出すべしとの秘密決議を爲して之を實行した事である、記者俱樂部には常に探偵を附し、吾々の身邊にも探偵を附したれば吾々の相談が政府に知れたと思はるゝ場合は幾らもあつたが、原內相彈劾號を出す事丈は彈劾號を出すまで漏洩しなかつた、此の如くにして日夜戰ひを繼續し人心は日に激昂して兒童走卒も海軍收賄を口にするに至り被告の一人たる藤井海軍少將の門前では子供等が『藤井さん五厘お吳れ、絲買つて針買つて藤井さんの睪丸釣り上げる』と謠つて遊ぶに至つた、海軍大將などの家屋に投石する惡戲者も出た、兒童の遊戲を爲すにも平生は大將となりたがるもの多きに拘はらず『お前大將になれ』といへば『大將になるやうな惡人ではない』と言つて大將になる子供がない位になつた、海軍問題は政治問題を超越して國民の道德問題となり內閣を倒して之れを廓清するに非れば日本の道德は滅ぶる破目になつたのである。

而かも内閣は頑然として辭職するの風なく、愈々言論を抑壓して底止する所を知らない、是に於てか各新聞社の有志連署して内閣の更迭を天闕に訴ふる事と倘し他に上奏せんとする志士あらば案文起草等の助力を與ふる事を決し、上奏書の案文を松井廣吉君に託した、松井君は齋戒沐浴一晝夜にして案を作り黒岩君と須崎君とが主として之れを練り上げ淨書して闕下に捧呈した、各社から一名づゝ内大臣府に出でゝ捧呈の手續をしたかと思ふ、之れを權輿として續々上奏書が出た。

内閣は中々倒れさうもないので此上は内閣倒壞に必要なるアラユル手段を執るべし、國家の存亡には代へられないとの議が起つた、其手段の第一は元老其他宮中に關係ある人を起たしむる事なれど、記者倶樂部の人の總てが平生元老の政治に容喙するを非議して居る、殊に憲政擁護運動以來元老の勢力は衰へて居る、今更之れを復活せしむるは不可なりとの議論もあり、中には元老を起たしむるは時宜に適せんも自ら運動するを好まずとする人もありて、全會一致で之を遂行する事は出來ない、仍て黒岩君と松下君と吾輩と三人で全責任を負ふて、元老に對する運動を爲す事とし三人にて此衝に當つた、尤も吾輩は常に他の同志記者と意思の疏通を謀る必要ありと信じ、吾輩から須崎君丈には運動の梗概丈は時々話して置いた。

元老中第一に着目すべきは言ふ迄もなく、元老の筆頭にして最大勢力を有する山縣公爵である、松下

君が小田原に別莊を持ち山縣公とは昵懇なので山縣公に面會するには好都合であつた、黒岩、松下の兩君と吾輩とで國家の大事にて面會したしと申込み、小田原の古稀庵に山縣侯を訪ふた、公は病中なれど面會すべしとて日本座敷に引見されたが、袴を穿ちて端座し懇懃に來意を問はれた、黒岩君は海軍問題の國民道德に及ぼす影響を諄々と說き此の如きは聖代に汚點を印して聖德を汚すものなりと斷じ公の奮起して匡救せられん事を望んだ、尋で松下君は無雜作なる調子にて『元帥確かりせねばいけません元帥の起つべき時は今です政府の奴等は何と言ふか知りませんが騙されてはいけませんよ、元帥も年を取られたからね』と言つた、山縣公は謹嚴なる句調にて『國家の事眞に痛歎に堪へず此儘にせば國民道德の破壞すといふ點も同感なり去れど余にして動かば又もや元老が國政に容喙すとて批難百出すべし殊に病氣にて上京する能はず、于時貴族院の狀況は如何』と反問せられた、吾輩は貴族院は或は海軍豫算を握りて政府を攻るやも知れざれど本日は特に元老たる公の考慮を煩はしたしと前提し『公は先帝の知遇を得て位人臣の榮を極め爾の啓沃に依るとの恩命を拜せられ今上御踐祚に方りても亦爾の啓沃に依るとの詔を賜はり居れるに非ずや、今國家の危急に際し之を傍觀せらるゝ如きとあらば、何を以て今上陛下の信賴に對へ、何を以て先帝陛下の知遇に酬ひらるゝや、世上の毀譽褒貶の如き顧るの時に非るべし』と直言した、公は兩手を膝に突き『慚愧に堪へません』と首を俛げられた、此態度に接して

は吾等木彊漢も二の句を繼ぐに躊躇した、語を轉じて『此の如く國內鼎沸する際には元老會議を召集さるゝを例とせずや』と問ふた、公は『倘り大事あらば元老を召し賜ひたるも今回は未だ其樣なる命に接せずと答へられた『縱令召命なくも國家の大事には進んで參內せられ意見を奏上せられて然るべきに非ずや』と述べ尙種々の談を交換し二時間餘にして辭し去れるが若し元老會議を開かるゝ事あらば公の意見は吾等同志に有利なるべしと推測せる事は三人とも一致した。

山縣公の次には興津に在る井上侯を動かすべしと定めたが探偵の尾行を防ぐ爲めと井上侯を訪ふには早朝が善いとの理由から三人打合せの上夜中新橋倶樂部に集り松下君の自動車にて新橋驛に到り其夜國府津まで到りて松下君は小田原の別莊に自働車を驅り黑岩君と吾輩とは驛前蔦屋の別館に止宿した、早朝の汽車にて出發すべき事を命じ置きたるに拘はらず曉前になつても旅宿のもの一人も起きない、別館は獨立家屋にて下男も下婢も居らず、加ふるに如何なる理由か電燈が消えて眞黑闇である、氣はあせれども如何ともする事が出來ない、探り足にて入口まで出でたれど戶が鎖して開かない、吾輩が燐んに燐寸を點じて黑岩君が戶を開くに努力したが中々開かない、豫定の時刻は刻々迫り燐寸は將に盡きんとした、幸なるかな黑岩君が占めたといふと共に戶が開いた外に出たが母屋も他の別館も寢靜りて居る、已むを得ず宿料をも拂はずして停車場に驅付けたのは發車間際であつた、東京に歸つて聞く

と三人の宅には見舞やら問合せの電話が頻々と來たといふので其仔細を聞くと、驚くべし東京朝日新聞に大字にて黑岩、松下、大谷の三氏は其筋の物色熾んなるを以て暫らく身を避けん爲め神戸方面に逃亡せり、行先は多分上海ならんとの電報が掲載せられて居たのである、滑稽なる間違ひなれど斯る電報が有力なる新聞社に信ぜられ友人や親戚に疑ひを挾まれるほど、吾等は其筋に嫌忌せられて居たのである。

興津の別墅に井上侯を訪問すると侯は病臥中にて醫戒に依り面會をしないと斷はられた『國家の大事なれば病床にて苦しからず是非面會を乞ふ』と言ひたれど又斷はられた、ソンな法はないと强制的に面會を迫ると又斷はられた、又乞ふ、家從が今度は取次がないと言ふ、取次ぐのは君の職務だと喧嘩腰となれる有様は宛然維新當時の壯士のやうであつた、今顧みれば忸怩たるものなきに非るも、當時は其程度まで躍起となり熱心になつて居たのである、結局近日中に更めて面會すべしといふ事に見を附けて歸途岩淵の別莊に棲める田中光顯伯を訪ふた。

是より先き三人は土方久元伯を小石川の邸に訪ふて『伯は久しく宮內大臣として側近に在り今尙宮中の財政顧問として事務に關與す、時局を救ふは先帝の知遇に酬ゆる所以なり宜しく至尊に拜謁し意見を奏上せられたし』と說き伯より『餘生幾干もなし時機來らば一命を捧ぐるも苦しからず』との共鳴

と田中光顯伯とも相談すべしとの語を得たので土方伯より田中伯に宛てたる上京を待つとの書翰をも懷ろにして居た。

田中伯との面會の事を叙する前に言つて置かねばならぬ事がある、夫は内閣は結局倒壞し得べしと信じたるも是れに代るべき有力なる政黨がない、内閣を倒壞して時局更に紛糾すれば吾々は無責任に破壞運動を爲せりとの譏もあるべし、建設的方法も考慮し置かざる可らずとて種々協議せる結果大隈伯を推して大命を拜せしめ非政友三派を糾合して内閣を組織せしむべしといふ事に内意を定めて置た事である、此内意は阪本金彌君を通じて記者俱樂部以外の若干の有志には諒解を求めて置いた、別に吾輩から安達謙藏君にも耳打して置いた。安達君は『加藤男では纏まらないか』と言つたが吾輩は『今如何ともすべからず』と答へた。

田中伯に面會して晝餐の饗を受け黑岩君と松下君とから土方伯に述べたると粗同樣の事を諄々と語つた、且土方伯の書面をも出して上京を促した、田中伯は上京を快諾され『時事を痛嘆して時局の解決殊に宮中方面に對しては元老が先に立つを順序とす、自分が元老に先ちて出洒張るべきに非ず、去れど倘し元老が傍觀して顧みざる事明瞭なるに於ては自分一人にても拜謁を乞ふて意見を奏上すべし、君國の爲め皺腹を切るは毫も厭ふ所に非ず』と語られた、血色も活々して居るが其意氣言語の維新當時の

志士其儀なるに感激した、次の内閣組織者は大隈伯を適當とすべしとの意見をも述べ、且つ之れを山縣公に說かれん事をも依囑して愉快に退出した。

此間も演說と文章には努めたが、宮中方面には草莽の野人近づくべくもない、元老などを使る外なかつたが當時內大臣の事務を執られて居たのは伏見宮殿下である、殿下に拜謁を願ひて天闇に訴へたる文書の趣旨を詳しく言上せんとの議が起つた、當時都新聞社に在り記者俱樂部の事務を執つて居て呉れた松岡俊三君が殿下の別當馬場三郞君の許に赴きて懇囑するなど頗る働いて吳れた、拜謁は好望なりとの報を得て喜べるも未だ決定とまでは行かない時、黑岩、松下、吾輩の三人が黃昏私かに記者俱樂部に赴き密議した、幷は宮內大臣渡邊千秋氏を動かして拜謁の事を取計はしむべしと云ふ事であつた、直に行くべしと決して出懸けんとする時、國民新聞の山川瑞三君が來合せたので四人で夜中渡邊宮相を訪問した、明かに白狀するが『都下各新聞社の總代は內大臣殿下に拜謁を願出で置けるも未だ恩命に接せず聞く所に依れば之を妨ぐる者は閣下なり』との難題を吹掛けた、宮相は官制を引用して『宮內大臣は單に事務を執るのみ、政治に關する事は內大臣府の職務にて余は沒交涉なり』と逃げられた、吾等は代る〳〵國家の危急を說き宮相の盡力を求めた、宮相は大に感ぜる所ありと見え、吾々の國事に盡瘁する勞を犒ひ且つ『余も臣子の分として國に忠なる所以の道を執るべし』と答へられた。

土方伯も内大臣殿下に謁せられたが如何なる言上をせられたるかは吾等の知る所でない。

後數日内大臣殿下より謁を賜ふとの恩命を拜し各社の代表者打揃ひて殿下の邸に伺候した、殿下には茶菓を賜ひ且つ『爾等が國事に盡瘁する志を嘉す』と宣ひ、先日捧呈せる文書は乙夜の覽に供せる旨をも申聞かされた。

最前列に席を置ける黑岩君は御禮を言上したる後、忌憚なく國家興亡の岐路なりと思惟せる旨と國民公憤の有樣を言上し内閣の更迭は國家を救ふ所以の道なるを詳細に言上した、松下君は之を補足した、吾輩も亦補足し且元老を召して御下問あらせらるゝを適當なりと思考する旨を言上した、殿下には『爾等の申せる趣旨は能く諒解したり』と仰せられ『且自分等は兎角下情に通じ難し國事に對し思ふ所あれば屢々來邸せよ、自分は側近に奉仕する故自分の耳にせる所は自然天聽に達する事あるべし』と最と有り難き恩命を賜はり一同感泣して退出した、最後の御詞は獨り拜謁せる吾等のみに非ず國民を擧て感泣すべき有り難き御詞である。

黑岩君、松下君、吾輩と三人にて大山公を原宿の邸に訪問せるも公は那須の別莊より未だ歸らずとて面會するを得ず、熱海の別莊にある松方侯を訪ふた、此時は三人の外、日々新聞の羽田浪之紹君も加はつた、侯からは病中なりとて面會を謝絕せられたので例の國家の大事を振廻したれど承諾を得ず、

一日古屋といふ旅館に引揚げ黒岩君自ら筆を執りて面會し得らるゝまで何日にても待つべしとの書翰を贈つた、スルト本日午後來れとの返事で四人揃つて面會し黒岩君が主として山縣公に說いたやうな事を說けるも一向に要領を得ない、頗る根氣よく諄々說きたるも吾々の言を首肯さるゝ模樣がない、赤誠が通じないのか、肝膽を披く事を好まれないのか、夫れとも山本首相と同じ薩州產れにて別に思案せらるゝ所あるのか、態々熱海まで來たる甲斐なき心地にて別れた。

元老訪問と同時に屢々書面を以て元老に意見書を出した、筆者は常に松井廣吉君で秘密を保つため黒岩、松下、松井の三君と吾輩とが意見書の相談をするのは夜分人去れる後であつた、松井君の草案には常に黒岩君が加筆し吾輩が之れを淨書する爲め家に歸るは三更を過ぐる事も稀ではなかつた。

元老に對する運動は三人の責任を以て行つたけれど、貴族院に對する運動には一人の異議者あるべき筈なく是れは記者俱樂部全體の運動として先づ研究會幹部に會見し尋で幸俱樂部及土曜會幹部の人とも會見した、研究會には若干の缺席者はありたるも俱樂部員殆んど總てゞ往つたかと記憶する、主として應酬の任に當つたのは黒岩君と須崎芳三郎君とである、黒岩君が內閣を倒さざれば國民道德の泯滅すべきを說き貴族院の奮起を促した、研究會の諸君も明瞭に內閣打破の事は言はず含糊の憾はありしも此問題に就ては大に憂慮せる旨を語つた、須崎君は『內閣は既に劍を拔て人を斬らしめ其手は血に

染まり國民は極度に昂奮せり倘し血に穢れたる現內閣に依りて近く行はるべき御即位の大典に當らしめんか、如何なる不祥事を勃發せんも未だ知る可らず、恐らく憲兵を以て京都を圍まずんば大典を擧る能はざるべし、是れ豈國家國民の忍び得る所ならんや』と痛論したので研究會の諸君は愕然たる色を現はした、土曜會に往つたのは黒岩君、須崎君、松井君。吾輩の四人であつたか或は他に一二人あつたか確と記憶しないが黒岩君、須崎君、吾輩などのなせる議論は研究會と同じく、須崎君の御大典論は矢張り土曜會の諸君を動かすに有利であつたと思ふ、玆に端なくも一の喜劇が起つた、幷は土曜會の曾我祐準子が軟論を有すとの說が數日前の新聞紙に傳はつたので、須崎君が特に曾我子爵に申しますがと言つて軟論說ある事を言ひ倘し『此說にして眞ならば篤と考慮せられたし』と言つた事である、曾我子爵は勃然として怒を發し『怪しからぬ事を承はる』と須崎君に喰て懸り大喧嘩とならんとする模樣なので談判に往つた黒岩君が仲裁の口を利き吾輩までも仲裁の補助をするといふ始末であつた、併しながら大體に於ては土曜會の諸君の共鳴を得て歸つた、幸倶樂部では田健次郎男と有地品之允男とに會し隔意なき談話を交換し頗る力を得たる感がした。

政治問題に就て黒岩君が熱中した事は黒岩君の一生を通じて此ほど激しかつた事はなからうと思ふ黒岩君の日一日と熱の昂まる事は每日每夜會ふ吾輩の眼に瞭々と判る位であつた、斯樣なる有樣なれ

ば黒岩君は自己の經營する萬朝報社へは顏出しもせず運動して居るので、萬朝報社黒岩周六殿と書いた郵便物に社の受付が『宛名の人は目下在社せず』と附箋し、其の書翰が弁町の私邸に廻つて來たといふ奇談もある。

斯くて人心愈々激昂し國内は鼎沸の狀を呈し貴族院は海軍を廓清するに非れば海軍豫算を握潰すべき狀勢を示したので執拗なる山本内閣も總辭職を爲し元老會議を開かるゝに至つた、此時には吾等には結局は吾等の豫定通り大隈内閣成立すべしとの自信を――確信とまでは行かざりしも――有して居た、元老出京の報を聞くや黒岩君と松下君と吾輩とは直に自動車を驅りて大隈伯を訪ふた、此運動を開始して以來一回も伯を訪ふた事もなく又伯を推せる事を間接にも直接にも伯に話した事はない、只之を最善の道と思つて歩を進めて居たので伯に大命降らば直に之を承諾せしめねばならぬから急遽伯を訪ふたのである、伯は吾等の顏を見るや否や『君等は熾んに活動して居る樣だが又もや元老が出掛けるといふではないか、元來元老なる者が政治に容喙するは』と言かけられた、松下君は『一寸待つて下さい』と手を擧げた、伯が句を切ると共に黒岩君と松下君が運動の顛末を略叙し『今回は元老會議にて閣下を推す事となるべし、今の時局を收拾するもの閣下を措て誰ぞ、閣下は蒼生の爲め直に之を受諾せらるべし』と勸誘した、伯は半信半疑の態であつたが滿更惡い氣持もしなかつたと見受けられた、松下君

は『第一第二は他に持て行くかも知れないが三番目には必ず伯の下に持來るべし其時若い者に抔言はるれば大事去らんも知れず大口を開いてパット一口に呑込まるべし』と言つた、吾等は大命伯に降らば多分之を受諾さるべし倘し六つかしければ伯を動かす方法は他にも是れあるべしと思つて歸つた。

此時に方つて宗像政氏等の清浦奎吾子を推して首相たらしめんとの運動あり華族會館は其運動事務所となつて居た、元老會議の形勢にては大命は清浦子に降るべしとの說を聞き黑岩、松下の兩君と吾輩とは直に華族會館に清浦子を訪ふた、子は『鰻の香はプン〳〵するも箸を執るまでになるかならぬか判らない』と嫣然一笑せられた、吾等は『今日の時局を收拾するは大隈伯を適任と信ずるも子爵に大命降り內閣を組織せらるゝならば非政友三派を根據とせらるべし責任を負ふて辭職する政友會を基礎とし若くは超然內閣を組織さるれば憲政の本義立たず人心も亦鎭靜に歸せざるべし』と建策した、吾等の說を聽かれずんば吾等は反對すべしとの意を含めるは勿論である、清浦子は『未だ內閣組織の內容を云云する時機に非るも非政友三派を基礎とする事は考へ物なり、海軍を廓清し首尾よく御大典を擧ぐるに全力を盡すを可とせんか』と超然內閣の意を仄めかされた、種々の論議を竭したるも結局吾等の希望に滿たざるものと推斷し、其數日後青年會館に開かれたる演說會に於て黑岩君も吾輩も斷然反對の意見を演說した、幾ばくもなく大命は清浦子に降つたけれど政友會は超然內閣反對の決議を爲し子は加

藤友三郎氏に海軍大臣就任を慫慂して諾する所とならず遂に流産に了つて仕舞つた。

元老が清浦子を推す前であつたか、後であつたか、元老會議の結果にて德川家達公に內閣組織を勸誘した、吾等は德川公の起たれざるべきを豫想したるも、例の如く松井廣吉君に執筆を乞ひ公の今起つべき時に非ざる旨を論ずる書を公に送致した。

內閣組織の大命は豫期の如く大隈伯に降つた、吾等は爲すべき事は既に爲し盡し其目的を達したので別に伯の邸にも往かなかつたが內務大臣の人選に議論ありて決する能はずと聞き松下君より人氣役者後藤男を內相たらしむれば相爭へる双方の顏も立ち且適任たるべしとの提議あり黑岩君も是に贊成したので三人にて大隈伯を訪ひ此說を提出した、大隈伯は『加藤高明男に話して見よ』と言はれたので直に加藤男を訪ふた、加藤男は內閣組織に關する大隈伯唯一の相談相手であり頗る得意であらうと想像して居たが案外にも大不機嫌にて『君等が國事に盡瘁せる事は多とするも余は個人としては大隈伯を伯の爲に起たせたくなし、然れども伯既に起つべく決心す余は献身的に努力すべきも少數の黨與を以てしては內閣の壽命短命なるべきは想像に難からず、余は曩に再び入閣せるも二度とも僅少の日時に辭職せり、今回入閣するも其壽命知るべしとせば宛もシルクハットを戴きてオデンの立食をするが如し、余に於ては寧ろ迷惑なり』と言はれた、而して內相問題に就ては『內相は一旦大浦子と決定し子

は承諾せるも異議を唱ふる者あり、余は病床に大浦子を訪ふて他省に轉ぜんことを求めたるに子は虚心坦懷直に之を快諾し總て內閣組織に都合よきやう取計はれたし自分は入閣せずとも何の憾む所なし大隈內閣成立せば滿足なりと答へられたり』とて大浦子の雅懷を賞揚し『種々の曲折を經て大隈伯の兼攝と決したれば今更之れを變更すべからざる事情の下に在り』と內情を打明けて斷はられた、內閣組織後井上侯を內田山の邸に訪ふて後藤男を內相とする事の斡旋を求めたれど是れも成らなかつた、此外には大隈伯に對し『吾等は何の求むる所なし、只新聞紙條例を改正せらるれば望足る此事は必ず決行を希望す』と言つたのみである。

此歳に黒岩君は市政革新常磐會打破に就て活躍したが是れは後に記する事として德富蘇峰君が東京便りに本年は黒岩氏全盛の歳なりと言つた如く眞に黒岩君の活躍は目覺しきものであつた、世間にては黒岩君を意地の悪い人のやうに思つて居る人もあるが太だ率直にして橫道に曲らず小策を弄せず懸引をせず思つた通り眞直に前へ前へと進んで行くのは黒岩君の特長である、黒岩君ほど話のし易く行動を共にし易い人は珍らしかつた。

(中)　東京市政革正の奮鬪

大隈內閣成立後も記者倶樂部は存置した、稍目覺しき運動は市政革新、常磐會打破であつた、此運

動の主唱者は報知の須崎芳三郎君である、黒岩君は『最初は運動其事には賛成なるも、自分は久しく社務を廢して居たから直接の活動は罷めたし、萬朝報よりは茅原華山を出さん』と言つた、吾輩は元來市政に通曉せず且同じ都新聞社に机を並べて居る田川大吉郎君が助役を遣つて居るので同君が迷惑するであらうとの斟酌もあり大運動をするといふ氣にもなれないので須崎君に『今回は君が背負つて立て呉れ』と言つた、處が松下軍治君は大乘氣である『兎も角も協議會を開いて相談しやう』といふ事になり黒岩君を座長として評定をし『獨り東京市の廓清と言はず、全國の選擧に響を與ふる好模範を作る者なれば大に遣るべし』と決定した、黒岩君は『他の代表者を出す』と言つたけれど松下君が『黒岩周六といふ名で惡魔が退散するのである』と極力勸誘し他の諸君も勸誘したので自ら陣頭に立つ事となつた、吾輩は内に在て會計を擔當するといふ條件で一所に遣る事となつた、時偶ま澁澤男や中野武營君が洋行中に話し合つた結果として市の自治體は市の長老連が出て世話をせねばならぬといふ事を此機會に實行するといふので中野君や、豐川良平君や、加藤正義君や、大橋新太郎君などが候補者となる事となり、市政革新を叫ぶには頗る好機會であつた。

　吾等の武器は文章と演說とである、第一回の旗擧は築地精養軒に擧げて宣言、決議を發表した、山本内閣打破に成効し記者倶樂部の爲す所何事か成らざらんとの感想が世人に在るので集會者も多く殊

に候補者とならんとする人々は常磐會に屬する以外殆んど全部來り投じた、多年東京市に蟠踞して其根を張れるタマニーホール常磐會を打破するは容易の業に非るも名分は善し記者俱樂部の權威は有り輦轂の下ではあり天の時、地の利、人の和を得たと言つて宜しかつた、候補者には市政革新に盡瘁するといふ誓約書を作り是れに連署せしめたが喜んで是れに應じ當日缺席せるものは態々內幸町の記者俱樂部に來りて連判狀加入を乞ふといふ有樣であつた。

吾等の最も苦心せるは幸に革新派を以て多數を制し得るとするも元兇を以て目せらるゝ森久保作藏氏を倒し得るや否や、是れに刄向ふ候補者の出現し得べきや否やに在つた、時なるかな、深川の有志數名が事務所に來り太田信治郎といふ人を第二級候補として森久保君と競爭せしむるから援けて吳れと言つて來た、太田君は吾等の曾て其名を聞かざる無名の一紳士である、黒岩君は『森久保と鬪ふほどの勇氣ある人なれば誰でも善い』と引受けた、他の諸君にも異議なくして主力を是れに用ゆる事となつた。

今回の擧に都合の善いのは演說會を開く面倒なる手數を自分等で遣る必要のない事であつた、候補者や有權者が自ら演說會を開き出席を乞ひ來るので、記者俱樂部への申込は殺到し辯士の不足を訴へた、各區に亘り每日演說會が開かるゝので黒岩君は自分で每日每夜出演するのみならず萬朝報社から

斯波貞吉君や大住嘯風君や茅原華山君が出て熾んに演説した、朝日の石川安次郎君や其他の記者諸君も熱心に働いたが斯くなりては吾輩も最初の約束を守つて居る譯に行かず、須崎君を留守司令官として外部よりの一切の交渉を同君の專斷に委し諸所の演説會に出席した、黒岩君は重に深川區に出掛け太田信治郎君を自ら聽衆に紹介するなど息子の愛に溺るゝ慈父の如き態度であつた、黒岩君の熱度は例に依り日一日と加はり毎朝一日一信づゝ常磐會攻撃の檄文を作り選擧の畢るまで之れを普く深川區の有權者に配布した、之れは記者倶樂部の事業以外に黒岩君が特に思付いて遣つた仕事である、吾輩は其精力の絶倫に驚き、黒岩君でなければ遣れない仕事だと思つた。

　記者倶樂部員連名の推薦狀は羽の生へる如く飛んだ、席暖かなるに遑なきほど演説會にも臨んだが愈々選擧間近くなると黒岩君は深川區に戸別訪問を遣ると言出し吾輩に同行を求めた、吾輩は是に反對した「黒岩君は平生に似ず將軍が部下に命令する如く『貴君（あなた）もお遣んなさいお遣んなさい』と言つた、黒岩君の志抂くべくもない、而して黒岩君一人に遣らすに忍びない、吾輩も同意して戸別訪問を遣つた、何れの有權者も慇懃に迎へ吾等の勞を謝した、誓つて太田君に投票すべしと明言した人も尠くない、戸別訪問の第一日を終ると小學校の生徒が自分の家に黒岩、大谷の兩人が來りたるを誇りとし未だ訪問を受けざる家の子供は肩身を狹くして居るとの報を得て此空氣なれば森久保氏を倒す事が出來

るであらうとの自信が湧いた、翌日も戸別訪問を遣つたが足が棒の樣になりて兩人共殆んど步行に堪へず、全部は廻り切れなかつた。

深川區で演說會場が足りないといふので、野外演說を行はふといふ事になつたが警察署で許可しない、黒岩君と須崎君とで先づ大隈首相を說いて同意を求め警視總監伊澤多喜男君に談判に往つた、伊澤總監も頗る難色であつたが天幕を張れば許すといふ事になり廣場で之れを行つた、無比の盛況で大に人心を動かした。

演說で黒岩君も吾輩も一寸面喰つた事がある、松下軍治君が淺草區から推されて候補者となつて居たので松下君から吉原の有志に會つて見れとの依賴があり、自働車に同乘して出掛けると遊廓の入口に政談大演說會の貼札がしてあつて辯士黒岩周六、大谷誠夫、江間俊一としてある、遊廓事務所に着くと數百の聽衆が詰め懸けて待つて居る、コンな積りではなかつたが演說するより外仕方がない、黒岩君は平常以上に馬力をかけて縱橫無盡に市政の腐敗を痛罵し其演說は二時間にも及んだ、吾輩も江間君も演說したが、江間君は『自分を常磐會の元兇と言はれた時代の事を黒岩君が會釋なく剔抉したので耳が痛かつた』と言つて居た。

愈々選擧の當日となると黒岩君も吾輩も開票前より深川の太田信治郎君の選擧事務所に往つた、刻

刻有利なる報告が來た、總投票の半數を開いた時には太田君の方が遙かに森久保氏を凌駕したので、事務所に集れるものが萬歳を叫ばうとすると、黑岩君は『マダ早い』と制止した、總開票を畢ると豫期以上の大勝利であつた、黑岩君自ら音頭を取つて萬歳を三唱した、事務所を去るに臨み『黑岩君萬歳』の聲が起つた。

何れの區でも革新派が勝利を占めた、流石の大集團常磐會も憐れ少數黨となり、多年の榮華の夢は果敢なく消えた、市民は基礎の鞏固を誇れる常磐會の凋落に驚嘆せる模樣であつた。

記者俱樂部の主催にて非常磐會の議員を築地精養軒に集め一團體を作らしめた、其後も此團體に屢屢善意の忠告を試みた事もあるが之れを略する。

（下）洋行中の一動一靜

新聞記者の最高權威ある團體とも稱すべき春秋會の評議員會にて巴里にて開催する講和會議に新聞記者を派遣せんとの議が起つた、其議の根源は報知新聞の記者某氏が法學博士高橋作衞氏を訪へる際高橋博士より『今回の講和會議には學者及新聞社よりも代表者を出すは國の利益なり』と言つたを添田壽一博士が贊成し春秋會の評議にかけて呉れとの申出があつた爲めである、春秋會評議員會は滿場一致にて新聞代表の派遣を可決し、候補者を詮衡して第一候補者を會長黑岩君とし第二候補者を德富猪

一郎君と決定した、兩君とも承諾を得る事は困難であらうといふので第三候補者も選定して置かうとの談も出たが先づ第一第二と當つて見て其上の評議にしやうといふ事となり黑岩君に對する交渉を吾輩に委ねられた、黑岩君は健康も害して居るし到底承諾すまじと思ひ吾輩一人にて承諾せしむる自信がないから君も手傳つて異れと强て須崎芳三郎君に同行して貰ひ黑岩君に春秋會評議員會の決議の趣を語つた、黑岩君は意外にも『自分は豫て洋行の志を懷いて居る。醫師が許すならば承諾するから返事を一日待て呉れ』と言つた、翌日黑岩君は『醫師は寧ろ洋行を健康の利益と言ふから承諾する』と答へて來た、吾輩には斯く容易すく使命を果す事は實に意外であつた、兩び評議員會を開き此報告をした。スルト原首相に交渉して諸般の便宜を與へしむべし、成し得べくんば更に多數の記者を派遣すべしと決し吉植庄一郎君と斯波貞吉君と吾輩とが其交渉委員となつた、三人にて首相を官邸に訪ひ、吉植君から極めて簡單に此事を話すと首相は先刻御承知といふ態で直に快諾し『多數の人は困るが二三人なれば宜しい』と言はれた、而して『政府より選擇するは困難なれば記者側より適當と認むる人を出せよ、但し巴里にては政府より派出する委員の旅館にも困り居る位なれば通辯までは附する能はず』と附加へられた、又も評議員會を開いて之を報告すると派遣すべき新聞記者を三名とし其人選を春秋會員に限るべからず、國際新聞記者協會其他よりも物色すべしとの議が起つた、吾輩は頭本元貞君は國際新聞協

會にも春秋會にも關係あり殊に西洋通なれば適任なるべしと發議した、增田義一君は五來欣造君を推薦した、光永星郎君は適當なる候補者ありと言つたがドウしても其姓名を言はなかつた、容易に決しさうもないので幾名かの詮衡委員を擧げ別室にて詮衡委員會を開いた、吾輩は詮衡委員でないから詳しくは知らないが光永君は曾我祐邦君を推薦し、頭本說あり、五來說あり、黑岩君は『余は政治の事は不得手なり余の弱點を其儘暴露しても差支なき相談相手を同行したし幷は大谷誠夫なり』と發議せられたさうである、詮衡は頗る長時間に亘り他の評議員は詮衡の終るを待つて居たが吾輩は詮衡委員室に招かれ『派遣すべき記者は黑岩、曾我、大谷』と決したから承諾せよとの事であつた、吾輩には全く寢耳に水であつた、而して自ら適任と思はない、之を辭退すると吉植君から『漸く是れで纏めたのだから君が辭すると又混亂して收拾が附かない是非とも受諾せよ』と迫られた、吾輩は『然らば吾輩の從事する都新聞社長楠本男爵の承諾を得べきや否やを確めて挨拶すべし』と答へた、一部の人は黑岩君や吾輩等が行きたい爲めに仕組んだ狂言なるかの如く思つた人もあるらしいが黑岩君にも吾輩にも突然の出來事であつた、吾輩は此日の夕刻楠本社長と相談して受諾したが天洋丸で牧野大使一行と共に出發せんと欲すれば剩す所一週日許りしかない、初めての洋行としては其支度に困難である、支度の困難は輕いが旅費の才覺が大問題で翌日から奔走を始めた、斯る際に突如として一問題が持上つた、夫れは新

聞代表者を派遣するは既に各社が派遣し居れる記者の上級者を出し、記者に等級を附するやうのものなれば新聞記者代表たる事を依頼せぬとの新聞社を生じ多數の新聞社聯合が出來た事である、之れを主張し或は是れに同意せる新聞社も春秋會には最有力者ともいふべき社員を出して代表者派遣を決議して居たが新聞社に於て代表を依頼せぬといふなら進んで代表する必要もないので、黒岩君は斷然代表を辭すると共に代表者と認めらるゝ嫌ひをも避けん爲め春秋會の會長をも辭して洋行すると言切つた、吾輩は金策に奔走して居たので其時にも立會はなかつたが吾輩も亦春秋會評議員を辭し單に一個の都新聞記者として渡歐する事とした、此外に曾我君は電報通信社の監査役なれど記者に非ず隨て代表權なしとの議論が起り相錯綜して混雜し春秋會評議員の總辭職となつたが若手記者連は大集會を開いて吾々の洋行中止を勸告すとの決議をしたが一記者としての洋行に他の新聞社で差留める權利のあらう筈なきを以て吾輩は之れを馬耳東風に附した、黒岩君は斷乎として其勸告を拒絶し且つ新聞紙に其非を鳴らした、原首相と吾々と對談の際、席にも居ない高橋翰長の談とかいふ幽靈式記事までも某々新聞に掲載せられ頗る中傷を蒙つた。

七月十日の天洋丸にて牧野大使と同船して出發した、船の岸を離るゝ時舷上より其愛兒を望んでホロリとした處は黒岩君の優さし味を示せるものである、波浪高くして上甲板を洗つた日もあつたけれ

ど黑岩君も吾輩も殆んど船暈を感ぜず一回も食堂に出るを缺かした事はなかつた、布哇に上陸して官民聯合の歡迎會に臨み有志の請に依り黑岩君と中野正剛君と吾輩と劇場朝日館の演說會に出席した、準備時間僅かに二三時間なるに聽衆滿員にて約二千名も集つて居たには驚いた、黑岩君は日本の世界に占むる地位に就て一時半間に亘る雄辯に揮ひ、吾輩は全權委員より講和に關する事は演說して吳れるなとの交渉を受けて居たけれど吾輩の私見として講和問題を一時間許り論じ其夜望月旅館に一泊し久振にて日本食を喫したが黑岩君も頗る滿足し殊に珍しき菓物が非常に氣に入つたやうである、翌朝自動車で古戰場など見物したが元來寒さ嫌ひの黑岩君には此地の風土氣候が意に適せりと見え『別莊を作つて每年冬期一二個月を此地に過したい』と言つて居た、黑岩君としては敢て至難の希望でもなからうが其人今や亡し悲しむべきである、廿六日に桑港に上陸し一月一日を以て紐育に到着した、一週間の滯在中黑岩君は發熱し大に心配したが差したる事もなく快癒した、此滯在中前大統領ルーヅベルト氏が死去したので米國の新聞記者が黑岩君を訪ふて其談話を乞ふた、又黑人の代表者が屢々黑岩君を訪ふて黑人の待遇改善に對し努力を乞ひ黑岩君は之れを諾した、石井大使より華盛頓に來れとの傳言があつたけれど黑岩君の微恙の爲め行く事が出來なかつた、紐育での奇談は日本人倶樂部の晚餐會に招かれた時矢田總領事の請に依り黑岩君は一場の卓上演說をしたが日本の天職や立場を說き『今や歐

洲諸國は疲弊す、日本の實力は佛、伊以上なり』と言つたが矢田總領事は頗る外國に氣兼せるものと見え『歐米と日本とは術が違ふ此點は黒岩君の演説を訂正す』と言つた、人の意見を訂正するとは珍無類の事なれど黒岩君は別に氣にも留めず只一笑に附して居た。

一月八日カーメニヤ號にてリヴアプールに向つたが此航海中多數の米國婦人が黒岩君の在るを知り日本婦人に就ての講演を乞ふた、黒岩君は日本婦人の貞操を說き七去三從までも說いたので米國婦人連は頗る驚いた模樣であつたが、最後には日本の結婚狀態を說き『日本では世故に長けたる兩親が其夫を選んで結婚せしむれど一度結婚すれば頗る仲が良い、斯く言ふ自分も東京に妻を殘し日々夜々妻を思ばざるなし、妻も亦日夕自分を思慕し居るべし』と言つたので數十名の米國婦人は一時に拍手喝采し『美ましき黒岩夫人よ』と叫んだ貴女もある、太西洋の眞中にて外國婦人を集めて妻君の惚けを言つたものは黒岩君以外にはなからう。

十七日はリヴアプールに着き石川安次郎君等の出迎を受けて直に倫敦に赴いて一泊し翌朝出發して巴里に往つた、滯在約十個月間で南佛、伊太利、西班牙の旅行に上つたが、黒岩君が初見の巴里地理や名所の詳しきには驚かされた、其故を問ふと『佛蘭西小說を譯するに當り熱心に之を調べた記憶が殘つて居るのだ』と言つた、同君の小說が每に洛陽の紙價を貴からしむるも故ある哉と思つた、黒岩君

が既譯の小説と地理風俗人情とを對照するに興味を有した事は意料の外ともいふべき程度で就中巖窟王に對する興味を非常に唆り且つ其飜譯の正確なりしに會心の笑を洩した、吾等の旅館ホテルミラボーは寶玉を賣る店の櫛比せる街にて此店を見て歩く事も黒岩君の樂みの一つであつた、吾輩も黒岩君の指導に依り若干の鑑定眼を有するに至つた。

巴里にて黒岩君と吾輩とが企てたる政治的運動は各國の新聞記者を招待して人種的差別待遇廢止及移民問題を日本國民の聲として發表しやうといふ事であつた、此時には日本の全權委員には未だ之れを提唱する決心はなかつた、當日黒岩君の爲すべき演説の骨組丈は兩人にて拵へ不日倫敦より來るべき石川安次郎君の到着を待つた、石川君は少し期日を遲れて來たが相談すると贊成したが、通譯を誰にしやうかといふ事を心配して居た、此の計畫に對し一應全權委員の諒解を得置くべしといふ事となり石川君から相談すると全權委員等は之れを喜ばなかつた、吾輩が全權委員に會つて之れを決行する意を告げた全權委員は强て抑止はしなかつたが各國就中一流の英國記者を出席せしむる事の困難なる事情を告げ暗に中止を勸告した、吾輩は己むなくんば第二流の記者にても可なり、更に己むなくんば米佛の記者のみにても可なり、之れを決行さへすれば日本國民の希望は世界に知れ渡り相當の反響あるべしと思つた、而して吾等は政府と何等交渉なき身なれば我全權委員に左ほど迷惑を及ぼす事はあるま

いと思つた、石川君も各國記者を招く手續に就ては全權委員と同樣の憂慮を懷き種々其意見と方策を提起し奔走もしたが十分の確信を得なかつた、斯て若干の日を經過せる中黑岩君の咳が出始めた、餘り惡くならない中に療養旁伊太利の南に行かうといふ事になつた、折角黑岩君も決意して居た計畫を實行せずして二月十七日を以て巴里を發し旅程に上つた、如何なる動機に依るか日本の全權委員が人種問題を會議に提出したのは吾輩の旅行中の事である、吾等が巴里に到着せる時、嘗て萬朝報社に居た石川三四郎君が來て慇懃に世話をして呉れたが石川君が病氣となつたので椎名といふ人を推薦して呉れた、椎名君は秋田の出身で米國に九年居り佛國に三年居るとの事であつたが佛蘭西語が一番上手で二番目が英語、三番目が日本語といふ人であつた、腕力も強く親切でもあり寔に便利であつた、旅行中も常に此人を同伴した。

ニース・カン・モナコ王國は其氣候と言ひ風景と言ひ、旅館の設備と言ひ最も黑岩君の意に適した、就中モナコのカシノは黑岩君の愛好する所であつた、綺羅を飾り指に寶玉を鏤めたる淑女の群に入りて輸贏を爭つた、數理に明かにして聯珠の先手必勝法を發明し米相場の必勝法發明に苦心して自ら粗ぼ大成せりと信したる黑岩君は天運任せの勝負を試みず最も割合のよしと信ずる賭方をした、去りながら一勝一敗は免れなかつた。

黒岩君の健康を害せん事を恐れ毎日五六時間宛しか汽車に乗らず、到る處宿泊したので伊太利は頗る小刻みに諸所を見物した、サンレモは黒岩君の最も愛せる地にて歸途にも茲に數泊した、此地にカシノのあつた事も亦黒岩君の興趣を挽けた、羅馬は黒岩君の感興を惹くこと多大なりしも往路も歸路も雨の降れる爲め少しく健康を損し最も多く滯留せるはナポリであつた、ボンペイ見物は最も黒岩君の喜べる所であつた、此旅行中頗る黒岩君の詩嚢を肥し吾輩も和韻をしたが多くは記憶を逸して居る。

歸途はベニスの勝を探らんとしたが寒氣を恐れ往路を通過して西班牙に入つた、バルセロナにて電氣業者の同盟罷工に會し鐵道も不通とならんとするに驚いて急遽同地を發し首府馬德里に着せるは三月二十五日であつた、此地にも同盟罷工あり既に戒嚴令を布き兵士が郵便を配達する有樣であつたが阪田公使の斡旋に依り王宮、上院、美術館、闘牛場等を見、滯留數日の後、グラナダに赴いた、グラナダは邦人の足迹を印すること稀だがムーリッシュ王宮の織巧なる東洋藝術は最も黒岩君の喜べる所にしてコロンバスのイサベラ女皇に謁見せる室に少憩し黒岩君は其感想を語つた、而して他日一書を著さんと言つて居たが今は一場の夢となれるは哀れむべきである、

四月三日ボルドウに於て始めて黒岩君と別れ吾輩は巴里に歸り黒岩君は椎名氏を伴ひて又もモナコに向つた、一は巴里の尙寒きを怖れ一はカシノに憧憬したのである、黒岩君の巴里に歸つたのは四月

十三日であつた、又毎日相携へて見物に餘念がなかつた、旅館に在れば常に多數の新聞記者や有志が尋ね來りて黑岩君の室は一の政談倶樂部と化した。

倫敦に着いたのは四月二十七日で約三週間滯留して歸朝の途に就いた、此行最も黑岩君の注意し研究したるは勞働問題であつた、胸中には此問題の解決に相當の成竹あつたと思はれるが歸朝後藥餌と親み實際運動に着手する能はざりしは遺憾至極である、洋行の前夜黑岩君は私に吾輩に語つて『自分の境遇も行詰りである、今回の行に依り更に一回轉を爲さん』と言ひ前途大に期する所ありしに洋行が單に死土産となり了せるは返す〴〵も痛恨に堪へない、黑岩君逝て雁陣寥々の感を懷くもの獨り吾輩のみであるまい。

俠氣と熱心とで一貫

漆間眞學

私の黑岩君と交際を始めたのは君が大阪の英語學校を止して上京し芝愛宕下の信樂館といふ下宿屋に居て慶應義塾に通ふてゐた時分の事である、當時の君は書生としては餘程贅澤の方で我々が書物が買へないで仕方なしに圖書館に籠つて勉强してゐるのに丸善、東洋館、中西書店などへ注文して高價な

政治法律書を外國から取寄せ讀破したものだ、又人知れず横濱在留の外人ケリー氏の經營する書店に出掛け新刊書又は新聞などを見ては盛んに歐洲の形勢を論じて友人達を煙に卷いたものだ、當時ケリー氏の店頭から John bull and his Island. の一書を發見し、佛人にして能く英國及英人を解したるを喜び歸來荐りに英人の古代的客氣の我邦人に酷似せるを唱へ、今に或機會に於ては英人は政治上、經濟上、軍事上に於て同盟すべしと論じ、友人より此れ架空の論なりと批評せられたるも君は獨り此の說を主張して止まなかつた、蓋し明治十四五年の頃なりしと思ふ、當時我邦に於て日英同盟論など唱ふる者なく、孰れも之れを一場の夢想談として擯斥した、何ぞ知らん數十年後に到り之れが實現せられんとは、本書は數十年後に慥か尾崎咢堂氏之れを愛讀し、邦文に譯し印行したと記憶してゐる、黑岩君の一種の讀書眼は夙に斯る場合にも犀利の光を放ち、嚢中より針頭を脫露せる事が多かつた。

新らしき書物によりて自由に勉强の出來る當時の君は、塾に通ふのをもどかしく思ひ、遂々退學して了つた、君の其頃の裕かな學費の出所に就てはよくは判らないが何んでも君の義兄秦呑舟氏が當時銀座で大した暮しをしてゐたので其所から出たらしい噂であつた、君の許へ我々仲間が押寄せて牛鍋をつゝついたのも當時の事であつた、餘りに金遣ひが荒いのと一面放縱に流れ易い境遇に居た當時の君を救ひ出すといふ意味で叔父黑岩直方氏（當時山階宮別當）令兄黑岩四方之進氏等が肝煎で君を官吏

に仕立てやうと手を盡して君を慫慂したが、君は官吏は嫌ひだと駄々を捏ね遂々之れに應じなかつた、かゝる事情から終ひには金も出なくなり、全く孤立の狀態になつてゐたが君は當時の新聞紙の見るべきものなきを慨し新聞の發刊を企てた、當時未だ保證金なども要らず素より輪轉機などいふ大袈裟な仕掛ではなく手刷の粗末なものであつた、でも此新聞を出すといふ事は資金のない白面の書生としては當時と雖も可なり大膽な仕事に違ひなかつた、私は其印刷方面の仕事を承り、築地の平野活版所（現築地活版所）に交渉したが主人も面白い男で我等の意氣が氣に入つたといふので月末拂を承諾して吳れた、素より印刷迄に種々の費用が要るので玆に良策を案じ廣告を以て豫約會員といふのを募り、前金にて三月分四月分といふ風に講讀料を徵收し。是れを諸種の費用に宛てた、是れが則ち今日の豫約出版の嚆矢である、名を『同盟改進新聞』と附けて當時可也賣れたものだ、余り容易く賣れたので勢ひに乘じ擴張を計劃し、力あるものを入れ、設備は整へると云つた風で餘りに經費が嵩み、これは終りを全ふしなかつた、次に大平三次、八幡儀三郎兩氏經營の輿論日報（後に『日本たいむす』と改む）に聘され主筆となつたが、これも間もなく悲境に陷つて今度は都新聞の主筆となつた、當時恰かも初記の總選舉があり、神田では從來幾多の公職に在つた角田眞平氏と未だ何等社會上の地位のない大谷木備一郎氏の遂鹿戰があり、余等は此新聞に據つて全く面識のなき然して世人の誰もが落選を豫期してゐた大

谷木氏を極力應援し、神田祭の人形の諷刺畫を載せたりなど非常に喝采を博した事であつた、開票の結果は意外にも全く世人の豫期を裏切り大谷木氏の當選を見たので黒岩君と共に快哉を叫んだ事であつた。

當時大隈の改進黨、板垣の自由黨と對立し、互に天下を爭ふてゐたが黒岩君は末廣重恭氏等と國友會の會員として不偏不黨、是々非々主義を標榜し、柳橋の萬八(今の龜清)、淺草の井生村樓(今の明治病院)、兩國の中村樓(今の美術倶樂部)等で盛に演説し尙ほ憚らずして論文を輿論新誌其他の新聞に投書して滿腔の氣を吐いてゐた、筆禍を買ひ然かも本人の知らない間に裁判が確定して居り突然横濱に連れ行かれ戸部の監獄で苦役に服したのも當時の事であつた。

君は東西の書を飽喫し、或場合には隨分極端なる歐化主義、突飛なる自由論者の如く思はれたる事あるも、極めて熱心なる國粹家にして、而かも或點には頑冥と言はるゝ程の國體論者であつた、君が某學者に就き古事記傳並に日本書紀の研究に前後五ケ年を費したるは友人等の敬服して惜かざりし所である、武士道といふ事に就きては一家の説を立て、日本民族の繁榮發展には早くも熱心に努むる所があつた、人種改良論者が白種は黄種に勝さるとの説を唱へ、日本人も今に白化さるべしと云ひたるを咎め「馬鹿を言へ世界を黄化して見せん」とて種々なる場合に君自ら其事實を示さんとせる事も

あつた、君が『都新聞』社の隣接社宅に在りたる時、郷里土佐より牛の如き巨大なる純日本種の土佐犬を曳き來り、之を我子の如くに愛し殆んど坐臥を共にするを許し、出入共に之れを拉へ、洋犬又は雜種犬に威迫を加へたる事があつた。又角力道に熱心にして海山太郎、又八幡山貞吉等の盛んなる時は常に之れを國技として一般に奬勵し、兩國の國技館を建て內部に種々の改良策を施し、遂に今日の盛大を成したるもの、君の力に待つとが少くない、或は言ふ國技館の名稱は君の附する所で、或相撲の新なる一手は君の工夫に出でたる前人未發の妙手なりと。

君の英語の强かつた事は凡そ黒岩君を知る程の人が齊しく認めた所であつた。馬場辰猪氏等の外人關係の爆裂彈事件公判の時は、『此大問題に關し新聞社が一人の記者をも送らぬ冷淡さには驚く』といつて自ら神戸に下り、裁判所へ態々傍聽に出掛けた、當時裁判所に語學の判つた者が居らず A box の『一つの箱』と譯すべきを、『或箱』と譯し其外種々の誤譯をしてお可笑しかつたと未だ年少の君が笑つてゐた事を覺えてゐる。

君は又新聞記者たる者は廣く物事に通じなくてはならぬ、そして人情の機微を知らねばならぬといふので種々の事に趣味を持ち、文章、詩作、和歌、俳句、新內、都々逸、川柳、端唄、玉突、茶、碁將棋といつた風で新內などは樂屋まで押かけ、太夫に面會し質問を發するといふ熱心さで、終には師

匠に就て稽古した程であるといふので屢々折花攀柳の巷に足を入れ、克く遊んだものだ、私や生島一、藤田四郎、村上定など當時の仲間であつた、君は遊びの金に困ると家庭教師に出たりして稼いでゐた、淸水滿之助に英語を敎へ築地活版の支配人曲田といふ四十男にも敎へたりしてゐた、曲田の世話で上野博覧會の目錄を賣り、私と二人で一日二百圓位も儲けた事があつたが、當時君は吉原の老妓おゝの意見を徴し、最流行の衣類を拵へ日本橋の竹屋で古渡唐棧の煙草入に金地に銀張の煙管といふ凝つた風體で練り歩いてゐた、それかと思ふと零落を極めて淺草千束村の下宿屋吉田といふ家に當時大學生の佐藤準吉と二人で籠り、泣くにも淚の出ない時があつた、君は其時脚氣病に罹り銀座二丁目の秦氏宅に釣臺に載せて擔ぎ込んだ時は素より行衛を知らしてなかつた事とて一同非常に吃驚してゐた、君は後年よく此時の病氣と戸部の監獄の苦役が身體を惡くしたと言つてゐた。

君は常に強い者に反抗するといふ態度を持し、顯貴を恐れなかつた、萬事が寸鐵殺人的であり、小粒ながら山椒の辛さを持つてゐた、熱があり肉を透し骨に入るといふ徹底さで、氣の弱い者からは非常に誤解を招いたのは事實だ、戸籍は北海道士族となつてゐたので士族を脫して平民になり下ると云ひ、一時は『拙者今般都合により士族より平民になり下り申候』といふ廣告をすると言出した事があつた程で、常に一平民を以て任じ、秋霜烈日の筆を揮ふた、政府筋から如何に妥協を申込んでも決し

て受付けなかつた、此の剛腹と意氣あるが故に青年時代の希望たる新聞記者で堂々と一生押し通したのである、半面溫情に富み此溫情の爲めに時に不覺を取つた、是れ君の短所にして且つ長所と言ふべきであらう、曾て銀座で二大政書出版會社といふを經營してゐた頃、土佐の郷里から二人の知人が上京し金を借せと言つて來たが金の持合がないので一枚看板の衣物を與へ、自分は十日位夜具の中にくるまつてゐた、當時の友人達其剛腹に驚いたが同情の深い所に感歎した事であつた、又萬朝報が蓮門敎、成田新勝等、角田眞平を攻撃したるは社會道義上、風敎上、公益を目的とせる君が一片の侠氣からであつた、當時世人の一部が想像したるが如きは全く不徹底者の大誤解で、事實は早くも君が一見識と皎々の心とを實證した事であつた、自由黨又は星亨の壯士と言はれたる氏家某が君と君の妻君を道に擁し無禮を試みんとしたるが如きも、皆是等有り來りの誤解に座したるもので君は何等意に介せず友人の注意があつても一向無頓着で大道を濶歩してゐた、平和會議の際、巴里に渡航せんとするや、同人等より聯合の反抗を受けたが、君は平然として初志を貫きたるは尙ほ世人の記憶に新なる所である、千萬人と雖も我れ行かんとの概に、實に君が侠氣と熱心とに終始したるに依るものである。

黑岩君は私の知己であつた

尾崎行雄

私が始めて黑岩君を知つたのは、慥かに明治廿三年頃だと思ひます。議員選擧があるので、私が英國から歸朝して某新聞に英國で讀んだ或る面白い本を拔書して、自分の議論のやうにして揭載した事がありました。ところが或る日、小つぽけな『都新聞』といふのが、私のその論を評して、これは尾崎氏の論ではない、飜譯であると言つて、その獨創でないことを素つぱ拔いて、私の議論の出所や原著者を明かにして居りました。そして一々私の胸を刺すやうな辛辣な筆で書かれてありました。私は固より此の英國土產の所論が自分の獨創でないことは、承知の上ですが、日本の讀書界では、此の樣な本まで讀み得る人はあるまいと思つて、實は日本の識者の讀書力を疑つて書いたのでした。然るに當時の小新聞と謂はれた都新聞紙上で私の此の豫想を裏切られたのですから、全く吃驚したのです。

それから、私は此の都新聞の評者は何人であるかと聞き合せました所、その筆者は黑岩といふ人であることが解りました。非常な讀書家であるといふことが解りました。此時から私は黑岩といふ人の書くものには深い注意を拂ふやうになり、從つて都新聞も讀むやうになつた譯でした。

すると黒岩君は間もなく今の『萬朝報』を出されました。私は第一號から注意して讀みました。萬朝報は實によく要點がわかり、便利で、讀み切る前に世の中の事柄がハツキリ解るやうに書いてありました。私は一度黒岩君といふ人に會ひたく思ひましたが、一體私は人に逢はない性質なものですから此時は逢ふ機會を失つて居ましたが、兎に角、黒岩君は經營の才もあり、筆は天才であつたので、私は常に驚異の眼を睜つて黒岩君の書くものには注意をして居ました。

その後(廿六七年頃?)私が大磯から東京へ往復してゐると、車中で黒岩君にフトした事から知り合ひになり、始めて名乘り合つて、此人が黒岩君であるかといふことを知つた譯でした。その時、黒岩君は新聞の國家に對する理想に就て私と語り合つたことを覺えて居ます。そして若き黒岩君は私に對して『新聞には理想が無ければならない。然し萬朝報は基礎を確立するまでは、販路を擴める爲めに、苦くても世俗に合はして行く積りです。而して基礎が固まつたら英國の倫敦タイムス紙のやうなものを作つて、私の理想を聲明する考へです』といふやうな事を力說されて居たことを記憶して居ります。私は益す黒岩君に感服して仕舞つたのです。其後も深くは交りませんでしたが、私は黒岩君を知己の一人として信じて居ました。

その後、私は文部省に入つて、例の舌禍を蒙つて辭職しました。すると其の時の萬朝報の社說に『偏

狹なる愛國心』といふ題の下に私の舌禍――共和演說――を辯護して吳れました。無論、この社說が黑岩君の筆であることは解りました。ところが其の翌日でしたが、宮内省の方から、此の萬朝報の社說を私の方へ廻はして來まして、取締り方に就ての抗議的注意がありました。私は宮内省が何も新聞紙のことに就て注意する必要はない。第一文部省に廻はして來るのは、お門違ひであると思つたので、内務省より言ふべきものですから、時の内務大臣であつた板垣に見せたら可いだらうと言つて見せました。板垣は私が文部當局として自分で責を引き受くべきものを、板垣に廻附したと誤解したらしいのです、板垣は讀みもしないで、私に怒つて來たのです。私は親切心を以て示したのに過ぎなかつたのですが、板垣は蟲の居所が惡かつたのか、妙に邪推を廻はして仕舞つたのです。其所へ本願寺の石川某が『佛敵板垣退助』といふ表題で、板垣を攻擊したりしたものですから、愈々板垣は煮え返へつたのです。而かも時の横田警視總監が此の石川某の味方と爲るといふ騷ぎで、結局、板垣と尾崎は政府に在つて兩立せずといふ上奏をして仕舞つたのです。そこで政府では、板垣と尾崎と何方を處分するかといふことになり、遂に大隈と並び稱せられる板垣と、尾崎との確執を解決するには、後輩の尾崎を處分する外に方法はないといふことになつて、私は辭職することになつたのです。

大分、話が横道に這入つて行きましたが、斯の樣に隈板內閣がもつれてゐる最中に、私を辯護する

社説が萬朝報に掲げられた譯合なんです。而かも此の社説の有力な點で、また最も私が感じた所は、私が曾て英國で書いた『帝室論』(パンフレット)を黒岩君が引用して、共和論をしても、之れが尾崎の主義ではないと辯護したことでありました。私の共和論には私の親友まで非難して居りましたのに、縁も由縁もない黒岩君が斯くまでに辯護して呉れたかと思つて嬉しく思つた次第でした。

のみならず、黒岩君は私を辯護の社説を書いてから、私が愈々辭職して、官邸を引拂ひ、牛込の裏店に引込んでゐますと、態々私を訪問されて、事實でないことを以て人を陷るものであると言つて、私を慰撫して呉れました。そして黒岩君は私に「アノ方針で益す〳〵進んなさい。私は主義のためにあなたを辯護したのです」と言つて呉れました。私は益々知己を得た感を深ふしました。

それから教育思想や、教科書問題が惹起した時、興奮した黒岩君の言行を見て、その人格の崇高なるに打たれました。此時までは兎角、黒岩君を非難する人が多いので、その毀譽褒貶に就て、多少、疑ひを存して居りましたが、此の時から黒岩君の人格を尊重する信念が確立しました。

市長であつた時の私に對しても、一帶に善き正しい辯護を屢々されました。それは全く利害關係を離れた理想ある批判でありました。それから彼の大隈内閣當時、新聞記者團體のリーダーとしての黒岩君の態度は、實に立派なものでした。大隈内閣の存廢に對しては、全く黒岩君は唯一の權威であり

ました。

一昨年、國際聯盟會議の際、圖らずもロンドンで半日會談しました。是れが黑岩君の一生を通じて、私との第二回目の會見であります。色々話合つて見ますと、歐洲を觀察する眼も私と大體一致して居ました。將來の對歐政策に對しても、話が合致しました。ホンの短かい會話ではありましたが、何うも黑岩君と私とは意思も物の見方も不思議に合致してゐるのが愉快でした。

黑岩君は趣味の多い人でしたから、西班牙などの古代文明を研究して見たいなどと言つて居ました。要するに黑岩君は私の知己でありました。未だ年もさう老いないのに病の爲めに逝かれたのは、日本及び日本國民のために、殘念な事と思ひます。

敢爲の氣象に富んだ人

花井卓藏

黑岩氏を始めて見たのは年代は忘れたが、余の十六七歲の頃と思ふ、神田猿樂町に渡邊富士と云ふ女主人の下宿屋があつて、余は福田和五郎と二人で其下宿の三疊敷の陋屋に起臥してゐた事があつた。黑岩氏も其頃『大』と謂ふ名で下宿してゐた、一方は年上でもあり其時分にもう飜譯したり演說をし

たり可なり世間に知られてゐて、一廉の紳士であり、自分等はまだ當時一介の窮措大で随つて互に言葉を交はすやうな事もなかつた、後年相識るに到つてから此話をし共に其時代の話に花を咲かせ、當時を追懐して感慨措く能はざるものがあつた。

親しく同氏を知つたのは明治卅一年――朝報紙上で時の農商務大臣伊東己代治氏を攻撃し、其記事が官吏侮辱罪として起訴され、東京地方裁判所の公判に附せらるゝに到り、鹽谷恒太郎氏の紹介を以て余に其辯護を依頼された時の事である。

此の公判は前後十回以上も開かれて實に當時の大公判であつた、此事件の政治上に及ぼす影響は甚大であり、朝報の勢力にも關するといふので黒岩氏は熱心に法廷論戰の事に努力せられた、當時共に辯護せしは鹽谷恒太郎、長島鷲太郎、鳩山和夫、太田資時、小川平吉、磯部四郎、鈴木充美、後藤偉四郎、石橋友吉、竹内平吉、北井波治目の諸氏であつた、此論戰の準備や劃策に就て屢々會見するやうになり、深く君と相識るに到つた、其後山田喜之助君が京橋區で衆議院議員の選擧を爭ひ、鹽谷氏其參謀長となり、余も亦此運動に參し、遂に勝利を獲たが黒岩氏も亦朝報紙上に於て聲援され、又自ら働いて呉れたと記憶してゐる、其頃よりして互に相往來し益々了解し合ふ間となつたのであつた。

私の黒岩觀としては、敢爲の氣象に富んだ點に於て又と得難き人と思ふ、公私共に爲さんと欲する

所は必ず爲し遂げるといふ一事は黑岩君に於て之れを見る事が出來る、前の法廷論戰の事でも、其他政治上、社會上に於て隨所に敢爲の氣象の現はれて居る事であるから、余は一々之を例擧はしない。

氏は理智の人で、情の人ではないといふ人があるが、私はさう思つてゐない、君は森田思軒や小林天龍等の死後、其遺族に對し後顧の憂なきやう種々心配した事も細かに聞いて居る。

氏の文に到つては明治大正を通じての大文豪といつていゝ程だ、種々の著書もあるが『天人論』の如きに到つては必ず後世に殘り、人をして長へに黑岩君を偲ばしむるものであらうと思ふ、余は之れを愛讀する一人であるが、今少し君に借すに年を以てせば或は世を驚かす大著を公にする事が出來たかも知れぬ。

世に新聞記者はある、又新聞經營者もある、例へば福地櫻痴、末廣鐵腸、藤田茂吉、陸羯南諸氏の如き有名なる記者であり、村山龍平、三木善八、本山彥一の諸氏又世に知られたる經營者である、然かも黑岩君に到りては經營者にして且つ得難き記者である、氏が新聞界に在りて實際に斯界の爲めに貢献し、又社會を裨益した事は實に少くはないのである。

二番に落ちるな

三宅碩夫

世間に多能にして多趣味なる人はなくもないが、所謂玄關のみ廣くて奥行のないのが普通です、其の堂に入り奥義を究むる人は恂に稀である、故に人物經濟の上より又個人成功の點より切に適材適所の要を說く所以です、然るに適くとして可ならざるはなしといふのは涙香翁です、何れに向つても適所なり何を試みても適任であつたのは黑岩君でありました、新聞記者として新聞經營者として、翻譯小說家として、哲學者として、棋客として、又政論家として常に巨擘です先導者です稀有の大成功者でありました。

翁の曾つて語るに『何事を爲すにも第一番になれ第一番になれぬとも第二番に落てはならぬ』と朝報社同人に提唱する標語であつた、翁の大成功も皆この金言實行の結果に外ならざるはない、翁が晩年健康を失はれて日夕社務に親むとを許さゞるに拘らず、萬朝報の紙面は疇昔の光輝を減じなかつた、歿後今日に至るも特色は依然として在り、人生一の記念を遺すは至難の事である、翁の記念は各種の著述や遺業に現はれて居る。

萬朝報を手にする幾十萬人が共通に追憶して止まざる多趣味なりし翁は、今や各方面に永世の知己を有し、多能の面影は同人間に無窮の名譽なる印象を傳へたものといふべきです。

强情で我慢で勝氣

新井要太郎

黒岩氏の人格、識見、性質と云つたやうなものに就ては世間旣に定評のある事で餘り深く交際したといふ程でもない私が兎や角いふのは當りますまい、然し他の評判を通しないで私自身に感得した一事があります、それは一夜青年會館に於ける理想團の演說會で私が演說を終つて降壇して來ると、直に『貴下の演說は實に齒切れがよい、荒岩の角力の取り振りに髣髴たるものだ』と謂はれた、氏は當時關取荒岩龜之助の男らしい取口や立派な仕切立合といつたものが非常に氣に入つたらしく『萬歲會』といへるを組織し、氏が主として後援してゐた、私の演說に對する氏の言は過賞であつて素より當らないが、萬事きつぱりした事が好きで曖昧糢糊と謂つた風な事は非常に嫌ひであつたらしい。

强情であつたとか、我慢であつたとか、勝氣であつたとかいふ評判は能く聞く事であるが、此處に一つの例がある、これは圓城寺君の話であるが、盛夏の一日黒岩氏が圓城寺君を伴れて房州北條の海

岸に遊んだ、其際高等學校の生徒が向ふに見える、沖の島や鷹の島を泳いて一巡して來るのを見た黑岩氏は『俺にも出來ぬ筈はない』と遂々海中に身を投じ、圓城寺君が『まさかの時の用意に舟を附けねば危險だ』といふのを『舟があつては氣が緩むから』とて拒絶して了ひ、只一人沖の方に向つたが、餘りに游泳術を知らぬ氏は、早くもブク〳〵と沈み始めたので漸く救ひ上げたとの事であつた、氏の我慢强さには流石の圓城寺君も舌を卷いて驚いてゐた。

文章の巧な事、思想の豐富であつた事は云ふ迄もない事であるが、彼の『天人論』の如きは氏の著書の中でも代表作で、元來は可也の長編となるべきものを收縮し、大事の粹のみを拔き蒐めたもので、假名一字と雖も忽かせにしてない近代に稀な價値ある書物である。

元來が哲學の造詣が深いので、する事爲す事に哲學味があり、萬事に人間離れのしてゐたやうな感じがする、演說などでも稍ともすると哲學めいた事が交り、話に垢拔のした所があつて何時も面白く聞いた事であつた。

趣味の黑岩君

野間五造

吾輩が黑岩君と交を訂したのは、氏が都新聞に居られた明治二十三四年の頃で、恰度吾輩が東京日日新聞に居た當時と記憶する。

氏の性行が直截的で義俠的で、貲重の慾に淡ひのを視て、誰人も氏を高知縣の山の中から出て來た人とは想はず、江戶ッ子の樣に思ふて居たらしかつた、吾輩も最初は左樣想ふて居た、其當時新聞記者として羽振りを利かして居た、福地源一郞、條野採菊、塚原澁柿園、若菜胡蝶園、寺家村東明、栗本鋤雲、伊東專三など言つた連中が、皆々舊幕出身の人達で在つたので、吾輩等同人が黑岩君を目して、舊幕出の人か、或は準舊幕の人と想ふたのも、宂勝ち無理でも無かつた譯である。

其頃の新聞記者には二ッの種類があつた、政治家と云ふ立場から新聞を書くと云ふ、犬養、矢野、尾崎、末廣などの人達と、又た純粹に操觚者たる本分をのみ竭さうと云ふ連中、即ち前に揭げた、福地、條野、寺家村などの連中があつた、黑岩君は明かに後者に屬して居た。

福地、條野、寺家村などは、其當時文學の上に於て雄飛して居たのみならず、各種の趣味の上に於

ても、指導者と云ふ意氣を以て立つて居たのであつた、書畫骨董は申迄でも無く、茶道、花道、棋道、香道より、雅樂宴舞、花柳界の各遊藝に到るまで、殆んど通ぜざる所無く、一應は何んでも彼でも講釋の出來る人達であつた、黒岩君も長らく是等先達の間に伍して生活して居たので、從つて夫等より感化を享けたものと見え、天晴れ趣味三昧の人と成りをふせた……成りをふせた丈けでは無い、氏には歐米文學の素養が在つたので、彼等よりは一層該博な智識を貯へる事に成つた、卽ち日本固有の趣味の上に更に歐米の趣味性を加味した譯であつた、恰度、彼等が馬琴や種彦や爲永流の糟滓に甘んじて居た際に、氏は獨り閑々珍聞の戲文記者と呼ばるゝ外、更らに西洋の飜譯小說を以て嶄然頭角を現はしたると同樣に、趣味の上に於ても、洋の東西を兼備して居た樣な譯であつた。

氏の趣味性が廣汎に亘つて居た事は、實に驚く可き者であつた、書畫骨董などと云ふ普通平凡の物丈けでは無く、烏渡人の氣の附か無い、日常瑣末の事物にまで趣味を持ち、一種の『凝り性』なる者を發揮した譯であつた、譬へば、日本人は每日米を食ふ『米とは奈何なる物乎』と云ふ名題の下に於て、直に米の硏究を始める、最初は植物學から着手して最後には價格の變動にまで及んで取調べた樣な次第である。又た東京人は練馬大根を賞玩する『何故練馬大根が善き乎』と云ふ事の調査に着手し、自分自身に練馬へ行て大根畠をいじつて居た事もあつた。又た魚肉の王といはるゝ河豚が『東京附近

のは中毒し、馬關附近のは中毒せぬ其理由如何』と云ふ問題に就て、夫れ〳〵專門家に問ひ訊して居た樣であつたが、此分丈けは遂に判らずじまひに終つたらしかつた。

氏の食道樂は有名な者で、此方面に對する智識は中々豐富であつた、村井弦齋の食道樂の中には氏の智識が可なり多量に含まれて居ると云ふ噂もあつた位ひである、鱧や眞名鰹を東京人に勸めたのは氏であつた、又た「チエレー」や「ヲレンジ」や「メロン」などの輸入を說いたのも氏であつた、鰻の講釋も隨分良く出た『竹葉や小松は江戶前で無い、大黑屋と松金が眞魚を食せる』と云ふ主張であつたと記憶する、氏の食通は勿論和洋に通じて居た、一方で天ぷら屋やすし屋の詮義の囂ましかつたと同時に、西洋料理でも、帝國ホテルや精養軒の者は嫌らつて、每時も風月堂の食堂に現はれて居た、氏は拾數年來の風月堂の御常連であつて、兼て風月倶樂部の會員であつた。

氏が相撲や芝居等に深ひ趣味を持つて居た事は今更ら申す迄も無い事で、荒岩關の唯一の「パトロン」であつた氏は、昔時、小錦や大達時代からの相撲通であつた、萬朝報が一時相撲新聞とまで謳はれたのも、全　氏の趣味の片影であつたのである、芝居道に於ても亦た其通り、恰度福地櫻痴や條野採菊が、團十郎を古今の名優に祭り上げたと同樣に、今の歌右衞門即ち舊の新駒や、川上音次郎夫妻をして、東都に其の名聲を恣にせしめたのは、畢竟氏が居た當時の都新聞のお蔭であつたのである。

殊に音樂界に於ては、氏は立派に恩人と云ふ名を冠して耻しからぬ次第である、今でも藝人社會で黒岩樣と云へば誰れ知らぬ者も無い程、陰德陽德の大檀越であるので有る、日報社の福地、改進新聞の寺家村、やまと新聞の條野、繪入自由の伊東などが、圓朝や如燕を推擧して大名を成さしめた樣に、氏は獨力で典山や、圓右や、圓喬を一枚看板に仕上げたのであつた、常磐津の林中をしてあれ丈けの者に仕たのも氏の力であつた、又新内の方には殊に一種の凝り性を以つて居て常に『江戸文學の權化である』と賞へ、死んだ富士松紫朝や、鶴賀の總取締であつた鶴賀若太夫を贔負にして居たが、後ちには數年間若太夫を自宅附近に置いてやつて養つて居たと云ふ事である、清元でも先代の梅吉や太兵衞が贔負で今の喜久太夫なども一方ならぬ世話に成つて居たのであつた。

氏の邦樂奬勵熱は中々盛んな者で、朝報紙上で鼓吹する計りでは無く、所謂宵越しの金は持たぬと云ふ、餘り重からざる財布の底をはたいて迄、藝人に肩入れした者であつた、此性行は全く福地時代の記者氣質を遺憾なく發露した者で、氏が亡くなつた以上恐らく今後此タイプの新聞記者は跡を絶つ事であらうと想はれる。氏は洋行前迄は、毎月一回赤坂の長谷川で、同好の友人や同好の藝人を招致し、各派各流の名人を一堂に集め、斯道の奬勵會を催して居た者であつた、假令ば今月　太夫の呂昇を呼べば義太夫好きの友人を呼び、來月常磐津の松尾太夫を呼べば常磐津好きの友人を招くと云ふ樣

に毎月各派の大家を招びて演奏させ其演奏を終つたあとで、種々の批判や議論を闘はした者であつた、此黒岩君の奬勵會と云ふ者は、赤坂丈けでは無い、各地の花柳界で隨分評判な者で、大倉喜八郎氏の向島感涙會を小さく仕た樣な、斯界藝道行事の一と成つて居たのであつた。

氏の趣味の紀念として殘つて居る者の內には、百人一首のかるた競技會や、五目並べの聯珠會などがある、此二者は全く氏の奬勵によつて始めて世に出た者で、かるた競技會と云ふ文字も聯珠會と云ふ新熟字も皆な淚香子の發明である、撞球奬勵に就ても氏は一方ならぬ盡力をした者で、9618（クロイハ〕と彫り付けある球棒は、到る所の撞球場で隨分巾を利かした者であつた、其の外餘り友人間に知られて居らぬ事柄がある、夫れは氏が藤八拳の奬勵を仕樣と企圖した事であつた、吾輩が此闘拳の技に就て多少知られて居る所から、氏は嘗て此件に就て吾輩に相談した事があつた、双方意見の一致點と云ふは斯うである、元來藤八拳なる者は江戸趣味の一であると云はれて居るが、決して江戸に限つたもので無く、全國で一時は隆盛を極めた者であつたのである、目下は棄たれて居て世人から下ら無い、誠に俗惡の遊戯の樣に想はれて居るが、甚麼して左樣に見捨てた者では無い、此技は非常に人の志氣を鼓舞する者で、全く男性的の遊技である、室內運動としては撞球以上に効能の有る者で、今後青年に向つて大いに奬勵すべき價のある者である、支那では此闘拳を『酒禮（チユーリン）』と呼び、必ず酒間に

於て男子漢の弄ぶ可き唯一の遊技と成つて居るのであつて、此拳技なる者の强盛な場所柄ほど志氣も亦た旺盛であると認められて居る次第である、諺に『兩湖、兩廣、拳勇多し、楚、粤、漢子曾て剛健。』と謂はれて居る、我邦でも維新當時の强藩と指された、薩、長、土、肥では尤も盛んに此鬪拳の技が行はれて居たと云ふ事である、全く此鬪拳と志氣とは正比例をなす者で、靑年の志氣を鼓舞し、酒間の惰氣を一掃するには恰好の遊技であるから、今後大に奬勵しやうと云ふ事に成り、氏と吾輩と其方法を相談中、遂に氏に逝かれてしまつたのは、誠に殘念な次第である。

室內遊戯の事計りでは無い、氏は野外運動に就ても熱心な奬勵者であつた、自轉車競走會や野球團の發起などの事は勿論、氏が乘馬奬勵、馬匹改良で熱心であつたことを忘れてはならぬ、氏自身には餘り馬に乘つた事は無かつた樣ではあつたが、競馬や、舊式軍馬、即ち打毬、流鏑馬等の奬勵には一方ならず盡力した者であつた、思ひ出す、明治二十二三年頃、上野不忍池畔の競馬場、九段や、三崎原の馬場に於ける各種類の乘馬會へ、氏は毎時も委員の一人として出席して居た、吾輩も馬好きで其節騎士として屢々氏に厄介を懸けた者であつた、申す迄でも無く、其頃の競馬會と云ふものは、日露戰爭後に簇出した、彼の賭博的俗惡の競馬會とは全く、其選を異にした者で、徹頭徹尾馬匹改良と乘馬奬勵のみの意味で成立して居たので、貴婦人財嚢の外、毫も賭博的の意味などは含んで居なかつた

者であつた。

趣味の權化とでも謂ふ可き程、氏は各種各樣の趣味を持つて居た人であつたが、其癖餘り政治の趣味を持つて居なかつた樣である、あれ程各般の道樂に耽つて居たのに係はらず、政治道樂丈けは比較的淡い樣であつた、勿論操觚者の義務として政治的時事問題に關係して奔走した事はあつたが、殊に需めて政治運動に狂奔する事は無かつた、吾輩と氏と政治上の運動を共に仕たのは、地租增徵反對と憲政擁護の時だけであつた、其後大隈内閣の成立に關し氏等の盡力が大に與かつて力あつた事は同人間に知れ渡つたる事實であるが、其他には餘り此方面に奔走して居た事を聽かぬ、又氏は屢々代議士候補者として出馬を促されたこともあつたが、每時も斷然拒絕して受け無かつた樣であつた、若し氏が最初から政治家として立ち、議政壇上の人として現れて居たならば、尾崎行雄氏等と其名を等ふし、或は一度位ひ臺閣の人と成つて居たかも知れぬ。

氏は飽く迄で淚香子として立ち、文學的、社會的の趣味を以て進退した人で、新聞記者と云ふ立場を廣い意味で解釋し、文化の指導者として終始したのは、近世稀に覩る達人であつた。

操守の人であつた

箕浦勝人

黑岩周六君に就ては、私は深くは知らない。表面的に知つてゐるに過ぎないが、兎に角、黑岩君は『凝性の人』であつたことだけは間違ひないと思つてゐる。私は黑岩君のやうな人は新聞社會には、實に稀有の人物であつたと信じてゐる。アノ論說に於ても、或は探偵小說に於ても、他の人の眞似られない力を持つてゐた。私などは隨分新聞を通じて探偵小說を愛讀したもんだ。詰り私は黑岩君には面會せぬ前から、其の有名な小說を通じて、知つてゐた譯である。

黑岩君の政治的運動としては、憲政擁護運動の時よりも、彼の常磐會征伐の時が、一番目覺しかつたやうに記憶する。憲政擁護運動の時には、各政黨政派や色んな團體が參加して、指揮者も政黨の首領がなつてゐたから、黑岩君の舞臺としては映えなかつたが、之れに反して市會革新運動の時には、何しろ黑岩君が一人で中心人物となつて、最後まで奮鬪した結果、とう〳〵永い間、東京市民三百萬の生命財產を脅威してゐた常磐會の元兇森久保作藏を退治たんだから、之れは眞箇に黑岩君の政治的事業の功績を語る記念であると同時に、三百萬東京市民が黑岩君に感謝すべき所であらうと思ふ。

大隈內閣組織當時の黑岩君の功績は、大隈內閣が歷代內閣と違つて、其の政見の上に民黨の勢力を現はした事である。而して斯く民黨の勢力が伸張した動機は、言ふまでもなく、民論の急先鋒として、黑岩君が盡粹され奔走したのに職由するものが多々ある。而かも此の當時、黑岩君は廿年來の在野新聞から、御用新聞に成つたといふので、色々の誤解も受けたが、一旦、正なり善なりと確信した以上、黑岩君が其の所信に向つて飽迄も終始したところは、實に黑岩君の黑岩君たるところであると謂はねばならぬ。

要するに黑岩君は社會的には批評家、指導者であつて、實業家として政界などに立つ考へは無かつたやうに見える。私が黑岩君と會合したのは、アノ春秋會を組織した時と國際新聞協會を組織した時と色々の新聞上の紛紜の惹起した場合位だと思つてゐる。

昔から黑岩君は民權家で、恒に國民の味方であつた。藩閥とか、官僚とかには、天然の性格的に崇ひであつたやうだ。何でも國民的政治を理想として、一貫した人であつた。この主義が又た我が憲政會の主義にも合致したので、自然、憲政會を贔負されたので、反對黨の新聞紙が謂ふが如き、萬朝報が憲政會の機關紙などといふ筈もなく、また憲政會以外に超脫し、大理想を持つて、不偏不黨の立場にあるのが萬朝報の神髓であるのである。

一體、黒岩君は人に度々逢ふのが嫌ひであつた。故に多くの人は一面識もない下馬評を黒岩君に對して試みても、其れは嘘ばかりで當らない。黒岩君並に萬朝報に對して若しも惡く云ふ者があれば、それはすべて此の取るにも足らぬ下馬評に過ぎないのだ。何うせ何んな人でも、一から十まで惡い人はないやうに、一から十まで善い人もない。黒岩君には會はぬ前よりも、會つてからよく談すと、理解がある。

元來、大隈侯や黒岩君のやうな毀譽褒貶の多い人は、尙ほ更ら此の所謂下馬評の標的と爲る。私の觀る黒岩君は理想の高い人で、而かも苦勞人であつた。性質は何方かと謂へば、偏屈であつた。それだけ操守の人であつた。即ち見やうに依りては、偏屈にも見え、また洒脫にも見えた。そして情誼に厚いのは天性のやうであつた。

新聞記者としての黒岩君は徹始徹終、主義の人であつた。忠實に働いた人であつた。而かも如何なる問題、如何なる敵にも千變萬化の術を工夫する人であつた。けれど立込はチヤンと一定して動いたことがなかつた。全く理想的の新聞記者であつた。尤も當世流ではないかも知れないが。

それから、經營者としては、器が大き過ぎて、不適當のやうに思はれた。つまり自分其の衝に當つて、事務を處理することは困難であつたやうに思はれる。唯だ大體に於て大局から着眼して支配し指

圖するには、天才的に魅力があつたやうである。此の魅力は誠意と偉力とにあつたと思ふ。

理智の人で情の厚い人

今村力三郎

私が先生の名を知つたのは、先生が盛に探偵小説を飜譯せらるゝ頃でした。先生が『ゼ、ミゼラブル』を『噫無情』と譯して、何處か句調が似通つてゐると喜んだとの話を聞いたことがあつた。先生の飜譯は森田思軒君と並び稱せられて當時の青年をチャームしたものです。

私が始めて先生の顔を見たのは、明治三十何年か覺えませぬが、築地の精養軒へお招きを受けて行つたときです。佐治實然、内村鑑三、幸德傳次郎、堺利彦、小林慶二郎、圓城寺淸の諸君が同席であつたことを今も尚記憶してゐます。

後に承れば、是れは先生の誕生日であつたさうですが、之れが今の理想團の濫觴であつたのです。先生の書いたもので、私の讀んだのは『天人論』『小野小町論』『予が婦人觀』位で著書を通じて先生を觀たとは申せないのですが、先生が何か一つの問題を捉へると、飽くまで徹底せねば置かぬ研究心の旺盛なるには敬服せざるを得なかつたのです。

先生の演説は、理想團其他で屢々拜聽しましたが、御自分の思つてゐることを、成程と聽者に諒解せしむることゝ、何時も演説中に、一二の警句を加へられることが、先生の獨壇でした。講和會議から歸つて來たときの演説に『西園寺さんは、彼地へ行つて附ける味噌まで用意して行つたのです』との一句の如きは、今に私の耳に新しく殘つてゐます。

先生の趣味は、頗る廣く、圍碁、相撲、狂詩、聯珠、玉突、歌留多、和歌等私の知つてゐるだけでも隨分多いのですが、此外私の知らない趣味がまだ澤山あつたでせう。此多方面の趣味が、悉く人並以上に達せなければ承知せぬところに、先生の面目が現はれて居ます。乃木將軍殉死の際『今日までは優れし人と思ひしに、人と生れし神にぞありける』との先生の和歌は、乃木將軍追悼詩歌の壓卷であると今でも思つてゐます。

先生は理智の人のやうですが、其反面には誠に情に厚い人でした。私の知人で、小林慶二郎、圓城寺淸、齋藤久治郎の諸君は、昔朝報社の社員中に物故したのですが、先生は能く是等の人々の遺族を見て下さつたのです。私の知つてゐた三君の外にも、三君の遺族と同じく、先生の情に感謝してゐる人が少くないでせうと察せられます。

先生は、時勢の赴くところを洞察するの明があつて、常に其潮流の先頭に立つて居られたのです。

そして、此先頭に立つことの爲めにされた先生の人知れぬ努力が如何に容易ならぬものがあつたか、是れは恐らく私共の想像以上でせう。混沌たる刻下の時勢に對して先生を懷ふの情が轉た切なるを覺えます。

黑岩君と柏軒、秋水

小川平吉

黑岩君は極めて意思の强い決斷力に富む人であつた、お互に境遇の違ふ所から進んで行く道も違ひ、隨つて政治上の意見なども異にした事はあつた、然し個人の交際に於ては可なりに諒解し合つた仲であつた。

曾て私共政友會に籍を置く者五人で、同會幹部の革新を叫び、一日相携へて幹部攻擊に出掛けた事があつた、其時の同志が鹽谷恒太郎、卜部喜太郎、小島重太郎、長島鷲太郎の四君と私とであつた所から、當時萬朝報記者であつた松井柏軒君が『江湖俱樂部の少壯組四太郎一吉が幹部の辭職勸告に出掛けたが忽ち幹部達の一喝に遇ふて這々の體で引下つた』と短く萬朝報に載せて我々を冷かしたものだ、其記事が動機となり黑岩君が直に社に電話をかけ、編輯長の小林天龍君を電話口に呼びつけて「あ

の記事は一體誰が書いたか、か丶る進んだよき行動に對して冷笑したりするのは實に怪しからぬ、直に調べて呉れ、そして其者を直樣免職して仕舞へ』といふ『御面談の上委しい御話を』と小林君が言ふと『若し面談の必要があらば先づ其者を免職して來れ、然らずんば君が責任を帶びて退いて呉れ』といふ見幕、これには吾々も驚いて了ひ、殊に松井君に對しては非常に氣の毒なので、種々復職を懇願したら『諸君の至誠は諒とするが』と言ひつ丶も遂々二三ヶ月は出社せしめなかつたやうに思ふ。

日露の國交が紛糾し、兩國の風雲が大分急となつた時、吾々は日露開戰の必要を說き、共に陛下に上奏文迄奉つた事があつた、此上奏の前、築地の精養軒に寄つて開戰の是非に就き大に議論を戰かはした、幸德秋水、堺枯川、内村鑑三などの諸君は絕對の反對論者で『元來戰爭は如何なる場合と雖も人類の避くべきものだ、それが爲めには國家の存在も認めない』といふやうな暴論をさへ吐く人も中にあつた、吾々は是に反對して今の中ならば未だ施す術もあるが、撫で丶置けば日本の存在を危くするといふので、極力開戰論を主張した。此論戰は可なり激烈を極め、最後に黒岩君辭色共に改まり、拳を固めて起き上り、暴論家の幸德に向ひ『一體君は人から撲られても默つてゐるか』と今にも撲りつけん氣勢を示した、これには流石の幸德も一言なく、默り込んで仕舞つたのであつた。

私が世話を掛けた事共

富田幸次郎

私は主として政黨に關係し、黒岩君は又專ら新聞の經營に從事され互に進む道を異にして居り、又共に繁劇の身とて同鄕でありながら相逢ふの機會は極めて少なかつた、然し私は常に國の先輩として敬意を拂ひ、君も亦た私の心事を克く諒解して吳れてゐた、故に始終は逢はずとも、常に精神的に懇意であつた。

黒岩君は同情に厚く義侠に富む人で、情理を盡して話をすれば大抵の事は快諾され、一度快諾すれば其處には實に千鈞の重さがあつた、曾て國の學生二人を賴み、共に引取られて、數年間學校に出して貰つたなどは今に感謝に堪へぬ一事である、又大正三年山梨縣で補缺選擧があり、山梨同志會から宇佐美一寶君を出し、青年會からは望月小太郎君を推した、共に我黨であり、同志討といつた形となつたので、私と安達謙藏君とが調停の爲め山梨に急行した、然るに望月君は旣に準備が出來、應援の爲め、大谷誠夫君が業に乘込んで居り、後より黒岩君が來援するとのことであつた、私等は兎も角、大谷君に逢つて種々事情を話した處、大谷君も之れには同情し『夫れならば今度は宇佐美君に讓つて

次には公認候補として望月君が出るのがよからう』と云つて呉れ、望月君自身も之れに同意して呉れる様子であつたが、參謀がどうしても聽き入れて呉れぬ、其處で仕方なく黒岩君の力を借りて望月側を纏める事とし大谷君に依賴し大谷君は朝早く黒岩君を停車場に迎へ、望月側より未だ話の無い中に私等の意思を傳へて呉れた、所が其時黒岩君は『他の人達は知らぬが富田は知合の中だから尙一應富田に逢つて話を聞いて見やう』といふ事で私と會見して呉れた、そして委細を聽取した後、不承々々の望月側の人達を說服し、遂々圓滿に纏めて呉れた事があつた。此樣な場合でも實に人が確で飽く迄も熱心に盡して呉れる親切氣のある人であつた。

其後日米證劵信託創立の際の事であつた、發起人の某が兎角世間の評判が惡しく、新聞などでも大分批難攻擊を受け、萬朝報には殊に委しく某の關係してゐる、會社の眞相などが續きもので發表されたのであつた、此の記事は當時創立中にあつた日米證劵信託の死活問題なので某も非常に弱り、私を介して是非共黒岩君へ歎願し、記事の中止をして貰つて呉れとの事であつた、然し私は之れに答へて『黒岩君は元來公平な人であり殊に社長として社會に對し又社員に對し突如記事を中止するは困る事であらう、然し一部誤謬の點あらば之れを拉へて同情を願ふならば、或は此請を容れない事もあるまい、兎も角一度當つて見やう』と謂つて歸した、偶々香雪軒で新聞協會の會合があつたので此機會に縷々事情

を具陳し『兎も角某の一身のみならず會社の浮沈にも關する事であるから一先某の命を私に預けて呉れ、愈々社會を毒するものならば又何時でも殺す事は出來る、後で殺すも遲くはなからう、某個人の行動には慊らぬものがあるとしても這般の計畫が社會を益するならば又從來の非行を償ふに足るものではないか』『兎も角暫時某の命を預けて呉れ』と懇々賴んで見た所、君は『直に引受けたいが筆者の顏もあるから暫時猶豫を與へて呉れ、克く內容なども調べて見やう』と謂つて別れたが、一兩日して記事は中止をして呉れた、私は此取計に就いても今に忘れず君を德としてゐる。

又君は何か紛擾事でもあり、一度是れが折衝の任に當らば徹底的に正邪を明にし、一旦戰ふ時には得難き闘將であつた、曾て中央と地方の主なる新聞社が營業上の競爭や何かの爲めに從來團結が出來ず、種々の點に不便を感じてゐたのを慨し、黑岩君等が主唱者となり全國新聞聯合會といへるを組織し、紙會社の不當値上の際など此力を持つて紙會社に當り彼等の不當値上を防遏した事があつた、又東京の新聞記者を糾めて春秋會といへるを組織し、其力は非常なもので政府からも殆んど陰然一敵國の觀を爲し、彼のシーメンス事件の如き君は之れを率ひて奮戰し、時の山本內閣を倒したのは未だ世間の記憶に新な所である、斯の如く何でも一度手を染め始めると何處迄も勇往邁進するので、殆んど成功を收めないものはない、隈閣の擁立の時、其他にも此熱烈な徹底的の奮闘は充分に窺はれたのである。

赤新聞の名天下に振ふ

矢野龍溪

黑岩君と僕とは格別に親しいといふ仲ではなかつた。たゞ屢々同君と會つたことがあるといふに止つてゐたが〻一言で同君を評すると『精悍』と云ふ文字より他はないね。あの氣力と働きとそしてあの性質を以て、同君は新聞社會に成功したんだ。同君が萬朝報を起した當時は確か空拳隻手だつたと憶えてゐるよ、あの筆法で惡い奴等はどしどしやつつけたもんだ。間もなく赤い紙を使はれたが忽ちにして『赤新聞の名天下に振ふ』だつたね。目にかゝる惡い奴等は用捨なく攻擊したんだから、脛に傷持つた連中は悉く戰慄したもんさ、他で見てゐた者は實に痛快だつたね。

赤い紙を使つたのは確か外國の眞似をしたんだが、あの赤い紙がまた眼に非常にいゝんでね、あれに黑い字で印刷されると、非常に見よかつたよ。それに眞似て靑紙を用ひた者が出たやうだつたが、靑紙がまた光線に非常に惡かつたから忽ち不結果になつてしまつた。當時は斯んな笑話もあつたやうに記憶してゐる。

筆誅が餘りに激しいので怪我でも無ければと、僕等は密かに同君の身邊を案じてゐたが、其處は機敏

だつたね。『逆にとつて順に守る』といふのが同君の筆法だらう。そして勢力が定まつてからの同君は自重したのだ。死の前のあの調子と云ひ、實に時機を見るに敏だつたね。

それから同君はよく小説を書いたものさ。涙香の飜譯小説、あれで同君の人氣は支持されて行つたのだ。『リテラチユール』だけ、と世間の人は思つてゐたが決してさうではない。『天人論』出づるに及んで、始めて眞價が世間に知れたのだ。然し同君を知る者は縱令『天人論』出でざりしと雖も能く知つてゐるさア。哲學的の頭腦に餘程優れた人だつたよ。

要するに、日本に幾人かある新聞成功者の一人たることは、誰も容さなければならない。時と時勢で、世に類のない處に頭を擡げなければ成功は出來ない。當時各新聞紙の論調が非常におとなしかつた中に、同君は極端に激しく出たから成功したんだ。

誠に珍らしい人だつた。あの才力とあの精力とならば、同君は政治社會に乗り出しても事業社會に踏み込んでも、確かによかつたと思ふ。同君が新聞經營にあれ程成功したのを見ても判るではないか。

將來を矚目された青年

園　琢　磨

隨分古い話ではありますが、大阪に大阪專門學校と云ふのがありまして、私は其所に暫時教鞭を執つた事があります。其の時化學と數學との二科目を擔當して居りましたが、講義を聽きに來る青年の中に「黑岩大」と云ふ一青年があつた。級中に擢ん出た秀才で必ずや將來爲す有るの材となるであらうと、當時既に矚目した事であつたが、君は果して後年一世に名を成したのであつた。

大阪以來三十年、共に相逢ふの機會を有しなかつたが、不圖した機會に再び相見る事を得て今昔の感に堪へなかつた、今少し生かして置けば何事か目覺しい仕事を仕たらうに惜しい事をしました、私とは境遇も違ひ進む途も違ふ所から、繁く往來したといふ程でもなく隨つて之れといふ取立てゝお話する程の事もないのは實に殘念であります。

「他人の錢」がオヤお久し振り

半井桃水

私が始めて黒岩先生にお目に懸りましたのは、明治十年前後であつたと思ひます。夫は先生が大阪の英語學校に行かれる前か、但し行かれた後であつたか、慥かな記憶はありませんが、何れにしても學生時代で、先生は私が友人の友人、つまりその友人と會合の席に於て、四五回お目に懸りました、內二回は牛肉屋で同じ鍋をつゝき合つたと覺えて居ります、當時から先生は不言實行主義の人で、いつも緊張した眉宇の間に、その氣色は現はれて居りました。是れが始めてお目に懸つた時の印象、今に至るまで私の眼底には、はつきりと殘つて居ります。

爾來私は京阪の新聞記者となり、官吏に轉じ、會社に入り、南船北馬十餘年にして、再び筆硯に親しむ身となりました。明治二十二三年の頃、私が西洋の小說『他人の錢』といふのを譯して、某新聞に連載しました時、突然黒岩淚香の名をもつて、今君の出して居る小說は、自分が曾て譯した事がある、御承知の上か」といふ、詰問的の書を送られたので、私は大いに驚き、早速謝罪の爲め淚香君なる者を訪問しました。逢つて見れば以前の相識『ヤア是れは不思議、淚香君といふのは貴下か、實にお

久しぶりだつた』、『他人の錢の筆者は貴下か、さうと知ればあんな手紙を送るのではなかつたのに』と、お互に喜んで懷舊談に移りました。

然るに明治三十三四年、萬朝も略基礎が固まつた頃、先生は某氏を使して、私に萬朝の文藝一切を托したいから、どうか朝日の方を斷つて此方に來て欲しいと申込まれた事がありました、先生は何でも一つ斯と思込んだ以上、必らず仕遂げねば止まぬといふ強い意志の所有者である事を、堅く私は信じて居るので、相携へて仕事をするのを喜ばしう思はぬではないが、此に一つの困難は、頃日朝日の村山社長が病に罹つて居られるので、此の際社を見捨てる事は、情に於て忍びませんと、拒絶の意を答へました、後日新聞記者懇親會の席で一度、途中で一度お目に懸つたばかり、夫から二十餘年間はお逢ひ申す機會もなく、遂に其の儘永久のお別れになつた事を、衷心から悲しみます。兎に角先生は一個の偉材、先生を失つたのは國家の爲め、尠なからぬ損害と存じます。

勤王主義の人であつた

神田佐一郎

僕が故の涙香黒岩君と直接相識るに至りしは、故人が理想團組織の當時であつて、舊精養軒の樓上に於ける理想團晩餐會で始めて握手したのであつた、爾來互に往來を重ぬるに從ひ何時とも無く意氣相投じ相許すの間柄と成つた、殊に故人が『天人論』著作の當時、故人の宗教觀を語る可き友を求めつゝありし事とて益々往來頻繁を加へたのであつた、隨て僕等の當時從事せしユニテリアン教會に於て屢有益なる講演をせられ、多大の援助を與へられた、故人は單に自分で援助を與へしのみならず、當時幾多の名士をば僕等に紹介してユニテリアンの講壇を賑かならしめたのであつた。

或る時の如きは、故人は僕の三田の宅を訪づれて互に學生時代の回顧談を爲して打ち興じ、故人がその昔始めて上京せんとするや、大阪にて或る人の所説を過信し、東京より旅費として送られし金子をば殊更らに大阪にて一夜にして殆んど消費し盡くし、一人の友人を伴ひ東海道の無錢旅行を試み、思はぬ失敗を演じ、豐橋に於ける進退兩難の談から、靜岡にて故人の伯父君へ曾て三條公より賜はりし大切なる懷中時計をも終に淚を吞で賣り放ちたる時の談より、圖らずも故人のお家柄は勤王主義の

事柄であつて、故人も亦根本主義は矢張り勤王主義なりし事を知り、僕も亦亡父が維新當時勤王主義に随喜して、之れが爲めに祖先以來の臨濟禪宗をば脱退し、神ながらの道に復歸せんとて斷然神道に改宗せし事などを語り合ひ、大に勤王論に花を咲かせたる事もあつた。此の時の故人の說にては『我國にて所謂武士道なるものゝ實現せられたるは、南北朝の時代に於ける南朝の忠臣の間にのみ完全に實現せられたのである、此の時代は秩序の壞亂と共に一般士風の最も墮落せし時代であつたが、獨り南朝の忠臣の間にのみ大義名分は明らかに認識せられ、武士道の精華を認むる事が出來る』と云はれたが、實に名言であると思ふ。

顧れば明治四十一年、ユニテリアン教會改革運動の眞最中に於て、僕は圖らずも腸窒扶斯に罹り赤十字社分院に七十餘日も入院するの身となりしかば、此の間多くの教友等は、僕を以て最早此の世の人に非ずとせしか、僕を見捨てゝ反對派に走せ參じた、然るに故人と外兩三の友人等は、敢然として僕の爲めに戰はれ、最後までも其の協力者として終に改革運動を成就せしめられたのである。

故人との交際中僕の最も愉快なりとして、今猶話の種として繰り返へされつゝある一事は、故人でも僕でも、以前公開演說を爲すに當りて、常に音量の不足と音聲の不透徹を感ずる事が切であつた、ソコデ我儕兩人にて思ひ付き、某音樂の教師を聘して、毎週火金兩曜日の晩餐後三田の惟一館樓上に

て、殆んど二ヶ年半に亘りて發聲の練習を爲し、或は小學兒童の唱歌などの稽古を爲し、或る年末のクリスマスの晩の如きはユニテリアン教會に於て、僕等兩人は既に四十歲を超えた初老の身をも顧みず、猶ほ日曜學校の兒童に伍して調子外づれの英語唱歌 合唱などを試みし事すらあつた。

話は後へ戾るが、明治四十年の夏米國ユニテリアン協會創立七十五年記念會をボストンに於て開催せられ、僕は我國のユニテリアン教徒代表者として派遣せられたる際の如きは、故人よりは懇篤なる送別の辭と共に、表面に雛菊を彫刻せる極めて美麗なる銀製卷煙草入を記念として贈與せられ、其の內面に

美くしき心の花の咲くたねを
世界のそのに植ゑて來よ君

明治四十年八月　淚香

樂天兄

と彫刻せられて居る、其の後は僕は禁煙して居るも、此の煙器のみは我家の重寶として今猶ほ大切に保存し、時に鄕里の人々に示して我が過去の誇り話の種にして居るのである。

僕は故人と共に種々なる記念寫眞を寫せし事もあつたが、去る明治四十三年の極月に、僕が彌よ東

京を引き拂ひ郷里に歸らんとするの際、芝公園の三緣亭にて送別會が開かれ、其の時の記念寫眞に、僕は故人とマツコーレイ先生との間に坐して撮影せるものは、故人と僕との最終の記念寫眞であつた、今は此の寫眞は僕の書齋に揭げてあつて朝な夕な僕の思ひ出を新たにして居る。僕は此の年故人と新橋でお別れせし後ち、僅かに二回程上京して鋅町のお宅と朝報社とでお目に掛りしのみであつて、其の他は僅かに寒暑の伺問と年賀狀の往復に過ぎなかつた。遠ざる者は日に疎しとの是非無い理由か。殊に故人の御病中の消息は、何故か一向承らざりしは、實に千載の遺憾である！。只だ故人が歐洲漫遊中、イタリヤのフローレンス府よりの繪葉書に

近代文明の搖籃と稱せらるゝフローレンスに來り候繪畫彫刻等美術の淵源甚だ深きを見るサンマリア寺院のモザイツクに對して美術愛好家としての君を思ふ事切なり

伊太利國より

とありしは、實に今日より思へば僕に對する故人の絕筆である、僕は故人の寫眞も頂いてあれば故人の著書も頂いてあるが、僕は殊に此の絕筆の繪葉書を愛翫し、時々之れを眺めては淚を吞むをば一つの樂として居る。

大正八年三月二日　黒岩周六

前陳の如く故人の勤王論よりして、日本武士道の精髓たる南朝忠臣の事蹟が年と共に湮滅せしをば故人は非常に嘆息せられ、就中楠正儀の世評に關し大に不滿なる點がありしが如く、是非一度は是れに沒頭して研究して見んと希望して居たのであつた、ソレ故僕が東京引揚げの時故人のお話には、『將來自分の身體に幾分の閑を造り出して、攝河泉は勿論、紀伊の一部に就て南朝の忠臣の遺跡を踏査する積りであるから、將來相携へて紀州の山河を跋渉する時もあるだらう』との豫約もありしが、今は昔の夢物語と成り果てしは返す〳〵も遺憾である、併し此の故人の希望は、恐くは僕以外には極めて狹き範圍の友人間にのみ知られたる事なるべしと思ふ故、一言添加して置くのである。

故人の公人として、新聞社々長として、將また文士としての方面は世既に定評ありて、今更ら僕等の喋々を要せないが、只今肩書も何もない赤裸々の一個人として、僕の眼に映じたる故の黑岩周六君は、容易く狎れ近い方の人であつたが、一朝友人として相許すに至つては、飽くまで其の人の面倒を見て遣ると云ふ人であつたと思はれる。之れに就ては色々の實例も見て居つたが、就中當時僕をして深酷に感ぜしめた二つの實例があつた。實際友人の死後の面倒までを見て遣ると云ふ事は、親戚の間柄と雖も今の世には出來難き事である。併し故人は只だ世間で謂ふ涙脆い人では無かつた、助く可き理由無きに猥りに援助を與ふるが如き事は無かつた。而して否と應との判然たる人であつたから、何

事もキビ〳〵として心地よい人であつた。故に僕は『敵として恐る可く、味方として最も賴もしき人』とは、故人の如き人を云ひしものだらうと思つて居た。

此の外に僕は故人と鎌倉又は江の島邊へも出かけて淸遊を試みし事も時々あつた。要するに僕と故人との交際は全く利害問題を離れたる淸き交際であつたが、屢々故人より處世上の尊きヒントを與へられし事を感謝して居る。（大正一〇・九・一三）

余の黒岩先生観

（上）人物の批評

高島米峰

世人は或はいふ、黒岩先生が前半生の歷史は、實に闇黑なりと。僕はその果して然るや否やを知らない。しかし、僕は人の功罪を論ずるのに、單に過去の閲歷ばかりで決定する譯にはゆくまいと思つて居る。棺を蓋ふて而して後に定まるを正しいとするならば、少くとも其の人の現在及び將來をも、計算の內へ加へなくてはならない。否、寧ろ過去に於て多少見るべき功績があつたとしても、現在に於て爲すなきものであるならば、それは甚だ多く尊重するに足らないのである。これに反して、過去に

於て多少非難すべき所業があつたにしても、現在に於てこれを償ふて尚餘りある程の仕事をして居るならば、以て大に優待するに足るではないか。清和源氏の嫡流でも、今現に乞食をして居ては、たゞ徒らに系圖泣かせである。縱令、先祖はどこの馬の骨だか分らなくとも、今現に國家有用の材となつて居るならば、以て大に誇るべきではないか。この意義を以て僕は世人の如く、黒岩先生の前半生の闇黒面までを、彼是と詮議だてするの必要を感じないのである。

後半生の黒岩先生は、その識見超凡なること、その文章雄健なること、その辯舌明快なること、共に一代に傑出して居る。而して僕の特に黒岩先生に服するのは、その精力主義の人であり、熱狂する人であり、多能なる人である點に存するのである。

精力主義者としての黒岩先生は、その理論的方面を自ら『精力主義』と題する一書に詳説して居るが、その實際方面に關しては、傳ふべき實例が頗る多い。その一事に熱注し來るや、食を忘れ、寢を忘れ、時に或は家に歸るを忘れ、夢中になつて、之れに精力を傾注し、その事の徹底し洞見するまでは梃でも動かぬといふところ、實に驚嘆に値するのである。嘗て自轉車の流行するや、萬朝報社中の誰れ彼れ、逸早くもこれを乘り廻すを見て、負け嫌ひの黒岩先生は、なんの自轉車位と、忽ちこれが練習を始めたが、技術は理屈で練習する譯にはゆかない。聰明な黒岩先生も、轉落、又轉落、なか〳〵

以て容易に意の如くならない。一日に二百回以上も轉落して、大抵のものなら、精も根も盡き果てゝ仕舞ふべきを、黒岩先生は、ここだとばかりに奮勵して、遂に僅かに一日の練習で、他人の七日分の練習を了へ、二日目からは、街上を縱橫に乘り廻す程に、熟達したといふことである。たゞこれ一例にしか過ぎないのであるが、この絶倫の精力を傾注して事に當るのであるから、先生の手をつけたことに、不成功はないのである。不徹底はないのである。

先生が、時々、殆んど發作的に、或る事に熱狂するといふことは、頗る興味のあることで、これといふも、畢竟先生の精力の絶倫なる賜と云つて差支へない。五目並べを始めると、萬事を放擲して、五目並べに熱狂し、玉突を始めると、萬事を放擲して玉突に熱狂し、歌がるたを始めると、萬事を放擲して歌かるたに熱狂し、哲學の研究を始めると、萬事を放擲して哲學に熱狂し、婦人問題の研究を始めると、萬事を放擲して婦人問題に熱狂し、政治運動を始めると、萬事を放擲して政治運動に熱狂する。而して、此くの如く、次第々々にその精力集注の中心が移動する。移動はするが、世人の多くのやうに、事の半ばに疲勞して、これを廢止するのとは、全然其趣きを異にし、苟くも一度その手を染めた以上、必ずその事に徹底しなければ止まないのである。一事に徹底すると共に、更に他事に移りて、こゝに又その全精力を傾注するのである、一事を卒業して他事を學び、又卒業して他事を學ぶ、斯の

如くにして、後の黑岩先生は實に多能な人となつて終つたのである。

探偵小說の飜譯家として、文壇の第一人であつた黑岩涙香先生は、後なほ西洋小說の飜譯に於て遙かに群を拔いて居つたのである。五目並べに於て先手必勝の原理を會得し、歌がるたに於て、その並べ方とその取り方とに關する一種の新機軸を案出し、玉突の技も亦た素人の域を脫して、專門家の壘を摩するに至り、哲學の研究に於て、稍や獨斷の弊に陷り、且つ多く創見を示さないといふ非難はあるもの丶『天人論』及び『人生問題』は、今も讀書界の人氣ものである。婦人問題が世間の注意を惹くやうになると、專ら心をこれに潛めて、新著古書、手を盡くしてこれを集め、着々研究の步を進めて『婦人評論』に連載し、更に『予が婦人觀』を成し『小野小町』を成す。而して、萬朝報社の社長として、聊かも『萬朝報』經營の手を緩めざりしところ、到底、尋常一樣の人の企て及ぶべきところではない。

たゞ熱狂の人は、時に脫線することがある。曾て、冷水浴に熱注したる時、寒中、薄氷の張つた浴槽中に身を浸して、その瘦我慢を通した結果、遂に心臟に故障を生じて、久しく病床に呻吟した事もあつたとやら。

世間にはよく黑岩先生が政治界に乘出す野心があるやうに謂ふ者がある。然し黑岩先生は新聞記者

で終始された所に偉大がある。或は先生自身は政治上に野心があつたかも知れない。成程、桂内閣當時の憲政擁護運動や、山本内閣當時の新聞記者聯合革新運動の時には、先生の行動は隨分狂熱的であつた。アノ當時の先生の運動振りは全く在野黨の急先鋒であつた觀があつた。之れから觀ると、或は先生に政治上に野心があり、自分内閣を率ゐられる位の考へがあつたかも知れぬ。然し自分は然う信じたくない。のみならず、先生としては賢明なる人だけに、一部の人の謂つた如く代議士などに出るやうな愚はしなかつたことは慥かであつた。

新聞で論ずるのも言論である。議會に立つて辯ずるも亦言論である。その孰れを選ぶも妨げなく、兩者を兼ねるも亦妨げない。しかし『萬朝報』といふ城廓に立て籠つて居ればこそ、實に一城の主である。反對者に取つて、實に一大敵國である。然るを若しも黒岩先生が代議士となつて、議會に入れば、四百頭顱中の一人と爲る。必らずしも一雜兵たらずとするも、少くも、その所屬團體に依りて、幾干か自己の思想を掣肘せられ、自己の言論の自由を拘束せられなければならない。『萬朝報』といふ大なる言論の機關を有してこそ、言はんと欲して言へざるなく、言つて而して行はれざるなき、實力と權威とを有する黒岩先生は、決して決して代議士などにならるゝ考へは毫頭無かつたと信じる。黒岩先生が政治をその玉突や五目並べと同一視する道樂と心得られなかつた以上、私は然う固く信じる。

また先生は遂に記者として偉大なる足跡を永く永く殘されて逝かれた。

尙ほ黑岩先生が金錢に對して如何に恬淡であり、後進引上の爲めに骨身を吝まれなかつたかの一面を語るために、余が經營する丙午出版社から出版した先生の名著『予が婦人觀』に述べた自跋を左に摘載することゝする。

（下）先生の恩惠

丙午出版社が生れたのは今から滿七年前の事であつて、その最初の出版は、實に黑岩先生の『人生問題』であつたが、この『人生問題』は讀書界に歡迎せられて、忽ちにして數版を重ねる事となつた。然るに黑岩先生は僕の事業に同情を表せられて、何の報酬をも要求せられなかつたばかりでなく、僕が心ばかりの御禮を持つて往つたのさへ、固辭して受けられなかつたので、僕は出版業者として當然收むべき利益の外に、更に、著者に對する報酬の全部までをも、僕の收入とすることが出來た爲めに、無名にして無資力であつた丙午出版社も、一躍して、一廉の出版業者として知らるゝに至り、爾來八星霜、其間、屢々大書肆の倒產廢業したものゝあつたにも拘らず、丙午出版社は、本年其七周年記念として『大正文庫』十二冊を發行するといふまでになつたのである。卽ち、丙午出版社の基礎は、全く黑岩先生によつて、築いて頂いたのであると言つても差支はない。かういふ深い關係のある黑岩

先生の著を、この芽出度い記念事業なる『大正文庫』中に加へて頂くといふ事は、僕としては、寧ろ當然の希望であつて、あまり進まれない先生を、無理强ひに强ひて、とう〱、その承諾を得たのである。……三宅雪嶺先生を始め、その他の諸先生方にも、いつも無理ばかり言つて居るので、誠に申し譯がないと思つて居る。まあ、飛んだ腕白な子供が一人殖えたと思つて、諦めて頂くより仕方がない……。

近時、婦人問題が喧しくなつて來て、新しいの、舊いの、眠つて居るの、醒めて居るのと、是非の議論がその底止するところを知らないといふ有様。新しい女の主張が正しいのか、舊い女の教訓が間違つて居るのか、世の年頃の娘は勿論、その父母たり、その師長たる人々も、一體どこに適從してよいのか、眞に當惑の體である。この時、誰か、徹底した意見を公にして、之れを善導するものがないと、或は大に憂ふべき……今でも既に多少さういふ傾向を示して居るが……狀態に陷らうも知れないと思つて居た。然るに我黒岩先生が、雜誌『淑女かゞみ』及び『婦人評論』に連載せられた婦人に關する各種の議論は、確に、この時弊を救ふに餘りあるものと信じたので、これを適當に編輯して頂いて『大正文庫』中の一冊にするといふことの承諾を得たのである。

ところが、先生は『これは未完の論であつて、一冊として公にするのは不本意だ』と仰つしやる。

しかし、僕は今の世は餘りに、完結した思想、換言すれば、悪く固まつた思想の多いのに中てられて居るものである。苟くも世に、無用の用の却つて大用あるを否む事が出來ない以上、未完に完を索むることを不可能とは言へまい。殊に既に先生の卷頭文中、その『虎の子の如く秘藏して居る大事の斷案』を明示せられた上は、最早、畫龍點睛で、些の遺憾もない筈である。然るに、先生は又『斷案の片鱗をチラ〳〵と示したまでゞ、まだ人を承服せしむるといふ程に説き進めて居ない』と仰つしやる。しかし僕は、一斑を見て全豹を推知し得ない程のものは、少くとも水平線上の人とは云へないと思つて居る。孔子でさへ『一隅を擧げて三隅を以て反せざれば則ち復せざるなり。』と云つて居られるではないか。一斑で十分である、片鱗で澤山である、即ち先生の不本意とせらるゝところは僕の滿足とするところである。僕自から滿足するところを以て、之れを人に奨むるに聊かも躊躇する必要はない。僕は玆に本書出づるに依つて受けらるゝ黒岩先生の多少の迷惑は却つて、この方向の定め難い婦人問題に、正確な羅針盤を得たる讀者諸君の多大の幸福なることを思ふて、玆に深くこれを慶賀せざるを得ない。

相撲道の大恩人

根岸治右衞門

明治三十二年の一月と五月の兩場所に、大角力の番附が發表前に萬朝報に掲載された、夫れが大角力協會の問題となつて、版元の私は責任上非常に困りました。

黒岩先生に特別の眷顧を受けて居る檢査役の尾車も番附の編製に立會ふので、或は尾車が洩したのではないかと、協會の役員が邪推するので、尾車も大に迷惑をした事があつた、其場所が千秋樂を告げて後に、下總の銚子で七代目根岸の追善興行が催された時に、私は曉鷄館に投宿した、翌朝早く起きて海岸を散歩して居ると、大きな岩の上に宿屋の浴衣がぬぎ捨てある、遥かに沖の方を見ると、犬吠岬の怒濤の中に、黒い頭が浮んで居る、大層泳ぎの達者な人だと感心して見物して居ると、軈て悠々と大きな抜手を切つて岩の上へ泳ぎ付いた、それは意外にも黒岩先生でありました。

其晩私は先生と食事を倶にした、話が番附の漏洩問題に移りますと、先生は『君も尾車も非常に迷惑されたさうですね、實は社の記者が、世間の好角家に少しも早く番附の異動を知らせたいと云ふ忠實心で一枚手に入れたのださうです、君方の御困りになる事を、我社は再びせんでも濟みますが、新聞

社は記事の迅速を爭ふ點から、他の社でも必ず其秘密を探りましやう、協會が絕對に秘密にするなら、君の所で印刷したら漏洩する事もありますまい』と注意された、私は先生の云はれた通り其次場所から弟に印刷させる事にした、爾來番附漏洩問題で世間を騷す事も皆無となつたのです。

先生の角力好きは天下公知の事實であるが、未だ力士の後援會が無い時代に、先生は同好の士を語られて、力士を奬勵する爲めに『萬歲會』を起された、幕內力士が全勝すると、萬歲會から化粧廻しを贈られる、明治の角界を振興した、大砲、常陸山、梅ケ谷、荒岩等の名力士は、孰れも萬歲會から表彰された人々であります。

萬歲會と對抗して川の下會が、故秋元子爵の主唱で成立したのも同時代の事であつた、其後力士を勢援する會が續々現はれて、二期の大角力每に熱烈なる應援をされて居るが、此多くの後援會の端緖を啓かれたのが黑岩先生でありました。

國技館が建設されて間もなく、關脇以下十枚目迄の關取力士が連袂して、大角力協會を脫せんとし、新橋倶樂部に籠城して、次第に依れば別に一派を組織せんとした事があつた、其時は正は東京大角力協會の危機であつた、黑岩先生は辯護士の三宅碩夫氏其他の好角家と協力されて、角力協會と力士との間に奔走調停され、圓滿の解決を告ぐる事が出來た、東京大角力協會に力士會を置き、力士に養老金

の制を設けられたのも此時からの事であります、伊勢の濱が酒の爲めに失策をして、組合を脱走した時に、尾車年寄が組合へ詫を入れて、本人も確く禁酒を誓ひ歸參したのは、明治四十一年の一月であつた、先生は其時私に『彼れは東軍に將たる資格を有す、彼れの悔悟は斯道の爲め大に喜ぶべし』と申されましたが、三年を經て伊勢の濱は、大關に昇進した、先生は『黒岩の豫言が的中した』と喜ばれました。

先生は角力を觀る事が好きであつたと同時に、力士と共に飲食する事を好まれた、先生に愛された力士は數多くあるが、尾車（前代大戸平）や荒岩は先生の最愛の力士でありました。

先生が角力界の爲めに盡された事を追想すると、封權時代の諸侯が角力の技を鼓舞されたと同じ樣に、明治、大正の角界を奬勵されたものと思はずには居られません。

私は斯道隆昌の現代に會する光榮を得て、眞實に角力界の爲めに盡力された、地下の黒岩先生の靈に滿腔の感謝を捧げるのです。

公の事には自らを犠牲にす

須崎芳三郎

黒岩君と私との私的方面は極めて淡白の交際で、取り立てゝ言ふ程の話の持ち合せもありませんし、何方かといふと、私は黒岩君を語るの資格のないものでせう。

公的方面の交際は山本内閣當時からで、爾來政治上の關係では可なりに繁く往來したものです、山本内閣を倒した時も記者倶樂部を本據とし、黒岩君之れが主盟といふ格で、非常な働きをしたものです、此時の同君の功績は實に特筆大書すべきものだと思ひます、東京市會議員の選擧に際しても、市に磐根を張つて常に市政を掻き亂してゐた常磐會を攻撃し、遂に頭目森久保を倒して、市政攪亂の元兇を葬り去つた事であつたが、君が此時の活動も實に目覺しいもので、精養軒に事務所を置き、誓書を作成し、又種々慷慨の意を洩したる刷物を日々選擧區民に配布し、お仕舞には君は大谷、松井、松下の諸氏と戸別訪問迄やつた、君の考へでは『競爭する位なら一層徹底的にやる、戸別訪問でも何でもやる』といふのにあつたらしく、此處にも君の性格の一端が現はれて面白いと思ひます。

元より意思の強い人で、何でも徹底的にやる方であるが、それでゐて扨談判の際抔は溫和で傍に居て

歯痒い感がした事が度々あります、談判の時などは大抵黒岩君が主旨を述べるのでありましたが、主張を十分に述べ得ない程でありました、何でも君は幼少の折から家庭で非常に温良の方に育てられてゐたらしく『人と應對の際には其習慣が出て都合の悪い事がある』と言つた事があります、然し其爲めに決して意見を枉げるのではなく、所謂刀を拔く迄は何處迄も人格的、紳士的に出て置いてさて愈々談判破裂となれば、世人の知る如く劍を拔いて地を斫り莫哀を唄ひつゝ、徹底的の活動をしたのでありました、政治上の事でも、紙會社との交渉の時もさうでありました、又講和會議に君と大谷君が日本の記者團代表で行くと言つた時、若い記者達が是れは老人組の專横だとか言つて黒岩君の所へ嚴談に行つた事があるが、其時は君は會長の職を辭し、『萬報朝の一記者』たる個人の黒岩となつて渡歐した事でありましたが、こゝらも性格の片鱗が窺かはれます。

平常の交際でも極めて溫和で、言ふべき事でも半分位しか言はないといふ風で、殊に『天人論』を著はした以來は性格が一變したやうに思はれました、あれを以て君の性格も一新紀元を爲し、溫良謙讓の人となつたのではなからうか、以後他から非議を受けた事もなく益々諸學の研究を重ね、躬行實踐を以て處世の基礎とし、立派な紳士と成つたやうに思はれます。

そして凝性で、熱心であつた所から、碁とか聯珠とか云つた末技に到る迄人に拔き出て了ふ、又人に

拔き出でなければ止まないのであつた、書物など著しても此の意氣と熱心でやるのであるから立派な著書が出來た譯だ、『小野小町論』なども隨分と猛烈な調査をしたものであります。

又此頃の人には何かの運動と言つても、先づ個人の立場と利益の點を考へ、運動費の出所を確めなければ起たない、全く天下國家を念としないのであるが、君は何時でも公の仕事といへば金の事なんか考へない、自分の懐からドシ〳〵と出して置いて何等意に介するの風がない、此頃の人には黒岩君のやうに自己一身の利害を考へず、公の爲めに立ち働く人がない、かゝる後繼者のない事は實に殘念な事であります。

立派な畫帖へ萬年筆

加藤咄堂

私の黒岩先生を始めて知つたのは、『涙香小史』の名に於て盛んに小説を書いて居らるゝ頃、條約改正の問題が世論を興起して、久松座(今の明治座の前身)に於て大演説會があつて、單なる小説家と思つて居つた先生が、其の壇上で雄辯を振はれたのに志士の俤を認めた時である。

其の後、私の關係して居る明教社と密接の關係ある繪入自由新聞の跡へ萬朝報社が出來て明教社主

宏虎童氏の紹介で、始めて先生に遇つたのであるが、其の仕事も違ひ、思想も同じからぬので、社は隣り合ひながら久しく相遇ふことがなく、其の後明敎社は潰れ、萬朝報社は益々盛大に、今の所へ轉じて餘處ながら先生の言論を見るの外はなかつた。當時、先生の言論は鋭利であり、其の筆鋒は直截であつたが深處に於て缺くる所なきやを想ふて慊らぬ感がないでもなかつた。しかし、これは私の淺見であつたのか、先生の思想が推移したのか、其後、間もなく『天人論』は公にせられて精通博大なる識見と、甚深にして洞徹せる思想とは、殆んど私の考へと一致し、其の云はんとして未だ及ばざる所に達して居るに驚き、しば〳〵統一協會等に於ける講演に列して其の意見を叩き、時に爐を圍んで其の所說を聽くに及んで、啓發せらるゝこと頗る多く、私が『冥想論』を公にするに當つて、特に先生に其の序を請ひ、其の書の行色を壯んにすることが出來た。此一事は永く先生が後進に對する厚情を記念すべきである。

先生は敵として恐ろしき人であると共に、味方として賴もしき人である。先生は何事も其の深處に至らずんば止らざる意志の人であると共に、涙香の名に於て現はさるゝが如く、涙もろき情の人である。而して私の先生に於て特に深く感ずるのは、何事にも囚はれざる自由なる思想の持主であり、自由なる行動の實現者である。思想のことは云ふまでもなく、其の實行に於ての一例として今も記憶す

るのは、確か理想團の演説の時であつたと思ふ、或る地方出身の有志が、立派な書帖を持つて先生に揮毫を請ふた。大抵の者は筆と墨とかで騒ぐのであるが、先生はよろしいと直にポケツトから萬年筆を取り出して、假名交りか何かの格言を書きつけられた。其の男は變な顔をして見て居つたが、こゝに先生の傳統に囚はれず、舊守に縛せられざる自由奔放のやり方を見て、少からず痛快を感じた、此一例は確かに先生の人格の一面が流露せられたものと想ふ。今や自由の論客はある。併し自由の顯現者はない。自ら傳統に縛せられ、舊習に縛せられたる我身を想ふて先生を追懐するの情轉た切なるを加ふ。

常磐會打破の活動

坪谷善四郎

黒岩君には大分長い間御交誼を蒙りましたが、其れは春秋會の會員として、同君を操觚界の先輩と推し、後には會長と戴いた爲めで、同會の例會は勿論、幹事會にも、常に一堂に集つて指導を受けたのであります。其間に小生が殊に印象の深いのは、東京市政革新の爲めに同君の奮闘せられたことであります。

黒岩君に最も敬服する點は、意思の固きこと鐵の如く、自ら信じて決行せんとするときは、如何なる難關をも踏破つて猛進するといふ勇氣であつたと思ひます。東京市政の上に、常磐會打破を唱へて、大正三年の六月、市會議員の選擧に、同志を援けて全市に活動せられた時なども、其一端であるが、小生が同一の運動をしたのは其時が主たるものであつた。

是れより前に同君は、小生に尋ねて『東京市の常磐會といふものは、紐育のタマニーホールの様な横暴を働らいて居るが、君は長く東京市會に居る故、其由來を知て居るだらうから聞きたい』といふ事であつたから、小生は『東京の早い時代は、改進黨の地盤で、改進黨系の楠本正隆男や大石熊吉君が日本橋區から衆議院に選出せられたり、東京市唯一の交通機關たりし東京馬車鐵道は、同じく改進黨系の中野武營君や牟田口元學君に依て經營せられたりして、自由黨系の人々は、郡部の三多摩にこそ勢力はあつたが、市内には一指をも染めることの出來なかつたのを、星亨君が、米國公使の任地から、隨意に歸朝して、時の大隈内閣を破壞して、山縣内閣を建設したる功勞に酬ゆるが如く、東京市に於ける利權を吸收することゝなり、東京市會議長、市參事會員、市教育會長等を兼ねて市民の反對あるに拘らず、市内電車の經營は、星亨君が出願したる私立會社に許さるゝとき、市會議員の多數を其部下に集めて、最初は武藏倶樂部、後に月曜會と改名し、其れがまた常磐會に爲つたので、星君は非命

に觸れたが、森久保作藏君が其の後を襲ふて、市會に於て其の黨派の牛耳を執り、終に東京市會の分野は常磐會員が大部分を占むるに至つた』と云ふ所まで說くと『好し、分つた、常磐會を打破するには市會から森久保を落すに限る』と云はれたから『シカシ深川區に於る森久保君の地盤は仲々何人も動かすことの出來ない固いものですよ』と云ふと『イヤ屹度落して見せる』と、固い決心を以て斷言し、終に太田信治郎君を勸めて反對候補に立たしめ、自ら深川區へは幾回となく出張して、日夜激烈なる競爭を援け、終に深川で森久保君を落して太田君を當選させたが、他の各區に於ても日夜巡廻して演說し、『常磐會打破』といふ標語の下に、全市を震動せしめて、終に今まで全市會の三分の二ばかりの多數を占めた常磐會員が、此時の改選で、全數の三分の一ほどに減ることゝなつた。是れは世の中の機運でもあつたが、此の機運を作るに就て、黑岩君が、晝夜演說會にも臨み、新聞にも書いて、輿論を鼓吹し、兎も角も當時に於て市政革新に一時期を劃したことは、小生が同君と事を共にして、今も其の熱烈なる活動を想ふて、仰慕して常に念頭を去らぬ所であります。

常人の出來ない所を遣つた

増田義一

黑岩君は長所の頗る多かつた人で、其性格識見技倆共に先づ數の少ない珍らしい人傑であつた。而して意志の強い正義の觀念に富んだ男らしい人であつた。予が最も敬服した一つは、君が萬朝報紙上に於て、大隈内閣を終始一貫應援したことである。大隈内閣が大正三年四月成立するや、政友會關係以外の諸新聞は殆んど筆を揃へて歡迎し謳歌した。所が久しからずして非難攻撃する傾向となり、遂には反噬するに至つたものも少なくなかつた。

大隈内閣の政策と意見を異にした爲めに反對したものもあるが、中には時の内閣に反對しなければ、新聞が賣れぬと云ふ營業政策から反對したものもあつたと云ふ。大隈内閣に失政あらばそれに反對して攻撃するのは無論宜しいが、只だ營業政策から反對したのは不見識である。

然るに黑岩君は營業政策を眼中に置かず、大隈内閣を最後迄援助した其男らしい意氣に感激するのである。君は時に成敗利鈍を顧みず、所信に向て邁往勇進する人で、其意志の強いのと、勇氣の壯んなのとは敬服に堪へぬ。從て一旦敵となると隨分思ひ切つて強く當つたものである。又事に臨んでは頭

腦冷靜だが、友に交つては情誼に富んで居られた。社員園城寺天山氏の物故するや遺族に對して頗る懇切を極められた。予が親友石井白露の逝去に對しても、君が眞に哀悼して呉れた厚意は、今猶記憶に新たなる所である。

君は又率直な性質の持主であつた。阿諛諂佞は大嫌ひであつた。新聞記者の團體なる春秋會の會長として來賓に向ての挨拶は、辭禮を缺かさぬ範圍に於て頗る率直なこともあつた。他から招待された席上の演說などでも、露骨で痛快を極めたこともあつた。常人の一寸出來ない所である。

君は又徹底的の人で、何をやつても不徹底は嫌ひであつた。其徹底が趣味にも及んで居る。五目並べの如きは其の一例で、五目並べを深く研究して八段まで造つたのは君の創意だと聞いてゐる。相撲の好きなのは有名だが、性來俠氣に富んでゐた點から、特に相撲を好んだのではあるまいか。君は實に多方面多趣味で、而かも何事にかけても精力絶倫であつた。要するに君は他に類の無い珍らしい奇傑の士である。君の如き掛け換への無い人物の逝去する程惜しいことはない。現代社會に於て事ある毎に君が居られたならばと思ふこと屢々である。

山本內閣倒壞當時の黒岩氏と自分

松山忠二郎

黒岩氏の評判は素より承知してゐました。小說も論文も讀んで、先輩として敬意を拂つてゐましたが、親しく面會したのは、最近十年間位のことだと記憶してゐます。そして殆んど每日のやうに會つたのは、彼の山本內閣の時分でした。海軍の收賄問題暴露され、新聞でも旺んに攻擊したもので、殊に『萬朝』の如きは連日に亘つて攻擊の筆を緩めなかつたものでした。アノ論文が黒岩君の筆であるか何うかは知らないが、兎に角、吾々は共鳴したものです。果然、世間の論議は沸騰して、一時鼎の沸くが如き騷動を起したものです。私は恰好、其の時『東京朝日新聞』に居たが、私の社の記者が拔劍の巡査に斬られて、多少の怪我をしたので、私は憤慨の極に達したのです。當時の內務大臣原氏邸の巡査が、新聞記者に斬付けるとは何事である。是程の不埒千萬のことはないといふのが、私共の憤然として起つた動機だつたのです。ところが、其の間に『日々新聞』の記者も亦た斬り付けられたとの話を耳にしましたので、私は最う勘忍袋の緒を切らした。然し私は元來が政治家でなく、又政治家に知人も尠い。又た此樣な問題に政治家の力に依賴することも希望しないので、同業者に愬へること

にして、都下の主なる新聞記者に案内狀を出した。其の時、萬朝にも出したが、黒岩さんの名宛には出さなかつたのです。慥か他の記者の人に名宛てで出したと記憶してゐますが、其れにも拘はらず、黒岩さん自身で來られたのです。それは黒岩さんが其の席上で述べられた雄辯に依つて忘れられないのです。即ち其時の黒岩さんの挨拶に曰く『私は此の集會の案内を受けぬが、同業者として默視する能はず。發起人は眼中に無い。自ら發起人の積りで來た』と。黒岩氏特有の性格を躍如たらしむるものがあつた。其れ以來、黒岩氏とは心易くなり、一時毎日會合しました。

以前から黒岩さんの評判は、色々に聽いてゐましたが、世間の評は毀譽褒貶相半ばしてゐたやうです。或は惡く、毛蟲の如く嫌ふ。モツト厭な綽名まで附けて誹る。さうかと思ふと、又た他の人は黒岩氏の長所ばかりを見て褒める人があつた、黒岩氏には色々の長所があつた。多技多能、球突、五目並べ、歌留多など何でも人の爲る位ゐの遊藝は隨分廣く遣られた。そして各々すべて玄人の域に達する人であつた。從つて氏を褒める材料も澤山あつた。前記の新聞記者傷害事件で、黒岩氏と私が行動を共にするまでは、何方が眞箇なのか、知らなかつた。或は毀譽褒貶何方も本當であつたのかも知れぬと思つてゐた。ところが愈よ毎日會合すると、始めて解つた。黒岩氏は大分世間から誤解された人であることが解つた。又黒岩氏は大に誤解される性格の持主であつた。

黑岩氏は非常に物事に熱注した。仕かけたら夢中であつた。國家に大打擊を與へるやうな事件が勃發すると、他の事は一切打遣つて一方に進む人であつた。思ふに色んな藝が出來るのも、此の性格から來てゐるのであるまいか。球突を遣つたゐる間は、球突ばかりを考へ、五目並べを研究してゐる間は、五目並べにばかり沒頭して、夢中の沙汰、歌留多も夢中、何でも一度び試みたら、其の目的を貫徹するまでは承知しない。その點が世間が誤解する所以だと思ふ。之れと同じ論理の下に、政治上でも、社會上でも、一つの目的を達する爲めには、他の一切の仕事を犧牲にする嫌ひがあつた。一つの目的を達成するまでは他の仕事を顧みない風があつた。之れを世間的の言葉で謂へば『目的の前に手段を擇ばず』といふことに爲る。恁う謂へば人聞きが惡いが、詰り或る目的を達成するために他の仕事を顧みないのと同意義と爲る。五目並べを研究してる間は、社の仕事を爲ないのと同意義である。黑岩氏の短所も長所も實に此點に在つた。

山本内閣の時の新聞聯盟運動が、遂に山本内閣を倒壞したが、其の新聞記者の結束を發起したのは、卽ち斯く申す私である。黑岩氏は飛入の發起人である。然しながら黑岩氏の人物、地位及び熱心——殊に最後の熱心が氏をして中心人物にした譯であります。氏が主唱株になつた譯である。黑岩氏は『同業者の今度の被害は、新聞記者全體の凌辱であるから、默視することは出來ぬ、何處までも雪辱戰を

断行せねばならぬ』と謂つて、飛入されたので、當時、私は非常に嬉れしかつた。黒岩氏の此の意氣には感謝した。新聞記者のための此の奮戰には、私は黒岩氏の俠氣を認めずには居られなかつた。

黒岩氏の性格は、一言にして掩へば、遣り過ぎる。馬車馬的である。語弊があるかも知れないが、目的の爲めには手段を擇ばぬ的であつた。革新運動の時にも、其の運動の方法に就ては、黒岩氏と私とは大分意見が違つてゐた。内部で時々議論もした。場合に依つては多少有難迷惑のこともあつた。然し之れは別に惡い意味ではなかつた。私は飽迄も新聞記者として終始した。ところが黒岩氏は運動に取りかゝると、何者も犧牲にして、目的の貫徹に驀進しやうとした。黒岩氏は『此の事件は、國家の大事件である。山本内閣は何としても倒さなければ止まぬ。他の物は犧牲に供しても差問ない』といふ考へであつた。或は黒岩氏は山本内閣を倒すには、自分の經營してゐる『萬朝報社』を潰しても憾みとせぬといふ概があつた。私は然うでなかつた。私は當時『東京朝日』の主筆であつたが、朝日新聞は人の物である。人から依賴されて、支配してゐるに過ぎないんであるから、何うしても私には黒岩氏のやうな自由行動が出來なかつた。また私には其れだけの勇氣も無かつた。黒岩氏は全然、政治家になつて仕舞つて。在野黨が政府に對すると同一の態度に爲つた。私は飽迄も朝日新聞の嚴正中立の態度を忘れる譯には行かなかつた。之れは氏と私と意見の違ふ點であつた。然し之れは私が得手勝手で、

私が薄志弱行で、黒岩氏が俠氣であつたかも知れない。兎も角も黒岩氏の力を藉りて『朝日新聞』の仇打は出來たのです。私としての面目も立ち、腐敗し切つた山本内閣倒壊も、玆に新聞記者――黒岩氏の力に依つて達成されたといふ譯である。

今や綱紀粛正問題が旺んであるが、今日のやうな時際に、黒岩氏のやうな人があれば、新聞紙の論調ももう少し一變すべきであると考へる。原内閣に取つては、黒岩氏の逝去してゐるのを幸福と思ふかも知れないが、在野黨は頗ぶる遺憾としてゐるに相違ない。

最後に一言駄足を加へて置くことは、金錢問題に係はることである。世間では黒岩氏が金錢を巧妙に取るなどと謂ふ者もある。私は其の事實は絶對に知らぬが、然し黒岩氏は計算に鈍いことだけは斷言する。此の事は前述の革新運動の際に、寄附金を集めたが、黒岩氏は其の計算には實に迂濶であつた。無頓着であつた。運動費があるのか、無いのか全く無關心であつた。金錢には要するに無頓着の人であつた。金錢問題に對しても、世間の惡評は、驚くべき誤解をしてゐると思ふ。(大正一〇・八・二二)

黒岩君は傑物ぢや

大隈重信

黒岩君の事に就ては、吾輩はあまりよくは知らんが、古くはお心易くした事もあるんである。そして最近は内閣組織時代に大分御相談をしたんである。

一體、あの人は主義のためか、奇癖のためか、あまり人に會ふことを好かれなかつたやうだ。それだけ他人から誤解もされ、よく知られなかつた傾向があつたんである。ところがだ、一度び會ふと、なか〳〵面白い人で、物事に熱心な、精力の溢れるやうな力のある人で、大事を托するに足る人なんである。あの人は新聞記者としても偉いが、政治家としても、大きい偉い人に違ひなかつたんである。惜しい事をした。が然し、萬朝報同人は黒岩君がよく育てゝ置いたから、黒岩君が亡くなつても、困ることはあるまい。

何にしてもあの人は勉强家であつた。學問では哲學でも、政治でも、文學でも、何でも奥義を究めてゐたやうだ。趣味といふ方にも研究を深くされてゐたやうである。何事にも餘程の苦勞をした人と見えるんである。

萬朝報といふ大勢力はだ、黒岩君の力の塊りであるんである。君等も其の塊りの一部なんである。黒岩君は決して滿足して逝かれなかつたんであらうが、吾輩は内閣總理大臣と爲るよりも、黒岩君の事業は偉いと思ふんである。何となれば黒岩君は幾度も自分の手で内閣を壞し、或は總理大臣を作つたからである。彼のクレマンソーのやうな人なんである。兎に角、新聞記者は政治上に於ては、總理大臣以上の人なんである。その新聞記者中の代表的人物が黒岩君なんであるから、偉物なんである今少し天壽を藉したらばと思はれるが、それはたゞすべて其の各人の定命であるから仕方がないんである。

操觚界の理想家

江木衷

俺は黒岩君には二三度しか會つたことがない、それも演說會や宴會などの公會の時ばかりのやうに記憶してゐる。ソンナ譯だから、黒岩君に就て何か感想とか、評論せよとか言はれても、別に之れと言つて話すほどのことも持ち合せてゐないが、唯だ俺が黒岩君を眞實に偉い人だと思つたのは、彼の乃木が自殺したときに、黒岩君が書いた萬朝報の言論である。隨分、黒岩君は能文の人で、澤山書い

たらうが、俺の今日までに、深い印象に殘つてゐるのは『乃木將軍の自殺を聞きて』とかいふアノ論文だけだ。もう、アノ論文を讀んだ時、俺は、黑岩といふ人は、唯心論者で、操觚界唯一の理想家であり、哲學思想の深遠な人だと思つた。少くともアノ論文を書くには、黑岩君が何れほど心血を注いだか測られないと思つた。全く黑岩君その人の人格が、乃木の人格と一體となつて、混融してゐることが解かつた。そして俺の乃木に對する考へと寸分違はないのに驚いた。俺は全くアノ乃木自殺論を讀んだ時に、始めて黑岩といふ人を心から尊敬して仕舞つた。其の當時、俺は拙著『國家道德論』の中で、乃木の自殺に就て一言して置いたが、その根本精神が、黑岩君と俺と全然合致してゐたのは嬉しかつた。

何でも、一度、黑岩君と何處かで一緒に演說したことがあつたが、その時も、黑岩君と俺とは意見が合致してゐた。その頃から、俺は黑岩といふ人物は、唯心論徹底の人だナと思ひ込んだ。文章も巧かつたが、俺は黑岩君の精神に惚れてゐた。

もう乃木のやうな偉人の、アレ丈けの大事件を、アレ丈けに書いたなら、縱ひ黑岩君に他に百の缺點があつたにせよ、尊敬せずには居られんぢやないか。アノ當時、乃木の死を何うの、恁うのつて、非難などしてゐた馬鹿者があつたが、夫等の者は、人間と畜生との區別を辨へぬ者だ。犬や猫には自殺

はないからナ。

兎に角、乃木が神に祭られるほどの偉人であつたとすれば、それはアノ黒岩君の赤誠溢れた論文に依つて極まつたものであると謂つて宜い位だ。將來、永劫に乃木神社の崇高と共に、黒岩君の人格も後の世までも國民尊敬の標的として朽ちぬであらう。

俺は餘り多く接しぬから、從て多くを知らないが、唯だ今日までに誠心で書いたアノ乃木自殺論に就て、思ひ出の一端を語つたに過ぎぬことを諒解して貰ひたい。

『天人論』は偉大なる産物

田川大吉郎

一

世間が始めて黒岩氏を見出したのは、政論界の健兒としてよりも、寧ろ飜譯小說家、殊に探偵小說の飜譯の名手としてゞあつたらうと思ひますが、私の始めて黒岩氏の名を知つたのは、その探偵小說の飜譯の名手としてよりも、寧ろ英國の議會の何事かに關する短い電報の飜譯に於て、氏が異常の手腕、異常の學殖を發揮された時から始まるのであります、私はこの時始めて世に黒岩氏の居らるゝこ

とを知り、次でその述作、探偵小説にまで注意することになりました。

今その折の事を回想いたしますと、時は明治二十四年の暮か、二十五年の初めでありましたらう、多分明治二十五年の初めであつたと思ひます。私は報知新聞の記者をつとめてゐました、その報知新聞は當時藥研堀に在りました、その頃の東京各新聞には、今日のやうな豊富な外國電報は無く、たまに掲げらるゝ外國電報は、皆横濱の外字新聞メイル、ガゼットの類、主としてメイルから轉載せられたもので、從つて一日おくれに掲載せられてゐました、各社には皆その擔任の飜譯係が置いてあり、報知社にも亦その專務の飜譯係がゐました。

然るにその飜譯に於て、一日、大新聞と謂はるゝ大新聞の多くの記事と、小新聞と貶されてゐる都新聞の記事とが、全く相反對してゐました、私は當時その都新聞を讀んでゐませんでしたから、最初の一日はこれに氣着きませんでしたが、次の日に至り、都新聞は重ねて之れを掲げて、仔細に各紙の誤譯を指摘し、都新聞のため虹の如き萬丈の氣を吐いて居りましたので、即ち世上の問題と爲り、報知新聞の編輯局でも亦それが問題と爲りましたが、善く讀んで見ますと、それは確に報知新聞の誤譯で、擔任者某君は頻りにその失錯を詫びてゐました、私はこの時始めて都新聞を讀みましたので、且つその譯者が黒岩涙香氏であられたこと、黒岩氏が單なる探偵小説の名譯家たるに止まられざること

を知りました、と申すのは、この時尾崎行雄氏が見えられ、英國議會の有樣を親しく例を舉げて說明せらるゝに及び、某君は始めて判然自家の誤譯の所因を悟らるゝに至つたのであります、黒岩氏は此の時に於て固より長々と議會論をされたのではありませんでした、さり乍ら當時の飜譯と並にその翌日の氣焰の中には、氏が英國議會の狀況にも、尋常の政客以上に留意し精通してゐられる一斑を明證するに足るものがありました、都新聞は當時に於ては世の所謂小新聞で、政治新聞では無かつたのであります、然も當時の譯文は、上述の如く、遙かに各種の政治新聞を凌いで一異彩を示し、一世の注目を惹きました、現に私はそれ以來、時々ではあるが、都新聞をのぞいて讀むやうに爲つたのであります。

私はこの事實を確實に記錄したいと思ひ、當時の新聞が、今日の都新聞社に尙保存して在るならば、就て讀み返したいと思ひ、同社に問ひ合せましたなれど、保存して無いとの答へに失望いたしました、因てこゝに此の漠然たる文字を騈ぶることに爲り、殘恨に存じますが、已むを得ない次第、惡からず御寬恕を仰ぎます。

二

黒岩氏に就て、次に私の念頭に消えない感じ、不滅の印象を貽してゐるものは、かの『天人論』であり

ます、勿論これに就ては、いろ〳〵述べらるゝ方がありませう、あれは確に明治年間に於ける偉大なる産物の一であります、必らずいろ〳〵に追懐され、推賞せられなければなりません、折柄藤村操氏は、華嚴の瀧に投身して死に、その臨終の遺文巖頭の感は、愕然として一世の驚異を惹き起しました、黒岩氏はその巖頭の感、藤村氏の死に對して、同情の厚い、觀察の深い、注意の行屆いた一文を草して、眞面目に後の青年子弟を戒むるの傍ら、藤村氏の生前に、その『天人論』を示すに及ばなんだことを殘念がり、藤村氏にして若しその『天人論』を讀んでゐたら、或はその死を早むるに至らなんだかも知れないとまで論ぜられました、以て『天人論』に對する黒岩氏の期待と努力の程を察するのであります。

私はその當時、これは黒岩氏の期待以上の事である、藤村氏にしてたとへその存命中に折好く『天人論』を讀んだとしても、藤村氏の死の決心は必ずしも挽回さるべくもならなんだであらう、藤村氏はこれらの知識慾若くは探究慾の不足、若くばその凝り過ぎのため、誤つて死を早められたものとは思はれないからと論じて置きました、私は今も尙かく信じて居ります、然し乍ら私がかく信じて居ると否とは、些しも『天人論』の價値に影響はありません、私は今に尙『天人論』が明治年間の偉大なる産物であり、不朽な著述の一であることを確く信じて居ります。

然もその內容に觸れずして、尙一言して置きたいことは、『天人論』に現はれたる、若くは『天人論』を著

すに至られたる氏の不撓の努力と、その進んで止まる所を知らざる向上の心、その深邃にして一糸紊れざる探究推理の力であります、この點に於て私は黒岩氏を明治年間に罕に見る克己、努力、勤苦、發明の人であると思ひました、宗教家から見れば、『天人論』には未だ達せざる所が有りませう。宗教家で無い氏から見ればこれがその達し得べき究境でありましたらう。明治の人物はいづれも宗教圈外の人である、その宗教圈外の明治の人物にして、『天人論』に現れたる宗教的見地、天人融洽の關係に悟達し、論及し得たる人幾何ぞ、私は氏を宗教圈内の人にあらずと思へばこそ、氏の『天人論』を一層得難き、近年稀に見るの好著と思ひ、氏に一倍の敬意を表し來つたのであります。

三

どこでありましたか、演説會の折でありましたらう、曾て氏と相對して雜談の際、私は『私どもの演說の下手なこ　を　ずるあまり、御互は未だ聲の練習をすらしたことが無いのだもの、本當にやれない筈だ』と申しました、氏は、その時『自分は御互といふ中から省いて貰ふ、自分は演説をやりだす初めに、某宣教師について、聲の訓練をして置いた、その訓練を經てから演壇に立つことに爲つたので、自分一人は決してそんなに不用意では無い』と辯正せられたことがあります、氏の熱心なる努力の研究は、實にその聲にまで及んでゐたのであります、私はこゝにも氏の性格の一面を見ると驚嘆したのであ

ります、氏は實に勉强して倦まざる勇往直進の人でありました。

大正八年、氏は將に倫敎を去らんとして、尾崎行雄氏をその旅寓に訪ひ『我が國事の頗る非なるを慨し、歸朝の上は、全力をその匡濟のために捧ぐる志である』と、且つ奮ひ、且つ約して居られました、私はこれある哉、その勇ましい武者振を見たいと期待して居りましたのに、今や忽ち其の人なし、洵に惘然として限り無い感愴の情に撲たれてゐる次第であります。（大正一〇・七・八）

徹底的の人

高田早苗

我輩は黑岩君と深交は無い。隨て君を是非し、論評する資格を缺いてゐるのは勿論であるが、然し君の如き著名な、君の如き有力な人物に就て一言せよとの懇囑を受けて辭退するのは、禮に非らずと考ふるが故に、極めに簡單に所懷を述べやうと思ふ。

我輩が青年時代に讀んだヒユーームの英國史の中にチャールス一世時代の一大政治家ストラッフフォード伯（サー・トーマス・ウエントオース）の事が著者の椽大の筆に依りて極めて巧妙に描かれてること を今尙ほ記憶する。而してヒユーームは當時の英人が伯を稱してサローー（Thorough）と呼んだと語つて

居る。サローとは徹底的とでも譯す可き言葉であらうと思ふ。ストラッフォード伯と黒岩君とは時代も地位も境遇も固より非常に異つて居るのであるが、然しサローと謂ふ性格は我が黒岩君も澤山に持合せて居られた樣に考へるのである。黒岩君は文學者であり、哲學者であり、政治家であり、五目並べの名人であり、好角家であり、此等の能力と趣味とが綜合せられて、一大新聞記者が出來上つたのである。而して君は其の何れの方面に於てもサローであり、徹底的であつたことは疑ひを容れぬと思ふ。又黒岩君は新聞記者中の、最も徹底的の人であつたと我輩は常に思つて居る。

黒岩君は我輩の知人中、最も多く毀譽褒貶の的となつた人である。而して世間多數の人の如く其の毀譽褒貶なるものが大部分正鵠を得ず、誤解に基いたものであつたであらう。然し其の毀譽褒貶の盛んであつた原因がサローといふ君の性格、徹底的といふ君の性質に由來したことが尠くなかつたではあるまいか。サローなる人、徹底的なる人は、兎角敵を造るものである。而して敵の數が味方の數よりも多數である場合が多い。黒岩君の生涯も、蓋し同樣では無かつたかと窃かに考ふるのである。

世間、完全無缺の人物は一人も無い。黒岩君も固より完全無缺の人物で無かつた事は、勿論である。然し乍ら、黒岩君の人格は、年と共に進み、年と共に醇化された事は、疑ひを容れぬ。其の證據書類は萬朝報といふ有力なる新聞紙である。第一號より第一萬百何十號とまで、號を追つた萬朝報が、其

の事實を能辯に物語るのである。

昔の萬朝報と今の萬朝報との間に如何なる懸隔があるかといふことに氣づく人は、黒岩君の人格の進歩と醇化とを否定することは出來まいと思ふ。我輩は最後に此の異常なる殆んど偉大とも謂ふべき大新聞記者黒岩周六君の靈に對し、深厚の同情と滿腔の敬意を捧げんと欲するものである。

眉宇の間に現はれた勇猛心

江木翼

私が黒岩君と近づきになつたのは大正元年第三次桂內閣の書記官長時代からであつた、非常に多忙であつた爲め當時は多く接觸するの機會がなかつた、尤も親しく交際したのは大隈內閣の時で、夫れ以後は在職中と在野の時を問はず常に往來し快談してゐた仲であつた。

私の觀察として黒岩君が尤も人と異つてゐると感じた事は、君が一種の理想を以て非常に熱烈なる努力を以て突進した一事である、此點は比較的短き交際に於て知り得た事柄で、主に政治上の問題であるが、苟くも此主義を支へて行くと決めた時は、あらゆる妨害を排して突進し、可なり大なる犧牲をも此の爲めに拂ふ事を厭はぬ、君が日常新聞評論家として、又社會上評論家として理想に突進する場合の

意氣と同じ型に依つたもので、此意氣は種々の機會に於て見せられ思はせられた事であつた。

世人は往々黒岩君の此種々の機會に施す辛辣なる所、意表に出づる所を、劣惡なる手段なりと誤解をした者も少くはなかつた、然し君は常に一つの理想の下に驀進する場合は、世人の毀譽褒貶に耳を藉さない、後に大なる自信を以て米屋を開業した事もあつた、理想に向つて進むといふ片鱗が此處にも現はれてゐる。

最後に歐洲を遊歷し、種々と觀察せられ其結果、思想に一轉機を劃した事と思ふ、君の歸朝後私が最初に會した時に歐洲文明國の種々の點に於ける混亂狀態を親しく視察した君は私に向つて『日本は歐洲諸國の轍を踏まず、泥濘の溝渠を飛越えて進みたいものだ』といつた、其考へで思想問題、勞働問題等の解決に努力せられたなら、必ずや社會に大なる貢献を爲したに違ひない。之れを實現するに至らずして逝いたのは惜しい事である。

又評論家として、普通文化の指導者として、事業の分量に於て、年月に於て成功せられた事は御卽位の際に德富、村山、本山の諸氏と共に勳三等に叙せられた事に見ても明かである、逸話と謂つてはこれといふ持合せはないが宴席に於て我々は痛飮し、君は一滴の酒を飮まず、陶然として醉ふた我々と、少しも醉はぬ君と面白く議論を戰はし、決して人に不愉快な感を與へる樣な事はなく、常に打解けた

愉快な交際であつた、然かも居常君の眉宇の間には理想に進む勇猛心といつたものが現はれてゐた。

總理大臣を自任してゐた

永井柳太郎

僕が黑岩さんを尊敬すべき記者と思つたのは、黑岩さんが彼の有名なる『天人論』を書いた時からであつた。それまでは僕は黑岩さんの書いたものを唯だ愛讀したに過ぎなかつた。彼の『巖窟王』とか『噫無情』とか、所謂涙香物は、其の筆致、面白味に對して愛讀したもんだが、敬意を表するに至つたのは『天人論』を讀んでからであつた。

『天人論』の思想は、必らずしも僕の思想と一致せぬ、然し日本の評論家が大抵、哲學思想に缺乏し、人生に對して徹底的意見を持たず、政治上の意見でも、不徹底の論議が多い中に、あれだけの哲學を嚙み砕いて、思想界の爲めに努力されたことは、僕の大に感じた所であつたのと、また其の哲學思想の凡庸に非らざるとを知つて、深く尊敬の念を起したのであつた。それから以後、僕はあの人の書いた物には深く注意を拂ふやうになつたが、それでも僕は其の當時、黑岩さんが記者として書かれたもの

のみを讀むに過ぎなかつた。

大正六年に私が始めて早大の教壇から政界に出陣して、金澤で立候補した當時、未だ黒岩さんには一面識もなかつた、ところが其の黒岩さんが僕に對して、態々鎌倉に靜養中であつたにも拘はらず、長文の推薦狀を贈られたのには、僕は實に深い感謝に打たれた。そこで感謝狀を僕の方からも差上たが、之れが抑も僕と黒岩さんの私的交渉の始まりである。

斯くて久々で黒岩さんに懇談するの機會を與へられたのは、巴里講和會議の際、私も見物、黒岩さんも見物。そして私が巴里に居ると、黒岩さんは最う其の時は伊太利視察に出かけられてゐた。そして僕が倫敦に居た時分に、黒岩さんは倫敦に來られたが、國民新聞の馬場恆吾君がケンシントンパーク附に滯在してゐたので、僕は馬場君を訪問の際、同じ宿に黒岩さんが泊り合せてゐるといふことを聞いたので、訪問したが、生憎く其の時は外出された後で逢はれなかつた。

すると歸途、僕の乘つた船は北野丸であつたが、此の船で黒岩さんと一緒になつたが、面白い人が澤山乘合せてゐた。大谷誠夫君、公使本多熊太郎夫妻、内務書記官の次田大三郎君などが居た。談論風發、恰かも船側を打つ波濤よりもデッキの上の侃々諤々の論の方が高く彼を壓倒するの概があつた、四十五日の間、黒岩さんと一緒に居たのだから、僕は隨分親しく論じ合つた。黒岩さんは歐洲戰後

の思想界の變遷を見て『是れまでの衣服は海へ脱ぎ棄てゝ、一個の黒岩周六で上陸する。そして日本へ歸つたら、勞働問題の解決の爲めに今後の自分を献げる決心だ』と論じられてゐた。乾坤一擲の大事業が仕て見たいなどとも感慨深く言はれた。その夜、黒岩さんと僕は色んな話をそれからそれへとして盡きなかつた。

僕は慥かに、黒岩さんが總理大臣としての野心があつたことを信じる。其の位ゐ黒岩さんは未だ其時、活々した元氣があつた。眞逆に黒岩さんはレニンの跡を踏む考へでもなかつたらうが、ボルシェビーキの運動の中心に立ちたい。日本も何の點から見ても大改造の機運に際會してゐるが、自分は其の先頭に立ちたいといふ考へを持たれてゐた。『僕が總理大臣だつたら、あんな事は仕ない』などとよく謂はれた點から見ても、先生は慥かに總理大臣を以て自ら任じてゐたやうだつた。兎も角、黒岩さんは餘程、ボルシエビーキの思潮には昂奮されたやうだつた。

船中、黒岩さんはよく詩を作り、吟じられた。そして黒岩さんは左の一篇を僕に下さつた。

遊古羅馬　　　涙香陳人

想得豪奢絶等倫。　戯場趾峙廢宮隣。
君王帶笑看何事。　餓虎躍來生啖人。

それから僕は先生によく船中で詩を敎へられた。そして左の一詩を作つた。僕が生れて詩を作つたのは之れが始めてである。

過　蘇　西

志乃山高蘇水長。　偉人功業萬秋香。
鑠金苦熱吾何厭。　報國精神凛似霜。

黒岩さんは『何でも物事の奥義を極めなければ承知が出來ない』と謂はれてゐる。詩でも、歌留多でも、却々達人であつた。黒岩さんが指南で、吾々に『かるた』を敎へられた。本多熊太郎夫妻も『かるた』が好きだといふので、頻りに取つた。然うして大谷誠夫君は黒岩さんの壘を磨してゐた。金を賭けて仕たが、みんな黒岩さんに取られて仕舞つた。けれど此の金はみんな後で水夫に遣られて仕舞つた。黒岩さんは一厘半錢も私しなかつた。全く水夫に遣るために態と賭けられたものだつた。また吾々は先生に對する授業料だから、取られても仕方がないが……。斯くして船中は、黒岩さんを中心として、和氣藹然としてゐた。

恰好、此の船に英國のゴルドン夫人が乘り合せてゐた。ゴルドン夫人は盲目で、佛敎學者である。黒岩さんも佛學には造詣が深いので、兩人は話が合つた。そこでゴルドン夫人と黒岩さんと對話する

時には、何時も吾輩が通譯を仰せ付かつた。

黒岩さんは船中で、黒岩老々々と謂はれて敬まはれた。病氣の際などは、多くの者が交々看護するといふ有樣であつた。實に此の短い航海に於ける船中生活は、僕に取つて殊に思ひ出が多い。

上海に來た時、日本人會で、是非演説して吳れとのことで、黒岩さんと大谷君と僕と三人で演説をしたが、黒岩さんは大喝采を博された。其の日の黒岩さんの演説は成吉汗の例を引かれて『吾々の祖先は、白色人種を壓倒したのに、今は吾々は白色人種に壓倒されてゐる！』と憤慨されてゐた。其の堂々たる態度も、力強い聲も、今尙ほ私の耳目に存してゐる。

神戸から上陸して、一兩日してから、東京に歸つたが、汽車の中で、黒岩夫人にも逢つて同車した。兎も角、斯くして僕は巴里から東京までは黒岩さんと終始一緒に居た譯である。

歸ると間もなくストライキが惹起した。各工場――殊に滿都の各新聞社の印刷職工の同盟罷業が、踵を接して惹起した。そして黒岩さんは巴里から歸へるまで『勞働者の利益のために、一身を賭して働きたい』と言はれてゐたのが、新聞社の社長――事業家側に立ちて、勞働者に對抗したのは、運命の皮肉とは謂ひ乍ら、隨分、黒岩さんに取つては、辛い苦しい立場に在つたに違ひなかつたと思ふ。然し黒岩さんの調停方法は、勞働者に滿足なる條件を與へて解決したらしいやうに仄聞した。

其後、黑岩さんに逢つた時、船中での話を言つたら、黑岩さんは『豫期より早く勞働問題が惹起して來たので、解決に弱らされた』と言はれた。『然しあなたの豫言が的中したのには意外でしたらう』と僕が言ふと、先生は苦笑し乍ら『イヤ全く化粧の出來ない間に幕が開いて弱つたよ』と言つてゐられた。

僕は黑岩さんの前半生は知らぬが、僕が知つた以後の先生は、批判家として、人生に對して深い考索を持つてゐられた、哲學的、思想的に傑出した人であつたと信じる。個人として觀ると、何事にも研究心の強い、物事に熱心な、理解の鋭い、非凡な能力の所有者であつた。友人としては第一に寛大、第二に理解、第三に同情があつた。後輩を劬る親切な人であつた。僕の眼に映じた黑岩さんは斯ういふ人であつた。世人が黑岩さんの前半生に就て非難するのとは、僕は驚くべき相違がある。若し果して世人の或る一部の者の非難が事實とするならば、寧ろ黑岩さんは『自己改造』の最も強い人であると思ふ。却つて前後兩半生を比較して、黑岩さんの非凡にして人傑であることを語るに外ならないと思ふ。今や黑岩さん旣に亡し。公人として、友人として、黑岩さんを喪つたことを、僕は非常に遺憾に思ふ者である。（大正一〇・八・二〇）

大隈內閣と黑岩さん

山崎直三

大正三年四月十六日に大隈內閣成立したことは諸君の御存知の通りでありますが、私は偶然にも秘書官として此の內閣に勤務するやうになつた。此の時に自分が初めて考へたのは大隈侯の味方は何んであるかといふことでありました、大隈侯を推薦したのは山縣、井上、松方等の元老會議でありましたが、其處に到つた勢ひを造つた大なる動機は、新聞紙に現はれた輿論の勢力であつたと思ひます。淸浦內閣は九分通りまで成立しかけて遺憾ながら流產して仕舞つた。その頃から新聞紙で漸く大隈侯の出廬を促し始めたやうに思はれました。自分は秘書官として勤める積りは初めはありませんでしたから、よくは注意もしませんでしたが、私たちの地方の友人が大隈內閣が出來さうではないかといふ手紙を澤山寄越しました、それは何れも新聞紙を基礎としたのであります、そして地方の新聞紙は種を東京の新聞紙から取つて居るのであります。東京の新聞紙の狀態は如何、よく注意しませんでしたから知りませんが、萬朝報の黑岩さんの如きは最も其の熱心なる大隈侯出廬論者であつたやうに覺えて居ります。此の點から見て大隈內閣出現といふことに於て、黑岩さんは大なる力を盡くした方だと思

ひます。

内閣が成立して私は其日から俄か作りの腰辨になりまして、永田町の總理大臣官舍に毎日七時頃から出て行きました、其成立の翌日であります、黑岩さんに始めて午前十時頃御目にかゝつたのであります。私は前から黑岩さんを文章の上に於て非常に敬慕して居つたのであります。曾て私は佛國に行きてあのマルセーユ港の入口に烟波遙かにモント・クリスト島を見てデュマの『巖窟王』を思ひ起し又た之れを始めて日本に紹介した黑岩さんにお目にかゝりたいと思つて居りました。ですから此の日積年の希望が叶ひまして黑岩さんにお目にかゝれたのを嬉れしく感じました。何でも其日は來客が立ち込みまして、大隈總理に御面會することを約一時間半ばかりお待たせ致しましたことを覺えて居ます。其間出たり入つたりして黑岩さんの御話を伺ひました。總理に逢はれて後、時恰も午餐時でありましたから總理や書記官長、大隈信常さんや私等と御一緒に急拵への午餐を共にしたことが頭に殘つて居ります。私の其の時の印象は如何にも力の人であつて風采から見ても政治家のやうであつて、衆議院議員にでもなられたなら非常に有力な方ではないかといふ印象を受けました。聲に力があつて心地よく又時々諧謔を謂はれて寸鐵人を殺す的の警句が續出するので、如何にも文學者的の氣分も漂つて居り、非常に愉快に覺えました。佛國には此のやうなタイプの方が澤山あります。日本みたいに法制財

政一點ばかりの政治家は佛國にては生命はない。官吏であり政治家とはいはれない。御承知のクレマンソーの如き、ク内閣の外相ピションの如き皆新聞記者出身で小說も書いて居ります。ボアンカレーの如き政治家も文藝院議員即ちアカデミシャンでありますし、先頃迄の大統領のデシャアネルも文章家であります。今の大統領のミルラン、總理大臣のブリヤンの如き皆新聞雜誌上に政論家として又文藝家として小說、隨筆、紀行文などで一家を爲してをります。政治と文藝は佛國に於ては調和して居ります。又餘談に亘りますが雄辯も又さうであります。只雄辯は聲量とか抑揚とか即ちエロキユウシヨンのみならず、速記して見れば文章を爲す程の人でないと政治家ではないのであります。黑岩さんは私の初めての印象は風采も堂々、辯舌も力あり、話しも文章的であるといふ色々の點に於て、私は黑岩さんは佛國政治家のタイプのやうに思はれました。私は佛國の政治家を好む癖がありますので此の點に於て非常に黑岩さんを敬慕したのであります。此の日の初めて御目にかゝつた事は非常に幸福であつたと當時の私の日記に書いてあります。

元來大隈內閣の新聞政策は詳密に謂へば色々ありましやうが、大體に於ては多く黑岩さんに一先づ御相談して然る後に色々遣つたのです。又黑岩さんに御相談しないこともありましたらうが――少さいことでは――然し大筋は何時でも先づ黑岩さんに相談して遣つたやうに伺つて居ります。多くは政

治上のことで、又秘密を保つ方が宜ろしからんと思はるゝ事が多く、公けに書けないことを遺憾とします。

黒岩さんは官吏に成るとか、位階勳等を得らるゝとかいふことは甚だ積極的に希望せられなかつたやうに思ひます。尤も後で勳三等になられたことは有名な事でありますが、之れは黒岩さんが運動して貰つたのでは絶對にありません。之れは大隈内閣の内部で發議した人がありまして閣議で決定し上奏した結果であります。又金錢に對しても至極淡泊でありまして、自分は取らず誰れ〳〵に遣つてくれといふやうな鹽梅で親分的氣質であつて、人の爲めには中々骨を折られたやうでありました。私は常に思ふ之れらの御性格が多くの人の上に立ちて働かれ、多くの人々も敬服して喜んで黒岩さんの下に働かれた所以であらうかと思ひます。

黒岩さんは何處までも新聞記者としての威嚴を終始保たれて居つたやうであります。黒岩さんを御招待して總理が晩餐午餐を共にせられたことは何十回といふのであります。然し傲慢ではありませんけれど決して御用記者として人に頭をペコ〳〵下げられたやうな態度は私は見たことがありませんでした。常に內閣に來られても輿論を元として政治を爲す可きことを述べられ、其れには新聞記事に就て多大の注意を拂はれるやうに、大隈侯爵及びその他の人々に注意して居られました。

そして黒岩さんが來られて大に論ぜられて歸へられた後は、吾々は非常に愉快に感じました。當時の大隈内閣は官僚的分子が殆んど八九分通りでありましたから、黒岩さんの食卓に來て論ぜられることは大隈侯の周圍を圍める官僚的の人々に對して何程か面當のやうに聞えて、自分は非常に愉快に感じました。さういふ風でありましたから官僚の中には『黒岩は生意氣な奴だ、あんな人間に勳三等を遣る大隈さんの氣が知れない』などと陰口をきく人々もありました。然し私は黒岩さんの言は彼れら官僚の徒に對しての防腐劑であつたと信ずるのであります。

大隈内閣の末路は御承知の通り元老官僚に裏切られ、貴族院に反對せられて最後は新聞紙にも段々反對が多くなりましたが、報知新聞と萬朝報が憲政會と相並んで孤城落日の觀ありし大隈内閣を最後まで踏み止つて援助してくれました。當時の大隈内閣に關係した心ある者は、皆黒岩さんに對して多大の感謝の念を持つて居たらうと思ひます。

奇なる哉、人生の事は實に測り知る可からざるものであります。私は昨年病を得て大學病院の入澤内科に呻吟して居りました、實に昨年の春であります。さうすると昨年の夏即ち始めて御目にかゝりし時より六年後の夏には、黒岩さんが隣室に病を以てやはり入院されたのであります。その時廊下で遠くから一寸御様子を拜見しましたが甚だお疲れのやうでしたから近く進んでお話をしませんでした。

唯だ奥様や御令息様及御友人等の方々から安否を伺つて居つただけであります。自分は餘り大病でもありませんでしたから、日夜黒岩さんの事を思つて居りました、又御全快の一日も早からんことを禱つて居りました。

然るに事實は豫想に反して不幸にも永世のお別れを爲さなければならぬやうになりました。

併し黒岩さんは亡くなられても其文章は存して居りますから、諺に有る如く『藝は永し命短し』で黒岩さんの精神は永久に活きて居りましやう。かの佛國のアカデミシャンの不朽の學士（Un Immortel）の如くでありましやう。（大正一〇・九・五）

徹底實行家

長島隆二

一

自分が始めて黒岩君に會つたのは確か大正三年二月、濱町の小常盤で松下軍治、大谷誠夫、松井柏軒、坂本金彌、秋田清、三浦逸平等の諸君と會食して、山本内閣倒壊戰の策を議した時であつたと記憶する。――もつとも自分は幼少の頃から、明治文壇に現はれた小説は殆んど漏らさず耽讀したもの

で、勿論涙香君の飜譯小説は初期のものから精讀してゐたし、新聞紙上に現はれた同君の評論も不斷注意して讀んでゐた。而して是等の小説評論等を通じて想像した涙香君の風格と、此小常盤に於ける初對面の黒岩君の印象とは略ぼ一致したものであつた。實際山本內閣の倒壞から大隈內閣組織に至る政戰は大體此の小さな會合に運つた人々の間に仕組まれた筋書通りに運んで行つた。其の間黒岩君と會ふ機會は屢々あつたし、逢へば必ず肝膽を披攊して腹藏なく意見を交換したから、交友の日は淺かつたが、同君の人となりについては相當知り得た樣に自分だけでは感じて居る。殊に此時の政戰は黒岩君にとつても自分にとつても處女戰であつたのみならず、山本、原といふやうな剛敵を前に控へた戰であつたから戰場に馳驅する苦心努力も非常で、其間に結ばれた友誼は自ら深く厚いものがあつたと信ぜられる。

二

此關係に於て自分の知り得た黒岩君の人となりは、實に珍らしい『徹底實行家』であつたといふ一言に總べてが盡きて居ると思ふ。涙香小史の名は明治文壇に不抜の地位を持つて居るが、それは一般の文壇人とは自ら違つた意味を有して居る。黒岩君は決して藝術上の天才兒ではない。何等かの機會に文筆を執つた爲めに君の徹底實行力が此處に打ち込まれた結果、あの名聲を博したので君の性格、思

想、乃至文章が之に適して居つたとは認められぬ。只君は非凡な實行力を持つて居る。苟くも既に文筆を執つて小説を書く以上、其事に徹底しなければ止まぬ、是れ君が小説に成功した所以ではあるまいか。即ち君の小説を書くや之れを文藝として扱ふよりは寧ろ飜譯といふ一つの事業と觀、飽迄其事業に徹底的成功を期したのではあるまいか。

その後君の文筆は小説より哲學思想の方面に延びて『天人論』を始め、幾多の名著をものされ、僅かの間に多年此方面の二大柱脚であつた蘇峯、雪嶺と比肩する鼎足の地位を占め、或意味に於ては蘇峯、雪嶺兩君とは全で違つた特異の壇場を開拓した、が、これも君が思想の人、學術の人、評論の人として天才的の適材であつたといはんよりは、寧ろ文壇に所期の目的を達し、更に其の實行力を別途の事業に發揮する止み難き要求に動かされて此方面に筆を轉じ、既に苟しくも其處に轉じた以上、飽く迄其道に徹底せねば止まぬ君の實行力が、君をして此處に至らしめたと觀察した方が當つて居るではあるまいか。其他君が五目ならべの研究に徹底して先手必勝の理を發見し、角力、かるた其他の勝負事の研究に耽つて各々其の道の大家となつたのは、皆々君が或一事に着手するや必らず全身全力を傾倒してその徹底境に至らねば止まずとする非凡な實行力の發現であつたと思ふ。

三

自分が君のかゝる實行力について親しく相知つたのは、君の精力集注が政治的に發現した一部面に過ぎないが、此方面に於ても君は實に驚くべき執着、熱心、根氣を以て驀地に勇猛直進した。即ち君は山本内閣の倒壞、大隈内閣の樹立と同じ意氣込みで東京市會の醜團常磐會の打破に突進し、大隈内閣擁護の爲めに奮闘して、到る處に非凡な實行力を示した。

君の行くとして可ならざるなき多方面の成功を見て、多くの人は君を非常な天才で何をやつても直ぐ名人上手となるやうに解釋するが、自分は、君の成功は恐るべき熱心と執着を以て一事に徹せざれば止まず、一事に徹する爲めには全精力をそこに集注した飽迄不撓不屈の實行力の賜であつたと思ふ。

凡そ實行家としての要素を、君程に多量に具備した人は稀有であらう。只若し強いて實行家として君に缺けて居つた點をさがせば君がその頃既に可成り健康を害して居つたといふ一事のみであらう。但し、君に於ては實行家として極めて重大なるべき此健康上の缺點も、其活動上少して障害とならなかつたではないかと思はれる程、多量に他の實行的要素を持つて居つた。松下軍治君は黒岩君のやうに學問も識見もなかつたが、只其天來の蠻力と天才的の奇智を以て縦横無盡に、其非凡な實行力を發揮したものであるが、此の二人の實行家が晩年相携へて政治方面に活動したのは、確かに一種の壯觀であつたといへる。當時自分は兩君が自動車に同乘して東奔西走するのを看て一種の感を催し、一人で吹き

出すことが屢々であつた。

四

其後の黒岩君とは鎌倉へ往復する汽車の中やロンドンで屢々會見したが、病に侵されて萬事不如意であつたやうに見うけられた。君の外遊は勿論今後の活動上大に期する所あつての企てに相違なかつたが、外遊の收穫を其實行力の發現に應用する機會なく、歸朝後幾くもなくして長逝せられ、其外遊が只君の歷史を飾る一小エピソードに過ぎなくなつたことは返す返すも遺憾である。

鎌倉の往復やロンドンで會つた當時から自分は、黒岩君は病で弱つて居るのではない、病氣には相違ないが本當に働かねばならぬ大問題を捕へ得ないのである。それを自ら捕へ若くは他から提供すれば、どんな病をも押し切つて君は十分其實行力を發揮することができるに相違ないと感じて居つた。果然君が病に倒れたのは病の爲めといはんよりは、事が無かつた、君の實行力を以て內の病と戰はしむる外の問題がない爲めであると思ふ。從つて自分は君が逝かれた後、君の事業には何だかまだ完成せられないやうな氣がしてならぬ。

勿論、文藝、新聞、評論、政治等の各方面に亘つて君は夫々に可成り成功したに相違ない。然し是等の成功は君に於て何としても部分的の成功で、君自らも亦是れだけに滿足せず、必ず是等の部分的

成功を綜合し、一貫する事業なかるべからずと考へられたことであらう。實に君の晩年はさういふ意味の事業に費さるべき筈であつた。若し天壽を全ふして君が其非凡の實行力を揮つて自らの結論を行爲の上に完成せられたならば、君自らの幸はもとより、社會も大に益せられたであらうに、多年に亘る異常の奮闘の結果、最後の事業を捕へる前に病歿せられたことは實に遺憾の極みである。

その仁俠は忘れられぬ

伊東知也

明治四十四年の事であつた、代議士鳩山和夫君が病死したので其補缺選擧が行はれた、則ち當時萬朝報記者たりし古島一雄君が候補に立つと謂ふので、余は其時參謀と謂つた格で働いたのであつた、此時黒岩君は古島君の爲めに非常に聲援をして呉れたのであつたが、實は此際始めて黒岩君と相識るに到つた深い印象として今に頭に殘つてゐるのは、其謹嚴にして侵し難い眞摯なる態度で、是眞個の君士人也との感を抱かしめたことであつた、他の辯士連が時間を勵行せず、思ひ〳〵の出動を爲す中に、君は獨り既定の時間を嚴守し、分時を違へなかつた、之れには余も非常に恐縮し、其の立派なる人格に對して益々景仰の念を挪つた事であつた。

其翌年、則ち明治四十五年の總選擧の際、余は山形で彼の勤王家淸河八郞の出生地を地盤に候補に立つた、其時茅原華山、三宅雪嶺の兩君と共に黑岩君も余の爲め、態々山形迄應援に行つて吳れる事となつた、最初田舍の人達の希望で演說の順序を終りに三宅君を置き、其前に黑岩君を置いて登壇を願つたものだ、所が田舍の人達が三宅君の訥辯の雄辯の味が判らず、終り迄殘る人が少く、三宅君の演說半ばに歸つて了ふので氣の毒に思ひ、今度は順序を替へて三宅、黑岩、茅原、伊藤と謂ふ事とした所、非常に場が引き締り聽衆の受けがよく、豫期以上の功を奏し、竟に余は諸君の御蔭を以て最高點にて當選した。

此山形行きでも、余は君の餘りに謹嚴にして、又餘りに眞面目なるに寧ろ窮屈の感を爲した程だ、演說場の控室に在つても、旅宿に在つても儼然と端座してお崩しなさいと謂つても膝を崩さず、何か高價と思はるゝ煙管でコツン〳〵と火鉢を叩いて諄々と語るのであつた、思慮深く、寡默で、直情で寧ろ峭直と謂つた性質と窺はれた、夫れかあらぬか秋田で盟友中村君の應援演說の際、聽衆の中より低級な彌次に逢ひ、之れに憤慨して降壇せんとした事があつた。

總じて俠氣に富み、同情のある人で、他より何か賴まるれば嫌と云ひ得ぬ方であつた、古島君が當選した時も見事當選はしたものゝ、殆んど一文の金がなく、余は黑岩君に歲費を擔保に金を用立てゝや

つて呉れと懇願したが、君は直に快諾して呉れ、急場の用を足した事であつた、交際し始めて日も尚淺い余の爲めに、態々山形の邊陬迄應援に行つて呉れた仁俠の程は今に忘れぬ感銘の一つである。

黒田清盛で筆禍

大岡育造

自分は黒岩君を識つたのは輿論新誌時代で、此の政治雜誌は最初埼玉縣自由黨の有力者なる矢部善右衛門氏が經營して居たのを自分が引繼いで之れを發行した頃である、當時黒岩君は雜誌社（神田淡路町）に近い成立學舍の生徒であつて、盛んに政治論を寄書したものだ、君の原稿は中々奇麗で、此の點に於て自分は福地源一郎翁と君のとを相稱する。

君の論旨は可なり確かりしたもので、其の頃は寄書といへば全くの無償であつたから、君は唯だ趣味として寄書をしたのだが、併しその原稿が多くて殆んど輿論新誌編輯者の一員であつたかの如くに見えた。

北海道開拓使官有物拂下問題で天下の物議紛然とすると、君は輿論新誌へ『黒田清盛』といふ略名で攻撃文を載せた、開拓使長官は例の黒田清隆氏で、氏は開拓使官有物を擧げて極めて廉價に同じ薩摩

の五代友厚一味に拂下げやうとしたので、當時黒田に對する攻撃が激しく種々の綽名をつけたもので、唯一の滑稽雜誌たる團々珍聞など、黒蛸として痛罵したものだ。

君の此の黒田清盛といふ略名は入る日を扇ぎ還さうとした清盛入道にも比すべきだとして清隆をモヂッた皮肉なので、其れが官吏侮辱罪として起訴された、今日では何でもないことだが、當時は官權が仲々强くて黒岩君は到頭處罰を免かれなんだ、自分は當時辯護士でもあつたから懸命に辯護した、何でも控訴した結果で、横濱裁判所へまで廻されて自分は屢々其處へ行つたことを覺えて居るが、併し君は短い刑期ではあつたけれど竟に入牢した。

君は又嚶鳴社にも加つて屢々政談演説を遣つた、當時自から『大』と名乘つて可なり盛んに遣つたが、此の嚶鳴社は沼間守一、河津祐之、島田三郎、田口卯吉それに自分なども仲間になつて民權論を主張したのである、當時君は演説するのに草稿を用ゐて居た、吾々仲間では演説に草稿を用ゐるのを惡く言つて居たが、その實君の演説は流石精鍊されて居た。

輿論社から君が米人カッケン・ボスの美辭學を飜譯したのを出版して、是には堀口昇氏の序文などがあつて頗ぶる賣行いた、君は文章に於ても亦當時から既に非凡の手腕があつたことを認められて居た。

涙香氏の飜譯小説

千葉龜雄

『海底の重罪』から

私が一番初めに讀んだ涙香氏の飜譯小説は『海底の重罪』である。何でも私の其頃は宮城縣の片田舍に居た十二三の小學時代であつたから、考へて見れば氏の飜譯小説とも、隨分長い間の親しみである。それは確か『都新聞』に現はれた續きもので、どうした緣故か、私の叔父に當る其の醫師の家では、長いこと『都新聞』をとつて居た。尤も私の飜譯小説の知識は、それによつて始めて目覺まされた譯ではない。其前に死んだ兄が東京から買つて來たリットンあたりのものらしい『英國孝子傳』とか、誰の原作かわからない『楊牙兒奇獄』などと云ふものは讀んで居たのだが、一度此『海底の重罪』を讀み出してからと云ふもの、私の飜譯小説に對する考へは全く違つて來た。それがどう云ふ風に違つたかとなれば、政治人情ものゝ孝子傳や、探偵小説らしかつた『楊牙兒奇獄』は、譯文のごつごつした、或ひは譯者自身すらも充分わからなかつたやうな事實の曖昧な胡摩化しが、澤山子供心に氣がついた、いや夫れ許りではない、第一困つたことには、風土人情が變つて居る其儘にほつとからして、日

本の讀者がそれを讀んで、どんなにばさばさした味ひを感ずるかなどは丸切り譯者の念頭に無いもののやうに見える。それほど不明瞭、不親切に滿ちたものであつた。

ジョオジを讓治

處が涙香氏の『海底の重罪』ではさうぢやない。なるほどこんな犯罪は日本には無いのだから、英國あたりに在つた事に相違ない。が、人名がジョオジなら讓治とか、メリイなら鞠子とか、又た地名ならケンシントンを釁粟士とか云ふ形に書き直して、いかにも日本人に親しみ易く、記憶され易いやうに仕向ける、實に忠實な飜譯の注意があつた、今日と違つて彼のころに、あまり馴染みのない他國氣分に滿ちた外國小說をこんな點まで注意して飜譯した氏の着眼は流石にえらいものである。何となれば其頃の飜譯では、譬へばヤンゲルを楊牙兒と云ふ風に、日本では却つて外國の固有名辭を六つかしく飜譯して居たのだから、それをもつと委しく云へば、氏は已にさうした日本名にもぢつた命名に更に注意して、惡い方面のやつには讀者の惡い感じを誘ふやうな文字を用ゐ、又た善良な人間には、その儘で善良な感じを享け入れられる樣な文字を擇んだのは、容易いやうで實は中々六つかしい事業であつた、それを何故かと云ふにそれをするには其書物の內容を、始めから仕まいまですつかり心讀して了はねばならなかつたからだ。

新聞記者的の敏感

も一つは『人情に變りがない』と誰も云ふ其の理論を、氏はどこまでも裏付けて飜譯の規範として居た。と云ふ意味は、他の飜譯家はいかにえらい飜譯をしても、文字通りの間違はない飜譯だけに努力して、一味作物の底を通ずるところの人類共通の人生的な情理を酌み取ることが出來ない、ところが氏の深刻で豐富な世間的體驗と、透徹した批評的見地とは、その本を一度讀めば直ぐ其作物の脚色の全體と、象徴された意義を少しも危な氣なしに一瞥の中に捉へて了ふ。これは多大な新聞記者的の天才を持つたものでなければ出來ぬことである。すぐれた新聞記者は、當面に展開された素晴しく大きな現象と視野に、一寸はまごつき、若くは當惑するが、直ぐ陣立を立て直して、先づ其の焼點がどこにあるかを考へる。その焼點さへ一度捉まつたら、跡は網を手ぐるやうに全象が苦も無く引摺り寄せられる。それには其の全象を、如何なる場合にも全く自家藥籠中に收め得るところの具體的な烱眼と敏感を持つた人でなければならない。飜譯家としての涙香氏は卽ち其の人である。

だから氏の飜譯には、殆んど飜譯臭と云ふものがなく、たとへばあつても一向苦にならない、讀者は海外の出來事を、さも自分の隣人のやうに考へて、樂しんで安易に作中の主人公に依賴する譯であつた。

末尾の數行

何でも『海底の重罪』では、殺人をした主人公が、殺した人間を海底に沈めた。犯人はどうも彼れらしいが、家に在つた時間と殺人までの時間の距離が到底信ぜられぬけれど短かい。それが唯一の疑問の鍵になつて居たが、漸く主人公が、當時には珍らしい自轉車を利用して家に歸つたものと判明した云つた荒筋であつたと記憶するが、其最後の數行に、犯人と疑はれた本當は正直な青年のことを『何とかは今でも正直に何とか村に棲んで居る。讀者が若し其村の近くを通ることがあつたならば必ず彼れを訪ひ玉へ、彼はにこにこして名物の牝蠣を御馳走するだらうから』と云ふ風に書いて筆を止めた書き振りがあつて、之にひどく氣を惹かれた、こんな事は今でこそ歐米の小說に一向珍らしいものと思はないが、其頃はいかにも變つた、面白い敍述だとして讀まれたものである。

つまり殺人とか犯罪とか云ふ陰慘な記事で壓迫された讀者のくらい感じは、唯だ此の數行によつて端的に明るく解放され、もしくは感情の轉換を與へられる。美くしい人間らしい情味が、暗に罪惡の記錄のあとから華やかに復活されて來る。涙香氏の飜譯の最後の頁は、いつも大抵かうした情味にゆたかな用意をてたらなかつた。それを日本在來の小說の、目出度し目出度しで終るのに比べれば、そこにどれほどの差別が見出されるであらう。誰れか文章家の云つた事に『文章の一番六づかしいのは

始と終りである』とあつた。又た寄席でも芝居でも、最終のハネまで看客を立たせない事を一番力のいる名人の技倆だとしてある。

涙香氏が此の末尾の數行に、原作者の用意を尊重して、充分にそれを利用した着眼は、流石に敬服すべきものがある。

文章と題名

次に氏の飜譯での特殊なもの丶一つは其の文章と題名とである。先づ氏の個性から生れたどんな文章の末にも見える其の緊張味は、何人にも及び難いものと考へられて居た。其の緊縮は一方に少しも無駄を含まぬと共に、他方に其の現はされた精確な語彙に、現はされるだけの約束の意味がはちきれるやうにはつきりと盛られて現はされて居ることを語る。そして其の精確な語彙は、其現はさうとするギヤツドな印象を、最大限に讀者の前に潑剌とあらはして居ると共に、少しも六づかしい一粒えりの文字を用ゐない。何の苦もなく其邊にありふれた簡明な平凡な語彙を拾つて來てそれを縱橫に驅使し乍ら、どこまでも生氣に滿ちた印象を與へたところは、これがかく多數の人々に何の遠慮もなく氏の飜譯に親しました理由ではあるまいか。

印象的な標題

も一つは題名である。『海底の重罪』に續いて私は『人耶鬼耶』とか『梅花郎』とか『有罪無罪』とか『指環』とかを矢つぎ早やに讀んだが、其後仙臺へ行つてから『白髮鬼』だの『巨魁來』だの『非小說』だの其他を無數に讀んだ。『人耶鬼耶』、『巨魁來』、『梅花郎』なんて題名は確かに奇想天外から落ちるもので、語調から文字からすぐ讀者の興味を攪き亂すに非常に有力な武器である。新聞記者の標題のつけ方で折角の記事の死んで了ふ事例は、誰でもよく知つて居ることであるが、此點で氏は確かに素晴らしい印象的な標題を拈出して來る天才である。私は氏の譯出に心を惹かれて、その譯された原作を約十種足らずも讀んで見た。が原作を標題だけ譯出するとなれば、氏の飜譯したやうな作物は殆んど見つからない。何故かとなれば氏は原作の標題を、大抵其の儘に應用しないからである。

リズムを尊ぶ

たとへば『白髮鬼』の原作は、マリイ・コレリイの『復讐』であるが『復讐』よりも『白髮鬼』の方がどれだけ緊切にひびくか知れたものではない、尤もコレリイは『レヱンジ』と云はずに伊太利語の『ヱンデタ』をつかつて居るからまだいくらか好いか。『ミゼラブル』は森田思軒が『哀史』と譯し、福地櫻痴が『あはれ世の中』と譯したのに對して涙香氏が『噫無情』と命名したのもいかにも隙が無い。さうかチユマのモント・クリストを『巖窟王』としたのも拇指を眼睛につきこんだ底の痛快味がある。

と思へば又た『孃一代』『捨小舟』『人の運』『武士道』なんて平凡なものもあるが、概して氏が三字名を大變好きで撰んだのは、音調が自然的で、端的に口と耳に熟し易いところを見込んだのではあるまいか。その他『劇場の犯罪』『塔上の犯罪』『死美人』『野の花』なんてどんなものでも、みな聽覺にさからはないやうな、リズムに富んだなめらかさを示唆して居ないものが一つもない、こんな處にも細心な氏の注意はほの見えて居る。

神秘探討の傾向

何でも其當時私が香川怪庵氏に聞いた處によると、氏が飜譯小説に熱中して居たころは、何十冊の小説を片つ端から讀んで見て、其中から一冊を撰ぶか、或は全く撰ばぬことがあると云ふほど凝つた努力をして居たと云ふとであるが、之れはさうであらう。だから氏の飜譯が一度現はれる以上屹度讀者の心を魅殺せねば止まなかつたのだ。

氏の飜譯した小説は、方面が國に分けても部分に分けても隨分廣く分たれて居るやうである、尤も氏の初期の特色のあるものが探偵小説であつたので、氏の名は兎角探偵小説の開祖の名に掩はれて居るが、本當は『噫無情』などを除いては、寧ろ人間心理と、その社會的接觸の間に生れて來る、一種の不可思議な神秘的な宇宙――それは犯罪にもなり、又た其犯罪の奥をどこまでに檢討しやうと云ふ神

秘の世界にもなる、その世界の探討に徹底しやうとしたのが、氏の心理の傾向ではなかつたか。測れども測り知れない罪惡の深さ。探つても探り切れぬほど、微妙に織り交ぜられて居る人間世界の秘密相——氏は讀者にそんな消息をつたへるよりも、自分自身が先づそこに耽溺し、陶醉したのではあるまいか、之れは氏が擇んだ作物の種類を、現代に發行する探偵小說、神秘小說、冒險小說などに比べて見るとよくわかる。

又た涙香氏の飜譯物が出た當時に、氏と同じ傾向の長篇小說を譯出した人々の中には丸亭素人、水田南陽の二氏があつた。けれども二氏が遂にさうした方面の飜譯者として成功せずに、空しく水底の沒人となつて了つたのは、涙香氏には別に人生觀上或は藝術觀上の或る透徹した一線の執着があり、他の兩氏のは唯だ世間の思潮にゆらがされた一時の好奇心と云ふ差異に止まつて居るらしい。

ボアスコベの飜譯

ル・キユウやスウヱストルやドイルやブレエクを始めとして、現代の探偵小說或は神秘小說と見られるものに目につく事實は、そこには人間味が著るしく、或は全く缺けて居ることである。そこには科學や、推理や、超自然力のばけものが盛んに活躍することがあつても、生きた人間の情理が其間にからまることは寧ろ稀有の事のやうに見える、そこには唯だ犯罪の興味と、犯罪をあばく興味だけの展

開があるだけである。聊さか風變りに思へるモリス・ルブランさへも其の弊害からは免れてない。涙香氏はさうした乾燥無味なものには全く堪へられなかつたらしい。

私の知つて居る狹い範圍では、氏の飜譯はより多くヂユマ、ペザント、コレリイなどの作物を擇んで居るやうだ。けれども殊にボアスコベを多く譯して居るのは氏の特色の一つであると思ふ。私のせまい知識によれば、かうした種類の深刻な作物は、伊太利と佛蘭西が可あり古くから覇を唱へて居るものな相であるが、中でもボアスコベは確かに出色である、私は早い頃神田の古本屋から、ボアスコベのものを五冊ばかり探し出して買つて來て讀んだが、氏は其のどれをも飜譯して居るやうに思ふ。たゞ其のどれが何と云ふ題名で出て居るかになると、例の前に述べた樣に原名で譯出されて無いから一々對照されないが、殊に氏が『鐵假面』をヂユマから採らずにボアスコベから擇んだ一點でも敬服に値する。ボアスコベは實際鬼才である。犯罪と人情味の交渉の深刻さと、落想の奇警と規模の雄大はとても現代の神秘小説もしくは探偵小説などには見られないまことにすぐれたものがある。

人間情味の開拓者

尾崎紅葉の『不言不語』は、たしかに西洋神秘小説の飜案らしいのであるが、それは文章の銑煉を除いての外は、內容としてはさうした類の西洋小説にあつても廿五錢小說として其邊にころがつて居

る底の恐ろしく格の下つたものである。彼の『隣の女』も亦た飜案だと云ふ説がある『笛吹川』も怪しいものだ。もしさうした思想と傾向だけの價値から云へば、紅葉の撰んだ神秘小説は到底涙香氏の眼に映じた神秘味の敵ではない。この意味から見て涙香氏の飜譯は、人間の暗黒面の廣さと深さに、どれほど洪大な視野があるものであるかと云ふことを、さうした現象を嘗て夢にも知り得なかつたところの、日本の讀書界に知らしめた唯一の開拓者である、たとへそれは藝術的な雰圍氣をいくいか缺いて居たにしても、端的に、嚴肅に、さうした人間情理がかもす葛藤と、それから起る愛慾と罪惡の複雜さを說いて、文藝の見方に彼等が未知であつた、さうした一面の廣い分野を展開したことは、たとへ際立つて言表されずとも、それは無限にして無窮な感銘と感化を永遠に思想界にとゞめてあるべきものだと思ふのである。

獨創の天地と視野

狹い島國である日本の藝術の視野は、お互ひに勝手な旗差物をふりかざして、狹い障壁の中にお互に小さく小ぜり合ひをして居る。それは封建時代の武士生活とあまり變りがない。

涙香氏の主持したものは、全く彼等の思惟以上に超脫した獨創の天地であり、又た廣汎な視野である。彼等のどれもがそれを抱擁し得られぬほど、又たし切れぬほど、それほど獨創なものであつた故

に、彼等は又た容易に、正當に飜譯家としての氏の價値を批判しきれなかつた。かくて氏の名は明治文藝史の中にきはめて偏頗な地位に置かれた譯であるが、恐らく孤高獨往、自分の信じたところを自我神と信じた氏にとつては、そんな事は恐らく何等の惱みでも、煩らひでもないであらう。

新民衆文學の水先案內

古い頃一外人が日本人出版界の現狀を故國へ報告する文句の中に、今まで一度に十二部づゝ丸善へ輸入されて居たユウゴオの佛英文が、黑岩氏の『噫無情』が出てからこの方、俄かに一回五十部づゝを輸入しても足らなかつたと云ふことを書いて居る。此意味に於いて氏は沙翁に對するラムの役目をつとめて居る。チユマの名が俄かに日本にわかり出したのも『巖窟王』があればこそである。

現代は相變らず外國文化の移入の時代である。けれども氏の外國文化の移入のやうに、その文化なり藝術なりの全局を先づ遺憾なく自分のものに消化し理解し盡して、それから更に自分の創作としてそれを再現する氏のやうな光りのある移入はどれほど示されて居るであらうか。又た氏のやうな少しも危な氣のない確實さと、簡潔鮮明さを以てする文化の移入と飜譯がどれほど認められて居るであらうか。そこにも氏の文化移入の態度が永久に賦へて居る重大な示唆がある。

少くとも氏が日本でない外國に生れて居たならば、ある偉大な新聞記者として外に、文藝の分野に

於いても、又た新らしい民衆文藝を創立した文化の創設者としても、當然可なり光榮のある地位を與へられて居るべき筈であると思ふ。

無錢旅行の窮策

大杉正之

私が黑岩君と大阪の英語學校で同窓であつたのは確か明治十年頃であつた、その間僅かに六ヶ月ではあつたが非常に親しく交つた、私が後に支那へ行くやうになつた時なども黑岩君は手紙でいろ〳〵と好意をつくされた。

その時分の黑岩君はあまり豐かでもなく、私と同じ寄宿舍に居られ、休憩時間には運動場に集まつてよく議論をしたものでした、すでにその頃は漢籍の素養も大分あつたやうで、山本秀樹氏などと自作の詩文章を見せ合したりしてよくその意見を闘はして居られた。

寄宿舍にあつても君は眞面目の議論家であつて、その頃よくあつた賄征伐などの仲間には決して加はらなかつた、寧ろ先輩を說いてこれが仲裁のことに盡力してその和解につとめた、こんなことから私等は先輩に知られたのであつた。

その當時の講師であつた三井の故小川錚吉氏は生前毎年同校出身のものを招いたがその中には有賀長文、松井慶四郎、岩原謙三、進經太、日置益、加藤彰廉、松本源太郎などが見えられた、これはみな當時の先輩であつた。

其の後明治十六年私は支那から歸つて外務省に出るやうになつて上京したときは黑岩君は『大』と稱してすでに一人前の演説家となつて世にのぞんで居られた、或る時私は入場料を拂つて演説を聞きに入つたら『黑岩大』とは當時の『周六』君であつて驚いたことがあつた。

黑岩君はどう云ふ事情で『大』と改名されたか知らぬが、多分黑岩君の抱負の偉大なることを表はされたもので、これ普通の人なれば、なんとか最大なる意味の表はるゝ辭句を使ふところであるが、君は單に『大』と一字無雜作につけられた處が君の面目が躍如としてゐると思ふ。

君が東京へ出られた時は殆んど無錢旅行に近く、ある時渡し場に來たがその渡し錢に窮したので衣服を脱ぎ首に結び、泳いでその川を越らうとしたが、それを見た船頭が見兼ねて只で渡してくれた、それから東京へ近くの渡しにかゝつたときまた以前のやうに只で渡してくれることもあらうと衣服を脱いで泳ぐばかりにして船頭の來るのを待つたが、船頭は平氣で助けてもくれず舟を出したので、餘儀なく泳ぎ越したさうで、その時君は『人に救ひを求めないときには意外にも救はれるし、自ら救ひを

求めるときは救はれない』と云ふて『いゝ教訓を得ました』とは君からの直話である。

豪語尚ほ耳に殘る

押川方義

私は黒岩君と左程懇意であつたといふ中でもありませんでしたが、さりとて萬更知らぬといふ中でもありません、赤新聞時代は世間から兎角の評をされましたが、あれは恰度星亭が兒分の惡德に累されたと同じで、萬朝の悲境時代に部下の社員のした事が皆社長たりし黒岩君のした事として世間に喧傳されたからだらうと思ひます。

初めから國家的觀念によつて行動し、其間何等の私心を挾まず剛直の性を全ふした點は只々畏敬の外はありません。

新聞記者として我邦の第一人者であり、經營者としての技能又凡ならざるものがあつた、我操觚界の爲め貢献した事は世人の已に知れる所である、晩年思想を練磨し、哲學的に目覺め人格を向上した。

大隈内閣當時の事であつた『大戰終局を告げ、愈々平和會議が開かるゝとならば、隈伯を歐洲に送り我々も隨行して大に伯を後援し、大過なからん事を期し、此期を逸せず日本をして一躍世界の一等

國の班に列しなければならぬ」など豪語してゐたが、今尙耳に新たな感がします、尙君に借すに十年を以てせば、何事か爲し得たのであらうが、不幸病の爲め斃れたのは實に遺憾の事に思ひます。

逢ふ前と逢つてから

鵜澤總明

黑岩氏とは風月會で懇意になつたもので、風月會以外には殆んど何等の交渉がなかつた、でも風月で落ち合ふ毎に打ち解けて款談したもので、殊に趣味の點で一致する所があり、或時の如きは話が非常にはづんで、數時間只二人で喋舌り通した事もあつた。

元來私は學生時代から獨逸文學、英國文學に非常に趣味を持ち、高等學校や大學時代には文藝部員として働いた位で、今でも其時分の事を知る友人から君が法律家になるなどは、實に意外であつたと謂はれる程である、かういふ譯で早くからユーゴーやシエークスピアの小說などよく耽讀したものである、是等の小說の多くは克く世相を穿つて、社會生活、國家生活の極致から人情の機微に及び世路の艱難から刑事人類學の根柢をまで描き盡したもので、言換ふれば自由平等を尙び、建設に重きを置き、所謂社會生活の要諦に觸れて居る、又東西古今の詩人文學者でも刑後の詩藻文藝は辛辣味が加はり、

情趣が非常に深遠となるもので白樂天や、司馬遷の刑後の詩が疇昔の物に比し如何に光彩を一新したかに見ても判る事で、是等を法律家の立場として觀察し研究して見ると、其處に非常なる趣味を感じたものだ。こんな話を能く二人で話合つた事であつたが是等に對する私の意見に同感の樣子であり、又氏は同趣味の友を得たのを欣んだ樣子でもあつた。

私は何時か長島君と一所に萬朝報で惡く書かれた事もあり、種々の事から黒岩氏を妙に想像してゐたが、始めて風月會の席上で逢つてからは全く最初の想像は裏切られて了つた、如何にも溫和な人格者で寧ろ不思議に思ふ程であつた。

懇意になるに隨つて色々の滑稽や諧謔が平素眞面目な氏の口から屢々聞かされたものだ、何時かも氏は信州の或女學校の講演會に招かれた時多くの女學生が『黒岩涙香』と云へば眉目清秀の好男子で、未だ少壯有爲の文學者とのみ思つてゐたのが頭の禿げた半老人であつたので姫御前達開いた口が塞からなかつたなどと云ふ話をして風月の一座を笑はせてゐた。

飜譯小說では殆んど第一人者として我文壇に名を馳せたが何でも原本を數回讀み嚼し自ら書中の人となり始めて筆を執るとの事であつたが、是れは餘程頭腦明快な人でなければ出來ない業で、常人の到底企て及ばぬ事である。『小野小町論』なども中々よく出來たもので確に明治文壇の傑作であると思ふ、

歐州から歸られて間もなく病の床に就かれ、風月會員の一同皆氏の平癒を祈つてゐたが竟に再び起たれなかつたのは實に哀悼に堪へぬ。氏を失つた風月の卓上は非常に淋しくなり、殊に趣味を同ふしてゐた私は文學上の師を亡くした事を特に悲しんでゐる次第である。

能力の割合に成績が少い

三宅雄二郎

大正元年、理想選擧の事に就き一緒に山形縣を旅行した時、年齡の話が出で、誰は幾つ、彼は幾つといふ中、黑岩君の謂ふには『私は七十まで生きて居らねばならぬ、それが出來ぬと困る』とあつた。七十迄に何を爲すの意であつたか、知りやうがないが、兎も角七十迄生きる心算であつたのが五十九で亡くなつたので自ら遺憾なきを得なかつたこと丶思はれる。聞く所によれば、長い間苦しい病氣に屈せず、覺悟の定まつたこと、大學の醫員に於ても感心し、始めてさういふのを見たとの事である。

旅行の節、「體が良くないので困ると言ひ、どうわるいのか』と尋ねれば『心臟がわるく無理が出來ぬ』と答へた。七十迄生きる希望であつてさうゆかぬかも知れぬと思つてゐたかも知れぬ。それとも別段に病氣といふ程でなく、七十位までは大丈夫と考へたらうか。何にしても六十前に果てるとは思はな

んだらう。

他から見る所では、黑岩君は善惡混合し、善を以つて惡に打ち勝たうとし、黽勉して漸次勝利を獲るの跡がある。大正の初より餘程其効果著しく、米屋を始める頃から聊かぐらついたらしく、若し健康が許したならば更に盛返したらうと察せられる。

以前に種々評判があり、寧ろよからぬ評判多く、探偵小說家として知る者は格別、新聞營業者として氣味惡く思ひ、二六新報で蝮の周六と書き出したのも前に知られた事實に據つて居らう。實に世間で氣味の惡い男とした。

然し二六で蝮周と言つた頃は、もはや大分變つて居り、蝮周と言ふのが適切の綽名と聞えなんだ。萬朝報では二六に何と書いても相手にせず、何とでも言ふのがよい、其中に判るとの態度であり、世間でも餘り角力にならぬやうに見てゐた。二六の奮鬪振りも目覺ましかつたが、萬朝が堂々として居つた。自分の社の小さな利害よりも正義公論を主にする觀があつた。それでも世間で何處か惡辣の分子あるを認め、蝮周といふのが偶然でないし、蝮周といふ語が相應に擴まつた。

見た所からして一癖もあり、二癖もあり、蝮周と言ふ所が現はれつゝ、何所かに優しい所があり、親切心があり、義理も堅く、談話も愉快で、どうしても惡い人と思はれぬが、意地が強く、意地を通

すが爲め善くても惡るくても構はぬやうになる。年齡が長ずるに伴ひ鷹揚になつたのであつて、それでも時に意地張るので若い頃は嘸意地を張つた事と思はれる。後に品性を高め、君子か聖人に向ふの傾向を示したのは、自己の進化と謂はねばならぬ。

『天人論』を著はし、理想選擧で運動した頃の黑岩君は餘程人が違ひ、あれ程違つたのは珍らしいと言はれた。家庭で紛紜があつた時も、人が夫に同情し、妻に同情しやうとせぬ。始めの程似合の夫妻であつても、夫が進步し妻が前の儘では何とも致方がない。夫として氣の毒であり、止むを得ぬ事とした。然し再婚になつて失望した者もある。

面白い性格で、言はゞ身內に善惡相戰ひ、少しづゝ善が勝ち、時として不利に陷る事がある。大體に於て勝味多く、時々敗北に逢ふ事があつた。加ふるに天分が豐かであり、才幹、精根、辯力等、凡そ世間で成功の要素とする所を悉く兼ねてるが、只一つ肝要なるものを缺いて居る、卽ち目的物を一つにする事が出來なくなつて居る。精力集中は確にこれあり、思ひ立つたが最後、全力を集め、爲し遂げねば止まぬが、今一步と言ふやうな所で飽いてしまひ、飽けば他に向ひ、前の事を忘れたやうになる。何でも判り、何でも出來る方であつて、斯く能力に富むのが珍らしいと言へるのに、時々目的物を變へるので能力に富む割合に成績が少い。常人の爲す所に優つて居るけれど、更に優るべくして優らず

に終る。若し彼の豐富なる能力を以て一の目的を指したならば驚くべき成績を顯したであらう。

蝮周と言はれたのが君子となり、見違へたやうに思はれたのは、全力を集中するの力より得た効果である。其集中が或る期間を經て弛むので思はしく行かぬ。一時の集中は何物も抵抗する者がなく、之れで通ほせば不可能の事がないとして差支なく、只長續きせぬ爲め、折角の天分が幾つにも分れ、思はしい結果を現はさぬ。軍隊ならば歩兵でも砲兵でも騎兵でも輜重兵でも何でも相當の將校を具へ、屢々奮戰しつゝ、司令部の働きが思はしくない。然し七十迄壽命があつたならば總べてを綜合し、黒岩君の黒岩君たる所を十分に發揚し得たであらうか、永遠の疑問に屬する。流石の勝氣の人が病氣に勝つ事が出來なんだのは殘念に思はれた事と考へられるが、醫員の謂ふ所では從容迫らず、諦めがつき、殘念なやうな事がなかつたとの事。若し病中の思想を十分に表白し得たならば、七十迄生きたのと違ひない事が判つたらう。それも今確めるに由なく、或ひは左右に居た人が了解して居る事かと思はれる。

何ものよりも優者として

松内冷洋

その頃萬朝報の編輯局は、三十間堀の建増し以前の舊館即ち舊館の舊館といふべき、廿疊敷よりは多かるまじと思はれる二階の一室に過ぎなかつた。彼これ明治三十年前後、日清戰爭から間のない、所謂三十間堀時代の中葉期ともいへやうか。私の記憶にして誤まりなくば黒岩先生の一大名篇『巖窟王』連載せられて、驚くべき人氣を吸收して居たのも、この時分であつたかに考へられる。わが敬愛する曾我部一紅君が編輯の中堅として、その奇癖であるところの踵の表皮を弄びながら、鋏と糊とを巧みに操縱しつゝ、暇あれば後進の爲めに、當世大通の諸わけを懇ろに說法して、殆んど倦むを知らなかつた時代であつた。一般の新聞記者生活が、道樂商賣といふ不思議な稱號から、未だ解脫せぬ時代であつた。洒落と頓才とが、何よりも尊重せられた時代であつた。各社の軟派記者と稱せらるゝ通人の間には『吞氣會』と呼ばるゝ隱し藝競演の集まりなどが、月々に催ほされた。朝報社中の漢詩家の顏觸れからは、東京師團をもじつた「鬪狂詩團」といふ狂詩の會合が企てられた。三木愛花、小林天龍兩君を世話役格として、黒岩先生も亦た決して人後に落つるものではなかつた。一體先生が何れほど

の詩的感興とその技巧を持つてゐられたかは知らないが、而も先生の一句、一作出づるごとに、同人を驚倒させるまでの優秀さを見せたことは事實である。私はこれを先生の敗けじ魂の產物と見たい。先生は徹底せる意氣地の所有者であつた。意氣地といへば、聊か受身を意味する。先生の場合は寧ろ反撥力といつた方がよい。それほど積極的、働きかけの闘氣を刻み込んでゐられたのである。『誰よりも、何ものよりも優者として』、それがげに先生の渾身を包む力であつた。後年稍々呂達ひの感なきにあらざる『天人論』の著述を見るに至つたのも、畢竟或動機に應へんとする强烈な所產であつたことは、恐らく知る人ぞ知るであらう。

○

そんなに遊戲氣分の流るゝ新聞社に、ストームの如く襲來する恐るべきものは、發行停止の命令であつた。政府者の施設に對する、ほんの僅かの正直さを含む批評もたゞちに發行停止に値した。今から思へば箸のころげたほどの些細な言論も、立派な發行停止の代物であつた。停止の日限は輕くして三日、重きは七日、十日乃至十五日にもわたつた。新聞界第一の反撥家を社長に戴く萬朝報が、新聞界第一の停止命令受領者であつたことは言ふまでもない。黒岩先生が論壇の健闘者たりしことは、棺を蓋ふに至るまで、一貫不斷の生命であつた。併し私はこの當時ほど、先生の抗爭的筆力の强健味と辛

辣味とを經驗したことはない。小氣味よくもあつた。痛快でもあつた。さりながら營業政策の方面から、打算的に見れば、それは莫大な損失である。某々等經營の任にある人は、心臟を高鳴らせながら、幾度か筆鋒の緩和を求めた。成ほど一停止來るごとに、社會の同情翕然として來り、紙數激增の好況を呈し得たものゝ、經營の本體たる廣告の休載によつて、社の經濟は、實質的に窮境に陷るを免れなかつた。新參の私などにさへ『此の上續けさまにやられゝば朝報社は破滅だ』といふ嘆聲が、幹部の口から聽かれた。三日にあげぬ停止の悲報に、誰もが生色を失つた。その中にあつて先生の例の反撥力は、獨り炎々として燃えた。――『已むを得ません、戰ふほかはありません』。これであつた。編輯局の疊が、赤インキに荒み行くまゝに。

◎

先生が相撲道の愛好者であつたことは、何人も否まぬところであらう。そして當年の花形荒岩が、先生の寵遇を恣にしたこともまた否み得ぬところであらう。それは必らずや角通三木愛花翁の追憶辭に、委曲を盡さるゝことゝ思ふが、こゝに一挿話を記すことを許されたい。某年夏場所の某日、寵士荒岩が逆鉾と組んで敗れた。棧敷を去つて、編輯局に歸つた先生の面には、案の定沈痛の色が刻まれてゐる。暗默は一堂を支配した。時に對座の某、慰め顏に『今日は飛んだことでしたな』といふや、先生

やをら双腕を膝に構へつ『ハ、ア、荒岩の敗は拙者の恥辱なのですか』と、急語一句、座を蹴つて矢の如く階を降つた。四周皆呆然愕然たるのみ。私などは獅子の足跡を踏んだ羊のやうに戰いたのであつた。こゝにも先生の反撥感念の旺盛さが、まざ〳〵と現はれる。鐵の如き意志と火の如き感情との矛盾錯綜たる先生の性格にして、はじめてこの端的發露に到達し得るのである。『憎むものは眼をも抉らん、愛するものには骨肉を割き與ふるも惜まぬ』。これが先生の眞骨頭であつた。複雜と純眞と、反抗と愛撫とは、實に先生の性格の兩面であつたのである。

○

明治三十二年であつたか。舊館の右に接して、新館の増築が完成した。編輯局も從前に比べると、優に四五倍の廣さはあつた。われ〳〵は大海に泳ぎ出でた魚のやうな喜びを抱いて新しき机に親んだ。社運は極めて順調に進んだ。新聞の販路は、必ずしも濃密でなかつたとはいへ、兎に角北海道の果から、九州の隅まで、到るところ讀者を攫んだ。先生の優越觀は、段々に膨らんで來た。最優最良の記者を集めて、最優最良の新聞を作らうとする宿年の理想も、漸く實現されんとした。內藤湖南、森田思軒、內村鑑三、田岡嶺雲、幸德秋水、齋藤綠雨等一代の文星論客肱を交へて、朝報紙上金玉の文を競つた。まことに彩華燦然以て天下に誇るべきものがあつたのである。先生が事に激して『大隈伯の如

きは我社の一外交記者たらんのみ』と喝破したのも、たしかこの頃の出來事であつたやうに記憶する。私が當時を目して、朝報の黄金時代となすもの、決して過稱ではあるまい。聰明なる先生は『新聞紙面の最優最良』に加ふるに、更に『最速』の條件を以てするを忘れなかつた。某日先生は、編輯局員を一堂に集めて『我紙は本日の出來事を明日の紙上に掲げ得るの設備をなさなければならぬ、要は昨日の活字を以て紙面を埋めねばならぬのである』と語つた。實際その頃は交通、通信の不備なるが上に午後三時前後を以てサッサと締切つたこと故、その日の出來事をその日に組込むなどは思ひも寄らぬ企てゞあつた。多くは昨日の事件を一昨日として、一昨日の事件を一昨々日として、悠々紙上に掲げながら、何人もその不敏を恥づるものがなかつたのである。先生の最速報道觀は、この惰習を打ちやぶるに充分の力であつた。昨日記事の濫觴は、實にこゝにあつたのである。

總持寺の新檀家

伊藤道海

私は學生時代から萬朝報の愛讀者で、麻布の曹洞宗大學に在學中、朝の讀經が濟むと必ず先づ當時

赤新聞であつた萬朝を手にした事でした、否私のみならず當時同大學の寄宿生二百五十名、悉く萬朝を愛讀してゐたものです。

其當時から萬朝には人才が多く、内村、圓城寺、幸徳といふやうな人がゐて、社説は素より記事が生々してゐたし、清新な趣味の多い記事で充滿してゐました。

此の樣な事からして黒岩さんの書いたものにも非常に趣味を持ち、本山の事業に奔走し、事務に鞅掌する傍ら閑を偸んで『噫無情』、『巖窟王』、其他の飜譯ものから『天人論』に至るまで、凡そ先生の書かれた書物で讀まないものはありません、然かも大抵二回位は讀み返へして居ります。

過ぐる國際會議の際、黒岩さんが巴里に行かれると云ふ事が春秋會關係の一部の記者達から問題にされた時、先生一流の辯明書が萬朝の社説欄に載つた、私はこれを非常に面白く讀んだ事でした、當時先生を送る爲めに中央亭で理想團主催の晩餐會が開かれた、鹽谷恒太郎氏は『黒岩君歸朝の際の土産は我々理想團員が一番先に貰はふではないか』と提議した、愈々歸朝されると築地の精養軒で歡迎會が開かれ、其時先生の歐米漫遊の感想談を聞いた事であつた『日本は外國に較べて完全な穩當な進み方をしてゐるのは非常によいが、今後は責任が甚だ重い、蒙古の襲來の時の神風は要するに國民一致の力の風であつた』と云ふ意味の結論であつた。

昨年の夏の事であつた、私の留守中、突然夫人が見えて『黒岩家の墓地を今後貴本山に設けておきたい』との話であつたらしい、其後私も夫人に逢ひ『此の山は佛式にあらざれば差上げない骨を埋めさせない事になつてゐるクリスチヤンではないか』と夫人に問ふた、夫人は『主人は無宗敎のやうです、尤も主人の話に黑岩家の先祖は元もと禪宗でしたけれど、鄕里土佐では一時佛敎を禁じたことがあつたので終に神道に變つたさうです、殊に友人にはクリスチヤンが多く主人の兄亦クリスチヤンだが、主人は死を弔ふには佛がよいと思ふと云ふて居ります』との話であつたので、私も種々と心配し、愈よ總持寺の新檀家になつて頂いた事です。

黑岩さんが常に侃々諤々の論を唱へ、權勢に阿らず、富貴に淫しない高い人格には、私は私かに私淑してゐました、今お骨の前に立つに到ても、自然に景仰の念を生じ謹んで回向してゐるやうな譯です。

（大正一〇・四・八）

黑岩涙香氏の靈に

（談話にかへて）

與謝野晶子

君あらで忽ち世人醜しとわれ歎くらくこの頃のこと

名工の燒及のあまた何ならん君まさぬ世に銳きものも無し

世をたどし行かんと君が叫ぶ聲今日もわれ聞く諸人も聞く

何時聞かんなすべきこともうち置きて急ぎいにける國の消息

人の手に君が被きし黑き布とりがたけれどなほぞ在ませる

先生と餘技

漢詩

中川　毅

氏は幼時より漢籍に親まれた、屢ば文も屬せられた、屢ば詩も賦せられた、作物の多かつた事は言ふまでも有るまいが、而し詩一篇も書殘されない、氏は常に人に對して言はれた、僕の詩は一時興到の作で、永世不朽のものは作り得ないから、稿を留むる手數も入らないと、書を請ふ者あれば、多くは唐詩を揮灑せられた、中年二三詩家の加硃を請はれて、新聞にも掲げ、雜誌にも載せられたが、加硃に就ては、心中服さなかつた點が多いらしい、詩人は句を作る事は上手だが、内容を顧みない嫌ひがある、と言はれた一事に見ても分る、南歐游草一篇の如きは、全然人に賑す事を避けられた、所謂詩人の眼には何と映ずるか分らないが、實際大手筆で學者の作る可き詩だ、氏の詩は之れを代表作として、其他を割愛する事が、故人の心を獲たものと思ふ。

南歐游草

（大正九年三月二十四日以後萬朝報所載）

涙香生

（一）

小引

余昨年歐洲に行き特に南歐を巡遊せり、途中感ずるに從ひ口吟したる詩數十首あり、之れを見聞錄の中に記入し羅馬、馬德里、其他の地より朝報社へ送りたるに、當時戰爭纔に休戰期に入り猶ほ檢閱等も甚だ嚴重なる際なりしかば、多分一知半解の吏が、自個の解讀し得ざるは沒取するを安全とせし者ならんか、唯だ友人等に宛て端書に認めて發したるもの、幾枚か到着し、詩一兩首本紙に載せられたりと思はる、爾來急がしきに紛れしみ〲想起するとも無かりしに、舊臘より病の爲め大磯に來り、褥中に在りて之れを思ふに、文は最早や如何ともする能はざれど詩句は追々に記憶より喚起することを得たり、今は甚だしく時機を失し、從て興味も拔けたれど、暗から暗に葬むるも惜しければ、思ひ出たる詩に簡單なる說明を附し、南歐游草と題して今日より本紙の一隅に揭ぐ、猶

ほ幾百かありたれど思ひ出す能はざるもあり、殊更に捨てたるも有り。

（二）

講和豫備會の開かれたる『ケイ、ドルセー』は『セイン河』の畔に在り（ケイは河岸の義）我が使臣の宿りたるホテル、ブリストルは巴里の一偉觀たる拿翁銅像の直下なり、像は直立天を摩する如く見ゆる高き銅塔の上に屹として立てり、余の宿りしホテル、ミラボーも同じ町に在り、町名をルー、ドラ、ペイと云ふ、平和の町と云ふ義にて拿翁戰捷の記念として命名せし者なるべし、拿翁の如き好戰漢を平和の本尊とするは眉唾物と思はるゝも平和はいつも眉唾物なるに非ざるか、此度の講和の評議とても果して其自稱する如く永久に平和を建立するを得べきか、永久は扨置き向後幾年間戰爭を看ざる如き國際關係を作出し得可きかと思へば聊か心細からざるを得ず。

巴里雜詠（錄二）

清香河畔會英雄。玉帛千秋策偉功。薄夜歸來銅塔下。拿翁肩上月如弓。

余が佛國に入りし頃は戰爭の疲勞が事毎に現はれて巴里の光景も凄慘を極めたり、中にも目に觸るゝ婦人の多くが黑き喪服を裝へるは戰死者の遺族とぞ知らる、一見して同情の涙を催すは誰しもの情なるべし。

劫後林園未競芳。春寒如水罩池塘。斷腸巴里街頭雨。不灑梅花灑海棠。

其　二

（三）

二月十七日ガー、ド、リヨンを發し汽車東南に進む、路は有名なるサオーン河（棹音の字を充つ）に傍ひて里楊に入り、更に地中海邊の馬耳塞（マルセーユ）、邯南（カンス）、尼斯（ニース）等に行かんとするなり、佛國の田舍の光景は先づ此道筋にて知らる、到る處古城あり封建時代の面影を殘せるは所謂シャトウなり、譯して城莊と云ふ、此國の一特色にして殆んど到る處に之れ有り、遠近の農家は悉く家根を赤瓦にし窓に多く青色なり、丹青相映じて壁は附近の林丘と色の配合を得る樣工夫せられたるなど、如何に佛國人が審美の心に富めるやを見るべし、聞けば此國の地方民が夫婦爐邊の樂みとするは生涯に自個の家を建てんとの談合に在り、中にも妻は背景に對する色彩の調和を種々に研究して苦心を絕たすとの事なり、全く美的天才の民と云ふ可し、されば此國の村落は一望して繪畫に對する如き想ひあり、日暮漸く里楊に近し、里楊は絹織物の產地として世界第一と稱せらる。

遙　望　里　楊

舊國江山引興長。車窓指點幾城莊。暮天放眼雲如錦。紺碧遙繞是里楊。

里楊城の下に到りて棹音の河はロオーン（艪音の字を充つ）の流れと合し深潭となる、水量の多くして清き、稀に見る名河なり。

渡艪音河

棹音河合艪音河。潭水如藍碧自渦。繋在中流舟數百。寒風吹送浣紗歌。

（四）

リヨンに入る　里楊は佛國に於ける最も古き都市の一なり、二千年來史上に其名を見る、余等（大谷誠夫、椎名其二の二氏及び余）はレプユブリク街なるグランド、ホテルに投宿し、終日市中を見廻れり、棹音と艪音の兩河は此市中に於ては未だ合せず別々に貫流す、町は第二の巴里と云はれ人口も四十萬あれど、玆も事毎に戰爭の創痍の見認めらるゝは無論なり、絹織物の市が近々に開かるゝとて到る處の空地に見本陳列場の新に建てられつゝあるを見たり、名產の錦などをも見受けたり。

里楊雜詠其一

錦機此處養蒼生。卌萬人煙遶古城。山有溫容水明媚。空敎游子憶西京。

里楊のノートル、ダム　市の一方に在るフールビエーの山巓にビサンチン式の大なる伽藍あり、登りて見るに是れもノートル、ダムなり（卽ち聖母を祭る、羅馬敎の寺院なり）玆へ上るには鐵にて

電車を吊る様にし斷崖と云ふほどならぬも急峻なる坂を引上げ行く、同車せるは多く年若き婦人にて、孰れも喪衣を着けたるは酸鼻に堪へず。

神　母　廟

神母祠高聳翠微。慈恩無限戰情非。賽來多是如花女。惆悵春風吹黑衣。

（五）

飛行機の演習　里楊より馬耳塞に行くは單調なる旅行なれば殆んど退屈に堪へざりしに、偶然車窓より遙か向ふの空に孤鳥の飛ぶかと疑はるゝ一影を認めたり、見るうちに接近して飛行機と爲り、更に後から後からと雁陣の亂れし如く殺到するは其數幾百千なるを知らず、やがて頭上を過ぐる頃は天に蔓こる雲かとも思はれたり、聞けば此邊に飛行練習場あり軍用飛行機の演習なりしとぞ、思はぬ壯觀に旅愁を一掃したる想ひありき。

觀　飛　行　機

飛機雲集轟雷霆。翼影滿天天日暝。電掣風馳散如夢。仰觀唯有太空青。

邯南に到る　馬耳塞より海岸に傍ひて東行しツーロン（佛國海軍の要港）サン、ラフエール等を經てカンヌ（邯南の字を充つ）に到る、昔し拿翁がエルバ島を脱出して着陸したるは此邊也、今は避寒地

と爲り冬期は貴紳富豪を引寄せること數を知らず、海岸に於る遊眺散策等の設備甚だ行屆けるを見る。

郡南口吟

嵐氛潮氣罩人濃。南有名寰宜避冬。比我湘陽風景好。天邊只缺玉芙蓉。

(六)

グランド、コルニシユを越ゆ　ニースよりマントンに至る間の山をグランド、コルニシユ(大胡西の字を充つ)と云ふ地中海岸第一の天險なり、而かも文明の今日なれば、此の天險を切開きて三條の大なる道路を通ぜり、最下は實用道にして山麓を回り海に沿へり、汽車之れを走る、中段は山腹を過ぐ馬車道にして遊眺の爲めに開かれたる者なり。最上は山巓に近く自動車道として作られたるにて山岳の起伏、海灣の出入等を眺むれば天下の絕景なるを知らる、余は度々ニースに行きたれば自動車を馳せて此天險を越えたること數回、其度に氣力の蘇するを覺えたり。

自動車踰大胡西

高峰疑是入天臍。路到巓邊萬象低。山氣吹來雲拂面。快輪飛度大胡西。

モナコ公國　モナコは南歐に於ける最小なる獨立國なり、廣さは東京市の一區ほども有らんかと見受けらる、博奕公許を以て有名なり、人口二萬に滿たず、國王(プリンス)が博奕の堂親を爲せる

に同じ、國費は總て博奕のテラ錢にて辨ずとは、噓らしき眞事なり、博奕の方法は青き卓子の中央に黒き圓き盤を取付けて小なる象牙の玉を轉がし其の止まりたる所の數字にて勝負を判ずるなり、國人には博奕するを許さず、唯だ外國の旅行券を持てる人のみ勝負を爭ふなり。

模　那　古

數千黔首足王臣。寸土何妨擬率濱。別造圓盤青卓在。萬錢來貢萬邦民。

（七）

モナコの大賭場を觀る　『モナコ』の博奕場―カシノ―は模那古領内の『モント、カーロ』に在り、通稱カシノと云へば娯樂場の意にして歌舞、音樂、マチネー等の催し有るが多けれど、『モナコ』のカシノは單に博奕のみ、即ち純粹の賭博場なり、賭博の異名を英語にて『ブリウ、テーブル』と云ふ、博奕臺は總て青き卓子に限ると見えたり、カシノの中に入れば善盡し美盡したる大廣場に幾十の青卓を列ね、男女老壯入り亂れて運の神を挑みつゝあり、何しろ世界無二の銷金窩なれば、出入る人大概は富豪成金の輩にて、無論是等には附物とも稱す可き盛装の美人も少からず、已れハア、ブッ魂消たの感無き能はず。

入嘉志野觀博奕

飄忽輸贏分喜悲。牙球圓轉欲停時。美人嬌態還堪愛。一擲千金如不知。

モナコを去る　租税無く監獄無く罪人無く上下擧りて外賓を歡娛せしむるに忙がし、金ありて此地に遊ぶ人の爲めには全く地上の天國なり、而かも山海の風景亦絕佳なり、如何に快樂を之れ貪る西洋に於ても斯かる國あらんとは思はざりき、去るに臨み。

將去模那古述感

蜃氣凝成山海隈。彫欄畫棟幾樓臺。醉人歡樂濃於酒。歐有仙寰望勿來。

（八）

ゼノアにコロンブスの像に對す　ゼノアは伊國第一の商港なり、舊市街と新市街とを芋繼ぎに繼合せたるは聊か見苦しけれど、新市街には名產の大理石を以てモザイクを施したるなど目を驚す美觀も有り、有名の墓地をも一覽し物產にも一通りは目を透したれど、余に取てはコロンブスの誕生地と云ふ一事より以上に興を引く者無かりき、余の泊りし旅館の前なる廣場に彼れの銅像立てり。

對閣龍武銅像

笑以天池作小池。至誠豪膽快男兒。余航萬里思君切。滄海洋洋無盡時。

沙の傾斜塔　ピサの傾斜塔は話にも聞き書にも讀み寫眞などにも看て奇觀なる可しとは想像せ

しも、全く聞きしに勝る奇觀なり、今の世に斯の如き奇工を設計し得る鬼才無しとは云はざるも、精密に重力を計算して加減したる手際は驚くの外無しと專門家は語る、但し近き頃までは、建て終りたる後に地盤が傾きたるならんと疑ふ人も有りたれど今は其疑ひ全く消滅したりとぞ。

到泌沙觀斜塔

高塔奇哉建得斜。來觀絡繹遠人車。名工千載留餘澤。一廓安生三萬家。

（九）

古天才の鄕を訪ふ　フロレンスは巴里の粉本とも文明の搖籃とも稱せらるゝ舊都市なり、殊に藝術の大天才と因緣深きを此地の特色とす、ダンテ、ミクランゼロ、ラフエール、マキヤベリ等は其の尤なり、されど全市の有樣は、昔し亂世に唯だ堅牢を專一として建てたる石造の家屋橋梁等が其まま古びて陰鬱の感を呈し、人をして巨石に壓迫せらるゝ如き感を生ぜしむ、其の甚しき一例は往古の監獄が今美術館として利用せらるゝが如き是れなり、此地には繪畫、彫刻、建築等傑出の資料多し、伊國特產のモザイクも此地の作を古雅愛す可しと爲す、近世に及び博愛家フロレンス、ナイチンゲール孃を出したるも亦一の異彩なり。

扶露蓮府

扶露蓮名聞太陳。石城石壁石街礫。如斯維石巖巖地。却爲慈仁生女神。

羅馬に入り謝肉祭を觀る　羅馬に於て謝肉祭(カーニバル)が特に盛なるは余の譯せし巖窟王に詳なり、余之れを看んと欲する念ありしに、恰も謝肉祭の終らんとする二日前に羅馬に入り、圖らずも香閙紛陣中の人と爲りたるはモツケの幸ひなりき。

入羅馬觀謝肉祭

曾譯西文傳事奇。來遊恰是得時宜。人拋色紙祭佳節。彩雪漫天天不知。

(十)

伊國の特色は芋繼　時代を縦に見て羅馬帝國時代の羅馬、法王廳の發政の羅馬、伊太利帝國の首府としての羅馬、と芋繼に繼合されたる如き觀あり、之れを横に視て、羅馬と云ふ市街が亦、新と舊との芋繼なり、佛京巴里が舊の痕跡を留めぬ迄に市區を改正して芋繼の奇觀を免れたるとは同じからず、風俗とても矢張り芋繼的なる者の如し、謝肉祭(カーニバル)は流石に法王の膝元だけに今の風俗とは思はれぬほど芋繼的に盛なり、余等は大使館を尋ねたる歸路、特に祭り騒ぎの最も盛なる所を選びて通過したるに、忽ち群衆の渦に卷込まれ、コンフエチ(色紙)を投掛けられ進みも退きもならぬ程とはなれり。

謝肉祭其二

謝肉祭開羅馬城。滿街男女湧歡聲。遠人忽被佳人拉。色紙網中游泳行。

二帝街　エマニエエル街、ウンベルト街は即ち先帝と今帝との名を市街に冠したるにて目貫の地なり。

謝肉祭其三

二帝街頭彩紙堆。紅粧幾隊鬪花回。掌中猶賸團團物。拋向青衫作雪來。

（十一）

羅馬時代の懷古　古羅馬は即ち羅馬帝國時代の羅馬市なり石又は煉瓦の建物が今の羅馬と芋繼に保存せらる、其規模の雄大なる流石に當時の隆盛を想像せしむるに足る、史家稱す昔し羅馬に於て水禽を肥育する方法を發明したる者あり、直ちに朝廷に採用せらる、是等が羅馬の衰へたる初なりと、王族の奢侈が食物の美を來し、食物の美が益々王族を惰弱ならしめ延て一般の風俗を墮落せしめたるなり。

古羅馬懷古

廷臣謹奏水禽肥。食味誰知兆式微。今我來遊古羅馬。低回唯[illegible]鵠飛。

圓形劇場の廢墟　圓形劇場の古跡は最も雄辯に羅馬朝廷の歡樂に耽りたるを語る、聊か忌諱に觸るゝ人を罪人として死刑に定め、此の圓形劇場に連れ來り猛獸に食ましめたりと云ふ、演劇も演武も、獸藝も玆に在りしなる可く、廢墟の宏壯なるは驚くの外無し、別に猛獸を養ひたる場所も有り、猛獸を連れ來る穴の路なども歷々として猶存せり。

觀圓形劇場廢墟

想得豪奢絕等倫。戲場跡峙廢宮隣。君王帶笑看何事。餓虎躍來生啖人。

（十二）

加士的樓に登る　『カスチロ』は英語のカッスル即ち城の意にて羅馬帝國時代の王城なりと思はる、古羅馬の一部に在る廢墟の一なり、之れに登れば正面にシイザアの宮殿あり、一方には『カラカラ』と云ふ大浴場の跡あり、孰れも古代煉瓦にて、見る影も無く零落せるも、規模の雄大なるは古帝國の豪壯を推想するに足る、此の『カスチロ』の頂邊に之れも芋繼的に今樣の家屋を繼足し、立派なる料理屋と爲せり、余等は大使館一等書記官今井忍郎氏に導かれ之れに登れり、凡そ羅馬ほど人をして懷古の念を起さしむる材料に富みたるは有らざるべし、カスチロも其の一なり。

飲于加士的樓

窓壓江山勢壯哉。高樓賣酒倚崔嵬。富人來醉佳人舞。是昔帝王登極臺。

名山ヴエシユビアス　伊國の一壯觀たる可しと想像さるゝヴエシユビアスは時々に休止する火山にして此頃は烟量少く、別に驚く可き事も無し、唯だ驚く可きは山麓より登山電車を架し、電車の力盡る所より更に山巓まで鐵鎖を引きてケーブル、カー式の工夫を應用し一種の鐵道を以て登山の目的を達せしむると是れなり。

伯　首　美　山

烱篌焦天活火山。多年以暴禍人間。老來今日少威烈。鐵鎖如刀割怒顏。

（十三）

末路猶侮り難し　余ヴエシユビアス山下なる寧府（ネープルス）に留まると九日間にして毎夜の如く火山の樣子を窺ひしに噴火の量は定まらず、少き時あり多き時あり、寧府より本平（ポンペイ）に至る途中にはツイ一昨年の大噴火に吐出したる鎔巖の爲め田畑も鐵道線路も埋まり、今猶ほ其儘なる慘澹の光景を存し末路の甚だ侮り難きを示せり、寧府にては濃淡種々の色の鎔巖にて彫刻せし假面其他婦人の粧飾品を賣れり。

伯　首　美　山　巓

鐵鎖一條人勝天。扶車易易到危巓。步尋火口舒巖上。一笑與山倶吐煙。

發掘されたるポンペイ市　ポンペイは二千年前に人口約三萬を有して大に繁昌せし町にして、舊き記錄に由れば羅馬の富豪などが命の洗濯の爲め此市に通ひたるとも有る樣子なり、多分は遊女屋の如きものも有りしならんか、紀元七十九年にヴエシユビアス大噴火あり全市は一晝夜の中に降灰の爲め埋められたり、後千八百年にして、學問の參考や好奇心等の爲め之を發掘し、今は伊國に遊ぶ人の見ねばならざる名所の一とは爲れり。

觀本平市趾

一廓埋灰百丈深。二千年後試探尋。歐南民俗淵源遠。淫靡成風古似今。

（十四）

保存されたる傑作も有り　ポンペイの發掘は大なる寶物等を掘出さゞりしと雖も石に施したる彫刻、燒け殘りたる繪畫等には驚く可き傑作も有り、ネープルスの美術館には多く其の品々を集め別室を作りて保存せり、繪畫は理想的なるも寫實的なるも有り、余は畫工をして其中の數枚を臨寫せしめ持歸りしが、孰れも當時の風俗を推想するに足る、前詩に述べたる如く淫靡風を成したるは爭ふ可からず、唯だ今の世の歐羅巴と孰れか甚しきを判する能はざるのみ。

觀本平市址其二

風霜昔時市民驚。奄忽全都沒禍阬。天道無情人自慰。密藏傳得古文明。

甚しき破壞　余の持歸りたる繪面の一に美人が水鏡せる者あり、當時ポンペイの家は明窓の下に一室を設け其中央なる適宜の位置に小池を作りて水を溜め、池の傍に手を杖く可き低き石柱を設け、俯向きて其の靜止せる鏡の如き水に自分の顏を寫すに便したるものゝ如し、是れなどは如何にも古代的なり、併し總體に於てポンペイ市は破滅されたる程度がひどければ掘起したりとて昔しの面影は認むるに由無し。

其　三

愛惜容光發地求。冢中眠熟二千秋。與來已朽伊人骨。欲返香魂不自由。

（十五）

野卑の國に非ざるか　伊國より歸り、馬耳塞、ナルボーン、セット等を經て西班に向ふ、此の道筋よりせば、バーセロナを經て馬德里に至る路順となる故、甚だしき迂回なれども余が視察せんとする史的名所を經ること多ければ、喜びて此路を選びぬ、素より西班は文化に於て佛國に劣り伊國にも及ばざる點あれば余は國境に至り多少の不快を感じ、特に往昔デューマ（巖窟王の著者）が此國

に愛想を盡して引揚げたるとなどを思ひ出さゞる能はざりき、此の國の言語は椎名通譯の言に由れば伊國と頗る相似、又此國人は歐洲第一の雄辯なりとも云へど余の最初の感じは先入主となりしが如く終に消滅すると無かりき。

過西班國境

文人曾此語歸心。我亦山風吹客襟。關吏來訶聲已野。不如伊佛帶琴音。

一望限り無き月桂樹　葡萄が佛國を本場とするは勿論の事なれど西班にも葡萄園の甚だ多きを見る、されど此國に特に多きは橄欖樹なり、余等は伊國に於て橄欖樹(所謂、月桂樹)の多きに驚きたれど、此嶺(ピレニース)山脈以南の橄欖園は一望無際の有樣なり、此樹の實は多少の風味あり我國にても罐詰の品が洋食に取合せて用ひらる、其油に至りては植物油の第一位なるべし、余は初めて見しとき柳の樹かと思ひたり、都新聞社の前に在る柳の古木と幹も枝も葉も頗る相似たり、唯だ聊か風姿に乏しくして即ち男性的なるを思ふのみ、汽車の橄欖林中を通る一事が、余に取りては西班に於ける興味の隨一なりき。

路入橄欖林

南過比嶺是西班。日夜飈輪度碧山。百里香風吹不絕。路通橄欖橘柑間。

（十六）

政治家無き國　西班は此度の戰爭に中立を守ると稱して巨利を占めたる國なり、殊に鐵其他の鑛産の富は內閣員中にすら巨萬の―否巨億の―財を得たる人を作りたりと噂せらる、而かも國內の治らざるは驚く可し、余がバーセロナに著したる翌朝ストライキ突發し電燈も電車も馬車も郵便配達も總て死止の有樣となりたれば、余等は匆々に出發して馬德里に向ひたり、聞く所に由れば此地に露國より過激派の入込むと其數を知らず、近ごろ工場主の暗殺せらるゝ者頻々相踵ぎ既に七十餘名に及びたるも一人の嫌疑者だも捕へられず、警察の力は匪徒の勢に及ばざるなりと云ふ、此國には雄辯なる煽動家ありて、經綸の何たるを知れる政治家無き者の如し。

西班雜詠其一

天物穰穰地勢宜。胡爲民富國玆衰。方知上下交征利。孟叟微言不我欺。

鬪牛至上の國　余は此國に有名なる鬪牛を觀て行かんかと思ひたるも、坂田公使―今は故人―に聞けば牛と瘦馬と人と鬪ひて始め牛馬に勝ち終りに人牛に勝つを順序とし、其の有樣の殘忍なる見るに堪へざる由なれば之れを觀ることを止めたり、國中先覺の人は鬪牛の禁ずべきを唱ふること屢々なるも、若し法令を以て禁止するに於ては如何なる內閣も直ちに轉覆すべしとぞ、觀せ物興行人の勢力

か國務大臣に勝るとは亦一奇ならずや。

西班雜詠其二

首鼠兩端嘉國猷。中原禍亂我何憂。揚威禦侮百年計。猛勇誇人只鬪牛。

（十七）

南歐には東洋人の子孫多し　西洋白皙の人種が黃人黑人を有色人と稱して之を賤むは謂れ無きこと甚だし、有色人と無色人の優劣は唯だ時運に由るのみ、余は南歐を跋涉して、黃人や黑人の血を受けたりと思はるゝ人を見受くること屢々之れあり、昔し東方の黃人アッチラやテムジンが歐羅巴を馬蹄に蹴散し、南方の黑人なる回敎の徒がモーア王國を西班に立てたるを顧みれば其れ等の血が被征服者たる無色人の一部を有色人たらしめたるは怪むに足る者無し、西班に入りてより美人の顏に特に其色の著しきを覺えたり。

西班雜詠其三

東寇遺黃南寇玄。桃花臉裏血猶傳。休言國辱存人面。有色姸於無色姸。

富籤の盛なる國　西班が國勢の甚だ振はざるも其の民に射利心の强過ぎて愛國心の消耗したるに因ると無論なるが、今は射利心は更に內亢して射倖心と爲り、博奕、富籤其他の勝負事は此國人の

須臾も離るゝ能はざる所なるに似たり、町の辻々に幾人と無く立てる夕刊賣の女が悉く富籤の新らしきを客に勸む（猶ほ其他の事をも勸むる由）るが其の一現象なるべし。

西班雜詠其四

闘牛人散月如鎌。山靄籠城夜色霑。有女街頭立呼客。捧來新紙與新籤。

（十八）

トレドの巨鐘　トレドは史家により世界最古の都市と稱せらる、一説にはモーセスの徒弟が分れて此地に移住したりとも云ふ、されど斯かる事は邈として語るに足らず、余の興趣を促すは此地が南方ムーア人種の初期の一根據地たりしに在り、今日に至りても古の劍戟を作りたる鋼鐵の細工あり、黄金の線條を鏤めて古雅最も愛す可く、之を襟ピン及びカフスボタンと爲し盛に伊佛英等に輸出す、ムーア人種が冶金の術に長じたるは未だ其來由を審にせずと雖も、一見して亞拉比亞藝術の傳統たることを知る可し、猶ほ此地に大伽藍あり世界第一と稱せらるゝ巨鐘あり。

土律德即興

左按經文右按刀。殺人傳敎一時豪。山河替主法宮寂。獨有鐘聲似怒號。

猶も南人の遠裔　南方黒人の混血は地方に入るに從ひ著しく存せるやに思はる、此國の人は一般

に頭髮も他の白晳人の如く金色ならず、大に黑色を加味し、眼も東洋人の如く殆んど黑眼なるが如し、重ねて之れを謂ふは聊かクドけれど記し置く。

途上偶成

乘夜南船渡急潮。江山雌伏草茅凋。一千年後蠻人色。潜在血中猶未銷。

（十九）

グラナダのアルハンブラ　コルドバは昔し回教徒が聖地の一とせし所なり余等は茲に立寄りて有名なる伽藍（モスク）を觀、アラビア藝術の深く且つ妙なるを賞鑑し更に南行してグラナダに向へり、茲は有色民族が最後まで占據せし處にして、アルハンブラは其王城なり、上り行きて其の廢址を觀るに、アラビア藝術の粹は茲に一斑を留むと云ふ可く、壁、柱等の彫刻は悉く幾何學的の線—即ち巾形模樣の如きもの—より成ると雖も其の多種多樣なる全く人をして驚かしむ、誰れか云ふ曲線の美は婦人の裸體に在りと、余は裸體美術を見飽きて其の却て單調に、行詰れるを思ふ、全くアルハンブラは伊國にバチカンの壯麗を見たる人をも驚かしむるに足る、一の小なる天井に三千の穹窿を作り、其の一々が色彩を異にし彫刻を別にせるが如き變化無盡の思ひあり、西洋の文明が之れに恩を負ふと誰れか無しと謂ふを得んや。

亞兒牢伯羅

回族王宮亞牢羅。遺墟累累倚山阿。殘工猶認神人技。西國文明所負多。

美人納涼の庭　回王の寵妃リンダラハと云ふ回族第一の美人が倚りたる窓猶ほ存せり、窓前に大理石を以て作りたる小池あり、氣候の頗る暑き地なれば、夏時には妃が足の先を之れに浸して涼を取りたりと云ふ、池水は今猶ほ淸きこと玉の如し、池の邊りに伽羅と云ふ樹あり、馥郁として香を放ち、胡蝶の來りて飛ぶを見る。

林　娥　窓

後宮零落膐伽羅。蛺蝶於今繞樹柯。池水不留佳麗影。香風牢牖想林娥。

（二十）

ヂプシイの山窟　西班に往く者ヂプシイを思はざるは無からん、ヂプシイは歐洲全體に漂泊する民にして猶太人の如く富まず、歌舞彈琴などして先から先へと流れ行く宿無しの種族なり、歐羅巴の文學にはヂプシイの事を記せる者甚だ多く、或は其男子の慓悍、女子の妖艶を說き、或は彼等の呑氣なる生活などを寫せり、西班は殆んど其本場とも云ふ可き地なれば、余も折あらば彼等を一見せんと思ひ居たるにアルハンブラより西南に見ゆる小山の半腹に白堊を以て塗りたりと覺ゆる白き

洞穴の數個あるを見、これがヂプシイの冬籠りする穴居なりと聞きたれば、自動車に乘り猶ほ巡査に保護を請ひて其所に到りたるに、ジプシイ等は珍客として余等を迎へ、(勿論錢を貰はん爲め)男はハアプと云ふ琴樣のものを彈じて且つ歌ひ、少女は袖を連ねて舞へり。

訪竺布氏其一

不知耕織不知工。歌舞彈琴西又東。山窟冬溫甘醉夢。憐他世上叩頭蟲。

ヂプシイの女　ヂプシイが何れの民族より出でたるやは種々の說あるも、一源より出でたるには非らざる者の如し、而かも彼等の顏は尤も多く東方の血を受けしと思しく、殊に其少女の中にはマレイ人かと思はるゝ者をも見受けたり。

其二

白堊窩中妙弄姿。翩翩舞罷笑嬉嬉。紅顏微帶南人黠。還似湖山雨亦奇。

(廿一)

ボルドウよりタラスコン　西斑よりの歸路は、サン、セバスチヤンよりアンダイヤに出で、ビアリツよりボルドウに至るまで佛國の西海岸を巡覽せり、ボルドウは米國兵の上陸地にして全市殆んど米國化せられたりと思はるゝほど米國の設備は其勢力と共に行屆けり、物賣る店の窓に『英語通

用す』（イングリシユ、スポークン）とある可きを『米語通用す』（アメリカン、スポークン）と記せるなどは土地の人が米人に媚るの一端を見る可きか、余は茲より再び南向し地中海岸に向へり、汽車タラスコンにて乘替の時間あるが爲め其町を見物せり、タラスコンは田舍の小都會なれども、ドーデーの小說にて有名の地なり、馬車を傭ひて市中を見物し、天主敎の祠堂に入りたるに、マドンナの像の前に、軍旗を持ちたる少女の像あり、何の爲めと案内者に問けば、戰爭四年の間、佛國到る處の敎會にて每夜ヂヤン、ダークの像に祈り國難を靖んず可きを願ひたりと云ふ、成るほどヂヤン、ダークは昔し外敵を一掃したる女傑なれども、之れに祈禱して靈驗あるや否、余は聊か佛國人の心理を怪みたり。

到多拉士根

慘雨悲風過幾春。戢兵何日濟斯民。怪他六尺强男子。泣爲邦家拜婦人。

地中海邊の桃花　三たび地中海邊を過るに今は到る處の山々に桃花咲き出で眉目を新にしたる觀あり。

三過地中海邊

家鄕入夢客程遐。三訪佛山伊水涯。好是風光不陳熟。靑螺到處插桃花。

（廿二）

再び巴里に歸る　四月に入り再び巴里に歸り來れり、此行南歐を經廻ると六千哩に垂んとす、巴里街頭の樹木は靑き芽を吹きて、間も無く新綠の時期の來らんとするを示せり。

再入巴里

行五千程經六旬。歐南都邑客衣塵。歸來却喜春將盡。花落風光特地新。

陽氣なる巴里　巴里の樣子の異なれるは更に甚しき者あり、陰氣なる人氣も頗る陽氣となり、夜間の滅燈なども大部分は舊に復せられ、戰捷と云ふ觀念に全市民の浮立てるを見たり、血戰四年に亘りたる事なれば其喜びの大なるは當然の所なれど、佛國に取りては實に高價なる戰捷には非ざるか、余は各地を巡り樣々の點より觀察して佛國の血管は既に硬化しつゝあるに非ざるかを疑ふ、然れども是れより以上の事は言はぬが花なるべし、余は先に省略したる巴里雜詠の中より更に左の二首を錄して玆に南歐游草の筆を擱す。

巴里雜詠其三

山河殺戮足犧牲。聶佩萊因進一兵。民手提書歡極泣。不知何處受降城。

其　四

凱旋休說國威新。吳越同亡事已陳。少女如花滿春殿。承恩總是異邦人。

筆路不支離。詞意極明暢。行議論。寓感慨處。自是當行本色。與尋常詩人。負然別其趣。此詩亦可以傳涙香先生也。

毅　拜　讀

狂　詩

内　田　更　石

黒岩氏は漢詩を嗜むと同じく狂詩も好きであつた、否狂詩の方が得意であつた。

狂詩眼の『はしがき』

眞木痴嚢子の編んだ『狂詩眼』の首端に左の如き文字がある、これが氏の狂詩に對する見解である。

詩歌の本意は其の時を諷ふに在り。時を諷ふには其の時其の世に解せらるゝ言語を以てするを正式とす。古より何の國に於ても詩歌に用ふる言語の時代と共に變遷するを以て知る可し。我が國に行はるゝ『詩』の如きも漢學盛なる時に在りて漢學者之を謳ふには漢語漢字を以てする可なり。漢學者ならざる者之を作るには今の時に解せらるゝ俗語を以てすること亦可ならずや。俗語を以てする詩は卽ち狂詩なり。『狂』字の適不適は余知らずと雖も因襲久しくして意旣に通ずるを以て必らずしも改むるを要せず。狂詩は俗詩なり。今の時に在りて今の時を諷ふべき詩たるなり。云々

明治二十九年の夏

昭代の一狂徒　　涙香

『狂詩戰』の發行

狂詩は一休和尚以來蜀山人、銅脈先生、風來山人、半可山人、方外道人の輩、出でゝ漸く其流行を來たし、明治年間に至りて成島柳北、石井南橋、源無水の三家が先達となりて手腕を振つたが其等の人々皆逝き、又た狂詩を載する風雅新誌、鳳鳴新誌、吾妻新誌の類孰れも廢刊し僅かに團々珍聞紙上に其餘喘を保ち居る時に際りて、突如として萬朝報社より『狂詩戰』なる小冊子を發賣した、同社に三木愛花、野崎左文、小林少女菴、中川無名、杉田碌郎、片山友仙等の同好ありしを機とし、氏の道樂が之を發刊せしめたのである、其初號(明治二十九年五月五日)に次の狂詩が載てゐる。

促諸狂友之和　　樂在

詩壇近見狂風煽。飛檄行遠如玉霰。醉字曾分月地樓。飲仙屢會雲街宴。親踈無禮可偕遊。平仄有規雖妄變。今日幸遭斯誌生。思吾矣者皆來戰。

『樂在』は氏の狂名である、待ちに待つた諸友は得たりや應と次韵を疊みかけた、是れより先、狂詩家連中が築地の柳花苑、出雲街の北川樓等に相會し『飲中八仙歌』の次韵を闘はしたる因みに、其會を『飲仙會』と名づけた事がある。此狂詩戰が動機となり、今迄鳴りを鎭めて居た梅痴老漁、玩球少

年、凮外老人、逸鹿老樵、痴嚢子、夢春居士、骨皮道人等顯はれ出で、新たに運神入道、鷲金公子、烏玉先生、軟々俳仙、叱劍狂客、菊井町人、黒樂天、臥天仙史等加はり來たりて大に狂運が勃興した、これは全く『狂詩戰』發行の効果であつた。(同誌は二十六號迄發行せり)

狂詩の諸作

氏は進んで諸家の詩を品評したが自から作るとは餘り多くはなかつた、ズット昔『東京新誌』紙上へ『新富邊人』の名を以て芳原遊興の長篇を寄せたことがあつた、『狂詩戰』以後に於ては一度覃韵の律を二十餘疊續けたのは有名な話である。

角觝　次韵

芝居付レ鼻不ニ餘香一。櫓太皷音嬉響レ腸。裸百貫優千兩藝。登場未レ假粉脂粧。

商人歎　次韵

八方伸手若ニ成飛一。目算難レ那每々違。仕入品重ニ來利一貴。賣揚儲引ニ去元一微。減レ人爲恐ニ暖簾寂一。張レ表只令ニ看板輝一。時偶客來多ニ素見一。三々見倒不レ沽歸。

自宅晩酌　疊韵

女房取レ酌旁々煽。氣合涼敷優ゝ嚙レ莜。初悟世間頭割遊。不レ如ニ家内膝交宴一。庭望ニ隣樹一景尤宜。酒

飲何樓味無變。醉出緣端謠昇歌。吊軒葱草夕風戰。

歌　牌　應天爵先生挑戰四疊韵

目注歌牌與正酣。讀聲終處競先探。霜當心取置窓菊。露作汗濡刈穗庵。一句取違前與後。全軍入亂北還南。事雖遊戲難油斷。推膝女迎握手男。

出　京　辭　同　五疊韵

聞說東京詩戰酣。上來一欲目親探。多年窮鼠空籠穴。今日臥龍初出庵。聊悟人情輕與重。未知方角北耶南。狂壇若別無差問。請入如余田舍男。

向島夏景　同　十四疊韵

隅田花散夏方酣。櫻葉許青誰有探。名爲餅傳長命寺。跡共酒絕小倉菴。首垂眠氣筑波北。肌晒署相富士南。雜沓雖繁非是客。通勤紡績女兼男。

記　事　用下東坡次韵王鞏獨眠韵上（每句韵）

利根川溢決六木。水瀰四方漂米粟。自群馬茨城埼玉。延至千葉松戶宿。一體平武藏野續。大雨連日流車軸。東京自向島佐竹。以北田々無點綠。

少女花曰。實況。地名之斡旋殊妙。愛花曰。詩調滔々如決堤。

元日

月日如レ流歳漸旋。幾人沈込借金淵。先生既絕龍門志。碌碌然迎六六年。

明治三十年二月二十日萬朝報社員、少女庵、棋隱外數氏を作ひ雪中杉田看梅を試みし時の聯句（疊韻）は左の通りである。

花開山角未レ全凋（樂在）日當良邊雪半消。誰對二珠簾一思二句唸一。（少女）恥書短冊挂レ枝飄。吹來吹去門前犬。（棋隱）笑送笑迎廓口猫。今夜一同欲二何泊一（樂）氣懸皆樣丈夫腰。（少）

其 二

諸君顏似二漬梅凋一。（少）用意金將レ與二雪消一。海向二晚方一波益穩。（棋）船離二淺瀨一帆初飄。大頭皿目窺二生蛤一（樂）少女懸レ聲學二媚猫一。可レ感七人豪傑達。奈二斯勃々屈强腰一。（棋）

後日更に左の二疊韻有り。

雪後同二諸仙一看二梅于杉田一

尙見花顏少不レ凋。雪從二妙法寺邊一消。住持內職緣臺列。宗匠名吟短冊飄。底事赤髯驅二込馬一。憎哉白鼠伴二來猫一。香爐峰趣珠簾樣。不レ及レ令レ搖二淸女腰一。

色 慾 篇

控赤與鴉顏忽凋。挽回法別有吹消。娛髯換貫石頻減。取眷水天桐必飄。自昔大石多跨馬。于今小判恒添猫。看來花合修羅道。女狙懷中男狙腰。

入道曰。色卽是空。空卽是損。

水天大將曰。前半非樂在不能言。

飮仙會席上似玩球詞兄　當時玩球自臺灣歸來

一別以來迄只今。不致留守中御尋。實以無申譯次第。兎也角也作掛心。何扨結構土產物。生蕃織物與砂金。被下事乎思之外。更無沙汰又無音。今日爲罰思存分。令醉令醉承名吟。

玩球曰。語路宛轉。叙妙竹林文句。狂詩上乘。風來避三舍。

愛犬家としての涙香先生

小野鍾山

私が初めて上京し、石山家塾の一人となつた翌年の、明治三十五年であつたか、理想團の設立に際して、率先して同志と團員に加入し、爾來公會の席上に、涙香先生の溫容を拜したことは、屢次であつたが、當時私は短褐破帽白面の一書生、未だ先生に親しく拜晤するの機を得ずに居た。然るに明治

四十四年の春、私が同志と闘犬倶樂部を組織して、愛犬の氣風、將に天下に盛んならんとする頃、偶然、萬朝の伊藤記者によつて、涙香先生に紹介された。爾來開會毎に、先生は熱心な參觀者として來會され、闘犬に就ての仔細の研究を遂げられ、忽ちにして斯界の通人となられたのである。而して當時日本第一の名を專にし、東西に敵なきまでの名犬『太刀山號』を愛養さるゝに至つて、先生の闘犬趣味は、實に深くなられた。私共の忘るゝことの出來ぬ、闘犬禁止令が發布さるゝや、先生は同志に率先して、時の首相大隈侯を動かして、警視廳との間に、禁止令の緩和策を講じられたのである。

若し此時先生の御盡力がなかりせば、闘犬界は、單に土佐のみのものとなり、東京の同志は、全く一大清樂を奪ひ去られたのであらうが、幸ひに先生の御蔭で、今日尙ほ闘犬界は依然として、隆盛なのは、全く先生の賜である。當時先生が幾度か、貴重の紙面に椽大の筆を揮はれて、人生の趣味上より見たる闘犬趣味を高調せられたことに就ては、私共愛犬家一同は心からなる感謝を禁ずることは出來ぬのである。思ふに先生の徹頭徹尾、何事でも成し遂げずに置かぬ、不撓不屈の精神と、堂々乎として奮闘し、毫も卑怯未練なき行動とが、宛も闘犬の勇敢なる氣分と其男性的なる闘技とに、能く迎合したものと思はれる。先生は、常に闘犬の精神的方面に、重きを措いて批判され、徹頭徹尾、技それ自身よりも、斃れても尙ほ敵を攻撃せんとする武者振りを愛せられたのであつた。故に彼のショッ

キリ角力的の鬪技は、殆んど見るに足らぬものとされた。是れ實に解人の見にて、世人の輕佻浮薄を慨するの意も、亦此間の消息にて窺知せらるゝのである。『卽ち勝敗の數は意に介するに足らず、唯夫れ全身全力を擧げて奮鬪すれば足る。鬪犬の眞實の興味は、此間に存するものなり』と、屢次語られたところであつた。今や內外多事の時に方り、一世の硬骨、一世の俠人、淚香先生の去つて在らざるは、邦家の爲めに心寂しき限りである。終りに私は、先生の鬪犬に對する趣味的硏究の一面を明かにするために、次の一篇を揭げて、永遠に傳へたいと思ふ。

次に示す一篇は、先生が自ら執筆し、當時の警視總監へ贈られたる陳述書である、この一篇によつて先生の愛犬趣味の神髓を察知することができる。

鬪犬禁止令に關して警視總監に送りし陳述書

拜啓本年七月二十六日警視廳令第十號を以て鬪犬、鬪鷄、鬪牛を禁止せられし件に付き、恐れながら閣下の賢察を願ひ度き儀有之、左に陳述致候。但し小生は鬪鷄、鬪牛の事には知る所無之、專ら鬪犬に就て申述ぶ可く候、御繁忙の際ながら御一讀被下候はゞ幸甚に御坐候。

警視廳令第十號には鬪犬を爲したる者、又は之を爲すの目的を以て集合したる者は拘留又は科料に處すと有之、全く無條件に禁止したると同樣にして寧ろ個人の自由を束縛する過酷の政令に非ざ

るやを疑はしめ候、畢竟は闘犬を餘程の有害なる事柄と認められたるに因る事と存候、之に就き御應係官の說の如く、新聞紙に散見する所に由れば、慘酷とか博奕の因を爲す虞ありとか云ふ如き理由にて風俗を害する者と見做されたるやに相考へ候、併し斯かる事は今日東京に於ける所謂闘犬の實狀を深く究めざるに出づる杞憂過慮と存じ候、其理は左の條々に明白なる可く候。

（一）闘犬の性質

申す迄も無く犬には種々の氣質之れ有り、其中の特殊なる性質をば、人爲淘汰に依り、特に發達せしむるが爲めに、獵犬、番犬、闘犬等の區別を生じ候、其等の特性が特別に發達して比肩し得ざる迄に至りたるを一定の種族とは認むる儀に御坐候、此見地より申せば英國には、マスチフ、ブル、又はブルテリヤ等の闘犬あり、孰れも犬族中に於ける世界的の名種に認定せられ候、此中にてブルの如きは死ぬる迄戰ふの氣を有し、制止せざれば通例身體の動かざる迄戰ひ候、目下我國にて愛玩せらるゝは多く土佐產、秋田產にして、此中の秋田產は我國に將に絕えんとして僅に存する純日本種の特に巨大强猛なる者に之有り、よしや世界的名種と云ふには足らずとしても、日本犬の名種にして最も珍重すべき者たるは勿論の儀に御坐候、更に土佐犬に至りては同國に凡そ二百年前より犬を闘はしむる習俗之有候由にて其永き年月間、人爲淘汰の手段を盡して、改良に改良を加へたる者にし

て、更に明治年代に入り、英國のマスチフ、其他の名種を混血し、其の闘犬たる資格に於て今の世界に冠絶する迄に至り、猶ほ追々に前進する期中に之れ有り、世界が日本產闘犬の名を嘆美し又其雄姿と美觀とを愛玩するに至るは遠きに在るまじくと相考へ候、或は斯迄に到らずとするも旣に玆まで進み來りたる者なれば此上多少の努力を以て斯迄にも至らしめ度くと存ぜられ候。

(二)闘犬の實行は慘酷に非ず

今の闘犬方法は、殘忍なる闘犬方法とは同じからず、殘忍の觀を呈するに至らざる內に、早くも勝負有りと認め、一番の終りと致し候、其勝負の標準は、第一少しにても悲鳴を發する場合、第二尾を垂れたる場合、第三怒聲以外の哮聲を發したる場合、第四敵犬に對して牙を露出したる場合、第五視線が敵犬の身體以外へ散じたる場合(是は逃路を求めんとする兆候)第六一歩にても自ら逃げたる場合等を總て敗戰と致し候故、實際慘酷なるまで闘はしむることは殆んど無之候、啻に之のみに非ず、犬を闘はしむる目的が自ら慘酷に至るを相防ぎ候。

(三)闘犬の目的

闘犬の目的は、飼主に於て愛玩心の爲めに我が犬の眞價を知り度しと希望し、猶ほ出來得べくば其眞價を向上せしめ度しと云ふに在り、故に似寄りたる體格の犬ありと見れば、之と比較して優劣

を得んと欲するに外ならず候、通例闘犬の會をば品評會と稱するは決して過言に非ず全く實を得たる名稱に御坐候、唯だ其本來が闘犬たるが爲めに優劣を判するは闘はしむる外無之、之が爲めに柵を結び柵内に於て相闘はしめ候とも、單に優劣の差が看取さるゝ丈けの形跡あらば直ちに引分け候、孰れの飼主とても、我が愛犬が慘酷に敗北するを好まず、又明白に敗者と判定せらるゝをも好まず候爲め、些少たりとも優劣の認む可き點あらば、直ちに引分くる事に滿足を表し候、中には繋がれたるまゝ對面せしむるのみにして實際に少しも闘はしめず、唯だ敵に向ふ態度や怒聲の發し具合や、沈着の程度や、猛然進まんとする勇壯なる有樣や、前進の牽引力などを驗するのみにて引分くるも多く有之候、是れ即ち闘犬實行の目的が全く品評のみに之れ有ることを證明するに足る可く候。

（四）慘酷なる如く視ゆるは見損じなり

唯だ闘犬の歸路などにて血に塗れたる姿を見受る如き場合に、甚しく慘酷の感を爲すと有之可く候、勿論闘はす爲め出血する事は之有りとも、畢竟闘の終りたる後に血痕を拂拭せずに連歸る程の淺傷なる爲め手當を怠るにて候、出血は或る部分（例せば其の尖端等の如き）に於て傷の輕微に似合はず存外甚しき事も有り、又傷甚しきに血の少き所も有り、血の附きたる儘にて牽行くが如きと無らしむれば、殘酷の形蹟は消滅致す可く又斯かる注意は飼主に於て極めて容易の事に御坐候。

（五）闘犬は博奕に非ず

闘犬を博奕の因と視做すは一應尤もらしくも思はれ候へども上記の如く今の闘犬は實際の勝負に至らず、唯だ見巧者なる審判者の目にのみ判せらるゝ或る特徴にて引分と爲る場合多き爲め、博奕の因たると殆んど無之候、角力や闘鷄などは、往々にして博奕の因たるやに聞及び候へども、闘犬場（品評會）には嘗て博奕の目的を以て入込みたる者あるを聞及ばず、又入場の上博奕心を誘發せられたる如き人あるを見受けず、斯かることは全く實際の事實如何に在り理論にて決す可きに非ざれば、實際に博奕の因と爲りたる實例の甚だ少なき以上は、博奕の因たる可しとの理由を以て禁止す可き謂れの者に無之と存じ候。

（六）動物中最も愛護さるゝ一は闘犬なり

闘犬は苦心を重ねたる人爲淘汰にて産出せらるゝ者なれば、之を得ると容易ならず、其の尤物を入手する爲めには巨大の費を要し候、左れば飼主が之を愛護するは至れり盡せりの有樣に有之、苟くも慘酷に類する扱ひの有るとは、飼主の忍び得ざる所に御坐候、食糧、醫藥、起臥、運動等尤も犬の發達と壯健とを助長する程度に注意し、殆んど半日の懈怠も無之有樣に御坐候、然るに其品評の唯一手段たる闘ひが無條件に禁ぜらるゝに至らば其犬の發達は止まり、右の如き愛護も廢せらる可く

候、小生自らは日本に於て動物愛護主義の最も早き時期に屬する主唱者の一人なるも闘犬を行ふことを其犬に對する愛護の一手段と認むるに躊躇致さず候。

（七）闘犬は闘はざれば發育し難し

永き年月の淘汰にて其奮闘性を養成したるが爲め、總て闘犬は闘ひを好むと甚しく、年々幾回か闘はしめざれば或は衰へ或は病と爲るを免れず候、然らざるも、愛觀犬の一條件たる立派なる發育は遂げ得ず候、頰骨の逞ましく隆起するが如き、前足の筋骨の怒張して獅子の姿勢を呈するが如き、總て闘ひの爲めに生ずる特殊の發育にして、若し之れ無くば、次第に他の駄犬の形に落ち名犬名種の價値を發展せずに止む可く候、殊に闘ひ其者が象徵する力の如きは闘はしめざる犬に充分有する者に無之候、何事も力を本とし力を崇美する今の世界に、獨り我國のみが力の象徵の一にも數ふ可き闘犬をして其の天與の力性を遂げしめず、嚴禁して之を衰へしむるは或意味に於て却て虐待とも解せられざるに非ず候。

（一八）最良闘犬は最良番犬なり

犬は天然に番犬たるの資格を有する者なる可く、闘犬とても夜中特に家を守り、注意して足音を吠ゆるの癖を失はず候、殊に其吠聲は筋力の發達と共に發達し、夜間の來襲者をして膽氣先づ落ちし

むるに足り候、殊に強き鬪犬を飼へりとの評判が盜賊の侵入を防ぎ候事實は鬪犬飼養者の皆自ら感知する所に有之候、左すれば鬪犬の流行は番犬以外に幾分暗に警察の役にも立ちつゝありと申す可く候。

（九）趣味は導く可し禁ず可からず

人間が何れの場合にも趣味を趁ひて趨ることを免れざる以上は、趣味を禁ずることは難く、成る可く惡趣味を良趣味に、不健全なる趣味を健全なる趣味に善導するが社會全部を健全にする手段なる可く候、鬪犬を飼養する趣味の如きは、之を禁遏すること甚だ難く、强て嚴禁せば人を罪人たらしむるに至るの實例は高知縣に有之と聞及び候、同縣は明治の初以來常に嚴禁政策を執りたるも遂に其目的を達せず、徒らに罪人を作るに止まるの實驗を得たるが爲めに、特別の稅を課して鬪犬を許すに至り、今や鬪犬は同縣下の一產物たらんとする途に立到り候、最初より鬪犬の流行せざる地方は別とし、東京の如く既に鬪犬の趣味が解せられ初めたる所に於ては、嚴禁政策よりも利導政策を取らるゝこと實際に賢明なる道なる可きかと愚考致し候。

（十）鬪犬の趣味は健全なり

鬪犬を愛育する習俗は決して不健全なる者に之れ有るまじく候、鬪犬飼養の第一必要事は之を牽

きて歩行せしむるに在り、闘犬飼養者は之れが爲めに知らず〳〵戸外に運動す、又人を雇ふて闘犬の世話を一任する人と雖も、閑時は闘犬の爲めを計るに心と時とを傾け、其れだけ他の趣味に趨く餘裕無きに至る、思ふに此趣味の爲めに他の之れよりも劣等又は卑猥なる趣味が廢棄せらるゝは實際必有の事と存候。

闘犬が既に斯くの如き者たる以上は無條件に禁ず可き者に無之、或は禁止の必要明白なりとするも何等かの條件を附して闘犬愛育家に愛育の餘地を與ふ可き者と存候、闘ふことを禁ずるは、闘犬家として闘犬愛育の手段を失はしむる者に御坐候、獵犬は獵を爲さゞれば犬其者の長所を失ひ、愛育者の動機を失ふ如く、闘犬は闘はしめざれば犬其者の長所を失ひ、愛育者をして愛育の心を失はしむ可く候。

（十一）如何にせば可なるか

闘犬を取締る手心の幾分か寛大ならんことを願ふが此書の主意にて候、成る可くは親しく闘犬を飼養せる者、即ち闘犬の持主が闘犬品評の爲めに倶樂部を設け、少しも倶樂部員以外の人を入れしめずして、公衆の目に觸れざる、離れたる地所に於て、品評の目的の爲めに闘犬することを寛大に視ると、別言すれば、闘犬を（一）興行的の娯樂とせず、（二）博奕の因たらしめず、（三）慘酷に類する闘

に陷らしめず、(四)住所姓名身分職業等の明白なる持主のみの品評の目的を達すべき範圍を越えしめず、斯かる條件の下に幾分取締の精神を寬大にし該令第一條に『但、闘犬の飼主等公衆の目に觸れざる地域に於て相當の比較品評を行ふは此限に非ず』と云ふが如き旨を附加せられんことを望む。
今や世界の大部分が大なる戰爭に從事し日々幾多の流血を漂はしめ、世界擧て力の福音に歸向せる際なるに、特に闘犬の爲めに禁法を發し、無條件に禁止手段を取るが如きは啻に民人の自由を冒すの嫌を免れざるのみに非ず、或は心の程度を越るの譏無きを得んや、小生は實際闘犬の飼主として多少の事實を知れるが爲めに、謹んで閣下の賢明に訴ふる次第に御坐候、何分の御斟酌被下候はゞ幸甚に御坐候、文字甚だ體を缺く段御宥恕被成下度候　頓首

大正五年七年二日

東京市麻布區笄町一七四
東京府士族
職業　新聞記者　黑　岩　周　六

警視總監殿

黑岩先生と角力

三木愛花

先生の郷國は角力の盛んに行はるゝ土地でありまして、宮角力の團體も澤山あります處からして大阪、東京の力士中に土佐出身の力士も少なからずありまして、大關幕內等も十指を數へる程でありま す、即ち東京の友綱を始め八幡山、國見山、海山(二代目)土州山、矢筈山、鏡川、加勝山など人の知る處であります、然れば先生も始めから角力がお好きであつたことゝ思ひますが、私が知つて先生の力士を愛した起りは明治廿六年の頃からであります、其頃東京の角力界は高砂の勢力時代でありまして、其部屋に大關以下幕の內が十人位もありまして一方を占領して居りますのみならず、高砂の勢力が強いので對手方は常に壓迫されて居る狀況でありました、然るに先生は強いものを挫ぎ、弱い方を援けると云ふ氣象であつた上に、其壓迫されて居る方は鄉里を同ふする友綱に屬する方でありましたから、先生は勢ひ高砂一門に對して好感を持つ譯にまゐりません、併し土俵の上の爭ひでありますから、誰か強い力士が出て高砂方を負かさなくては溜飲を下げることが出來ませんで少なからず口惜がつて居りました處、明治二十六年の一月場所に西方の大關ヽ戸平(初代)が初日に大碇と預りを取つたのみで

二日目より連戰連勝して先づ高砂部屋の關脇朝潮（初代）以下今泉、千年川其他を倒して八日目に大關小錦を、九日目に横綱西の海（初代）を負しましたので、先生は大に大戸平を賞賛しまして始めて我意を得たりと喜びました、大戸平は仙臺出身でありまして土佐ではありませんが、此時からして之れを唯一のひいき力士として後日までも援助いたすやうになつたのであります、尤も大戸平は私が角力を知つてから三十何年中に於ける力士中の第一人物でありますから、單に角力が強よかつたのと友綱方の仇を取つて高砂方を挫いたと云ふ點ばかりでなく、其人物を愛して益々深く關係を結んだのであります、私も同時に大戸平を知つて其歿年まで交際しましたが膽力があり義侠心があり、それで風雅の心もありましたから最も先生の氣に投じたのであります。

斯くして大戸平を愛して居る中に明治二十九年の一月に其初日に力士間に一大紛擾が起りまして、數日間休場いたした結果、協會に大改革を實行し、申合規則七十條を設けたと云ふ騒ぎがありました、之れは當時の西方たる大關大戸平が主となつて東方の高砂一門に對抗し協會の改革と同時に取締高砂の權力を殺がんとするの企てゞありました、其要求書の中には『我々は不正なる取締の配下にあるを潔とせず』と云ふ如き猛烈のものもありました、當時の取締は高砂、雷の二人ではありますが、雷は何等の勢力もなく高砂の一人天下でありますから此に取締と云ふのは高砂一人を指したのと同様であ

ります、而して此大戸平の蹶起のために角力道は漸く改革の曙光を開いたのでありますから、先生は一層大戸平を愛するに至つたのでありますが、此時に大戸平が協會へ出した改革意見書は實は先生が執筆されたものであつたと想像される點があります。

其翌年には大戸平は病氣のため成績は不十分でありましたが、大戸平の弟子の荒岩が頭角を顯はしまして、初日に小錦を破つたので先生は並せて荒岩を愛することゝなりました、此外に大戸平の門下に大砲がありましたが大砲は角力も下手で人物も不得要領でありましたから深くは愛しませんが兎も角大戸平一門から此二力士が出たのは大に先生の意を強くしたのでありまして、爾來大戸平と荒岩の爲めには何ものも惜まずと云ふ程でありましたが、此に一層荒岩を愛する事になつたのは明治三十三年に荒岩が常陸山を破つた時からであります。

三十三年五月には大戸平は既に隱退後で、大砲が張出し大關、東西の關脇が常陸山と荒岩でありまして、其九日目に顏が合ひました、常陸山は大砲と引分けた外は七日間勝ち荒岩は八日まで勝ち放ちであります、特に當時常陸山の勢ひと云ふものは無敵將軍と云はるゝ程で凡そ三四場所と云ふものは只海山に負けただけで、梅ヶ谷を二度も敗り、特に前日に梅ヶ谷に勝つたばかりの人氣隆々たる時でありましたから、荒岩が之に勝てば非常の手柄であります、然るを荒岩が美事に常陸山を土俵外へ寄

り出したので場中の喝采は勿論、先生の喜びは言語に盡しきれぬ程でありました、是に於て先生は閉場と同時に荒岩を主として其師尾車（即ち先きの大戸平）外數人の力士を藥研堀の大又へ呼びて祝宴を開く事に致しますと、同じ西方のひいき客であつた正面棧敷の幾人が萬歳々々と叫びつゝ宴會に加はつて盛大なる祝宴となりましたが、其時の人々で私の記憶に殘つて居りますのは先生の外に原亮一郎（金港堂主人）瀧某（大阪の會社員）井上藤太郎（横濱の運輸業者）江原節（宇都宮の縣會議員）近藤一參（都新聞賣捌主任）等へ私も加はりましたが此外にも數人あつたやうでしたが一時的の人は忘れました又此時に呼ばれて來た力士は悉く西方の幕内で荒岩の外に梅ケ谷、大砲、國見山、海山、黑瀨川、玉椿など十數人でありましたが、其頃太刀山は番附順に座つて最末席で始めて斯う云ふ席へ出たと云ふ樣子で、小さくなつて居たのでありました、宴酣なるに及んで年寄も力士も客人も藝妓も悉く立つて角力甚句を踊りましたが、太刀山だけは踊れないと云つて隅に隠れて居たのでありましたが、此太刀山が幾程もなく大關に昇つて主席に泰然と控へるやうになつたのは後日の話でありますが自他ともに感慨無量でありました。

斯くて一同歡を盡しまして最後には全員が圓形になり各自手に手に音のするものを持ち、或ひは太鼓、或ひは銅器を叩き、又はビールの瓶を喇叭のやうに吹き立てなどして全然小供のやうになつてグ

ルグル廻りながら萬歳々々と叫びますと、藝者は其圓形の眞中に座つて萬歳に合せて三絃を搔き鳴すと云ふ騷ぎで、今から見ると否他から見ると其時でも狂人の寄り合ひと思はれた程でありましたが、何れも喜びに滿ちて人の笑ふのも金の懸るゝ事も一切打ち忘れてしまつたのでありました、其時の決議は每場所の初日と九日目(當時幕内は九日目が最終日でしたから)に開會して力士を奬勵慰勞し全勝力士には化粧廻しを贈るなどと云ふのが大略でありましたが、會名は其まゝ『萬歳會』と稱しました、現今力士後援會が澤山ありますが其元祖は此『萬歳會』であります。

此會は追々加入者もありまして每會西方の取締、檢査役、幕内力士の全部及び立て行司を招き、藝者も成るべく西方びいきのもの十數人を招きました、之れがため主催者は僅か十八内外でありましても年寄、力士、行司、藝妓等を數へますと凡そ四五十人の大連でありますから、大又の二階は拔けるやうな騷ぎであります、其後誰が云ひ出しましたか西方の力士へのみ全勝廻しを贈るのでは力士奬勵の名目が立たぬから全勝廻しは東西を論ぜずと致すことに致さうと云ふ決議となりまして常陸山にも二回(横綱ゆゑ三枚づゝ)贈り、其時に常陸山も特に大又へ招ひて座敷で横綱土俵入りの型を演ぜさせた事などもありました、又會員は揃ひの衣類、帶まで西陣へ注文したと云ふ程の昇ぼせ騷ぎてありましたから、其の入費と云ふものも莫大であります、年寄力士全部の膳部や祝儀だけでも想ひやられます

から、若し之れを今日でやつたらば一會に數千圓に上つた事と考へられます、併し當時は今ほどに物價が高くありませんから發企人側では苦にも致しませんが、中途から加はつた連中は一二回で驚ひて脫會したものもありました、今私の記憶して居る處で此會に一度でも出席した人々は左の通りであります。

黑岩　周六　原　亮一郎　瀧　某　井上藤太郎　刀根福太郎　佐久間福太郎

江　原　節　土屋　醫師　山下龜三郎　三木　貞一　近藤　一參

其他丁酉銀行の某氏、山龍堂病院の某氏外數人ありましたが其名を失念いたしました、板垣伯も一回賓客として出席された事がありました。

年寄では初代雷、友綱、尾車、武藏川、關の戸、浦風などは覺えて居りますが其他は忘れました、二代目高砂も一度出席しましたが之は東方の常陸山、稻川等を呼んだ時でありましたが、力士は前に記した外に後に追々幕の內となつて顏を出しましたのに土州山、鏡川、鬼龍山、大崎、藤見岳、鳳などは覺えて居りますが其他は忘れました。

此會は凡そ五六年以上も續きましたが其中に病氣や事業の蹉躓で缺席者が殖ゑ、力士も亦新陳交替して創立當時の大砲、國見山、海山其他も廢業したので自然に下た火になりました、處へ明治四十二

年には荒岩が退隱して花籠となつたので一層氣勢が挫けました、畢竟は此會は荒岩の常陸山に勝つたのに始り、先生が主動者でありますから荒岩が廢業して見ると先生も張り合ひが拔けたやうなもので、終ひに其頭を以て此會を解散する事になりました、因みに此會の存在中全勝化粧廻を贈つた力士は左の通りであります。

荒岩二回、常陸山二回、國見山一回、太刀山一回、梅ケ谷一回（梅ケ谷は全勝でありませんが常陸山と同時に横綱となつた時祝ひとして三枚一組を贈つたでのありました）

斯くて萬歲會は解散しましたが先生の尾車と花籠を愛する念は尙ほ已み難きものがありまして、再び主となつて『尾車會』を興す事に致しました、『尾車會』と申しても此中に花籠も含まれて居たのでありまして、此兩部屋の力士を奬勵するのが主意であります、此會は專ら尾車一家のひいき家でありまして主唱者は先生を始めとして値賀海軍大佐、近藤一參の三氏で私と伊藤繁太郎氏とは專ら事務を取扱ひました、加入者も前後數人ありましたが中途で退會した者が多く一々は記憶いたしません、而して先生は其會長と云ふ名目でありました。

此會は尾車、花籠の兩部屋力士に於て新たに十兩に入りたるものはメ込み料を、幕內及び三役に入りたる者には化粧廻しを贈り、又每場所の初日と千秋樂の日に開會し力士を奬勵して其勝ち越したる力

士には給金の増額に準じて賞金を與へると云ふのが大體であります、又會員を二種に分ち毎場所に前記の諸費を分擔するものを本會員とし、單に總見に加はる者を普通會員とし、當日の觀角料を徴するだけに止めましたが、千秋樂の尾車會には同部屋にて園遊會を催ほし、普通會員をも無料で饗應するなど此會も相當に支出が多かつたのでありましたが、先生は主として尾車、花籠の爲めに盡力いたしました。

然るに不幸にして尾車が胃癌にかゝり終ひには死去いたしましたので、再び先生の好角熱を減殺する事情に陷りまして此會も次第に不振の形となりましたが、それでも二年ばかりは尾車の後繼者金の花を助けて前記の條件を履行しましたが、如何せん尾車部屋の力士は全部峰崎の部屋に預かられ、花籠部屋と云つても幕の內力士は一人も無きほどでありましたから、此會を續行する張り合ひも無くなつてしまひましたので、先生の洋行する前に此會をも解散するの已むを得ざるに至りました。

先生が尤も愛した尾車は死し、荒岩の廢業後には金の花の外に力士らしき力士も無く、三杉磯があつても峰崎部屋に居て餘り先生には近きませんでしたから先生の晩年は大に角力熱が低くなりましたのみならず、先生も健康不十分のために角力を見ることを醫師から諫止されたやうな話もありましたから、尾車會の解散と共に先生の角力見物も稀れとなりまして萬歲會時代の事も一場の夢物語となり

了りました。

先生の角力に於けるは始めは先代大戸平に出で、後は荒岩に終つたと云ふも可なるものでありまして、大戸平の尾車先づ歿しして其部屋から出た大砲の待乳山が次で歿し、先生が大學病院に在つて重患を傳へられた時に於て荒岩の花籠が急に死して先生のために黃泉の露拂ひとなりました如きは誠に因緣の深くして感傷の至りに堪へぬものであります。

先生が荒岩を愛した例は無數にありますが、其一例を申しますと荒岩の全盛時代でありまして平凡の敵に對場いたしました時でも先生は非常に心配して棧敷に居て傍らの私に向ひ『どうも危いやうですが君はどう思ひます』と尋ねられますので私が『ナーニあんなものは一と揃ひで問題になりません』と答へましても『ナニさうは思へない、心配で胸がドキ〳〵する』と云ひつゝ心氣を靜めて默々としておゐでになつた程であります、然れば大敵との立合ひとなると先生は到底見て居られないと申されまして瞑目直座して其角力を見ずに勝負の了るのを待つておゐでなさる程でありました、其代り荒岩が勝つと私の帽子までも手當り次第に土俵へ投げてお喜びになつたのであります。

又荒岩を子のやうに思ひまして、宴會の席で角力甚句が始まつて大勢の力士が一樣に踊りましても先生は單に荒岩にのみ目を注いて其踊ぶりを見て喜んでおゐでゝありました、又數百圓もした時計な

ども荒岩に望まれて直ちに與へた事などもあります、然れば荒岩に與へた金品も少なからぬ事と察せられますが、之れ等は一々私には分りません、又荒岩が弄花事件で大阪で裁判のあつた時などは、態態東京から鹽谷辯護士を頼んで行つてもらつた事などもあります、此の外種々のお話もありませうか、私のは大體の筋だけのお話であります。

黒岩先生と球突

三木愛花

先生は競技上に關しては何事にも趣味をお持ちですから、球突にも一廉の腕をお持ちでした、但し先生が球突に指を染めたのは比較的後年に屬するのでありまして、卽ち萬朝報が發刊後の一年餘りの後でありました、其頃萬朝報で相馬事件と云ふのを盛んに書きましたので其筋から三回ばかり發行停止を命ぜられました、而して第一回が三週間、第二回が一週間、第三回が一週間と云ふやうに期間が長かつたので此間に先生が始めて球突を試むることになつたのであります。

其動機は其頃數寄屋橋外に鹽瀬と云ふ菓子舗がありましたが、其家の主人仁木と云ふのが副業として隣家に球突場を開いて居ました、此仁木と私は以前から知合でありましたので私は時々其球突場へ

遊びに行き球を突いて居ましたが新聞の停止中は閑暇でありますから自然度々遊びに行きましたので其事を聞いた先生は自分も閑暇だから一つ稽古して見やうと云ふので或る晩に私が御案内して鹽瀬へ參りました。然るに何事にも趣味を持つ先生は忽ち之がお氣に入つて毎日お出かけなさるやうになりました、尤も當時先生の御住居が鹽瀬と二町計り隔つて居た位でありましたから、自然足繁くお出かけになつたのでありませう。

先生は非常に熱心に研究的にお遣りになつたので、ズン／＼手腕が上達いたしまして、程なく一人前となりましたので一層趣味が深く進んで、其頃同家へ來る岩谷松平や、花王石鹼の主人などと對等で突くやうになりました、此二人などは既に數年間やつて居たのでありますが先生は一年に足らずして之れに追ひつひたのであります。

元來先生は競技上に趣味を持ち自から之を研究するばかりでなく、其鼓吹に盡力なさるのでありますから此球突にも後援の力を盡しまして、毎月各球戯場を順番に會場として競技會を開きました、此會は球戯場の主人や、お客を以て組織したのでありまして一時盛大にやりました、而して其費用や賞品につきては勿論先生が補助をしたのでありました、且つ其景況や勝者の點數を萬朝報に掲げて大に鼓吹したのでありました。

此頃先生が最もお持前の氣象を發揮したのは鹽瀨の主人仁木と一萬と云ふ大勝負を始めたのでありました、當時はまだ三ッ玉の流行が普及されません頃でしたから、四ッ玉でありましたから互ひに寄せ玉などはやりませんで多くはコシンを廻して取るのですから從つて突くのに骨が折れます、且つ當時先生の手腕は百を一ゲームとして居たのを其百倍の一萬ですから凡そ四五日を要しました、之れは勝敗よりも研究的のお考へと一つには仁木に對してどの位のものであるかと云ふ事を自から試みられたのでありませう、其勝負は結局先生の敗戰に了りましたが、第一は仁木はモー五六年もやつて居るので、一生懸命になれば自から先生より澤山當るのでありました、第二は仁木の方は負けては四五日お合手をして一文にもなりませんから勢ひ熱心になる譯でありますが、之れに反し先生は向ふを負かしては商賣になるまいから氣の毒だと云ふ引け氣があつた事と思はれます。

其後先生は益々熱心にやつてお強くもなりましたが、仁木が商法に失敗して閉店したので其後は日吉亭や日勝亭へお出でになり、此で玉乃などと云ふ連中と戰つたので愈々本ものになられ、大々的の紳士會を組織し懸賞競技會を度々催されましたが、私は其頃は親戚の千代田軒へ參りますので、先生の隨行を致しませんでしたから、日勝亭以後の事はその當時先生に接近してゐた球客の記憶を聞くの外はありませんが、結局先生の持玉は三百と云ふ素人では有數の手腕となられたのであります。

聯珠の創設者

内田更石

古來『五目並』なる遊戲は市井の一隅に屛息して洵に價値のなきものであつた、されども其技の特質に深き味有り且つ世界的最優室内遊技たる可き能性を有することを看破し、研鑽考索の結果、一『五目並』を『聯珠』といふ堂々たる遊技として推し立て之をして競技界に雄飛せしむるに至つたのは實に黒岩氏の力である、今此の聯珠創設者たる氏を傳ふるに就ては便宜上『氏と五目並』、『氏と聯珠』の二項に分ち、氏が舊記舊錄を其儘藉りて之を述ぶることゝする。

黒岩氏と五目並

氏は種々なる遊技を嗜好したが五目並べは實に其最たるものである、壯年時代より山本瓢兮、曾我部一紅等の諸氏と五目並べに耽つて居た、次に記す氏の『思ひ出の記』がよく當時の事情を語つて居る。

△三人の珠客　明治二十年頃と思ふ、余と下宿を共にして居た三人の笊碁家があつた、甲は磐城の人佐藤隼吉氏で此人は間もなく法學士となり內務大臣の祕書官や地方書記官などを勤めた俊才である、乙は遠州の人湖東某、丙は攝州の人柱本某である、此三人が五目並べの天狗で余は大抵其戰ひを傍觀して居たが或は六腐を企てるとか、思はぬ所へ呼珠を打つとか、遠い四追を引廻

して來るとか、余の目には唯だ驚く可く見ゆるのみであつた、扨は五目竝べにも此樣な手があるかと感心して時々余も相手になつて見たが、余は只だ玩弄にされるのみで、幾ら一生懸命に考へても到底勝つ事は出來なんだ。

△曾我部一紅と桂馬の網　其の後、余が京橋の元數寄屋町に店を持つた頃（明治二十六年頃）今の朝報社の一記者たる曾我部一紅氏が同居して居た、之が仲々の聯珠好で余は折々戰ふたが此人の止め方は極く弛い樣で實は悉く急所に當り何うしても余の先手を止め切て了ふ、余は遂に兜を脱いで其祕傳を聞いた、氏の云ふには盤中へ桂馬に石を配れば石と石との間が必ず四間になる故、如何に其間に他の石を竝べても五聯を作ることは出來ぬ、故に後手の祕訣は桂馬に止めるに在るのだ、何處までも桂馬に止めて行けば先手は往生せねばならぬ之を桂馬の網と云ふのだと敎へられた、其言に從ひ石を桂馬に配つて數へると成るほど何處から何處までも四間づゝで止つて居る、余は只管感心した、今思へば下手さが恐ろしい。

△珠客の卵梅軒柳軒　此頃、小日向梅軒と佐藤柳軒とはホンの少年で矢張り余の店を手傳つて居たが夜になると五目竝べを始めた、梅軒は其頃から頗る考へが深くて何うも余は壓迫せられて居た、此群に折々飛入したのが山本瓢兮と生島無待庵であつたが瓢兮は碁が強いだけに考へが能くて誰れよりも强目で一紅氏と伯仲、無待庵は余と鼻競べで雙方相降らなんだ。

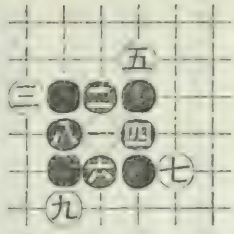
△豐竹麓太夫　此頃、余は球突に凝り初めた、同じ元數寄屋町の有名な鹽瀨の主人仁木準三氏が球戯場を出し余も常客の一人であつたが此人が又五目竝べの天狗で誰よりも强かつた、余は一紅氏に敎えられた桂馬の網を頻りに振回したけれども、やゝもすると破られて了つた、けれども其中に余も何うやら斯うやら此人と乙ッ甲ッとなり、非常に天狗心が兆して來た（此の人は後に五目竝べの會へも出席した、今は豐竹麓太夫とて義太夫の眞打である）。

△土井鰲牙先生　此頃から余は何か先手必勝の打方は無いことかと思ひ、又も一紅氏に質問したが、氏は美濃の人で美濃地方は

尾張や伊勢などの影響を受けて大に五目竝の流行にも逢つたと見え、樣々の事を知つて居て『イヤ其れなら土井の定石を研究するが好い』とて自分の寫した寫本を貸してくれた、余は之を見たけれど少しも要領を得なんだが伊勢の儒者土井鞏芽先生が斯道の大々的大家であると云ふことは其時に始めて知つたのである。

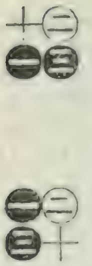
△大磯の正直男『政』　明治二十九年の頃と思ふ余は病氣のため大磯の招仙閣に四十日ばかり居たが、徒然に堪へぬから誰か此土地に碁打は無いかと球戯場の主人『政』と云ふ評判男に聞くと『碁打ちは無いが五目竝べなら私しが御相手致します』と來た、余は大に喜び宿に誘ひ歸つて鼻高々と桂馬の網の講釋をし盤の上へ竝べて見せた『政』先生驚いて『イヤ其樣な事まで御存じでは迚も相手は出來ません』とて早や逃げ腰になつた『イヤ其れでも』と強つて引留め愈々勝負を始めたが、此政は至つて正直の氣の小さい善人で有つて、最初に余の氣焰に中られて居るため只恐れるばかりで『何うしても勝てぬ二目置かせて下さい』と云ひ三目と云ひ一番上りで余に四目置いたが其勝負が實に話しの種である、余は今でも覺えて居るが――。

△勝だらけの閉口



亂暴にも四目櫓に置かせて左の如く打つた『政』は茲に至つて熟々と眺めて居たが憤然として『先生は人が惡い是ぢや盤中廣がつたとて勝てつこないや』と石を投げて立去るから余が引留め樣とすると『人を桂馬の網などに掛けてサ面白くもない』とて跡をも見ずに去つて了つた、余は跡から謝りに行つた、實に是れで其の頃の余の程度が分る、右の形で先方も留切られたと思ひ余も略ぼ留め切つた樣な積りで居たから呆れるではないか。

△後手に勝たれる必勝法　余は大磯滯在中に先手必勝の方法を作らうと思ひ色々と苦心の末



の陣立てが一番よいと云ふ思案を極め、後手の來さうな手を想像して三十日掛つて十四番だけ先手の勝ち方を考案し、最う是れなら誰にも負けぬと喜んだが、念の爲めに更に後手の方を検査して見ると驚く可

し、其所にも此處にも後手の勝が未だ止まらずに殘つて居るではないか、是では先手必勝法は迚も出來ぬ者だと自分極めに絕望し斷念して止めて了つた。

△高橋清致初めて現はる　明治三十一年の春と思ふ、朝報社の三木愛花君が來て『此頃高橋清致と云ふ日本一の五目並の先生が東京へ來た、此人は先手必勝法を發明した』と話された、余は既に先手必勝法は絕望して居たのだから、一方ならぬ好奇心を起し、是非共逢つて見たいと思ひ、愈々逢つて對局して見るとイヤ强い事、强い事、余が今まで逢つた湖東、佐藤、杜本の諸氏や仁木氏などゝまるで段違ひである、今でこそ三四の『兩見せ』は誰でもするけれど余は其時初めて見た。

△兩天の兩天　其時まで四三の勝を兩天秤の勝と稱して居たが更に『兩見せ』を『兩々天』と名づけ余は誰に向つても『此樣な珍な勝方がある』とて自慢した。

△新聞に五目並の出初、高橋氏の必勝法　直ちに高橋氏に敎を乞ふこととし猶も此樣な手を世間へ見せて遣れば定めし驚く人が多からうと思ひ、新聞社へも相談し高橋氏の承諾をも得て氏の必勝法を萬朝報紙上へ毎日掲げる事にした、氏の必勝法は左の如きものであつて。（當時の規定は白（十二）を『い』に打つ能はず）

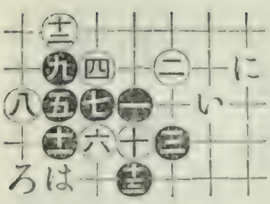


△實戰家白井喜友氏　五目並先手必勝法が新聞に出初めて間もなく新聞社へ詰問に來た人が有る『高橋氏を日本第一と云ふのは

日本國中の人を一々調べて見極めを附けたのか』とエラク捻つた出様であつた、余はあとで受附の人から其事を聞き、是は何だか面白さうな相手だワイ、其捻くれ方で見ると多少五目並の天狗と見えると斯う思つて私かに待つた居たら翌日又遣つて來た、其人が即ち今の『打物取つては天下に敵なき』とも云ふ可き實戰家白井喜友であつた。

△伏見の井上義雄　早速應接間に通して來意を聞くと『日本一の五目並の名手が此の東京に在る筈なし、若し日本一と云はんには先づ京都伏見の人井上義雄か、大阪の金澤仁三郎を仆した上で、無ければ成りますまい』と云ふ様な語氣であつた、余は此時に井上義雄と云ふ強者のある事を始めて耳にした、『シテ其の金澤仁三郎と云ふのは』『ヘイ私しです』余は益々興が乘つた『ヘー貴下が其様に強いのですか』『強いか弱いか一番願つて見ましやう貴君が高橋さんでせうネ』『イヤ私しは高橋ではない高橋の新弟子の高山と云ふ者です』『お弟子では詰らない』と力の拔けた風で有つたが、今度は余の方が乘り氣と爲り『詰るか詰らないか打て見ねば分りますまい』『ヘー貴方もいくらか打てますかい』『いや澤山も打てませんが先手をすれば日本中に高橋より外には私しを負かす者は有りますまい』と余も盲蛇的の元氣を見せた。

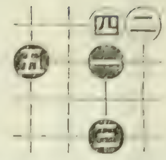
△驚く可き雨々天　愈々實戰と云ふ事に成つた、直ちに盤石を取り寄せて余は先づ先手に出て左の如く打つた今でもよく覺えて



いる、十三珠で『い』に勝たうか止めさせて『ろ』『は』と勝たうか、『是が高橋流の雨々天と云ふものです』と氣焔を吐くと、白井はニコ〱笑つて『私しは負されるのは厭ひませんが講義を聞かされるのは御免です』と云ひつゝ第十四珠を『に』に下した、余は全く驚いた、『只此一手で所謂雨々天がピタと止つた』、余は我が技の拙なことを知ると同時に高橋と白井が揃へば最う何の様な強敵が現れても恐るゝに足らぬと是から白井氏と高橋氏とを取持て近附にした。

△雨降竝び立つ　白井氏も直に高橋氏の非凡なる天才を認め、高橋氏も白井氏の類稀なる實力を認めて打解けた□とはなつた。

△大阪の五目竝小話　余は白井氏によりて大阪に於て五目竝の流行した小話を聞いた、大阪の鴻池家の若旦那が未だ室住（多分二男か三男ならん）で有つた時分放蕩しては成らぬからとて五目竝だけを樂しみとして親から許され、月々百兩の手當を貰つて



阿彌陀池の邊に住み、五目竝の强い者を集めては樂しんで居た□時代は不明なるも今（明治四十三年）より五七十年以前か□此人が蘆雪（或は蘆跡か）と號し櫓の定石を打出した。而して門人の中の下の方へは、芦の字の艸冠を略した『戶』の字の名を與へ、戶梅とか戶何とか稱させ更に技の進んだ者へは芦の字を許した此人の後を承けたのが芦跡（或は芦雪か）と云ふ先生で白井即ち其頃の金澤は此の芦跡の弟子で蘆の字を許され號を芦遊といふたのである。

△東京で始めての五目並會　追々に同好者が增加して新聞社へ質問の批評などを寄越す人も甚だ多くなつた、取分けて高橋淸致と一番手合が仕度いなどと云ふ天狗連が數十人に及んだので余は自ら發起人となり、新聞に廣告して上野の鶯亭に高橋氏を招じ五目竝同好會と云ふのを開いた、時維れ明治三十二年十月二十二日であつた。

△朝田翁と吉六の定石　當日余は定めの時刻より少し早目と思つて出掛けたが早や一人品の好い老人が來て待て居た、大分五目竝に熱心の樣子で、直に余を捕へ『顏の揃ふ迄サシで戰ひませう』との事、ハテなサシ抔と妙な語を使ふとは



思つたが早速盤を持出して數番戰つた、翁は是が美濃の吉六の定石だとて上の如き手を打つた變な打方だけれど余にはどうしても止まらなんだ、此の老人こそ今の淺草會の師範朝田又甫氏である。

▲福田和五郎氏と櫓　此日の會に列席の人で余の意外に思つたのは二六新聞の福田和五郎君で、氏が五目竝の同好者とは始めて知つたが戰つて見ると櫓の定石で中々强かつた。

△當日の勝負　此日の勝負の主眼は誰も彼も一番高橋を負かして日本一の看板を撤去させ樣との野心を包んで居たらしい、其れで先づ高橋氏に先手で向ひ一番でも勝た人へは褒美を遣ると云ふのであつた、何の先手ならと大々的意氣込で誰も掛つたが大抵の先手は無雜作に負された、殊に高橋氏は折さへあれば敵を三々禁に追落して苦めるので誰れ一人高橋氏の實力に驚かぬはなかつた、誰々だつたか忘れたか褒美を取つたのは極の少數であつた。

▲天狗連の異議　余の大反對　終に席上で誰れ云ふとなく動議が起つた、成る程高橋氏の後手は如何にも巧妙だが後手だけでは食足らぬから何うか吾々に高橋氏が先手で來て貰ひたいと云ふので贊成者が甚だ多かつたけれども是は余が峻拒した、『諸君高橋氏の先手は必勝法です其必勝法は今日新聞社が大事の呼び物にしてチビリチビリ出して居ますのに、諸君に得手勝手に高橋氏の先手を採られては新聞社が立ち行きませぬ』と叫んだ、成る程新聞社の立場としては其故障は尤もだと余に贊成してくれたのが朝田翁であつた、皆も其意に從ひ『其れでは高橋氏の先手は新聞に出終つた後に打つて貰ふ』といふ事で解散した。

以上は黒岩氏と『五目並』との關係にして是れ實に世界的遊技聯珠の起る前提である。

黒岩氏と聯珠

黒岩氏は五目並を嗜むと同時に其名稱の俗にして他より輕侮せられ易きを遺憾とし、之が改稱に腐心せられた結果、聯珠なる美名を得られた、明治三十三年十二月六日の萬朝報紙上に『五目並の名稱改定』と題する左の文字がある。

▲當紙所載の『五目並先手必勝法』は既に其の『甲部』廿七局、『番外』廿四局の外に懸賞及び說明講評等に關する圖面無慮一百箇を

掲げ略ぼ五目竝の概要を明らかにしたり、是より進みて難中の難たる『乙部局面』に入らんとするに方り五目竝の名稱を改定（寧ろ創定）するの當然なるを思ひ、當社遊技部の議を經て一の新名稱を選したり、勿論數百年來唱へ傳りて而も意義極めて明瞭なる『五目竝』の稱を動かすは容易に似て容易に非ず、之を思ひ立つさへ或は潛恣の譏りあらんも知る可らず、由て茲に一日の紙上を費し名稱選定の次第を述べん。

▲我國の遊技勝負事の類は既に夫々一定の名稱あり、多くは漢字に書著して多少雅馴なる處あるに獨り『五目竝』は未だ穩に漢字に書す可き名稱を得ず、唯だ碁子を列べて五に及ぶを目的とする所より其事を其まゝに『五目竝』とは俗稱する也。

▲從來之に加へたる諸種の名目は有るとは有りと雖も廣く用ひらるゝに至らず、其一二を擧ぐれば『格五』と稱する者最も古きに似たり、之は支那の『雙陸』に似通ふ字面なれど面白き處も無し、『五聯碁』と云ふは單に『五目竝』の意を漢字に譯せし者と云ふ可く『五碁』とは更に之を約めたるものならん、或る人は擲碁が盤の隅邊より擲初むるに對し五目竝が盤の中心より打初むるを取り盤の中心を國の中心たる都に見立て『京碁』と名附たる由なり、此稱稍や他に優れど『きやうご』と俗讀にすれば何となく『京都の碁』と云ふ如くにも聞え紛らはし、今一息の思案欲しきなり。

▲其實は必ずしも俗ならず『五目竝』の名甚だ俗なるが爲め其事柄も甚だ俗なる如く思ひ做され、單に婦人小子の弄びと思ふ人も有れど、本來斯技は我國に生じたる純粹の『邦碁』にして其奧義は愈よ入りて愈よ深きものなり、去れば碩儒土井聱牙の如きも生涯之を究めて終に其極數に達する能はざりしと云ふ、今や諸方に達人あり東京の高橋、金澤、森岡、朝田諸氏の如き、遠州の内藤氏、滋賀の福島氏、伊勢の伊藤氏、西京の清水氏の如き、孰れも深く斯道に通じたりと稱せられ、其打つ處の石配りを見れば今々素人の思ふ處と異なり妙手百出殆んど端睨す可からず、其世人の單に思へる『五目竝』なる者と全く別物の觀あるは宛も圍

碁と「四ツ目殺」との相違に似たり、四ツ目殺しは顧るに足らざるも圍碁は遊技の王と稱せらる、今までは「五目並べ」は婦人小子の戯とするも、巧妙なる斯戯は優に社交の一具として存するに足るなり、「四ツ目殺」進化して圍碁となるに、「五目並」何んぞ獨り邦碁となる能はざらんや斯技の特質は

▲最も文明の社會に適するに在り　之を闘すに圍碁の如くに長時間を要せず、腦を勞すると比較的に劇甚ならず、費用を要すること少く、不潔の之に伴ふこと無し、陰氣ならず、騒しからず、蓋し遊技中の最も經濟、最も健全、最も清潔、最も淡白なる者の一なる可し、事務益々多忙なる文明の社會に廣く一般の社交的遊技と爲すに適する者恐らくは之に優るは無けん、而も斯技や、入るに易くして其「手ほどき」は婦女子と雖も容易に解する事を得、而して入れば則ち益々深し、澹然無味の裏に津々の味有り、咀嚼して愈々旨き事米の飯にも喩ふ可きものあらん。

▲然らば新名稱は何と云ふか　單に邦碁と云ふも不可なけれど、更に意の優るを選び、「聯珠」とは稱せんとす、碁子は直に「珠」に比す可きものに非ずや、珠を聯ねて五に及ぶ是れ此の「聯珠碁」の本體也、唯だ字面に五の意味を缺くと雖も必ずしも病となさず、依て今日以後は「五目並先手必勝法」てふ題號をも「聯珠定石」とは改むるなり、五目並同好會の如きも聯珠同好會と稱する事に致したし聯珠哉、聯珠哉、只此戯の連綿として聯ねたる珠の如く限り無く續かんを願ふなり。

五目並べ既に聯珠と改稱して、燦然たる光輝を四方に發つに至つた、黒岩氏の『思ひ出の記』は猶獨り語り續けて居る。

▲珠界の美少年　鶯亭に初會を開きし時、絹の羽織にまだ肩揚げしたる紅顔の美少年があつた、何處の坊ちやんかと余は怪みもし又斯る子供が斯る會に臨むとは意外の事哉と思ひしが、後で高橋氏に聞た處、彼の美少年は仲々手筋がよき故キツト上達する

だらうとの事であつた、其れにしても何者かと云ふ事は分らなんだが、其のち此美少年は會のある毎に出席した、後には果して有數の珠家とはなつた、此程萬朝報に掲げた聯珠懸賞案「黒旋風」に只一人の正解者たる羽前花館の造酒家齋藤七十郎氏が即ち其人である、其ころは東京へ來て學問を修業して居られたのである、是を見ると高橋氏の先見の明も豪氣と云ふ可きである。

▲競技會の發達　其後は引續き同好者からの注文があつて毎月競技會を催した、會のある度に會場の選定が甚だ面倒なので、高橋氏が自分の家を之に充てる事にしやうとて下谷徒士町に家を借りた、其時の會は來會者が廿人程であつたと記憶するが其後追追に増加し手狭を感ずるので新富町の芝居茶屋を借りる事になつた、其頃は來會者が必ず三十人以上で、雨天と雖も減ずる事はなかつた。

▲驚く可き飛入者　新富町の會へ或る時驚く可き飛入者が有つた、其人は東京辯と西京辯の二人連れで、二人共紺木綿の着物で極々堅氣の商人とは見えた、此樣な人達に聯珠の打てる筈が無いと思つて居ると西京辯の人は『私しは高橋先生に私しの先手を止めて頂きたいのです』と至つて謙遜な物腰であつた、當時先手を持つても高橋氏に勝つ人は餘りなかつたので多分此人も御薮品の樣に弄ばれるだらうと思ひ見て居ると櫓の陣立を構へ左の如き妙趣向を以て水も溜らぬ鮮かな勝方をした。



實に枯れた打ち方ではないか、十七、十九で『い』に勝たうか『ろ、は』と勝たうかと打つた處は當時の余などには思ひも寄らぬほどの打ち方である、此の人が即ち松村甚右衛門氏である、余は翌日の新聞に絶妙と評して此局面を出した、處が之と同じ程驚く可きは、今一人の飛入者即ち東京辯の方は競技の中へ加はつて易々と一等を取り其上に多大の金圓を會へ寄附して立去つた、此人は薩摩譲夫氏である、氏と松村氏とは賣買上の取引仲間で兼てから聯珠の大熱心家であつた。

▲筆序に御披露　茲に一寸狂詩を御目に掛けます、横濱の内田軟々(後ち珠號更石)君は兼て狂詩の有名な大家で數年前に余も其道で御目に掛つた事がある、此人近ころ珠道に入られ、先頃の横濱の會に臨席した三上雄石氏に托して余に左の一聯を寄せ、之を詩に纏めよとの御言傳であつた。

今容後手三々勝。　皆駭妙珠兩々天。

實に旨い聯ではないか、斯う云はれては余の如き者に後の句の續け得る筈は無い、けれ共無言でも居られぬ故左の如く御茶を濁した。

宜代圍棊弄五聯。　乍言遊戲甚安全。
今容後手三々勝。　皆駭妙珠兩々天。
計晝時雖流汗水。　競爭毫不費金錢。
最欣危急存亡際。　六腐施來忽取先。

通信聯珠の起原

聯珠の性質より考へ郵信に依りて競技を試みたのは實に黒岩氏の發意である、初め萬朝報紙上に聯珠秘訣(定石)を掲ぐる序に氏と高野新太郎と云ふ人との實戰圖を掲げた事があつた(明治三十三年十二月十三日)處が讀者よりモット實戰譜が見たいと云ふ註文が來たものだから、茲に『實戰の檄文』と云ふものが同月二十五日の同紙上に顯れた(當時は定石の局面に對し通信戰をも實戰と云ふた)

▲實戰の檄文　記者曰く記者と高野氏との實戰圖を掲げて以來、尙他の大家と同樣の實戰圖を掲げよと所望さるゝ人多し、記者未熟ながら高橋門下に遊べる者なれば研究のため其意に從ひ、斯道に於て記者が兄事す可き各地の大家と今より郵便にて實戰を開き、終局を待ちて紙上に掲げんとす。

△西京　清水　松秀君　△靜岡　内藤　六丁君　△伊勢　鎌谷　善藏君　△同　西川　五六君

△東京　石川恪五齋君

孰れも一地方に雄視せりと聞く人々なり、記者が後手を以てせん事は思ひも寄らざれば、先手を左の如く打たん。

 又は 　第二珠は孰れにても同樣に歸するを以て第三珠までを記す

右の五君願くば備子數ふ可しと爲して先づ第四珠を選ばれ度し、萬一にも互先にして先手と後手との兩局面を同時に戰はんと欲せらるれば、記者は 

恐る〳〵左の如く打ん

即ち之には第三手を送られたし（勿論住所を明記して）手の込む迄は「ハガキ」一枚にて兩局面を盡し得可し、但し郵稅は相互の負擔とせん（高山生檄す）

黒岩氏は其頃斯道に用ゆる號を高山門庵と云ひ後に高山互樂と稱された、斯て淸水以下五氏以外に此檄に應じ來る人が四五名有つた、名古屋の淺井偶然氏（今の九石五段）も亦參加し對戰三月に涉つて打ち分となつたとの事である、氏はすべての人に對し一回も先手を落さず、相手の先手は數人を敗つ

た、この時の企が今日の珠界に於て賑盛を極むる通信手合の嚆矢である。

氏は聯珠の先手に必勝法あるを想ひ、早く研究に着手したるも頓挫又頓挫殆んど其研究を擲たんとしたのであるが、後ち高橋氏と相識り大に得る處有り、完全なる先手必勝法を著さんと憤起し潜思熟考一年有餘の日子を費して漸やく成案する處有り、明治三十四年五月に朝報社遊技部より之を發行した、即ち有名なる横二聯所謂雲月の定石である。

聯珠眞理の發行


聯珠の先手必勝に就ては近世之を試みたる者が無いではないが、完全に理を究めたる者は此『聯珠眞理』である『眞理は一にして萬億を貫く、此法宛も其の如し、變化無盡唯一の條理に歸す、眞理の名空しからざらん』と氏自ら言ふて居る、實際前人未發である、此定石書に依りて利益を享受したるもの幾千幾萬なるを知らず、忽ち第五版を重ぬるに至つた、更に『眞理』の珠法と共に珠界を益したは其叙文である、其叙文を見れば聯珠の如何なるものたるやを知悉する事が出來る、則ち氏の心血は此文字の上にも大に注がれてあるのである、而も其文頗る長ければ玆には專門に亘る部分を略し一般的記事のみを採錄する事とした。

一、遊戲としての聯珠

遊戯は人の嗜好より生ずる者なる可ければ、孰れを善し孰れを惡しゝと云ひ難く、歸する處は其人の嗜好に多く適せるを善しとする外無きが如くにも思はるれど人間社會の事は一として社會又は其當人に取りての善惡利害より判斷せられざるは莫き習はしなれば、聯珠の如き遊技も他の遊戯と比較して、其價値如何を問はるゝは是非なし。

西洋の遊戯は多く體育の方面に屬し日本の遊戯は多く知識を職はす方面に屬す、彼方が身體の遊戯ならば此方は心の遊戯なり身體の遊戯は人間の心力智力の未だ進まざりし頃より既に有りし者なる可く極端に云へば獸類と共通の者なる可し、心に屬せる遊戯は人間としての智力も進み大に意匠の働く事となりての産物なる可ければ、獸類などの眞似し得可きに非らず、此點より云へば此方が高尚なりとして、進歩したる遊技なりとも云はる可し。

去れど體の遊技と智の遊技と孰れを取る可きやと云へば、开は其の弄ばるゝ場合の事情にて定まる事なり、野球が面白ければとて、設備なき場所や素養なき人には適せず、智的遊技が宜しければとて其場合に其人々の許されたる時間の長短や智力の程度や、氣分の趣きなどに合せざれば弄ぶ心だに生ぜざる可し、只一概に善惡優劣は定め難きなり。

日本に在る智的遊技の中にては圍碁を第一とす可きか、第一とは智力を要する事多き點なり、次は將棋なる可きか、將棋は西洋にもあり、然れ共圍碁は無し、將棋に次きては歌牌や双六など樣々に數へらるれど余は聯珠を推すを當然と思ふなり『聯珠眞理』の著者が聯珠を賞讃するは我が田へ水を引くが如き類なれど兎に角も聯珠に獨有の秀所を一言せん。

聯珠は圍碁將棋程腦力を使はざるだけに、淡泊なり、一番の勝負に時間を費す事少くして僅々たる零細の餘暇にも之を樂しむを得可く、殊に其目的が單に五聯を作るのみに在れば婦人や子供にも解せらる、入り易きこと無類なり、斯く云へば之等は總て聯珠の劣れることを證するにも當る如く聞ゆれど、斯る入り易く解し易き中に最と深き奥行あり、學べば學ぶ程、究むれば究む

るほど段々に深き味ひの生じ來りて、圍碁にも將棋にも存せざる一種特別の妙趣が殆んど人を醉はしむるかと思はるゝほどにも達するなり。

此の淡泊なる入易き、而も奥行の必ずしも淺からざる點が、聯珠をして世界的の遊戯たるに適せしむるものなりと余は思ふなり、圍碁は東洋に於ける遊技の第一なりと雖も其入り難き點に於て西洋の人には適せず、西洋人にして圍碁を學びたる者の、無きにしも非るは余聞きて知れり、然れども圍碁は廣く西洋人に解せられ弄ばるゝに適せず、余嘗て西洋の遊戯全書を見しに、碁盤を説明して『五目竝べの具なり』と爲せり、此ごろ倫敦タイムス社發行センチュリー大辭典を見るに之にも『碁盤』と題して左の如く記してあり。

Gobang [Jap. goban. Chinese Ki pan. chess or checker-board] A game played on a checker-board with different coloured counters or beads, the object being to get five counters in a row. It is called by the Japanese gomokunarabe or "Five eyes in a row," the counters being placed on the intersections of the lines forming the squares.

此意は即ち『ごばんは日本にてゴバンと云ひ支那にてキイパンと云ふ、目盛りしたる盤の上に、異なりたる色の子を以てする遊戯にして其目的は一列に五子を竝べ得るにあり、日本人は之を「ゴモクナラベ」と稱す、即ち一列に五個の目と云ふ意味なり、子は角の中に置かずして角を作れる線と線との交叉點に置るゝなり』西洋人の或る者が碁盤の語をすら『五目竝』と解せるを知る可し、センチュリー辭典は英語辭典中の大王とも稱せらる程の者なれば之にかくあるは幾分の典據なりとも云ふ可し、多分は日本に來りて之を瞥見したる人が何人かの説明をきゝ、其圍碁たるの部分を呑込み得ずして五目竝べたるの部分だけを合點し斯くは傳へたるに始まれるならんも又以て五目竝なるものが、如何に其大體に於て世界の人に解せられ易きやを知るに足る可く、

又以て『五目並べ』をば世界的遊技たるの資格ありと主張する一材料に供するを得可し。

二、聯珠の名稱

『五目並べ』は『格伍』とも『五並べ』とも『五聯』とも様々に稱呼せらるれど、孰れも字面、面白からず、明治卅一年の頃、日刊新聞萬朝報紙上に、五目並べの事を掲ぐるに當り、高橋淸致之を講述し、余之を筆記する事となりたれば、何とか美しき語を得て取替たしと思ひ様々に苦心し、圍碁に對して『聯碁』と稱せんかと思ひしも、聯碁は既に圍碁の方にて、數人の碁客一局を圍みて戰ふことを連碁と稱する事あり甚だ紛はしければ、寧ろ『聯珠碁』と稱する方よからんと、其語を書して居合はせたる友人等に諮りたるに、机を並べたる故小林天龍之を見て、既に聯珠と云はゞ碁の字は無益なり、單に聯珠と稱するの適當なるに如かずと告げぬ、天龍は漢詩を善くし殊に漢文字を驅使するに長じ又様々文字の典故に通じたり、余考一考して、忽然として眞に天龍の意見の精確動す可からざるを悟り、雀躍して聯珠なる哉、聯珠なる哉と叫び、即日より之を用ひたり。

當時に在りては世の人、容易に聯珠の何者たるやを解せざりしも、爾來此語は仰山に云へば殆んど燎原の火の如き勢を以て同好者の間に傳播し、今は聯珠の二字を讀み得ざる人も五目並べと云はずして聯珠と云ひ、又全國何の地にも聯珠何々會と稱する會友の有らざるはなく、同好者互に呼びて珠友と云ひ先輩を敬ひて珠伯又は珠兄と稱し、殆んど他の遊技界には見るを得ざるが如き親交を結べるのみならず、聯珠の語は全く此技に附着して動す可からざる名稱たるに至れり、余は西洋の進歩したる辭典に『レンジユ』の語の採錄せらるゝも遠きに非ざる可きを思ひ、又聯珠其者が世界的遊技たる可き運命を有して、其實現せらるゝ事も遠からざる將來に在るべきを信ぜんと欲するなり。

三、聯珠の趣味

聯珠に特別の趣味ある事は既に云へり然れども其の特別の趣味とは如何なる趣味ぞと問ふ人もあらん、聯珠は全く淡々の中に味ひて盡きざる津々の趣きあり、然も之れのみが聯珠の特別の趣味には非ず。

斯道一方の家元とも稱せらるゝ林田雲梯君曾て余に語て曰く『圍碁は戰爭の如し、一部分に失着あるも他の部分に於て收得し、大勢に勝を制する事あり、聯珠は眞劍勝負の如し、一太刀受け損ずれば血を見る、即ち勝負決するなり、また回復の道あること無し』と、眞に聯珠を知る人の言と云ふ可し。

圍碁は廣し其味ひ大なり、聯珠は鋭なり小なり尖れる也、其味ひ痛切なり、全く白刄を以て白刄を持てる敵と戰ふが如し、一寸の油斷が直ちに致命の傷を來す、故に一珠一珠痛切なる心配と快感とを伴へり、英語に『スライリンク、インテレスト』と云ひ我が俗語にて云へば『錐で揉み込まるゝ如き興味』と云ふ者は獨り聯珠に於て味ふを得るなり。

圍碁に於て我自ら命令權を取り、敵をして我の命令に服從し我の指揮する處に子を下さざるを得ざらしむることは快感の一たるなり、其他の何の遊技に於ても大抵は然らん、然れ共特に聯珠に於て此の命令の鋭きこと殆んど絶對也、敵たる者假令ひ最良の勝形を有し、滿腹の經綸を貯へて、心竊に其實現を樂しむと雖も我れ活三聯を作るか、或は眠三聯を動すか又は含み追手を示す時は、何事を差置きても之を止めざるを得ず、此の命令の嚴なるは將棋の王手より外に比す可きもの無きが如し、是も聯珠の味を特に痛切にする由緣の一たる可きか。

且又聯珠は相手なき場合に已れ一人にて之を弄ぶとを得るなり、之が他に殆んど類のなき所なる可し、聯珠を解する人にして此の趣味を知らざる人は殆んど有る事なし、圍碁將棋に於ては、敵の來る處、我の行く處廣くして獨り之を研究する事容易ならずと雖も、聯珠に於ては如何にせば命令を連發し敵を全く服從せしめ得可きやとの問題が極めて明白にして、我の第二珠第三珠

より既に命令の意味を含めるが爲めに、深く聯珠を學ばざる人と雖も獨り之を研究するを得可く、而して命令の續け得らるゝ道の只だ一歩たりとも發見せらるゝは發明家がインスピレーションを得たるが如き想ひあり、命令又命令、終に最後の勝利を見出すに及びては、殆んど手の舞ひ足の踏むを知らず、連呼して快を叫ぶに至る、余の知れる珠友にして人と戰ふを樂まず、獨り味ふを樂しみて、閉居客を謝し、殆んど寢食を忘るゝが如き者も無きにあらず、斯く迄に至るは寧ろ聯珠の弊なりと云ふことも得れど、聯珠が一種特別の趣味を有して、人を樂しむに宜しくして又獨り自ら樂しむにも宜しきを證するものなり、旅窓友なくして無聊を告ぐる際の如きは、聯珠の獨り自ら味はる可き最好の時なる可し、珠客は殆んど獨居無聊と云ふ事を知らざるなり、確かに聯珠は特別の趣味を有す、而して其趣味は淡泊なりと雖も局外者の動もすれば思ふが如き、淺近なるものにも乾燥なる者にも非ず、之を味へば愈々深く、殆んど津々として盡きざる底のものなり。

四、對局者の心得

聯珠は淸き上品なる遊びなれば、局に對する者、成る可く上品に保たんとの心掛けある可きは勿論なるが、珠を下す時の態度も大に愼む可き處ある可し。

絕對に必要なるは一たび打ちたる珠を決して動かさざるに在り、人によりては一旦打ちて眺めて又取上げて他の所に打つこともあり、斯くては相手をして安心して自分の手を考ふること能はざらしむるにも同じく、實は失禮にも當る可し、失禮は互の事としても苟くも勝負事とあるからには飽くまで公明正大に、飽くまで男らしく、一旦打ちたる珠には、再び手を觸れぬと心に誓ひ若し手をふるゝ程なら、其局は負けなりと覺悟する程にてありたし。

斯くせば自然と手を下す前に篤と考へ愈々見極めを附けて然る上にて始めて手を下す習慣をも生ずる故、技能も上進する事早

かる可し、人に依りては見損じの爲め止むを得ず其珠を置直す如く云ふ人もあれど、見損じとは禁句と心得べし、勿論何人にても見損じは頻々とある可し、然れども其見損じが即ち自己の力量の程度を表するものなれば、見損じにても負けは負けなり、我が負けを輕くする手段ともならねば置きたる珠を引剝し去る口實とも成らず、若し先手が見損じのため三々を打ちたらば如何なども問ふ人もある可けれど既に打ちたる珠は取る可からずと定めたる上に於ては、見損じにもせよ三々と云ふ法禁に觸れたる其人の負けなり、又我に於て追手を打ちたる場合に敵が見損じて手を拔きたらば我は直ちに勝ちて宜し此場合には棒勝ちと爲る事もある可けれど一方に見損じと云ふ過失ある故止むを得ぬなり、既に云へる如く聯珠は圍碁と違ひ全く白刃と白刃との眞劍勝負に比す可く、一手の受け損じにて直ちに致命傷となる筈のものなれば『待つた』や置直しなど有りては聯珠の本領を傷くるものなり、勝負は飽く迄も嚴重なる可し。

次に、一たび打ちたる珠より容易に指を離さず、押たる儘にて色々と考ふる人もあれど、是は置直しと殆んど同罪なる可し、碁を打つとか聯珠を擲つとか云ふ意味に照しても明らかなる可し、擲つは投げ棄てるなり、投げ捨る如く直ちに手が離れねばならぬ者なり、未だ碁を押すとか聯珠を押へ附くるなどの語を聞かねば、珠を以て盤面を打つ如くに手を下す可く一旦下したる珠は拋擲したる如くに其所へ捨て置く可し、之も初心の人の爲めに云ふ者にて打方の綺麗なるは上達の本にもなるなり。

聯珠新報の發刊

聯珠の同好者が遠近に亘りて日増に加つて來るに付き斯道の機關として『聯珠新報』なる一冊子の發刊を見るととなつた、それは明治四十三年一月のとであつた、勿論黒岩氏の後援に依りて三上雄石、

小日向梅軒、磐井樂在三氏共力の下に發刊したのである、其第一號の『序』として黑岩氏は左の一篇を寄せられた。

聯珠は其初め多分圍碁の餘技であつたのであらう、婦人や小供が圍碁は餘り六ケしいから五目竝べ競べでも仕やうと云つた樣なものらしい。

けれども遣つて見ると仲々捨て難い面白味があるので段々に廣まつな者に違ひない、何しろ我國では餘程以前から全國一般に行はれて居る、聞けば桃山時代にも遣る人があつたと云ふ事で、今では日本固有の遊戲とも云ふ可きである、何の國から敎へられたのでもない、但し昔の支那に格伍と云ふ遊戲があつたとやらで、伊勢の儒者故土井聱牙先生などは『格伍』と云ふ語を五目竝べに充てはめ、今以て京都大阪邊で其語が行はれて居る、けれども支那の昔しの格伍が今の五目竝べであつたか否やは分らぬと右の土井聱牙先生も云はれて居る。

所が此の圍碁の餘技たる五目竝べが段々盛になり今は『聯珠』と云ふ立派な名稱の下に殆んど圍碁其者と覇を爭はんとする程の勢と爲り、遂に『聯珠新報』と云ふ專門の機關雜誌をまで發行するに至つたのは、驚く可きであり又吾々の如く斯道に遊ぶ者の爲めには實に愉快な現象である、余は近年の聯珠の勃興した次第に付ては多少知つて居る、けれどそれは他日改めて述べる事とし茲には此雜誌に付て聊か述べて置く事がある、此雜誌は三上雄石、小日向梅軒、磐井樂在の三氏が思立ち且つ主たる者と爲つて發行するのである、三氏ともに余の推されて居る東京聯珠社の重役であつて殊に斯道の熱心家である、蓋し『聯珠』の關係誌を研究するには尤も適當の人であらう。

けれ共特に注意したいのは、聯珠は仲々常人の思ふやうな淺薄なものではない、究むれば究むる程變化が多くて其極致は殆ん

ど知る事が出來ぬ、今三氏は錚々たる實戰家であるけれど聯珠新報の記者として紙上に於て世の同好者に見ゆるに當つては、餘程責任重きを自覺せねば成らぬ、聯珠の手や變化に付ては自分で斯うと思つても明かに斷言してはならぬ、三氏の見る所の外に又何の様な深い意味があるかも知れぬ、願くは聯珠新報をば聯珠の趣味を廣め聯珠の實況を傳へる機關であると同時に聯珠を研究する機關であると心得て貰ひ度い、三氏は之に據りて世間に聯珠を教へると云ふよりも世間から聯珠を教えられるのだ、と云ふ恭謙の態度で居つて貰ひたい。

其の態度を忘れぬ中は聯珠は萬歳であらうし聯珠新報も萬歳であるだらう、發刊の初めに當つて聊か苦言を呈するのは、單に余の老婆心である。

明治四十三年正月初　　高山互樂

聯珠新報は斯道の發展に伴ひ年と共に讀者が增加したが、大正七年十月三上主幹物故したれば不肖之に代つて益々紙面の改良を計り、現今に於ては專門雜誌として異數の發達を見るに至つた。

東京聯珠社と其狀況

明治三十七年に同盟相議し『東京聯珠社』を興して高橋清致氏を推して社長とした、同四十二年十二月高橋氏社長を辭したので翌四十三年一月黒岩氏は當面に現はれて社長となり左の社規を發表した、斯道の目覺しき發展は之より始まつたのである。

東京聯珠社規定

第一條　本社は聯珠の發達を期せんが爲めに斯技を世界的に鼓吹するを以て目的とす

第二條　本社員は聯珠の高尚なる遊技たるを社會に普及すると同時に德義を重んじ人格を向上して親密に交際する事

第三條　本社員の資格は聯珠熱心家に限る事

第四條　本社員を名譽社員、特別社員、甲社員、乙社員の四種に分つ、名譽社員は推薦、特別社員は斯道の發展を補助せる功勞者（認定）、甲社員は有段者、乙社員は無段者とす

第五條　社員は徽章の交附を受くる者とす

第六條　本社は時々祝賀、慰問、追善等の會合を催し其都度聯珠競技を行ひ以て社員を獎勵す

第七條　本社に關する一切の廣告及規定變更等は特に聯珠新報誌上に掲載す可し

第八條　本社々員にして本社の體面を汚瀆し或は不德の行爲をなしたる時は除名す

第九條　本社員登錄申込は便宜上聯珠新報社内登錄掛り宛とす

第十條　本社員は聯珠新報講讀の義務ある者とす

以上

聯珠創設者としての黒岩氏は、以上列記したる所に依りて詳かに知るを得るものと信ずる、實に氏の遺されたる記錄は卽ち聯珠家としての氏の自叙傳であり、又卽ち聯珠史である。玆に總評に代ふるに左の一文を掲げ以て此傳紀を結ぶことゝする。

名人位推薦之辭

夫れ聯珠の技たるや近きに似て遠く、淺きに似て深し、然れども古來之を嗜む者多くは漫然弄翫せしに過ぎず想ふに天は此技をして低級なる遊戯物として了らしむるとを欲せず其の本能を闡明し其品格を清高ならしめんが爲め將さに一偉人の出づるを俟つて之を其手に委せんとせしもの丶如しまひに明治の中年に於て學徳兩つ乍ら高き我高山互樂師の斯界に顯はる丶有り師や緻密の腦力と健壯の精力とを斯技に注ぎ先づ其名を選びて而して其實を重んじ研鑚多年微を穿ち幽を捜り其自から得たる所を擧げて諄々講説以て天下の後進を導きて聯珠の何たるを理解せしめ竟に今日の大成を見るに至る其勳績の炳焉たる誰か瞻仰せざる者有らんや八段三上雄石以下百千の門下生進んで吾師に對し名人位を推薦し奉る是れ啻に吾儕の本懷たるのみならず亦實に天意の存する所なるを疑はざるなり。

（高山互樂氏とは即ち黒岩氏の聯珠號、此文は先年同氏を聯珠名人に推薦したる時の辭である）

又次に左記『勝負事と聯珠』の一章は、大正八年九月十四日、淺草代地高砂倶樂部にて高山互樂師歸朝歡迎聯珠大會を催したる際、其席上に於て同師の講演あり、小日向梅軒氏の筆記により曾て『聯珠新報』に掲載したるものなるが、今回の機會に當り、此に再錄する事とした。

勝負事と聯珠

私は性來勝負事が好きで之まで種々な事を遣つて見ました、此度び歐洲へ行きましても到る處で勝負事を見て參りました、先づ最も大なる勝負事は獨墺を取り圍んで聯合國が戰爭を致しました事で、之は開闢以來の大勝負事です、夫から講和談判となりましても米國のウヰルソン氏や英國のロイドジョージ氏や佛國のクレマンソー氏や其他各國代表者の間に種々た懸引がございまして各の自國の利益を圖る爲めに大いなる爭がありました、又一面勞働問題では瑞西で大會が開かれ各國の代表者が列席して玆に又一種の勝負事が演じられました。

斯樣な次第で政治上、社會上の出來事は一として勝負事ならざるはなしと云ふ有樣です、夫から西斑牙で有名な鬪牛があると云ふ話しを聞き、同地へ參りまして公使坂田氏から其模樣を聞きましたが、之は鬪牛とは云ふものゝ其實牛と人間の喧嘩で、人間が馬の脊に乘り猛牛に對して大格鬪を續けるので、忽ち馬は牛の爲めに傷けられ流血淋漓腸を垂れて逃げ廻るといふ慘酷極まるもので、私は話しを聞いただけで氣持が惡くなりましたから此勝負丈けは見る事を止めました、而し其鬪牛場は親しく見て參りました、丁度日本の國技館の樣な構造で屋根が無く、大きさは國技館の四倍もありまして此の中で手負の牛が荒れ廻るのです此鬪牛場には天幕の備がなく雨が降ると次の日に興行を延すのです卽ち雨天順延となるのです、私は此雨天順延と云ふ事は日本などに殘つて居る野蠻時代の遺物かと思つて居ましたが、此所で雨天順延式の興行場を見やうとは思ひませんでした、夫から鬪牛に出る牛を見ましたが成程立派なもので形も大きく申分が無い、若し角にでも何處にでも少しの缺點があれば見物から惡口を云はれるので、興行主は此點に十分注意を拂つて居るさうです、又怪我をした時に手當を施す室が出來て居て此處には外科醫者が詰め切て居ります、格鬪の模樣は馬に乘つた人間と猛牛とが戰ひを始め馬が傷けられて乘人が落ちると牛は猛然として角を振

ひ只一突と人間に迫るを、闘士は巧に赤い毛布で之をあしらひ危急を脱する、牛は赤いものを見れば非常に腹を立てゝ其方へ氣を奪はれるのである、斯る事が繰り返されて見物は手に汗を握るのであります。

夫から有名な賭博國『モナコ』へ行て見ましたが、此處には大仕掛の國立賭博場が出來て居て、此國の王樣が堂元になつて居る租稅も無ければ何もなく此國は賭博から得るテラ錢で立つて居るのであります、賭博場には警察官吏が詰切て居りますが之は喧嘩の取鎭めか、失敗者が海へ投身するのを救ふ爲めです、此國では自分の國の人には賭博を遣らせないのですから這入つた金は滅多に國外へ持ち去られる患ひがありません、ポン引とか客引とか云ふ樣な人間が幾人も居て好きさうな外國人と見れば巧みに賭博場へ引込みます、私も此處へ來たからは長半式でも天賽式でも一つ必勝法を案出して一ト身代拵へてやらうと野心を起し場内へ這入て見ますと、圓い盤があつて之を廻すと同時に象牙の玉が逆に廻り、遂に其玉が一から三十六までの數字と零一つ卽ち三十七箇所に目盛のしてある穴の一ツへ落込む其穴の數字へ張つて居たものが三十五倍の金が取れる仕掛となつて居ます、而し零の穴へ玉が落込んだ時は掛金は殘らず堂親の物となる譯であるが、三十六に對して親のカキ目が一ツでは少ない樣な氣がする之では堂親を潰してやる事が出來やうかと種々考へた人があるさうですが中々好く出來て居て堂親の屁古垂れる事の無いやうになつて居ます、私も大に研究して見やうと先づ土地の新聞社を訪問し研究材料を得ましたが、此新聞が奇々怪々な新聞で全紙に載せるものは講和談判の模樣でも無ければ勞働問題でもない、只だ日々此賭博場で振り出す賽の目の數字を掲載するのみでありますが、販路は非常に廣く英、米、佛の各國に夫々支社があり日本にも大分御得意があるさうです、之は橫濱あたりの外國人が購讀して居るのでしやう、私も大分考究を重ねて長半式に三十六の目を二分して張る事や、天賽式に赤黑へ張る――尤も天賽は白黑ですが――事等を研究しました末、漸く實際に當つて見る事になりまして、私の通譯に張らせますと大分旨く行く、之なら

忽ち成金になれると思ひましたが此通譯が賭博氣が無く往々機會を失するので、今度は自分で張つて見ました處、前に出しやばつて居る貴婦人の大帽子が時々邪魔になつて機會を取逃す、若し誤つて之に觸るれば婦人は躍起となつて怒る、私も日本のゼントルメンとして貴婦人の怒りを買ふ樣な事は出來ぬから遺憾ながら夫で止めてしまつた、若しモウ一度、『モナコ』へ行く機會があつたら其時こそは完全な必勝法で彼等に目に物見せ、日本には何事でも必ず必勝法を編み出す男が居ると云ふ事を知らせて遣ります、（拍手起る）

此樣な次第で私の今度の旅行中見るもの聞くもの一つとして勝負事で無いものはありませんでした、然るに私は今日此聯珠會に招かれて始めて勝負事でない聯珠競技を見ました、聯珠は又とない好い遊び事であります、が本當の勝負事ではない、本當の勝負事は假令ば獨逸が聯合國と戰つた事で其結果は國が滅茶々々になりました、聯珠で負けた處が家が無くなるとか女房を取られるとか云ふ事はありません、危險な投機を試みて一夜成金になるものがありますが聯珠では成金になれない成金の裏は即ち乞食で見込みが外れゝば家藏が無くなる、神戸の勝田某と云ふ成金は昨年まで十二萬圓の税金を納めて居たが今年は二千圓の税金しか納めないと云ふ事を聞いた、聯珠は斯る危險を伴はないから勝負事とは云へぬホンの勝負事の眞似事であります、人は生れて必ず競爭心があるもので人に勝つと云ふ事は實に愉快である、實社會の勝負事は大なる危險がありますが、聯珠には危險がない、若し危險の伴ふ勝負事をして一時間に百萬圓儲けた人と、一時間に聯珠の二番打をして後手勝をした人とあつたとすれば、それは百萬圓儲ける方が快事には違ひない、併し人間は時に活社會の活動を離れて一日の保養を望む天性がある、此一日も何事をもせずには居られません、此時こそ勝負事、眞似事たる聯珠をするが宜しい、之が性來の競爭心を滿たす藥となつて知らず〳〵身の休養となるのであります、芝居見物をして泣く時と親父が死んで泣く時とは同じ泣くのでも譯が違ふ、一方は涙の種が赤毛

布に隠れて一臺裏に消ゆると共にケロリとなるが、一方は泣くより以上辛いのであります、即ち實社會に於ける危險の伴ふ勝負事と勝負事の眞似事たる聯珠競技との差別が茲に有るのです、夫から或る人が折角の休養日を聯珠で頭を痛めなくとも好さそうなものだと云ひますが、之は甚だ當つて居ません、成程頭は使ひますが之は實社會で平常使つて居ない頭の一部分を使ふので藥にこそなれ、毒になる筈はありません、能く聾の早耳と申しまして大きい聲でなければ聞えないのが時に小さい聲で聞える事があります、之は平常大聲が耳に馴れつこになつて其部分の感じが鈍つて居るので通じませんが囁きを聞く方の部分は滅多に使はずにありますからヒョッと聞えるのであります、聯珠に使ふ腦力は平常職業上で使ふ腦力とは同じ頭から出ても部分が違つて居ります、此部分は平常飢じい思ひをして居りますから時々芝居とか寄席とか聯珠會とかで思ふ樣使つてやらないと運動不足になる譯です、此部分は即ち人間の腦髓が鎖になつて居るとしたら其れに附いて居る一番大切の鐶で、此鐶が勝負事や遊び事を欲するのであります、夫ですから一箇月に一回か二回其欲する處の本能に任せて勝負事の眞似事たる此聯珠に存分に使ひ、清潔に且つ健全にして置かねばなりません、私は別に此主意から東京かるた會と云ふものを起しまして百人一首のかるた取競技を奬勵して居ます、すると又或る人から勉強盛りの學生に斯る事で腦力を費させるは能く無いと非難されましたが、私は前の理由で學生に元氣こそ付け學業の妨げにならぬ事を信じて繼續して居ります、斯樣な次第で私は此愉快なる勝負事の眞似事聯珠競技を奬勵致しますが、而し此勝負に勝つたからとて本當の天狗となつてはいけません、又負けたからとて眞劍に落膽してはいけません、勝つても負けても洒々落々の氣を失つてはいけぬ、私に好い手本があります。

此春故人となつた高橋秀朗氏は聯珠も二段でありましたが、碁も二段で、先年私の家へ圍碁の稽古に來て呉れました、處が何時も對局の時に意地の惡い打方をするので私は知らず知らず腹を立てました、或る時私が一生懸命に考へて居て高橋氏を一寸見

ると、局に對する高橋氏が長い羽織の紐を疊へ垂れ遙か遠くに居る小猫をじやらして居ます、私が之ほど腦髓を絞つて居るのに高橋氏はコンナ戯れをして居る、實に人を馬鹿にするも程があると其時ばかりは私も怒り心頭に發してイキナリ其碁盤を高橋氏に捲しつけ座を立ちました、高橋氏は吃驚仰天其儘這々の體で歸りましたが、これは私の修養が足りなかつたので、後で腹を立てた事を悔ひまして直ちに使を出して高橋氏を招き其局面を打ち繼ぎました、諸君は此樣な事の無い樣に此席での勝負は眞の勝負事ではない、勝負の眞似事で、勝つても負けても血の出ると云ふ事はないから心を緩かに持つて一日を樂しく盤に對せられん事を望みます、今日は斯く御招きに預りましたので我田へ水を引く樣ですが聯珠初め其他の遊び事に就て私が思ふまゝを述べた次第であります。

黑岩先生と圍碁

小日向梅軒

先生は圍碁に頗る興味を持たれて、晩年こそ稍や其熱を減じたが、一頃は斯道の名手に就て專心之を研究し、傍ら古今の棋書を蒐めて一室に閉籠り、家人を遠ざけて獨り盤面に對し、名家の碁譜を自ら打試みて夜を徹する事も度々あつた、而も一面早くより萬朝報紙上へ本因坊對方圓社各選手の打碁を載せ、同好者に滿足を與へると共に斯道發展の要素を作つた、今日各新聞が爭ふて圍碁欄を設け、棋道の隆盛を來たしたのは全く先生の賜ものである。

高橋清致氏の談

『私が黒岩さんと相識つたのは明治三十二年頃で、私が五目並べの必勝法を研究し黒岩さんも亦之を研究中であつたので、私は當時近しく萬朝報社の遊技部や弥町の邸を訪問して共に此の研究を續けて居ました、其傍ら私は當時無段ではありましたが碁を人並に打ちます處から、黒岩さんと圍碁を闘はすことも度々ありました、其頃のお腕前は甚だ幼稚でしたが何事にも熱心なお方ですからめき〳〵上達しました、上達すると共に碁の面白さが加はりまして、私と共に本因坊や方圓社へ出掛け研究を重ねる様になりました、其後黒岩さんは圍碁の新手合せを萬朝報へ掲げることにつきまして私に種々相談がありました、當時全國の新聞紙で碁の手合せを出して居たのは時事新報と京橋の讀賣新聞が社前へ大きな盤の様なものを立て、東京の棋客と大阪の棋客と手合をさせて、毎日其幾手かを盤上に現はし通行人に見せた位でありました、處で黒岩さんの注文がなか〳〵むづかしいのです、本因坊門中同士や、方圓社々中同士の手合せでは勝負に實が這入らないから、方圓社派の誰、本因坊派の誰と人を選んで對局せしめたいとの事でした、處が其頃の本因坊家と方圓社との間は餘り圓滑でなく兩門の棋客は殆んど敵視の狀態であつたので、此事を話し出しましたがなか〳〵双方の棋客は承諾せず、私は黒岩君さんと八方奔走し今の本因坊秀哉(田村保壽氏)が牛込矢來町に住み其分りにくい家を半日が

かりで探し當て、漸く其事を申込むなぞ實に困難を極めたものでした、而も此擧たる斯道發展の基である事を黑岩さんは熱心に力說したので、さしも意地ッ張りの多い棋客連も次第に我を折り稻垣兼太郞氏等も此事の成就に骨を折る樣になり、漸く話が纏つて兩派の棋客が對局し、其棊譜が萬朝報紙上へ揭げられること〻なりました、今日各新聞が費用を吝まず爭つて圍棊の新手合せを載せ、棋客も之が爲め相應の收入がある樣になつたのは、全く黑岩さんが種を蒔いたのです、實に斯道の大恩人と云つても能いのです』云々。

本因坊秀哉氏の談

『黑岩さんは先年私の處へも度々稽古に來られました、棋品は私に六目ぐらゐでありましたが稽古の時は勝負より棊の理屈を多く聞かれました、先年私が矢張り萬朝報の勝繼手合で中川龜三郞氏と麻布笄町の黑岩邸で一番二ケ月に亘る對局をした事がありました、勿論一週間一度の打繼ぎで正味七日間か〻り、此棊は中川氏の先で持となりましたが、其折黑岩さんは此七日間キチンと傍で見物し膝も崩さず熱心に見て居られました、一ツはそれが爲め私も中川氏も緊張して勝負が永くなつたのでせうが、或る時は一手に二三時間も費やした事なぞありましたのを好く倦きずに見て居られたものです、私は此時黑岩さんの偉い事を悟りました、それから私は下手の橫好で玉突きを少しばかりやりますので青

山の玉突場で黒岩さんと勝負をした事が度々ありました、玉突では黒岩さんの方が遙かに上手であつたので、黒岩さんは何時も冗談に「碁でいぢめられるから之でいぢめて上げます」と云はれて居た』云々。

廣瀨平治郞氏の談

『黒岩さんが先年始めて私の處へ見えられた時「今日から入門致します」と丁寧に會釋せられた、之は何んでもない樣な事ですが、黒岩さんの身分柄から考へて一寸出來にくい事です、私は其時に黒岩さんは實に謹嚴な人であると云ふ事を感じました、黒岩さんは常に棋客の噂なぞをする時、其人の座にあると否とに拘らず必ず何々君と「君」の字を用ひられた、藝術家尊重の意味から來たのでせうが私は常に感服して居ました、藝を愛すると云ふ點から怪力士荒岩を贔負にされた黒岩さんは、棋界の拗者とまで呼ばれた野澤竹朝氏を特別に近づけて常に其怪氣焔を倦かずに傾聽された雅量にも私は敬服して居りました、曾て今村力三郞氏が私に話された事がある、それは黒岩さんは劫を打抜く主義の人だと、或る目的に向つて進む時は傍目もふらず之を遂行する黒岩さんの氣象がよく現はれて居るではありませんか』云々。

野澤竹朝氏の談

『黒岩さんは勝負事と名のついたものは何んでも好きであつて、一度其道へ這入れば必ずそれに成功しなければ止まないと云ふ性質の人であられた、現に圍碁に於ても自身素人としては强い方の腕前になられたのみならず、率先して萬朝報へ東西選手（本因坊對方圓社）の勝繼碁を掲げ、之が動機となつて棋界今日の隆盛を見たのは黒岩さんの成功と云はなければなりません、私は一ころ月に四五回黒岩邸に招かれて稽古を續けた事がありますが、其折碁に就て種々のお話しを聞きました、其中で之は實に名言であると私が肝に銘じて忘れないで居る事があります、それは碁に無理打ちは決してならぬ、元々字の如く無理である以上成すべからざる事である、それを敢てして間違つて成功した場合は無が有になるのであるから實に道理に缺けて居る、まだ柳の下の鰌を探る方が好いと云はれた、萬朝報に出て居る勝繼碁の手數は當時二十手づゝでありますが、其以前は二十五手づゝでありました、それは少しも早く勝負を讀者に見せたいといふ黒岩さんの考であつたのですが、萬朝報の碁と云へば對局者は徹夜又徹夜で殆んど命懸けの勝負ですから、棋客の方から成るべく手數を少く出してくれる樣に賴み込み、黒岩さんが容易に承知せぬのをやつとの事で許されたものです』云々。

左に掲ぐるは明治四十二年二月稻垣兼太郎氏の著『圍碁の礎』へ黒岩先生が序文として書かれたものである。

稻垣無太郎先生は余が圍碁の師である、今先生が「圍碁の礎」と題する一書を著すに當り、余は門弟の一人として余の兼ねて知れる所を語ることを榮譽とする、敢て先生の爲めに言ふのではない。

余の知友に深く明治初年以來の棋界の遷變に通じ、碁道中興の傑人故村瀨秀甫と交りて、後に方圓社の經營に與つた人がある其人曾て余の爲めに稻垣先生の事を語つた。

秀甫が方圓社を率ゆるに當りてや、多く其頭の碁客を提拔し、又特に意を後進の獎勵に致した、風を望みて來り集る者雲の如しであつたけれども、秀甫は容易に人の碁を褒めず、容赦なく短所を指摘したが、唯小首を傾げた場合が二度あつた、一度は故水谷縫次の碁に對してゞある、秀甫は曰ふた「畏る可きは此人の力である、天稟か熱心か機鋒の鋭きこと其比を見ぬ、若し加ふるに修養を以てせば、群を拔くこと遠きにあらざる可し」と、後に果して其言の如くであつた、今一度は稻垣先生の碁を觀た時であつた、秀甫は曰ふた「此人は碁に於て名人の域に達する素質がある」と。

當時稻垣先生は大藏省の官吏で、單に碁を以て消閑の遊戲と爲すに過ぎず、其品位も纔に二段ぐらゐであつた、然るに容易に人に許さざる秀甫が斯くまでに、語つたは、何の邊にか他と異る處の有るのを認めた爲めであらう。

先生は此語を聞きて一笑に附した、又間もなく其官を辭した、秀甫は酷く先生の碁才を惜み、方圓社に來りて碁道を修めんとを勸めた、先生又笑ふて謂た「我は官吏たるをだに面白しとせざるに、何ぞ碁客となりて一生を烏鷺の爭に埋めんや」と、去て獨立の商業を始め、市中の隱者とは爲つた。

けれども世の碁を好む者が、先生をして安じて算盤珠の間に身を隱す事を得せしめなんだ、機會の有る每に先生を拉し來り、強て碁盤の前に坐せしめた、先生は全く碁を廢して居たけれど、出て來る每に幾分か棋品の進んで居たには何人も舌を捲いた、恰

も其頃の事である、本因坊秀哉氏(其頃の田村保壽)が久し振に地方より歸京し、周く舊知の碁友と闘ひて悉く之を破り、殆んご矢面に立つ者なからしめた、好事の人々相議して、誰人か能く田村の勝誇れる勢を遮きる者は無きやとて、遂に先生の事を想ひ出し、急に誘ひ來りて田村氏と對局せしめた、先生奮躍して田村氏の勢を喰ひ止めた。

先生は商業を營むには氣位が高きに過ぎたと見える、商業の方は多く繁昌を得なんだ由である、其間に方圓社も幾多の變遷を經て、村瀬秀甫も夙に逝き、小林、中川諸氏を經て、今の健造岩崎氏が推されて社務を總ぶるに至つた、先生は勸められて又方圓社に入り、傍に京橋附近に圍碁の指南所を開いた、余が始めて先生と相識つたのは此頃である。

先生今は技量益々進みて高段に達し、昨年田村保壽氏が新旗幟を飜すに至て、舊交を尋ねて本因坊社中の人と爲つた、先生の碁風は素人余の如き者の知る所に非ずと雖も、奇手横溢、時に亢龍の悔あるも、屢々敵をして應手の出る所を知らざらしめ、驚く可き奇捷を奏することが多い、先生を知る人は常に曰ふ、『往年先生をして秀甫の言に從はしめ、今日まで間斷無く圍碁を研究すること他の碁客の如くならしめば、今頃は秀甫の豫言を實現せしならん』と、余嘗て先生に對し親しく此言を傳へしに、先生は呵呵として大笑した、其深意は知り難きも、首肯する如くにも見えた。

先生は門弟に教ふるにも他の碁客と異る所が有る、決して輕々に定石のみを竝べて勝敗を念頭に措かぬ様な打方ではない、如何なる弱者に對しても工夫を廻らし、熱心に奮闘せられる、之が爲めに心を傾けて先生の教を請ふ者は、大に進歩が早いと云ふことである、但し余一人は例外で、如何ともし難き頑鈍であるけれども、其れでも先生の師授の德には深く服して居るのである、先生の門下に常に後進の雲集するは偶然で無い。

此ごろ先生は本因坊秀哉氏と計り、平生門弟と奮闘した局面數十を選び、之に評語を附して、世に示すことにせられた、此書

が即ち是れである、若し此書に就て仔細に學ぶ者は、余の以上の言の過ちで無いことを悟るであらう。

次に掲ぐるは明治四十五年三月北洲學人著『圍碁哲學』の序として黒岩先生が書いたるものである。

余は茲に此の『圍碁哲學』に序するの榮を荷ふたに付き、自分の思ふが儘を取雜ぜて述べて見たい。或は序文の體を得ぬと云はれるかも知れぬが、飾りッ氣の無いのを取り柄と思ふて戴かねば成らぬ。勿論文に脈絡も何も無い。

世間には時々人を驚かせる樣な事件がある。此の圍碁哲學の如きも確かに其の一である。此の一篇が北洲學人と云ふ號を署して、初めて『碁界新報』に現はれた時は、深く注意する人も無かつた樣であるが、一篇二篇と號を追ひて續け行くに從ひ、其の文章の謹嚴精透にして凡俗より一頭地を拔て居るが上に、其の圍碁に關する識見が高くて、云ふ所一々節に當るのみか、斯道の黒人さへも言ひ得まいと思はるゝ點も多く、又大に人を啓發する如き卓説も有つたので、讀む人が段々眼を光らせ、全體北洲學人とは何者だとの疑問が其れから其れと廣まつた。斯く申す余の如きも、疑問の渦に卷き込まれた一人であつた。中には活眼を誇つて『イヤ、何でも三段ぐらゐの實力ある人である』と云ふも有り。又其の文章を見て『上方邊の學者が碁打に聽き聽き自分の意見を加へて書いて居るさうだ』など聞て來た樣に話すも有つた。余は胡桃兒に問へば直に分る事とは思つたけれど、何らも心憎い書き振だから、自分の眼力で看破して呉れやうと殆んど蚤取眼で睨んで居たけれど竟に分らなんだ。

其のうち同氣倶樂部の碁會で、土田君に逢つて何かの話しの序に、土田君自身の口から『アレは僕の舊稿だよ』と打明けられるを聞いた。余は實に驚いた、『君が北洲學人其の人とは全く思ひ寄らなんだ』と答へた。

併し能く考へて見ると不思議は無い。土田君は事業界の紳士で有つて何事にも眼識が高く、文章や其の他の事にも立派な修養を積んで居て、殊に才氣横溢とも云ふ可き所が有つて、又何事をも靜觀する一種の哲人である。碁品は黒人から見れば無論低い

が、初級初段には相當するで有らう。斯かる碁品で能くも黒人も及ばぬ樣な圍碁哲學が作れた者だと怪む人は、却て事理を知らぬのである。全體黒人と云ふ者は、其の一藝に沒頭して居る爲め、廣い見地から藝道を見ることは出來ぬ。成るほど一手一手の解剖的說明には堪能であるが、碁なる者を哲人の見地から觀察して、其の哲理を抉り出すことは其の長所でない。哲理に思考力の問題、或ひは哲理を見る爲めに特に訓練せられた頭腦の問題であつて、卽ち土田君の如く、平生から活社會の變化多き活事業を精密に考究して居る人が却て能く通ずるのである。恐らくは專門の碁打に千思萬考させた所で、圍碁の哲學とも稱すべき意見は、君の半分も出すことが出來ず、却て正鵠を失することか多いであらう。此の點から云ふと君の圍碁哲學は、適人の適論である。苟くも圍碁に遊ぶ者は、黒人と雖も讀まねばならぬ。況んや素人に於てをやである。

聞く所に由ると、君は一時新潟縣に出張の際、五段の故田中政喜氏に就き、殆んど寢食をも忘るゝほどの熱心を以て碁を學んだとの事である。然らば此書は、田中五段の實力が君の靜觀的の明晰な頭腦を潛つて出たと云ふべき點も多いで有らう。

孰れにしても碁は甚だ六かしい遊戲である。余は常に云ふが世界の遊戲中で東西の兩大關とも稱すべきは、東洋の圍碁と西洋の美球（ビリアード）とである。兩者共に、中年の稽古では其の蘊奧を究めることは出來ぬ。何處まで稽古しても猶其の奧がある。併し美球は手先の熟練が主で頭腦を使ふことが少ない。圍碁は知識的遊技であつて、殆んど腦髓のみの技である。此の點から云ふと、智力の進步した人が弄ぶに適する故、圍碁の方が進步した遊戲だと云ふことも出來る。美球は身體の運動になる長所があるが、圍碁の方は老人も之を樂むことを得る長所がある。曾て故伊藤博文公の某碁客に書して與へた詩に『賢愚老此中』と云ふ句が有つた。是れは碁を褒めた意味であるか、或は碁が人を魅することの深きを諷じ暗に戒めを含んだ句であるか分らぬけ

れど、若し遊戯哲學（と云ふも大層なれど）から云へば、賢愚ともに『此中に老ゆ』で無くて『此中に活く』である。今の世の中は文明進歩の爲めに何事も機械的になり、人間自らさへ事務の規律に詰め込まれ、自分の身ながら自分の思ふ樣なことは出來ず、サテ自分は活きた人であるのか、將た齒車攻に前後左右から攻められて居る機械であるのかと、我れながら疑ふ樣な場合も有る。是れでは文明の進むと共に、人間の壽命も縮むのは無理も無い。此の樣に齒車攻の中に立つ吾々は、折々は『遊戯』の中へ逃込まねばならぬ。遊戯の天地のみが今の世の自由界であつて、此の天地に入つて居る間のみが、活きた人間に還つた心持がして、誰もホット息をつくのである。卽ち文明の人は、世に出ては機械となり、遊戯に入つては活返る思ひをするのである。『風塵に老いて遊戯に活きる』是れが眞理である。此の理から云ふと、文明が進めば進むだけ、人は遊戯の必要を感じ、遊戯の精（エキス）たる藝術の必要を感ずるのである。圍碁の如きは遊戯から藝術へ跨つた所に本領を占めて居る。或る碁打が余に向つて切りに『圍碁は美術である』と云はれたが、矢張り此の邊の消息を自然にナーイーヴ的に感じて居ると見える。

又或る碁打は『圍碁を以て人間處世の妙理を含んで居る』と說く。成るほどさうであるかも知れぬ。又支那の書や日本の漢學者などの書いたものには、或は碁盤を天地の象に似通つて居ると云ひ、圍碁を戰爭に通ずるなどとも說き、又傳說にも英雄眞田幸村の如きは圍碁を以て兵法を研究したとも云ふ。是も大に理由の存する事ではある。けれど藝術家と云ふ立場から論ずれば、圍碁は遊戯本位であるから此の樣な事は何うでもよい。有つてもよし、無くてもよし、決して圍碁の價値には關係せぬ。寧ろ遊戯中に里心など起すのは、快味の邪魔であると云はれ得るから、無い方が好いかも知れぬ。圍碁の眞の價値は、遊戯として最上であると云ふ點に在るので、敎訓的な點では無い。圍碁の趣味の中には樣々な心的狀態を含んで居るので、時には抱腹絕倒する如き

滑稽趣味も有る。又時としては、快を叫んで起舞する如き痛快趣味も有ろ。滑稽と痛快とを兼ねた遊戯は圍碁の外にメッタに無い。此の點を云へば、撞球の如きも三舎五舎十舎を避けると云ふべきである。此の外に猶ほ、煩悶も有れば絶望も有ろ。而かも其の煩悶と云ひ絶望と云ふものが總て藝術的遊戯的であるから、所謂無關心なる無心配なる藝術的の煩悶懊惱、藝術的絶望悲憤で、其の上に繪畫其他の藝術より得る感じよりは聊か實感に近い所もある。是れ等が總て碁の遊戯的價値を大ならしむる所以の者で、圍碁が文明世界の多忙な中にも、猶ほ多くの人を魅するのは茲に在る。序ながら碁盤の異名では、支那人の附けた『木野狐』と云ふのが最も面白い、余は絶妙だと思ふ。

猶ほ言ひたき事は有れど、彌まで紙面を塞いでは、版元たる胡桃兄に叱られる恐れがある。茲に謹んで此の書を天下の同好に推薦し、其の必讀を促すと爾か云ふ。

次に掲げるは黒岩先生が大正三年九月廣月絶軒氏著『碁盤の上から』の巻頭へ書したものである。

（一）

總て藝術といふものは、批評を受くろが爲めに進歩もすれば其美點をも發揮する、批評は則ち藝術の指導者である、然るに我が國の圍碁に於ては批評といふ事が甚だ不振である。

『おか目八もく』といふ諺は、或る意味に於て批評を奬勵する言葉の様にも聞こえる、然るに實際を見るに啻に助言が禁ぜらるるのみで無く、圍碁其事に對する藝術的の批評が曾て多く行はれた例がない。

碁の强い人に言はせると、碁といふ者は對局者より外には眞の掛引が分らぬから決して批評す可き者でなく又批評の出來る筈

の者でないとも主張する様である、成る程是には一理はある、ケレド二理はない三理もない、單に一理あるに止まる、即ち狹く碁の局面のみを知つて廣く藝術の世界を知らぬ論である。

（二）

昔から若し日本に圍碁に批評があつたとすれば其の批評は、碁の譜に於ける序跋の類である、序跋は決して圍碁の名人のみが書くとは限つて居ない、圍碁の力の乏しい儒者の書いたのもある碁客の書いたのもある。此の方になると支那の方が日本より進んで居たとも言へる、支那の方には少しばかり圍碁の批評めいた文書が著はされて居る。

併し其等の者を引つ括るめて觀察するに、藝術的批評としては甚だ當を得て居ない、彼等の多くは圍碁の理を天文の理に牽强するか、處世の訣に附會するのである、併し其は無理だ、圍碁の理と天文の理と如何程似通ふ所があるにせよ、又實際に圍碁の歴史の中には澁川春海の如く碁師たる事を罷めて幕府の天文方に榮轉した例もあるにもせよ、天文は天文で圍碁は圍碁だ、彼を以て之を律し、之を以て彼を解釋する事は出來ぬ、更に圍碁と處世の道と似通つて居る點なども實は一部分の現象である。

本來、藝術の多くは（音樂や建築を除きて）模倣藝術と云はれ、天然又は人事の或方面を模倣又は縮寫した者である、繪畫でも彫刻でも爾うである、圍碁は模倣藝術といふものゝ中では無いけれど、多くの藝術が遊戲であると同じく圍碁も遊戲から發して居る、而して遊戲は大抵の場合が人生の縮寫である、其理は子供のママゴトを視ても分るではないか、圍碁の如きは、他の決勝的遊戲と同じく大體に於て、人生の生存競爭を縮寫した者である、若しも人類の天性に少しの競爭心といふ者がなく、過去幾千萬年の間、競爭に競爭を重ねて進化し來つたといふ實歷が無いならば、少しも圍碁を面白しと思ふ趣味が起らぬかも知れぬ、趣味が起らぬならば藝術の起る筈が無い、圍碁其のものが根本から生れ出ずに終つたであらう。

故に圍碁は此意味に於て人生の縮寫である、又其の縮寫であるに從て、人生の或る事物に似通ふて居るのは當然であらう、殊に人生の處世の道中に於て、競爭を意味する事柄には最も痛切に似通ふ所がある、戰爭の如き、外交の如き、取分けて同一なる道理の貫いて居る點が多い樣に見えるでは無いか。

とは言へ圍碁は圍碁である、人生は人生である、決して圍碁といふ技術の眞理が人生に似通ふと否との點にあるでは無い、圍碁の眞價は眞價として獨立した者である、又圍碁の眞理とても其の通りである、碁の理が何から何迄人生に適應せらるゝ譯ではなく、又人生の理が悉く碁の局面に應用せられるといふ譯ではない。

人生を聯想しつゝ圍碁を樂しむといふのは、善い樂しみ方である、けれど其聯想か圍碁の上達に資するや否やは疑問である、如何かすると人生處世の要道は知り盡して居る癖に、碁を打たせらるれば存外弱いのもあり、處世の道には九子筋（セイモクスヂ）でありながら、碁盤の前へ出ると急に威嚴の備はる人も無いではない。

此の邊の理由より總評して、今迄の、天文に喩へ、兵法に喩へ、處世法に喩へなどして圍碁を批評したのが眞の批評であるとも言はれぬ、さういふ批評が如何に發達したとても、碁に對する眞の批評が盡くされたとは言はれぬ。

（三）

余の知れる範圍に於て、圍碁に對する藝術的の批評が發芽したのは、今の方圓社の最初の頃、其の社から發兌した圍棋新報に三好紀德の筆と稱せらるゝ、碁評の現はれた時である、彼の評は方圓社長村瀨秀甫の講評を、三好といふ能文の士が筆記したのであらうと思はれる故、實は村瀨秀甫の評で三好の評では無い、けれども三好の筆を經ざる村瀨の評が如何に無味淺趣であるかは、同じ誌上に時々其が載つて居るので分る、余が批評といふのは、單に碁師の講評のみをいふのでは無い、碁師の講評なれば

明治の時代に發芽したではなく碁界に師弟の關係の生れ出でたる頃から現はれ始めたに相違ない、余のいふ批評とは『直し』もあり『說明』もあり『理論』もあり『例解』もあり、眞に人をして滋養分を攝取するの思ひあらしむる藝術的の所産である。

（四）

三好紀德が世を去つて以來、碁の批評に見る可きものが無かつた、が圍碁が新聞紙に掲載せらるゝに至つて、大抵は其終りに講評が掲げらるゝ事となつた、其講評は碁師の言葉を其の儘でよい筈であるけれど、其れではヤハリ無味蠟を嚙むが如き者であつて、讀者が滿足しない爲めに、近來は、講評が追々批評化し、碁師自らが批評家の如き態度にも移り行きつゝある、余の知れる範圍に於て、廣瀨六段の如きは碁師としての講評に巧妙を極むるは勿論の事として、批評家としても何人にも互先を許さぬ手腕がある、其の他野澤四段でも井上四段でも瀨越四段でも、總て立派な手腕であつて、昔の批評の樣に『碁路三百六十一、之を天の暦數に象る』などと陳腐な事は言つて居らぬ、啻に碁を學ぶ人に取つて咳唾皆珠であるのみならず、碁に熱心の乏しき人をさへも引込む程の力がある。

（五）

之に對比して更に今の名人本因坊秀哉先生の講評竝に批評は、何人も聞かんと欲する所であるが、先生は淵の如く默する人である、先生自ら批評を公にせらるゝ事は極めて稀で、其の講評と雖も多くは口授して筆記せしむるに止まる、之を惜む可しとして余の知れる某氏は常に秀哉先生の爲めに筆記の勞を取つて居た、又此頃に至つては、先生の批評及び講評を新聞紙に載するは多く井上孝平氏の筆である、氏が文學の上に造詣の深き事は、單に國學院の出身者たるのみではない、文藝の批評に於ても一家を爲すに足る素養がある。

然れども以上の總てを見渡すに、猶ほ專門の圍碁批評家ではない、前に記した三好氏とても專門の批評家とは言はれぬであらう、何事も分業的に進歩し行く今の時代に最早專門の圍碁批評家も出現す可き筈である。斯く思ひて見渡せば、關西に於て『坐隱談叢』の著者故安藤氏、東京に於ては『棋界新報』の胡桃氏、『棋道』の關氏、『虎の卷』の矢野氏、及此の書の著者廣月氏の如きが殆んど專門の批評家といふ可きではあるまいか。

（六）

余は是等諸氏の批評家としての手合如何を詳知せぬけれど、廣月氏は批評家たる上に棋品は初段である、或は單に批評家といふよりも碁師とか碁伯とかいふ可きであるかも知れぬ、が併し此の書に於ては批評家として世間に對して居るらしい。

其に廣月氏は日頃神妙に本因坊秀哉先生の講評を聞き、之を自家の自由自在なる批評文に寫して世に頒ちつゝある『高等圍棋研究集』の如きが其である、此の點からいふと、氏の批評は文と意とに於て雙絶であるかも知れぬ、眞逆に絶軒といふ號が此の意味から來て居るのでは無からうけれど、余は氏を以つて圍碁批評家中の高手と崇めざるを得ぬ。

更に此の書に至りては、氏が秀哉先生の講評を聞きて之を筆記したる者ではなく、碁に對する自家の該博なる知識を本とし、碁の理やら手段やら打つ者の心得を種々の方面から解いた者である、氏が圍碁に對して批評家たる獨自一個の眞價は、秀哉先生の口授を筆記した者に由りてよりも、却つて此の書に由りて現はるゝかも知れぬ。

（七）

さて余は何が爲めに斯くも長談義を重ねて來たか、余は圍碁の批評といふ事に就て一言したい爲めであつた、他の藝術に於ては批評家必しも實行家ではない、然るに圍碁に於ては殆んど實際の圍碁師の外、碁を評し得ぬ事の樣に思はれて居るのは何故で

あるか、其は碁といふものが他の藝術とは違ひ、極めて成績の分り易い者であつて、直ちに勝敗と爲つて現はるゝ爲めである、と一般に傳へられて居る。

若し此の言の如くならば、批評といふものは一種のゴマカシであるといふ事に當る、如何に批評した所で實際の勝敗の上に結果が現はるゝからゴマカシ切れまいといふ樣に當るではないか、けれど總て藝術には局外者の批評がある可きである、角力に於てさへ見巧者の批評があるではないか、其の見巧者といふものが實際力の強い人ではない、蚊の脛的の弱々しい人が多い、けれど力士は斯かる人の批評を聞いて利する所が多いといふ事である、實をいふと其は力士のお世辭かも知れぬけれど、兎に角局外者の批評が圍碁に於てよりは進んで居る。

獨り圍碁に於て批評の進まぬのは、圍碁が其れだけ深奥で素人に分らぬ爲めであるといふ人もある。

けれど必ずしもさうとは限らぬ、或は圍碁の批評に從事するといふ事が、何等の收入をも持ち來さぬ、全く暇つぶしであるが爲めかも知れぬ。

假令へば本因坊秀哉先生の打つ手だとて、批評家は『此の手は斯る場合に於て秀榮は斯く打つた、秀甫は此く打つた、秀策は斯く打つたが秀和が斯く講評した』といふ如くに歴史的の批評をする道もある、斯かる事は本統を言へば碁師の領分といふよりは批評家の領分といふ可きであらう。

或は又、未だ批評家をして所見を作らしむるだけに碁の眞理が闡明されて居ぬが爲めかも知れぬ、今までの所、碁の理といふものは極めて之を說く人の我儘に屬する者であつて、少しも科學的に抽象せられ說明せられなどして居ぬ、是では批評家の賴る可き標準がないから、批評の出來ぬ筈である。

然し斯くすれば、圍碁に批評の起らぬのは、圍碁が進んで居る爲めではなく、猶批評の標準の分る迄に圍碁が進んで居ぬが爲めであると言はゞ言はれる。

果して然りとすれば此の點は批評家が勉むるよりも碁師が大に勉めて、今よりも以上に碁理を闡明す可き責任があるともいふ可き事の様に思はれる。

（八）

とは言へ本統に考へて見ると、碁といふものは我國に於て最早是以上に進歩の道の無い迄に進んで居るのかも知れぬ、何しろ政府の力で祿を與へ碁家四家を作つて競爭せしめたから此の上進歩の餘地がなく、而かも猶批評が分らぬ所を見ると碁といふものは批評の標準に絶する程奥深い者であるともいはれる。

果してさうであらうか、余は更に其の上の疑問を揭げて圍碁を研究する人に質したい、若し全智全能なる即ち知らざる所なく能はざる所なき神樣をして本因坊に對局せしめたならどうであらうか、本因坊を九段即ち名人とすれば此の人の打つ手には毫厘の隙も無く、神樣と雖も後手へ廻つては勝つ見込が無いであらうか。

余は人間社會の名人を其ほど强からうとは思はぬ、如何に名人でも神樣と對局せば先を以て負けぬと限つた譯ではあるまい。

此の『先を以ても負けぬとは限るまい』といふ極めて些細なる所に、實は非常に廣大なる眞理の世界がある、此の世界との距離は今迄圍碁が進み來つた距離の幾倍あるかも知れぬ、此迄の距離は兎も角も歳月を以て渡過し得たけれども、此の後の距離は果して渡過し得るものと斷言することは出來ぬ。

渡過は出來ぬ迄も一歩でも深入りするのが、碁師の心掛けで無くてはならぬ、余は、碁師が果して批評の標準とす可き眞理を

潭山に見出す迄進むや否やを知らぬけれど、圍碁に批評家の領分の甚だ不安固なるを見て平生何の故にやと怪み、又圍碁が猶ほ人の上にも進む可き餘地のあるを思ふ者である、若し此の餘地の中へ更に幾步か進み入りて今一層の眞理を捕へ來るを得たならば、啻に批評家が標準を得るのみでなく、吾々の如く碁を學ぶ人も進步の便宜を得るでは無からうか、僭越ながら平生の思ふ所を書して廣く世に質問するのである。

萬朝報編輯局に於て

大正三年九月中浣　黑　岩　淚　香　記

此の三文章を見ても氏が如何に圍碁に興味を持ち、如何に之を研究したが好く現はれて居る。

黑岩先生と歌留多

小　日　向　梅　軒

昔からある百人一首のかるた遊びは、女子供の遊技として、古風な家々で正月の徒然に弄ぶくらゐが關の山であつたが、明治三十七年日露戰爭の起つて、國民の元氣は彌が上にも旺盛を極めた折、萬朝報社の主催でかるた競技會が開かれ、其競技方法の頗る模範的で血氣の青年男子が輸贏を爭ふに恰當なるものがあつたので、忽ち都下にかるた熱が熾んになり、續て『東京かるた會』が起つて之に附屬す

る五六の會が出來、夫より各地方に斯技が傳播して今日では全國を通じて何々會と稱するかるた團體が千を以て數ふる程の全盛とはなつた。

斯の如くかるた遊技を勃興せしめた本尊は誰あらう即ち東京かるた會々長であつた黒岩涙香先生である、先生は少年時代家庭でかるた遊びを覺え性來の負けず嫌ひは忽ち一廉の取り人となり、其頃の遊び仲間から恐れられた腕を持つて居た、而も中年時代には忘れた樣に之を手にしなかつたが、明治三十七年の正月新橋日吉町の玉突場日吉亭で、何時も玉を突合ふ工學士若目田利助氏が『かるた必勝法』と云ふ書を著はし、其寄贈を受けて之を一讀するや、昔しのかるた興味を誘ひ起し、若目田氏の外、同じ玉突友達なる書肆新橋堂主野村鈴助氏等と謀り、萬朝報紙上に此遊技を宣傳して同年二月の紀元節に日本橋萬町の常磐木倶樂部で始めて公開的のかるた競技會を開いた、此會はかるた界今日の隆盛を來した導火線とも云ふべき記念の會であるから、茲に其當時の新聞記事を掲出する。

東京かるた會

一昨十一日日本橋常磐木倶樂部にて催したる東京かるた會は府下の小倉會、紅葉會、千代田會、曉會、泉倶樂部を初め横須賀の有明會、靜岡の春日會なぞより各戰士を選り、會する者約百名、珍しき盛會にして本社遊技部より寄贈したる秀技第一等金牌は小倉會の高田信二、同二等は紅葉會の福原秀、同三等は千代田會の小關東八郎に歸し、四等賞は靜岡の横淵靜六、五等賞は紅

黒岩涙香　集會の山田均、六等賞は曉會の増田謙吉に歸したり、尙ほ席上に於て有名なる若目田工學士飛入としてチャンピオン達と競技したるが其手腕の鮮かなる流石に一同感服したり（明治三十七年二月十三日萬朝報所載）

此席上で先生は『歌がるたが昔から我國で行はるゝ最も優美なる社交的遊技である事、此遊技の特長は腦力を機敏に働かせ注意力を增進される等にあれば大に之を奬勵する』との意味の演說を試みられた、第一回の競技會が右の樣に盛會であつたので、先生の熱心は愈々其度を增し、在來のかるた取札は文字に大小などがあつて競技の公平を缺き又家々に依て競技方法の違ふは斯技の發達を妨げるものとし、一定の平假名を用いた取札を造り之を『標準かるた』と名づけ、若目田、野村氏等と共に『東京かるた會』を起し、自ら會長となつて此標準かるたを使用する事にした、其當時設けられた競技規定は左の如くである。

東京かるた會競技規定

第一章　競技總則

第一條　競技は二人相對して行ふ者とし各自の持札は廿五枚を定數とす而して競技に使用する札は幹事の配布せる者に限る

第二條　對技者の指定は抽籤を以て決し其指定に對しては異議を申立つるとを得ず

第三條　札に早く手の觸れたる者を以て其札を取りたる者とす

第四條　早く持札の絶無となりたる者を勝者とす

第五條　第一回競技に於て勝ちたる者を第二回の競技者とす（以下倣之）

第六條　連勝せる競技者が入賞豫定人員の殆んど倍數に達したる時は入賞者豫選競技を開始す而して此競技の勝者を當日の入賞者とし更に入賞競技に移り其等級を決せしむ

第七條　入賞者競技を除き其他の競技に於ける負者は爾後の競技に參加する事を得ず

第八條　前條の詮衡を經て最後に殘りたる全勝者を第一等賞とし次の成績の者を第二等とす（以下倣之）

第九條　札の配列は膝の前方縱三段横三尺の範圍内とす

第十條　讀唱は全歌とし如何なる理由ありとも讀返すことなし

第十一條　競技中は札の整理以外『マッタ』を禁ず

第十二條　札を取る手は配列せる札の後方に置く可き者とす

第十三條　札を取る時は二本の指（人さし指及中指）を用ひ藥指又は小指を添て手の甲にて札を蔽ふ如き取方をなすべからず

第十四條　取札に觸れたる手が同時なる場合は其札の所有者が權利を得る者とす

第十五條　審判は幹部に於て必要と認めたる場合に限り附する者とす

第十六條　札を取るに際し目的の札を其附近の多數と共に動かし其取否明かならざる時は委員は無効を宣告し遲れながらも確實に目的の札に手を觸れたる者を以て其札を取りたる者と判定す

第十七條　競技者竝に委員は競技中常に札の紛失せざる樣注意す可し而して尙ほ若し紛失したる場合に其紛失したる札の讀ま

れたる時は競技中善意にして且つ早く其紛失せる旨を發言せる者に權利を生ず

第十八條　競技者は『キマリ』字其他一般の札が已に讀まれしや否や何人にも問糺すことを得ず

第十九條　競技中一人が對技者の札を取りたるときは其都度自己の持札一枚を對技者に送る者とす

但し送札は送る者の任意とす

第二十條　一度送りたる札は如何なる事あるも他の札に換ゆることを得ず

第廿一條　『お手附』とは讀まれたる札が對技者若くは自己の持札中になき時誤て對技者若しくは自己の札に手を觸れたるものを云ふ

第廿二條　一方の競技者が『お手附』を爲したる札或は札を押へたる指に他の一方の競技者が手を觸れたる場合も亦之をお手附とす

第廿三條　『お手附』を爲したる時は其都度對技者より對技者の持札一枚を受取る者とす

但し送り札は送る者の任意とす

第廿四條　讀まれたる札が雙方何れにもあらざる時雙方へお手附したる時は二枚を受くる者とす

第廿五條　競技者に端數を生じたる時は幹事中より抽籤を以て對技者を出す此對技者を『消止者（けしとめ）』と云ふ

第二章　競技者の心得

第廿六條　競技者は宜しく公明に靜肅に競技を行ひ假初にも卑怯、粗暴の擧動ある可からず其爭や須らく君子たる可し

第廿七條　競技者は委員の裁斷に對し絶對に服從す可き者とす

第廿八條　競技の爲め其名を呼出されたる者は直に指定の席順番號を聽取し靜肅に競技場に入り指定せられたる座席に就き競技の準備を爲す可し

第廿九條　競技者呼出しに際し競技場に入らざる者又は指定の座席に着かざる者は競技より除去せらるゝ事あるべし

第三十條　競技終りたる時勝者は其結果を競技係に申出で直に競技場外に退出す可し

第卅一條　競技中飲食物を用ふることを禁ず

附則

第卅二條　本規定に明文なき事項は幹事の合議に依り之を決す

何事でも徹底的に研究せねば腹の蟲が納まらぬといふ先生の事なれば、其頃家の書生であつた石川露香氏（其後東京かるた會の競技會で五度まで一等賞を得た人）を始め五六の同好者をして東京かるた會附屬の『村雨會』と云ふ小團體を組織させ、自ら後楯となつて他の附屬會に對抗する强選手の養成に努めた、一時斯界の常勝將軍と稱へられた石川露香氏の手柄は實に此村雨會の烈しい練習の結果であつて所詮は此會の後楯たる先生の賜物であつたのである、東京かるた會の生れた翌年卽ち明治卅八年一月元旦に先生は萬朝報紙上に『小倉百人一首かるた早取祕傳』と云ふ三頁に亘る長講話を揭げて、玄人筋をアッと云はせ、且つ一般同好者に多大の敎訓を與へた、此講話は先生がかるた遊技に對する總ての心持ちを充分に云ひ現はし、斯道に遊ぶものゝ玄人は勿論初心者の金科玉條とも云ふべきもの

なれど、餘りに長文なるを以て玆には其一部分を抄錄するに止めた。

小倉百人一首かるた早取秘傳

百人一首のかるたは面白い遊びであります、日本全國津々浦々まで行渡り、殊に新年の慰みには此上も無い樂みです、來る新年は軍國の新年ですから、斯かる敵味方に分れて爭ふ遊びが最も適當で有りませう、又費用とても掛りません。

若し軍國の新年に遊んでは成らぬと仰有れば其れまでゞすが、併し健全な國民は善く遊んで善く働くと申します、善く遊んで心の塊を掃除すれば能く働くことが出來るのです、機械でも時々休んで掃除するではありませんか油を注ぐでは有りませんか、どうせ遊ぶ事とすれば、他の遊びよりは百人一首が好からうと私は思ふのです。

實を云ふと同胞兄弟が戰場に重い任務に服して居られるのに、留守の者が遊ぶ事を研究するとは餘り心無い仕方で相濟まぬ氣も致しますが、どうか歌留多を取る程の人は精々恤兵にも力を盡して下さい、歌留多は取るが獻金はイヤだなどと云ふ方は國の賊ですよ。

此頃の歌留多の流行

此のごろ歌留多の流行することとは驚く可きばかりです、一しきり『カルタ』と云へば花合せかトランプかの様に心得る人も有る程でしたが、今では『歌留多』と云へば誰も百人一首の事だと合點します、奧様や奧様の交際には、殆んど無くてはならぬ道具ともなり、從て之を上手に取る術を知らぬ方は、不自由な場合が多いのです。

更に殿方の方を見れば之も同じ程の流行で、學生の社會などには、小倉會だの、紅葉會だの、和泉會、東會などと市内のみに二

十條例の團體が有り、多くの學校に機脈を通じ又其の上に東京かるた會と云ふ廣い團體が有ると云ひます。

取り方の巧拙

何事にも上手下手が有ります、百人一首の歌留多にも上手下手が大いにあります、何々會の會員と名乘る人達は、種々に取り方を研究し、上手な上にも上手と爲り、通例の人を相手にする場合には自分が九十五枚を持ち相手に僅か五枚を持たせても負けぬほどになつて居ます、其の取方の早いことは只驚くの外は無いのです。

どうしてさう早く取れるか

ハテな、どうすれば其の樣に早く取る事が出來ませう?、サア其所が術です、秘傳です、方法です、方法を知つたと知らぬ人とには雲泥の違ひが有りますので、方法を知つた人を私しは玄人と云ひ、知らぬ人を素人と云ひます。

素人と玄人との差

素人が如何に熟練したとても到底玄人には及びません、眞に勝負をすれば十番が十番悉く負かされます、所が世間の孃樣や奥樣には、失禮ながら素人の取り方が多い、勿論遊び事ですから素人で好いのです、玄人と爲るには及びません、けれど素人と玄人との取り方は一目見れば直に分るので、少し玄人筋の秘傳を練習した人から見ると其の不調法な所がお氣の毒な樣にも思はれます。

ですから私しは茲で世間の素人の方に對し、玄人の取り方を申し述べるのです、玄人の方はお聞なさるには及びません。

取り方の功能

若し玄人筋の取り方を少し稽古すれば、餘り多くの月日を經ぬうちに、目に立つほど上達します、噓の樣ですが決して噓では

ない、若し玄人筋の方法を知らずに稽古した日には、稽古に骨の折れる割合には手並が上達せぬのです、尤も玄人の取方を悉く證明する事は出來ぬ、玄人は玄人だけに銘々人に知らさぬ自分だけの秘傳を以て居ますので、其の秘傳に私しにも分りません、私しが述べますは、道理の上から斯うすれば早く取れると云ふ道筋と實驗に得た心得です、此の道筋を歩んで行けば玄人に成る事が出來るのです、總ての玄人が皆此道筋を辿って玄人と爲つたのです、お靜かに一節一節注意してお聽取下さい（以下第一章より第五章に亘って早取方法を詳述しあれど略す）

歌留多遊びの性質

全體遊技と云ふ者は何の利益が有て社會に存在して居るか、私しは淺學にして之に答へる事は出來ませんが。

若し其の遊技が（一）比較的に費用が少く（二）人と人との間を親密にする力が有つて（三）不道德の心を誘起する恐れが少く（四）身體又は健康に危害を及ぼす恐れもなく（五）傍觀者にも當人達にも、餘り雜風景だとの感じを起させず（六）津々たる興味が有つて（七）其國の社會上の風俗より自然に生じて（八）上下一般に行はる可き性質が有つて（九）法律の上から咎められる性質でなくて（十）少しの間にも樂しむ事の出來る樣な者ならば先づ良き遊戲と云つて差支無からうかと思ひます、百人一首の歌留多遊びは卽ち其の一です、其れに此遊戲は日本の國とは殆んど歷史的の關係も有る樣に思ひます。

私しは自分が此戲遊を好みはしますけれども、强いて誰をも彼れをも是へ引込まふとは申しません、多寡が遊戲であるから何も之を試みるのが國家の急務とか國民の義務だとか申しはせぬのです、縱しや誰れ一人此の遊戲を顧みる者が無い樣に成つたとて別に悲憤慷慨は致しまをん。

併し此遊戲に優れた所も有るのです、試みに之に入て見れば分るが、腦力の最も多くを最も早く機敏に働かさねば成らぬのは

是れに如く者は殆んど有りません、耳を働かせる、目を働かせる、手を働かせる、其間に心は頻々と動いて、キマリ字の上り下りに注意し、記憶力を有らん限りに働らかせ、上の句を見れば下を、下の札を見れば上の句をと本統に一寸の緩みも有つては成らぬのです、其れだから少し腦が停滯して敏活の働き方を缺く樣な心持のする場合は此遊を試むると直に直ります、私しは之を實驗して腦の働きの良くなつた事を感じますから、常に職業上心を一方にのみ集注して居る人などには宜しからうかとも思ひます、併し之は醫學專門のお醫者に聞かねば分りません。

先づ是くらゐに致して置きませうが、何事も經驗を積まねば上達しません、此の遊戲なども經驗を積むと追々に種々の秘傳を覺え、私しが以上に說いた事などは、お茶の粉に成つて了ひます、後には總ての心得や、並べ方や取り方など、規則以外に發達します、今の名人は皆其れであります、決して規則や秘傳にのみ拘泥して居る人に上手はありません、斯く申す私しなどは矢張り拘泥家です、何をさせても口ほどに行ひが行かぬものです、若し初心の方々が私の言ふ所に由り、多少の心得を得ば私しは滿足いたします。

斯て先生の起した東京かるた會は愈よ隆盛となり年三回（十一月三日の舊天長節、一月五日の新年宴會、二月十一日の紀元節）發會式を擧げた緣故で日本橋常磐木倶樂部で競技例會を開き、特に萬朝報社から此競技會の最優勝者へチャンピオンエンブレムを與へ且つ入選者一同へ賞牌を贈つて斯道奬勵に努力した、其後十一月三日の會は同月二十三日の新嘗祭に變更され、一月五日の例會は何時か全國競技大會と變じて依然引續き年三回の大會を催し來つて、今日では此競技會は斯界最高の檜舞臺と

なり、此競技に參加せぬ中はかるたを談ずるの資格が無いとまで云はるゝ様になつた、而も一月五日の全國大會には各地より代表選手が腕試しに參加して頗る緊張した大競技が演出される、當今何々會と稱するかるた團體は全國を通じて千餘に及んで居るが、都下に於ける團體のみにても

村雨會、明靜會、若葉會、東會、吉野會、小倉會、秋風會、白妙會、紅楓會、金王會、紅葉會、千鳥會、春風會

等あつて一團體に多きは百餘人の會員を有して居る。

一時衰運に傾かんとした我國特有の此の優美なるかるた遊技をして斯の如く今日の盛大を得さしめたのは全く先生の力である。

俚謠正調備忘錄

湯朝竹山人

(一) 正調俚謠の創始

想ひ起す。明治三十七年二月五日、日露外交斷絶、翌六日聯合艦隊佐世保を發し、その十一日に宣戰の大詔は喚發されたのであつた。

その前年「萬朝報」は開戰論者と非戰論者とで言論に一致せざるものがあつた。然るに社長たり主

筆たる黒岩先生が『朝報は戰ひを好む乎』の一篇を掲げて、朝報の開戰態度を明にし、非戰論者は連袂辭任し、やがて『萬朝報』は最も猛烈なる征露の主張を侃諤し、焔を吐くが如きその言論は、一世を導きて開戰氣運を震撼せしめた上に、最も有力なる効果を發揮したものであつた。

同年八月、黄海の大海戰あり。次で十月、沙河の大陸戰あり。我が先生は、號外を見る毎に、國民の士氣を振起せしむること、國民の後援の緊要なることを力說し、また運動し、更に當局者をして激勵せしめたことは世人周知の事實である。

その年の十一月二十八日の『萬朝報』に『正調の俚謠を募る』の趣意書が發表された。いふまでもなく涙香先生の筆になつたのである。茲にその全文を示す。

正調の俚謠を募る

昔より日本に三大詩形あり、其一は五七五七七の三十一文字式なり之を和歌と云ふ、其二は五七五の十七文字式なり、之を俳句と云ふ、其三は七七七五の二十六文字式なり、之を關東にては『ドヽ一』と云ひ關西にては『ヨシ此』と云ふ、猶ほ各地各様の稱呼あるべし、其の何の意たるを知らざるも、要するに日本に固有なる、且つ最も普及せる俚謠なり。

右のうち三十一文字式と十七文字式とは上下一般に行はるれど、獨り二十六字式に至りては士君子之を顧みず、我が朝報の如きも夙に通俗文藝に相當の地歩を得せしめんが爲めに和歌俳句より下りて狂歌、狂句、謎々、語呂合せをまで募集して發表せるも獨り『ドヽ一』のみは斥け來れり、朝報發兌以來四千餘號に及び一回も『ドヽ一』なる者を紙上に掲げざるは諸君の知りて而して

或は怪み或は激賞する所なり。

何故に『ド、一』は斯の如く貶せらるゝや、他無し、近來其の調の墮落して單に遊女冶郎の心意氣を述ぶるか、然らざるも卑猥取るに足らざる如きに至りたればなり。

然れども俚謡の本來は斯の如き者に非ず、俚謡は平民詩なり、以て民俗を知る可く、時代と社會との風尙を察す可し、孔子の選したる詩三百、經典として三千載に垂るゝも實は當時の俚謡のみ、吁、ド、一は俚謡の末にして俚謡を汚辱するものか。

近く我が潮來節に至るも猶ほ聞く可きものあり、其以前は和歌の優美と俳句の簡雅との外に大和民族の勇邁なる氣風より出でて或は天地の美を詠じ、或は人情の妙を謳ひ、聞く者をして一唱三嘆せしむるも有りき、今にして之を俚謡本來の正調に復らしむるは、縱し風教を益するほどの力無しとするも、必ずしも無用の事にあらじ。

俚謡は和歌にも俳句にも優る點なきに非ず『ウタ』と云ふ者の本來は發聲して『ウタフ』に在り、俳句は短かくして謠ふに便ならず、和歌は特別の作曲を要す(『君が代』の如く)獨り俚謡は各地到る處に古來謠ひ來れる種々の曲あり、得るに隨ひて如何やうにも謠ふ可きなり、是れ大に『ウタ』の本旨を得たる者に非ずや。

以上の意味に於て、朝報は今日より『俚謡正調』と題して二十六字式の『ウタ』を募る、嚴重に精選して眞に俚謡の正調に叶へる者を紙上に掲げんとす、贊成の方々は其作歌を郵便はがきに認め『俚謡正調選者』に宛てゝ贈られよ、精選の結果紙上に掲ぐ可しと認むる者あらば、毎一首に對し金一圓の報酬を贈る。

この趣意書一篇によりて、先生の俚謡觀を知ることができる。その文中に一言の時局について述ぶるところはないけれど、大和民族の勇邁なる氣象の詠嘆を卓勵されたことはこれを看取される。

果然、この募集に應じて投吟のハガキは日々山と積まれ、先生は一人りみづからこれが選にあたり、明治三十七年十一月三十一日の『萬朝報』紙上『俚謠正調』應募當選の第一吟として發表されたのは實に次の作であつた。

戟を枕に露營の夢を、心ないぞや玉あられ　（甲州、松の家）

選者曰く、之を一吟すれば、滿洲に野營する勇士の風貌、眼前に浮ぶが如きを覺ゆ、所謂る景情躍然たる者か、殊に調の高きは近來の『ド、一』なる者に匹あるを見ざるなり。

最初、この時局吟の傑作が現はるゝや、一般讀者は感歎やまなかつたのである。當時入選主席は多く對時局の作であつた。試みにそのころの主席吟數首を紹介しておきたい。

打にゃ打れず打ねば濟まず、月のきぬたに母の影　（淺草、むらさき）

選者曰く、『濟まず』の一句、是れ娘ならずして嫁なるを知る可し、良人征途に在り、留守の家庭に嫁と姑の睦まじさ、國俗の美を發揮するに足る、昨紙露營の勇士が妻にもやあらんか、長安一片月、萬戸擣衣聲、李白が絶唱、此の情趣なし。

啼いて哭るな可愛の駒よ、こよひ忍ぶは戀ぢや無い　（負傷歸休兵、三平）

選者曰く、一騎夜に乘じて轡を出づ、忍び行く先は戀に非ず敵の陣なり、愛馬嘶かんと欲して勇士鬣を撫でゝ諭す、偵察の苦心思ふ可し、此の如く情調雙絶の名句は、實境に臨む者に非れば作る能はず。

酒の肴に作の噂、嫁が傍から酌をする　（赤坂、水の舍）

選者曰く、有の儘の事柄を常の言葉に平たく言出て、自ら調を爲し、自ら情を含めるが俚謡の上乘なる可し、吟誦幾回、味益す深し。

以上數首の吟作と、先生の高手にあらずんば、到底見ること能はざる獨特の選評文とを併せ讀みて、世人は初めて『俚謡正調』の眞風を合點することを得たのである。その二十六文字唄、いはゆる『都都一體』なることは知つてゐても、その『正調の俚謡』たる所以に至つては多數讀者の中にはいまだ曖昧模糊たるをまぬがれなかつたのである。然るに如上數首の秀逸と、及びその選評とが、正調俚謡のいかなるものなるかを知らしめ、爾來、俚謡正調といふ一新調が、我が詞壇に一位置を占め、今日では全國的にその名が用ゐられ、斯道の新作は在來のいはゆる都々一界に革命的變化をもたらし來たつたのである。

（二）　俚謡正調の出版

翌三十八年春『俚謡正調』第一集が出版された。卷頭には前掲『正調の俚謡を募る』の一篇が序文に用ゐられ、次の凡例が掲げてある。

俚謡正調第一集の凡例

朝報社募る所の俚謡は、其の主意に記せる如く、斯かる小歌に有り勝なる淫靡と、纎巧とを退けて、多く世道人心に益あるを

取れり、實に日本明治の俚謠として永く傳ふるに足る。

且其選者が聲調に注意し、讀みて朗吟す可く、聞きて解し易きを取りたるは亦此種の小歌集と選を異にする者なり、之を士君子の傍に置くも、良家の家庭に入るゝも、貴婦人淑女の偶作とするも一として適せざるはなし。

此編は明治三十七年十二月一日より三月十日に至るまで朝報紙上に掲げたる一百回を集めたる者なり。

明治三十八年四月　　　朝　報　社

更に、同年夏、その第二集が出版された。そのはしがきは次の如し。

俚謠正調第二集のはしがき

俚謠正調第二集は、明治三十八年三月十一日より同年六月十八日に至る百箇日間、萬朝報紙上に載せたる俚謠を編輯したるなり。

之を第一集に比するに、啻に句の數に於て大に增加せるのみならず、作者の技亦一段の進歩を見る。殊に、宛も陽春四月、百花爛漫の候に當りたるを以て、天地の美の粹とも云ふ可き花を詠じたる者多きは、最も此集の價値を增すものと云ふ可し。

編者は此集に對して、日本に初めて眞成の平民歌あるを喜ぶものなり。

明治三十八年六月末　　　俚謠正調編者記

次に、その第三集は四十年四月に發行され、それには序文も凡例も添へてはなく、『俚謠正調』はこ

の第三集を以て終刊となつてゐる。

『俚謠正調』三冊、形は至つて小冊子だが、その表紙には『大和民族の心意氣』といふ標榜があり。在來のいはゆる都々一は、遊女冶郞の心意氣を述ぶるを生命とし來りたるが、先生創始の正調俚謠に於ては、その使命、日本民族の意氣を表現するが如き躍進を見るに至つたのである。

(二) 初代正調庵の名乘り

往年、本稿筆者等と共に、麻布笄町時代の黒岩家に居候仲間の一人に石川髑髏庵後ちに露香と號す青年があつた。終日書生部屋に寢轉んで『萬朝報』の讀者文藝に投書し、俳句に俚謠に屢ば賞金をとつてゐた。のち朝報社に入り、明治三十九年二月八日の紙上より『俚謠正調』の欄を受け持ち、先生の代選を託せられたのであつた。然るところ、同君は四十三年四月十二日紙上の選を名殘りに病床の人となり、五月五日終に死去した。それゆゑ四月十三日より翌五月十一日まで約一個月間は俚謠欄の休揭を餘儀なからしめたのであつた。よつて同五月十二日より社選となつて再揭を見るに至つた。

『俚謠正調』欄に『俚謠別選』の設けられたのは、大正二年十二月であつた。同月二十五日の『俚謠正調』欄に次の挨拶が附記された。

今日以後、當分の間、落選の句を悉く他の選者に送り、其人の選評にて其中より比較的良句を拔出し、每週二回（月曜と金曜

に『俚謡別選』と題して本紙に載することに定めました（但し其選者は本社が數年前に發兌し今は賣切と爲りたる『俚謡正調』第一集、第二集、第三集の句を選評した初代正調庵であります）

先生が公に世間に向つてみづから正調庵と號し、初代正調庵を名乘り出でられたのは、おそらくこの時が最初であつたらうと信ずる。その翌二十六日の「俚謡別選」は、先生がみづから選評の任にあたり、次の選者吟を添へられた。

二度の勤めはおは文字乍ら昔昵みを力草

いふまでもなく、再び選者となられし由を挨拶された謠の意である。

その日の同欄に先生の即吟『俚謡手引』十首が掲載された。次に示す。

俚謡手引（選者の即吟十首）

歌は何う讀む心の絲を聲と言葉で綾に織る
歌の中でも俚謡の歌は口に謠へにや歌じや無い
口に謠ふて調子にのせて人を動かす歌が歌
歌の力にや鬼神も泣くと流石貫之よく云ふた
和歌はみやびよ俳句は味よわけて俚謡は心いき

　　慾を云ふなら情の艶に時の匂ひを持たせたい
　　木にも石にも情をこめてつやを出しやてこそ歌になる
　　歌は昔まで云はぬが花よ繪でゝぼかさにや繪にならぬ
　　言葉やさしく姿ははでにかくな心を丸くよめ
　　遊びましよぞへ小歌の園に睦み〳〵て末永く

　明治三十七年十二月一日、初めて俚謠正調欄の開始されてより、十年目に當る大正二年十二月二十六日のその日、「俚謠手引」十首によりて、我れらは初めて先生の俚謠を見るのであつた。

『俚謠手引』十首、歌詞平易、句意自然、一誦何ん人にもいひ得るが如くに見えて、而も凡手の企て及ぶところにあらず、さながら古人の古謠を見るの思ひあり。俚謠によりて俚謠の神髓を敎へ、俚謠の作法を敎ふるところ、俚謠の聖たらずんば、いづくんぞ能く斯の如く深切なる句を示し能はんや。

　更に大正二年末より翌三年春に至る數個月の間に、俚謠別選の選者吟として朝報紙上に掲げられた先生の作を示す。

　　私しや歌の子歌より外に暮の苦勞も無いわいな
　　四方千里は御國の風に草となびけや寅の春

松の位が踏む八文字あとの禿はみどりやら

乙女椿の落ちてもさすがすがた崩さぬ心掛

夏を待つのか化粧を更へて端山しげ山青々と

池の面はむらさき鹿の子絞る手並は藤の露

以上六首の外に、石川氏が選者時代に先生の作として紙上に紹介をした俚謠一首がある、句に曰く、

神の閾か御空の謎か問のしるしの七ッ星

(四) 俚謠に就て講演

先生が『俚謠別選』の選評を擔任せられた間は、僅に數個月であつた。大正三年五月十一日より同別選欄は弘田知秋氏が選者の任に推されて今日なほ勤續してゐる。同氏も曩の石川露香氏同樣、かつては投吟者であつた。

同年十二月四日、日本橋區本町貸席龜の尾に於て『萬朝報俚謠欄設置滿十周年大會』が開催された。回顧すれば、この年は相當に多忙な年であつた。世間は大正維新の氛圍氣に蔽はれ、政界の暗雲低迷は磅礴として國民の政治的自覺心を鼎沸たらしめたのであつた。國民より辭職を勸告されて桂公は挂冠し、次で政友會が擁して組織したる山本內閣は、海軍收賄事件の暴露のために總辭職し、清浦子

内閣組織の大命を拜し、奔命七日、終に成立せず。時人清浦子に鰻香内閣の稱を寄せしはいまだ記憶の新たなるところである。やがて老軀を早稻田の一角より起し、高遠の理想を唱道して大隈侯が内閣を樹立したのは實にこの年の四月十六日であつた。

本篇の讀者の大多數は、すでに知るところたらん。この大隈内閣の樹立に、あづかつて最も有力なる助産婦の役目にあたつたのは、實に我が涙香先生であつた。曩に桂内閣を倒し、次に山本内閣を倒したる先生の手が、大隈内閣を作つたのであつた。結果の善惡は別問題に屬す。この一項は世辭も懸引きもなく、確なる事實であつた。

されば、先生の一身は、生涯にこの年ほど多忙な年はなかつたらうと想像するのである。殊に、八月には對獨宣戰あり、十一月には青島陷落あり。先生の職分としてその多忙なるはいふまでもないのである。

かゝる多忙なる際にもかゝはらず、先生は貸席龜の尾へ俥を走らせ、大會席上に於て俚謠に就ての長講演を試み、我等をして英雄閑日月ありの感を抱かしめたのであつた。

(五)　俚謠も先生の趣味の所產

『萬朝報』を通じて、先生が俚謠の發達に、直接に間接に保護者たる關係にあつたのは、以上の十年

間であつた。すなはち先生が初めて正調の俚謠を募集し、先生が選者の位置を退きても一本立ちで發達して行くだけの養育を與へた俚謠子が、盛んなる十周年大會の開催を見るに至つたことは、産みの親たる先生には、少なからざる愉快を感じられたことであつたらうと信ずる。

趣味の先生としては幾多の記述すべきものあり。私の擔任外ゆゑ今こゝには叙説する能はざるが、おほよそ先生が或る一事の趣味研究に沒頭するや、その持ち前たる絶倫の精力を傾倒し、徹底的にその理を窮めずんば止まざるの癖あり。しかもその一生を通じてもろ〳〵の趣味を研究し、世人が見て以て兒戲とし閑事とするものも、一たび先生の趣味性に共鳴するあらんか、先生は殆んど萬事を放棄してこれが檢討に沒頭した。先づ玉突の如きそれである、五目並べの如きその隨一である、歌かるたの如きもその一つである。

その他、先生をして時間と精力と金錢とを浪費？せしめたるいろ〳〵の趣味研究は、一々記述すること能はぬほどである。球戲、圍碁の如き、負け嫌ひの先生も終に常人以上に上達せぬものもあつたけれど、『聯珠』の如き『かるた』の如き、みづから實力を有してその發展に努力されたる結果、終に今日に於ては全國的の盛行を見るに至らしめたことは世間知悉のことである。先生が信仰の告白として大なる自信を以て世に公にされたる彼の『天人論』の如きも、當時先生が世上の學者に對し、自個

の思索と識見とを披瀝されたものだと私は觀察してゐるのである。

我が俚謠子の如きも、源流は小うたに發し。投節、潮來節を經て、いはゆる都々一とその體を同うすとはいへども、その質に於ては異り。正調の俚謠といふ一新體は、まさしく先生の手によつて產まれ、先生の手によつて育てられ、先生の庇護によつて今日の流行を見るに至つたのである。而もこれ實に先生の趣味の所產に外ならぬのである。

(一八)　俚謠正調の發達流行

先生に創始され養育されたる『萬朝報』の『俚謠欄』は、中內蝶二、田中煙亭兩氏の選と弘田知秋氏の別選とで、先づ一本立ちの發達を遂げ。兩三年ののちには、さらに第二回の十周年を迎へんとしてゐる。私は今茲に詳細の事實を報告すること能はぬけれど、朝報紙上に俚謠欄の開設あつて以來、すでに各地方に俚謠同趣味者の會があり、雜誌の發行もあり、一部の同好者の間には、熱心なる研究家のあることを傳へ聞いてゐる。

大正九年、この年の秋は我が涙香先生が永眠された年で、我れらには最も悲み深き年であつた。その前年大正八年七月歐洲より歸朝され、先生はその年の十二月より病を感じて大磯に靜養された。年末から春へかけて先生が湘南地方へ避寒されたることは既に久しく每年の例であつた。誰一人として

やがて悲むべき時の來らんを豫感するはずはなかつたのである。

大正九年の春、茨城に俚謡大會が催され、同會主催者今泉氏よりその集句について先生に選評を依頼し、病床の先生がめづらしくその依頼に應じられ、その選評に『はしがき』として手記を寄せられたことである。本篇を草するにあたり、今泉氏よりその手記を借覽することを得た。よつて同趣味の人へは紹介しおくべきものと思ひ、次に先生手記のその全文を轉寫する。

はしがき　（初代正調庵主人手記）

余が萬朝報紙上に俚謡正調の募集を初めた時、心の中で目標としたのは『潮來出島の眞菰の中で、あやめ咲くとはしほらしい』との一首であつた、斯の如き情景調三絶の良句は得易からずとするも、既に古人が之を得た以上は今人も失望するに及ばぬと考へた、爾來同好同志の人は雲の如く各地に現はれ、中には敬服す可き天才も多く出たが、特に余の心を強くしたるは常陸の人故露香石川保藏氏であつた、彼れは余の門下生であつた丈けに、余は彼れを擧げて選者たらしめた、彼れの秀吟は今でも余の記憶に存して居るが『二つ並べてどちらを取ろか、柿にや月影冷し瓜』『乙女心に螢の光り、風が消すかと袖屛風』此の二首の如きは、確かに天才の輝きを帶びて居る、彼れは不幸にして早世したけれど、世の藝術家中には長き天壽を全くしながら、これだけの一首をさへ身後に留め得ぬのである、それ等に比べると彼れは不朽とも云はるべき傑作を二首まで遺し得たる事に於て藝術家の本望を達した者とも謂はれ得るであらう。

彼れの死後、萬朝報の俚謡は社會部長中内蝶二氏に相談しつゝ部員田中煙亭氏之に當り、別に弘田知秋氏が客席より補佐する

ことゝ爲つた、余が社外より弘田氏を擧げたるは云はゞ常例に逸したる致し方ではあるけれど、氏も實に秀吟の多きに於て一般に認められたる天才である、「京に寢て聞く祇園の鼓、更けてうつゝが夢となる」の一句の如き、誦唱するに連れ髣髴として所謂鴨川べりの情趣の眼前に浮び來るを覺ゆるではないか、猶ほ此以外に現はれ出でたる天才家と秀吟の數に至りては算へあぐるに暇がない、余はこれを回想して俳諧正調欄創立者としての目的を達したる者として聊か自ら祝せざるを得ぬ。

余は何事に於ても批評家たる態度を自個の本領と心得て居る、自ら創作する人で無い、故に理窟を言はせれば一通り言ふけれど、自ら作りては自分で滿足するだけの結果を得ることが出來ぬ、故に俳諧欄の繁昌にて自ら功成り名遂げたる者として俳諧界より既に業に引退し、爾來振向いて視るさへも稀である。

其後常陸に今泉雪耕君の主動で俳諧正調を鼓吹する努力の出現したるを聞いた、又其會に參加せる諸君の作品をも一讀したことはある、けれども殆ど雲烟過眼の如く視て居た、所が此の度、病を大磯の寓舍に養ひつゝありて、大正九年三月一日聊か快き方に向ひたる爲め、諸方より來りたる手紙などの一纏めに爲りてあるを、順々に披き行きたるに其中より今泉君の手紙及び俳諧の一卷を發見した、手紙の旨意は初代正調庵として此度の茨城の俳諧大會の集句を選評してよと云ふのである、これは頗る無理な註文である、余は既に引退した人で、俳諧會の其後の消息を知らず此の頃の陳腐と斬新との區別を見分けることさへ出來ぬ、それでも強て余に選せしむるならば、余は俳諧だけに於ては昔しを尊崇する復古主義者である爲めに定めし投吟者諸君を失望せしむるであらう、殊に今泉君の報告に由れば、余が斯道に於て日頃尊敬する野村賤の家、中山士峰、深澤銀扇、高田花妻、鈴木雅水諸君がそれぞれ選評を擔任して居られる、全く余の出るべき幕でない。

余は無論お斷り致す可きであるが、今泉君の書面に由れば大會が三月の六日とある、最早お斷りする猶豫がない、余がお斷り

する爲めに萬が一何等かの手違を生じ今更ら献立を改むる暇もないと云ふ樣な事でも有らば主催者の迷惑一方ならぬであらう、と斯う思へば至急に選しあげて卷を送り返す外は無い、余は全く今の流行語で云へば自烈馬（ヂレンマ）の上に立つたのである、如何とも致し方無く、病床より起き直り大急ぎに其の顚末を認めて今泉君の意にも應ずる事とした、意には應じて選評したけれども、其の出來榮たるや必定、今泉君に取りては、寧ろ頼まなんだ方が宜かつたと云ふに歸し、余に取りては應じなんだ方が宜かつたと云ふに歸するであらうと恐入る。

併し余は斯かる由來の中にも多大の因緣を認めざるを得ぬ、余の最初の目標が潮來の歌であり、余が最初に社選を託したのが常陸の人石川露香であり、今又此の盛大なる俚謠正調大會が潮來節の本場たる茨城であり、其の主催者が常陸に於て斯道の牛耳を取れる今泉氏である、余が尻馬ならぬ自烈馬に乘ることと爲つたのも要するに偶然で無いかも知れぬ、切に請ひ且つ願ふらくは、投吟せられたる各位に於て以上に述べたる如き因緣を察し何事をも大目に見給はらんことを、余の祈求は偏にこれである、偏に各位の寛大なる同情である。

大正九年三月三日　　大磯長生館に於て

初代正調庵　黒　岩　涙　香　謹識

花の噂も高輪あたり昔蹶立てた雪かいな

男浪女浪が汀を打てば石と石とが縺れ合ふ

蛇の目くる／＼助六氣取り雨の渡しの花川戶

蛇足ながら左に一句を加ふ

太平洋上にて遙拜會を催せし折母國を忍ぶ心の堪へ難かりければ

八重の汐路を三萬哩こゝろ一重に様まゐる

大正九年三月三日旅館の寒き燈火の下にて

初代正調庵涙香しるす

右の手記一篇は、先生と俚謠との因緣、俚謠と俚謠同好者、及び『俚謠欄』と選者との關係を窺ひ知ることができる。なほも珍とすべきは、先生が自作吟三首を書き添へられたことであり、更に歐洲旅行中の俚謠一首を示されたことである。『萬朝報』で發表された『南歐遊草』は先生が漢詩の趣味造詣の披瀝であつた。この長途の旅行中の俚謠といふのは、私の知るところでは僅にこの一首のみである。

次に、今一つ記念品として玆に書き留めておくのはこれも大正九年の春、弘田知秋氏が俚謠の雜誌『鳴子』を發行するに際し、先生に一文を願ひ出で、これに應じて寄せられたる次の『はしがき』である。

俚謠雜誌『鳴子』の初に題す

弘田知秋君が萬朝報の選者の随一人であることは誰も知る所である、抑々萬朝報は何故に弘田君を選者に推したのであらう、俚謠界には君の外にも隨分天才家があゐ樣に思はれる、併し余の考へでは天才と云はるゝ人々には多く偏した所がある、其の偏した所が卽ち秀でた所であらう、只だ弘田君は多くの點に於て中庸を得た天才である、偏したといふ所が無く圓滿に發達してゐる、是れが俚謠の指導者として最も適した所である樣に余は思ふ。

斯かる弘田君が『鳴子』を發刊し、其主宰者として同好者の目標たる地位に立つことは斯道に取りて甚だ喜ばしい事である、唯だ余の望む所は永く『鳴子』を育てゝ能く久しきに耐へると云ふ一事に在る、是れも思慮に富みたる弘田君の氣質であるから必ず心配は無いであらう。

余は此機會を利用して廣く世間の同好者に對し、俚謠に就いての余の希望を述べて置く、但し余は既に俚謠界の風潮に後れたる隱居の如き身であるけれど、萬朝報俚謠欄を最初に計畫し最初の選者を勤めたといふ一事に免じて希望を述べるだけの資格を許して頂きたい。

第一に俚謠は修養や敎育に乏しい人にも分るほど分り易くなくては成らぬ、卽ち俗分りが肝要である、第二に俚謠はチョッと人の心に響く樣な諷刺とか比興とか感賞とか云ふ樣な面白味が無くてはならぬ、第三に朗々と吟詠することの出來る樣に句調が暢びやかで無くてはならぬ、第四には新らしきに過るよりも、昔しの俚謠の調を失はぬ樣に勉めたいのである、具體的に云ふ條裕は今持たぬけれど、賢者には一言にして足るといふ古諺もある、俚謠の趣味を解せらるゝ程の氣の利いた方々は、是れだけで十分余の意を察せらるゝであらう、最後に斯かる方々が十分に弘田君の後押しを成され『鳴子』の大なる發育に援助を與へられん事を望む

黑岩淚香

大正九年四月二十日

初代正調庵　黒岩涙香しるす

（七）俚謠子格調の變遷

右の短文のうちにも、俚謠作家の心得ふべき用意を示めされてある。私の觀察したところでは俚謠正調は、先生が選評された第一期の創始時代に正調俚謠の傑作を見た。次で石川氏の第二期時代は努めて第一期的の調を得んと努め、型を崩さざらんことに力めながら而も入選の俚謠は、第一期の俚謠とはおのづから風格を異にしてゐる。次に第三期に入り、弘田氏の別選に至つて、さらにまた調子が變り、社選の俚謠は更にまた調子の變つた歌詞を見るに至つた。すなはち十年前の俚謠と十年後の俚謠とを比較對照して、最も目立つ變化は、凡調となり低調となつたことである。嘗ては世の有識階級にも朗朗愛吟を禁ぜざらしめたる正調獨特の風味が、十年後より今日に至つて全く一部青年投稿者のみの一の讀者文藝となつて仕舞つたことは多數の認識する事實である。

如上の變遷は、毫も不審とするに足らず、實は當然の現象であらねばならぬ。何んとなれば選者が變れば投稿者もまた變り、從つて入選俚謠もおのづから前代と變らざるを得ぬからである。

實をいへば正調俚謠の何ものたるかを先生から直接に敎へられたるものが、數年後には吟作の興味

を失つたからである。それは先生が選者の席を退かれたとに外ならぬ。今まで共に投吟者であつた石川氏が選者となつて、投吟者の色彩が一轉し、さらに社選と弘田氏の別選とでまたさらに色彩が再轉し三轉したことは勢ひの止むを得ざるものと是認せねばならぬ。されば量的には俚謠正調の發達流行を認めると同時に、我れらはその實質の低下したることもまたこれを認めるのである。

先生が俚謠子の上に拂はれたる憂ひも、實にこの一點であつた。俚謠に對する先生の信仰の第一義は、古謠の格調を失はざらんことであつた。果然、前章に紹介したる茨城俚謠大會選評『はしがき』の先生手記の文中に『余は俚謠だけに於ては昔しを尊崇する復古主義者である』といはれ、また『鳴子』の題言中にも『新らしきに過るよりも昔しの俚謠の調を失はぬ樣に勉めたい』と明白に述べられたる所以である。

俚謠正調の作者及び選者にとつて、この一項ははなはだ重要なる題目であらねばならぬ、同時に多少の說明を要する。しからずんば折角の深切なる先生の俚謠觀に、誤解を來たすの恐れがあらうも知れぬ。

今日の新人青年に、古謠の格調を失はざらんことをもとむるは至難のことたるはいふまでもない。その吟作の背景對象が時代的に變化し、思想も感情もその表現の手段に變化があり、殊に格調及び修

辭的の變化は人の力で左右すること能はぬ時代的推移である。されば創作の形式的手段は、新人の才藻をして自由に驅使せしめ、時代的創作を期待するは論なきところだが、その吟作の精神は、俚謠本來の風格を失はざらんことをいましめられたのである。

かるがゆゑに、歌人が歴代の歌集を耽讀し、俳人が古人の句集を味讀すると同じ道理を以て、我が俚謠作家もまた古謠の研鑽を怠つてはならぬのである。けれど一般俚謠作家及び選者が、この大切なる調査を等閑視してゐることは、斯道の進歩を期待する上から一言の警告を無用とせぬのである。

この項目に就て、筆者はなほ記述したいこともあるけれど、今はその時にあらざれば略する。

（八）　都々一選者と俗歌募集

先生と俚謠正調とに就て記述せば本篇の目的は達せられたのである。然るところ、玆に書き加へおきたいのは、先生が青年時代に都々一の選を試みられたことゝ、萬朝報が發刊間もなく、俗歌を募集したことである。

前者は曾我部一紅氏の談話及び材料によりて。後者は龍悍愼作氏が調査の材料によりて、その消息の一斑を記しおくのである。

先生が青年時代、都々一の選を試みられたといふ事實は大分古い話であり。明治十年に『團々珍聞』

が產まれ、やがてまた『親釜集』だの『月並百々一』だのと稱する都々一專問の雜誌などが發行された時分のことで、先生が都々一の選者となつたり、戯文を寄せられたことのあるのは『月並百々一』であつたらしい。

殘念なことは、先生が選をされたのが同誌の何號であつたか、どんな都々一であつたか、また同誌へ寄せられた戯文、それはそのころの文體を知る上に、さらに先生の若い頃の一面を知る上に、めづらしいものとは思ふけれど、何分にも親しく同誌を見た上でなければ紹介できず、今日の間に合はぬのを遺憾とする。

次に、萬朝報は嘗てその紙上で俗歌を募集して紙上に掲載したことがある。龍澤氏の調査によるとそれは明治二十七年であり、恰も日清戰役の開始された年である。十年後の日露戰役に際して『俚謠正調』が募集されたと對照し、十年前に俗歌を募つたその趣意書を紹介し、對照の便に供しておきたいと思ふ。その募集文は明治二十七年九月十九日の紙上に發表されてゐる。

俗歌を募る

『うた』は人心に作られて又人心を作る、社會亡びんとするや必ず淫靡なる歌現はれて益々人心を淫靡にし、一國大に振はんとするや必ず勇壯なる歌現はれ人皆之を謠ひて其心大に振ふ、今や我國は東洋の天地に空前の大活動を發するの時、人心既に勇み

て必ずや勇猛快活の歌ある可く又斯る歌ありて大に社會の氣風を振起せざる可からず、依て我社は此際同胞五千萬と共に朗々として高歌放吟するに足る如き天籟海潮の歌を募る、同胞振て傑作を投ぜられよ。

歌とは三十一文字の和歌には非ず音曲として聲に發し謠ふ事の出來る歌なり、情歌可なり、甚句可なり、端歌可なり、如何なる歌にても咽喉に掛る者は皆可なり。

其中の取る可きは毎日本紙又は附錄に掲げ、最も妙なる者は之を英譯して日本人の思想如何に激越せるやを世界に知らしめ、猶ほ和英兩方對譯の册子に製し頒布せん。

又英譯せし者は堪能なる音樂師に頼み、勇壯なる節を附け三味線にて、バヨリン、オルガンも合ふ様にし、大に人心を鼓舞すべし。

以上の趣意書が、先生の手になつたものかどうか、今日では證據がないゆゑ斷言はできね。けれど先生の意向より紙上に現はれたことであらうとの想像は間違ひなかるべしと信ずる。

試にその應募して紙上に發表された最初の日の俗歌といふを見ると『海晏寺かへ唄』『緣かいな節』『最後豚々』『我が物のかへ唄』等で、いづれも端唄調であり、松の家二葉といふ同一人の作であり、而も文句が全部戰爭時局より得た敵愾心を讀みこんだものである。

その趣意の結末に『大に人心を鼓舞すべし』とあり、俗歌を驅つて、國民の士氣を高めやうとした點は『俚謠正調』を募集の動機と相似たところあるを看取される。去り乍ら『萬朝報』は明治二十五

年十一月の創刊であり、創刊いまだ日淺く、文壇いまだ幼稚なる時代のこの企てが、その歌詞の內容的實質に於て、到底、十年後の『俚謠正調』と比較するに足らざるほど低級のものたるはいふまでもないのである。

思ふに先生の俗謠に對する趣味が、萬朝報紙上に或は俗歌を募集し、或は俚謠正調を募集するに至らしめたことはこれを知ることができる。

（九）最後の絕筆も俚謠

先生はいろ〳〵の趣味に興味を有され、まさしく耽溺ともいふべきほどに一時は一事に沒頭し、ほとんど他事を顧ざるが如きまでに熱中さるゝかと思ふと、いつしか全然その興味を放棄したるが如く失念したるが如く、さらに他の趣味の研究に傾倒されるといふが如くに私等の眼には見えた。

餘りにも不思議なる先生のこの心理に就て、私は一日先生に質問した。すると先生は『人の頭は使ふ程よくなる、自分は一日も頭を休ませておくことはできないから』といはれた。

あれほどに世間で評判だつた先生の相撲狂も、贔屓の荒岩が隱退するや、再び昔日の相撲狂とはなり得なかつた。先生みづから『余が鼻は煙突の如し、終日煙を吐く』といはれたほどの愛煙病（先生は酒は嫌ひだつた、甘いものが好きだつた）は終に煙管、腰さげたばこ入れの類に凝性を發揮し、一時

は東京第一の貴金屬商と稱せられたる池の端玉寶堂のお得意客となり、同堂の腕利きの職人が眼を痛めたほどの細工物を註文し、話柄を遺されたるほどだつたが、後年養生のためとはいへ喫煙を廢された。

『聯珠の眞理を發見することは哲學の眞理を發見するよりも難し』とまでいひ、實際に寢食を忘れ、多大の時間と精力とを犧牲としてその研究に沒入されたる五目並べも、後繼者を得て以來、全くこれに遠ざかられた觀があつた。他の道樂もまた同樣の趣きであつた。

我が『俚謠』に對しても、ある時は全力をこれがために傾倒し、またある時は一切これを忘れたるが如くに見え、多忙なる先生としては當然のことだが、而も斷續最も久しくその趣味を味ふべしとされたのは我が『俚謠子』であつた。

俚謠に關し先生が書齋で一人ひそかに研究された草稿だの記錄だの、さういつたものもどれほどあつたことか家人にも私等にも全然知られぬものがあつたかも知れぬ。私が本稿を執筆するについて、散逸し燒棄して殘りたる先生の遺稿の中から、俚謠の分を選び集めて見たけれどその分量は極めて少くなほも遺憾なのは俚謠研究の參考たるべき文章體のものは一篇も見あたらず、少數の吟作のみであつた。蓋し、この少數の吟作が、先生のノートに認めておかれてある點に於て、私等には高價なる記念

品たるは無論である。今ここには明治卅八年の作として明に書き殘されてある二首を紹介しておく。

『可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裡人』を飜譯して

草を枕にほゝえむ屍誰の夢路に通ふやら

ブグアン牧宏等の特赦を聞き

國を賣る樣な鬼さへ蛇さへ君が情けに血の涙

大正九年の夏のころ病院の先生を慰問せんがため萬朝報社同人及び門下生の人々が『和歌』『俳句』『狂句』『俚謠』等を集め、先生の病床に呈した。先生の衰弱はもはやその全部を見るの氣力を失つてをられた。けれど『俚謠』だけは眼を通され、なほ先生は勿體ないほどやつれた手に、重さうに萬年筆をとりあげ、仰臥の儘みづから次に示す三首の俚謠を書き添へられた。

贈り參らす撫子二輪玉の淸水に凍らせて

冷たい隔てのあるとも知らず蝶々訪ひ來る花氷

磯の蚫に望みを問へば私しや眞珠を孕みたい

大正九年八月八日

初代正調庵

右三首の俚謠、第一の撫子、第二の花氷の兩句は、先生を慰問の詠草吟作をあきたらずとて深切に改竄されたものであり、第三句の磯の蚫はその折に書き加へられた先生の創作である。

我れらの知る範圍では、この『磯の蚫』は、多くの場合、片思ひ、片戀ひ、すなはち單想思の表現に慣用され、悲觀もしくは絶望の意をあらはす習ひである。然るに、この先生の作を見ると、主觀を蚫に寄せ、希望を唱ひ理想を唱つてゐるところに、古人いまだいひ及ばざる創意があらはれてゐる。

今、この一首『磯の蚫』の俚謠が、先生の絶筆とならうとは知らなんだ。これが最末期の詩であり、辭世の句とならうとは誰か思ひ至らんや。この意味に於て、先生を追慕するものには深い印象を留めた一句である。なほも我れら俚謠宗の信者として、先生が最後の感情をのこすに、俚謠を以てせられたことを深い因縁のあつたこととせねばならぬ。またなほも、先生がその生涯を通じて、我が俚謠に最も長い因縁を有せられたことを知るのである。

（附記）先生と俚謠とについて私はかつて雜誌及び拙著に書いたことがある。今、本篇に於ては私の手で一度世に示したことは餘儀ない一二項の外は再錄せず、また私の愚見の開陳はこれを避けたつもりである。いはば本篇は『萬朝報』紙上で又は先生の手を經て、一たび世に公にされた事實に準據して記錄したのである。それゆゑこの以外にかくれたる資料があらうも知れず、個人の間に何か特種の材料があらうも知れぬ。要するに本篇記述の大部分は『萬朝報』の愛讀者、竝に『俚謠正調』の同志が既に知るところのもののみである。蓋し、他日俚謠研究の一備忘錄たるに過ぎぬのである。（大正十年夏）

會員の見たる先生

筆の力

斯波貞吉

黒岩先生に就いては語るべきことが甚だ多い、私が知つて居ると丈を書き著はしても浩瀚な著書となるであらう、さりながら先生は善悪共に自分の事を語られるのを好まれなかつた。曾て或る雜誌が其持主であつた某博士の歿後に、繰返して其博士の事を掲げて居るのを見られて『之れは故人に對して敬意を表する所以でない、某博士には著書が澤山ある、博士の事を書かなくても世間では博士を充分に知つて居る、今既に逝いた博士の事を雜誌に記すのは、博士逝いて雜誌の價値が失はれた事を示すに過ぎぬ、博士の爲めにも雜誌の爲めにも善くない事をする馬鹿の骨頂である』と言はれた事がある、其聲が今尚私の耳に殘つて居る、先生の恩顧を受けた私としては此辭に反くとは出來ぬ、先生には不朽の著書が澤山に在る、先生の事は此等の著書が自から語るのである、徒らに私達が蛇足を附ける必要はない、此書も此主旨で編纂せられたのである、更に又先生の生涯の大部分は萬朝報の爲めに費されたのであつて、萬朝報を讀む人に黒岩先生の事を語る必要を持たぬ、唯先生の苦心の存する所を餘り世人の知らぬ方面に就き所々先生の筆を挿入して二三茲に記して見たいと思ふ。

先生が『法廷の美人』を發行せられたのは明治二十年の十月である、之れが恐らく先生の飜譯小説の初めであつたらうと思ふ、此種の小説以外色々の著書を合せると約八十種の著作を數へ上げるとが出來る、實に多作と稱せざるを得ぬ、然も其れが何れも尋常一樣の勞苦を以て爲されたものではない、

先生の出版に就いて當時好評嘖々たるものがあつて、或は文士などの中には小説であるかないかの議論かあつたらしい、明治廿六年五月十一日の『萬朝報』に先生の左の一文が載せられてある。

探偵譚に就いて

涙　　　生

我國にて往々探偵談を以て文學の趣味の上より觀察すべきものゝ樣に思ひ、之れに『探偵小説』など云へる名前を附し、甚しきは探偵小説が文學界を荒すなど云ふ意味の批評をすら試むる者ある程なるが、探偵談は探偵談なり、小説には非らず、假令ひ作者が小説を作る如く、己れの空想より絞り出したりとするも、是れ一種のストーリーなり、ノベルとは名附け難からん。

故に小説と探偵談とは其領分を別にして、相害するものに非ず、米國などにては小説の駸々として進み行く傍らに探偵談も亦別に一個の道路を占めて衝突もせず喧嘩もせずに進み行くを見て知るべし、唯我國の文學的批評家中には文學の歷史も現在も充分に知らず、春の屋先生が『小説神髓』以來『早稻田文學』などに掲ぐる講説ぐらゐを見て、審美の理を盡したるもの、文學の眞を總る者と思ひ、之に一二の敎課的文學史より得たる陳々腐々の知識を以て、既に批評眼の備はりたる如く思ふもの多きは痛ましく、余の見る所にては目下の批評家ほど無學にして且つ馬鹿な男はなし。

余は屢々探偵談を譯したる事あり、然れども文學の爲めにせずして新聞の爲めにしたり、魯文派の

小説が稍讀者に飽きたる樣あるを見て、斯る續き物も西洋には有りとの事を知らせ度き積りにて譯したるのみ、小説には非ず續き物なり、文學に非ず報道なり、今に及びて世間に探偵談の現はるゝを見るは恐らく余と同じ了見にて譯述するの人なるべし、之を文學界を踏荒す野心より譯せし者の如くに思ひ、他の小説の賣行き鈍りしを見て、探偵談の盛りしが爲めの樣に言做すが如きは批評家の最も狹量なる輩ならん、尤も探偵談の進歩して小説に入りたる者もあり、又有名なる人情的小説の中にも探偵談と組立を同じくしたるものあるは彼等の知らざる所にや、是くらゐの事は心得て欲し。

先生の所謂『探偵談』が新聞の讀者に興味を與ふる爲めのものなるは寸毫も疑ふ餘地がない、固より美文の意義を解せられないのではなく、先生の總ての精神は新聞——最も優れた新聞——を造るに在つた、這は先生の一々の行動が之を示して餘りがある、何故に先生の『續き物』が讀者の興味をあの樣に唆つたか、先生は一書を飜譯せらるゝ前に先づ幾十冊の書を精讀して其中から最も興味あるものを選ばれ、愈よ之を飜譯するに方つて、更に之を再讀し、原文の儘飜譯する部分に朱線を引かれ、更に新聞の一回一回を興味あらしむる爲めに句切りを附けられるのである、さうして愈々之を飜譯する時(大抵拂曉)に尙一回之を精讀し、本を閉ぢて頭の中から之れを書き出されるのである、其骨の折れる事は夥しいものであつて、其勞力は先生の樣な精力家でなくては爲し得ない所である、或る時先

生は『自分丈骨折れば誰でも面白い續き物を書く事が出來る』と言はれたことがある、然も先生の精力に匹敵し得るものはなかつた。

萬朝報の創刊は先生が卅一歳の時である、最早先生の考も充分に熟して、一生を新聞事業に費したいと云ふ考から着手せられたことは云ふ迄もない、さりながら之を爲すには先生の過去の新聞記者としての經驗から、何處迄も萬朝報を特色あるものとしたい、新聞紙中の新聞紙としたい、而して他の新聞競爭に打勝ち得る樣にしたい、之れが先生の希望であつた、發刊の辭は極めて簡單である、目的、代價、紙幅、文章、獨立の五項目に分けて、其目的には

萬朝報は何か爲めに發刊するや、他なし普通一般の多數民人に一目能く時勢を知るの便利を得せしめんが爲めのみ、此の目的あるが爲めに我社は勉めて其價を廉にし、其紙を狹くし、其文を平易にし、且つは我社の組織を獨立にせり。

と記し、代價の項には當時新聞紙の價が一枚一錢五厘以上となれるに對し、萬朝報は特に一錢とする旨を記してある、又紙幅の項に記事は極めて簡單にする、獨立の項に我社は獨立孤行、何者にも頼らず、正直一方、道理一徹、偏頗の論を爲さず、陰險邪曲の記事を掲げずとあつて、萬朝報の精神は之を以て終始した、此外に今も萬朝報の編輯室に掲げてある。

の額は明かに萬朝報の精神を表はして居るものである、此の外に編者が先生自身の口から聞いたことがある、其れは先生が東京へ出て來られてから、先生の義兄秦氏の家に寄寓して居られた時のことであつたと思ふ、先生の父君市郎氏が土佐から東京見物に上京せられた際、曾て父君の塾生であつた岩崎彌之助氏が立派な富豪となつて駿河臺の邸に居たのを父君が訪問せられたことがある、父君は岩崎氏が舊師の訪問を歡迎するであらうと思つて居られた、然るに彌之助氏は最初は留守と稱して面會しなかつた、しかし父君は本當の留守と考へて歸られたのであるが、二度目に附近を通過せられた時の訪問には明かに在宅して居て面會しなかつた爲めに非常に感情を害せられて、歸つて先生等に話さるるには、岩崎は己れが錢でも借りに來たと思つたのであらう、舊師の訪問に對しては禮を厚くして迎へるのが當然である、然るに留守を遣ふとは何事であるかと言はれたことがあるさうだ、先生は此事を深く感じて、我は筆の力を以て金力にも打勝ち得るものとならなければならぬ、岩崎をも我筆の前に叩頭せしめて遣らなければならぬとの決心を起された、先生が筆の人——筆は劍の力よりも威あるもの、金の力よりも大なるもの——として之れを具體化せんとの決心を起された動機は此の時に生じたのであつた。

此精神は纏て萬朝報となつて表はれた、萬朝報が各方面に忌憚なき筆を揮つて、第一號から『八面鋒』の欄を設けて有らゆる攻撃を始めたのも、之れが原因をなしたのである、萬朝報の名に就いては、後日先生の話に先生が萬朝報を創刊せられる餘程前から考へて居られたことであつて、或る人が新聞を發刊する時に此名を使つたら何うかと教へられたことがあつた、しかし其人は新聞を發刊するに至らなかつた、其處で自分に新聞を出すことゝなつて直ちに之を採用された、一號には『萬朝報』の名として先生の左の文が載つて居る。

芝區の奇人林欽二翁我が萬朝報を評して曰く、此名以て新聞の將來をトするに足る、夫れ名は實の賓、撰ばずんば有る可からず、先に清國の畫家賈雨村なる者浪華に來る、浪華の人皆曰く、賈雨村は『買ふ損』に通ず、此人の畫必ずや買ふに利なしと、終に一人の買ふ者なく、雨村嘆息して去れり、雨村の妙筆を以てするも、猶名の爲めに妨げらるゝ斯の如し、今萬朝報は『よろづの重寶』に通ず、新聞紙始まりてより斯くまで名け得て妙なる者を見ず、上となく下となく此紙の萬事に調法なるを愛するに至るは蓋し期して待つべし、況んや表題の寶蓋しの如きは即ち之を購讀する人の家には早朝より賓の舞込むに同じきをや、余は此新聞を購讀して我家の朝延喜となさんと、嗚呼翁の此言を得て朝報の發途も亦甚だ幸先よしと云ふ可し。

斯くて初號が發行され、事務整理の爲めに三日間休刊して二號が發行される時には七千人の購讀申込者が出來た、當時新聞として斯く多數の購讀者を得ることは異數であつて、涙香先生の名が如何に嘖々たるものがあつたかは明かに知ることが出來る、萬朝報は僅か四五人で編輯に當つたのであるが、其の編輯振及び記事等に於て悉く獨特のものがあつて、讀者をして應接に暇なからしめたことは今日でも充分に想像することが出來る、其時は第二次伊藤内閣であつて、西鄕、品川の國民協會が設立せられ、選擧干渉で有名な第二回の總選擧が其年の二月に行はれた時である、先生は『八面鋒』欄を設けて、盛んに鋭き攻擊の鋒を時の政府に向けた、或る人の話に『伊藤公が黒岩先生は筋骨逞しい恐ろしい人であるかと思つたら、何處かで先生を見て美少年であるのには意外な感をした』と云つたことがあるさうだ、之れでも如何に萬朝報の攻擊が公を辟易させたかゞ分る、尤も先生は主に小說を擔當して居られて、最初に紙面に現はれたのが『大金塊』である、又『魍魎界』と題し、漢文雜報を揭げられた、然も最も世人の注意を惹いたのは相馬家の騷動に關する記事であつたらしい、此頃は郡司大尉の千島渡航、福島少佐の騎馬旅行など軍事的に人心を衝動する事實があつて、此等の事も機敏に報道せられたのみでなく、社會部の雜報は到底他新聞の企及し得ぬ面白きものがあつて、萬朝報の讀者が日に日に增加したことは、今でも目に見える樣なものがある、然も發行停止に次ぐに發行停止を以てし、社の經營

には頗る困難なものがあつた、發行後二箇月で明治二十六年を迎へたのであるが、春場所の相撲には他新聞にない特色を發揮して、先生自から筆を執つて戰記でも書く樣に頗る面白く主なる勝負評を試みられた、其れが又著しく讀者の興味を惹いた、河野廣中氏が彈劾的上奏案を議會に通過せしめたのは其年の一月二十三日であつた、其結果製艦費として內廷費三十萬圓を割き、官吏は俸給十分の一を納れて補充せしむると云ふ詔勅が出た、此頃の紙上に高山彥九郞の傳が連載せられて頗る盡忠奉公の趣きがあつた「萬朝報が百號に達したのは三月の八日である、其日の新聞には先生の『百號の辭』が揭げられてある、可成り長文であるが、其中に『百號の辭を揭ぐ、其故何ぞや、他なし新聞紙の最も困難なるは百號までの內に在りて、通例倒斃するものは百號までに倒斃するを以てなり、百號に達すれば其社の永續するや否やを卜し得るを以てなり、祝するは百號を祝するに非ず、最も困難を凌ぎ得たるを祝し、見込の定まりたるを祝するのみ』とあり、朝報と前後して起つた新聞紙中既に倒れたるものとして國體新聞、帝國新聞、花月新聞、通信新聞、千代田新聞、蜂新聞、敷島新聞、明日新聞等の名が擧げてある、卽ち當時如何に多くの新聞紙が發行せられ、如何に多くの新聞が倒れたかゞ明白であつて、獨り朝報の今日あるは實に先生の努力の結果であることが分る、此頃十號每に附錄を添附し、娛樂記事を揭ぐることに力めた、其附錄中には今尙參考に資すべきものがある、最も注意すべきこと

は朝報發行以後殆んど每月の樣に廣告値上の社告のあつたことで、如何に讀者が增加しつゝあつたかが分る、然も先生は利殖の道には疎かつた樣で、社の財政に餘裕はなかつたらしい、明治二十六年の六月六日に現萬朝報社長山田藤吉郞氏の持主であつた、繪入自由新聞と合併して、編輯の事は黑岩先生、會計の事は山田氏が擔任せらるゝことゝなつて、社運は之れから益々隆盛となつた、斯くして七月一日には廣告制限の社告が出て『相當の廣告料を拂ひ得ざる人の廣告は謝絕す』と記してある、七月十五日から相馬事件の再發で、萬朝報の紙面の活動は目覺しいものがあつた。

此の如きものが萬朝報の生立ちであつて、其以後の事は充分世人に知られて居る、先生は徹頭徹尾愛國者であつて、先生使用の印文に『我病愛國』と刻してあつたことが最も善く之を證明する、然も先生には政治家たる野心は更に無かつた、文章報國は先生の終始一貫せる精神であつた、先生は恐ろしき人として往々世人に誤解せられたのであるが、之れは先生の攻擊の筆の强い爲めであつて、直接先生に接する人は慈母の樣な懷しみを感じた、先生は又自己の責任を重んぜられて、人に賴まれた事は極端迄之を引受けられる、又決して之を回避しやうとはせられぬ、所謂義俠心に富んだ人であつて、其爲めに誤解を受けられた事が屢ばある、見ると聞くとは實に大なる相違である、先生は頗る寡言一々切口上、無駄な事は少しも言はれぬ、之れが甚だ無愛想にも感ぜられた、けれど其心の底には常に溫

情があつて、先生は總てに公明正大なる事を好まれて、自己の缺點を蔽ふ考へなどは少しもなかつた、又不屈不撓の精神が頗る強く、奈破翁が『予の辭書にイムポッシブルの文字なし』と云つた事を口癖にせられた、若し明治大正の歴史から萬朝報、黒岩周六を除いたら頗る寂寥を感ずるであらう、日本が何うなつたか、社會が何うなつたか、其れも計られない、先生は實に筆の力で時代を造られた人である。

二十餘年間先生の下に働いた私としては尙記したい事が澤山に在る、只此書編纂の主旨は僞らざる先生の性格の一端を表はす爲めであつて、此書の編纂に與つた涙香會員の一人として之れ丈の事を記したのである、尙先生に就いては語る機會が屢ばあるであらうと思ふ。

報告の辭

山田藤吉郎

涙香會員諸氏が先生に對する所見を草するに際し、偶々現萬朝報社長山田藤吉郎君は記念すべき萬朝報一萬號刊行の日に於て、故人の靈前に報告したる報告文を以て之れに代ふことゝせり、蓋し兩君生前の關係を語つて餘りあるべきを以てなり。

（編者謹識）

謹て涙香黒岩周六君の靈前に白す、顧みれば今を距ること二十有九年、君獨力にして我萬朝報を創刊す、當時既に幾多の先進新聞紙あり、互に相ひ競ひて、其勢力の擴張を計れり、君、此間に起て、內は能く紙面の向上を策し、外は能く社運の發揚を劃し、其天賦の才識と豐富の學殖とは筆を執て萬言揮むことなく、經營して機宜に適せざるものなかりき、君又權勢に恐れず、榮達を求めず、終始一貫、侃諤の論、縱橫の文は、常に時世の向背を指導し、文壇の聲譽を恣まゝにし、爲めに我萬朝報をして、天下の重きを爲さしめ、延て又社運をして、日月に進展し、終に先進新聞紙を凌駕せしむるに至れり。

年逝き、月來つて、今や我萬朝報は一萬號を刊行するの日に到達せり、然るに、天、偉人に年を假さず、之に先つこと半歲にして、君を白玉樓の客に招げり、此に一萬號を刊行するに當り、予及び社員等、君の英姿に接して其の高敎を聞くこと能はず、悲痛哀悼の情何ぞ堪ゆることを得ん、嗚呼悲ひかな。

然れども君の遺業たる萬朝報は、君の遺靈に依て益々健全に發揚することを得、今や一萬號を刊行するの日あるに至れり。

卽ち玆に、一萬號の萬朝報を君の靈前に供し、謹んで君が在天の靈に謝し、並せて、予及び社員等

の益々微力を致して、君の遺志に酬ゐんことを誓ふ、君の英靈も亦希くは長へに、冥護を垂れ給はんことを。

大正十年四月六日　　　　山田藤吉郎謹で白す

黑岩君に就て

山本秀樹

君諱は所適、通稱周六、涙香と號す、別に狂詩には樂在と記し、聯珠には高山四庵と云ひ、俚謠正調には正調庵と唱へ、論文には齒月生、香骨居士、古憔處士等あり、而して探偵小說の飜譯に署したる涙香の號尤も廣く世に知らる。

君は土佐國安藝郡川北村黑岩市郎の次男にして、文久二年九月廿九日生る、幼にして其容貌の似たると才智の敏捷に因りて人竊かに呼んで『黑岩の猿』と稱せり、後年伊藤博文公に逢ひし時、黑岩は一個の美少年なりと傍人に語りし事ありしと云へば、君の容貌の變化せしは知る可きなり、余は一小流伊尾木川を距てゝ東西居を接し、生年甲子も亦殆んど同時なるを以て幼時より交り、同一師の下に漢書を學び、稍長じて暫く相離ると雖も大阪より東京に來りて殆んど起居を同ふし、明治廿三年二月都新聞社

に入りし以來苦樂を共にして、終に相離れず、大正九年十月六日卒去するに至る迄兄弟より更に厚き交りを續けたり、余の君に於ける固より親友たり、然れども事實に於ては余の師なり、少くとも畏友たり、而して今や亡し洵に痛恨に堪へず、輓詩を左に錄す。

與君同歲又同鄉　五十餘年情意長。
落日秋風君不見。　人間只勝菊花香。

君の極めて義俠心に富みしは蓋し義祖の血を享けし結果にも因る所あらん、土佐偉人傳中、君の義祖『黒岩越前』の事を記すこと左の如し。

有澤石見、黒岩越前共に安藝城主安藝國虎の老臣なり、永祿十二年八月十一日國虎秦元親と戰ひ敗れ淨貞寺に入り自殺するや有澤石見從ふて殉死す。

黒岩越前は國虎の命を受け、其室一條氏を幡多に送らんとて秦氏の陣前に高らかに呼はり、圍の一角を解き、海路久禮に航して佐竹信濃守の許に一條氏を送り屆けたり、かくて陸路歸途香美郡にて秦氏の軍凱旋するに逢ふ、元親越前の材勇を惜み老臣吉田大備後重俊をして慰諭して來降せしむ、越前安藝に歸り淨貞寺に入り國虎の爲め一七日の法事を修す、已にして謝して曰く元親公には武勇の將卒夥多あり、前途の好運祝すべし、我主國虎は只一人の有澤石見を從ふのみ、冥途の途行嘸や

寂しからん、臣は玆に割腹して亡主に追伴せん、元親公に御答は此の如しと遂に自殺す、大備後涙を揮ふて之を介錯す、實に永祿十二年八月十七日國虎の死有澤の殉死に後る七日とす、諡して桂岩芳樹居士といふ、今淨貞寺境內國虎の墓前、石見越前の二墓左右を夾んで林立す、過る者皆低回涙を洒がざるなし。

斯くの如く義人の血脈を享け、其他同族中黑岩藤之進と稱する奇骨の一老人ありて君の叔父直方氏（前名其二）の養父なりしを以て君は常に祖父として尊び、其薰陶を受けし點も尠からず、直方氏は夙に勤王の志厚く、早く國を脫して長州に赴き、後三條實美公に從ひ、具に艱苦を甞め、維新後裁判官となり、後宮家の執事たりし、君幼にして父を失ひ、直方氏の撫育を受け、鄉里の學校より高知に出で、暫く森澤某の漢學塾に學び、幾程もなく大阪に出で、大阪英語學校に入りしは直方氏の大阪に裁判官奉職の時にして君が土佐を出づるの最初なり、想ふに明治十年の頃なりしならん歟、余は明治十年末西鄉の亂鎭まりし後、父に從ひて九州より大阪に移り住むに及び、十一年始めて大阪英語學校に入り、暫く相離れし君に再會して明治十三年迄同校に在りしが、君は先ちて東京に遊び余も亦踵て東上し、駿河臺の成立學舍に入り又起居を共にしたり。

君が大阪に在りし時は僅に十五六歲の年少なりしも、時々論文を大阪日報に寄せ、主筆關新吾氏を

して其奇才に驚かしむ、又英語學校の校内には毎週演說會あり、生徒の有志をして演說せしむ、君演壇に起つや辯論風生年長者を驚殺す、後年文章に辯舌に其名を知らるゝに至りしは早く已に栴檀の香を發せしものなり。

東上後成立學舍に入り。後轉じて慶應義塾に入りし事ありしも暫時にして退學し、專ら演說と文章とに熱中し、成立學舍中にて發行したる輿論新誌には尤も多く筆を執れり、其頃君は自ら『黑岩大』と稱し居れり、彼の馬場辰猪、大石正己、末廣重恭等の創立せる國友會に入り尤も政談演說に熱中したり、其後クワッケンボスのレトリック中の要項を飜譯し、大阪以來の學友日置益(現獨逸大使)と共譯として世に公にしたるは君が單行本刊行の最初なり、當時輿論新誌は大岡育造氏の經營に移りしも君の執筆は依然たり、其誌上に於て北海道開拓使の事を論じ、『芝大黑天』の變名を用ひしも終に法に觸れて官吏侮辱罪に問はれ、缺席裁判に付せられたり、當時君は赤貧洗ふが如く、余が其猿樂町の下宿屋を訪ひし時同宿の一人(和田天氏と覺ゆ)と共に一枚の蒲團を纏ひ居りて余の姿を見るや直に余の着衣を貸し異れと云ひ、余を暫く蒲團に入らしめ何れかへ外出し、原稿料を得て歸り來りし事あり、其後根岸に移り、二三の友人と同居して僅に得る飜譯料原稿料にて糊口を凌ぎ、金子の入りし時は先づ一箇月分の米を一時に買入れたりと云ふ、貧乏は舊の如く居室の不潔言語に絕す、曾て余の訪ひし時同宿人

相集り互に虱を垢衣中より摑り出し其大小を較べ優劣を爭ひて興じ居たりしは殆んど常人の想像することをも得ざる事柄なり、其後又淺草寺の裏手なる千束村に移り、小森信義と僞名して依然原稿料生活を續け、當時の同宿人は佐藤隼吉氏（後法學士）一人なりしが其時代に淸元を習ひ、俳句を學び、金錢の少しく餘剩を生ずれば必ず北里に遊びたりしが、急劇なる脚氣に罹り姉の良人秦吞舟氏の醫師たるに賴り其家に至り治療を受け快癒するに及び二大政書の出版を企て、公然名を世に現すや忽ち彼の缺席裁判の執行に逢ひ、横濱戶部監獄に投せられ、苦役數月、出獄後出版業に盡瘁せしも失敗に歸し、其後數多の新聞、雜誌に從事（此の間の消息は曾我部俊治氏最も詳しければ同氏の記事に讓る）したるも一として成功せず、最後に宏虎童氏經營の繪入自由新聞社に入り、月給十圓を得て僅に下宿屋生活を過せり、其頃渡邊文京氏と机を並べて執筆し居たるに文京氏は非常なる達筆にして、彼れ二枚の原稿紙を書き終るに我れは只一枚も書き終らざる事を見て心窃に憤慨し、彼れを凌駕せんと考へ、日々苦心して筆を走らせしも容易に彼れに追隨すること能はざりしが、數月の後には終に彼れより早く書き綴る事を得るに至りしと云ふ、君が後年原稿を作るに殆んど飛ぶが如くなりしは、蓋し此時に胚胎す、君が人に屈せざる氣性は此の一事によりても窺知するを得べし、一日文京氏に君が耽讀する外國小說中傑出せる物より飜譯して新聞紙上に揭載しては如何にやと謀りしに、文京氏は直に贊成したるを以

て飜譯に着手したるも、從來論文には堪能なりしも小說文には執りし事なき筆を動すを以て意を盡す能はず、四五回稿を更め辛ふじて新聞紙上に掲げたり、其時始めて『涙香』の號を署したり、(涙香の文字の出所等も亦曾我部氏に讓る)

其頃上下一般に花骨牌を弄すること流行し、君も亦其渦中に投じて輸贏を爭ひしを以て、囊底常に空乏を告げしも、涙香の飜譯小說漸く世に喧傳せらるゝや寄稿を乞ふ者多く、君の筆も亦小說に熟し多きときは毎日四ツの新聞社に寄稿せしに因り、花骨牌の戰費を得たりと云ふ。

都新聞社の主筆渡邊治氏が去つて大阪毎日新聞社に入り、其後任を君に委囑せしは實に明治廿二年十一月とす、時に都新聞社は發行紙數七千枚內外なりしが、君が一旦入社するや奮然として其社規を改革し、紙面全く面目を改めたり、翌明治廿三年二月余は君の推薦により同社に入り、又君と事を共にし、終に死に至る迄相離れず、明治廿五年七月社長加內長三郞氏が事業の失敗より都新聞社を男爵楠本正隆氏に讓るに際し、君は新舊兩社長と口約して以後君は一日に論文、小說を書くこと並に非常なる過失惡事なき以上は現在の社員を淘汰せざることを以てしたり、然るに未だ一月にも及ばざるに君が曾て推擧して入社せしめたる二人を馘首したり、君は前日の口約に背くを兩社長に責むるも、楠本男爵の如きは斯る事を約せしこと無きを主張して君の言を聞かず、君大に憤り直ちに同社を退きた

り、君が都新聞社に入りしより退社迄僅に二年半餘の日子なりしも、發行紙數は實に三倍餘に達したり、君の努力想ふ可きなり。

旣に君が都新聞社を退くや、君の系統に屬する者十餘名は悉く退社を命ぜられたり、余も亦其一人なり。

君及び余等の如き彼誠首者の輩は、一新聞社を起さんと企てしも皆窮措大にして資力なく、諸方を奔走して資財を得んとし、余も亦當時蠣殼町の新宿將軍と稱せられたる濱野茂氏に就き懇請せしも終に容れられざりし、後新聞發行の保證金を宏虎童氏に借り、運轉資本として書肆扶桑堂町田宗七氏に掲載後の飜譯小說を與ふるを條件として僅に五百金を借ることを得たるを以て、愈々新聞創立に決し、廿五年十一月一日始めて萬朝報第一號を世に公にしたり、一號の印刷紙數三萬五千枚、其五日第二號を發行せしに君の名四方に傳はりし結果第一號發行の二割七千枚の購讀者を得たり、一號より編輯に從事したるは君及び余の外に片山友三郎(友彥)、富田一郎(一筆庵)、曾我部市太(俊治氏の前名)の諸氏にして、生島一氏の名を紙上に現はせしも實際筆を執りしは餘程時日を過しての後なりき(萬朝報の題號は曾て都新聞社に於て發行停止の厄に遇ひし時、發行し得る樣極めて小規模の新聞紙を發行し、萬朝報と題せんとの議ありしも果さずして中止したる事あり、是れ萬朝報題號の濫觴なり)

町田氏より借り受けたる五百金は幾程も無く消費し盡し、困難の裏に荏苒日を經、明治廿六年六月山田藤吉郎氏の經營せる繪入自由新聞社と合併して稍小康を得たるの觀ありしも、經營は依然として困難なりしが、彼の相馬事件等の爲め天下を聳動し、廿七八年の戰役より益々社運の隆昌を加へ、終に今日の盛大を來したるは實に君が努力奮鬪の結果に外ならず、三十年來の經歷を追想して憮然之を久ふす。

黑岩先生と余

曾我部一紅

（一）同盟改進新聞時代

余が始めて君を知つたのは、明治十六七年頃、京橋區八官町から發行された『同盟改進新聞』に入社した時である、此の新聞は三宅虎太、漆間眞學兩氏の經營で、君は主筆であつた、編輯員は君と余の外、僅かに一二名に過ぎなかつた、三宅氏の著書は當時非常に持囃されたが、もと文筆の人ではなく、他の學生が執筆した原稿を氏の名で出版して巨利を占めたもので、此新聞もつまり三宅氏が資本側であつて、實際の經營は漆間氏が當つて居た、新聞の題字が勝安房氏の筆に成つた緣で、初號から勝氏

の談話を載せた、君は此新聞に入つたのが抑も新聞界へ乗出された始めである、通稱は黒岩大、號を『香骨居士』と稱し、稀に『半士半商人』と署名した事もある、余は『大』とは君の本名と思つてゐたが、後年になり『周六』が本名で『大』もまた假名であつた事が分つた、君の論說で余の記憶に殘つて居るのは、『戀愛論』で十數篇に亘り、其の該博な知識、高遠の卓見は大に世人を驚かしたが、誰れも是が當年廿二歲なる白面書生の筆になつたと思ふものがなかつた、惜い哉此新聞は資本の薄弱であつた爲め、休刊する事となつたが、さて休刊するとするも發行停止に發行停止を重ね。他動的に休刊せざるを得ざる樣に、世間體を繕ふため、連發的に過激の論說を續載したが、只だ其筋から取消の命令と注意があるのみで、停止の命が下らないので、遂に自ら廢刊し茲に君と袂を分つ事となり、君は大岡育造氏の經營する『輿論新誌』に筆を執り、余は板垣退助、中島信行、陸奥宗光、中江篤介、土居光華諸氏の創立した政書出版會社に入つた。

同盟改進新聞發行前、漆間氏は土居光華氏の組織した政談結社北辰社に入り、其機關『北辰雜誌』の編輯人となつたが一二三號とも發行を停止された結果、氏は禁錮の刑に處せられ、北辰雜誌は遂に發行を禁止された、當時別に『共存同衆』といへる政談結社あり、馬場辰猪、田口卯吉、大内青巒、小野梓、島地默雷等諸氏が演壇に立ち雜誌をも發行した、馬場氏は後に至り別に末廣重恭、大石正己、堀口昇、西村

玄道等の人々と『國友會』といへるを組織し兩國の井生村樓其他で屢々演說會を開いた、君は馬場、大石等の諸氏と鄕里を共にする關係から、此會に加はり屢々演說せられた、當時君の譯書『雄辯美辭法』は輿論社から發行されて洛陽の紙價を高からしめた事がある、其頃此國友會に對峙して居たものは『東京橫濱每日新聞』を中心とする沼間守一、島田三郞、肥塚龍、青木匡等諸氏の組織した『嚶鳴社』で、卽ち前者は自由黨、後者は改進黨の機關の如き觀があつたが、君は國友會の會員とはいへ何れの政黨にも加入せられなかつた、現に君が筆を執れる『輿論新誌』の如きは改進黨に近いに係はらず、自由黨に關係深き國友會員であるのに徵しても氏が全く政黨に關係せられなかつた事が分る。

同盟改進新聞發刊前、三宅、漆間の兩氏は自由出版會社を起し政治經濟に關する泰西の飜譯書を豫約にて出版した、是が本邦豫約出版の嚆矢である、同盟改進新聞廢刊後起つたのが前記板垣伯等の創立した政書出版會社で、後日君が二大政書出版會社を起されたのは、自由、政書兩社の缺陷を補はんためであつた。

政書出版會社倒れて余は土居光華氏の許に寄食し、河竹新七氏の門に入り狂言作者となり市村座に出勤して居たが、當時君は和田天氏と藥研堀に下宿し飜譯で暮して居られたので、余は市村座へ往復の途、屢々君を訪ふた事があつた、一日君を訪ふと、今まで室内の喧噪なりしに似ず急に靜になつた

襖を開いて入ると、君の影が見えぬので不審に思つて居る中、『曾我部か、驚かせたナ』といひつゝ戸棚より現はれたは君と和田氏であつた、君は手拭鉢巻に、尻端折、和田氏は手に火箸を持て居る、今し君が活惚を踊り、和田氏が火鉢を叩きて拍子を取り歌を唱ひつゝある處へ、突然余が尋ねたので、他の客と思ひ急いで戸棚へ隠れたのであつた、同盟改進新聞で始めて君に逢つた時は黒の紋附羽織、お召の綿入に、白縮緬の襦袢を着、博多の帯に金鎖附の金時計を挾み、金縁眼鏡といふ貴公子然たる風采であつたが、今は二子の羽織に二子の袷といふ意氣の風で、殆んど別人の觀があつた、當時通人間に二子織が流行し、銀座の裏通りに田村といふ贅澤の二子屋があつて、君は始終此家の常得意であつた。

前に述べた如く君は銀座の裏通に一戸を借り義兄泰呑舟氏の後援で二大政書出版會社を起されたが、政書の飜譯ほ一は大石正己氏に依賴し、一は君が自身に飜譯し、小使一名を置て事務も自身獨りで執られた、或日君が行衛不明となり三日過ても四日過ても歸られぬので、余は泰氏の妻君から依賴を受け君の行衛を捜したが、友人間へ立寄られた形跡も見えず、少しも心當りがないので義兄夫妻も非常に心配せられてゐると、半月餘過ぎてから、髮を長くして居た君が五分刈の頭になつて瓢然と歸つて來られた、様子を聞くと、或日見知らぬ男が出版會社へ來て『黒岩さんはお在ですか』といふので『僕

が黒岩だ」と答へられると、件の男は『私しは横濱伊勢佐木町警察署の巡査ですが、裁判所の命令で引致に來ました』といひ、自分の名刺と横濱輕罪裁判所の令狀を出したので、君は此事を義兄達に告げると、心配するからとて何も言はず、其儘引立られて横濱戸部の監獄に收監され、十六日間の苦役中當時外役があつたので、野毛切通の開鑿工事に使はれ畚を擔ぎ土を運ばれたとの事であつた、君の犯罪は曾て『輿論新誌』で、北海道開拓使事件を論じたのが官吏侮辱罪なりとして訴へられ、東京輕罪裁判所では公判開廷の末、無罪の宣告を受けたので安心して居られると、檢事より上告の結果（當時控訴審はなく一審から直ぐ上告となつたものである）大審院で原裁判を破毀され横濱輕罪裁判所へ移された、横濱裁判所では君に召喚狀を發したが、住所が變り召喚狀が屆かぬので、缺席判決の上、十六日の重禁錮に處せられた、君は斯る事とは知らず居る中、二大政書出版會社の新聞廣告から、住所が知れ遂に刑の執行を見るに至つたのであつた、此時の辛さは一生忘れず、其後何か苦しい時は戸部監獄の事を思ひ出すと苦しさを忘れるといはれた事がある。

（二）　日本たいむす時代

土居光華氏の妹婿大平參次氏は、キンドル散といふ清涼劑を作り、美目よき妙齡の娘を選び之に袴を穿せ、キンドル散と書いた洋傘と鞄を持せ、市中を行商させ、一時は評判よく、芝居にまで脚色ま

れたが、後には賣子の補充に困り遂に廢業し、今度は代言人の八幡儀三郎氏と謀り、各新聞の社説を拔萃した『輿論日報』といふ新聞を竹川町で發行する事となり、余は土居氏の紹介で市村座を退き此社に入つた、編輯員は小說家として戸田欽堂氏、社會部の外交（當時探訪と稱した）として宮城鴻南（後、壯士俳優となり鴻南一座を組織した人）唯一名、編輯掛は余一人、工場長の落合代次郎氏が夜の十一時頃、各社の社說の載つてゐる片面の新聞ゲラ刷を取つて來るを待ち、余が鋏にて社說と雜報を切取り、工場へ廻し、校正員保坂某と余が校正し午前九時頃から刷出し午前中に配達するといふ仕組で發行された。

當時の新聞は社說を主とし其の良否によりて賣高に關係する頃とて、何れも各新聞の社說に注目し居た折柄、各社の社說が一枚で分り、しかも其日の中に見られ、價も一枚一錢といふ廉價で、頗る時好に適した處から、大に世人の歡迎を受け紙數も一萬部以上となり夕方までも印刷せねば間に合はぬ樣になつた、かうなると各新聞社は大恐慌を來したので各社が聯合の上、政府へ建議する事となつた結果、勅令で新聞紙條例は改正され、論說は其社の許可なくして一週間以內に掲載するを得ざる事となつたので、輿論日報は玆に一頓挫を來し普通の新聞の樣に組織を變へ、主筆を置き社說を掲ぐるに決し大平氏より主筆の物色を余に托したので、余は君を推薦し君を猿樂町の下宿を訪ふと、春寒未だ去ら

ざるに君は單衣にて蒲團の中にくるまり、見るも氣の毒の有様であつた、余の來意を聞き『厚意は辱けないが同宿の友の病を救ふため、所有の衣服は素より書籍まで典して今は此衣一枚にては如何する事も出來ぬ』との答へに、余は何とか工夫すべしと歸り、大平氏の外套を借來りて君に渡すと、君は單衣の上に外套を着、余と同道で鍋屋町の西洋料理彌生亭に赴き、此所で大平氏と會見し入社の約束をしたが、君は食事に就くも外套を脱する事が出來ず、給仕も變な顏をして眺めて居た、食終りて八幡氏から羽織と綿入が着いたが終に後の祭であつた、是を見ても君の友情に富んでゐる事が分る。

翌日から君は入て『輿論日報』を『日本たいむす』と改め、社説の傍ら雜報をも手傳はれた、各社の社説が掲載し得ざる事となつた爲め、眞行は一時大に減じたが、君の犀利なる筆致と忌憚なき事實の描寫には大に『たいむす』の聲價を增した、其後或雜誌が君を攻撃するに、他社の論説を剽窃して一新聞を起したと記したは此事實を誤つたものである、君が忌憚なき議論は遂に其筋の忌諱に觸れ、八週間の發行停止を命ぜられた、停止は短くて五日、長くて三週間であるに斯る長期の停止は實に空前にして亦絶後の事であつた。

解停後は珍らしき趣向で讀者の注目を惹かんものと、君の發案で畫工小林淸親氏に依賴し第一頁の全面に七福神を描き、第四頁は廣告を揭げ、先づ片面だけ印刷し、當時未だ色刷機械のない時分とて

社員が總掛りで七福神に筆彩色を施し、解停と共に發行し、世間からは奇抜の趣向と評判されたが、長の停止で社員職工の給料は素より紙代さへ拂へぬ始末に遂に廢刊する事となり、社主からは編輯局員給料、二月分の代償として僅かに足蹈の印刷器械一臺を渡したので、落合氏に之が賣却方を依賴した、君を始め編輯局員は何れも社の二階に起食して居たので廢刊と共に退去し、余は其夜八幡氏の宅に一泊したが君等を始め他の者は金がないので八丁堀の木賃宿に一夜を明し、翌日落合氏より印刷器械の賣却代四十圓を得たので同人六名は新富町四丁目に六疊の二階一間を月一圓五十錢で借り、辨當は『たいむす』へ辨當を入れてゐた中澤丙一氏が好意で一日三食五錢といふ實費で引受け、四十圓は會計簿と共に日々交代で保管し、此金の盡きぬ中、各自が就職口を探し、就職したら其給料を共同資金として入れる約を結び、各自就職口を探した、君は月世界旅行等の飜譯をして居られたが、徒然の餘り、吉原の全盛娼妓の名前を狂詩の中に讀込み『東京新誌』に投書せられると、此作が頗る名吟なので、何人か知名の士が戯れに投書したものとの評判があつた、此狂詩は實に君の處女作であつたのである。

當時君は下情に通ずるには寄席や遊廓に出入するのがよいとて毎夜銀座の金澤亭に行き、夫から吉原の茶屋米川で幇間や藝妓を相手に花合などを行つたものだが、收入の少いのに遊びが華美なので自然に米川に負債が出來、米川の主人が新富町へ勘定を取りに來ると、君は直ぐ米川と花合を始める、

米川は下手の横好で、何時も取られて勘定は帳消されるが、少しも懲りず相變らず新富町へ遣つて來る、或日米川は花合をし夜更けて歸る事が出來ず其晩は泊る事となつた、君は不性で非常な虱たかり衣服には數百の虱が巢ひ流石の君も閉口して、丸めて戸棚に入れ置いたものを取り、寢衣として米川に貸すと、米川は斯とは知らず之を着し、一晩中虱責めに逢つて寢られず、大癖しに癖した事がある。

君は亦無聊の餘り着衣より虱を抓み出し、之を洋燈のホヤの底に紙を張つたもの丶中に入れ、余を困しめた罰で、炮烙の刑に處してやるとて、火鉢の火で焙つて興がられた事がある。

又『たいむす』の賣捌に村松要次郎とて、京橋組の親分と立られ、讀賣を業とし子分數十名を養ひ、御巡幸等には御道筋や供奉の名前等を印刷して行商するものがあつた、此男假名垣魯文と懇意で、號を『霧垣夢文』と云ひ、魯文の肝煎で、『月並百々一』といふを發刊した、君は『たいむす』以來、村松とも懇意なので村松の依賴で、時々都々一を投稿せられたが、其時の號は『香亭瓶花』といひ、後一回この『月並百々一』の選者となられた、此事は嘗て俗謠研究家の湯朝竹山人氏に話したことがある。

余は中山公爵の周旋にて公爵が區長を勤めて居られた麹町區役所の雇となつたので、約により新富町から通勤し其給料は同人の共有とした、余が通勤するに當り袴が入るので六名協議の上、其代を共有金から支出して貰ひ、日影町から六十錢で小倉の袴を買求め着用したが、放縱の生活をしたものが、

永く續から筈がなく、余は一ヶ月許りで、區役所を辭し、京橋區山城町の每夕社『今日新聞』に入つた、此新聞は元郵便報知新聞の社長小西義敬氏の經營で假名垣魯文が主筆となり、『日本たいむす』の發刊中に現はれた本邦夕刊新聞の元祖である、後魯文氏去り、論說は坂崎斌、和田稻積の兩氏受持ち、時に坪內雄藏氏も手傳ひ、小說雜報は伊藤橋塘、野崎左文、齋藤綠雨、川上鼠文、雞賀柳香の諸氏相前後して執筆し、小說は時に坂崎斌氏も手傳ひ、坪內雄藏氏も嵯峨の屋おむろ氏と共に投稿された、余は雜報から校正、編輯の總括をもして居た、君はまだ遊んで居られたので、今日新聞に入社を勸めたが、君は擔ぎ屋で、机を並べた『同盟改進新聞』も『日本たいむす』も共に潰れたから、一所に居るは緣起が惡いとて斷はれ、君は其後『繪入自由新聞』の主筆に聘された、主筆とはいへ、給料が少ないので、余の依賴により傍ら『今日新聞』にも論說を寄稿して生活を助けられたのである。

(三) 繪入自由新聞時代

或日君は余に向ひ、近頃西洋の小說で『ゼ、ダーク、ディス』と題するものを見たが、餘り長くもなく登場人物も少くて分り易く、探偵小說として頗る面白いから飜譯して新聞に出したいが、殘念ながら僕は下書が書けぬ、畫なしの小說では讀者の目を惹かぬので躊躇して居ると話された、余は面白ければ畫なしでもよいから、是非飜譯して『今日新聞』に出して貰ひたいと賴むと、君は早速に引受け、今日

新聞第一頁の下の段に『法廷の美人』と題し、涙香小史譯として繪なしで掲載した（當時の小說家は何れも下繪を書き畫工に渡すが例であつた）

君は前に述べた如く論說には『香骨居士』の號を用ひられたが、小說に香骨居士は堅苦しいので何とか能い名はないかと思案の末、香奩體の詩に『紅涙香』といふ句があるので之を取り、假に『涙香小史』として出したのである、是が君の探偵小說の嚆矢である。

君が西洋小說の飜譯は全く一時の餘戲で、涙香小史の名もホンの一時の假の名で、素より永久に存する考へではなかつたが、此の『法廷の美人』が非常の好評で畫入の小說を壓し、半月も立たぬ中に、はや新物の講談師として名を賣て居た松林伯知が馬喰町の席で演じたいとの申込があり、君も承諾して初日の晚、余と共に聽きに行くと、開會前既に滿員の大入に君も余も意外に其評判のよいのに驚いた、夫から君も好んで探偵小說を出されたので、涙香小史の名は彌が上にも高まり、涙香小說の名さへ出來、香骨居士の名は何時しか用ゐぬ樣になり、本領の論說記者よりは探偵小說家と誤まらるゝに至つたのである。

今日新聞の夕刊はまだ時機の早かつた爲め、社運振はず、夫に社長の小西氏も年老つたので買人さへあれば賣りたいと、頻りに買主を物色すると博文館主大橋佐平、金港堂主原亮三郎、時事新報會計課

長渡邊治の三氏が共同して買收してもよいと申込み、三氏打揃つて毎夕社に來て見ると、大橋氏は郷里の長岡で『越佐毎日新聞』を經營してゐた經驗があるので、社の現狀を見、愛惜を盡かせて手を引き、原、渡邊兩氏が買收する事となり、社員一同は悉く解傭されたが、余は原氏と郷里を同ふする岐阜縣人の關係から居殘り、兩氏の相談に與つた、兩氏は夕刊新聞では見込がないとて朝刊新聞に改むる事としたが、斯ては『今日新聞』の名が相應しからぬので何か佳い名がないかと、考へた末『吾妻新聞はどうか』との說も出たが、曾て同名の惡德新聞が有つたので、余の提案の『都新聞』が採用され、題字は書家の吉田晩稼に賴み且つ『見渡せば柳櫻をこき交ぜて都ぞ春の錦なりけり』の古歌に因み畫家渡邊省亭に賴み柳櫻に都鳥を畫かせ題字の周圍にあしらひ、社說は渡邊治氏が擔當し、君は相變らず繪入自由新聞にあつて、探偵小說だけを寄せられた。

後都新聞社は山城町から築地に移つたが、渡邊治氏は時事新報社を退き大阪毎日新聞の主筆に招聘されて下阪した、此大阪毎日新聞はもと民主主義の新聞で柴四朗氏が主筆であつたが、時の井上外務大臣、松方大藏大臣等が同地の紳商藤田傳三郎氏を始め其他銀行會社の重役等と謀りて同新聞を買收し御用新聞とし、表面は中立主義を標榜した、此變動のため柴主筆を始め編輯局員は二三を除くの外退社の辭を紙上に掲げて連袂辭職した、此時渡邊氏は中の島の花屋にあつたが、同盟辭職と聞き直ちに出社

し、殘りの社員を督勵して編輯したが、突然の出來事で手が廻り兼ね、急電を發して都新聞から論說記者木内伊之助(號愛溪)外報記者麻生義一の兩氏を呼寄せ、都新聞へは主筆として皇典講習所の卒業生日置政太郎氏を入れた、日置氏は新聞事業に馴れぬ上、編輯局員の意見を容れず我意を通し、余とも衝突し、余より渡邊氏へ通知すると、氏よりは電報にて余に大阪へ來れと申越したので直ちに大阪に行き大阪每日の編輯總務兼主筆秘書として勤むる事となり、余の後には朝野新聞から相島勘次郎氏が都新聞に入社した、夫より數月を經て都新聞の日置主筆は病死し其後任者の物色を都新聞社長山中閑氏(原亮三郎夫人の令弟)より渡邊氏の許に依賴し來り、氏より更に余に相談されたので、余は直に君を推薦すると、氏は卽座に『黑岩君なら適任だが、目下數ヶ所の新聞に小說を寄稿して居る樣子だから、此點がどうか、若し黑岩君が他社への寄稿を斷り都新聞のみに盡し、論說の外、小說をも書いてくれるなら、月給は五十圓まで出してよし、其由黑岩君に掛合ひくれ』といはれたので、早速君に手紙を出すと、君よりも早速返事が來た、其返事によると僕は朝早く淸水組に行きて英語を社員に敎へ、歸つて朝食を濟せ、三四の小說を書き、出社して又論說を書き雜報までも手傳ふので、宅へ歸るとガツカリする、斯して得た金は僅か四十圓、是丈けなくては生活が出來ぬので、我慢して勤めて居る、若し都新聞一社に勤めて夫丈けの金が入れば身體も樂になり勉强の餘裕も出來る、是非周旋してくれ』と

あつた、余は渡邊氏の言ふた五十圓の事を君に通じないのは、君の返事が五十圓以上と思ひ、さすれば君の返事を見せ五十圓以上に取計ふ下心があつたが、君は懸引なく正直にも豫定より十圓少く有の儘に申越されたのである、其返書が余の不在中到着し余の机の上にあつたを渡邊氏が開き見、余が歸つて來ると『直ぐ電報で黑岩君に出社して貰へ』といはれ、君に電報を出したので、君も承諾して玆に都新聞の主筆として入社さるゝ事となつた、今では四十圓ばかり僅かの俸給を取る記者は一人もないが當時社會部の錚々たる外勤者も僅かに六圓の月給で、普通は四圓半位、小新聞の主筆で廿五圓乃至三十圓位、渡邊氏が五十圓出すといつたのは頗る奮發したもので、君の眞價を知つて居られたからである、余は後日此十圓損の事を君に話して大笑ひをした事がある。

（四）都新聞時代

君は余の電報を受取るや直ちに都新聞社へ出勤し、編輯局員に披露さるゝと、局員は寢耳に水の騷ぎで、何か君が都新聞を乘取る如く誤解し、余が君の紹介者たる事を知らず、余に向ひ續々君の事を惡樣に申來るものがあつた、余は之が辨解に努むると共に、渡邊氏より編輯局員に詳細の報告書を送つたので、君に對する誤解も消えて編輯局も非常に圓滿となつた、又君の探偵小説は獨り都新聞のみに掲げらるゝ事となつた結果、都新聞は頓に紙數を增した、君は獨り小說のみならず、社說は勿論、雜

報までにも筆を染め、其他編輯上に關し種々の考案を凝し、欄外に都新聞の特色、廣告の効能等を四號活字で現はし、其他他新聞の爲し得ざる企てが多かつた、殊に今日各新聞が實行しつゝある論說欄の短評は實に君が此の都新聞にて試みられたものである、君が都新聞の入社後數ヶ月にして三四の記者が退社したので、社長の山中閑氏が態々下阪し、余に都新聞へ復歸を勸められた、大阪毎日では編輯局の紛議もなくなり紙數も增加したとはいへ、余は編輯の總務を爲し渡邊氏の秘書をも兼ねて居たので急に其後任なく、高木庶務課長の如きは極力余の上京を拒んだが、渡邊氏は余が都新聞に居れば東西相應じて將來の計劃をなすに都合宜ければとて後任の出來次第、都新聞に歸る事を許された、余が都新聞へ歸ると共に相島勘次郎氏は都新聞を去り大阪毎日に入社された、其後渡邊氏は都合により都新聞と手を切つたので、余に再び下阪を勸められたが余は依然都新聞に止まり君の部下として勤めて居ると、明治二十五年突然『都新聞』は楠本正隆男に買收され、君が辭職すると共に山本秀樹、生島一、富田一郎、鹽崎左門次、大森善一の諸氏及び余等同氏の下にあるものは悉く退社を命せられた。

すると君に向ひ、『東京朝日新聞社』よりは月俸百五十圓にて入社してくれ、『中央新聞』よりは編輯の全權を君に任すから、連袂の退社員一同を引連れ入社してくれとの申込あり、其他靜岡、北海道等の新聞社より續々招聘の交涉があつたが、君は悉く謝絶して仕舞つた、君が始め『都新聞』に入社

する時、此社を墳墓の地と定め奮闘したが、其甲斐もなく社は主義を異にする人に買收されたので、退社と同時に今後如何なる事情があつても再び雇人とはならず、小くとも自己が社主となりて新聞社を起し得るまで隱忍する決心を起されたのである、そして新聞社を起すには多少の資金を要するに、君が都新聞を退社する節、前社主より贈りし金は僅少で到底夫のみでは新聞は起されず、亦別に貯蓄もないので先づ京橋區元數寄屋町四丁目に兩潤舍といふ活版インキ店を設け、其利益を積んで新聞社を起す事を計畫された、斯の如くにして今後君が小說に筆を染めぬ事となると、尤も苦痛を感ずるのは君の小說を發行して居る扶桑堂主町田宗七氏である。

（五）　萬朝報創立時代

君の小說で新聞に出た後は、余が君より貰ひ受け、之を一回七十五錢で淺草の書肆岩本吾一に賣り岩本がそれを單行本として出版してゐたが、當時米商をやつて居た町田氏は涙香小說愛讀の凝固りで、君の小說を出版すれば必らず成功すると見込をつけ、岩本に交渉して其株を讓り受け、米屋を廢業して印刷業を始め君の小說を出版して生活を立てゝ居た、然るに今君が小說を書かぬ事となれば町田氏は全く手足を斷たれたも同然、非常の大打擊であるので、氏は君に向ひ、新聞經營の事を相談したが、町田氏とて當時多くの貯へもないので十分の資金は出し得られず、種々相談の末、最初は三千枚賣れゝ

ばよいとの豫算を立て、先づ家屋を物色すると幸ひ明敎活版所の宏佛海氏が所持の京橋區三十間堀二丁目一番地の家屋が空て居り、しかも其家屋が元繪入自由新聞社創業當時の家で其後數回變つた新聞社が出來た跡、机や椅子も揃ひ、屋賃も僅か十五圓といふ安き上、印刷も明敎活版所で引受けて呉れたので、愈々新聞を發行する事となり、名前に曾て都新聞が發行停止を命ぜられた時、若し永く停止されゝば代りの新聞を發行する目的で、豫め『萬朝報』と附けて、他新聞に廣告した事があつたので其名前を蹈襲し、紙面は佛國の『プチー、ジョルナル』が世界中で尤も小さく尤も發行部數の多いのに倣ひ、現今の二頁を二ツ折にした位の小なるものにする計畫を樹てたが、夫にては餘りに小なりとの余の建策を容れ、紙屋に交涉し幸ひ適當の紙があるので、夫より少しく大くする事とした、當時山本秀樹氏は越後に旅行して不在、生島氏は兩潤舍の販賣主任で、初號の編輯は君と富田氏、畫工藤原信一氏及び余の四人で、君は論說と小說、富田氏が軟派の雜報、余が硬軟兩派の雜報、編輯整理、及び校正、大森氏は外交全部を一人で引請ける事となつたが尙一名不足するので其補缺は改進新聞より片山友彥氏を入れ軟派の雜報と小說を托し、會計は町田氏、販賣と廣告は鹽崎氏が擔當する事とし、十月十五日余が發行の屆書を持ち警視廳へ出頭すると、掛官は之を見て『梁山泊が亦何か始めたナ』といつた

十七日君の筆に成る左の廣告を都下及び各地方の新聞社へ揭載を依賴した。

繪入傍訓日刊新聞

萬朝報

來る十一月一日發兌、同月五日より第二號以下引續き發行す、定價一枚金一錢、一ヶ月前金二十錢、三ヶ月同金六十錢、半ヶ年同金一圓十錢○廣告料一日活字廿三字詰一行金十錢、發行所東京京橋區三十間堀二丁目一番地朝報社

よろづ朝報は繪入振假名の小新聞にして紙面左程に廣からずと雖も、無益の記事を省きて必要の報道を專らとし、時勢と人情と世態とを一目の下に瞭然ならしめんとす、主筆には多年都新聞にありて能文の名を轟かしたる瓢兮山本秀樹あり、雜報には老練なる富田一筆庵主あり、紙面整理には新聞社會に多く其匹を見ざる會我部一紅あり、論評には活眼界を燒く生島血嚢あり、探訪には其道の白眉たる大森善一あり、挿畫には曾て海南に興りて其名正に關以西に藉甚する前途多望の藤原信一あり、小說には黒岩涙香小史あり、孰れも鍛錬なる主筆の指揮に從ひ手の如く足の如く働くの決心あり、凡そ是れ等の面々は一社に一人あらば以て其社を興すに足るの腕前なるに、我社何の幸ぞ集めて之を招聘するを得たり、潑々として紙面に活氣あるは豫め想ひ見るを得ん、初號は本紙を八面以上とし奇絶凄絶なる西洋讀切小說數篇を附載し、二號には涙香小史が曾て都新聞へ譯載する筈なりし探偵小說『我不知』を附錄として、月極の看客に呈す（附言、初號は巨萬の紙數を印刷するに付き廣告依賴の方は速かに申込みありたし）

此廣告の文中『一社に一人あらば以て其社を興すに足る』との文句が世人の注意を惹き、中には此の廣告文の掲載を謝絶した社もあるので更に當り障りのない左の廣告をも爲す事となつた。

お馴染の涙香小史が來月一日より

萬朝報　一枚代價一錢、一ヶ月前金廿錢、三ヶ月前金
六十錢、一ヶ年同一圓十錢

といふヘイ婆婆氣な縮入新聞を出します

斯く準備も整ひ宏虎童氏（佛海氏の息）の案内で三十間堀の社に行き二階の編輯局に入ると、前新聞社の社員が火鉢を顚覆したため、疊に盆大の燒痕が殘つて居た、宏氏は君に向ひ『君等は此所で新聞の天下を取るのだ』といつたのが今尙ほ余の耳朶に殘つてゐる。

廣告を見て注文のはがきが來る、社員が爭つて之を得意帳に附ける、君も其一人で『今度はオレにも書かせろ』と得意帳を引張凧、君の母堂も懇意の所を廻り步行き注文を取て來ては報告するといふ騷ぎであつた、社員で月給を取るは『改進新聞』から來た片山氏のみ、余の如きは辨當、湯錢、理髮錢だけ社で貰ひ、社の二階に寢起してゐた、發刊前、小使がないので『都新聞』の小使を連て來たが社の貧弱な樣を見て、一晩で逃歸つて仕舞つた、第一號は十一月一日の發行であるので、廣告のため富田氏の周旋で、銀座三丁目松島眼鏡店から幻燈の器械を借り廿九日（十月）銀座尾張町地藏の緣日に社の二階から普通風俗景色の幻燈に萬朝報發刊廣告の幻燈を交ぜて映寫すると見物の中には『又潰れ

る新聞社が出來る』抔と素見すものもあつた、之を見ても如何に此所で三號新聞が多く發行されたかが知れる。

萬朝報の題字は都新聞と同じく吉田晩稼氏が書き、周圍にある寶蓋しは藤原信一氏が描き豫定通り治廿五年十一月一日第一號」を發行した、當時第三種郵便物の認可を受けるには願書に初號を添へ出願すると、認可になるまでには一週間餘もかゝるので、第一號を發送するには第四種郵便にて二錢の切手を貼るのが普通であつたが、萬朝報では早く第一面と第四面を造り之を見本とし、遞信大臣秘書官に知友の藤田四郎氏がゐたので之に賴み發刊前に認可の出來る樣、運動すると、丁度十月卅一日の夜に至り認可となつた、此時已に刷終つた分もあるので是には活字を組み社員總出で『第三種郵便遞信省認可』の文字を押し漸く五厘で郵送する事が出來た、斯く發刊前、遞信省の認可を得たのは獨り我萬朝報のみである。

又是まで發刊した新聞の初號は早くも當日の正午前後であつたが朝報は其例を破るため早く印刷し前夜の七時から賣捌所に渡す旨を通知し、賣捌所は現金で取りに來る事としたが、此前夜に賣捌に渡したといふ機敏さには、賣捌業者は勿論同業者をも驚かし、或社の社長などは『油斷のならぬ奴だ』と呟いた程であつた。

初號は三萬五千部摺つたが二號の發行までには七千の定得意が出來、豫想以上の好成績を收めたので社員一同の喜びは一方ではなかつた。

又君の筆に成る萬朝報發行の主意が弱を助け强を挫くといふにあつたので魚河岸の人々は『これが本當の江戸ッ兒新聞だ』と同盟して購讀を申込み、角力協會からは『强を挫くは角力道に取り緣喜がよいから大鼓を入れさせてくれ』と申込むなど素晴しい景氣であつたので、一日君は余に向ひ『是までは君と一所で二度も潰れたが今度は三度目で必らず成功する』といはれた。

君の探偵小說は是まで松林伯知や、伊藤痴遊が講演するに止まつてゐたが、書生俳優川上音次郎よりは相當の版權料を出し『巨魁來』を淺草西鳥越町の鳥越座にて演じたいと余を介して申込んだので之を君に謀ると、君は『小說は小說、芝居は芝居、オレの小說を芝居にして當つてもオレは名譽と思はぬ代り、又外れてもオレの耻ではない、一々オレに斷る必要がないから勝手に演じてよい』といはれた、曩には新聞掲載後の小說原稿料は悉皆余に與へられ、又芝居に演じても別に版權料を取らぬ所に、君が他の小說家と異る所がある、此の『巨魁來』はボアスコベの名著で君の譯述したを竹柴信三が脚色し地名、人名を日本に替へ六幕とし鳥越座の初春興行の第一番目に据ゑ翌廿六年一月一日午前九時より開場したが非常の大入であつた。

場割は（序幕）上野公園地、同裏山鶯谷、千里崎海岸（二幕目）丸目山別莊。露子姫部屋、同奥庭妖怪（三幕目）星ヶ岡公園、千住街道旅揚・瀬香川水車、警視廳未決監（四幕目）竹内勇屋敷、葺屋町隱家、憲兵署門前、露畑中尉室、末廣町河岸（大詰）露畑中尉邸にて、役割は香川晴哉實は山縣育太郎（川上音次郎）露畑中尉（藤澤淺二郎）坂田大助（靜間小二郎）玉村廉（小織桂一郎）井上六郎、硝子買芝吉實は井上六郎（水野好美）獵夫要助、松浦曹長（岩尾慶三郎）露畑妹露子、押丁お鐵（福井茂兵衛）小西鈴太郎、鳥村模四郎（柴田善太郎）近藤軍曹、花岡夫人、監守長丸田鐵造、下女およし（寺島倉次郎）烈女お類、門田丈見（木村周平）竹内勇實は頼田渡（金泉丑太郎）等

夫より所々にて君の小説は芝居に上場されたが何れも外れはなく、大歌舞伎では廿八年二月大阪道頓堀の辨天座で、雁次郎、福助一座が『人耶鬼耶』を『人耶鬼耶涙香正説西洋譚』と改め興行したのが始めてである。

場割は（序幕）水天宮表門前、小森邸有德部家、荒川邸梅園、築地海岸大崩れ（二幕目）品川鮫洲寡女お傳內、千倉宅澤田實假住居（三幕目）東京裁判所官房、深川佐賀町おりゑ內、小森家有德捕縛（四幕目）裁判所豫審廷、田風呂判事宅（五幕目）小森家禮堂實面會、永代橋西川岸茶店、千倉貸座敷お新臨終（六幕目）品川驛停車場內、大師河原居酒店、大森停車場前、錢取橋番小家、新橋停車場（大團圓）深川佐賀町おりゑ內、小森禮堂居間、おりゑ宇二階銃死の場にて、役割は法學士澤田實（中村雁次郎）伯爵小森禮堂（片岡我藏）小森有德（嵐巖笑）海軍士官澤田猛臣、漁師利次郎（中村成十郎）判事田風呂厚實妾おりゑ（尾上多見之助）荒川奥方芳子、家扶三笠奈良三（中村壽雀）荒川令孃吳竹、鐵道員倫三（中村政次郎）下女お元、特務長

竹垣直、小間物屋善兵衛（中村成太郎）探偵鎌戸煙六（中村珊瑚郎）澤田お新（中村紫琴）探偵千倉丹平（中村福助）

此狂言が非常に大當であつたので、東京でも同年五月三十日午前九時より本郷の春木座にて演せられた、名題は『涙香正文人耶鬼耶』七幕と名け、場割は三幕目深川佐賀町おりゑ內、五幕目永代橋西川岸茶店、六幕目鎧取橋番小家の三場を除き、役割は

華族小森慮堂、漁師利次郎（市川宗三郎）同小森有德、警部松川春忠（市川右田作）判事田風呂厚、探偵鎌戸煙六（中村駒之助）法學士澤田實（澤村訥子）荒川令孃晃竹（澤村訥升）澤田妾おりえ（中村富十郎）同下女お元（澤村國之丞）探偵千倉丹平（中村勘五郎）差配人小西太郎平、巡査竹垣直、書記草野淸記、利二郎倅長作（中村駒雀）生徒三木傳（助高屋小傳次）八百屋八藏、判事實川道弘、澤田お新（中村七五郎）三笠奈良三、鐵道員倫三（市川市鬼藏）

此時の春木座座主は溝口權三郞といひ曾て君と余が勤めて居た『日本たいむす』出資者の一人であつたが、大坂で評判がよかつたと聞き、此座へ掛け、矢張大入を取つたのである。

其後同く三十年六月八日午前八時開場にて新演劇大同團の一座が深川仲町の深川座にて『捨小舟』を上演した、

場割は（序幕）大磯海邊一軒家、同奧座敷慘殺、同波打際檢屍（二幕目）鎌倉常磐家別莊、同地旅館樓上（三幕目）磯部村園遊會、同裏門外畑道、地獄谷猪番小家（四幕目）番町常磐邸宅、同裏庭密會、同男爵居間（五幕目）愛宕下横山內、市ケ谷門外安泊、同見附（六幕目）有馬溫泉宿屋、同洗脂樓（大詰）京都牧島邸塀外、同下賀茂社內森、同東山大捕物大團圓にて役割は

船長立田明、永谷禮吉（佐藤虔之助）小武石大佐（金泉丑太郎）私立探偵長横山長作（佐藤蔵三）古松その元孃、女乞食實は園江、蜘蛛の精、常磐夫人園江、牧島令孃（小島文衛）無漢平岡富松、馬丁德藏、宿屋亭主新兵衛（原良一）無漢古松松三、乞食實に松三、出…持實は松三、十日屋亭主實は松三（青木千八郎）化學士皮林育堂、植木屋實は育堂（靜間小次郎）深井警部、渡邊綱、侯爵牧島房通、醫學博士西泉忠道（小林完之）陸軍少佐倉濱義之、西井審三（岡田正直）義之妹小波孃（日野健一郎）男爵常磐幹雄、漁頼光（水野好美）

其後各座で君の小説を演じたのは枚擧するに遑まがない程であつた、又君の探偵小説が好評なので爾來探偵小説の流行を見る樣になり、『都新聞』では君の小説に代るため『短銃强盗清水定吉』『蒲鉾屋殺』『大惡僧』『おたりやおきん』抔の探偵實話を掲載し、『中央新聞』では南陽外史（水田榮雄）氏が君より原書を仰ぎて探偵小説を掲載し、『東京日々』の丸亭素人（遠藤速太氏）が同じく君の後援で地方新聞等へ探偵小説を掲載する樣になつた、大坂でも大坂毎日新聞が原書を外國より仰ぎて探偵小説を譯載すると、中には既に君の飜譯して掲載濟となつたものもあり、讀者より『夫は涙香小説の燒直しだ』抔との投書が來るので夫からは先づ原書の名を余の許に送り來り、余より君に問合せ、書名中、君の譯した分は其譯名を記して回答するので、毎日も其後は幸ひに燒直しの譏を免がれた。

話しは前に戻るが朝報創刊當時は前述の如く、賣捌に渡す新聞は代價と引替であつたが、若し新聞の刷上りが後れ十二時過になる時は地方出しの新聞は發送する事が出來なかつた、夫れは地方出しに貼

る郵便切手は、毎晩現金で銀座の精錡水本舗岸田吟香の店で買ふ事になつて居り、夜の十二時迄は特別に賣てはくれるが、十二時過は戸を開けてくれぬので新聞が後れた時は、地方出しは自然翌朝に廻さねばならなかつた、今より思ふと、殆んど虚言の様な有様である。

然るに斯く財政の困難なる中にあつて、紙屋は社を信用して廿六年の初荷に五百連といふ印刷用紙を送つて來た、今ならば一日の刷高にも足らぬが、當時一日に要する紙は僅かに七八連に過ぎなかつたので、容易に此紙が減らず、二三日過ぎてから紙の重さで根太が拔けるといふ騷ぎがあつた、此頃信用ある大新聞でも初荷に持てくる紙は百連内外であるのを創立後僅か二ヶ月後の朝報へ五百連を送つて來たのは紙屋が全く君を信用した爲めである、斯く多くの紙が積んであるので、出入の商人等も亦從て朝報社を信用する樣になつた、斯の如くにして新聞は豫想よりは賣高が多かつたとはいへ、賣捌の運動、他社への廣告其他の失費多く、町田氏も貯金を吐出したる上、社務も多忙になり、店務も見ねばならぬ處から、朝報社より手を引き、其代り君の小說は今後一切無償で町田氏の扶桑堂から出版さるゝ事となつた。

君は非常に友情に厚く、曾て綠雨齋藤賢氏が僅か五十金の借財で多年蒐集した古書籍を執達吏に差押へられ明日競賣に附せらるゝ事となつた前日、氏の友人より君に救濟方の相談を受けた、君は素より

齋藤氏とは懇意でないが、其境遇に同情し何とか救濟せんと思つても、當時社には少しの餘裕もなく、殊に其日は日曜日とて如何ともする事が出來ぬので、社へ辨當を入れる中澤丙一氏に賴み、高利を借りて齋藤氏の窮を救つた事がある、是が緣となり後に齋藤氏が朝報の一員となつたが、しかも曩に與へた五十錢の事に關しては口にも出された事がない。

夫から余は病氣に罹り大磯に轉地し、快癒の後、歸つてから横濱支局へ隱居の身となつた。

創刊當時の擴張振と太つ腹

植松龜次郎

萬朝報の創刊當時、私は眞誠堂と云ふ諸新聞大賣捌業を經營して居りましたが、黒岩先生の御依賴に依り主として萬朝報の擴張に從事して居りました。

明治廿九年十一月、東京各新聞社及各大賣捌人の使嗾、若しくは後援の下に東京府外九縣の各新聞賣捌人が、萬朝報の罷賣を實行しました、順序として其顛末を御話すると、東京の各新聞が定價を五錢宛引上げるから、萬朝報も之れに同意するやう迫つたのです、けれど當時新聞紙普及の必要上値上は出來ぬと云ふ衝突から、一府九縣は遂に罷賣を敢行したのでした、其時萬朝報社の非値上は時代に適

し、道理に合ひたるものと思ひ、私は萬朝報に組しました、さうすると各新聞社と各大賣捌人が萬安樓に集會して、眞誠堂の諸新聞販賣の差止を決議しました、而して弘文堂熱田氏は會を代表して私の家に來て云ふには『販賣を差止めらるれば折角の大賣捌の權利を失ふ、それをも忍んで萬朝報に加擔するといふのは侍の謂ふことで、苟くも算盤を持つ商人のする事でない』と荐りに私の反省を促しました、併し私の決心は動かない、『大賣捌の權利を失ふたら、更に最大賣捌の看板を掲げるのだ』と謂ふたら、流石の熱田氏も諦めて萬安樓の會へ其由を復命しました、其翌朝各新聞紙面には眞誠堂の諸新聞紙販賣を差止むといふ社告が出ました。

私は彼處是處と拔け買ひをして相變らず諸新聞紙の販賣を續けると同時に左のはがきを各販賣店に出しました、此文章は黒岩先生が書いて下さつたのです。

拜啓各位益御繁盛奉賀候、弊堂は兼て東京同盟賣捌店の一として其規約を確守し、誠實に諸新聞を取次ぎ候者にて此度更に店務を擴張するに決し、即ち諸新聞取次値段を左の如く引下げ候。

時事新報	錢厘毛 一三三	日々新聞	錢厘毛 一〇四	毎日新聞	厘毛 八〇
日本	九五	報知新聞	（當分）六〇	讀賣新聞	七九
朝日新聞	九一	都新聞	九一	中央新聞	（當分）六九

あづま新聞	五五	明治新聞	六五	國民新聞	九五
東京新聞	八〇	やまと新聞	八八	萬朝報	五二

右の値段は非常の割安に候へども、今後決して引上ぐる等の事之れ無く、猶ほ運賃も場所及紙數に應じ弊堂にて幾分を負擔し、成るべく保助の方針を取り候に付き、懸念なく御注文成下され度候。

謹言

明治廿九年十二月十二日

東京市銀座四丁目十八番地

諸新聞大賣捌店　眞　誠　堂

是れより先き黒岩先生が『私に一寸來て呉れ』といふことでしたからお宅へ伺ひますと、先生は氷嚢を頭に載せてをられました、徐ろに私に向ひ『君も知て居らるゝ通り、一府九府の同盟罷賣強行に遇つたが、此罷賣を解くにはどうしたら解けやうか』と問はれました。

私は大賣捌店を犧牲にして働くのだから、先生の意向を確めて置く必要もあると思ひ『ハイ此罷賣を解くには貳萬圓の金が入ります』と應へました、すると先生は『貳萬圓位は宜しい』と即座に應へられました。是れまでも先生に幾度かお目に懸りましたが、親しく先生に接してお話するのは此時が始めて

でした、而も先生が貳萬圓位は宜しいと云つてくださつた其の太つ腹が如何にも嬉しかつたのです。そこで私は仔細に愚見を申述べました『此罷賣を解く方法は各地に凡そ百ヶ所、百軒の新店を設置するのです、各一軒の新店主に平均金壹百圓づゝの資金を投せしむるのです、さうすると罷賣せし舊店は罷賣の非行罰として平均金壹百圓づゝ缺損が生じます、一ヶ所彼是金貳百圓、百ヶ所則ち金貳萬圓となります、此貳萬圓で罷賣を解き又大擴張が行はれますと』申した、すると先生は『それなら社が出すのではないのか』と謂はれたから、『ハイ』と答へましたら『ソンナ甘い事に行くかな』と別に喜ばれもしませんでした。

貳萬圓の支出にも驚かれない先生は、又出さなくて濟んでも喜ばなかつた、其時分の貳萬圓は其頃の朝報社に取つては大金であつた、今の社の百萬圓にも相當するだらう、私は唯だ先生の學者なり人格者なり偉人であるといふ事を知つてゐる外に、此太つ腹の態度には深く印象を與へられました。

それから私は約百二十程新店を作つた傍ら、舊知の賣捌人へは同盟罷賣の非行を詰つて反省を促しました、福島市の博向堂主人長澤廣吉氏が縣下の同業を率ひて降伏を申込んで來ました、忘れもせぬ同氏が最初の降伏者であつたのです、それから千葉縣、群馬縣外各縣の賣捌人が續々復歸して來ました、其數ヶ月の後銀座の店頭へ最大賣捌、廣告小取次といふ看板を掲げました、それから間もなく先

生から次のやうな文面の手紙が來ました。

拜啓君の盡力により罷責も解けた倍大の增紙を見る愉快々々、新聞店名の萬の字に添へる文字を撰び直し申候。

萬壽、萬年、萬倍、萬潮など約三十程の店名が書添へてありました。

以上は先生から受けた深い印象の一として、今だに忘れることが出來ません。

大度量の人

石川半山

大正七年の秋から、八年へかけて、余は萬朝報を代表して、歐米諸國を旅行したが、其の任務は、第一は世界版の配附、第二は聯合五箇國元首へ太刀獻上であつた、余は大正三年の冬、黑岩氏の要求に從て、萬朝報社員の一人となつた、實は微力短才、役に立たぬ上に、當時は少しく休養を望んで居た時だから、再三辭退をしたにも拘らず、黑岩氏の懇切なる勸告が有つたので、社員の列に加はつたが、それから大正七年に至る迄、何等の働らきをもしなかつた、足懸け五年も、格別の働きをしないのに、黑岩氏は一言の不平も言はず、終始優待厚遇されたので、此の大正七年の旅行は、聊か其の厚意に酬

ひんと考へたので有る。

全權を與へられた

黑岩氏は此の二個の重要なる任務を、余に委托したる後、之に關しては、一切の全權を與へられた、凡そ使命を帶びて、海外に出でたる人も多いが、余が萬朝報から特派されたる時の如き、全權を有したる者は有るまい、黑岩氏は唯此の重大なる任務を、余に委托したるのみで、其の實行方法に關しては、一切余に一任された、世には特命全權大使の名が有つても、其の實は十分の全權を有せざる者が、其の例に乏しくないが、余の此の場合には、文字通りの全權で、一切余の自由意思を以て、其の任務を行ひ得たので有る、各國元首へ黑岩氏の名を以て、捧呈すべき文章の草案だけは、同氏自ら起草さるべき者と思ふて、其の意向を尋ねたが『それも然るべく願ひます』と言つて、一言半句の註文もなかつた、之れは大度量の人でなくては出來ない事で有る、而して此の如く萬事を一任されると、余は一層責任の重きを感じ、余の全力を盡して、此の任務の遂行に務めた。

世界版の配附

世界版の配附と云ふことは、之を成功してからは、何でもない事の樣だが、實は容易ならざる事務で有つた、米國は布哇から始めて、各地の舊友新知の厚意に依て、有力なる團體の手に、配附を引受

けて貰らうたが、歐洲の戰場への壹百萬部は、少からぬ苦心を拂ふた、郵船因幡丸と伊豫丸の二隻に積み込みたる四十噸に近い萬朝報世界版、汽車ならば貨車の七八臺を要する程の量で有る、若し引受人が出來なかつたなら、之を汽船から陸揚げするばかりでも、人夫賃銀の高い英國では、大金が懸るのだ、之を倉庫へ積み込んだ日には、高い倉庫料が懸る、鐵道で運搬したら、大變な運賃を取られる、余が倫敦へ到着した時、既に休戰で、英國政府の情報局は閉鎖に決し、かゝる者は一切取扱はぬ時で有つた、かゝる時に、短かい日子の内に、引受人を決定する任務は、極めて機敏に處理しなくては出來ない事だ、余が英國基督教青年會に交渉して、之を引受けて貰らひ、首尾克く此の任務を果すことが出來たのは、全く一切の全權が有つて、臨機の處分をなし得たからで有る。

黑岩氏渡歐の通知

太刀獻上に付ては、米國大統領ウヰルソン氏に謁見して、太刀を贈り、第一の難關は之れを突破し、それから英國へ渡つて、珍田大使と英國皇帝へ謁見の事に付て協議して居る時、大使の所へ、電報が來て、黑岩氏渡歐の事が分かつた、外務省から巴里の講和會議へ來る人名を通知したる中に、黑岩氏の名が有つたので有る、そこで余は大使と相談して、黑岩氏が來らるゝ以上は、此の太刀獻上の光榮ある任務は、同氏自ら之を行はるゝ事とすることにした。

唯援助せんのみ

大正八年一月十八日に、リヴアプールへ黒岩氏を迎へたる余は、先づ此の事に付て相談した、然るに黒岩氏は直ちに『各國元首へ太刀獻上の事は、貴下の任務であります、それは萬朝報紙上に於て、天下に公けにされた所で有ります、私の今回の旅行は、全く漫遊に過ぎません』と言はれた、而して黒岩氏は倫敦のハイド、パーク、ホテルに一泊して、直ちに巴里へ向はれたが、余は世界版其他種々の用事の爲めに、同氏と同行せず、又英國皇帝への謁見は、後廻はしとして、十日ばかり遲くれて、巴里へ往つたが、巴里に於ても、黒岩氏の巴里に居らるゝ以上は、佛國大統領ポアンカレー氏への謁見は、同氏自ら之を行ふべき者で有るとの議論が有つた、大住舜氏の如きも、熱心に此の正論を首唱し、余も亦勿論之に同意したが、黒岩氏は飽く迄も、此の任務は余の責任なることを主張し、『自分は之が成功を援助する覺悟で有る』と言つて、二月十七日を以て、飄然として佛國の南方へ遊ばれた、そこで余は松井大使に謀り、二月二十六日を以てヱリゼイ宮に於てポアンカレー大統領に謁見した、然るに黒岩氏は伊太利に赴き、代理大使今井忍郎氏に向て、余の太刀獻上に關して、依賴さるゝ所が有つた、其の羅馬より三月三日附にて發せられたる書面には、左の文が有つた、

拜啓、小生漸く今三日を以て『羅馬に着し候、途中里楊、馬耳塞、カン、ニース、サンレモ、ゼノ

ア、ピサ、フローレンス等に宿したる爲に御座候、扨今井書記官に逢ひしに、伊集院氏よりの手紙に由ると稱し、打解けて話し致し候、大に愉快を感じ候、同氏の言に由るに、獻刀の事は、無論取計らう可きも、國王が度々戰地の方へ向はれ、平和の克復したる今日と雖も、豫じめ謁見を必し難きに付、一週間ほど羅馬に滯在するとも苦しからざる覺悟にて來らる可しとの事に御座候、勿論皇帝の謁見を請ふ爲めには、一週間位の滯在は、石川氏に於ても、覺悟の事なる可しと、小生は答へ候、猶同氏より聞けば、佛國大統領へは獻刀の事を了せられし旨、新聞紙に在りし由に候、誠に結構の事と、一應安心致候(下略)

此の書面は餘程の長文にて、歸途の汽船の事に付て記して有り、余の太刀獻上が、伊國を先きにする乎、英國を先きにする乎に付ても、記して有つた、余は佛國大統領へ謁見の事は、ニースのルートル、ホテルへ宛て、電報及び手紙を以て黑岩氏へ報告したが、出發後で其の電報も書面も返つて來たのだ、それから三月七日には、ナポリから一書が來て『若し小生の在伊中に、貴下が伊國へ來らるゝ如き運びともならば、猶更ら宜しくと存候』と有り、此の書面には『ヴエシユビアの活火を望みつゝ』と書いて有つた、然かし余は三月はブラッセルに赴き、白國皇帝に謁見したので、伊太利へは黑岩氏の滯留中に往く能はず、四月十三日を以て、羅馬へ往き、伊國皇帝に謁見した、而して最後の英國皇

帝に謁見の事に付ても、種々の苦心をなし、頗る畫策する所が有つたが、黒岩氏は余よりも早く倫敦に入り、豫じめ之に關して、代理大使永井松三氏に依賴されて居た、されば余が倫敦に入て、此の事を開始するや、容易に此の事が運ばれて、黒岩氏が倫敦を出發されたる後二日、五月十九日には、余はバッキンガム宮殿に於て、ジョーヂ五世陛下に謁見するの光榮を得た。

子分に花を持たせる心

各國の皇帝や大統領に謁見して、談論を交換したと云ふことは、光榮には相違ないが、不肖余と雖も、世上の俗物の如く、之を無上に難有がるものではない、矧んや黒岩氏に於てをや、其の胸中に、之を望む程の事ではなかつたに違ひない、然かしながらかゝる場合に於て、一社の社長として、一旦其の社員に委托したと云ふ、簡單なる理由で、此の任務を終始余に委托し、更らに羅馬に於ても、倫敦に於ても、飽く迄も之を成功する樣に助けたと云ふ所は、誠に大度量の人で有る、余は多くの先輩を知て居るが、今の日本に於て、之れだけの大度量を持て居る人は見當らない、かゝる事は『十分に其の子分に花を持たせやう』と云ふ大親分の大度量を持つて居る人でなくては、出來ない事で有る。

國家の責任を負ふべき人物

回顧すれば明治三十一年の春、原抱一庵が余を訪ふて「萬朝報へ入社を勸告した時、盛んに黒岩氏の

人格を賞讃し、『士を遇するの道を知て居る人だ』と言つた、然かし其の時は余は彼れの勸告に應じなかつた、其の後圓城寺天山、小林天龍、松井栢軒、幸德秋水、堺枯川、田岡嶺雲等から、黒岩氏の大人物なるとを聞いた、彼等は萬朝報社員たる間、其の社長たる黒岩氏の德に、心の底から推服して居たので有る、日露戰爭の時の演說會に、余は初めて黒岩氏と共に演壇に立ち、會場や汽車中で、談話を交換し、それから公けの政治運動に於て、事を共にし、世間から黒岩氏を首領とせる所謂八人組の一人に數へられ、遂に大正三年から、其の羽翼の下に收められたが、そこで初めて舊友等の言の誤らざるを知つた、此の人は優に内閣總理大臣となりて、國家の責任を、其の双肩に荷ひ得るだけの大人物で有つた、抱負、識見、學殖、文章の優れたるは勿論、特に天下の豪俊を其の懐に收めて、能く之を用ゆるの大度量に至ては、蓋し當代に其の比類を見ない人で有つた、余が黒岩氏に付て記述せんと欲する所は、尙少からざる事だが、今日は唯此の一事に止めて置く。

黑岩涙香（明治三十三年發行雜誌『新聲』より）

緒方流水

（一）月旦の標準

歴史には文明史體を採り、月旦には記述の體に據る、これ余の史及人物に對する批評の標準なり。何故に史には文明史體を採るや、事の多端に過ぎて叙するに煩はしく、徒勞に疲れて、心核を看過するを恐るればなり、何故に月旦には記述の體に據るや、形容の單語に盡きて論ずるに易く、抽象に過ちて全體に亘らざるを恐るればなり。

史の海を潜る者は、潜水船によりて底深く沈めよ、帆前船に乘りて緩かに遊び、蒸氣船に便して疾驅する者は、共に史筆の任にあらざるなり、月旦の山に登る者は、杖と草鞋とを用意して隈なく探り見よ、馬を第一峰に立てゝ嘯き、若しくは一面の凹凸を瞰めて、善く山を視得たりとする者は、遂に月旦の器に非ざるなり。

史は數萬言を叙するも足らず、月旦は一語を加ふるも盡く、蓋し其の盡るや眞の盡るにあらずして成心ある者の眼に盡くさるゝなり、曰く眞摯、曰く奸邪、曰く廉直、曰く陋劣、曰く何々、曰く何々、

其の正しきと曲れると、大なると小なるとを問はず、斷案は容易に下さるゝなり。

斯の如き筆法に依りて、入道淸盛は擅横の名の下に其眞骨頭を埋沒せられ、斯の如き筆法に依りて、野心家尊氏は不忠の譏の下に其才能を抹殺せられぬ、墓若し聲あらば人に批判の勇なかるべし。

冀くば汝の邪見と成心と偏執と局量とを去り、直に誠心を湛へて人物に對せよ、或は明の一半を看取せん、而も猶一半の惑ふあるか、請ふ汝の眼に唾きし、之を縱に仰ぎ、横に眺め、斜に睨め、倒まに見試みよ、而も猶惑ふものあるか、彼れも亦肉の人なるを思へ、病の器なるを思へ、魔の縁者なるを思へ。

弱きは人なるよ、強きも亦人なるよ、誰か幼時の天使が成年の惡魔たるを知らん、誰か成年の惡魔が老年の君子たるを知らん、藻に育ちし水蟲は蜻蛉となり、土に育ちし螟蛉は胡蝶となる、いま夫れ人を議するに於て、彼は曾て水蟲なりきと罵り、今其の蜻蛉なるを知らずんば如何、彼は螟蛉なりきと嘲りて、今其の胡蝶たるを問はずんば如何。

月旦は抽象の文字を厭ひ、直截を忌む、斟酌を好みて綜合を尚ぶ、今一の人を論せんと欲するか、先づ彼を知らざる可らず、既に知る所あるか、則ち彼を叙するを要す、能く叙する者は能く人を論ずる者なり、叙は人を解く所以の道。

余は今、涙香を論せんと欲す、涙香は何人ぞ、これ余の直に答へんと欲する所にあらず、涙香は如

何なる經歷を有し、其經歷に於て如何に見ゆるや、これ豈に月旦の第一歩なる勿らんや。

(二) 涙香の小説

涙香の今主刊する萬朝報は、全國第一の讀者を有すと稱せらる、夫れ朝報は眇たる三面新聞なり、彼に何の長所ありて然るや、言論峻峭なるか、報道敏速なるか、機關整備せるか、人物富贍なるか、然り、然り、然り、然り、去れど余をして寧ろ多く否を言はしめよ、朝報の特長は涙香の飜譯小説にあり。

涙香の飜譯小説、其の文平にして俗ならず、其の技神に入る、之を讀むに倦むとなく、之を味ふに教訓の豐かなるを覺ゆ、啻に靑年子弟の讀料たるのみならず、老人も之を讀み、婦女子も之を讀み、車夫馬丁も亦愛讀を禁ずる能はず、家々の毎朝朝報を樂み迎ふる所以のものは、其の小説を讀むの快を思ふが爲めなり。

若し涙香が一回の執筆を怠ることあるか、反應は直に失望の投書となりて、朝報社に舞ひ込み來るなり、涙香若し筆を佳境に入るゝの道程に於て暫く休止するか、讀者は懊惱の餘、戲れに果し狀をさへ發し、我は爾く汝の飜弄に堪へずと言ふなり。

涙香の曾て『野の花』を譯するや、一日朝報社編輯局の電鈴切りに鳴る、就て聽くに、そはいと物體振りたる物の言ひやうなりき、曰く『野の花』の續きは明日揭げらるゝやと、果然、華族の隱居樣の今

日痛くも心を『野の花』に傷め給ひしなり。

又一日、涙香が恰も理想團の設立を企てたる頃のことなり、『巖窟王』の二三日休揭を見るや、讀者もさる者、連名にて理責めの投書を向け、大に涙香を責めて言ふ『貴下の理想團を起すや、我等率先之が會員たり、集會に時間を守る議や太だ善し、唯怪む、此提議を爲せる貴下にして日を守らざるは如何』と

偉なる哉涙香の筆や、彼にありては讀者の不平は讀者の讃美なり、彼の傷む時讀者も亦傷み、彼の惑ふ時讀者も亦惑ふ、而も彼の傷み且つ惑ふものは、偏に讀者の傷み且つ惑はんが爲めの思惑に過ぎず、彼は未だ曾て眞に傷み且つ惑はざるに、讀者は其技に釣られて、眞に傷み且つ惑ふなり、偉なる哉涙香の筆や。

（三）　新聞記者の經歷

けふ空の鳥を宿す庭の椎木は、其の初め地に落ち顧る者もなき一粒の種なりしよ、けふ最大多數の讀者を有する朝報を主刊し、辣腕衆に優れ、文名江湖に布く涙香の半世は、抑も如何のものなりしか索莫、困頓、懷疑、流浪と而して戰闘！

涙香の初めて新聞記者らしき生活に足を踏入れたるは實に明治十三年の頃にあり、今の中央新聞社主大岡育造氏等相計つて『東京輿論新誌』を發刊するや、涙香も初めて是れに一文を草す、これ涙香が初

陣の作なり、而も彼は未だ籍を編輯局に有する程越大からず、言はゞ、遊歩者の暫らく路傍のベンチに席を借りたる姿に過ぎざりし也。

明治十六年、初めて『同盟改進新聞』に入社す、かくて涙香は玆に漸く文壇に一席を分ち得ることゝなれり、時に齢二十二。

朝顔のもろかりしは『同盟改進新聞』の運命なりき、編輯局の一小僧涙香の名未だ素より現るゝに至らず、漸く落つきしと思ふ席は暖るゝ暇なく、新聞は間もなく廢刊の非運に遭逢し、之より數年涙香は復た迷ひ兒となれり。

機會は招くに去りて却て待つに來る、彼が下宿屋の片隅に暫く噞喁せる程に、乾池少しく潤ひ、幸に『日本たいむす』と稱する日本字新聞に入社する機會を得たり、然り入社し得たれど、入社の語は此には寧ろ勿體に過ぐ、『日本たいむす』の其れは、『同盟改進』の其れと同じく、襁褓の裡に呼吸を引き取りたればなり。

迷又迷、困又困、彼はいつまで、斜めに張れる貸家札に眼を注がんとはすらん、『いかにせん賴む木蔭と立ちよればなほ袖ぬらす松の下露』、彼は『日本たいむす』の空屋を通り抜けて呆然たりしが、彼方に『繪入自由』の我を招くらしきに、走りて一席を請ひ、更に轉じて『今日新聞』にさまよひ、更に又轉じて

『都』に危き綱渡りなどしたり、凡そ此間の事、徨々如、切々乎たり、而して涙香の初めて繪入自由に入るや、其月俸僅に金十圓なり。

讀者よ、去れど早計に涙香を可憐と思ふなかれ。彼は戰の子なり、戰の子には禍多かれよ、寧ろ却て眞骨頭を見るべければなり。

涙香の繪入自由に在るや、齢二十有五、血氣正に旺盛なり、彼は爾く新聞より新聞に巡禮せりと雖も、又同時に數新聞に精力を分てる經歷なきにあらず、當時彼は毎日二新聞の社說と四新聞の小說とを擔當して猶綽々の餘裕ありき、其所謂二新聞とは『繪入自由』と『今日新聞』にして、四新聞とは上記の二紙及び『東京繪入新聞』、『繪入朝野新聞』(今の中央新聞)の二紙を謂ふなり、いかに彼れが强き戰の子なりしかを見よ。

この强き戰の子涙香は、斯くして潔く橄欖の冠を博し得たるか、曰く否、彼はいま懷疑の溪に陷れり、險しき山路は往き往けども盡きざるべし、寧ろ如かんや、踵を彼の潺湲たる溪に廻らして一掬の甘露を味はんにはと、試練切りに至る、此時涙香は方にヲートルローの戰の野に立てり。

破れてナポレオンたるか、勝ちてウエリントンたるか、勝敗の機は懸けて肚裡三寸の忍耐にあり、恰も滂沛として至れる雨は、涙香をナポレオンの敗に落したるか、抑も又彼をウエリントンの勝に持

ち上げたるか。

生活難！行路難！寧ろ筆を燒てインキ製造人たらんと、これ彼が今臨めるヲートルローの野に滂沛として至れる大雨なりき。

明治二十二年、彼齡廿八、其冬都に入社するや、積年の疲勞一時に至り、漸く神經衰弱を覺ゆ、二十五年七月則ち終に退社す、戰の子も懷疑なきを得ざるなり、恰も彼の知人中活版用インキの製造に通ずるものあり、就て其語る所を聽くに極めて有利の事業なるが如し、彼以て快なりとし、則ち筆を擲ちて曰く『これある哉、我はインキ製造人たらん』と。

感謝す、運命の神よ、汝は、詩人バルンスをジヤメイカの出稼人たるより救ひ、トルストイを遊蕩の士官たるより救ひ、殊に我が露伴を失望の靴師たるより救ひたるが如く、又我が涙香を落膽のインキ製造人たるより救へり、然り、彼は勝ちて遂にヲートルローのウエリントンとなれり。

戰の子、端なく病を得て閑臥するもの半歲、其健康は漸く回復せり、眼を擧れば、四邊は猶暗々として沈々たりき、光明は何處にあるや、希望は何處にかある、只看る、忽ち一道の光明の、希望の女神を伴ふて來れるあるを、如何にして？何處よりか？多言せず『萬朝報』の發刊！

萬朝報の發刊！これ直に希望の女神を一道の光明の伴ふて來れるものと言はるべきか、曰く、然り、

曰く否、其の『否』と言ふは、常人の眼に映ずるの時に於てなり、其の『然り』と言ふは獨り涙香の眼に映ずる時に於てなり、涙香は弱き戰の子なるが如く、又抱負の子、自信の子なりければなり。

余をして今朝報十餘年の經歷を說かしむる勿れ、說けば一語に盡く、曰く戰鬪!

其の生るゝや、荊棘の冠を冠らしめられ、其の漸く長ずるや、戰線漸く開け、未だ曾て一日も倦まず、未だ曾て一步も退かず、而して此の戰鬪の間に發揮せられたる涙香の精力を知らんと欲せば、試みに過去十餘年間の朝報を取り出し見よ、其處に涙香の突喊あり、其處に涙香の拔擊あり、其處に涙香の格闘あり、而して尙且つ鮮血の塗みれて斑々たる印痕あり、誰か涙香を好運の兒とは言ふや。

(四) 本領と抱負

涙香の小說に於るや、夫れ斯の如く勤勉なりき、斯の如く勤勉なる彼は、自ら小說の飜譯家を以て任じ居たるや、曰く否、小說は彼の戀にあらず。

初め涙香の朝報を起すや、小說は紙上に掲げざる意向なりしと云ふにあらずや、彼れの小說に於けるや、初めは生活の必要よりし、中途道樂となり、今や彼が主張の一端を伸ぶる有力なる利器となれり。

されど、小說の飜譯が、直接或は間接に、彼に及ぼせる影響は之を看過するを得ず、何ぞや、文筆

の練習これなり、彼常に言ふ『能文の域に至るには、多讀か多作か二者其一を得ざる可らず』と、彼が如く多讀にして多作なるものは、これ即ち自然の練習にあらずや、而して又自ら能文の域に至るの道にあらずや。

彼は多角形なり、少くとも文筆の業に於て八面玲瓏なり、小説は甚だ之を能くす、言論に、雜報に、隨筆に、三面記事に、往く處として適せざるなし、彼は天成の新聞記者なり、若し或は朝報社に於て同盟罷業を企るものあるか、彼は一笑に附して、切りに其の好む煙草を燻ゆらし、安々と一手に編輯し得べし。

されど、世人は彼が老練なる飜譯家なるを知りて、深酷なる言論記者なるを知らざる如し、最近に於る『新聞紙の道德』若くは理想團に關する言論の如きは、達意を主とせるもの、素より其特色を發揮するに至らず、彼が痛快淋漓才氣横生の言論を作りたるは、實に民鐵の假面を冠りたる數年以前にあり。

一夜彼れ來客の妨るに逢ふ、この夕彼は恰も一篇の長論文を草すべく思ひ立ちたる所なりき、無頓着なる客は漸く十二時に至つて辭し去れり、これより彼れの天下なり、彼は猛然として机に向ひぬ、徹夜！これ文士の常、素より誇るべきなし、只見る筆脚走ること急に、一枚、二枚、三枚、忽ち机上原稿の山を築くを、翌朝彼れ六時に旅装を整へて北海道に去る、而して前夜草する所の原稿は實に四

十枚なりしと云ふ、讀者記するや否や、東京取引所に關する民鐵の大論文はこれ。

余をしてこゝに少しく彼れの文を評せしめよ、彼は甯く文筆に八面玲瓏なるも、其の卓出せる特長は遂に蔽ふべからじ、言論も、雜報も、隨筆も、三面記事も、皆小說的なり、換言すれば彼の言論、雜報、隨筆、三面記事は、其小說の如く先きより先きへと人を釣り行くなり、迂回するなり、管々しきなり、以て小說飜譯の其文章に及ぼせる影響を見るべからずや。

朝報の編輯に於いて、彼が今最も力を盡すものは小說なり、これ或は小說が新聞の賣れ高に大關係を有するに因るか、去れど彼の本領は小說にあらず、彼は言ふ『小說より逃れて閑を得んと欲すれど能はず、何時かは政論記事に奮鬪せずんば已まじ』と。

又言ふ『邦人は未だ新聞記者の何者たるを知らず、記者も亦恰好の者少し、新聞記者の戰ふべき戰場は極めて大なり、余は新聞紙のエヂターたるに滿足す、余は新聞記者の何者なるかを示さん、新聞記者の恰好なるものとならん、此目的を達し得れば政治家たるに優さる』と。

涙香の如きは、其實力經驗に於て、既に業に政治家たるに優さるものにあらずや。

（五）原作と作者

余は曩に涙香が譯したる小說の、優に五十篇を越ゆるを言へり、本文は元と抽象的評論を避け、可

及的範圍に於て、彼が過去の經歷と其文筆上の事業を紹介し、彼が如何なる經歷を有し、其經歷によりて如何に見ゆるかを語るにあるを以て、今又呶々せず、彼が飜譯の經歷を左に表によりて示す可し、斯くするは最も正しく彼に就て語る所以なればなり。

左の表は其譯の年月順序に從へり。

（一）法廷の美人（作者）ヒユース、コンヱイ　原著名 "The Dark Days."
（二）大　盜　賊（作者）ガブリエー　原著名 "Lerange afair"
（三）人耶鬼耶（作者）同人
（四）他人の錢（作者）同人
（五）有罪無罪（作者）同人
（六）眞　　暗（作者）ビースヴオン
（七）海底の重罪（作者）ボアスゴビー
（八）妾　の　罪（作者）米人姓名不詳
（九）劇場の犯罪（作者）ボアスゴビー
（一〇）塔上の犯罪（作者）同人

黒岩涙香

(一一)指輪　(作者)同人　原作名 "Cats' eye Ring"

(一二)片手美人　(作者)同人

(一三)悪党紳士　(作者)同人

(一四)執念　(作者)同人

(一五)決闘の果　(作者)同人

(一六)銀行の賊　(作者)米人姓名不詳

(一七)活地獄　(作者)ボアスゴビー

(一八)美少年　(作者)同人　原作名 "Where is zeno Bia"

(一九)巨魁来　(作者)同人

(二〇)何者　(作者)ビ、エル、フワージヨン

(二一)梅花郎　(作者)マンビルフエン

(二二)美人の獄　(作者)フロレンス、マリエツト女史

(二三)女夜叉　(作者)ボアスゴビー

(二四)死美人　(作者)同人

(二五)非小說（作者）ウ井ルキー、コリンス

(二六)大金塊（作者）不詳

(二七)鐵假面（作者）ボアスゴビー　原作名 "The iron mask,"

(二八)白髮鬼（作者）マリー、コレライ女史　原作名 "Ven Detta,"

(二九)人の運（作者）ミス、ブラツトン

(三〇)孃一代（作者）バルサ、エム、クレイ

(三一)女庭訓（作者）ミス、ブラツトン

(三二)女退治（作者）ノオリス

(三三)露國人（作者）同人

(三四)怪の物（作者）エドワード、ドーニー

(三五)棄小舟（作者）ミス、ブラツトン　原作名 "Diayola" or "No Bodies Dughter"

(三六)人外境（作者）アドルフ、ベルロー　原作名 "Black Venus,"

(三七)武士道（作者）ボアスゴビー

(三八)心と心（作者）リツター　但し匿名

黒岩涙香

(三九)繪　姿（作者）バルサ、エム、クレイ
(四〇)古王宮（作者）同人　原作名 "At war with Herself."
(四一)雪　姫（作者）同人
(四二)幽靈塔（作者）ミセス、ベンチソン　原作名 "The phantom Tower."
(四三)野の花（作者）バルサ、エム、クレイ
(四四)人の妻（作者）同人
(四五)巖窟王（作者）アレキサンダー、ドユーマ　原作名 "Monte Cristo"

右の表に據れば、涙香が飜譯小説の總數は、正に四十五篇なり、されど右の表には多少の缺漏なき能はず、其總數は實に五十篇を越ゆるも、時日の久しきに亘れると、數の甚だ多きとの故によりて、涙香自身さへも一々は記憶し居らざるなり。

然り、作は實に五十有餘篇、而して彼が紹介したる原著者は二十人に垂んとす、就中、ボアスゴビー、ガブリユー、バルサ・エム・クレイ等、其數と質とに於て殊に優れるものなり。

ボアスゴビーは、佛國の文豪にして、最も想像に富める多作者なり。邦人の西洋小説に少しく通ずる者は、ボアスゴビーを　するに、鐵道小説の作者を以てすれど、其實彼は決して然らず、彼は毫も

作の實行を念頭に置かず、鐵道小說の作者アドルフ・べロー等と選を異にし、ゾラにも劣らざる第一流の作者なり、惜むべし、彼は四五年前既に鬼籍に入れり。

ガブリユーも亦佛國の一文豪にして、名聲大ドユーマと相敷き、其著は大抵、獨、露、英、各國に譯せらる。

若し夫れバルサー・エム・クレイに至りては、精力絕倫、其著八十有餘種の多きに達す、彼は又の名をシヤロツト・エム・ブリームと云ふ、文壇に於る匿名號なり、輓近涙香が切りに譯出せる繪姿、古王宮、雪姬、野の花、人の妻等は、皆此の人の作に係る、而して末松靑萍博士が譯せる谷間の姬百合の原著ドラソンの作者もこの人也。

其他マリー・コレライの音樂家にして小說家を兼ぬる、ブラツトン女史の巾幗の錚々にしてエリオツトの壘を摩する、ウヰルキー・コリンスがヂツケンスの擔當せる雜誌の跡を受けて有名なる、孰れも皆な能く消化せる涙香の筆によりて、邦人の耳目に新たなるものなり。

(六) 小說の主張

小說の飜譯は、涙香の戀にあらず、涙香の初めて新聞事業に從ふや、文壇は未だ草叢の時代に屬し、小說の如きも見るべきものなし、窃に以爲く、二三子何ぞ鈍なるや、斯の如くんば、驢馬も亦其單調

に飽かんと、乃ち彼が多讀の餘に得たる所の種を續き物記者に給す、續き物記者は讀賣草双紙の體に泥む輩也、之に給するに新材を以てするは、例へば猫に小判を與ふる如し、果然、涙香の新材供給は全然失敗に歸せり。

涙香此に於てか自ら起つ、彼は曾て戀せざるも自ら進んで小說を娶るべく起てり、所謂俠氣なり。かくて彼が最初に公にしたるものは、法廷の美人なり、法廷の美人は、ヒユース・コンヱイの著『ジ・ダーク・デイス』を譯したるものなり、三十日の續き物となりて、明治二十年の『今日新聞』に現はれ、人氣大に良かりき、涙香乃ち人に語つて曰く『我は毫も小說家として世に立たんの意なかりき、恨らくは今不幸にして之に成功す、されど抱負なくんばあらず』と。

彼が其の處女譯此の法廷の美人より、目下朝報に連載中の巖窟王に至るまで、其健筆によりて譯出したるものは總て五十有餘篇の多きに達す、就中白髮鬼、人耶鬼耶、鐵假面の三篇は、其上半期に於て最も喝采を博し、古王宮、幽靈塔、野の花は、輓近最も好評を得たるもの、若し夫れ巖窟王に至りては、神來鬼往、變幻出沒、眞に無雙の大著なり、之を譯するに於て、涙香の筆毫も澁滯を見ず、例に依て、讀者を引着し、且つ飜弄し來る。

何によりて斯る魔術、然り熟練の餘に成れる魔術を彼は逞しうするや、他なし、其譯、剪裁の宜し

きを得、且つ表現に天成の長技を擅にすればなり、彼が譯の法は、凡そ先づ初めに當の原書を通讀し、後ち一回一回の範圍を作り、一回の中、詞句の面白く肝要なるものあれば、必ず之に記號を施し、下筆の際、其詞句を書き落す勿らんと期す、而して其他の原書中の閑文字は、省略し剪裁し去るも顧る所にあらず。

曾て彼が其の譯『銀行の賊』に自序して言へるとあり『余は唯原書を一讀し、丸呑にし得たる筋道を記憶の底より探り來りて、隨意に筆を取るが故に、譯と云ふは穩かならず、されど世に斯る譯し方を適當に言ひ現はし得る言葉あるを知らざるが故に、止むを得ず譯といふなり』云々、又以て其譯の仕方の一面を見るべきもの。

彼が西洋小說に對する書淫は、殊に驚くべきものあり、書生の時彼は教科書又は教科書らしき硬本を讀まず、明治二十三年の頃、既に人に誇つて曰く『余が一讀せる西洋小說は、優に一千部を越ゆ、この書淫に於て、恐らく余の右に出るものなからん』と、彼が神經衰弱の故を以て、明治廿五年都を退くや、書淫は一層其度を進め、暫らくも手に西洋小說と横字新聞を措かず、寢も廢し、食も忘れたる程なりしと云ふにあらずや。

夫れ頑石も寸金を含めることあり、駄作も棄て難き節なきにあらず、彼が貪り讀めるもの、何ぞ必

しも名篇佳作のみならん、駄作は讀める彼に遂に何の用なかりしか、曰く否、彼は此時良工は朽木も捨てざるの用途を考へ、一の篇と他の篇の筋を取合はせ、配合面白く譯出し來れり、例へば棄小舟の如きは其れ也。

彼は常に言へり『余が小説を譯する所以は、實に人の教訓に資せんとするが爲めのみ、余の小説は所謂新聞小説にして、純文學上の價値を期するものにあらず、多數の俗人を教へんと欲するものにして、少數の識者に讀まれんと欲するものにあらず』と。

これは直に首肯せらるべきか、答へて『然り』又『否』と言はん、其の『否』と言ふは、今日よりして見たる其前半期に於てするなり、其の『然り』と云ふは、此四五年來、殊に晩近に於てするなり、盜賊、陰謀、殺人罪、探偵、捕縛、處刑等は、彼が前半期に好んで譯出したる題目にあらずや。而して婉淑、節抑、正義、献身、克己等は、彼が晩近に好んで譯出したる題目にあらずや。

涙香の譯、概ね變化に富むと雖も、終局は目出度し、目出度しなり、所謂勸善懲惡一派の如く爾く露骨ならざるも、其主意は相去る遠からず、以爲く、小説は實際にあらずして假作なり、何ぞ此の塵世に多く見るが如く、惡人盛へ善人亡ぶとするを要せんやと、又以爲く圓滿に近き理想の人物を描いて、以て世の教訓に資せんと、此故に彼が描き來る人物は、社會に多くはあらざるも、あり得る人物

にして、又社會を敎ふる人物なり。

方今小說家を以て名を知らるゝもの、其人決して少しとせず、而も能く家庭の讀み物に堪ふる作果して幾許あるや、弦齋は今時の家庭に喜ばるゝ唯一の御馳走なり、然り、唯一の御馳走なりと雖も、其滋養稀薄にして、讀むも益なく、讀まざるも損なし、紅葉、柳浪の徒は畢竟何する者ぞ、家庭の讀み物としては、其價零度に近く、露伴の如きは亦一の異邦人のみ。

晩近最も江湖に歡迎されたるものは、幽芳の己が罪と蘆花の不如歸と爲す、其の爾く歡迎されたる所以のものは、措字の巧妙なるが爲めにもあらず、結構の嶄新なるが爲めにもあらず、唯聊か家庭の讀み物たるに堪へたるが爲めのみ。

家庭の讀み物としての不如歸や己が罪は、之れを涙香の譯に比すれば、其健全なるの點に於て、後者が毫も遜色なきのみならず、其老練周到なるに於て後者は遙に前二者に卓越せり、不如歸は其淸新に於て、涙香の企てざる特色を發揮するも、己が罪は全然涙香張りにして、然も其下なるものなり、所詮己が罪の好評は富籤に當りたると同程度の好運のみ。

涙香が晩近の譯巖窟王は、未完なれば此には評せず、野の花、古王宮、繪姿、雪姬等は、何れが健全にして敎訓的ならざるものぞ、之を家庭の讀み物として見る、其價値不如歸、己が罪以上なり、然

るに家庭本の缺乏を嘆ずる批評家が未だ曾て淚香の譯に言ひ及ばざるは何ぞ。

淚香嘗に人に語つて言ふ『小說の風致に關するや頗る大、英國の如きは殊に其の社會人心に及ぼす影響の顯著なるを聽けり、こは何故ぞや、他なし、英國の小說は概ね篇中に卑しき主人公を挿まず、其動作行爲に依て敎訓せんと欲するが故のみ、例へば、必しも高尙ならずとせらるゝ、ヂッケンスすら、猶實際にはあり得可らざる主人公を捻出して敎訓するなり、若し夫れ、エリオット、サッカレー、スコットの輩に至りては、更に其の然るものあるを覺ゆ』と。

淚香又曰く『若し我が小說家輩にして、純なる思想を有し、純なる小說を著はすに至らんか、社會を感化するや極めて容易ならん』と。

淚香の小說に對する主張は概ね斯の如し、彼は然らば如何にして其主張を遂せんとするや、曰く敎訓するなり、如何にして敎訓するや、曰く其文字を平明にして何人も讀み得るやうにするなり、假令文字は消ゆるもルビにて讀めるやう平易に書くなり、これ彼が幽靈塔以來言文一致の體を採れる所以、而も彼は、如何なる場合にも、爲すには全力を以てせよてふ自箴を忘るゝものにあらず。

(七)　淚香の人物

淚香は何人ぞや、余は終に此問題に逢著したり、去れど多言する要なし、請ふ彼をして彼自らを語

らしめよ。

涙香は文久二年九月生れにして、本年四十歳なり、學校の經歷は皆無とも云ふべき所謂書生ゴロツキなりき、土佐國の人、幼にして儒者森澤先生の門に學ぶ、歳十七大阪英語學校に入り、漸く英語に熟す、後ち東京に來り、頻りに諸學校の門を窺けるも、生來學科の書を厭ふ故を以て、一も業を卒ふるに至らず。

明治十八年、『繪入自由』の記者となる、先是既に新聞の經驗あるも、眞の新聞記者的生活は之より始まれり、爾來十有五年を經て今日に至る涙香の此經歷は何を語るや。

彼は交際廣からず、言ふ『余は交際に於て皆無なり、新聞に從事するの故に書信を認むる暇なく、僅に存せる舊友も失ふに至れり』と、又言ふ『逢へば世に惡人なし、情僞從つて生ず、人に多く接せずして思想の獨立を保つに如かざるなり』と。

斯の如く思想の獨立を尙ぶ彼の日課は甚だ單純なり、毎朝五六時に起き、先づ井戸端に走り、赤裸裸となりて冷水浴す、言ふ『これ神經衰弱の療法にして、余が爲す日課中の最も善き事の一なり』と、浴し了れば、庭内を疾驅數回す、此時勃々の氣身内に溢るゝを覺ゆ、卽ち空腹を抱へ快く朝餐に就く。

食後、八時半より十時に至る間、彼は此一時間半に、其日の編輯に要する一回分の小說を書くを例

とす、一時間に四五枚、一時間半に約六七枚、これ朝報紙に二段内外を占むる彼が筆の進行力なり。

小說を譯し終れば、大抵朝報編輯局に來るを常とす、編輯局にては、時に言論を草し、雜報を書き、隨筆を認む、然らざれば、獨り別室に在りて五目並べを研究し、雜書を繙くも、暫くも休憩する能はざるは彼れの性なり。

夜は專ら讀書三昧に耽るも、其の讀むものは、西洋小說を最とし、漢籍之に次ぐ、漢文の中彼が最も愛誦するものは柳子厚なり、言ふ『子厚の身世、轗軻索莫、其境を髣髴して、文に傷の音あり』と。

彼れ勝負事を好む、負け嫌ひなる彼は、一度敗るれば勝たざれば已まず、弄花、五目並べ、玉突は最も得意とする所にして、圍碁は世間なみなるべく、將棋は殆んど知らずと云ふ、彼がこれらの遊戯に耽るや、一意熱中して他を思ふ暇なき如し、言ふ、『遣る所まで遣つて熱を冷ますが上策なり』と、今此の獨特無類なる解熱策によりて、彼が經過し來れる道樂冷熱史を記せば、圍碁と弄花の熱は既に冷め玉突と相撲は漸く冷却期に入らんとし、獨り五目並べ（聯珠競技）のみは、猶彼より强き者多きが故に未だ全く悟り切れざるもの丶如く、高山四庵、又の名互樂は、今猶朝報紙上の聯珠欄に讀者と見えつ丶あり。

嗜好に於て、彼は毫も酒を嗜まず、所謂ならぬ口なり、煙草は殊に甚だ嗜むも、腦を害ふ故に、曾

て葉卷又は紙卷を用ひず、キザミにて一ケ月二圓にて澤山なりと。

彼れ、顏面淺黑く、眼に一種の光りあり、躰は大ならざるも、普通人を越え、强健氣剛、凡て一癖ある人格を形くるも、唯頭顱のみは少しく禿す、之と接すれば、容易く親まざるもの丶如く、之と語れば、肚裡尙別に一物ある如し、これ彼が墻壁を撤せざるが故にあらず、戰の子なるが故なり、戰の子なる彼は、其顏面に戰の印象を刻めるが如く、其心理的作用にも亦著しく戰の影響を保留せり。

彼に於て最も稱すべきは、任俠なり、彼曰く『我は俠にあらず、只の眞小人なるのみ』と、何ぞ然らん、故森田思軒居士、内村鑑三氏に於ける關係の如きは、全く俠ならずとするも、俠に近き美德なるは、蔽ふべからざるものあり。

又一例あり、初め彼れの朝報社を創立するや、素より其資本を有するにあらず、町田菜氏之に資本の幾分を給し、彼れの着々成功するや、朝報に揭ぐる所の小說一切を與へ、今日に至るも一錢も貪らず、頻りに江湖に迎へらるゝ涙香小說に衣食する日本橋扶桑堂は即ち是れなり。

以上余が彼自身をして彼自身を語らしめたる事實は、概ね彼を說明し得たるべし、唯だ跡に殘る問題は、如何に世人が涙香を見るやにあり。

曰く惡辣、曰く惡德新聞と、其の惡辣と云ふは、世人の涙香を評する語なり、其の惡德新聞と云ふは、

世人の朝報を議する語なり、然も如何に涙香が惡辣なるか、如何に朝報が惡德なるか、誰か能く之を說き得る者ぞ。

今の世に於て、批評が一の復聞きたり、一の風說の產物たるに至つて、其弊や極まる。

請ふ余をして今本文の冒頭に歸らしめよ、余は言へり、歷史には文明史の體を採り、月旦には記述の體に據ると、涙香の場合に於て、余が縷々說きたるものは、實に此記述の體に據りたるなり、余は殊に抽象的月旦を厭ふが故に、寧ろ涙香をして、彼自身を語らしめたり、唯怪む、世人の涙香に對する批評の徧く抽象的なるは何故ぞやと。

世人の涙香を評して惡辣と云ひ、朝報を議して惡德といふは、畢竟風說の風說、復聞きの復聞たるに過ぎざるのみ、余は到底不完全なるべき人間の涙香に、或缺點を見出さざるにはあらず、然も彼を惡辣と云ひ、朝報を惡德と云ふの無意義なるを信じて疑はず。

記して此に至り、余は想ふ、余は涙香を月旦して稍や褒に過ぎはせずやと、或は余の朝報社員たるが故に、殊に媚びたりとするものあらん、去れど聽け、余は人に媚ばれん爲めにさへ、人に媚びるを欲せざるなり、今此の月旦を作るに於て、余は毫も自ら欺かざるを信ず、此の涙香評一篇の價値こそは、畢竟又余が人物の價値なり。

辯護人として法廷へ

中内蝶二

辯護士にあらざる黑岩先生が辯護人として東京地方裁判所の法廷に立たれたことがあります。萬朝報社長としての黑岩先生が、我社員に係る名譽毀損被告事件のためにその無罪を主張すべく、自から進んで法廷に立たれたのです。

もう大分昔になりますが『梅月尼』と題する記事が萬朝報に連載されたことがあります。それは某貴公子に關する古い艶聞で、而かも其貴公子と其婦人とに對して深い〱同情をもつて書かれた記事でありました。それだのに其貴公子は己れの名譽を毀損されたものだとして萬朝報を訴へました。同時に尠なからぬ金額を損害賠償として要求しました。署名編輯人ばかりでなく、その筆者をも編輯主任をも被告として相手取りました。社會部長の職に在る私も其の被告の一人だつたのです。

黑岩社長は元來非干渉主義の人でありました。社内の空氣が極めて共和的であるやうに、新聞の編輯の上にも努めて編輯者の意思を尊重して、その自由意思に信頼すると云ふ風でありました。全く放任するのではありません。干渉はされないが其出來榮に對して最後の批評を與へらるゝ場合には、一

是一非、まことに明鏡の如く的確たるものでありました。

小學の兒童が學校の成績の通信簿を阿父樣の前に差出す時の心持――わたしたちが黒岩先生の批評に接する時の心持は恰かもさうでありました。一種の威壓を感じました。要するに、わたしたち社員の見た黒岩先生は嚴格な阿父樣でありました。

嚴格な阿父樣は我子に甘い顏を見せないと云ふまでゞあります。我子が可愛いと云ふ親としての慈くしみに異りがありませうか。平素甘い顏を見せない代りに、事に臨んでの慈愛のひらめきは他よりも一層甚だしいものがあるかも知れません。

社長としての黒岩先生が、わたしたちのやうな一介の社員のために、職業者ならぬ辯護人として自から進んで法廷に立たれたことは、まつたく我子に對する嚴格な阿父樣の慈愛の表現に外ならないのであります。心の底に抑へられたさうした慈愛の嚢の口から迸り出た熾烈な熱辯が、其事件にたづさはつた判官たちの頭にピンと響いたのは云ふまでもないことです。わたしは第一審に於て無罪の宣告を受けました。

わたしは今でも先生の慈愛に感泣してゐます。

忘れ難い印象二三

佐藤稠松

私が始めて黒岩先生にお目に懸つたのは、明治四十一年の三月です、それは私が坪内逍遙博士の紹介で、萬朝報に入社する内相談が段々進んで、黒岩先生は兎も角一度直接に私に逢つて見やうと言はれたからです、其日午前九時半頃、私は先生のお宅、麻布笄町のお宅を訪問して、西洋館の方でお目に懸りました、會見は僅か十分内外で、入社の話は直ぐ決りましたが、先生は條件其他の事に就いては何事も言はれず、委細は圓城寺天山氏に相談するやうとの事でした、お暇して歸らうとすると、先生は微笑されて、『私は君をモット年輩の人と思つて居たが……』と言はれた、先生の私に對する御戯言は、恐らく是が最初で最後であつたと思ひます。

私は其年の四月一日から入社しました、併し先生の歿くなられる迄、足掛十四年間、滅多に先生にお目に懸る機會も少ければ、自然口を利く機會も少くなかつた、尤も理想團では折々お目に懸り、お話も承りましたが、社內では偶にお目に懸つても、默禮する位の事でした、此の少ない先生との會談の中で、一生忘れ難い印象を殘した事が二三あります。

其一は例のシーメンス事件の勃發した時です、先生の山本内閣攻撃は猛烈を極め、殊に青年會館の演説は、臨席の警官を戰慄さした程辛辣を極めました、聽衆は敵味方共熱狂の極に達して、締切つた戸を押破り、二階の硝子窓を叩き破つて亂入するといふ騷ぎでした、演説を終へて歸られる先生の身邊も頗る危險なので、私は先生に『お送りしませうか』といふと、先生は即座に拒絶して『いや大丈夫、萬一怪我をしても君と二人よりも、私一人の方が社の爲めに宜しい』と言はれて、ズン〳〵歸つて行かれました。

其次は文部省の中等教員の國定試驗(圖畫科)が漏洩した時です、之を發いたのが私でした、所が翌日の他の新聞は、大々的に此事を否認したので、私は、否な萬朝報は重圍の中に陷つたのです、當時編輯でも大分問題になりまして、私は殆んど立場を失なつたのでした、其時先生は突然私を社長室に呼ばれました、私は深く決心する所あつて先生にお目に懸ると、先生は意外にも『彼事件では無論君に確信があらう、二面なり三面なり何段でもよろしいから大に書いて下さい』と言はれました、此大度量に感泣した私は、社會部の方面とも相談して、二三兩面で四段ばかり書立てました、其間文部省の方からも人が來まして、漏洩の眞相を聞いて行つたが、二三日經つと時の文部次官岡田良平(當時の文相小松原氏は旅行中でした)は全新聞記者に對し、漏洩の事實を是認し、其試驗を無効として取

消しました、其時先生は私に向ひ只一言、『大成功でしたね』と言はれましたが、此の一言は私に取つては千萬言のお言葉よりも難有かつたのです。

其次は先生の最後の御出社の日、夫れは多分御入院の前日、五月二十四日でしたらう、是が私に取つては先生と最後のお別れでした、私が出社すると、斯波局長から先生が待つて居らるゝといふお話でしたから、直ぐ社長室に行つて見ると、丁度先生はお歸りになる所でしたが、再び椅子に腰を下されて、『色々御苦勞でした、私も愈よ入院することになつたから跡は宜敷』と言はれました、是が最後です。

二十年來の感謝

田中煙亭

僕が先生の知遇を忝ふしたのは、無論萬朝報社に入社してからで、それは明治三十六年の五月でした。二た昔前の事です。

先輩圓城寺天山、小林天龍二氏の推薦に依つて編輯局の席末を汚すことになつたのですが、眇たる一外勤記者として籍を政治部に置き、最初の受持は政友會本部詰と、衆議院本會議の記事とでした。

前者は小林房藏氏退社の後を受け、後者は故幸德秋水氏の代り役でした。

當時先生には滅多に社の方に見えず、僕は宅から直ぐ受持先へ廻り、夕方社へ歸る風になつて居たので、親しくお目にかゝつて、御高話を伺ふ機會も無く過ごして居ました。

その年の十月。日露の風雲頗る急に、吳、佐世保の二軍港に社員を特派するの議が起りまして、新まいの僕が、その佐世保に出張する事になりました。出發の前、天龍君と共に社長室へ參り、殆んど初めて先生のお目にかゝつたのでした。『御苦勞です、充分に働らいて下さい』といふやうなお言葉が、今も僕の耳元に殘つて居ます。

その佐世保行も何の功勞もなく、本社へ戻つてからも、碌々として幾星霜を經ました。そして其中に社内に於て先生の信賴最も篤かつた先輩圓城寺氏は急病に殪れ、續て天龍君も簀を易へるといふ痛惜事に遭つたのです。天山死去の際、僕は遺族の代りとして、御禮を申上げる爲めに、初めて笄町の先生の御宅に伺ひました。そして種々御親切な御言葉を賜はつたのでした。

その後、天山の遺族が鎌倉に居を移してから、先生も往年鎌倉に御靜養の時代、一二度お目にかゝつた事もありますが、社の編輯局で先輩諸氏と一緒にお話を伺はふ以外、僕が直接先生に近づいたのはそれだけです。二度目に先生の御宅に伺つたのは、先生が、あゝ先生が……神逝されたあのお通夜

の時でした。

多趣味多方面の先生の御事業の一つに、俚謠正調があります。初代正調庵として、この通俗的二十六字詩を我が萬朝報の一つの呼物とされ、一大權威とされました。その選者であつた石川露香氏が歿されてから、この大切な、光輝ある俚謠正調の選を僕が承はる事になつたのですが、僕は別に與へられた任務の餘暇を以て、隱れたる選者として、親しく俚謠に關する先生の敎へを受ける事もなく、唯だその日〳〵の責を塞いで居るに過ぎませんでした。

或る年、今は故人になつた三友淸水氏の發起で、故露香氏追悼の俚謠正調大會を催した事があつて、僕も共席に列し、その選句に拙ない追悼吟を試みた事がありましたが、それが萬朝報に載せられたその翌日、編輯局で先生にお目にかゝつた時『田中さん、あなたの俚謠を初めて拜見しました。巧いものですなア』といふお言葉を賜はりて恐縮しました。その句は僕が俚謠を發表した最初の句であつたのでした。その時の僕の面目！僕の光榮！

爾來、今日に至るまで、先輩蝶二氏と共に、連日此の選を承はつてやつて居るのです。

『先生と僕』の表面的關係は僅かにこれ丈です。直接の『先生と僕』は實に單にこれ丈なのです。けれども、いふまでもなく、僕が先生を神の如く尊み信じて居る事と、二十年來、精神的に受けた御敎

訓、今尙ほ受けつゝある御敎訓を感謝するの念は、他の社員の何人にも劣らぬつもりであるのです。

數年前の事です

馬場直美

私は入社以來十幾年の間、夜勤をやつて居た爲め、黒岩先生に親しくお目にかゝる機會を有せず、隨て先生の御生前、親しく言葉をお交しゝたと云ふことは、一度も有りませんでした、私の見る先生は、非常に嚴格な、そして非常に意志の强い、一種近づき難い方のやうでありました。

先生の性格を如實に現はしたのは、社の職工がストライキをやつた時だらうと思ひます、此れは先生が洋行から歸られて間もなく、恰度その時は私も晝勤になつて間もないでしたが、活版部の職工から、代表者を以て、晝夜更代の二部制か何かの要求を持出したのです、初め先生は餘り念頭に置かず、愈よエイスかノーかを回答すべき當日となつても、何の回答も與へられず、正午となり、一時となり、夕刊の原稿はドシ〳〵工場に廻しますが、職工等は三々伍々偶語するのみで、一行とても活字には拾ひません、其中到頭締切の午後二時は鳴りました、今日の夕刊は出來ないことに決まりました、此の事を社長室に通告すると、先生は始めて愕ろかれて、そして非常に立腹されました、併し如何ともす

ることが出來ず、時は移つて朝刊編輯の時間となりました、此時先生は何事か決心されて、社長室を出て單身工場に赴かれ、物情頗る險惡な職工等の間に立て、悲愴な一場の演説をされたのです、此の演說が非常に職工の心を動かして、其れでは先生の爲めにと云ふので、即時仕事に取かゝつて、見る間に朝刊の四頁を組上げて了ひました、一時は激怒せられた先生も、職工だけの要求が必ずしも不當でないことがお判りになると、また釋然として其れをお容れになるに吝かではなかつたのです、唯だ其時は、各新聞社の間に聯盟規約が出來上つて、其の爲めに已むなく他社同樣、一週間の休刊をやつたやうな次第です。

先生は晩年、編輯一切の事を斯波局長にお任かせになつて、少しも干渉がましい事を言はれも爲されも、しませんでした、此の一人を信賴して疑はぬと云ふことは、洵に先生の大なる美德の一で、此れある爲めに萬朝報は、先生の亡き後も、益々榮えて行くのであります。

私の視た先生

町田濱雄

會員としてみれば發光の人

先生と私との交渉は亡父の代から續いたもので三十年餘になつてゐる。然し私は此の偉人たり大恩人たる先生を欽慕する上に於ては決して人後に落ちる者ではないが、どういふものか、先年大磯での時以外、お目にかゝるのが、妙に氣後れがして嫌でならなかつた、嫌といふよりは何となく人畏ろしかつたといふた方が適切かも知れない。これは寡婦になつてからの私の亡母に『あの先生が昔は辻俥に乘つて金策にゐらしつたこともあつたんだが』と追憶に耽りながら恰度『如來様の御苦行』もどきで幼い頃から聞かされて生神様のやうに思はせられてゐた爲もあるらしい。かうした私は私の頭の中に在る先生が一層慕はしく、眼に入る先生とは愈々離れて行くばかりであつた。從つて私の視る先生は、矢張り頭の中の先生より他はない。

『先生はどういふ學者なんだらう』學生生活に入ると共に斯ういふ疑問が起り、先生の印象に就て自分の氣の濟むやうにシツカリまとめてみたくてならなかつた。『天人論』がどうやら咀嚼し得るやうに

なつた頃此質疑は少しく體を成して來た。『哲學者で小說家で大新聞記者であるといへばよいのか』と考へて見た、が然しどうも『さうだ』と明確に言ひ切れなくて何か物足らぬ氣がせずに居られなかつた。今から思へば此の物足らざるは當然であつた。何となれば此等の三つの範疇は何れも先生の一面であつて、一面の總和が直ちに本體其自身ではないからである。

月旦諸家の評說も眼に觸るゝ限りは貪つても見たが踵と膝を打つ程のものには遺憾ながら遭遇し得なかつた。『無冠の首相』といふのが中にあつた。言ひ方が素晴しく又これが至當なのであらうが、私は私とは全く世界を異にした、七ッつ封印の彼方に先生を引渡して平氣では居られなかつた。如何なる學者といふも、優れたる新聞數十年の總和といふも、是亦現はれたる一面に過ぎないのである。最早、一面の問題は棄てねばならぬ。

私の頭に在る先生は、如何なる人であらうか、即ち、先生其自身が發光體であるといへばよいと思ふ。觸るゝ物觸れ來る物は悉く先生の燭光に輝かねばならぬのである。そして時に之に人を溶せしめ、時に人を眩暈せしむる威容は玆に發してゐると思ふ。先生は實に發光の人であつた。

個人としてみれば柳の精

私の父が萬朝報創立に微力を致したといふだけで、父の死に際し、死後の一切に對して先生が『ウ

ン』と言はれた。時は明治廿七年の秋もなかばを過ぎた頃であつた。

欺瞞食言是れ家常茶飯事たる當世者流に對して、偉靈三週年忌紀念出版に際し、此ワン・ワード・マンの在りし昔のほんの片鱗を記して見たい。男の口より出でた『諾』の一字、それは千斤の重みがある筈であるが、實は先生の唇をついて出た此の一字には萬貫の重さがあつた。此の一語を唯一の基本として小さやかなる、然し涙香小說專賣書肆當年の扶桑堂は立命の丘に向つて新しき一歩を踏み出でたのであつた。

次第に高まる涙香小史の名と共に、同業より集まる要望の手先は陰に陽に先生の身邊を常に圍繞しずには居なかつた。出づる小說はその出づるが每に加速度を以て彌が上にも涙香の名を喧傳せしめ、遂に有名なる『巖窟王』『噫無情』の出づるに及んで、雷名は津々浦々までも鳴り渡つた。原稿横取りの計策は或は物質的に或は情誼的にあらゆる手段に於て講ぜられた。然し此間の先生の態度は神の如きものがあつた。先生自身としても隨分金力を要した多端の中に身を置きながら、又『諾』の一字は全く他動的に終始する約言でもあり。且つ十數年の履行を果した後でもあり、玆に食言したとても、何人も咎むる權能のない程當然に近いものでありながら、眼前に積まれた萬金と叩頭を排けて、萬人萬望の名稿を鐚一文にもならぬ扶桑堂に惠與して他を少しも顧みなかつた。

私として個人として、先生は如何なる人であるかと言はれゝば、言下に、私に取つての個人の先生は、三十三間堂のおりうではなく柳の精其者であると言ひたいと思ふ。名木が愈々其の存在を喧傳せられるに及んで進藏人以下が押寄せ車に積んで運ばんとしたとは、とりも直さず同業が萬金提げて先生に原稿を要請したシーンである。そして彼等がえいや聲して叫ぶ『和歌の浦』には身動きもせず、私の唄ふ『無殘なるかな』には譯もなく引かれ、轢かれ〳〵て爾來三十年、一言を以て貫かれたのであつた。私に取つての先生は人ではなく、何か人間以上のスピリツトであつたと感ずるのである。

一代の偉傑

渡邊貴知郎

一、世人は『人』としての先生を知らぬ

先生の逝去は、慥かに日本の國家に取つても社會に取つても一大損失である。少くとも日本の操觚界に取つては太陽の沒した如く、明星の墜ちた如き觀がある。先生逝いて、一箇月ほど經つと先生の人物論とも、謂つたやうなものが、二三の雜誌や新聞に出た。けれど其の內容を讀んで見ると、まるで讀めたものではなかつた。各新聞に大々的廣告をして、利己のため、營利のために先生を利用して

ゐるやうな、怪しからぬ男の書いた成つてゐない短評もあつた。たゞ先生を日本の明治文壇に於ける飜譯家として、文豪としての方面から、比較的に眞面目に評論して居た者もあつた。或は生前、先生の厄介に爲り、屢々物質的援助を仰いだが、先生は一度も頭を横に振られたことが無かつたので、偉いと告白してゐた者もあつた、或は多技多藝の先生を聯珠とか、骨牌とか、球突とかいふ様な藝技の方面から不出世の天才若くは恩人として惜んでゐたのもあつたのは肯綮に中つてゐたものがあつた。大體に於て先生の才能、手腕――詰り事業上に於て現はれた大雜葉なところを根據として、誤まつた先生の人物評をしてゐるものが多かつた、人格者としての先生、人物としての先生を中心として、評論してゐた者が尠なかつた。尠ないのが當り前である。先生は性來多くの人に矢鱈に接しるのが嫌ひであつた。また縱令頻々接しても、滅多に『自分の説明』を爲ない人であつた。けれど相手の人物を見拔くだけに得要領の話をさせて仕舞ふ力の優れた人であつた。萬朝報社に於ても、幾百の社員中、先生を深く知つてゐる者は門弟とか乾兒とかいふ者を除いては、現在では、僅かに數氏に過ぎない。世間一般者流が先生の人物を知らないのも、無理からぬではないか。先生が人に接することを嫌はれた事は先生の名著『精力主義』の卷頭に特筆されてある、先生の座右の銘として玄關の衝立に『愛客』と題し『余は性甚だ客を愛す。最も長座せぬ客を愛す。來らぬ客を猶愛す。』と大書されたのに徴しても克く解る。

未だ私が學生時代の頃、ある日曜に、先生の邸に遊びに行つて、慥か『中央公論』だと思つた、先生の評論が載つてゐたのを持つて行つたことがあつた。すると、先生は、一讀された後で。

『どうも度々私の事を方々の雜誌などで、書いて吳れる人がありますけれど、大抵は私を賞め過ぎるか、然らずんば私を惡罵し過ぎてゐる批評で、一つとして眞の私を書いて吳れたものがありません、世間には私を知つて吳れる人は無いやうです。是れは實に遺憾なことでもあり、また寧ろ結構なことだと思つて居ます』と嘆じ且つ喜ばれてゐたことがあつた。全く世間は先生を理解し得ずに、誤解してゐた者が多かつた。

『それでは、眞の人物評はどうしたら出來ましやうか』その時分自分は恁んな質問を發したことを覺えてゐる。すると、先生は『それはどうしたらと言つて、別に言葉で說明することは出來ませんが、何でも接した人の實際と言論とを比較し、また互に喜怒哀樂の情を交換し合ふほどに共鳴し合つて、その人から享けた實感とその人に纏はる色々の事件の實情から感得する分量程度如何にあると思ひます』と答へられた。して見ると、先生に接近して、色々の實感を享け、叱られ、賞められ、訓へられなどする弟子などはどうしても、先生を理解しなくてはならぬ責任がある譯だナと、泌み泌み感じたことを今でも覺えてゐる。

曾て夏目漱石が死んだ時、彼れの門弟は悉く筆を揃へて文豪として、人としての彼れを評論し盡して餘薀がなかつた。黒岩先生にも門弟と謂ふべき者がある。自分も其の門弟の一人である。先生が逝かれると、直ぐ二三雜誌から、自分に何か先生に就て書いて呉れと賴んで來た。けれど自分は書くべき時に書くと言つて世間の先生をどれほどに理解してゐるかを見るために、今日まで先生に就ての評論には、片言隻語と雖も極めて注意深く眼を通して來た。そして其の結果が、大部分先生の一部を理解して、十人十色の見方をしてゐることが解つた。――文章家として、政治家として、新聞記者として、事業家としての先生に就て、一部が描き出されたに過ぎなかつた。是れは自分の大に遺憾とした所であつた。

そこで自分はどうしても『人』としての先生を書かずには居られなくなつた。事實は何物よりも最善の雄辯である。事實――たゞ自分が先生に接してから――の感激したこと、先生の口から屢々聽かされもし、訓へられもしたことの有りの儘を謹記したいと思ふ。

二、涙の人

先生は徹始徹終、『涙の人』であつた『涙香』と雅號される如く、涙脆い人であつた。

『私は涙のために、よく失敗します』

とは、晩年、先生が私等に對してよく言はれたことであつた。けれど先生の『涙』は世間に有り觸れた未練の涙ではなかつた。善惡正邪の差別もなく、何でも涙に對すれば、涙を催すといつたやうな涙の人ではなかつた。一度び怒つた後の先生は、『冷たい人』であつた。それほど先生は滅多に怒らぬ人であつた。人の言葉に依つて動かされたり、左右されたりしなかつた先生は、また自ら一旦決行したことは、どの樣な人が、どの樣な手段を講じて調停しても、斷じて肯かなかつた。苟くも先生が決行したことは、最う取返しのつかないことゝ、我々は極めて仕舞つて居た。是れほど先生は理性にも强かつた。けれど此の强き理性は、先生が幾日も幾日も、人知れず盡きぬ涙を滲然と流された後の涙の結晶であつた。先生は全く强き人であると同時に、弱き人であつた。一旦、罪を犯した本人から、何んなに泣き付かれても、覆水の盆であつた、けれど其の罪人以外の友人とか親兄弟とか、妻子緣族などから、涙を籠めた手紙や誠の溢れた嘆願運動などに逢ふと、『實に堪へられなくなるのです』と屢々述懷されたやうに、先生としては、身の遣場もないほど同情の涙に咽ばれたに違ひない。

この事に就ては幾個も例があるが、その中の一二を擧げれば、

曾て萬朝報の記者で、當時は文才を示して居つた某といふのが(名前は匿す)先生から涙を揮つて馬稷を斬る底の退社を命ぜられた事が有つた。ところが此の記者の妻女が、復歸の嘆願に及ぶべく

す』と書生がその手紙を差出しても、先生は裏を見て、差出人を見ると、開きもせず、そのまゝ火鉢の端に置いて書齋に這入られた。斯くして此の妻女の手紙は書齋の机上にも、火鉢の上にも、堆く積まれるやうになつたが、先生は遂に一通も開かれなかつた。あまり氣の毒と思はれたか、先生の夫人や御隱居樣(今は故人)が『お開けしてお讀みいたしましやうか。一通位は讀んであげては如何ですか』などと言はれると『讀みません』とキツパリと先生は答へたきり、一顧眄も與へなかつた。『どうしてですか?』と夫人が訊かれると、先生は『讀むと可愛さうになつて、堪へられないから……』と答へられた。

さうである。夫の變事に對する妻の憂ひ悲しみ、夫を思ふ妻の眞心！　是等のことは、かうした場合、如何に涙多く書かれてあるか、開かずとも、知り拔かれてゐる、豐かなる涙の持主としての先生には、どうしても『讀むに堪へられない』に違ひない。もう一つの例は、

未だ私が大學に通つてゐる時分であつた。ある日曜日、先生の邸に遊びに行つてゐると、朝から苦學生であるとか、三百里も距る九州の果てから、先生の名譯『噫無情』を三讀して、是非先生にお目にかゝりたいといふ年若い小學校の女教員とか、何處かへ使つて貰ひたいといふ青年紳士とか、

色々の人々が玄關に押し寄せてゐた。けれど何れにも先生は會ふとはされなかつた。『今はお會ひすることが出來ませんと言つて呉れ！』と言つた切り、私との座談を續けられてゐた。後から何篇、取次いでも、一旦、會へないと言つたら、再び會ふことのないのが例となつてゐるので、書生は主人と客との板挾みになつて弱らされることは殆んど毎日の日課のやうであるが、この時も、九州から遙々先生を敬慕して來た女敎師の如きは、シク〳〵泣き出して『先生がお會ひ下さるまでは幾日でも此處にお待ち申します』と言つて、玄關の隅にしよんぼりと佇んで動かなかつた。三時間ほどすると、正午になつたので『御飯でも食べてお歸りなさい』。と書生が言ふと『御飯などは戴きたくはありません。斷食しても歸りません。どうぞ心中を愍れと思召して、お逢ひ下さいますやうに願ひます……』と言つて聲涙共に下る態に、書生もほと〳〵持て餘し、此の由を夫人までへ告げると夫人が出られて、先生の氣質を述べ『また日を變へてゐらつしやれば、必然お逢ひします。此頃は色色の調物や仕事が忙がしいので、少し昂奮して居りますから……』と言つて、親切に此方から嘆願するやうに斷はつて、夫人も女敎師も共に泣き乍ら、漸くまたの日を約して歸るといふ始末、而かも先生は後で此の一伍一什を聞かれることを避けられた。『やつと歸りました』これだけの報告でさへ、もう、先生の兩眼は涙で一つぱいになつてゐた。――

是等のエピソードは何を語つてゐやう。先生が誠意から來た『涙の人』であることがわかるではないか。『涙の人』としての先生は、『涙の人』に會ふにはあまりに弱かつた。涙の先生は、熱涙の人には、常に動かされぬことはなかつた。そして一旦、諾すると、何所までも之れを遣り通さねば止まない人であつた。無責任に會つて、無責任に快諾して、『平氣でゐる世間の所謂名士などとは、全然、其の選を異にしてゐた。故に先生が一旦、頭を縱に振つたなら、約手や證書を貰つたよりも慥かであるとは先生を知つてゐる何人でも告白する所であつた。殊に先生が涙の人といふよりも寧ろ偉傑であるのは、訪問者を斷はるのに『今はお會ひが出來ません』とキッパリ答へられるところは、實に天下一品ではないか。世間の有り觸れた所謂名士なら、必らず『病氣』とか『留守』とかといふ訪問者擊退の常套手段を用ゐるが、先生は決して之れを用ゐられたことがなかつた。此の樣な味もそつけもない無愛想な斷り方をされたら、再び訪ねる者も無ささうなものだが、事實は全く之れに反して、十回、廿回、卅回、中には四十餘回などといふレコードを以て、漸く會つたといふ者もある。而して會つた以上、此程の熱心家であるから、もう會ふ時、先生は半ば以上其の相手に共鳴されてゐる。だから先生が會ふとなれば、鶴の一聲で、事は既に成つたも同じであつた。詰り十回目、廿回目、卅回目、色々の人はあるが兎に角、先生に會へた者は、今日悉く先生に救はれて、世に出られてゐると言つても宜い、それだ

け先生との會談は貴重であつた。それだけ先生との面會は、六箇敷かつた。是れは先生に接した者のすべてが感じてゐるところであらうと思ふ。

手紙を以て面會と同じやうに、熱烈に何回も出した者も多かつた。萬朝報の記者に成りたいとして論文を何回も何回も書き送つた人に河上肇博士があつた。博士は今でこそマルクス研究の權威者として、學界に重きを爲してゐるが、其の頃の博士は未だ大學を出たばかりのホヤ〳〵學士で、彼の所謂『無我愛』などを主唱してゐた時で、論文などは隨分上手な人であつたことは、現在の博士の色々の論文集が學者間で一頭地を拔いてゐるのに見ても明かであつたに違ひない。黑岩先生は今の河上博士の論文だけは、一々叮嚀に讀まれて、

『あなたは新聞記者の仲間に入れるには惜しいほどの學究です。あなたは學者畑に生くべき人です。直きに博士に成るべき人ですから、此の方面に努力を進められたい』といふ意味の返答を書き送られたきり、其後何篇博士から手紙や論文が來ても、先生は決して開封されなかつた相である。是れは先生が後で、私共に語られた所である。果然、黑岩先生の先見の明の如く河上氏は、博士と成つた。博士と成つたことが、果して河上氏のために幸か不幸かは別問題として、あの時、若しも先生に許されて新聞記者に成つて居たら、河上氏は博士に成りそこねて居たかも知れない。

斯うした先生であつたから、中には一回や二回位の面會謝絕を喰つて、先生は貴族主義であるとか冷淡であるとかと無理解な先生觀をプロバガンダする者があるのは、熱涙の先生に接見するだけの幸福を得られなかつた者共である。人物は人物を知る。家高ければ風當りは非道い。人物は多面多角であるのは免れない。理解もある。誤解もある。敵もあれば、味方もある。涙香先生に會ひ得ないで、誤解してゐる者はそれだけの者である。先生に會ひ得た者は、先生ほどの熱涙の分量の持主でなければならぬに違ひないと信じる。先生は面會者に其の熱誠が欲しかつた。先生は常に熱誠の人を欲求された。(此の話例はまた後に『熱誠の人』として別に述べる) 先生の欲求された涙は安價な涙ではなかつた。既に熱涙といふ以上最も高價な涙であつた。

虛構、口實といふ事は、先生には天性出來得ない所であつた。何でも直情徑行で、人を信じた。『今は會へません』の一語、よく是れを說明してゐるではないか。それだから人が噓を吐いたり、先生を瞞したことが判ると、先生は非常に殘念がられた。殘念がつても、其の噓者を責めるのではない。自分の不明を私かに責められるのであつた。『その罪を憎みて、其の人を憎まず』と訓へたバイブルの中のマキシムは、私は眞に先生に於て屢々現實に之れを見せられた。世には基督敎の傳說的部分に信賴するものが多いが、先生は基督敎の信條を其の儘に實行された人である。もつと有體に言へば、先生

の涙と愛とは、クリストの愛と涙そのものであつた。先生は又た或る時には、人も罪も何れも咎めぬことがあつた。此の時はクリストの涙と愛以上であると、私は屢々感じたことがあつた。(此の事は後で別に『宏量の人』の稿で述べる)

『私は泣言を言ふ人が嫌ひです』とは、先生が屢々語られた所であつた。それほど先生は涙を恐れられた。先生は涙の人であるから、強い人、熱い――人が好きだと言はれた。『自分は弱いから、強い人が欲しい』と言はれた先生の言葉は、『弱い自分は強くありたい、強くありたい』と生活に、論議に、主義に努めた。ニーチエに髣髴としてゐると私はよく思つた。ニーチエその人は、天性涙の哲人であつた。けれど其の主張する哲學は『戰ひの進行曲』であつた。先生と先生の哲學とを對比してゐると、私は常に所謂『戰ひの哲人』ニーチエを憶はずには居られなかつた。曾て彼のシルレルが謳ふた『人の涙の涸るゝ時、人は劍を執つて起つ――』は、涙の人としての先生の『眞我』を說明したものでなくてはならぬ。

三、天性『厚い友情』の持主

『涙の人』としての先生に就いて謹述した後で、當然述べなくてはならぬことは、先生が『稀れに見る友情に厚い人』であつた事である。この點に就ても亦た唯だ活きた事實を語れば足りる。

未だ先生が謂ゆる『赤新聞』經營創時の事であつた。社員といつても、僅かに十數名に過ぎなかつた。編輯局といつてもホンの名のみで、應接間兼食堂兼寢室また時としては兼小使部屋といつた――やうな有樣の頃であつた。先生は社長兼主筆兼雜報記者兼訪問記者といつたやうな長々しい肩書を付けなくてはならぬ時であつた。集まる記者は悉く天下の浪人で世に拗ねた、一騎當千の勇士で滿ちて居た。家なくして社内にゴロゴロ居續けしてゐたものもあつた。そして一つ鍋の飯を食べ合つてゐた。然かも社中和氣靄々、同志の集團といふよりは、寧ろ同腹の兄弟も啻ならぬ親密さであつた。すべての記者は、先生の心を以て自己の心とした。先生の主義主張を以て、自己の主義主張として、一心不亂に働き續けた、その記者の一人が或る晦日近くであつた。先生に五十圓の借金を申込んだ。理由は妻子病床に臥し、債鬼の責苦に逢ふといふのであつた。今の五十圓は何でもないが、その頃の五十圓は實に大金である、其の時先生の囊中には、晦日拂ひの生活費や其他の支拂ひとして豫算に充てた百圓ほどしか持合はせて居なかつた。而かも先生は同情に堪へられないで、一も二もなく要求通り五十圓を貸し與へられた。すると其の同夜、また十年來の知己が突然、先生を訪ねて、卅圓の無心に來た、理由は自分には身寄り賴りもない。今度某會社の支店に採用されたが、家賃其他の借金のため動けぬから暫らく助けて吳れといふのであつた。今度は先生の囊中僅かに五十圓――而かも之れが一切の支

拂ひに充てられるのだ。普通の人なれば、何とか言つて斷はるべきであるが、そこは涙の人、友情に厚い先生は、又復た五十圓の中から卅圓を遣つて仕舞つた。殘る金は愈々僅かに廿圓となつた。その月の支拂ひは質草や一切の遣繰算段を夫人に命じて、辛ふじて糊塗されたさうである。

『私は名利のためでなく、眞摯に學問のために學問を研究する學者に成りたい』と謂はれた先生の始終一貫した理想――通り、先生が有名なる『天人論』の著述に着手されたが、此の大著が愈々成ると、或る日の夕べ、先生は唯だ獨り『天人論』を携へ自轉車(その頃先生は自轉車を愛用された)を飛ばして、病軀と鬪つてゐる舊友の一人を訪づれた。舊友といふのは、萬朝報社創業の社員で日清の役、從軍記者として、健筆を揮つた人であつたが、歸りて間もなく不治の病に罹りて鴻圖の理想も空しく消え、唯だ悶々の裡に、先生の唯一の事業である萬朝報社の發展を冀がつてゐる忠誠一轍の人であつた。

『私が此の兩三年鳴かず飛ばずの產物は是れです。特に靜養中の君に讀んで貰ひたいと思つて持つて來た。』

と言はるゝ先生の顏には、譬へがたい友情と、眼には感慨無量の熱涙が溢れてゐた。そして先生は他人の厭がる其の不治症の舊友の瘦せ衰へた手に熱き握手を幾度も交はした。

『共に成功すべき二人は、この様な場合にこんな悲しい握手をすべきではなかつた……』
と先生が言はれると、病友は感激に堪へ得ずして思はずはら〳〵と落涙した。
この病友は即ち私の父である。

斯のやうな實例は、未だ山なすほどあるが、先生の如く友情に厚きは實に罕に見るところである。先生に斯の豐かに厚き友情あるがために、先生は名成り業遂げられたのである。萬朝報の今日あるも、偏へに斯の先生の厚き『友情』の賜でなくてはならぬ『先生の爲めには死んでも宜い』といふ氣が、記者全體に漲つたのも、全く先生の友情の結果であつた。人の苦を自分の苦とし、人の憂を自分の憂とされ、苦樂を共にされた、萬事に思ひ遣り深い、熱愛そのものであつた如くに感じられた先生の偉靈は、洵に永へに萬朝報社の礎と成られるに違ひない。先生の『友情』は、實に『身を殺して仁を爲す』までの誠意と愛情が籠つてゐた。先生は日本に未だデモクラシーの謳はれぬ時代に、夙くも友人に對し、世人に對して萬朝報社といふ事業の上に、團體の上に、デモクラシーを實行して仕舞つた人であつた。

四、『熱　誠』の　人

厚き『友情』の持主であつた先生には、また當然に持主とならるべき特性があつた。それは『熱誠』であつた。世には『熱情』に豐かな人は多い。けれど熱誠の熾烈な人は極めて尠い。

『私は何事にも熱い性質で困ります。』とよく先生自から曰はれた如く、先生は何事にも熱心であつた。執着心が强かつた。例へば飛行機が出來た頃、その模型を見られゝば、之れをバラバラに壞はして組立てゝ見る。玩具の機械を見られても、或は時計、萬年筆のやうな瑣末な物に至るまで、何でも解剖的に其の成立仕組を研究して仕舞はなければ承知が出來ない性質の人であつた。そして聽て此の熱烈な研究心は、思想の上にも、學問、文章の上にも、社會觀も、政治觀も、人生觀にも現はれないことはなかつた。「心中恆有火」といふ文字を先生は象印に彫られて所持されてゐた。實は先生その人が火であつた。先生に接した者は、何人も先生の心の火に燒き盡されずには居られなかつた概があつた。憤りにも熱烈であつた。悲しむにも熱烈であつた、喜ぶにも熱烈であつた。善にも惡にも熱烈なるべき人であつた。けれど何のお世辭も僞りもなく言ふが。先生は『天性、惡を爲し得ぬ人』であつた。故に先生は善にのみ熱烈であつたといふべき人である。是れが即ち先生を『熱誠の人』と做す譯である。先生が何事にも『勝氣』であつたのも、この熱烈の特性のためである。

斯の熱烈であつた先生は、冷淡な人が大嫌ひであつた。『新聞記者に成りたい』者、『書生に置いて貰ひたい』者が先生のところには隨分間斷なく來る。けれど先生は是等の者から學才を拔かれずに、常に熱誠を選ばれた。二度や三度の擊退で挫けて仕舞ふ者は論外として、學才が有つても、熱誠の無い

者は、採られなかつた。大學を出た者よりは、出ないで大學出以上の働きをする者、博士よりは、博士でなくて、博士以上の實力ある者、洋行した者よりは、洋行せずに洋行歸り以上に博識な者が、先生は欲しかつた。此の意味に於て先生は青年を深く愛された。此の事は『熱烈性により富んでゐる時は青年です』と先生が曰はれたのでもわかる。謂ゆる名士の訪問は避けられても、無名の青年には、よく會ひ、よく語られた。

『萬朝報の記者は物が出來るよりも、熱誠があれば宜いのです』とは先生が私共に遺されたモットであつた。

萬朝報社の創業時から、先生の幕下に馳せ參じたる者は、殆んど悉くと謂つても宜いほどの『憎まれ者』であつた。何の社會に行つても容れられない、嫌はれたり擯斥されたりした者を特に愛され、重く用ひられた。といふのは、圭角の取れない、敵の多い、仕事の出來る、熱誠の人物を先生は求めて止まなかつたからである。

『唯だ夫れ寸を出でよ』とは先生が萬朝報社の創業時、社員一同を激勵された標語であつたさうであるが、斯の勝氣、斯の優越性も亦た、今日の萬朝報の盛況を産んだ賜でなくてはならぬ。先生は一旦爲ると云ひ出したら、何處までも遣り通さなければ止まなかつた。この決行の前には、何んな障碍物

があつても、乘り越え、打ち破つて突進された。『進むべし！』といふ信念が定まつたら最後、親も世間も先生には無かつた。全く所謂『何處までも』であつた。萬朝報社の創時、先生の活躍振りを見て、『蝮の周六』などと怖れ戰ひたのも、斯の心中恆に火あり、優越的信念の先生の行動に對する怪しからぬプロパガンダである。既に蝮とは悪辣を意味してゐる。けれど先生には一點の悪辣が見出されなかつた。世には私情私利のために熱烈なる行動を爲す者は數限りなくあるけれど、先生の熱烈には絕對に私情私利が無かつた。萬朝報を起され、之れを發展膨脹させられたのも、先生の理想化に過ぎない。卽ち先生の熱烈なる信念――民本主義徹底の化身が、萬朝報であつた。『我病愛國』『不食藩閥之粟』といふ印を作られてゐた如く、先生は日本に民本國家を建設されるために、萬朝報社を作られたに過ぎない。實に萬朝報は先生の愛國心愛他心の化身に外ならぬ。

先生の中央政治改造――それは大正三年二月の初旬、議會で島田三郎が、當時の軍閥內閣であつた山本內閣の海軍收賄問題へ曝露するや、黑岩先生の熱誠性は、忽ち爆發した、久しく沈默て、此の時まで書齋に閉ぢ籠られてゐた先生は、義を見て爲さゞるは勇なき也と做し、日本帝國の危機と思はれ、言論に、運動に、殆んど日夜を分たず寢食を忘れられる有樣であつた。そして當時の內務大臣であつた原敬の大不敬罪を態々伊勢大廟まで行かれて調査の結果、摘發された。收賄問題に對する議會

内の弾劾、國民的示威運動も熾烈を極めたが、圖々しくも山本内閣は居据らんとした。之れをどうしても居据り兼ねさせたのは慥かに原敬の大不敬罪暴露が致命傷であつたことは否まれぬ。そして四月には山本内閣が倒れて、その月の十六日に大隈内閣が出來た。出來たといふよりは、先生が隈閣を作つたのだ。此の時に大隈侯は日頃の元氣にも肯ず、加藤高明に讓つたりして却々大命を拜さなかつたが、先生の各元老訪問と何度も隈侯を說得し、遂に萬朝報を國民のための大隈内閣の擁護に任じることを誓はれたので大隈侯は始めて起つた。大隈侯も『黒岩先生と共鳴して百萬の味方を得た』と、後に私が訪問した時、感慨の一端を漏らしてゐた。そして萬朝報は三十年の歷史に於て未曾有の御用紙と爲つた。けれど此の御用紙は從來の御用紙とは全く違ふ。言ふまでもなく大隈内閣が藩閥の歷代内閣と全然違ひ國民全體を基礎とする國論一致の内閣としての政府擁護であつたことは國民の決して忘れてはならぬ所である。

而かも更に先生は大隈内閣の米價調節策に參劃された。當時の調節策は米價暴落の調節であつた。之れが爲めには先生は民間に於て奸商の賣惜み反對のため、自ら率先して米屋を始められた。そして本店を京橋區に置き、其他二三區に支店を置かれた。かくして漸次十五區に米屋を作り、謂ゆる『米カーテルス』といつた格で暴落米の一手專賣を始められやうとした。當時、本店増屋の店先に訪れた

者は代議士でも、富豪でも、勅任官でも、或は相場師でも、又は一升買の裏店の女房でも、その店先に黒き事務服姿の先生を見受けたものであつた。然かも是れ何であるか。之は言ふまでもなく、先生の熱誠の化身である。一旦正義のため、愛國のためとなると、先生の熱誠性はどん底まで徹底しなければ止まなかつた。之れが爲めには世の誤解中傷などは眼中になかつた。人事を盡して天命を待つまでゞあつた。此の時、恰好日獨戰勃發前で、黑岩先生は萬朝報の言論に、演說に熾んに『歐洲出兵論』を高調された時であつた。そして佛國は頻りに日本へ歐洲出兵を慫慂して來た時であつた。此の場合に突如黑岩先生が米屋を始めたので『黑岩さんは佛國大使館から、十五萬圓貰つた。そして萬朝報の政治記者は一人當り千圓宛貰つたらう』などといふ跡方もない噂があつた。けれど私共は眞相を知つてゐるだけに可笑しさに堪へられなかつた。噂ほど人間の社會に無責任な、害毒な者はないと思つた。

更らに自治政治の改造——此の年の五月の末から六月の初めにかけての東京市會議員總改選に際して、先生が、多年、東京の市會を案し、市民を虐げて來た日本のタマニー派——常磐會を絕滅されたことであつた。此の反常磐會運動のためには、先生は全國新聞記者聯合會を組織された。そして遂に常磐派の巨魁森久保作造を斃して、深川區から無名の青年候補太田信治郎を當選せしめた。市民は擧つて先生を『市政の神』と崇めたゝえた。然かも先生は市會選擧戰が濟むと、何も戰情戰功に就ては一

言も語られなかつた。たゞ沈默の凱歌は先生の周圍に崇高な響音(サウンド)を奏でゝゐた。

五、約束の人

私も隨分知人友人が多いが、先生ほど、『約束』に終始された人も尠い、一體、土佐人は約束が堅いと謂はれてゐるが、然うではない人の例が幾個もある。第一、土佐の代表的人物と謂はれてゐる板垣伯も、『約束』の點から見ると、鄕を同ふする黒岩先生には遠く及ばぬ。相撲を最屓したり、政治上に於ける行動などは、民本的で、黒岩先生に酷似してゐるが、板垣伯は約束の中の最も重んずべき公約の前に不履行であつた。

約束にも公私の別がある。私約が輕くて、公約が重いとは限つて居ぬが、大體に於て、公約は私約よりも重い場合が多い。一時自由民權の神の如く敬はれ、靑年渴仰の標的であつた板垣伯が岐阜に刺された時、『板垣死すとも自由は死せず』と絕叫した。けれどあの刺された時以後、日本は自由は全く死して、板垣伯は生きてゐられた。伯の絕叫は卽ち公約であつたのだ。若しも伯が彼れほど自由の神とまで自らも任じたなら、飽くまで自由のために、政治上に、社會上に大活躍が出來る人であつたのだ。今は其の伯も、伯の叫びに止まつて自由も、共に亡くなつた。私は是れを伯のために、日本の爲めに惜んで止まない。無論、私共は伯が一旦培つた自由の園を、更らに、鍬鋤を以て拓(ひろ)げなければな

らぬ義務はあるけれど――。

之れに反して、先生は公約も私約も兩つ乍ら全ふされた。先生は時に公私の別なく、苟くも一旦約束をした以上は、一身一家から自分の事業まで犧牲に供し、或は人を殺してまでも變へられないことがあつた。又は許しがたい仇であつても、一度び快諾したことは、飽くまでも貫徹せずには居られなかつた。世には借金するのに、約束手形を振り出しても、間違へる人があるのに、先生は實に口約で、約束手形や公正證書よりも、幾倍幾十倍も確實であつた。先生が多くの事業家と肩を並べて、より以上の收入があるにも拘はらず、常に割合に貧乏にゐられたのも、之れが爲めであつたことは明かである。

萬朝報社の創業當時、先生の傘下に集まつた十數士は、悉く先生と刎頸の交りを終び、決死の誓ひを立てた。之れに對して先生は創業社員として是等十數士の死後、其の遺族の生活の一切を保證することを約束した。創業社員はすべて身命を賭して働いた。當時の十數士が分擔してゐた事柄を、今日は百數十名が取扱つてゐるのだとは、先生が、私の萬朝記者に成つたばかりの時に曰はれたことであつた。先生を始めとして、十數士は悉く今日の記者や事務員の六人前、十人前も働ひたのだから、如何に精神は一騎當千であつても、健康を害さずには居られなかつた。漸く萬朝報が成功しかけて來た

時には、是等創業社員は、片端から一人倒れ、二人斃れ、果てはすべて病床に不治の病を嘆く敗殘の身となつた。けれど是等の倒れた人々は、先生との無形の約束通り、死に至るまで、或は其の後繼者が一人前に成つて世に出るやうになるまで、手厚い補助を受けた。創業當時の萬朝報社は、實に傭主と傭人との區別がなかつた。縱し有つたにしても普通の銀行會社の如く、勞銀で結び付けられずに精神で結び付けられてゐた。美しい、淸い主從又は師弟か兄弟の關係のやうであつた。萬朝報が今日から思ふと、小資本で殆んど奇蹟かと思ふほどの早い發展を爲し遂げたのも、一に先生の人格崇高、能く約束を反古にされなかつた賜でなければならぬ。『萬朝報社の礎と成つた者は、是等の創業當時の社員だ』と、先生はよく曰はれたが、寧ろ萬朝報の礎は、先生の『堅い約束』であつたに違ひない。

六、廣量の人

『成らぬ堪忍、爲るが堪忍』といふ俚諺があるが、先生は全く成らぬ堪忍をされた人であつた。上述の京橋の米店『增屋』を開かれた時は、隨分、先生を敬慕して居る者が店員を望んで來た。先生は其の中から二三の者を拔かれた。其の他は先生の邸に育まれた書生上りの男や何かであつたが、金庫の番人や直接米株の事情又は米穀取引等には、玄人が傭はれた。ところが此の謂ゆる玄人筋の中には、早くも先生のあまりに宏量なのに甘へて、惡策陰謀をめぐらした者があつた。金庫の番人と此の米通と

が結託して、學者肌の先生を欺き得ると思つて、密かに帳簿の胡魔化しを始めた。けれど此の惡計は忽ち暴露された。金庫番人は馘られ、この惡計に連累した店員は解雇された。けれど馘るにも解雇するにも先生は反對された、悔悛させて成るべく使ひたいと曰はれたが、店の輿論が沸騰して、遂に之れを容さなかつた。此の結果、この金庫番人や取締りの後任が問題に成つた。色々物色した揚句、とうとう先生が子供の時から大學を卒へるまで一切世話して遣つた京大出の法學士O君が支配人に採用された。

けれど先生を始め、すでての者の期待と信頼とは悉く裏切られて仕舞つた、O君が『增屋本店支配人法學士』と謂つたやうな長々しい肩書を附けた頃には、もう過去のO君ではなかつた。O君は奸惡なる人に變つて居た。恩人先生に對しては身命を賭しても働くべきO君は、その洪恩を仇で返してゐた。

增屋は急に解散しなければならなくなつた。多年育み養つて、漸う一人前に仕上げた者を自分の店に使つて、ホッとする間もなく、この逆叛！先生の御胸中はどんなであつたらう。弟子の中には、O君を殺して仕舞へとまで敎囹いた者もあつた。O君を『牢に打ち込め』と憤慨する者もあつた。けれどO君は殺されもせず、罪人ともならずに赦された。すべては度量海の如き先生の一言に依つて果斷に

決定した。

『赦して遣れ！』

と言はれたきり、默々として何も語られなかつた。

忽ち債權者が八方から先生に迫つて來た。けれど先生は背水の陣を布かれた。鐚一文でも萬朝報社の會計に累を及ぼされなかつた。そして先生は廿年あまりも住み馴れた第二の故郷とも思はれた麻布笄町の邸を賣つて、淸算に充てられた。殘務債務の整理が落着すると、先生は全家を擧げて鎌倉落をされた。その愈よ出發するに際して、親戚緣者も、弟子も――見送人はすべて泣いた。すると先生は嚴肅な極めて平然たる態度で、

『何が悲しいのです。一榮一落是春秋ぢやありませんかアッハハ、、、』

と心から恬淡として、何の憂ひもなき人の如く高く笑はれた。

宏量といひ、雅量といふことは、我慢强い人でもあるが、また一面、天性の涙脆い人に有でなければならぬ。先生は人並外れて我慢强い人であつた。そしてまた人一倍涙脆い人であつた。我慢强いといふことは、我儘や己惚れの絕對反對で、自己反省の德性をいふのであらう、先生はよく私共に『我儘は大嫌ひです』と言はれた。學說の上に、言論の上に、社交の上に、事業の上に、政治の上に、す

べて我儘な者は、中正を得ないと排斥された。先生が横暴なる政治家や資本家や――すべて不正な强者や權力者、富豪などを見て、國民や勞働者のために、恒に『正義の友、弱者の味方』となられたのも、詰り先生が一切の我儘性を世の中から根滅したいといふ考からであつた。

隨分、世界にはこれまで幾多の主義が唱へられ行はれたのもある。帝國主義、社會主義、民本主義など、數をあげれば限りなくある。けれどすべての主義を分類して、それを大別すると二大別されるに過ぎぬと思ふ。卽ち國家主義と社會主義である。而して此二大別主義を更らに分り易く言へば、我儘主義と我慢主義の二大別に歸着するではないか。このごろ社會改造の前に、自己改造などと謂ふ聲を聞くが、先生は實に夙うから此の『自己改造』されて、然る後に國家社會の改造に一身を獻げられた人であつた。先生は少數の强者、我儘者を見ると。堪らなく憎らしくなられる人であつた。陋劣政治屋や、富豪權門などは、先生の蛇蝎視されたところであつた。この先生の大精神を象徴したのが、萬朝報社創立當初から、その編輯局の棚間に『眼に王侯无く、手に斧鉞あり』の額が揭げられてある。記者は何人でも編輯局に入るや、毎朝これを見ては、譬へられぬ緊張味を感じる。故に先生は底拔けに大量があるのではない。苟くも正義であり正義の多數のためには何處までも我慢をされるが、一旦、其の不正であり傲岸であることがわかつては、猛然と起つて奈何なる强者權力者でも鬪ふことを辭さ

なかつた。また盲目的に愛に溺れるやうなことは決してなかつた。先生は自分が我慢強いからといつて、人にも我慢強かれとは強要しないが、人に敎へたいと思はれてそれを決行せられた。然し兎に角、先生は我儘であると決定すると、如何に惜しい人物でも、如何に熱愛してゐる者でも、涙を揮つて馬稷を斬る底の決心をされた。

彼の茅原華山氏が萬朝報を去るに至つたのも、我儘からであつた。當の華山氏は先生と主義の上からの疎隔を云々して退社理由を天下に發表されてゐたが、何にも其の様に複雑したことではない。根本の理由は社全體の正義、合理、秩序のために唯だ一人の我儘なる華山氏を朝報社の支配者として馘つたといふ極めて簡單な理由に過ぎない。

上述の宏量の人としての先生觀は、對世間的、對社會的であつたが、今度は對家庭的の場合に就て、先生の宏量の例を擧げることゝする。私は先生の家庭に在す時の宏量振りを見る度毎に、宏量もあまり度が過ぎると、傍目から馬鹿に見えることがあると謂はれるが、先生の表面を見ると、或は誤解された域まで行かれたと謂はれるかも知れない。

『うちの旦那様位ゐお怒りにならない方もない』とは夫人が殆んど嘆聲を漏らされるやうに屢々謂はれたところであつた。それほど先生は家庭に於ても怒られたことがなかつた。

どんなサイノロジーの夫でも、百人が百人、千人が千人、離緣して仕舞ふだけの大罪を夫人が犯しても、先生は決して自分から離緣をされなかつた。何處までも、自己改造、自己反省されて、夫人を理解され、また反省もさせたいと努力された、この樣な問題が惹起した場合、どんな有力な親戚、どんな無二の親友、どんな偉い人から、容喙されても、忠告されても、先生は其の厚志を感謝するが、決して自分から處決はされなかつた。是れは決して先生が涙脆いために盲目的に愛に溺れたゝめではない。物の成立、夫人と御自分とを理解し盡されてゐられたからである。先生のされることには悉く意義があつた。決して唯だ譯もなく云々といふやうなことは無かつた。

『私は無意味な事が大嫌ひです』とは先生がよく私共に曰はれたことであつた。全く先生は何を爲されるにも意味を究められた。勝負事、技術――一切の物事に奧義を究明されなければ止まれなかつた。斯のやうに先生の夫人に對する言行にも深い意義があつた。先生の先夫人に對する態度は、遂に悲慘に終つたが、全く斯のやうな一貫した先生の特性の下に理解ある結末を告げてゐた。

どんな馬鹿可愛がりの親でも、勘當して仕舞ふやうな惡い兒でも、先生の前には容されたに違ひない。先生は惡い兒を叱る前に、先づ自分を責められた。實に先生の如きは、偉大なる人格者である。世には幾多先生ほどの人物はある。けれど、先生ほどの人格者はそんなに多くはない。

黒岩先生に師事して

都築孝介

余は先生に近侍した七年間に自ら知り得たるものと、先生の述懐談中逸話めきたる事柄と、そして先生の長子日出雄氏の爲めに營まれたる米店の顚末等に就き簡單に書いて見たい、此稿若し先生の人格を傷け其聰明を掩ふものあらば、夫は素より余の蕪雜の筆、粗笨の記憶の罪に依るものなれば豫め玆に斷り置く。

數學を好む遺傳

先生の家は代々儒者の家で彼の安藝備後守國虎に殉死した黒岩越前も學問を以て新に召し抱へられた家老であつた、先生の祖父も亦非常な學者で特に暦學の造詣が深かつた、屢々時の政府へ暦の事に關し献言した事もあり又意見を徵せられた事もあつた、先生の嚴君も又當時の學者で私塾を開いて村の子弟を敎へてゐた、先生も亦學問を以て身を立てやうといふ希望があり、十一歳の時鄕里川北村を出で高知城下に遊び當時田淵といふ所に住み森澤沮氏に師事し專ら漢籍を學んだ、村木男爵の令弟嵜崎直太郎氏などは當時の同門生であつた、十三歳の時大阪に出で當時林權助、日置益、松井慶四郎の諸氏の學んでゐた英學塾に入り傍ら英人カロザウスの家に寄寓して英語の研讃に沒頭してゐた、十八歳

の時上京し或は慶應義塾に、或は駿河臺成立學舍に籍を置いたらしいが、一つも完全に卒業したものはない、後年學者政論家として大名を博したが皆不撓不屈の獨學に依るものである。

文章は夙に巧みであり、其上英語の達者な所から新刊の洋書を買込んで讀破すると云ふ風なので言ふ事も書く事も中々新らしいものであつた、慶應義塾に通つてゐる時同饗に論文の募集があり先生も之に應じた、先生の論文は全校で最優秀であつたが筆者の『黑岩大』と云ふ人が如何なる人物であるか已に退學して判らなかつたが、後年涙香黑岩周六が其『大』であつたと判つたといふ事であつた、其論文は塾に長く殘つてゐたと言ふ事であるが、果して今も保存されてゐるかどうか。

數學も非常に得意で、隨分難解な數學を手もなくやつて除けた、屢々外國から高等數學に關する書籍を取寄せ研究してゐた、或時余は先生に對つて『凡そ文士肌の人には數學は不得手なものですが先生は總べて文字に明るい上に非常に數學に委しい、どうも不思議ですねー』とこれは失禮な言分ではあるが、戯談の末であつたので言つた事がある、すると先生は『私は一番數學が得意だ私の祖父も父も北海道の兄も皆算數は得意だつたよ』と云つて笑つてゐられた、始めて之を知つた余は意外に思つたが先生が常に算數的の考案物に一種獨特の技能を有してゐた事に想到すると其の偶然でない事が窺はれる。

英語は最も特長

英語の强かつた事も今更言ふ迄もない事で、涙香の飜譯小說と云へば當時洛陽の紙價を高めたもので、先生の所謂飜譯にあらず感情を寫すと云ふ其筆法は到底人の追隨を許さなかつた、彼の馬場辰猪氏等の爆彈事件の公判が神戸地方裁判所に開かれし時、先生は之れに立合つたが、當時の裁判官等語學の判つたものがなく(Order)の注文と譯すべき箇所を命令と譯し被告を困まらせた事などを社會に公にして攻擊したる事があり、又新聞に記載すべき外國電報の然かも大統領か何かの當選か落選かの重大問題に關し、其飜譯に於て他社は皆擧つて誤譯を載せながら尙ほ先生のを誤譯なりと嘲罵的の記事迄載せたが後にて先生の正當なりし事が判り當時の第一人者として賞揚された事があつた、ラ、ミゼラブルの先生の譯本中チヤンバルヂヤンが靴を懷にして人家に忍び入るの一行あり、或人原本に斯る箇所なしと駁したる事があつた、後に到り外國よりラ、ミゼラブルの活動寫眞來り相州鎌倉町福音館で之を映寫した其時、恰度同地に避暑中の先生一夜之を見物に行つたが、則ち靴を懷に入るゝ所あり、先生見て愉快に感じたりと語りたるを記憶す、原本を一氣に讀了、然かも之れをあやまたず書き綴るといふ先生の記憶力には驚くが、かくも人に面白く讀ませるには天稟の才筆と充分に語學が判つてゐなくては叶はぬ事だと思ふ、先生の友人佐藤隼吉氏が原書を逆さまにして意味のすら〳〵と判るのは君

と伊東己代治だと嘆賞したと聞いたが無理からぬ事である。

不思議なる頭腦

先生は又天才肌の人で物に熱中すれば他の何事も省みなかつた、又非凡な精力家で克く發明家に見る如く同じ調べ事を何年でも續けるのには實に驚嘆する、何時かも『俺は昔は飮みも食ひもせず十二時間原稿を書き續けても平氣であつたが今は六時間書くと疲れを覺えるやうになつた』と嘆じてゐられた、ニユートンは學問に熱中して卵と間違へて時計を煮たと言ひ、ヘーゲルはイエナ市に於て周圍に激戰のある事を知らず、其の著『精神現象學』を靜に脫稿したと傳へらるゝが、我黑岩先生も何かに熱中すれば此の意氣があつた、尤も大事の原稿を書く時は午前三時頃に起き、四顧人なく萬籟死したる時屢々筆を執られたが、平素は可也騷々しい中でも平氣で筆を執られる、熱中してくれば鈴を鳴らして下婢に茶を命じながら飮んだ事なく、何時も其儘にしてあるといふ風であつた、先生は屢々大磯に轉地せられたが其大磯行の途中、想を凝らし必要な本など讀みつゝ行けば乘過す事があるが眠るに時間さへ見て置けば必ず大磯驛にて目が覺めると言はれてゐた、實に不思議な頭の働きを持つてゐると思つた、曾て筓町の屋敷にて湯殿より出て來るのに直に戶を閉ぢず、必ず三四間を行過ぎ思ひ出したる如く又見返り來りて戶を閉づ、余は之を目擊する事數十度なりし爲め常に先生の頭の働きの尋常

の人と異るを思つてゐた。

其蠻骨と同情心

先生は壯年時代には性質燥激に蠻骨稜々と云つた方で、喧嘩早い方であつたらしい、尤も理不盡に亂暴を働くとかいふ方でなく、所謂武士的の氣魄があり、賣られた喧嘩なら仕方なしに買ふといふ側であつた、曾て厚生館にて演説中亂暴な野次に對し演壇よりコップを投げ付け皆をはら／＼させた事がある、先年佛蘭西に行つた時高價で買入れた時計が直ぐ狂つて了つたが、其店に掛合ふと酢の蒟蒻のと言つて埒が明かぬので壯年時代の例の意氣が簇々と起り『東洋人が詐欺に掛つた時、如何なる手段を執るか敎へてやる』といつて先生は今や時計を地上に打ち付けんとしてゐるので、同行の大谷誠夫氏が中に入り漸く收めたとの事である、拳骨で物を割る事などは少年時代より練習し、下宿屋の板塀など片端から拳骨で割つて廻るといふ惡戲者であつた、先生が中學校より大學迄濟ませた男にて増屋米店の支配人たりし者あり、其者不正を働きたる時『彼が人に撲られて對抗する位の氣概のある奴なら此拳骨で撲つてやりたい』と笑ひつゝ堅くタコの出來た拳骨を示された、聞けば少年時代已に瓦二枚を重ねて割りたる由にて、元來は荒仕事もせず婦人の如き柔かな手ながら只其堅めた拳骨の要部だけは見るからに剛堅なものであつた、これも先生の短氣を起した失敗談であるが、今の服部時計店の北

隣(玩具店らしい)に下宿して讀書に耽つてゐた當時、餘りに虱に攻められ辛棒が仕切れなくなり、其の儘着物を丸めて行李の中に仕舞ひ込み置いたが、下宿屋の婆さん先生の留守にて行李を開き洗濯して糊をつけ、綺麗にして先生の前に出し『澤山チーチー(虱の事)がゐましたよ』と言つた、先生此の虱の衣物を見られた事が如何にも氣耻かしく自尊心を傷けられたやうな氣がして癪に觸つてならず、『人の行李を默つて開く奴があるか』と散々逆捻を喰はし、早速其家を飛出して仕舞つた、後で其親切な婆さんに如何にも氣の毒になり幾度か詫事に行かう〳〵と思ふ中遂に果さずもう其人は生きてゐやう筈もないが、今に心殘りでならぬと言つて居られた、晩年の先生は實に温厚篤實な君子人であつたが、世間の一部の人からは先生は所謂土佐人の性癖たる殺伐の氣と矯激性とを常に露骨に現す人の如く見られてゐた。

惡を憎み敵に對する時の先生に見る男子的の意氣を見て、只だ徒らに恐ろしき人のやうに思つてゐた、之は眞に先生を知る人の見方ではない、平常は誰に對しても懇切温情な君子であつた、熊谷直實も殺すべき時は臙脂花の如き可憐なる平家の公達を殺さゞるを得なかつたが、又禪房に落飾して彼等を弔ふの情誼があつた、冷熱兩極端を持つた先生も公の事に對して常に熱の働きの大なりしは事實で夫れは時代と境遇が然らしめたものである、總じて同情に富み、十五年間發明に沒頭した人の努力に

敬服すると稱し苦しき中より身錢を切つて之を援助してゐた、其外先生を取卷く多くの人達の中に屢屢無心を申し出でた人も素より少くないが、先生は大抵の場合頭を横に振つた事はない、其後地位が出來てからは寄り付いた事もないが今は影の薄い某政黨の總務などと納つてゐる某なども能く無心に來た一人である、他人の世話をする人には克く有り勝ちの事であるが先生は此人達に對して恩に被せた如な素振などは毛頭なかつた、又一面非常に寛容であり人を一旦信用すれば幾ら諫めても聞かず、失敗を招く迄捨てない、一旦迷惑を蒙つた人でも頭を下げて哀を乞へば省みないでは居られない性質であつた、先生を訪ひ來る人の中に迷惑を掛くる事再三に及び、然かも何時迄も是を見てやりしには其寛仁に驚いた事であつた。

隨分無頓着の人

先生の無頓着も可なり名高いことで、殊に若い時分の無頓着と來ては實に意表に出づるものがあつた、落魄して下宿巡りをしてゐる頃には、常に着のみ着の儘で、其上滅多に洗濯などしない所から虱が六部遍路の如に生いても平氣で勉强してゐた、當時友達と寄つて餅菓子などを食ふのに阿彌陀籤の代りに衣を探つて日頃愛育して置いた虱を掌上に載せ、其數の多きものは少額を出金し、少きものは多額の金を徴收され、虱の同數なる時は其肥瘦の度を以て出金の額を決めたと言ふのには餘りに奇想天

外的で其餅菓子の味も思ひやられる、これも矢張其當時の事だと思ふ、先生の夜具が質屋に沈んでゐるのを知れる友人達、夜は何を着て寢るのか知らと窺つて見ると先生は眠くなれば新聞紙の綴つたものを着て臥し、覺むれば中夜切々たる寒虫の聲を聞きつゝ飜譯などしてゐた、平常放縱なるが如き半面に又先生の終始一貫した精力主義に基く眞摯なる努力の半面があつた『日本たいむす』といふ小さな新聞社に這入つた事がある、經營困難と見えて營業用の什器なども强制執行の封印附で素より給料などは支拂つて與れず、二階の編輯室に雜魚寢してゐた先生初め部下の人達三度の食事が取れず、それでも我慢强く且つ無頓着な先生は默つて原稿を書いたり書物を讀んだりしてゐると皆が薩摩芋を食つてゐるので自分も相伴し、三日位は其れで辛棒してゐた、後で工場の連中が活字を一握り幾らかで賣つては三錢五錢と芋に代へてゐたとを知り驚いたとの事である。銀座に二大政書の出版社を建てゝゐる頃には土佐の田舍から尋ねて來た者に金の無心を言はれ、金の無い所から秦氏夫人（先生の實姉）から貰つた只一枚の着物を與へ、自分は外出も出來ず十數日蒲團にくるまつて居たと云ふ事である。

大隈內閣成立當時は先生は多くの壯士に狙はれ身邊常に危險であつた、警視廳よりは屢々注意があり俥の紋を消せ提燈を更へよといふのであつた、先生は決して之を代へなかつた、一夜神田青年會館の演說よりの歸途六本木にて壯漢物蔭より現はれ、ステツキを持つて俥上の先生を帽子の上から擲り

つけた、車夫は直に之を追はんとしたが先生は『止せ〳〵』と止め車夫は二つに折れたステッキを持つて歸つた、先生は後頭部に大きな瘤を拵らへ『今ヒリ〳〵痛くなつた』と笑ひつゝ擦つてゐた、或時は獰猛な顏をした壯士が櫻の大きなスラッキをつき、笄町本邸の前を迂路つき、新聞などへも物騒な事が出るので、書生などは夜は刀を枕にして寢た事もあつた、先生は西洋館の二階の寢室で大の字なりになつて寢ね鐵の扉を下すと言つても決して下させず『私は疊の上で死ねないよ家の中で殺されりや滿足だ』などと言つてゐた、是れは晩年の事ではあるが、現在の下澁谷の屋敷を買ふときなども、大抵の人が檢分して兎や角と六ケしい文言を並べ容易に纏るものでないのに、先生は只の一度も其の家を見た事もなく見やうともせず、只夫人に金を持たせ先方の言ふが儘に登記を濟ませて仕舞つたのであつた。

祖先の位牌調査

先生は佛蘭西の國際會議の開かるゝ際渡歐せられ、歸來間も無く病を獲て大磯に轉地せられてゐた、余は一日大磯に先生を見舞ひ、まだ青年時代の放浪生活や失敗談などを先生から聞かされ、側に居られた夫人も今始めて聞く話だと言はれ、三人で打興じた事であつた、此時先生は病人とは思はれない程の快活さであつたので、余は間もなく快復せられる事とのみ思はれ、安心して歸つた事であつ

た、數日の後突然「東京に引上げるから明朝早く迎ひに來て吳れ」といふ意味の電報來り、多分病が輕快に赴かれた事と思ひ、欣んで翌早朝大磯の長生館に先生を訪ねた所、案に相違して先生の顏色は餘程悪しく、病氣の經過の餘りによくない事が想像され落膽した事であつた、一先下澁谷の自邸に入られ、遂に大學病院に入る事となつた。毎日先生の側らに在つて親しく看護に盡してゐた人達は、先生の病の容易ならざる事を知つたが、先生は遠からず平癒するものと思はれてゐたらしかつた、其れは退院後に爲すべき種々の仕事や計劃に就き折々語られ、中に就き明智光秀は小栗栖で田夫の竹槍に斃れたと言ふのはどうも虛傳で姿を變へて行脚に廻つたといふのが事實らしい、病氣が治れば其れを調べて書いて見たいと言はれ、其ヒントを得ると云ふので其當時の事を記せる實錄や講談樣のもの迄何十冊となく皆に代る〱讀ませた事に依つて知られる、然るに病は依然快方に向はず、體は衰弱する計りなので、先生も漸く病の重きを覺られたらしく、一日『私の家は兄が耶蘇に入つてからは祖先の位牌や何かを燒棄てゝ仕舞つたので、私は殆んど無宗教の狀態で、近い祖先の事共も餘り知らない、今更之を調べるは遲い感じはするが、扨て此儘棄てゝ置く譯にも行かぬ、安藝の郷里で調べられる丈調べて吳れ』との事であつた、で余は土佐に歸り先生の郷里安藝近郊の寺々の過古帳や其他村老の口碑などを集めて報告した、先生は『私としては之で充分だ』と非常に滿足の樣子であり、杜撰の調査を恐る

恐る出した余も、ほつとしたことであつた、先生が溘焉として逝かれたのは之れから間もない事であつた。

米店増屋の開業

先生は大正元年長男日出雄氏の徴兵檢査を終りし頃より、同氏の爲め何か事業を營ましめ、一人前の責任を擔はしむる必要あるを感じ、財産を分かたんとの手配を始められたが、身邊常に繁劇にて進捗意の如くならず、大正三年暮頃に到り漸く實行の運びに至り、金額五萬圓を分つ事とし、是より日出雄氏は既に獨立の生活に入り、從來の如く先生の家に寢泊りするも家の經濟を別にするに至つた、營業として始めは雜誌を出すと謂ふのであつたが萬朝報と同種の仕事で競業的のものであるからとて中止し、東京市中に殆んど絕無なる絕對無砂搗白米の製造販賣を兼ね、通例の米問屋兼小賣店を創むるに決し、大正三年十二月より準備に着手し、漸く大正四年二月十五日に至り京橋區銀座二丁目二番地に店舖を開いた、時恰も先生等の擁立した大隈内閣時代　米價問題の喧ましき最中であつたので、人を中傷して快を叫ぶの徒や蜚語を放つ常習ある人達が盛んに隈閣掩護の下に調節米を販賣するの、或は資金は歐洲出兵論主唱の報酬として佛國政府より出でたりなど夢の如な泡の如な風說を流布したものだ、時が時であつたので世間の一部には此風說を信じ誤解を抱いた者もあつたやうであつたが、先

生の米に關する研究は既に十餘年來の事であつて、常に商賣を始むるなら米屋だ、卸と小賣と搗白を兼ぬれば一方の損失を一方で償ひ且つ日本人の日常必要品であるので決して他の物貨の如く徒らに資金が固定したり損失を招く如な事はない、只現在の搗白等に優越した點を發見する必要があると言つてゐた、則ち開店と同時に絕對無砂搗を標榜した所謂である、尙黑岩家の紋所は橘であるに拘らず自用俥には古くより〼の紋を附してゐたに見ても、先生が米に就き趣味を有し、後年米店を開くの萠しは既に幾年前に於てありし事が窺はれる、最初は磊々社と命名したが餘りに固くるしき所から增屋と改稱し、市内に數ケ所の支店を持ち精米所も各支店で搗白する外、特に二三大工場を設け大規模の賣出しを開始した、元來が無砂搗なので搗白に多少の批難はあつたが長く市民は奸商に苦しめられてゐた後であり、萬事が行屆いた所から人氣沸騰し、日々本店支店共に客が殺到し、今迄の米店に其類例のない繁昌であつた、此好景氣が順調に續き且先生が卸と小賣と搗白を兼ねたる算數的に搆へ上げた式に則つて進めば必ずや此店は成功すべかりし筈であつたが、二年と經たぬ中に忽ち十二三萬圓の資金を無くし、竟には住むに家なきに至り、先生は家族を纏めて鎌倉に隱遁する事となつた。

增屋悲境の小因

增屋は開業に際し新聞廣告を以て店員を募集した、履歷の善き者は主班に列せしめ店の樞機に參與

せしめた、人を信ずる事の厚き先生は『人は責任を負はしむれば不正を働くものに非ず』との信條の下に身元の調査を爲さず、初めより店員を信じ自由に事に當らしめた、人若し其方針の危險なるを說く者あらば先生は言下に『三井の如き數千の人を使用する所はそれでは立ち行かぬ筈だ』と言はれ、自身の心を以て店員の心を律してゐた。此美德は往々にして其度を過し累を屢々先生自身に及ぼした、これは増屋事件紛糾の後警視廳の知らせに依つて判つた事であるが、可也の地位に在りて先生の信用を置きし者の中にも二三の前科者があつた、其中の一人は大金を拐帶して逃走し遂に警視廳の手に捕はれ時の支配人山本某は帳簿の不整理と此拐帶事件の爲めに責を負ふて辭職した、其他掛金を胡魔化し、或は米の配表中袋や俵に竹筒を差し入れ米を拔取る者等ありて此監督方法等は容易の事でなかつた、一方本店支店を通じ賞を懸けて成績を爭はしめし結果、帳簿上には非常なる成績を擧げたが賣掛金徒らに嵩み運用資金に支障を來たし店は漸く不手廻りとなつて來た、當時は店員近江某支配人格として店を主宰し、間もなく落合太郎と云ふ者入店し支配人となつた。此人は増屋最後の支配人なる故に茲に詳述するの必要がある。

増屋破綻の眞相

明治廿三年頃先生が都新聞に主筆記者であつた際、職工長に落合代次郎と云ふ者がゐた。自ら活版

のインキの製造法を知ると稱し先生に金主たらん事を乞ふた、先生は其乞を容れ當時未だ微力なりし先生としては殆んど及ぶ限りの金錢を出し三田豊岡町にインキ製造工場を設けたが成績面白からず、明治廿五年萬朝報發刊後に止めたのであつた、其の後代次郎は大井村に轉じ尙ほも製造を試みたが全然失敗に終り油を煮る鐵釜一個を送り來り『貴下の出したる資金は唯此釜を殘したのみです』と斯くして後彼れは先生の家に姿を見せぬ事となつた、然るに其後間もなく彼の長子太郎と云ふもの人を以て先生に窮狀を申込んだ、先生は引取つて明治學院に入れ進んで第一高等學校から更に當人の請に從ひ京都大學に入れた、彼は學校の寄宿舍に在る以外は常に黑岩家に在り、京都に行きて後も夏休みには歸京黑岩家に起臥し日出雄氏などとは朋友として成長したものだ、落合は二たび落第せしも終には大學を卒業した、是れ卽ち增屋最後の支配人落合太郎其人である、後二回ほど黑岩家に來り妻帶の事と保險會社に就職した事を告げた、爾來二年ほど音沙汰がなかつたが大正四年十月頃落魄せる樣子にて先生を訪ね來り保險會社を退きたる旨を告げた、先生は懇々職業を得ずして現職を捨つるの不都合を諭したが、後にて聞けば辭せしにはあらず解雇せられたものであつた、此頃より落合は折々增屋に日出雄氏を尋ね來り自分を支配人に採用せん事を賴み先生も彼の落魄の境遇に在るを氣の毒に思ひ且つは從來の關係上信任するに足る者として十一月の末頃入店を許したのであつた、大正五年一月に至り落

合は初めて支配人として、前記近江に代りて店務を執るに到つた、當時先生より日出雄氏に貸與せしもの約九萬圓に上り、末の四萬圓ほどは負債にて辨じたるものにて、此上に補助する力なかりし當時の先生は數日熟考の上增屋閉店を日出雄氏に告げたのであつた、當時增屋は約三萬圓の貸金があり負債とては先生に負へる外は殆んど絶無であつたので閉店せば貸金三萬圓が少くとも二萬數千圓は回收さる可く電話、機械、器具等も多少の價値あれば損失も數萬圓に及べど猶日出雄氏は萬以上の財產を以て退くを得るので轉業又は再擧の道もあり、他日無一物を以て廢業するの否運に陷らんより、此際斷然閉店するに如かずと云ふにあつた、然し落合の意見として『今迄が難關なり、これより利益の上る所也、爾後先生の補助を仰ぐの必要なし』といひ最も自信あるらしき口吻であつたので、今後補助を與ふる事の難きと補助を乞ふに至らざる前直に閉店せよと、幾度か言聞かして一先落合に委したのであつた、落合は其後支配人の登記の必要あれば許可ありたしと言出でたりと聞き、余は先生及び日出雄氏に登記を爲す事の危險を力說したが、當時未だ學生であつた余の言は重きを成さず、間もなく落合は許されて法律上の支配人となり濟まし、常に黒岩日出雄支配人、或は增屋商店支配人の名刺を振廻はすに至り、增屋は危險の境に又一歩を踏み入れたのであつた、其後落合は先生に遇ふ每に增屋の順潮に進めるを欣々然として語つてゐた、此當時には已に落合の背後に後押しをする何者かゞ居たらしく、性

來羸弱にして怯懦なる彼として今迄に見ざる如き強者の態度を持つて萬事を採決してゐた、此時分より落合は學友にて辯護士法學士牧田彌太郎なる者を店の顧問とし屢々店に出入せしめてゐた、其後間もなく落合牧田の友人にて福島縣人と稱する佐藤鐵藏なる者も亦頻々として增屋に出入するやうになつた、落合は佐藤の事を先生に話し中村是公と云ふ人に用ひられ滿鐵に關係し頭腦明晰、殊に算數の事に長けたる人と謂ふのであつて、種々と增屋の事を相談してゐた、十月の中頃より日出雄氏は病に臥し先生は增屋の事が氣になるので每日の如く增屋の二階に設けたりし讀書室に行つた、其出入の度に店に見慣れぬ人の居るを瞥見したが後にて其人が佐藤なる者であつた事を知つた。此當時から增屋は落合、佐藤、牧田の三角同盟により店の利益とならざる事柄が計劃されてゐるとの噂が親しく店に出入する人や店員の間に漸く高くなつた、落合、佐藤兩人の案だと稱するものに依ると十月には數千圓の利得を見る筈であつたが、反對に增屋は非常なる悲境に陷つたのであつた、然かも日出雄氏は病に臥し、先生は淺野セメント問題に奔走し、暫時店に遠ざかり偶々落合に逢へば順境に行き居れば安心されたしと言ふのであつた、此當時の增屋に於ける佐藤の地位は落合以上であつたらしく、佐藤（由市）、勝俣などいふ古參の者も解雇せられ商店樞要の事務は悉く佐藤の同縣人知己親戚等を以て置替られ、支店の主任迄彼の知人が置かれてゐた、佐藤、落合等が花柳界に出入するのは此頃より漸く繁く、店へ

待合茶屋等より電話の掛り來る事も珍らしくなかつた、又増屋の帳簿は最初ルーズリーフ式であつたが抜差自在なる所から日出雄氏の考にて一切重大なる綴帳として置いたが佐藤は又ルーズリーフ式に戻して仕舞つた、日出雄氏は病に臥しながら店の狀態を知り落合に逢ひて直接店の模樣を聞かんとし、屢々電話を掛くるも來らず、手紙を出すも返事せず、日出雄氏は心配に堪へ兼ね病を推して店に行きしに、落合は日出雄氏を見るや匆々に座を立ち急用あればとて出で行きしまゝ竟に歸り來らず、かくして其年も暮れ、大正六年となつた、年賀には來るならんと思ひしに元日に來らず、二日も三日も落合の姿は店にさへ見えず、興信所の調査に依れば落合は此一月の初頃には自動車を驅り築地牛込等の待合を遊び回り、甚しきは牛込の妓數名を引連れ佐藤等と共に箱根の溫泉に行きなどして全盛を極めてゐたとの事であり、又當時落合は何時でも懷中に百圓札數枚を持ち、一箇月千圓以上の暮しを爲す如く見受けられたとの事であつた、一月廿六日先生は醫師の言に依り大磯に轉地してゐた、二月十一日佐藤、牧田の兩人外に增屋の債權者の一人桑野と云ふ增屋に好意を以つて吳れた人を伴ひて大磯の先生を訪ね、佐藤は幾度も頭を疊に附ける如くにし『增屋は大なる借金が出來ました其額は全部にして四萬七千圓であります』と云つた、先生は初めて落合から欺かれてゐた事を知り、餘りの事に呆然としてゐた、傍に居た桑野は咆哮するが如く『增屋の店の如く橫着なる店員が揃ふてゐては立行く筈はな

い、落合の如きは噓言を吐く事巧みで余は幾度欺かれたか知れぬ、最早欺かれまじと思つてゐても餘りに僞りが巧みなので逢ひさへすれば必ず欺かれた、彼の如きには逢はぬが安全だ、それに增屋の幹部は自動車に乘り藝者を買ひ驚く可き贅澤で又放蕩である、增屋の債務も其眞相は如何なる種類のものか判らぬ、之は拂ふ責任のないものが多い』といつた、牧田辯護士は之を聞咎めて荐りに落合の爲めに辯護してゐた、之は友情からでまさか同じ穴の貉なる故ではあるまい、先生は佐藤に向ひ『四萬七千圓と云ふは間違の無き數なりや』と繰返して問ふた、彼は全く間違なしと確答して後辭去した、二月二十二日には佐藤、牧田、落合の三人が大磯に來た、此際は先生の親展書を見たる落合が單身來るべき筈なりしに、彼は牧田、佐藤の兩人に衛られて來たので先生は其不都合を詰つたが、彼は辭令巧みに兎や角と言ひ脱けてゐた、此日佐藤は十一日の會見にて『增屋の借金四萬七千圓と申しましたが五萬一千圓の間違でありました』と告げた、今迄多少の疑ひの生ずるを禁ぜられなかつた先生は玆に至つて此人達の信頼すべからざるを知り其座に嚴然として『今後增屋に對する一切の配慮を謝絶する』といつた。

增屋閉店と整理

二月二十三日の頃と覺ゆ余は大磯の先生より招かれて行きけるに、先生は實にも悲痛なる面持にて

増屋の閉店の理由を告げ、植松龜次郎氏(萬朝報販賣部長)と共に増屋の整理を托すと言はれ、余は當時在學中でもあり、且つは不肖其任にあらざるを思ひて幾度か辭退したが强つてとの事に遂に植松氏の驥尾に附して増屋閉店整理の爲に働く事となつた、則ち先生より増屋に關する一切の事を擧げて委任すとの委任狀を受け、増屋に來り落合より金庫の鍵及傳票帳簿等必要なる一切の物を受取つた、之より余は増屋本店に起臥し本店及支店の營業を中止し、正直なる集金人と帳簿方會計等數名の外店員を解傭し簿記の委しき者二名を雇入れ、帳簿の檢査を爲し傍ら賣掛代金の取立、不正者の取調べ等に着手し、植松氏は專ら債務の支拂に關し債權者との折衝の任に當つてゐた、取調べの結果支配人の責任として使途を明かにせざるべからずして然かも明かならざるもの八千餘圓、其他夥しき金額を遊蕩其他に費消してゐた、高利貸よりは店主の知らざる金數萬圓、其日步は二十錢より一圓五十錢位のもあり、又高利貸の債權の中には實に怪しき債權ありて見返り擔保の生きたるらしきものや、支配人が濫發した約手、小切手の中には債權者と複雜した關係なのがあり、當時取引銀行の一なりし中央商業銀行の淺草支店長某なども高い利子の金を入れてゐた、佐藤などに至つては店より給料を取らぬといふ程の親切な人でありながら一方には何千圓といふ金を店に貸附け、高步の利子を引き上げてゐた、幹部の人達の種々の行動を多くの店員共の目には兎も角も不眞面目に見えたに相違なく、一度終熄してゐた

店員の不正の火の手は玆に再燃し、終には又米を拔取り掛金を胡魔化し殆んど收拾する事の出來ぬ程の亂脈となつた、實に北紺屋署及警視廳刑事をして『増屋は泥棒の巣也』と歎ぜしめたのも無理からぬ事であつた、余が整理の爲め單身増屋に入込だ時店には不正の疑ありと言はるゝ數十名の店員がゐた、先生の夫人などに此物騷なる環境を見て毒を盛らるるなと余の爲めに心配して呉れ、余は食事を外で取り夜は匕首を懷にして寢た事であつた、それでも警察署に呼はれた不正者の多くは田舍出の質朴な無智な者で『私等は眞面目に働いて居ましたが上の人達が勝手な事計りするので馬鹿らしくなつたからやりました』といふのであつた、落合、佐藤に至つては記帳洩れもあり餘り亂雜になり過ぎ說明が出來ず、互に責任の轉嫁を始めたが、落合は幾分某の口車に乘せられた形跡もあり簿記の觀念もなく商賣の經驗もない人なので、支配人でありながら充分に萬事が呑込めて居ず、若し佐藤に突つ放さるれば全然譯が判らなくなるので佐藤から屢々『之は何の事だ支配人たる君が知つてゐる筈だ』と突込まれそれでも反抗的の態度にもえ出です、常に困惑の色に默々として居たのには氣の毒な感も起つた、余等は辯護士添田增男氏立會の上彼等に帳簿の說明を迫り、愈々最後の手段を採らんとしたが此際も彼等は說明が出來ず、遂に彼等兩人を背任罪として告訴したのであつた、彼等は屢々檢事局に呼ばれて取調べを受けてゐた、一方先生は大磯に在つて増屋の事を氣遣ひつゝ、體の快復を急いでゐられたが、余は

一日先生が麻布箪町の邸を賣却し、増屋の支拂に當つると聞き驚きて大磯に行き『店は日出雄氏の店なれば其負債に先生に責任なし、又御長子の爲め辨濟を爲さるゝとするも檢事局に起訴しある支配人等の罪跡も明かとなり、金貸との關係等も明瞭となりたる上にて之を爲すも遲くなければ本邸を賣る事は見合はされたし』と願ひ、先生も之を快諾せられたが、一日債權者等大磯に押懸け先生を病床に訪ねたる節、先生は『日出雄の借金はとりもなほさず我借金也』と明言したとかにて債權者は皆欣び勇みて引上げたとの事であつた、間もなく先生は言質を重んじ箪町の本邸を賣拂ひ、之を増屋の支拂に當てられた、身は病に臥し屋敷は賣拂ひ、増屋は閉ぢ此時の先生の懊惱煩悶は恐らく先生の生涯中第一のものであつたらうと察せられた、増屋の事業は失敗に歸し、整理愈々完了したるの日先生は『私は元の杢阿彌となつたが、然し光風霽月の感がする、今日より二度出發して子供達の爲めにも働いてやらなければならぬ』と言はれ非常に緊張して居られた、一方落合、佐藤の兩人は牧田辯護士を伴ひ先生を訪ね、從來の行爲を陳謝し叩頭平身一札を入れたので、先生は今更彼等を罪に落すも詮ない事であり、持ち前の同情心も伴ひて遂に告訴を取下げた事であつた。

以上即ち當時多くの人の耳目を聳てしめた増屋破綻の梗概を述べたものである。

愛世の人、力の人

大竹斗牛

私は餘り先生に昵近してはゐなかつた。只だ社員として、折り〳〵新聞に關するお話を承はる位のものであつた。若しも親しみをもつやうなことがあつたとすれば、先年帝大の山上御殿で高田竹山氏の文字に關する發表があつたとき、私はお供をして同じ自動車の中で漢字についての御意見を伺つたことか、正月先生の邸で門下の人と、屠蘇に醉ひ過ぎて困つたこと位のものであらう。

だから。先生の內面生活は餘り知つてゐないが、幼少の頃から私は萬朝報の愛讀者であり、また先生の著書を耽讀し、のちには進んで社員となつて今日に及んでゐるので、思想上を透してはこれでも、いつぱし先生を知つてゐると信じまた親しみをも持つてゐる。

私のみる先生は『愛世の人』『力の人』であつた。

これまでにも物故した人で操觚界の偉傑だと仰がるゝものは可成り多かつたが、先生の如く多方面に行き亘つてはゐなかつた。而かもその行き亘りかたは深刻であり、かつその內面には愛世の熱情と人間性の力が漲つてゐた。

先生はすべて『惡』を憎むことが甚しかつた。例へば黨利のほかに眼中何者もないといふ政友會の如きに對しては機會のある毎に痛撃を加へ、覺醒を促がし、またタマニーの流れをくむといはるゝ東京市政紊亂時代に於いても、先生は口に筆に、或は攻撃をなし或は肅正の道を訓へて遂にさる一派の者共を逼塞せしむるに至つた。斯くの如く政治問題ばかりでなく、先生の所說は社會萬般の事象に行き亘つて而かもその論旨は一歩先進的の獨自の創見であつた。

先生はまた青年を愛された。さる人が或る時先生に向つて、『君の新聞は不偏不黨を標榜してゐるが、一體なにが味方なのだ』と訊かれたら、先生は直ちに『それは青年だ』と答へたさうだが、今日なほ萬朝報といひ、先生の著書といひ、多くの青年の間に愛讀さるゝ所以のものがこの一語によつて了解されることゝ思ふ。

倘ほ社員として萬朝報社長たりし先生を觀るには先生の執筆された『萬朝報記者心得』なる一小冊子がある。この內容は社內に止まる性質のもの故、書きたてるには憚りあるが『わが社は記者各位に對して期待する所を明にす』とのはしがきを以て、十ヶ條に區分した新聞紙作製上の注意は、實に先生が數十年間、新聞記者としてまた新聞經營者として體現し來つた不撓不變の精神を文字に現はしたものであつて、そこに先生の非凡なる創意と力とを發見せずにはゐられない。

いま私は先生追憶の稿を綴るにあたつてこの一小冊子を筐底より引出し一讀して、先生に對する追慕の念のます〳〵深さを覺えた。

其時分の先生

細井藤兵衞

故涙香先生と私とは師弟の關係と申すよりか、より以上に深厚な意味に於ける情愛のうちにあつた、故に、私の少年時代に受けたるインプレツションとインフルーエンスに付いて御話致すならば、先生は、極めて、ストリクトの方であつた、又甚だストロングの人でもあつた、此の二方面に亘る先生のインプレツションは、今日尚私の腦裡深くから採り去る事の出來ぬ程にエングレーブされて居るのである。毎朝、未明に起きて洋館の二階バルコニーで、體操をされて居つた先生の肉體は堅い筋肉を丸石の樣にブクリ〳〵と高めて居られた、御自分も其れを何よりのプラウドとして日々の勤めと正しく連續されて居つた。十七貫何百匁と云ふ秤目は毎朝ダン〳〵と昇つて行く數を私の目に見せて下さつた、此のスケールメーヂヤーは、今尚私の忘れられない故人のストリクトの性格の一ッである。次にストロングの例證を申上げるならば先生は確かに、故ルーヅベルトの如き負けず嫌ひの人であつた、何

んでも勝たねば承知の出來ないと云ふ故人の性質は、其頭腦に其の手腕に其の力に於いてもよく柴を置いて傑出して居つた。日本の新聞記者を月旦するならば、善にも惡にも『黒岩周六』と云ふ名と『萬朝報』と云ふ名稱とは相表裏して、新聞記者中の記者であるの辭を以つて賞せらるゝことであるだらう。試みに故ノースクリツプに比較して批評して見るならば、ノ氏の新聞記者としての獨特は、プロパガンダであつた、斯の世界大戰當時に英國の閣員に加へられて度々カイザルの逃走やら病死を作つて世界に獨逸不信の報を宣傳した力は、實に彼れならでは出來ざる處の大手腕であつて、其れが即ちノ氏の新聞記者としてのヂーニアスであり亦キヤラクターでもあつた、而し黒岩先生は、異つて居つた方面の特長を發揮した人である、即ち先生は筆の人である上に力の人であつた、さればよく先生の筆と力は最後迄戰ふ、而も戰ふて勝たざれば止まぬと云ふウヰルパーワーの强い人であつたからして『黒岩に一度睨められたならば倒死を覺悟せねばならない』と云ふ迄に社會の批判を受けたのである。此の意味に於いても『黒岩は新聞記者』であると自ら大語して憚からなかつた樣子が明かに證されるのである。

書生部屋に居た私の見た先生は常に怖い顏を食膳に現はす丈けの外は多くの場合、書齋に入つて堅く戶を閉ざして勉學に執筆に或は思惑に沈んで居つた。時には朝十時頃から、萬朝報社に出かけられ

るので玄關に送り出た、家族、書生に對しては別に愛嬌は無かつた。理想團演說會からの歸宅は隨分遲かつた、十一時から十二時或る時は一時近くになつて居るらしいが、其時玄關に出向ふた奥さんの聲は寢耳に入つたが、先生の聲は耳に入らなかつた。日曜日には慶大の先生でシヤタツクとか云ふ人が會話の敎授に洋館の玄關に車の音をたてた。此の人を洋館の書齋に通して置かせて自分はゆつくり後から入つて行つたが別に英語でお話をして居つた事を聞く事はなかつた。面會者には十中八迄は玄關拂ひで、居ても居らぬとか只今は忙かしいからと等で訪問者を失望させるのであつたが、故圓城寺淸君、故佐治實然君等には必らず面會して長談したものだ。

先生が五十九歲の一生涯を通じて私に殘された記憶は先づ右樣な例證であるが、其れを一言にして評せば先生は何處迄も土佐人であつた、土佐人の性質は土佐犬によつて代表されて居るが、其の强く突擊的な男らしい氣分は、即ち故黑岩涙香先生の最も秀でたヂーニアスであつたのであらう。

逸話

一會員

只一事を解せず　黑岩君、吾輩と共に山縣公を五番町の邸に訪ふ、公諄々として物價の調節を說き

國際的孤立の狀況を論じ、此の如くんば日本丸は太平洋の眞中に沈沒せんと語る、黒岩君卒然一語を發して曰く閣下實に能く時勢を知る、只閣下の知らざる一事あり、邦は論理的必然の結果として現内閣を倒すべき事を知らざることと是れなりと。

好まざるなり　黒岩君二三の新聞記者と共に寺内首相に會す、首相口を開いて曰く世上余を以て新聞嫌ひと爲すも余は敢て新聞嫌ひに非ずと、黒岩君曰く新聞嫌ひに非るべし、新聞を好まれざるならん、首相顧みて苦笑す。

盜せざるもの一人　黒岩君の白米店を開く其志實に政治運動の資源を得んとするに在り、一夕吾輩に語つて曰く君乞ふ今後金錢に心を勞する莫れ、君の要する所吾れ悉く之を辨ぜんと、吾輩其故を問ふ、黒岩君曰く世上米ほど多く賣るゝものなし、我近日米屋を開業せんとす、良品を廉賣するは社會の幸福にして亦致富の秘訣也と、既にして業を開くや使傭者其人を得ずして損失相繼ぐ、山田藤吉郎君嘆じて曰く泥坊ならざるもの店主黒岩君一人のみと、麻布笄町の邸宅を賣却せるも米屋の損失に由る。

氣に入らざるは當然　黒岩君下澁谷に島津男爵の邸宅を購ひ居を轉せんとす、其前夜二三の友人と會飲す友人新邸の狀を問ふ、黒岩君曰く吾未だ一見せず他人の作りたる家屋意に適する筈なければなりと、諸友其豪快に服す。

不思議の客人　赤坂の花柳界に飄然として來り倏忽として去る不思議の客あり、而も千金を散じて吝色なく頗る豪奢を極む、席に侍する校書も何の人たるを知らず、之を仄聞せる細野天眞、小泉三申等種々苦心探究の結果、客の持する金煙管に『呑雲吐龍』の文字あるを探り得て『黒岩涙香』と推斷す、後數年黒岩君と細野君と相會するや、腰間の煙管を示して曰く是れ往年足下等の苦慮せるものなりと、細野君之を手に執れば果して『呑雲吐龍』の文字を刻せり。

博覽にして强記　黒岩君の敎坊に入るや必ず處狹きまでに校書を招く、某日の宴一妓質問して曰く『主は麻布で氣が知れぬ』とは何の意ぞと、衆客敢て答ふるものなし、黒岩君曰く往昔麻布と稱する地廣く赤羽、青山、目黒、目白皆麻布に屬せり、獨り黄を缺くが爲めのみと、客も妓も其博覽强記に驚く、此種の難問題何を問ふも凝滯せるを見ざりき。

當意卽妙の文字　黒岩君嘗て撞球に熱し懸賞大會に二百を突き切りて賞品の球竿を得、九六一八と刻せしむ、蓋しクロイハと讀むの意なり、見る人驚嘆して曰く九千六百十八を突切れるは、日本一の名人ならんと、黒岩君敢てイエスとノーを言はず。

逸話

龍澤愼作

黑岩先生の煙管道樂も有名なものだか、氣管支を害されてから斷然禁煙を實行された、その頃自庭を金橋園と名付けられたが、これは『禁喫煙』を響かした洒落であるさうだ、此種の洒落で思ひ出すのは、棋客朝田翁が淺草千束町で碁席を開いた時、先生に席名を依賴した處、先生は早速仙俗亭と命名された。蓋し仙俗亭は町名の千束町の語呂を洒落たものであつた。その後仙俗亭は馬道に移つたが、『仙俗忘憂』の四字の題字の額は今でも席に掲げられてある。

往年麻布笄町黑岩邸の前に紅白軒と云ふ小さい撞球場があつた。そこの主人の切なる依賴であまり揮毫を好まれぬ先生も筆をとるを餘儀なくされ

　若草に源氏平家の戰かも紅々白々綠盤の上

と認められたことがあつた、この撞球場は其後市見坂に移轉した。

先生は毎日外出されるときこんな歌を口吟されて忘れものなきかを注意された。

　忘るゝな時計紙入煙草入帽子ハンケチ目鏡杖傘

夏になると

　持て扇子時計紙入煙草入帽子ハンケチ目鏡杖傘

と改められるのであつた。

先生は灸ずきであつて旅鞄にはいつも艾と線香とは入つて居つた程であるが、一頃心臓を痛められた時、松下軍治氏の勧めで横濱の某灸點師を招き、その灸は最初廿一個（七ヶ所に三つ宛）翌日は四十二個（七ヶ所に六つ宛）と云ふやうに幾何級數に殖えて一週間目には一千三百四十四個（七ヶ所へ百九十二宛）と云ふ夥しい數の灸點をやられたが終りの日の如きは艾が盆に山をなし二時間餘も朦々とする煙の中に端然と正座して讀書せらるゝが常であつた。

先生は洋行中、倫敦のトラファルガル廣小路を過ぎたる時、有名なるネルソンの立銅像の下に巨大なる獅子の横たはれるを見、『トラ』と云ふのに『獅子』の居るのはこれ如何と思はず一休問答を發せられた、すると自動車に同乘する聽濤居士大谷誠夫君――聲に應じ『ネル』と云ふのに立つて居るが如しと答へたさうである。

先生は一ト頃帽子の中に『偵涙』と二字書かれてあつたので、書生等はしきりに辭典を見たが判らないので、とう〳〵伺ひに出た、そこで先生は『これは私が作つた字で黒岩周六と假名を合せたのだ』と

笑はれた事があつた。

逸　話

杉　英　一

涙香先生の精力家であつた事は誰も知つて居る事であるが、或る日の夕飯の時であつた、茶の間で家内一同食卓に向つた頃、丸善から一冊の洋書が届いた、先生は早速これを手にすると熱心に讀み耽けつてゐられた、聽てみんなは膳に向つて箸を執つて食べ始めたが、先生は傍目もせずにペーヂを繰つてをられた、皆が食事を終つてもまだ讀書に熱中されて居たが、始めて御飯である事に氣が着いたと見えて『子供等に先へ御飯を食べる様』と云ふて又も讀書に耽けつてをられたことがあつた、こんなことは先生には珍しいことではなかつた。

大隈侯に戯談を云ふた人は、涙香先生ばかりだらうと云はれて居る事がある、夫れは或る時、神田の靑年會館で演説會が開催された時である、大隈侯も先生も辯士控席に居られた時、折惡く花瓶が破れたので隈侯が心配して『どうかしてくつ付けたいものだが』と破片を手にして居た、其の時先生は諧謔的に『それを直すにはわしやが一番よろしい』と云はれた、すると大隈侯は眞面目になつて『わし

や」とはどんな物ですかと問はれた、先生は『わしや離りやせぬですよ』と云はれたら、大隈侯も始めて洒落と分つて、あの大きな口を更に大きくして、大笑をされたことがあつた。

京濱間に自轉車の流行始め（明治三十六年頃）先生の萬朝報社でも社員の多くが自轉車を使用し、折折遠乘會なぞが催された、先生も其頃評判の好いピアス號の而も競走車を買求め遠乘會の時なぞ何時も先頭を切つて大得意で居られた、其頃不忍池畔で度々自轉車競走會が催されたが、何時も先生は其審判長となつて之を激勵し、且つ夫子自ら大人レースへ加つた事さへある、先生或る時髀肉の嘆に堪へぬまゝ抱車夫と二人で日光遠乘を思立ち、往路は無事であつたが歸途路に迷つて、或る急坂の下りに差かゝり、お供の車夫は危險なれば下車せんと云ふを、先生『なに之しきに』と其儘下つたが、中途まで來て横に曲り行手を見れば、下りは愈よ急勾配となり其儘輪行を續ければ自轉車と心中する虞れがあるので、流石に強情な先生も我慢が仕切れず、と云つて車に機みがついて居るので下車もならず、進退谷つて早速の機轉、どうなるものかと把手を曲げて傍らの藪の中へ突入し僅かに危きを免れたが、それが爲め顏と云はず手足と云はず無數に擦過傷を負ひ、其時ばかりは強情我慢の先生も些か悄氣たさうである、而し其後も二年餘り之を使用し、輪界の鬼と呼ばれた曾我部一紅氏等と各所へ遠乘を試み大分珍談もあつたが、持病の心臟に宜くないとの醫者からの注意で遂に之を廢するに至つた。

逸　話

小日向仙之助

膝を崩した事がない

先生は常に坐するに膝を崩したことが全く無かつた、家人の前でも、書齋に在つても、圍碁や聯珠に夜を更す時でも、何時もキチンと正坐して儼然冒すことの出來ない態度で居られた、されば何人も一度び先生の前へ出れば、自ら襟を正さゞるを得なかつた。

嚴寒に氷を浴びる

先生は若い頃から冬になると毎朝水浴を爲すを例として居られた、如何に寒い朝でも只の一度もこを缺したことが無く、而も汲立の水が嫌で何時も前の晩に水を汲ませて置き、翌朝氷が張つて手の切れさうなのを浴びるを最も快哉とせられた。

車上で地團駄を踏む

先生が其昔抱車夫を置て居た頃、もの、一月と續いて先生の俥を挽く者が無かつた、それは先生が乘車の折、若し他の俥に追拔かれでもした場合、負けず嫌ひの先生は車上に地團駄を踏み『ソレ負ける

な彼れを追越せ』と烈火の様に車夫に迫るので、車夫はヘト〳〵になり命懸けでなくては先生の俥は挽けぬと、扨こそ皆な御免を蒙る次第である、處が此話しが一時車夫仲間の評判となると、之を聞傳へて某と云ふ天下無敵の車夫が好んで先生の俥を挽き、其頃鬼と呼ばれた高木兼寛男の車夫と競爭し美事之に勝つたので、先生は大滿足、以來得々と此車夫の俥で市中を乘廻して居た、當時他の車夫が先生の俥と見れば怖毛を振つて路を避けたものである。

電話掛りが目を廻す

先生の飜譯小說が讀者を引附ける點に於ては異數であつたことは今更云ふまでもない、先生が萬朝報紙上へ某小說を書かれて居た頃、何かの故障で一日でも之が休載されると、讀者の落膽は非常なもので『なんで涙香の小說を載せぬか』との小言が八方から編輯局へ殺到し、電話掛などは其言譯けに目を廻す程であつた、どうして先生の小說が斯うまで評判が好かつたかと云ふに、言ふまでもなく先生獨特の筆致の然らしむる處であるが、もう一ツの原因は先生が其原書を選擇するに非常な努力を費やされた事である、先づ先生が一ツの飜譯小說を書かれるに當つては、好評ある西洋小說を幾十册か讀破し其中で之はと思ふものを選び、我國の人情風俗に合する樣譯出されるので、其苦心は創作以上であつたのである。

高山凹庵の由來

聯珠の名人となられた先生、其昔萬朝報紙上へ聯珠の先手必勝法を書かれて居た頃、如何に頭腦の好い先生でも時には見落しがあつて、讀者から後手勝を指摘され、大分凹まされた事があつたので、先生其頃珠號を『高山凹庵』と洒落て居られたが、後年横二聯の必勝法を完成し『聯珠眞理』を著述するに及んで『高山互樂』の號を選ばれた。

先生の銷夏法

先生は避暑と云ふ事が甚だ嫌ひであつた、暑ければ暑さと闘つて之を逐へ、暑を避けるなぞとは意氣地なしだ男らしく無いと常に云はれて居た、或る夏の事そよとの風も無い頗る蒸暑い晩であつたが、先生一度び臥戸に這入つたものゝ暑くて眠られぬ儘、同じ思ひで寢そびれて居る玄關子を伴ひ運動と出掛けた、其頃先生の住宅は京橋元數寄屋町に在つて、其所を出てから銀座を通り築地を廻つて永代橋に出で、深川仲町通りから八幡前を過ぎ洲崎方向を差して足に任せてテクリ行つた、玄關子思へらく、思ひ遣のある先生の事だから今宵こそ傾城買のお相伴にもやと、內心北叟笑んで居た處、何ぞ計らん先生は廓內へ這入つたものゝ只だ一巡したゞけで直ぐ歸途につき、土手の露店で飴湯を飲んだまゝ京橋の住宅へ取て返した、何しろ往復二里餘の路を殆んど驅足で行戻りをしたので、主從二人着て居た單

衣は絞るやうな大汗、疲れ切つて寢床へ這入るや其儘グッスリ死んだ樣に眠つた、翌朝先生は玄關子に向ひ『どうだ暑さを忘れて好く眠れたらう、之が乃公の銷夏法だ』と笑はれた。

壯士に尾行される

先生が矢張り京橋元數寄屋町に住はれて居たころ、程近い數寄屋橋外に鞍馬亭と云ふ玉突場があつて、先生其頃玉突の覺え初めで毎夜の樣に鞍馬亭へ通つて居た、處が其當時萬朝報紙上に野澤屋騷動の記事が滿載され、其影響で先生の家へは脅迫狀が舞込む、仕込杖を携へた壯士が先生を附廻すと云ふ騷ぎ、家人が心配して夜間の外出を止めると、先生大笑して『金で使はれて居る壯士輩に何事が仕出かせるものか』と少しも意に介せず、平氣で玉突場通ひを續け、夜更けて歸ることも度々あつたが、壯士は只だ後を尾けるのみで遂に何事も無かつた。

一藝に秀でた人を愛す

先生は一藝に秀でたものを特に愛されて力の及ぶだけ其人を庇護された、圍碁の方では早くから高橋清致氏、高橋秀朗氏兄弟の手腕凡ならぬを愛して、自ら斡旋して本因坊、方圓社の兩門から免狀を受けさせ、又た横紙破りの野澤竹朝氏に師事して氏の怪氣焔を倦かずに傾聽された、玉突では其昔の名手たるボーイ幸太に目を懸け、角力では大戸平（先代から）と荒岩を特別に贔屓にされ、發明家として

の磐井彦太郎氏や刀根福太郎氏には陰になり陽になり種々の援助を與へられた、先年かるた界の名物男某が職を失ふや、先生直ちに資金を與へて飯屋の店を開かせた時など、某は泣て先生の徳に感じた。

定紋付の長持ぐるみ

力士荒岩の全盛時代、先生の角力熱も頂上であられた頃、荒岩が女房を迎へることゝなつて、彼れは先生の邸を訪づれ『女房は來るが寢具が無いので大弱りです』と話し込んだ、先生皆まで聞かず、直ちに納戸にあつた縮緬仕立の夜具一揃を、橋の定紋の付いた長持ぐるみ彼れに與へ、時を移さず使に持たせて彼れの家へ屆けさせた、而も此の寢具は夫人が京都まで染めに遣つて丹精を凝らしたもの、おまけに其前日漸く出來上つたばかり、此日外出して居た夫人は歸邸して此事を聞き、開いた口が塞がらなかつたさうである。

黑長の艶聞

謹嚴な先生にも一寸艶つぽい話がある、先生が或る時兩國の角力場歸りに、五六人の贔屓力士を連れて柳橋の旗亭へ上つた折、席に侍べつた藝者の中で柳橋切つての姐へ株長吉と云ふのが、新調の象牙の撥を持出し、先生の筆で名前を書いてくれと乞ふた、先生直ちに筆をとつて、此長吉が色の黑いのが評判なので、其撥尻へ『黑長』と墨痕鮮かに書いて遣つた、處が之が間違を起した素で、黑岩先生

は長吉と曰くがある、それで黒岩の黒と長吉の長とを撥尻へ書いたものだと、其頃柳橋の評判となり、先生飛んだ浮名儲けをして苦笑された。

蓄音器と首引

酒を嗜まぬ先生は宴席なぞで座談に花を咲す事は巧まかつたが、歌なぞを唄つたことは曾て無かつた、然るに先年或る席で興に乘じて珍しくも追分節を唄ひ、それが又玄人跣足の出來榮えであつたので先生は何時誰に習つたものだらうと大分怪しむ人もあつた、處が之は一時先生が非常に追分節に興味を持たれ、歌の文句や本場の節を研究の爲め、其道の名人か吹込んだレコードと云ふレコードを集め蓄音器と首ッ引をした事がある、其折何時となく名人の節廻しを會得したもので、それが興に乘じて口に出たものである。

猫の毒ではない

先生は非常な犬好きであつたので、病症不明で大學病院へ入院の際、入澤博士は若しや先生の病氣が犬病の感染したものではないかとの疑ひを起し、其病因に就て大分研究を重ねたが、結局それではない事が分つた、其折赤坂邊りの花柳界の某女將が見舞に來て『先生の御病氣は犬から來たらしいさうですね』と云へば、病床に横たつた先生微笑を浮べて『何さ猫の毒からでなくて幸ひさ』と輕く答

へて居合す人々を笑はせた。

追懐

湯朝観明

（一）

聾盲、象を撫でて、その實體を知らず、笑ふべきは聾盲である。虎皮を纏ひ、猛威恐るべきに似たれど、一たび皮を脱げは、猫であつたこともまた滑稽とせねばならぬ。

『人は人として人の間に在り、人を知らざらんと欲するも能はざるなり、然れども眞に人を知るとは聖人と雖も難しとす』とは、故黒岩先生が、往年余の處女作『人間論』にあたへられたる序文冒頭の一節である。味ふべき語である。人はいふ、歴史は信ずべく、また信ずべからずと、然れども誤りあるのゆゑをもつて、歴史の價値を放棄すること能はず。想へ、人は自個をだにも正確に記録表現すること絶對不可能なることを。いはんや自個以外の人をや。

今の世は、人に秘密をゆるさず。象は象のままに見られ、猫は猫のまゝに見らる。その間、多少の見あやまりあらんとも、大體の見當にあやまりなくんば、まづこれを正體として是認するのほかな

し。

怪傑ナポレオンの眞實は、いくたの傳記學者が、いかに努力せんも、その全きを期しがたく、傘翁傳一冊、彼れを髣髴せしめたるものあらばもつて足れりとせん。これ事實をあやまりたるものありとも、なほ歴史の棄つべからざる所以、やがてまた多數の人の見當に、大なるあやまりなきを知るゆゑんである。

（二）

黒岩先生は、時人より『偉人』と評せられたり。この評は、多くの人が先生を評價したる總〆高であつた。この計算は、大體的に誤りなき評價であつたと信ずる。

まして、先生は、實社會の表面に活動し、或は文章により、或は言論により、なほも、その一擧手も一投手も、これを秘密にすること能はぬ世間公開場裏に、自個を丸出しに終始一貫した人である。その上での世評に、萬一にもあやまりありたらんには、時人は恰も聾盲に比せらるべきではないか。

（三）

試みに、黒岩先生が、多くの人と異りたる點は、なにかと問ふ人あらんには、余は先づ第一に『決斷』をあげんと欲す。先生は、たとひいかなる重大問題に逢著するとも、即座に速斷し速決したり、

面も寸毫だも善悪の甄別をあやまらなかつたことである。第二に『潔癖』の人であつた。その結果、いささかたりとも虚僞をゆるさずあいまいをゆるさず無責任をゆるさず。そのため他人よりかへつて誤解をうけたほどの潔癖家であつた。第三は『綿密』であつた。先生自身が綿密好みであつたゆゑ、他人の綿密なることをよろこぶ人であつた。第四は『眼識』の高いことであつた。人を見るの眼ははなはだするどく、適材を適所に用ゐ、一藝一能に長ずるの天才をして、自由にその材能を驅使せしめることを樂み、從つて人材を愛すること自個を愛するが如き人であつた。第五は『同情』の念の厚いことであつた。強きものを好み、弱きものをあはれむことが先生の病ひであつた。世人は先生の強きを好むの一面を知つて、いまだ強きをくぢき、弱きを助け來たつた美點を知らなかつた。

（四）

黒岩先生の全生涯を通じ、特に目立つたことはなんであつたか、いふまでもなく『讀書』であつた。先生の讀書は多く英書であり、さわがしい茶の間で食事を忘れて大冊の洋書を速讀することは日常めづらしいことではなかつた。あれほどの難病に襲はれ、明日は大學病院へ入院するといふその前日も、先生は病床に仰臥し、みづから病ひを知らぬものの如くに洋書を讀みふけつてゐた。先生の手から離れた最後の洋書が、いかなる書であつたか、余はその折に、書名を問ふておかなかつたことを今

にのこりをしくおもつてゐるほどである。

因果の理法は、三世を通じての鐵則である。國家の興亡も、人物の大成するも生きながら葬らるるも、いづれかこの鐵則にそむかんや。我が先生は、實に全く、みづから學び、みづから勉め、みづから鍛へあげた人である。平常みづからきたへにきたへあげんと刻苦した、その間の消息を、世の誰がうかがひ知つてゐたらうか。

ひとしく人として人に高下のあるは、天稟によるべし、修養によるべし。我が黑岩先生が、すぐれた人として尊敬を拂はるるに至りしは、決して偶然にあらず、僥倖にあらざりしことを世人は深くおもんぱからねばならぬ。この一事、殊に世の青年諸子の箴戒であらねばならぬ。

（五）

余は思ふ、物質に囚はれ、物質的生活に終りたるものを凡人といひ。物質を超越し、精神的ライフの體驗者を人格者といふべしと。

おのれの名利のため、子孫のためのみに活けるともがらは凡人であらねばならぬ。自個の利害をかへりみず、世間の毀譽をかへりみず、社會の利益のため、民人の幸福のために努力貢献せんとしたる人は、これを人格者といはねばならぬ。

またさらに、正義の味方となり、人道の保護者となり、かりそめにもこれらの敵を見たらん時は、奮然として敢て、戰ふことを辭せず、闘ふてこれを亡ぼし、みづから人道正義の忠僕をもつて任ずるの信念と意氣とを有するの人をこそ、眞個大乘的人格者とはいふべけれ。

黒岩先生の生活と活動との跡を顧みて、余は我が先生が、我が國に於ける、まさしく大乘的人格者の一人であつたことを信ぜずにはゐられない。誠や、世人が先生を『偉人』と評價したるは、あやまりのなき見當であつたと信ずるのである。

蓋し、先生も人であつた。人に完全無缺の人なし、完全無缺ならざるがゆゑに人なり。人に修養、精進、信仰の必要なる所以は、すなはちこれがためである。ここに於て知るべし、おほよそ人は、その一生の功過を總計し、而して功の大なる人を、すぐれたる人として評定すべきものなることを。

余は記念のため、拙著『百字文百人評』（明治三十八年五月如山堂發行）の巻頭に掲載した次の一文を添へて餘白を拜借したい。

黒岩涙香（新聞記者）

烱たる眼隆たる鼻締たる口常相を超ゆ愼獨し

冥想し威厳あり温和あり陰徳を爲し同情を垂る時に寛豁時に活奮任を重んじ約を守り人格他を化さんとす趣味深弘精力絶倫競技を好み菓子を好む先生涙に滿ち筆は香る常人に非ず

祖先親戚及び少年時代

前田耕作

黑岩越前守事蹟

時は永祿の末、元龜の初である、織田信長の天下で將軍足利義榮が死んで信長が義昭を奉じて入京し、一方では葡萄牙人を召して南蠻寺を建立するといふ有様である、中國では大內、尼子、毛利が互に鎬を削つて居る、葡萄牙船が長崎へ初めて來たのも此時である、今から三百五十年の昔だ、土佐には七人の守護職と云ふのがあつて割據して居た、津野、長曾我部、大平、吉良、山田、本山、安藝の七氏がこれである、其最も西の方を幡多と云ひ一條氏が居た、之は公卿一條敎房卿が難を避けて莊園幡多中村に逃れ、後に土佐國司に任ぜられて中村御殿を築造して住つた、然し實力は矢張り、守護職

の方にあつたと見える、稍や中央長岡岡豊に城を搆へて居たのが例の長曾我部元親である、史上には彼は秦元親で通つて居る、東端の守護職が安藝の城主安藝國虎だ、之れが當時の大勢である。

所が此の元親は遂には四國全體を平定して秀吉と喧嘩をしやうと云ふ人物だから次第に勢力を得て東西の諸城を陷れたのである、國虎は此儘じつとして居たならば元親に兵を向けらるゝに決つて居るから、寧ろ此方より進擊して彼の居城を衝くに如かずと云ふので、永祿十二年軍勢を發して物部川に向ひ、此川を挾んで決戰しやうとした、此時の兵數三千騎と云はれて居るが少々大袈裟の樣である、斯くて行程八里にして物部川畔に至つたが敵の隻影をも認めなかつた、一氣に岡豊城に押寄せた、元親は初め國虎の出陣を聞知するや二千餘騎を五隊に分ち五百餘騎を吉良親貞に附して八幡山に陣せしめ、江村小備後を三百騎と共に小籠の叢林に伏せ、更に二百騎を久禮田彥右衞門に從はせて大津、蒲原の間に置き、又た桑原彌次郎兵衞を比江山に陣せしめた、國虎が岡豊城を取圍むと城內の信號を合圖に、四方の伏兵一時に起つて更に彼等を取り卷き城內の兵と呼應して挾擊を加へた、既に八里の行程を踏み來れる國虎の兵は疲勞と土地不案內の爲めに戰ひ不利に陷り遂に退却歸城するに至つた、斯うなつては元親の方で默つては居ない、彼は初めから國虎を目の上の瘤と思ふて居たのであるから、愈よ兵を整へ軍を練つて同年七月十六日安藝城攻擊の爲め出陣した、此時元親の兵數は二千騎と云はれ

て居る、國虎には二人の股肱がある、一人を有澤石見守と云ひ、今一人を黒岩越前守と云ふ、共に純忠至誠の人物である、國虎は元親出陣の報を聞いて彼等と軍議を凝し、安藝城は要害堅固なれば多數の守備兵は要すまいと云ふので、黒岩越前に少數の兵を托して守らしめ、國虎自身は三千騎を率ゐて八流の險に據つて守る事とした、此の三千騎も不確だ、八流は北は直に山を負ひ南は海に面して二十餘丈の絶壁を爲して居るから、此處を確かり守つてさへ居れば元親が縱令三萬の兵を以て來るとも喰止むる事が十分出來ると信じた、そして其所に大木、巨石を多數貯へて敵を撃殺しやうと謀つた。

一體兵力に於て元親の軍が優つて居るのは勿論である、彼は既に殆んど土佐全體を從へて今は此の國虎のみ殘つて居るのだから、此戰ひで元親が土佐全體を統一する事が出來るか否かが決るのである、國虎の方は兵力は少く且つ孤立無援である、唯だ越前、石見等の赤誠に賴む外はない、此戰の非常な苦戰たるを知つて居る、彼のみならず何れも此戰を危ふんだ、此時國虎の部下に小谷、仙頭、横山と云ふ三士が居て最も此戰を恐れて居た、彼等は到底元親に抗し難きを知つて密かに夜陰に乘じ元親の軍に降り一身の安全を乞ふた、誠に地の利も人の和に如かずである、元親は彼を厚く遇して戰終つた後には十分賞與すべきを盟つた、そこで小谷等は國虎の軍略を悉く元親に告げ、八流に向つて進むのは危險なるを說き、兵を分つて一隊は路を山路に執り、妙見山の後を迂回して井の口を經て江川山に出

で、背後より直ちに國虎の居城を衝く策を献じた、元親も其策の得たるを賞して彼等を先導として此擧に出でた、一方國虎は八流の要害を扼して今か今かと待つたが一向に敵前進の氣配がない、夕方頃になつて遙かの後方に激しい人馬の聲を聞き振り返つた時は既に遲い、敵は意外にも山路を越えて江川山に出で背後より盛んに本城を衝いて居る、斯てはとひるむ所へ元親の大部隊が一擧に八流を衝いた、既に士氣喪失の場合遂に八流の要害も破れた、之を世に『八流崩れ』と云つて居る、一方本城守備の越前は手兵二百を以て死守して居た、國虎の歸陣に力を得て惡戰數日を支へたが、既に矢を盡し糧食を失ひ如何ともする事が出來なかつた、國虎は最早逃る可らざるを思つた、否逃れて却つて耻多きを悟り、菩提寺淨貞寺(本城より約二十丁西南妙見山の麓に在り)に赴き割腹して果した、部下の多くは戰死し城內の女性は悉く裏手の淵に投じた、此淵を女郎ヶ淵と云つて今も殘つて居る、茲に於て越前は有澤石見と議し、石見に落城の善後を委ね自らは亡主の妻子を里方なる前記一條家に送る事とした、斯て越前は單身元親の軍に至り落城の由を告げて亡主の妻子を里方に送らん事を乞ひ、海路幡多に向つた、石見は落城後の跡始末を全ふし淨貞寺に赴き國虎の後を追つた、越前は安全に國虎の妻子を送り屆けて歸路鏡野に於て元親の凱旋に遇ふた、此時元親は越前を召して采祿を勸めた、越前は『個命辱なし是より陪從して奉事すべけれども、使命を備後守の靈前に報じ、併せて、七日の法要をも

修して然る後にすべし』と述べた、元親は『神妙の志感ずるに堪へたり、急ぎ歸りて心靜に弔ひ畢りて後來れ』と云ふ、越前諾して歸途に就いた、此時に吉田大備後重俊と云ふ者後陣に在つて、越前を一見して涙を流して曰く『彼は余が類族にして親しく交遊したが近年疎遠になつて居る、彼の心中は能く分つて居る、彼は餓死するとも再び來つて二君に仕へる人物でない、今にして彼を訪はざれば人情に非ず』と云ふので、家臣横田三郎右衞門をして雜餉を贈らしめた、越前は喜んで之を受け亡主の法要を修し、三郎右衞門を招き『親戚の因を忘れず此贈物あるは實に辱けない事である、汝歸りて主人に傳へよ、速に走せ參じて之を謝し其君に仕へて忠誠を盡し度いのであるけれども、岡豊には幾多の勇士が元親殿を守護して居る、備後守(安藝備後守國虎)は石見唯一人を隨へて冥途に赴かれ極めて心細く萬事不自由なる事とお察し致す、自分は急いで其後を追はねばならぬ』と云ひて三郎右衞門に介錯を乞ひ『此の上の芳志には若し妻子の在所が知れたなら宜敷御賴み申す』とて、三郎右衞門を伴ひ淨貞寺に至り切腹した、時に永祿十二年八月十八日である、石見は法諡を植岩芳櫻と呼び、越前は碧叟久岩と云ふ、共に淨貞寺境内に備後守の墓を擁して今尙ほ千古の忠節を旌して居る、之に引替へ彼の小谷、仙頭、横山の三人は戰終つて元親の前に召された、彼等は多くの恩賞に預らんとてホクホクもので元親の前に出でた、所が元親は『汝等は主君を售る不屆至極の者である、後來の戒の爲めに手討

に致す』と云ひ、其儘其處で殺されて仕舞つたと云ふ、斯くて元親は遂に四國を席巻したが、流石に秀吉には抗し難く彼に下つて土佐守に任ぜられ、慶長の初め關ヶ原の一敗に失脚するまで廿數年勢威を張つた、其後土佐は山内氏の領する所と爲つた、國虎が死する時植ゑたと云ふ袖杉と云ふのが殘つて居た、幹の廻り一丈八尺もあらうかと見ゆる大古木である、けれども之は大正三年頃の大嵐の爲めに倒れたので今日では其代りが出來て居る、安藝近傍の子供が歴史と云ふものを知るに、先づ最初が國虎、越前等の此の事蹟である、彼等は或は父兄に連れられ、或は小學校に於て教師に率ゐられ實地に就いて初めて歴史の觀念を授けられ、其れより楠公、武内宿禰等の話を會得するに至るのである。

黒岩家の親戚

義祖黒岩越前守から十代の孫黒岩玄治(文化十二年歿)は土佐國安藝郡川北村松田嶋に醫を業とし同人には省輔、源助、尙謙の三男があつた。

長子省輔は十一代の黒岩家を繼承し、やはり醫を業とした、その嫡孫永馬(後ち德明)は洋醫を修め赤十字社病院外科主幹を勤め傍ら看護婦の教養に盡し、日露戰役の功により勳六等に叙せられたが、大正九年春易簀した、德明の未亡人小都留は土佐の志士故馬場辰猪の妹である。

三子尙謙は徒士格であつた、息慶助は早くより脚氣治療に意を注ぎ、當時江戸淺田宗伯師の門に入

り、業成りて靜山と號し、宗伯門下の第一人者となつた。
當時宗伯師は東宮の侍醫であつたので、靜山もしば〳〵御側近く奉伺した、靜山は資性剛直子弟を教ふるに嚴であつた、靜山の弟保治は西南役で戰死した。
次子源助は郷士であつた、源助長男市郎(明治八年十一月十日歿、先生の嚴君)は當時自ら調練の隊長となり、兵馬の術を授け、郷黨を集め、村塾を開きて子弟の敎養につとめた、資性端正にして殊に數理の造詣に深く、郷黨に知られて居つた、晩年郷を辭し上京して大藏省へ出仕した。
市郎には四方之進、周六、爲子、雅子の二男二女があつた。
妻信子(明治卅一年四月十三日歿)は別家靜山の妹で賢婦人を以て聞えた、これ實に先生の母堂である。
長女爲子は藩主山内容堂侯の典醫秦吞舟に嫁した、吞舟は東京に來り一時銀座に開業、後ち病の爲め房州へ引籠り、基督敎の爲めに盡し村人に仁術を施し、崇敬されたが先年永眠した、爲子は七十餘年の高齢を以て餘生を信仰的生活で送つてゐる。
次女雅子(夭折) 嫡男四方之進(先生の令兄)は札幌農科大學第一期に卒業し、内村鑑三、佐藤昌介氏等とは同窓の親友である、久しく日高國新冠御料牧場々長を勤めたが、後ち職を辭して十勝國の一

部約二千町歩の地を相して自ら經營の農牧場に十年一日の如く努めてゐる。

市郎の弟剛助(後ち直方)別家藤之進の養嗣子となり、司直の府にあつて名判官の名を恣にしたが、後ち山階宮別當を勤め、晩年を終つた、先生幼少の頃の養家である。

先生の少年時代

長曾我部元親の時代に一領具足と云ふものがあつた、半兵半農の民であつて、今日の屯田兵とでも見るべきものである、之は皆當時元親の爲めに亡ぼされた此守護の重臣達であつて、彼等は機會さへあれば亡主の仇を報じやうと覘つて居る人達である、元親は出來る限り彼等を優待して其叛意を消滅さゝうとした、そして彼等に相當な土地を與へ農業に從事せしめたのである、山内氏が土佐を貰つて來た時にも此の故智に倣つて是があつたが後に一般は鄉士と云はれた、然し鄉士の內でも彼等を百人組の鄉士と呼んで比較的敬意を拂つたものだ、黒岩家は別項記載せる樣に黒岩越前守の系統を追つて一領具足と爲り、百人組の鄉士と呼ばれて居た。

先生は初め家塾に於て和漢算を習つたが衆弟子と一所に習ふのを好まれなかつたらしい、此當時黒岩塾で勉學した上田喜耕氏は『私は常に市郎先生の內で泊つたが、私達の寢る時は周六さんはまだ起きて居た、そして私達が眼を覺ました時はもう起きて居た、遂に數年間枕を並べて居た時を知らなか

つた』と云つて居る、又其他の場合に衆弟子は夜毎に塾に集つて種々なる競技を爲して遊んだが、先生は遊戯をしなかつた、然し嫌でしなかつたのか對手が不足であつた爲めか夫れは分らぬ、後年先生の多趣味な事は萬人が承知して居るが、少年時代の先生は餘り遊戯をされなかつたのであらうか、彼等が色々と競技に熱中して居る時には屹度仰臥して本を引張り出して居られたとの事である。

先生少年の頃、約一里ほど離れた安藝浦(現今の安藝町)の文武館と云ふのへ通つて漢文、習字等を學ばれた、當時文武館の補教に楠瀬友吉と云ふ人があつた、先生は一日漢文の解釋に就て同師の意見に反對を唱へられた、そして激論數刻に及んだが、先生はどうしても聽かれなかつた、楠瀬氏は遂に叱罵した、先生は亦氏の教を受くるを潔よしとせず、茲を去つて高知に走り森澤塾と云ふのに這入られた、其所で友人數名と共に自炊生活をして勉學された、時に明治九年九月四日であるから先生が十五歳の時である。

先生は膽力に於ても一寸子供らしくはなかつた、恐れると云ふ事を知られなかつた樣である、十六歳の頃である、高知で修學中の或夏歸鄕して居られた時、隣村伊尾木村に有名な洞穴がある、其所は可なり深い穴であつて中はジメ〳〵して晝尙暗く大蝙蝠なんかゞ居て今日でも甚だ氣味の惡い所だ、其所に一の淵二の淵三の淵と云つて三つの淵がある、或日先生は數名の友人と共に此洞穴探險を試み

ズン／＼と奥へ這入つて行かれた、そして人跡の判らない奥所迄突止めて皆が二の淵へ集つた、此の二の淵が一番水も深く底が知れぬと云はれて恐れられ、蛇の巣があるから決して這入られぬと云はれて居た、一人が探險の次手に『此淵の深さを知りたいなア』と云つた、然し流石の彼等も此淵へは竹を入れるものさへなかつた、此時先生は獨り皆の後へ廻つて着物を脱ぎ初めた、皆がどうするのかと見て居る間に素裸に爲つて一氣に其淵に飛び込まれた、そして其最も奥の方の水の紫を呈して居る邊りへ泳いで行つて水中に潜り込み、暫くして水苔の生えた大石を抱えて浮び、そして『餘り深くないよ、何か持つて來やうと思つたが何もをらんもんだからお土産に之を持つて來た』と平氣であつた、數百千年の洞穴蛇ヶ淵の神秘は此の大膽なる少年の爲めに滅茶々々にせられたのである、皆の膽ッ魂は一時に拔かれたのである、彼等は最早此所に留る事さへ不安でならぬ、早速先生を促して洞穴の外に出た、此事は忽ち村中へ聞え、村民一同をアッと云はせたさうである。

先生は後年文章を以て知られた丈けあつて、此當時から文才を有して居られた、先生が十七歳の頃當時伊尾木村の醫者で川淵春山と云ふ學者があつた、其人に添削を乞はれた一文が殘つて居るから、夫れを茲に掲げて一の記念としたい。

鏡説

鏡之爲物也。以銅作之。其形或方或圓。而其影善映萬物之像。歷煉焠厲礪多者。其光也甚明。其映也甚精。物動則影動。物圓則影圓。不殘毫末之微。使人不能辨其孰爲眞孰爲影。其歷煉焠厲礪不多者。其光也不甚明。其映也不甚精。纔足以辨物爲方爲圓耳。如此者名鏡而實非鏡也。夫鏡之所以爲鏡者。不在歷煉焠厲礪之多而唯在其發光之明矣。不在發光之明而實在映物之精也。故鏡其映不可不精也。然欲使其映精者。宜先使其光明。欲使光明者。必先不可不使其歷煉焠厲礪多也。故鏡其歷煉焠厲礪不可不多也。多者愈明。明者不可少欺也。然則以物曲而欲影直。猶緣木求魚。雖三尺童子誰不笑其不可矣。世今有欲求譽于世人。而招笑于三尺童子者何也。曰虛飾美其外媚世諛時。而欲售名利之徒是也。夫人之眼者。世間之鏡也。而視人之姿者己眼也。視己之行者人眼也。故身一物而徒美其外。欲欺人眼以售名利者。以何與以物曲而欲影直者異矣。自古英雄豪傑。身長藝能者。不必美其外也。而人皆自知之也。眼之能穿萬書者。猶鏡之歷煉焠厲礪多而映物不殘毫末。使人不能辨其爲孰眞孰影者。通天下之形勢。明萬物理。臨事不惑。當物不迷。其光能徹千歲之後。是實眼之所以爲眼也。眼而不廣穿萬書者。猶鏡之歷煉焠厲礪不多而其映纔足以辨物之爲方爲圓者。暗于天下形勢。疎于萬物之理臨事則惑。當物則迷。眩一時之利。而招萬世之害。是其名眼而實則非眼也。嗚乎人賴以卜容之醜美者明鏡也。知行之善惡者人眼也。吾邦自古以鏡爲靈。列神器之一以表九五。予雖不知其謂。想或謂人

君容臣下諫。而改行宜如人視明鏡而正容乎。

黑岩所適拜草

伏請玉斧

黑岩所適とあるのは先生が其當時用ゐられた雅號である、又當時上岡鷹峯と云ふ學者が居て、盛に狂詩をやつて居た、先生も之を喜んで讀まれた、後年先生が狂詩の奥堂に這入られたのも此の時分に其下地が出來て居たのであらう、又先生は『桃鶯』と署名して居られたことがあり、誰かゞ『梅に鶯だが、桃に鶯は可笑しい』と云ふと、先生は『之は氣の違つたのじや』と云つて自分の狂詩に於ける雅號として居られたと云ふ。

黑岩淚香先生略年譜

黒岩涙香先生略年譜

文久二年　○九月二十九日、高知縣安藝郡川北村大字前島に生る○父市郎。母信子。次男○家は郷士なり。

明治七年　（十三歳）○安藝浦文武館に漢籍を學ぶ。

明治八年　（十四歳）○十一月十日、父市郎歿。

明治九年　（十五歳）○九月高知城下森澤沮氏の塾に入る。

明治十一年　（十七歳）○大坂に出で中之島專門學校に英語を學ぶ。

明治十二年　（十八歳）○東京に上り慶應義塾に遊ぶ。

明治十三年　（十九歳）○『大』と稱し盛んに政談演說をなす

明治十五年　（二十一歳）○三月神田雉子町輿論社より『雄辯美辭法』刊行。

明治十六年　（二十二歳）○同盟改進新聞の主筆となる。

明治十七年　（二十三歳）○日本たいむすの主筆となる。二大政書出版會社を創立。

明治十八年　（二十四歳）○繪入自由新聞の主筆となる。

明治二十年　（二十六歳）○九月『西洋女大學』○十月『塔上の犯罪』刊行。

明治二十一年　（二十七歳）○十一月『入耶鬼耶』刊行。

明治二十二年　（二十八歳）○都新聞社に入り主筆となる。○四月『大盜賊』○五月『他人の錢』『法廷の美人』○七月『涙香集』○八月『美人の獄』○九月『海底の重罪』○十一月『指輪』『有罪無罪』『劇場の犯罪』刊行。

明治二十三年　（二十九歳）○四月『眞闇』『梅花郎』『美少年』○二月『片手美人』○三月『惡黨紳士』○九月『妾の罪』『執念』刊行。

明治二十四年　（三十歳）○五月『決鬪の果』○八月『巨魁來』○十月『何者』○十一月『如夜叉』刊行。

明治二十五年　（三十一歳）○四月『死美人』刊行○七月都新聞社を去る○雨潤舍を起し活版用インキ製造販賣を爲す○十一月一日朝報社を京橋區三十間堀に設立し日刊『萬朝報』を創刊す○十一月『大金塊』『我不知』○十二月『鐵假面』を萬朝報に掲載○同月『活地獄』刊行。

明治二十六年　（三十二歳）○一月『大金塊』○五月『鐵假面』刊行○六月『白髮鬼』萬朝報に掲載。

明治二十七年　（三十三歳）○一月『孃一代』○三月『人の運』○十月『捨小舟』萬朝報に掲載。

明治二十八年　（三十四歳）　〇七月『捨小舟』刊行〇『怪の物』〇十月『女退治』〇十二月『女庭訓』を萬朝報に掲載。

明治二十九年　（三十五歳）　〇三月『人外境』を萬朝報に掲載〇七月『女退治』『女庭訓』刊行。

明治三十年　（三十六歳）　〇二月『人外境』刊行〇『武士道』〇九月『露國人』を萬朝報に掲載。

明治三十一年　（三十七歳）　〇一月『心と心』萬朝報に掲載。〇農商務大臣伊東巳代治を攻撃の記事により官吏侮辱罪として告發さる。

明治三十二年　（三十八歳）　〇一月『綺姿』〇二月『古王宮』〇五月『雪姫』〇八月『幽靈塔』を萬朝報に掲載〇十一月『露國人』『怪の物』〇十二月『綺姿』刊行。

明治三十三年　（三十九歳）　〇三月『野の花』〇十一月『人の妻』を萬朝報へ掲載〇八月『古王宮』刊行〇四月十三日母信子歿〇十二月『五目並』の名稱を『聯珠』と改定す。

明治三十四年　（四十歳）　〇五月『聯珠眞理』刊行〇七月二十日理想團を組織し、發會式を神田青年會館に擧ぐ〇七月十四日朝報社移轉（京橋區弓町二十一番地）〇一月『幽靈塔』刊行〇三月『昔々の昔話壽』『巖窟王』を萬朝報へ掲載。

明治三十五年　（四十一歳）　〇七月『幽靈塔』刊行〇六月『花あやめ』〇十月『噫無情』を萬朝報に掲載。

明治三十六年　（四十二歳）　〇五月『天人論』〇六月『雪姫』刊行〇一月『政治家』文藝界へ掲載〇六月『破天荒』『王妃の怨』を萬朝報に掲載。

明治三十七年　（四十三歳）　〇東京かるた會を創立す　〇東京聯珠社を設立し段位を制定す〇三月『精力主義』刊行〇三月『逸話人情美』〇四月『一夜の情』〇五月『暗黒星』〇七月『椿說山と水』を萬朝報に掲載〇十一月萬朝報紙上に『俚諺正調欄』を設け選評に當る。

明治三十八年　（四十四歳）　〇國民後援會の爲めに活動す。

明治三十九年　（四十五歳）　〇三月、上京以後始めて土佐に歸省す〇四月、三十七八年戰役の功により金杯一個下賜さる〇四月『人生問題』〇十一月『人の妻』刊行。

明治四十年　（四十六歳）　〇十一月萬朝報創業十五週年〇『山と水』刊行〇十一月『鄉土柳子の話』を萬朝報に掲載。

明治四十一年　（四十七歳）　〇一月『花あやめ』〇六月『鄉土柳子の話』刊行。

明治四十三年　（四十九歳）　〇一月、東京聯珠社の社長とな

る○二月『破天荒』○四月『人尊主義』刊行○四月十四日痔疾にて赤十字社病院へ入院○五月十八日退院、磐城平古湯に轉地療養。

明治四十四年　（五十歳）　○六月、電車市有問題に反對の爲めに活動す○古島一雄氏の理想選擧に聲援す。

大正元年　（五十一歳）　○四月末より二週間、秋田、福島、盛岡、諸縣總選擧應援の爲め赴く○五月朝報社より婦人雜誌『淑女かゞみ』創刊、婦人評論に執筆連載○九月『二百年後の社會』婦人評論に譯載○六月『第一青年思想論』刊行○八月佐々木照山氏主催馬關六連島の夏期講習會に臨み『維新史』の講話をなす○九月『乃木將軍の自殺を聞きて』（論文）萬朝報に發表。

大正二年　（五十二歳）　○四月『第二青年思想論』○七月『小野小町論』『予が婦人觀』刊行○四月『八十萬年後の社會』○六月『島の娘』萬朝報へ掲載。

大正三年　（五十三歳）　○三月歌舞伎座にて山本内閣の原内相彈劾演說の爲め治警違反の廉にて起訴され、金四十圓科料に處せらる○四月大隈内閣擁立の運動○五月　日東京市會議員改選革新會倒壞に運動○七月『島の娘』刊行。

大正四年　（五十四歳）　○一月歐洲出兵論の演說の爲め關西へ旅行○二月増屋商店開業○六月『實行論』『ひとよの情』刊行○十一月御大典に際し新聞事業に對する功により勳三等に叙せらる。

大正五年　（五十五歳）　○十月淺野セメント會社降灰問題を調停す。

大正六年　（五十六歳）　○二月増屋商店廢業○三月鎌倉長谷へ移轉○十一月東京府澁谷町下澁谷に移る。

大正七年　（五十七歳）　○八月創作『今の世の奇蹟』を連載○十二月歐洲視察の爲め東洋汽船天洋丸にて講和使節一行と共に米國經由渡歐横濱解纜。

大正八年　（五十八歳）　○一月『社會と人生』刊行○六月『今の世の奇蹟』刊行○七月一日歐洲より歸朝、北野丸にて神戸著○七月理想團の歸朝歡迎會に於て『歐洲視察談』をたす（築地精養軒）○同月十四日永樂俱樂部に於て『勞働問題』に就て講演○八月都下新聞職工の同盟罷工起り、約一週間休刊後解決す○八月夫人を伴ひ北海道十勝國に令兄四方之進氏の病氣を見舞ふ○九月十四日淺草代地高砂俱樂部に於ける歸朝歡迎聯珠會にて『講演』○十月『滯歐中に見たる佛蘭

西の婦人」談話」を『婦人界』に掲載〇十一月十五日　報社を株式會社組織に改む。十二月十七日大磯長生館へ轉地。

大正九年　（五十九歳）　〇一月『五樂同筆』を聯珠新報に連載し始む〇三月『南歐遊草』を萬朝報に連載す〇四月六日大磯より歸京〇五月二十四日大學病院入澤内科へ入院〇十月六日午前二時十三分逝去、臨終に際し自ら戒名を『黒岩院周六涙香忠天居士』と選ぶ、危篤の報天聽に達し從五位に叙せらる〇同月八日青山齋場にて告別式を行ふ、同日桐ケ谷に於て荼毘に附す〇同月十二日鶴見總持寺に納骨す〇十二月六日涙香會發會式を擧行。

大正十年　〇七月十日、總持寺境内墓地竣工　埋骨式を營む、墓碑銘は中川柳外氏揮毫。

黒岩涙香通稱周六初名大文久二年十月一日生高知縣安藝郡川北村士族黒岩市郎二男幼有文名執筆新聞雜誌明治二十五年十一月自起朝報社刊萬朝報議論侃諤筆如秋霜烈日旁譯外國小説涙香之名傾倒一世大正四年十一月賜勳三等被錄文章報國之功也同七年十二月渡歐八年七月歸還未幾獲疾報達　天聽特旨叙從五位十月六日午前二時十三分卒臨終自作墓名所題十有一字是也

大正十年七月六日男日出雄建之

鳴鶴日下東作題字

正確な記錄が無い爲め完全な年譜を作成することが困難であつた。唯だ『萬朝報』と先生の著作とによりて大體の見當を知ることを得、不完全ながら此年譜を以て著作年表に代へたのである。『非小説』『銀行の賊』『復仇』『無残』『玉手箱』の五部は保存されず、從て其發行年代が不明である。（編者）

大正十一年十月三日印刷納本
大正十一年十月六日初版發行

黑岩涙香

定價金參圓八十錢

編輯者　涙香會
右代表者　小日向仙之助

發行者　町田濱雄
東京市京橋區北槇町十二番地

印刷者　渡邊常三郎
東京市芝區愛宕下町三丁目一番地

印刷所　愛友舍
東京市芝區愛宕下町三丁目一番地

發行所　扶桑社
東京市京橋區北槇町十二番地
振替口座一五四七七番
（電話京橋六九番・四一六八番）

